

# 魔王と女勇者の共闘戦 線

藤咲晃

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔王と勇者、闇と光はいつの日か現れ衝突する運命にある。

一人は魔界を統べる王として、一人は人々の希望の象徴として。

約五十年にも及ぶ魔族と人間の争いは、勇者一行が騎士団を率いて魔王城に侵攻したことで、終局を迎えようとしていた。

魔王は己が信じる道と亡き友との約束のために勇者を迎え討つ。

勇者は人々の希望、両種族の平和と繁栄のために魔王と対峙する。

しかし魔王と勇者が激しく衝突する中、戦場に六枚羽の天使が舞い降り——!?

※本作品は小説家になろうでも更新中



# 目次

一章 共闘の始まり

1 | 1 | 1

1 | 2 | 6

1 | 3 | 11

1 | 4 | 19

1 | 5 | 25

1 | 6 | 33

1 | 7 | 38

1 | 8 | 46

1 | 9 | 55

1 | 10 | 61

二章 霧の中の貴婦人

2 | 0 | 71

2 | 1 | 81

2 | 2 | 87

2 | 3 | 95

2 | 4 | 101

2 | 5 | 107

2 | 6 | 114

2 | 7 | 124

2 | 8 | 131

2 | 9 | 141

三章 メルデシア島の大海蛇

3 | 1 | 145

3 | 2 | 150

4	4	4	4	4	四章	3	3	3	3	3	3	3
					狂人の宴							
4	3	2	1	0		9	8	7	6	5	4	3
230	222	214	205	199		193	187	180	175	168	163	156

5	5	5	五章	4	4	4	4	4	4	4	4	4
			平常の狂気									
3	2	1		1	1	1	1	9	8	7	6	5
				3	2	1	0					
308	299	295		292	282	276	268	261	256	252	243	236

六章 氷華戦乱

6 2	6 1	5 1 3	5 1 2	5 1 1	5 1 0	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5	5 4

392 386 380 372 364 356 347 342 333 327 320 312

6 1 5	6 1 4	6 1 3	6 1 2	6 1 1	6 1 0	6 9	6 8	6 7	6 6	6 5	6 4	6 3

467 462 454 448 442 437 431 428 423 418 414 407 398

七章 天へと至る国

7  
|  
1

7  
|  
2

7  
|  
3

7  
|  
4

7  
|  
5

7  
|  
6

7  
|  
7

7  
|  
8

7  
|  
9

八章 天界争乱

8  
|  
1

8  
|  
2

8  
|  
3

8  
|  
4

8  
|  
5

8  
|  
6

8  
|  
7

8  
|  
8

8  
|  
9

8  
|  
0

8  
|  
1

8  
|  
2

8  
|  
3

8  
|  
4

8  
|  
5

538

543

548

558

567

573

577

582

588

593

600

607

613

527 532

472 478 485 494 498 503 509 515 521

101	十章 戦場に散る者	95	94	93	92	91	九章 攻勢に向けて	820	819	818	817	816
683		675	670	665	660	656		650	644	639	628	622

113	112	111	終章 共闘の終わり	1010	109	108	107	106	105	104	103	102
750	744	737		732	728	722	717	711	705	699	693	688







## 一章 共闘の始まり

1—1

人間と魔族、二つの種族は小さなすれ違いからやがて憎み合い。

いつの日か争い大きな戦乱に変わり五十年が経過していた。

アルデバランの森に居城を構える魔王レオは、領土を魔力結界で包み人間の侵攻を拒み続けた。

開戦と同時に張られた結界は、勇者とその仲間達の数多の活躍により解除されるに至る。

人間はついに魔王レオの棲まう城に進軍を開始する。

そして現在魔王城の広間では、魔王レオを討つべく勇者リアと神官ナナが人類の命運をかけた最終決戦を繰り広げていた。

▽▽▽

右手で漆黒の禍々しい魔剣を振るい、すかさず左掌から魔法を放つ魔王レオ。

彼と相対するは、金髪を靡かせ軽やかに身を屈め、迫る魔法を避け、魔剣を輝く聖剣で受け止める勇者リア。

闇を纏った剣身が光を蝕み、刃の衝突に火花が散る。

同時にレオとリアは刃を弾かせ、レオが弓を引く勢いで刺突を繰り出す。

迫る魔剣の刃をリアが、聖剣を下段から斬り上げ弾く。

弾かれた勢いから唐竹からたけを繰り出され、リアは強引に身を捻ることで魔剣から難を逃れた。

そのまま二人は互いの魔力を高めながら斬り結ぶ。

光と闇の衝撃が城内全体を揺らし、城外で戦闘中の者達にも伝わる。

ある者は魔王の魔力に恐れ。

ある者は此処が正念場と望む者。

そしてまたある者は自滅覚悟で敵軍に突撃を仕掛ける者。

城外では魔王軍と人間軍による苛烈な戦いが繰り広げられている。

そして広間に衝撃が走る最中。

「リアさん！ いま援護を……！」

神官ナナが杖を挙げ、魔法の詠唱に入る。

「遅い！ 判断が遅すぎるぞ神官ナナよ、『フレア』ッ！」

レオが左掌から放った蒼炎の球体がナナに迫る。

渦巻く業火にナナは、詠唱を中断しその場から大きく大理石の床を横転した。

瞬間、ナナがつい先ほどまで居た場所に、凄まじい爆炎と破壊が襲い、床と天井が溶解し大穴が生じる。

それを間近で見っていたナナの表情が恐怖に染まる。

「……あ、あああ……っ」

死と強大な敵に対する恐怖心から弱々しい悲鳴が広間に響く。

「くっ……！ さっきの魔法で簡単に私ごと消し飛ばせたのに……ッ！」

禁断魔法——【フレア】を詠唱無しで速射。一度放たれたら最期、星をも破壊し尽くす。そんな魔法を威力を抑え放った。

恐怖で身震いが起こる。それでもリアは負けられない意地でレオを睨む。

「……人間界に住う人々の戦意を挫くには、精神的支柱の貴様等の心を打ち砕いた方が速いのでな」

リアの頬に一筋の汗が伝う。

想像以上に強いレオに、リアに撤退という選択肢が浮かぶ。

広間に到着するまでの間に、仲間達が今も必死に魔族を抑えている。

撤退は、自分達を信じて送り出した彼女達の決死の覚悟を無駄にしてしまう。

城内に入り込むために活路を開き、散っていた騎士達の無念も、全てが無駄になる。

そう考えたリアは撤退の選択を排除し。

「人間の底力を舐めないでよね……！」

リアは氣力を振り絞り、自身の魔力を限界まで解き放つ。

まさに勇者に相応しい膨大な光の魔力に大氣が震え、レオの肌に威圧感が迸る。

「それで全部か……！ 人間がこれほどの魔力を身に付けるとは……！」

流石は勇者にして好敵手。

レオは心の底から歓喜し。

「こちらも全力を出さなねば失礼か……！」

全霊の魔力を解き放った。

漆黒の禍々しい魔力。

まさに闇と呼べる魔力が溢れ出る様子に、それを目撃していた神官ナナが耐え切れず

失神してしまう。

それは無理も無い事だろう。死の恐怖に加え、絶望的なまでの魔力を見せ付けられた

常人なら意識を手放してしまうのは。

リアはレオの魔力に冷や汗を流し、震えを抑え聖剣を構え直す。

睨み合いから二人は同時に動き出した。

互いの全身全霊を込めた一撃。

良くも悪くも人間界と魔界の命運が決まる最後の一撃。

聖劍と魔劍が衝突する……その時だった。

「素晴らしい！ ああ、実に素晴らしい魔力だ！ ……その魔力、我の物として相應しい……！」

突如広間に現れた白鳥の様な六枚羽に金色の瞳の天使が掌から鎖を放ち。

背後からレオとリアの腹部を貫いたのは――

## 1—2

「ぐう!？」

「うあっ!？」

背後から腹部を貫かれた二人に苦痛と酷い脱力感が襲う。

鎖を通して身に宿す魔力と力が吸われていく。

そう理解した時、既に襲撃者はレオとリアから全ての魔力と力を根こそぎ奪っていった。

襲撃者の体に、魔王と勇者から奪った魔力が解け合い混ざり合う形で一つの魔力として宿る。

引き抜かれる鎖、凄まじい脱力感にレオは立つ事も出来ず地面に片膝を折る。

リアは腹部を貫かれた苦痛から意識を失う。

そして変化は二人の持つ武器にも及ぶ。

漆黒の禍々しい魔力を纏っていた魔剣。

聖なる輝きを放っていた聖剣。

二本は酷く錆び付いてしまい、ただの鉄屑に変貌していた。



レオの紅い眼光が襲撃者を鋭く射抜く。

二人から奪った魔力に満足顔で見下す襲撃者の姿が映り込む。

本来居るべき筈が無い人物にレオは一瞬、啞然とした。

その者に彼は見覚えがあり、勝負に水を差された怒りがレオの中で煮え沸る。

「……はあ、はあつ。……大天使ルシファー！ 貴様あああツツツ！」

声を震わせ吠えた。

「おお、怖い怖い。吠えるな魔王。なぜ我がこの場に居るのか、不思議でならないようだな」

「天界は此度の戦乱に介入しないはず……！」

「正確には、天界の兵士はな。魔界の王ともあろう者が我々の策略を見抜けないとは情けない」

ルシファーの言葉にレオは言い返さず喉を鳴らした。

耳に届く、廊下から駆け付け付ける複数の反響音。

近づく複数の足音に冷や汗が流れる。

隣には魔力を失い、気を失いながら腹部から出血するりア。

レオは指先一つ動かすのがやっとの状況。

レオに焦りの色が浮かぶと、ルシファーが上機嫌に笑う。

「いやあこれは困った！ 実に困った！ 実力主義者の魔族が、魔王が力を失ったと知れば彼等は何んな行動に出るのか、我でも少々予想がつかぬなあ……！」

「ぬ、ぬかせ。……貴様、魔族が見境も無く謀反に走ると踏んで、俺だけに飽き足らず勇者の魔力も奪ったな……！ その目的はなんだ！」

大天使ともなれば魔族の貴族達よりも破格の魔力をその身に宿している。

それこそ人間は蟻同然の生物なほどに。

レオにはルシファアの目的に予想も付かない。

魔力を奪って、その魔力をどうする気なのか。

他者から奪った魔力をその身体に取り込んだところで、奪った魔力は徐々に自然消滅する。

逆に奪われた魔力と力は人体に備わる魔核によって徐々に回復する。

それは三界世界に生きる生物の理であり絶対的な法則だ。

しかしレオは違和感に気がつく。

自身の魔力が一向に回復する素振りを見せないことに。

魔族であるならば、少量の魔力なら数秒と経たずに回復する。

半日もあれば全快するほど魔族は魔力生成量が高い。にも関わらず一向に魔力が回復しないのはなぜか。

疑問を浮かべるレオを見下すルシファアが。

「あれこれ思考しているようだがな、答える必要は無いだろう？　これから死ぬかも知れん者に情報を与えるほど我は甘くない」

勝ち誇った彼の言葉を境に、広間に魔族達が駆け付ける。

「ま、魔王様？」

「……おい、魔王様から魔力を感じないぞ……！」

「本当だ……何故かは知らんが魔力を感じない。……なあ、これは、ひよつとして……」

「ああ、この中の誰かが魔王に成り代わる絶好のチャンスだ……！」

武器を握り締め、徐々にレオに躰り寄る魔族達の姿に、レオは心の底からため息を吐く。

思考回路が戦闘と力の二色の脳筋に呆れ言葉も出ない。

レオはこの状況を打開した後、徹底した魔族全土における意識改革を実行すべきだと内心で決意する。

詰め寄る魔族達にこのまま倒されるわけにもいかない。

そう判断したレオは、懐から小石サイズの宝石を取り出し床に落とす。

掌から落ちた宝石が床に落ちると、床に溶け込む様に消えた。

「……ルシファア。貴様は俺と勇者の決着に泥を塗った、それにだけに飽き足らず平和

の道筋を遠のかせた！ その行いは万死に値する……！」

レオとその近くで気を失っていたリアが、床に現れた転移陣に包まれ始める。

「ほう？ 負け惜しみとは魔王としていいよいよ落ちぶれたな。……ふむ、これはこれは

……」

何か眩きを始めるルシファーの姿に、レオは訝しげに睨む。

「これからは俺様が魔王だあああ——！」

そして近付いた魔族が雄叫びとともに、レオの首を討ち取ろうと剣を振り下ろした。

その瞬間——レオとリアは忽然と広間から姿を消した。

その場に残された者達は困惑に暮れる者と嘲笑う者だけ。

## 1—3

「これは……参った。実に参ったな」

レオは心の底から困り果てていた。

風が運ぶ潮の香り。

辺りを軽く見渡すと森、山、砂浜、海、燦々と照らす陽光。

そして、隣には未だ鎖によつて貫かれた腹部が癒えず、浜辺で横たわるリアの姿がある。

首筋辺りで切り揃えられた金髪が潮風に揺れ、小さな口から乱れた呼吸が漏れる。

加えて転移石を使用して逃げた先がどこかも分からない場所。

確実に魔界ではないとレオは確信を抱きながら立ち上がった。

「……まずは彼女の治療を優先すべきか」

そもそも今の状況が不自然だ。

魔核が生み出す魔力が人体の傷を回復させる。

そうさせるはずが、一向に魔力が回復しない状態の今、リアの傷は自然治療しない。

そう考えたレオは、魔王らしくない行動だと小さく笑みを零した。

魔王らしくない優しい顔付きを浮かべて。

「魔王ともあろう俺が好敵手を治療してやるなどと、生きていれば可笑しい状況になるものだな」

一人人としてこんな形での決着は不本意だ。

レオはそんな言葉を飲み込み、リアの懐を弄る。

人間はとにかく身体が脆い。

その為、常にポーションの類を備えている。

そんな事を考えていると、リアの腰に着けられたポーチを見つけ中身を漁った。

指先に触れる羽の感触、違う。表紙の堅い感触、これも違う。

何度か漁って漸く指先に触れる小瓶の感触。そのまま小瓶を掴み取り中から取り出した。

「ラベルには、『治療ポーション』か。……魔力による自然治療の方が速いが……」

レオはリアを抱え、手早く鎧を外し白のインナーを捲り上げる。

頭となる細っそりとした華奢な身体。そこに刻まれた傷口にレオは思わず眉を寄せた。

少女の柔肌を貫通した傷口、普通なら死んでもおかしくはない深傷。

「この者が勇者だからと一言で片付けていいものだろうか」

人間なら致命傷、魔族なら擦り傷。

しかしリアは人間の少女であり、十五歳になったばかりとレオは記憶していた。と、考え込んででも仕方ないため、小瓶の液体をリアの傷口に流し込む。

すると液体が傷口に溶け込み、間瞬きしている内にリアの傷口が塞がっていく。その様子にはレオは驚嘆した。

「ほう……！ これは中々素晴らしい治療ポーションだ！」

魔族にとって治療ポーションは不要。

しかし致命傷クラスの傷を瞬時に完治させるほどの効果を秘めた治療ポーション。是非とも調査した者に秘訣を聴きたい、むしろ魔王軍に雇いたいほどだ。

人間であろうとも雇用条件は相手が望むままに、福利厚生、給金面だって糸目は付けない。

レオがそんな事を考えていると、

「う、ううん……？ じやり？ じやりじやり、する？」

リアが目覚めた。

起き上がり、困惑した様子で辺りを見渡す。

やがて、自身の裸出された肌とレオと目が合い。

「……ま、ま、魔王?! ど、どど、どうという状況!？」

リアは立ち上がり、距離を置き臨戦体制を取った。

「落ち着け。俺に決してやましい気持ちはない、単にこの状況を打開するためお前の治療を優先したに過ぎない。そこに転がる小瓶はお前の私物から拝借させて貰ったがな」

「……? それは構わないんだけど、この状況はどういう事よ。それに此処はどこ」

警戒を浮かべながらどうという訳だ、と問うリア。

「此処がどこなのか……それは俺にも分からん。お前は直後の出来事を覚えているか」  
そう言われたリアは記憶を探り、思い出したように慌てて聖剣に眼を向ける。

「……ああー！ 聖剣ゼファールがただの鉄屑になってる……!! ど、どうしよう、これじゃあご先祖様に顔向けできないッ!」

「気にすべき事はそこか? 違うだろう、俺とお前の魔力を根こそぎ奪ったアイツのこ  
とを」

「そういえば……天使に腹部を貫かれて全魔力を奪われたんだっけ」

「そうだ。気付いているとは思いますが俺もお前も魔力が一向に回復しないどころか、力さえ入らぬ状態だ」

文字通り全ての力を奪い取られた。

その事実リアは、掌を二、三度握り締め、小さく息を吐き出す。

「本当ね。……剣はどうか振れそうだけど体が酷く重い。こんな状態で魔王と決着は



付けられないしどうしよう？ えっ、待って？ ちよつと待て……！」

突如慌て始めたリアにレオは訝しげに睨む。

「わ、わわわ、私と魔王つて二人きり、なの……！」

「そうだ、お前の仲間も俺の配下もこの場には誰もいない。……尤も俺の配下は弱体化した状態を知るや謀反に走ったがな」

まさか考える素振りも見せず、即謀反に走った配下達の姿にレオは薄っすらと涙を浮かべた。

三百年と五十八年間魔界を統治し、民の為にあれこれと政策したにも関わらず速攻で謀反に走られた。

それはもうレオにとっては只々悲しいばかりの事実だ。

「……ふ、二人きり、ど、どど、どうすれば？ 此処で魔王を倒すのが正解？ それとも……？」 え、助けてナナ、マキア、フィオナ……！」

一人悲しみに暮れる魔王レオと混乱しながら居ない仲間に助けを求める勇者リアの姿が、波打つ浜辺にあった。

しばらくお互いに無駄な時間を浪費した頃、ようやくレオが会話を切り出した。

「……コホン。予想外の精神攻撃にダメージを負ったが、先ずは俺達の現状を確認する  
としよう」

リアは膝を抱え無言で頷く。

「先ず一つ、俺達の魔力はほぼ空っぽであり、魔核に原因が有るのか、あの鎖の能力なのかは知らんが魔力が一向に回復しない。

二つ、此処がどこかも分からない孤立無縁の状況。

三つ、当面の食料確保及びこの場に生息するであろう魔物との戦闘が困難。

以上が俺達の置かれている状況だ。この際あのルシファアの目的及び天界の動向は現状では調べようもないからな、一先ず放置で良いだろう」

「一つは本当に謎ね、魔力に明るい魔族である魔王が分からないじゃあ私にも原因は分からないし。

二つ目は、多分しばらく歩けば何処かの街か村に到着すると思う。

三つ目、これが本当に厄介よね。私と魔王の武器は錆び付いて使えないし、体も思ったように動けない状況で魔物とどれだけ戦えるか」

三つ目の問題が最難関である。

魔剣と聖剣は所有者の魔力に依じて威力を増大させ、剣身を変質させる性質を秘めている。

その為、所有者の魔力が無い状態ではただの鈍器にもなり得ない粗大ゴミも同然。

戦闘に用いられる術が、肉弾戦か魔法による方法しか無いのだが、魔力も回復しない

現状では肉弾戦しか方法がない。

一人では困難な状況だ。

「ふむ。では、俺とお前が共闘すればこの状況も容易く打開できると思うが……？」

「……えっ、正気？ 魔王と勇者が共闘って本気で言ってるの？」

「酔狂でこんな提案するはずが無いだろう。……三年前、お前と偶然出会ったあの日。あの時は互いの素性も知らず、俺とお前は手を取り合えた、ならば今はどうだ？」

「どうだって聞かれても……あの時と今とじゃ状況は違うし。でも、他に方法が無いのは事実よね……うん、分かった、お互い“奪われた力を取り戻す”まで共闘と行きましょう」

「ほう。街の近くまで、ならいざ知らず。まさか“奪われた力を取り戻す”までとは……！」

「だって側に置いておいた方が監視もしやすいし、それにこっちは二つの世界の平和をかけた戦いだっただのに横槍を入れられたのよ！ しかも不意打ちよ！ 不意打ち！ 天使が普通それをやる!? 不意打ちとか邪道は魔族の役割でしょ……！」

次第に熱が入り、怒り浸透でレオに詰め寄るリアに、彼はただ困惑するばかり。

ルシファーの不意打ちにはレオも怒りを隠さないが、なぜそこまでリアが怒るのかが彼にとっては不思議だった。

「魔族の不意打ち云々については賛同しかねるが、なぜそうまでお前が怒る？　むしろ喜ぶべき事だろう？　魔王である俺の弱体化を」

「確かに私にとつてもあなたは討ち滅ぼすべき敵よ。……でも！　……今はお腹空いたから口論よりも食事にしたいわ……！」

空腹を訴える虚しい音が二人から鳴った。

「では、先ずは食糧を得る為に共闘と行こうか……！」

レオの差し出した手をリアは握り。

「その提案乗った……！」

こうして二人は史上類を見ない共闘関係を築く。

意気揚々と砂浜から食糧を求めて森に入り、緑が茂り人手が手付かずの道なき道を歩くこと一時間弱。

「はあ……はあ……あ、ありえぬ」

「ふう……ふう……ほ、本当に有り得ないわっ！」

二人は疲労困憊で大木にもたれ掛かっていた。

全身から流れる汗と疲労、レオとリアは息を荒げている。

魔王と勇者の現状を知ったら人々と魔族はどう思うのか。失望か、あるいは嘲笑うか、それとも哀れみの眼を向けるのか。

少なくとも今の二人にはそんな事を気にする余裕など無かった。

「い、一時間歩いただけでこの体たらく……っ」

「私の体力お婆ちゃん以下よ……っ」

「これでは戦闘もままならないと、二人が息を吐く。

「ふう。時にお前は鎧を外さないのか？ それでは重くて体力も浪費するだろう」

「それはそうだけど、魔王だってマントを外したらどうなの？ 地面に着くぐらい長い

じゃない、それに結構暑いからダークコートなんて余計に暑いわよ」

互いの身なりを指摘し合い。レオは暑く邪魔なマントを投げ捨てたが、リアは防具を頑なに外そうとはしなかった。

「ふむ、少しは楽になったか？ ……お前は防具に拘りでもあるのか」

「無いけど……武器も錆びてるから身を守る防具ってなんだか安心するじゃない。それにこの防具は四魔將軍の一人、ザガーンの一撃も防げるのよ……！」

嬉々として語るリアの言葉に、レオは配下の邪竜族ザガーンの言葉を思い出していた。

『あの者の鎧は、身軽ではあるが異常に頑丈であった。騎士どもの防具を遥かに凌ぐ鉄壁さよ……！』

と、普段は無表情な彼が嬉々として語る姿がレオの脳裏に浮かぶ。

しかしリアはルシファーに腹部を貫かれた。

「……頑丈ではあるが腹部はガラ空きなのだ。そこもしっかりと守っていればルシファーに遅れを取ることはなかったのではないのか」

レオは彼女の防具の問題点を指差し指摘した。

「うっ、だって皆は防具にもオシャレとかしてたからソレが普通なんだと思ってたんだもん……！ お腹周りを鎧で固めないのもスカートなのも流行のファッションなの！」

「人間の年頃の娘が身なりに気を使うのは調査でも重々理解してるがな……。いや、しかし配下の女魔族どももお前達人間の防具には興味を示していたな」

「へえ？　どんな興味を示してたの？　魔族のオシヤレとかちよつと気になるんだけど」

レオは配下の女魔族達が女騎士達の防具について話し合っていたことを思い出しながら語った。

「あれは確か。そう、『人間の女騎士の防具みたかい？』『あのひらひらなスカートにお腹周りを守らない防具だろ？』『防具は兎も角さ、腰当てとスカートなんて、よくあんなひらひらした格好で戦えるよね……。』『男連中は皆チラリと見えるパンツに眼を血眼になって見てるって言うのにねえ……。』、という話をしていたな」

女魔族達の声真似をしながら語る彼に、リアはたじろぐ。

「ねえどうして無駄に上手い声真似しながら言ったの!?　……や、それは兎も角、えっ？　女魔族達には不評だったの……。』」

「不評というよりは疑問だな。まあ確かに配下達も妙に女騎士ばかりに目が行っているとは思っていたが、なるほど女騎士達は自ら恥ずかしい事をしてまで魔族の注意を向ける姿勢だったのか……。』」

自身の解釈に一人勝手に納得するレオに、リアはキョトンとした。

そんな目的があつたのか、と。

「それじゃあ、私のこの格好も単純なファッションじゃないってこと？」

「俺の解釈は概ねその通りだ」

二人は妙にスツキリした表情を浮かべ、休憩もそこそこに食糧を探しに歩き出す。

程なくして木に実つた丸く青い果実を見つけ。

「どうやって取るべきか。お前は木登りとやらはできるか？ さつきに言っておくが魔族に木登りなどという文化は無い、高所にある物は大抵飛んで取るからな」

「できるわよ。田舎出身にとつて木登りは数少ない遊びの一つなんだから！ まあ、見  
てなさいって！」

そう言つてリアは意気揚々と木を登り始める。

小柄な体格で瞬く間に木を登つて行くリアの姿に、弱体化しても防具を装備したまま軽々と木を登れるものなのか、とレオは感嘆しながら頭上を見上げ気が付く。

彼女の青いスカートの中から見える純白のぱんつに。

レオは慌てて真正面を向き、鼓動が速まる胸を押さえた。

(ば、バカな!? アルティミアの色仕掛けや裸体を見たところで何も感じなかった、こ、  
こ)、この魔王たる俺が小娘ごときのぱんつで動じるだ、と!?)

「魔王ー！ 木の実を落とすからしつかりと受け取りなさいよー！」



その声に思わず頭上を見上げたレオは、反応が遅れ落下する二つの果実を顔面で受け止めることに。

「や、受け止めなさいとは言ったけど、誰が顔で受け止めなさいって言った!？」

慌てながら木から地面に着地し、駆け寄るリアにレオは僅かに距離を取る。

「ど、どうしたの?」

「何でもない、ああ、何でもないさ……!」

果実の落下により、赤くなった力所を押しえながらレオは平素を装う。

「変な魔王? ……お腹空いたから早速食べよ!」

言われてレオは一つの果実をリアに差し出す。

リアはそのまま果実に齧り付く、すると。

「うーん! 甘くて美味しい! これ何の果実なのかな?」

「分からない物を無警戒に口にするとは。しかし腹も減っている現状、さして気にもなりはしないか」

レオはリアにならない果実を齧ると、程よく熟された果汁と甘味が口内に広がる。

「ほう、これは中々。以前食したバナナという果実も美味ではあったが、これも負けず劣らず……!」

レオとリアは一心不乱に果実を齧り、あっという間に食べ終えた。

僅かに空腹を満たした二人は、次の食糧を求めて周囲の探索を始める。

可能なら動物の肉と魔核を摂取したい。

魔力の回復させる方法の一つとして生物の魔核から魔力を奪う取る方法がある。

しかしそれは一時的な効果に過ぎず、完璧とは言い難い。

それから二人が、しばらく辺りを調べて発見した事は、この周辺の木には食べられる果実と猛毒が含まんだ果実の二種が存在すること。

そしてもう一つ重要な痕跡を発見した。

「むう……前人未踏なのでは？ と疑っていたが、人の手による建築物を発見したな」

「うん、この辺の木材で建てられたログハウスと放置されたテントが数点ね」

誰が何の目的で建てたのか謎のログハウス、その周辺に幾つものテントが並んでいた。

古びた様子からそれなりの年季が入っているという事が分かる。

「……しばらくここを拠点に雨風を凌ぐか？ それとも食糧を確保しつつ北上するか」

「いまの私達は迷子同然だから、無闇に歩き続けるのは危険よ。だから、ここを拠点にして明日からゆっくり探索するべきよ」

旅に慣れたリアアの意見にレオは賛同し、二人はログハウスに足を踏み込む。

## 1-5

ログハウスに足を踏み込んだ二人は警戒を顔に内部を一通り見渡した。

玄関から入って直ぐの場所は、大所帯が寛ぐに適した広い広間。

そこには暖炉にソファ、埃の被ったテーブルとイス、散乱した酒瓶など人の生活の痕跡を感じさせる物が散りばめられていた。

真正面の二階通路の壁に、白鯨にドクロを描いた旗が飾られ、周囲の壁には動物の頭骨や加工された角が飾られている。

壁には所々蜘蛛の巣が張られ、それなりに放置されて長いのだとレオとリアは判断した。

「ふむ……。あの趣味のいい旗は何だろうか」

「えっ？ 趣味良いの？ 白鯨は兎も角……ドクロの旗なんて悪趣味じゃない」

「む？ 勇者にはアレの良さが分からんか？ 見た者に畏怖の想念を与え、怯えさせるには十分な迫力があるだろう、それに何よりカッコいい……！」

「ええっ、カッコいいかなあ？ ちよつと魔王のセンスは分からないわ」

リアはそう言いながら辺りを物色し始める。

そんな彼女の後姿に、あの良さが理解できないとは、とレオは残念そうに肩を竦めた。「うえ、ホコリだらけね。……うん、これは掃除するしかないね……！　魔王手伝つて！」

リアは鞘に納めた聖剣ゼファールを適当な所に投げ捨て、モップとバケツを両手に持つ。

レオは掃除に魔剣フィルグラントを邪魔と断じ、適当な所に投げ捨て、窓ガラスを開けた。

こうして二人はログハウスの掃除を始めることに。

▽▽▽

日が暮れ終わる頃には、二人は疲労から息を乱しながらも達成感に満ち溢れ、綺麗になつた部屋に満足気な笑みを宿す。

「はあ……はあ……うむ！　たまには手動で掃除も気持ちが良いものだな……！」

「……ふう……人間も魔族も清潔が一番ということよね……！」

「うむ。清潔が一番だ」

リアの言葉に同意を示すと、レオは掃除の傍ら大変興味が惹かれるある物を見つけた事を思い出し、清掃中に発見した財宝が乱雑に置かれた倉庫へと向かう。

彼の突然の行動にリアはただ、呆然と背中を見送るばかり。

(魔王の身長は私よりも二十二センチ高い。……でも、改めて見ると引き締まった背中……)

三年前と変わらない背中。

対する自分は三年で僅かに身長が伸び、少しは女性として成長した。

魔族は長寿の種族だからこそ三年程度では肉体が成長しない。

対する人間は、三年も有れば肉体は成長し四十代を超えると衰える。

リアは思う。たったそれだけの違い。それでも人は同じ時の中で変化しない魔族を不気味に思い、いつの日か嫌うようになった、と。

「国王様は、平和は君の手に委ねられたなんて、軽く言ってくれたけど……国王様が和睦を推し進めれば少しは……」

メンデル国王ギリガンの方針に不満が漏れる。

「……ほう、ギリガン王に不満が有るか。……アレも難儀な性格をしている、なまじ自ら始めた戦争故に歯止めが利かず……いや、それは俺も同じ、か」

ぐぐもった声の方向に顔を向け——絶句した。

ダークコートにフードを取り付け、趣味の悪いフルフェイス仮面を被り、白髪の後ろ髪を腰まで出した何者かが幾つかの缶詰を抱えながら静かに佇んでいた。

「……え……えっ!? もしかして魔王——!」

「俺以外に誰が居るのだ？」

「そ、その趣味の悪い仮面はどうしたの!？」

黒鉄に六つの紅いガラス細工の様なラインが入ったフルフェイス仮面を被ったレオの姿に、リアは驚愕を隠せず、上擦った声で叫んだ。

「む、趣味が悪いとは失敬な。紅いガラス細工と無骨なフォルムに惹かれてな、人里を移動にするにも素顔は隠した方がお互いに都合がよいだろう」

「そ、それは確かにそうだけど。でも、素顔の方がダークな雰囲気でカッコいいよ」

「……褒めるでない」

仮面で素顔が隠れているせいで、いまレオがどんな表情を浮かべているかは分からない。い。

それでも若干声が弾んでいることから照れているであろうことは理解ができる。

「……この仮面が如何にカッコいいか、徹底的に議論するのは後にするとして。食糧庫で缶詰を見つけてな、幸い賞味期限は二年後だったので少々拝借してきた」

そう言つてテーブルの上に缶詰と缶切りを差し出すレオに、くすりと笑みが零れる。

魔王として恐れられている彼が、人とはちよつとズレた感性を持ち気遣う姿がリアにとつては可笑しくて仕方なかった。

「何がおかしい? ……まあいい、お前は仲間が心配か? 掃除の最中は心此処にあら

ずだったが」

突然指摘されたことに胸がドキッ、と鼓動する。

気に掛けている素振りを一度も見せた様子が無かったレオの言葉がリアには意外だった。

仲間の安否、彼女達は無事なのか。

不安から膝を抱き上げ、ポツリ、ポツリと。

「……心配に決まつてるでしょ……。だつてあの場でナナは気を失つてて、魔族が広間に殺到したつて魔王が言つてたから、もしかしたら全滅しちゃったのか、捕まつて酷いことされてるんじゃないのか。……今でも頭の中がぐちゃぐちゃしてて……！ 早く皆の所に行かないとつて……っ！」

次第に焦り、声を荒げるリアにレオは彼女の隣に座つた。

「焦るな。とは軽々しく言うべきではないのだろうなこの場合は。……俺は配下に、特に四魔將軍には捕らえた人間は丁重に扱えと命じている。四魔將軍は魔族の中でも風変わりな連中だ。いや、早速突然変異型と呼んでも良いほど御人好しな連中だ、彼等ならばお前の仲間を無碍に扱うことは無いだろう」

レオの論ずるような静かで優しい口調に、これまで戦い打ち負かした四魔將軍達の顔が思い浮かぶ。

レオの言う通り彼等は、魔族らしくないと行って良いほど良心を持ち合わせていた。彼等なら確かに、仲間達を無碍に扱う事はせず捕虜として丁重に扱ってくれるだろう。

敵では有るが信用できる。そう考えると不安と焦りが消えていく。

「そっか、ザガン、アルティミア、ロラン、ククルは魔族と思えないぐらい良心的だったものね。……やっぱり魔王が優しいからそんな配下が集まるのかな？」

「優しい魔王など居ない。俺はいつでも己の目的のために行動してるに過ぎん、優しさなどで民を、魔界を守るならばとうに誰かが事を成しているだろうよ」

所詮大望の前に自身を含めた者は盤上の駒でしかない。

仮面の下でレオは邪悪に笑う。

「……ふーん、まあ良いわ。……それと励ましてくれてありがとう」

焦り怒りをぶつけるどころか、礼を述べるリアの姿にレオは肩透かしを喰らい肩を竦める。

罵詈雑言、誹謗中傷を浴びせるか、仲間の安否を想い涙を流すか。

そのどれでもない、ありがとうの言葉を返すリアに拍子抜けしたのも事実。

「礼など不要。利用すべき相手が心配事を抱えたままでは、いざという時に困るからな、ただそれだけの事よ」



「利用、共闘。私達の関係はそうだけ……」

もう少しお互い踏み込んで良いのではないかと、リアは言葉を呑み込む。

そういえば、名前を一度も呼ばれてない。その事に気づくとなんだか無性に腹が立ち、レオから視線を外した。

なぜその事に腹が立つのか、リアでも理解できない感情が渦巻く。

「どうした勇者？ 食べないのか？」

「……勇者じゃなくて名前前で呼んでよ」

「お前はお互いの立場を理解しているのか？」

「……してるけど。……人里で私の事をその変な仮面を装着して勇者なんて呼ぶつもり？ 私はあるあなたの事を名前と呼ぶわよ」

何故か不機嫌気味に力強い言葉を浴びせるリアに、レオは少しだけ動じた。

何故自分は彼女の不興を買ったのだろうか、と。

と、同時にリアの提案は街中で行動するにあたり、当たり前前の提案な事に気付く。街中で彼女を勇者と呼べば、人間はたちまち集まり騒ぎになる。

そうなれば騎士団や貴族が動くだろう。

それはリアにとって良いことでは有るが、レオにとっては避けなければならない。

「それも道理か。では我が好敵手リアよ、共に夕食を食べるとしよう」

「意外と素直なんだねレオは。……でも、お腹が空いたからその提案は大いに賛成」

缶詰を開け、遅めの夕食を食べ始めるレオとリア。

レオはフルフェイス仮面の顎部分をスライドさせた。

露になった口元に干し肉を運び食べる。

その様子にリアは、食べ辛そうと評しながらも笑みを浮かべた。

## 1—6

魔王レオと勇者リアが奇妙な共闘関係になってから二日目の朝。

早朝に軽度の地震が起きた程度で、快適な目覚めを迎えた二人は、意気揚々と早速北へと向かうだった。

二人は岩場に膝を抱えながら、広大な海を呆然と眺めていた。

朝日が照らす崖の下は波打ち唸りを作る水面。

遠くに魚が勢いよく跳ね波紋を作り出す。

「……まさか、このような結果になるうとは」

フルフェイス仮面からぐぐもった声を鳴らすレオに、リアは涙目を浮かべた。

「ど、どどど、どうして私達は島に居るのよ〜!! 本当に此処は何処なの!?!」

海に向かって叫ぶリアと、盛大に岩壁にぶつかる波の音がレオの耳に響く。

ログハウスからこの崖に到着するまで一時間弱。

転移した砂浜から直線ルートで森を抜け、二時間弱で到着する事を踏まえると、この島は広くはないのかもしれない。

レオはそんな事を考えながら、この島に転移した経緯をリアに話す事にした。

「……あの時使用した転移石は、ランダムで人間界の何処かに転移する代物だった。……つまりいま置かれている状況は俺の責任になるわけだ」

「……ううつく、でもレオが転移石を使わなかったら今頃私は捕まってたよね」

「弱体化した俺が王都に転移したとなれば、この首は処断されていただろう。……ふむ、そう考えると運は良いのかもしれない」

海を眺めながら何処か楽しそうに語るレオに、リアは恨めがましい視線を浴びせた。

この男のお陰で助かっている事実と転移石によつて島に孤立してしまっている状況が複雑だ。

宿敵であるレオと二人きり。一人ではない安堵感がより強い複雑さを与え、彼女は顔を顰めた。

当の本人は海を静かにただじっと眺めるばかり。

「海を眺めるのも良いけど、その仮面は外したら？」

「断る、これは気に入っているんだ。それに海とは何処まで続くのか、お前は気にならないのか？」

「バルディアス大陸の北西部を領土に持つレオがそんな事を気にするなんて意外ね」

「複数存在する大陸の内の一つの北西部だ。……魔族にとつて海とは恋焦がれた景色の一つなんだ、それを俺は目の前にしている。海が何処まで続き、果てはあるのか、何処

で終わるのか、その先には何が有るのか、海の底ではどんな生物が生き死に生物の糧になるのか、気にはなるだろう」

魔族が恋焦がれた景色。

リアはなぜレオがそんなにまで海に好奇心を抱くのか知っていた。

三年前、去り際に彼自ら永久凍土に閉ざされた魔界には海と太陽が無い事を教えてくれたからだ。

魔界の土地は大地も海も全てが凍土となり果てた過酷な世界。

レオが海を見てみたいと憧れを口にしていたのをリアは今でも覚えている。

その時彼が魔族である事をはじめ知ったが、リアにとつてそれは些細な事でしかなかった。

「そう言われると気になるけど、レオは望みが一つ叶ったんじゃない？」

「……言われてみればそうだな。俺は漸く海に到着したというわけだ、昨日はゆっくり見る暇も余裕も無かったが……ああ、これは素晴らしい……」

心の底から語られた優しい言葉。

仮面に隠された素顔は、いまだんな表情を浮かべているのか。

リアは心躍らせるレオに不満な眼差しを向けた。

「……どうした？」

「なんでもない、それよりも次はどうするの?」

「次か……。そうだな、ここが島だったという収穫は大きい。では、次はあの山を登りながら食料と生物から魔核を獲るとしようか」

二人は立ち上がり、森に聳える山へと向かう。

岩肌に囲まれた山道を歩き続けていた、その時だった。

「ぎやぎやつ! 旨そうな」馳走が獲れた!」

頂上付近から声が聴こえたのは。

レオとリアにはその声に聴き覚えがあった。

魔物の中で最弱と呼ばれる魔物の声、どうやら獲物を獲りご満足の様子。

レオとリアは、錆び付いた魔剣と聖剣を手にゆっくりと山頂に近づく。

すると、ボロボロの腰巻に緑の肌色、背丈は人間の子供程度の魔物が縄で縛り上げた

山羊を片手に持っていた。

空いた手に短剣を握り締めて。

「……ゴ布林か。……一匹だけの様だが」

「そうみたいね、でもどうしてこんな島に一匹だけで居るのかしら?」

「大方漂流したか、誰かの悪戯で転移させられたのだろうよ。……リアは、ゴ布林と交

戦経験は?」

「有るわよ。こう見えて国王には勇者として困りごとに悩む民の力になって欲しいって頼まれて、いろんな依頼を受けてたんだから！　それで畑を荒らすゴブリン退治も請けた事があつたわ！」

「ふむ、流石は勇者リアと言ったところか。……しかし、俺とお前は魔力が回復せず弱体化したままの状態だ、油断はするなよ」

「分かつてる！　それじゃあ……行くよっ!!」

リアの言葉に、二人は同時にゴブリンの前に踊り出る。

目の前に現れた二人にゴブリンは警戒を浮かべ、僅かに後退る。

この島には彼等以外の人間は居ない、その彼等も今は海原を旅している。

二人は何者なのか何処から来たのか。自身の生活を脅かす侵略者なのか。

だからこそゴブリンが自らの安息を守るため敵意を向けるのは必然だった。

ゴブリンは縄で縛り上げた山羊を、少し離れた地面に放り投げ短剣を二人に向ける。

レオとリアは、お互いの錆び付いた武器を鞘から抜き放ち構える。

すると、ゴブリンは二人の持つ武器に眼を向け。

「……錆びた武器……錆びた武器だ?!? 我々ゴブリン族が最弱と知って舐めているのか!!」

激しく激昂した。

怒り狂い地団駄を踏むゴブリンの様子に、レオとリアは錆び付いた剣を握り込む。

「錆びた武器を得物にした事を後悔させてやるっ!!」

ゴブリンはレオとリアに駆け出し距離を詰め、短剣の間合いに入り込んだ瞬間、刃を振りかざす。



二人は重たい身体を左右に弾かせ僅かに距離を取る。

その動きは二人が頭の中で思い描く通りとはいかず、自身の動きの鈍足さに舌打つ。

ゴブリンは狙いを怪しい仮面で素顔を隠したレオに振り絞る。

ゴブリンの人生から培った経験上、怪しい者は何をするか分からない。

決まってそういった手合いは魔法を主軸に攻める。

そう瞬時に判断したゴブリンは、レオに短剣を振り上げた。

防御の姿勢を取らないレオに、ゴブリンは僅かに刃を振り下ろす事を躊躇してしま  
う。

誘われている。もう一人の人間が背後から襲う算段か、それともゴブリンの攻撃は意  
に返さないのか。何かの罠なのか。

しかしゴブリンは誘われていると認識した上で、刃を振り下ろした、すると……。

刃はレオのふくらはぎを僅かに斬り裂き、血が短剣の刃に伝う。

あっさりとした攻撃が通った事にゴブリンは拍子抜けした。

並大抵の人間は愚か、子供ですらゴブリンの攻撃は軽々と避け反撃するというのに。

「……ほう、俺に傷を付けるとは……やるな！」

ぐぐもった声で壮大な言葉を発するレオに、ゴブリンは呆然とする。

そして、ゴブリンの中に一つの疑問が生まれた。

もしかして、コイツは弱いのか、と。

ゴブリンが呆然としている間に、レオは上段から剣を振り下ろす。

反応が遅れたゴブリンは、またもや驚愕する。

彼が振り下ろす剣速が酷く緩慢で、ちよつと身体を逸らすだけで避けられるほどだ。

ゴブリンは遅い刃を軽々と避ける。

避けた安堵も束の間。油断したゴブリンの背後に衝撃が走った。

「……ごめんね、私達も必死なの」

懺悔の言葉を呟くりアにゴブリンは驚く。

背後から剣を突き刺された、突き刺されたのだが、刃がゴブリンの背中を貫かなかつた事に驚く。

「……………なんとも無い。……………もしかしてお前達、激烈に弱い？」

「っ！」

レオとリアの肩がびくりと跳ね上がり、ゴブリンは二人の反応から彼等がゴブリン族よりも弱い事を確信した。

余りにも弱過ぎる二人、一人は人間である事は間違いが、もう一人は素顔を隠しているせいか正体が分からない。

しかし二人からは魔力が一切感じない事にゴブリンは、ようやく気が付き頭を捻つ

た。

「魔力を感じない程に弱い?」

「……フツ、まさかゴブリンに弱者として扱われる日が来ようとは……っ!」

「あちゃー、やっぱり今の私達はゴブリンの相手も困難なのね」

レオとリアは、自分達の置かれている状況を改めて再認識した。

ゴブリンをまともに倒せない程に弱体化した状況に。

これではルシファアの打倒は愚か、目的達成もままならない。それ以前に島の生活すら危ぶまれる。

そんな二人の様子にゴブリンは短剣を鞘に納め、

「弱者を鬪る趣味は無い、無いから一先ずウチに来るか?」

同情とも取れる生温かい眼差しをレオとリアに向ける。

レオとリアは、優しくされた事、襲撃者に情けをかける寛大な心、そして同情された事による悔しさが入り混じった涙が頬を伝った。

レオとリアはゴブリンの巣穴に案内され、二人は地面に座り込んで辺りを見渡す。

山岳部の岩壁をくり抜き、壁に穴を開け窓が備え付けられ煙の逃げ道が造られている。

しまいには石窯と焚火は愚か、羊の羊毛で造られたベッドまで備わっている。

ここまで人間に近い生活を送るゴブリンが未だかつて居ただろうか。少なくともレオとリアの経験上、そんなゴブリンは見た事が無かった。

「なぜこの様な状況になるのだろうか」

改めてレオは自分達の置かれている状況のおかしさにポツリと呟く。

「分かんない。私は勇者だよ？ 人々の希望の象徴だよ？ それがゴブリンに同情された拳句ご飯をご馳走になろうとしてる」

リアは山羊を解体し、鼻歌を叶えながら肉を火で炙るゴブリンの姿に頭を抱えた。

なぜ襲った人間と魔族に敵意を向けないのか。

レオはゴブリンの姿に疑問を感じざるおえなかった。

魔物とは人類を襲う敵性生物であり、時に未曾有の災害を与え、時に街を蹂躪し尽くす生物だ。

少なくとも魔界と人間界ではそれが共通の認識であり、歴史でもある。

だからこそレオはゴブリンに質問をぶつける。

「なぜ魔物であるお前は、俺とリアを殺さない？ ましてや魔物が料理を振る舞うなど」と

「おかしいかい？ そりゃあおかしいよな。……けどこんな島に居ると人ですら恋しくなるのさ。見ての通りこの島には他のゴブリン族は居ない、偶に人間が船で訪れるぐら

いで誰も居ないのさ」

一匹だけの生活が与えた寂しさからか、ゴブリンはいつの日か人間を襲う必要性がなくなつた。ましてや島に居ない敵を憎む事に彼はいつの日か疲れたのだ。

そしてゴブリンは、動物を狩り静かに暮らす事を望んだのだという。

「どうしてこんな島に一匹で？」

「昔、同胞と海で誰が大きな魚を獲れるか勝負したんだ。その時、運悪く高波に吞まれ気が付けばこんな島に流れ着いていたのさ」

それからゴブリンは静かに暮らし、偶に訪れる変わった人間達と交流を重ね文字を覚えてたのだと云う。

「この島に訪れる奇特な人間達か。……船なら陸地まで乗せて貰いたいものだが……」

あのログハウスは、その奇特な人間達が建てた物だろうか。それならいずれ来る日がある、とレオは考える。

しかしゴブリンの言葉がレオの考えを否定した。

「どうだろうねえ。彼等は偶にしかこの島を訪れない。最悪二年は来ない事も有る、もしかしたら海で事故に遭つたかもしれないし、そうじゃ無いのかもしれない。海を股にかける彼等の安否は確かめようが無いのさ」

ゴブリンの言葉にレオとリアは眉を顰めた。

二年もこの島で生活してられない。

早急に大陸に戻り、魔力を取り戻す方法を探さなければならない。

そしてルシファーを討ち倒し、この奇妙な共闘関係を終わらせ元鞘に戻るためにも。

ましてや生存してるのかさえ分からない、者達を待ち続けるより行動に移すべきだと二人は考えた。

「魔力さえ戻れば転移で帰れるのだがな」

「魔力が回復しないのか？ おかしな話だな、魔核が在る以上魔力は回復するはず……」  
「そう単純な話なら俺も彼女もここまで困り果てることは無い。……魔力を回復する術は自然回復の他に、生物の魔核から直接魔力を奪う方法も有るが……」

レオは解体された山羊の魔核に眼を向ける。

小石サイズの結晶に渦巻く魔力、アレから魔力を取り込めばその場凌ぎの魔力回復が見込める。

一度使った魔核は魔力を失い、使い捨てにする他に無い。

そもそも魔核が魔力を生成、回復する絶対条件が生きた生物の体内に在ること。そうである以上、一度体外に摘出された魔核に魔力を貯めることは不可能だ。

そう、摘出された魔核は一種の魔力回復石となる。

他にも魔力を回復する手段は、食事と睡眠を取ること。

通常はそれだけで魔力が回復するが、今の自分達ではそれさえも叶わない。

そんな事を考えているレオを他所に、ゴブリンは魔核を掴み上げると、驚くべき事にレオに投げ渡した。

彼は驚きながらもそれを受け取り、

「なぜこれを俺に？ 回復した魔力で貴様を襲うのかも知れんのだぞ」

「……本当かどうか知らないけど、弱過ぎる二人があまりにも不憫だな。そのままだと食料を得る事も困難だろ？ こっちは人の死骸を島に置きたくないのさ」

余りにも優しいゴブリンにレオとリアは言葉を失い、差出された肉に何度目かの涙を流した。

心優しいゴブリンと別れたその日の夜。

ズボンの破れた箇所の修繕を済ませたレオは仮面を外し、自室のベッドの上で掌に魔核を転がしていた。

「島を脱出するにはイカダと呼ばれる小舟を造る必要が有るが……」

ゴブリンが言うには、この島の海域にはサメが多数生息しており、イカダで脱出をしようものなら喰われるという。

レオにとってサメは未知の生物では有るが、ゴブリンの言葉にイカダでの脱出を断念せざる終えない。

イカダはあまりにもリスクが高すぎる。

まず何処へ向かえば良いのか、向かうべき方角が分からない。そして海中に生息する魔物の対応、食糧の問題、一度出航してしまえば二度と島に引き返せないかもしれない。

少し考えただけで分かるリスクに、レオは別の方針に思考を向けた。

ログハウス内で拾った手記に記された記述も気にはなるが。

「この魔核には初級魔法を扱う程の魔力が無い。……やはり他の生物も狩る必要が有る



が、狩るにはこの魔核を砕き多少なりとも動きの鈍重さを解消したいところだが——」  
魔核を一つ消費して生物を狩るか。

罠を設置するのも一つの手では有る。

魔核を集めて吸収魔法——「ドレイン」で魔物から魔力を奪い、転移魔法の足しにするか。

やはりそこで問題になるのが魔力を維持できないこと。

集めた魔核を全て砕き、吸収魔法を扱えるだけの魔力を体内に留めておけるのは、せいぜいが一時間、多く見積もって二時間程度。

リスクの多い現状にあれこれ考えていると。

「レオ、考えは纏まった？」

ドアをノックせず平然と部屋に入り込む、リアにため息が漏れる。

「……魔王である俺の部屋に安易に入って来るとは無謀だな」

リアは防具を外し白のインナーと青いスカート姿で、余りにも無防備だ。

しかしレオの内心を露知らず、

「え〜？ 今のレオは私に何にもできないでしょ？」

屈託のない笑みで返されたレオは顔を顰めた。

「……まあよい。次はどうするべきか、やはり魔核を使わずに狩りをする他に道は無い

ようだ」

「狩猟用の罾の作り方や設置のやり方は知ってるけど、問題は材料よね」

「……このログハウスにはオノは有るが、果たして木を切り倒せるか、だな」

リアは頬に人差し指を添え、

「うーん、それは明日試すとして……ルシファアのその後の動向も気になるわよね」

力強い眼差しを向けた。

魔力と力を奪った目的と動機も不明であり、その後魔族と人間をどうしたのか、またどうしたいのかも不明だ。

少なくともろくなことじゃないことは確かだと言える。

自分達の魔力をタイミングを見計らって奪ったのだから、入念に計画していたとも取れる。

ルシファアの行動を思い起こし、レオは重たい体をゆっくりと起こす。

「……ふむ。ヤツとは天界が人間界と魔界の争いに介入しないよう取決めを行った際に出会ったのだが、元々争い事に介入しないよう女神ウテナから事前に言われてはいたそうだが——」

神々の唯一の生残り女神ウテナは、人間界と天界で広く信仰されている神である。

そういうえば、リアの仲間にはウテナ教の神官ナナが居たが、彼女は天界の事情に明る

いのだろうか。

レオはいずれそれも確認する事柄と定め、リアの言葉に耳を傾ける。

「女神様の命令を破ってまで私達の魔力を奪った。でも、どうして？ 他人から奪った

魔力つて数時間で消えちゃうから意味が無いよね」

「普通に奪ったのなら意味は無いが、一向に魔力が回復しないこの現状では、魔核に何か

細工をされたのかもしれない」

細工するタイミングは一度だけ確かに存在していた。

鎖がレオとリアの腹部を貫き、魔力を吸い取ったあの瞬間。

逆にあのタイミングでしか細工は不可能だろう、とレオは睨んでいた。

「その細工つて解除できるものなの？」

「さあ？ 何せ俺は魔核研究に明るい訳でも無い、下手をすればどうなるか想像もでき

んよ」

勝利を確信した者の中には、傲り情報をペラペラと喋る者も居る。

慢心が招く油断が最大の間ともなり得る。

しかしルシファーは勝利に傲り目的を話すことはなかった。

それは、自分達が万が一にも生きながらえ目的達成の障害になると見越してのこと

か、単純な警戒からか。

そのような人物が魔核に何か仕掛けを施したなら、解除するために魔核に干渉した瞬間人体が吹き飛ばかもしれない。

リスクを考え、魔核を調べる事を後回しにしていた。

「私の魔核を見るだけ見てみる？」

「それは……その為には服を脱ぐ必要が有るが貴様には……」

『できるのか』、と言い掛けた瞬間。

バサリ、と布が床に落ちる音がレオの耳に届く。

彼はまさか、と恐る恐るリアの方に目を向け、眼を疑う光景に絶句した。

そこには恥ずかしがる様子も無く、インナーとスカートを脱ぎ捨て下着姿のリアが

堂々と立っていたのだ。

（ば、ばばば、バカかこいつは!? 男の前で無警戒に下着姿になるヤツが居るかあ!?)

声にならない悲鳴を叫び、レオはリアから目を背けた。

「どうしたの？」

「どうしたの？ では無い！ 不用心過ぎるぞ！」

「ええ〜そうかなあ？」

羞恥心がまるで足りないリアに、思わず頭を抱え激しく鼓動する心臓の音に苛立ちが

浮かぶ。

煩い音。魔王が少女の下着姿一つで取り乱した証拠を耳元に突き付けられているように、

「貴様！　ともかく服を着ろ！」

「どうして怒ってるのよ、魔核を調べないとどうにもならないでしょ！　それにレオは自分の魔核を自分で見れるわけ!!」

怒鳴り声を上げるレオに、リアはムツとして言い返した。

一体なぜ自分は怒っているのか、とレオは精神を鎮め平静に努める。

「……むう。正論では有るがな、お前は平気なのか？」

怒鳴り声から一転、落ち着き静かな声で語り掛ける。

「平気よ、だって故郷の村じゃあ普通だもん」

リアの言葉にレオは目を見開く。

まさかあの歳頃の少女は、人前で下着姿になることに対抗は無いのか、それともそれが普通に行われる特殊な村なのか。

「……それは故郷の男の前でもか？」

シヨックを受け上擦った声に、リアは首を傾げる。

「えっ？　だって故郷に男の子は居ないよ。皆勇者になることに憧れて騎士に士官しちゃったもん。私が物心付いた頃には男の子は全員居なくなってたよ」

彼女の言葉にレオは悟った。

リアが羞恥心に疎いのは、紛れも無く魔王である自分の責任だと。

それはそれとして、リアの仲間達は何も教えなかったのかと疑問が宿るも今はそれどころでは無い。

今は一刻も事を済ませるべきだと、レオは覚悟を決め、ふと重要な事を思い出す。

「……お前の事情はよく理解したが、やはり服を着ろ」

「ど、どうして!?!」

「……そもそも魔力が無ければ、意識の中に魔核を視覚化する事は不可能なのだ」

「……それならそうと早く言つてよね。でも、先走ったのは私だからレオが気にする必要はないよ」

リアはそう言つて笑い掛けるが、何一つ笑えそうにない。

彼女の羞恥心は早速無知と言つて良いほど、その事実には笑えず頬を引きつらせるばかり。

リアは下着姿で居ても仕方ないと呟き、彼女は衣服を着ては、あろうことか部屋で寛ぎ始めた。

「なぜ寛ぐ? 用件が済んだのなら即退出を勧めるが」

「うーん? 監視、レオが悪い事を企んでいないかどうか」

勇者としてレオの悪事は未然に防がなければならない。

その為には彼の行動を監視する必要がある。元々その目的があつての共闘関係。

レオはもう知らんと言いたげに、顔を壁に向け眠りはじめる。

「え〜寝ちやうの?」

声を掛け、なんとなくレオの体を揺らすも、彼から寝息が聴こえはじめた。

これは完全に寝ている。そう判断し、レオの側に無防備に置かれた魔核に目を向ける。

本当に無防備だ、もしもこれを自分が破り魔力を回復させたらどうなるか。

間違いなく魔王レオを討伐できる絶好の機会だ。

しかしリアは魔核に手を伸ばそうとはせず、彼の長い白髪に手を伸ばす。

「……やっぱりサラサラだ! 前から思ってたんだよね、レオつて絶体に髪の手入れに気を遣ってるって!」

今度髪の手入れのコツでも聴こうか、そんな事を思い浮かべながら肌触りの良いレオの髪を弄り遊ぶ。

レオが寝てるのを良い事に様々な髪型に変える。

起きていたらきつとこんな事はできないだろう。

自分と彼は本来敵同士、それ以前に嫌そうに紅い瞳で睨むレオの姿が容易に想像に浮

かぶ。

もちろんレオの髪を弄るといふ行動に何も意味は無いが、強いて言えば、これは髪を伸ばした時の予行練習だ。

いずれに剣を置く日が訪れる、その時は女の子らしく髪を伸ばしたいという思いもある。

散々レオの髪で遊び倒したりアは気付けば睡魔に負け、そのまま夢の中へと旅立つ。

翌朝、側で眠る彼女の姿にレオは大いに頭を抱え込んだ。何処まで彼女は無防備なのか、と。



レオとリアが魔核と食料を獲るため狩りを開始して早くも一週間が経つ。

リアが作成した罾に罹った野ウサギが、矢に射抜かれ絶命している姿にレオから感嘆の息が漏れる。

「上手くいったか。……これで動物を追い掛けまわす必要も無くなるな」

蔓を弦の様に編み込み、集めた木材と合わせて作製した弓矢は問題なく使えた。

仕掛けた罾も問題無く作動するのだから幾ばくか楽ではある。それでも魔法一つで得られる結果の方が大きい事には変わりない。

思い返せば、狩り初日は酷い物だった。動物に逃げられ、おちよくられ蹴り飛ばされるなど散々だった。

「レオはウサギに顎を蹴り上げられてたわね……魔王なのに……ふっふふ……！」

「……貴様もヤギに押し倒され、身体中舐めまわされたらうに」

堪え切れず笑うリアに、仮面越しからジト目を向ける。

「……あれは忘れてよ」

ヤギに押し倒され身体中を舐めまわされた事は、彼女にとって恥ずかしい事のよう

だ。

そのまま羞恥心の一つでも育んで欲しい。

そんな考えを敵である勇者に抱くのは間違いだと理解しながらも、好敵手だからこそその辺りはしつかりしていて欲しい。

野ウサギに駆け寄るリアに、そんな心情を浮かべては、仮面の中で苦笑が漏れる。

この島には誰かが連れ込んだらしい動物が多数生息している。

おかげで食料と魔核がある程度確保出来たのは、幸先が良いと言えるだろう。

しかし魔物の魔核と違って、動物の魔核に宿る魔力は少量で現在有る二十個の魔核では初級魔法一回分しか回復しない。

「一週間でこのペースか……転移魔法を扱える程の魔力には到底足りんな」

「魔法について詳しくは無いけど、そもそも転移魔法って動物の魔核何個分なのよ」

リアは仕留めた野ウサギを片手に、あと幾つ必要なのか尋ねた。

「……むう」

レオは言い辛そうに唸り声を上げ、

「その辺りは正直に話して貰わないと私も協力しようがないわよ?」

答えに渋る彼に釘を刺す。

リアの言うことは最もである。

先の見えない方法に協力は出来ない、ならば他の道を詮索する方が有意義だと。

ここは正直に話さなければならぬ。

「動物の魔核はあと二千万個となる」

「に、二千万!? そもそもこの島にはそんなに動物は居ないわよ!!」

海で獲れる魚を含めても、到底二人では集め切れない数だ。

しかし何も考え無しに動物の魔核を集めを提案した訳でない。

レオは懐にしまったある物に触れながら、次の予定を話すことにした。

「現在手元に有る魔核で初級魔法一発分、吸収魔法ドレインが使用可能だ。後は魔物から魔力を吸収すればいい」

「魔物から……確かにその方が現実味が有るわ。でも魔物ってゴブリン以外に生息してたかな」

「ゴブリンの他に、夜行性の魔物や山岳地帯にベアバック……現在休眠中の魔物が一体生息しているらしい。……コレはログハウスの空き部屋に放置されていた物でな、読んでみるといい」

そう言っつてレオは、古びた手記をリアに手渡した。

「これは……?」

古びた手記のページをめくり、そこには汚い文字で書き綴られていた。

『七月八日、夏の島は日差しが強く茹だるような暑さだ。これにはゴブリンも気が滅入ったのか、巣穴から出て来る様子を見せない』

『七月九日、お頭が妙な魔物？ を連れて来た。どうやら最近大陸で騒ぎになっている魔族という種族らしい。それにしても鳥の様な風貌はどこか食力を唆る』

『七月十日、魔族は魔界に住むペンギン族だそうだ。なんでも魔王に川の水質調査の任を与えられ、運悪く足を滑らせ激流に流されたらしい。……魔族も随分間抜けなのかもしれない』

「七月十二日、昨晚から断続的に地震が起こり、森が火災に見舞われオレ達は消化作業に追われた。なぜ地震が起こったのか？ 突然火災が起きたのか。自然というヤツは気紛れだ』

『七月十七日……有り得ない魔物が目覚めた。ソイツは、全てを飲み込んでしまいそうな程に巨大で、海の底から這い出る様に現れやがった。巨大ってだけでも驚愕だったのに山を背負う姿は、言葉を尽くせないものだった。……幸いお頭の勇敢な指揮のおかげでどうにか撃退できたが、船の大砲が無かったらと思うと……ゾツとする……』

リアは読み進める手を止め、レオに顔を向ける。

「あなたの部下が漂流してるんですけど」

「……五十年前に行方不明になったペンギン族がまさかこの島に居たとはな。搜索命令

を出したにも拘らず発見できなかったが、生きているのならそれでいい。……いや、その事よりも魔物に付いてだ」

「……大砲つて城壁とか砦の攻城用だったり防衛用の兵器よね？ それを駆使して撃退つてさ、災害級の魔物なのかしら」

「災害級ならば大砲だけで撃退できるとは思えんよ。アレはまさに天災そのものだ、時に自然環境を変貌させ、時に世界の崩壊を招く恐ろしい魔物だからな」

「そつか。私のご先祖様が討伐した災害級の竜も海と大地を蒸発させたつて言い伝えられてたわね。……災害級ならこの島はとつくに跡形も無く消えてるかな」

こうしてわざわざレオが手記を見せた理由。

それはこの手記に記された魔物から「ドレイン」で魔力を奪う算段のようだ。

上手くいく保証は無い、他の魔物から魔力を奪った方が建設的な話ではある。

しかし巨体であるが故に秘めている魔力量は凄まじいことは明らか。

休眠中の魔物ではあるが、目覚める前に魔核を蓄え万全の準備で挑む。

リアはレオの考えをある程度理解した上で、

「……それじゃあ次の狙いはこの魔物つてことね」

明るい声で提案を受け入れた。

「察しが早くて助かる。……まあ無理そうだったら地道に魔核を集めイカダで脱出を試

みるがな」

レオが仮面の下で不適に笑った、その時だった——突然地鳴りが響き、あつという間に大地が激しく振動したのは。

## 1-10

山が震え、森が騒めき、鳥達が一斉に翔び立ち、魚が忙しく海面で暴れ出す。

予期せぬ地震に足を取られ、たたらを踏むレオとリア。

「……地震、か。……むう、満足に動けんな」

激しい振動に耐え切れず、地面に座り込み冷静に周囲を見渡す。

自然災害の前には冷静な判断が重要だ。慌て先走った者から災害に巻き込まれ命を落とすケースが多段に有るのだから。

リアも取り乱さないとこ見るに、先人が遺した例に倣ったようだ。

振動が続く中、激しい轟音が山から轟く。

レオが視線を向けると、山の一部が崩れ、土砂が海に向かって流れる様を目の当たりにした。

「土砂崩れ、ゴブリンは大丈夫かしら？」

「ヤツの巣穴はここから山の北側だ……しかしあの規模を見るに西側はダメだろうな」

一瞬で木々を巻き込み、海面に流れる様に肝が冷える。

現在居る場所は島の南。山の東南側が土砂崩れを起こせば、ログハウスは愚か自分達

も逃げる暇も無く呑み込まれていた。

現に振動に体の自由が取られ、激しく体が揺さぶれた状況では逃げる事も叶わない、待つのは迫る土砂崩れと死への恐怖だけ。

これだから予測できない自然災害は恐ろしい。

レオは仮面の下で、頬を伝う冷や汗に息を吐く。

まだ山が崩れた程度、津波が来ないとも限らない。そこでリアが海に眼を向けると、不自然なまでに海は穏やかだった。

次第に収まる地震に、二人はやつとの事で立ち上がる。

「……突然の地震、手記には断続的につて書いてあったけどさ。これって魔物が目覚める予兆なのかしら?」

「海の底から現れたとも記されていたな……しかし海は穏やか……これは一体……?」

島の海底で眠り、活動を開始した影響で起こる地震。

それは一体どんな魔物なのか。海底から現れたとなれば、真先に海に何かしらの影響が出るはずだ、とレオが思索していると。

向こうからゴブリンが釣竿を片手に駆け寄つて来る姿に、二人から安堵の息が漏れた。

「おーい！ お前達も無事だったな！」



「ゴブリンも無事そうで何よりだね。……でも、巣穴は大丈夫なの？」

リアの言葉にゴブリンは項垂れ、

「恐らくさっきの地震で巣穴は潰れちまったよ、そうならまた一から掘りなおさないとなあ」

落胆した表情で答えた。

「……そうか。まあ命があるだけ儲け物だろう……ッ!？」

落ち込むゴブリンに励ましの言葉を掛けた時だ。

こちらを見下す視線に気付いたのは。

リアも同様に視線に気付いたようで、冷や汗を流しながら周囲を見渡している。

何処から視線を感じるのか、周囲を見渡すと魔物らしい姿形は無い。

ふと何気なく地面に目を向けると、足下が影に覆われている事に気付く。

(……影? この辺り一体が影に覆われている? ……まさか!)

空を勢い良く見上げると、そこには長い首を伸ばしこちらを見下す魔物の顔があった。

首は空に届く程に長く太い、特徴といえれば湿った皮膚と苔に覆われていること。

そして顔は、潰れた鼻に鋭く獲物を眼孔で射抜く瞳。

「……巨大とは言ったが……これは、巨大過ぎる」

魔力の無い状態から巨大な魔物に威圧され声が震える。

「……肝心の胴体はどこ!？」

リアの言葉に、首がら下に目を向ける。

すると首から下——まるで島から伸び出る様に伸ばされている事が分かる。

信じ難い事に魔物は海底から現れたのでは無く。島そのものが魔物だったのだ。

「……島が魔物だと? まさか俺達はずっと魔物の背中で生活を——」

「知らなかったのか? この島はランドタートルの背中つてことを。……いや、そりや

あ二人みために五十年前は驚いたもんだけどよ」

「……ねえ戦うより、陸に連れて行って貰った方が良くないかしら?」

「……そりやあ無理だ。ヤツは陸を喰らうそうだ」

人間界の伝承には、沿岸部に島が徐々に近付き、やがて沿岸部が巨大な口に飲み込まれるという記述がある。

大陸地図に散見される奇妙に抉られた部分は、過去に陸喰いによつて喰われた名残なのだ。

「陸喰いの噂や伝承は聞いた事はあつたが、それがまさか亀とはな」

三人が呑気に会話していると、亀は巨大な口を開き——

「!!」

声にならない咆哮を上げ、三人に敵意を向ける。

こちらを外敵と認識した亀から濃密な殺意と魔力が溢れ出す。

亀が動き出すよりも早く、レオは懐にしまっていた魔核を砕く。

ほんのわずかに回復する魔力に、不謹慎だが仮面の下で笑みが零れた。

失つて初めて気づく魔力と魔法の有り難み、そして僅かに戻る魔力に笑わずにはいられなかった。

また一つ、二つ、三つと砕き魔力の回復を測るレオに亀が首を伸ばす。

伸ばされた首は、レオ達を薙ぎ払うため横に動かし始める。

しかしその動きは酷く鈍重だ。

「鈍重な動き！レオは今の内に魔力を回復させちやつて！」

リアが弓矢を構える姿が、まるで美しい乙女が勇敢に巨悪に立ち向かう姿に見えた。

そして、矢を限界まで引絞ったリアが亀の頭部に向けて射抜く。

勢い良く放たれた矢は、彼女の身長よりも高く放たれ——放物線を描いて地面に虚しく突き刺さる。

リアは矢とレオを交互に見ては、悲しげな眼差しを向けた。

「……私の筋力弱すぎ……」

弱体化したままでは幾ら勇者であつても動かない標的に矢を当てるのが精一杯で、こ

の結果は必然だった。

「シヨックを受けてる暇か。……お前は聖剣の準備でもしている」

リアが矢を放ち、悲観している隙に全ての魔核を砕いたレオは、回復した魔力を放出し、掌を亀の頭部に向ける。

「分かった！ 最期は任せなさい……！」

錆び付いた聖剣ゼファールを抜刀し、いつでも駆け出せる様に地面を踏み抜く。

亀の伸ばし切った首がゆっくりと動き出す。

岩を砕き、森を薙ぎ払い、ゆっくりと迫る首にレオは笑う。

「遅い、あまりにも遅過ぎる！ 早ければ俺達は一瞬で死んでいただろうに！ ……貴

様の魔力頂くぞ、『ドレイン』……ッ！」

詠唱文を破棄し、威力を弱める事で消費魔力を抑えたレオは魔法を唱えた。

掌から浮かぶ魔法陣、そこから放たれる陽炎の腕が接近する亀の首を掴む。

陽炎の腕が亀の魔核に干渉し、魔力を奪われまいと抗う。

しかし、僅かな魔力を放出させ魔力を奪い取る事に成功した。レオの元に陽炎の腕が戻り魔核に魔力が供給される。

レオから更に溢れ出る闇の魔力にゴブリンは腰を抜かし、リアはゾツと背筋が凍る感覚に襲われた。

紛れもない闇の魔力を放出するレオ、全盛とは程遠いがそれでも彼が放つ威圧感並みの魔族以上に恐ろしい。

対するレオは万全とは程遠い様子に落胆し、

「ふむ、十分の一も回復はしなかったか。……まあいい、受け取れリア！」

右掌で胸を押さえ、自身の魔核から奪った魔力の塊を取り出す。

それをリアに向け放ち、彼女の魔核に魔力が宿る。

瞬間、錆び付いた聖劍ゼファールに光が戻り、錆が取れ白銀に輝く刃がその姿を現す。

本来の姿とは未だ程遠い聖劍ゼファール、真価を発揮する時こそ、聖劍ゼファールは光の刃そのものとなる。

ゴブリンは驚くべき光景に、二人は何者なのか、と戦慄する。

リアはゴブリンの様子に目もくれず、一気に大地を踏み抜く。

地を蹴り標的との間合いを一気に詰める歩法魔法技——【縮地】

彼女は亀の首筋に接近すると同時に、魔力を聖劍に込め上段から、

「我が剣よ、光刃となりて刻め！！」

リアが先祖から代々受け継いだもつとも基本的な魔法技——【洗滅斬】

光刃を振り下ろした直後、光の一閃が亀の太い首に走る。

「終わりよ……私達が相手じゃあ悪過ぎたわね」

鞘に聖劍ゼファールを納めた瞬間、亀の首筋が斬撃に切り裂かれた。

深く抉られた首筋が生物として致命傷となり、亀の眼孔から光が消え、ゆつくりと森に頭部が横たわり空に血の雨が降り注ぐ。

魔力を宿した血は、やがて新たな生命の苗床となり、破壊された森は時の経過と共に回復するだろう。

特にこの島自体がランドタートルなら、甲羅に位置する陸地は新たな大地の苗床となるだろう。

リアは空になった魔力の影響から、重い体を動かし二人の下へと戻った。

「……………ふむ、一撃で倒すとは流石は勇者と言ったところか」

「やあ、久々に思う様に体が動くし、魔力も使えたから加減が難しくて……………魔力を全部使い切っちゃったわ！でも目覚めたばかりの魔物だったから抵抗も大したことじゃなかった、もしも完全に覚醒してたらこっちが全滅ね」

「まあそうだろうなあ。……………さて、問題はどうかやって魔核を取り出すかだな」

魔核を獲るために挑んだランドタートル。

向こうから現れ、敵意を向けられたため討伐したなどとは言わない。

元々魔核を奪うつもりだったのだから、責めて勝者として魔核を有効活用させて貰う。

レオが内心でそんな言葉を浮かべると。

「…………お、おとお、驚いた。アンタら二人は元々強かったんだな…………！」

ゴブリンが眼を輝かせ興奮していた。

「それに勇者と魔王？ よく分からないけどよ、おかげで命拾いしたよ！」

「えっと、まだ魔核の機能が元通りに回復してないから魔力が無いと弱体化したままなんだけどね」

「そうか、そうか！ よし、ランドタートルの魔核はこつちに任せてくれ！ 穴掘りは得意だからよ…………！」

穴掘りではなく肉掘りでは、という言葉をレオはグツと呑み込んだ。

「そうか、では魔核は任せた。俺達は早速ヤツの肉を調理するでしょう…………！」

亀とは一体どんな味がするのか。

計画よりも未知の味に、食力が引き立てられ空腹が鳴る。

「亀はスッポン料理が人気らしいけど、ちよつと難しいから魔界流でいきましょう…………！」

「ほう。あのただ雑に焼いただけの調理法を好むとは…………！」

「…………あれ？ 魔核より食力？ ……いや、まあ、魔力量が多いほど食事もすごいけど

よ」

強者ほど日々の食事が多い。

膨大な魔力を回復させるには、栄養を摂取し魔核にリソースを割く必要が有る。食事と睡眠で魔力が半日から一日で全快する仕組みに、ゴブリンはふと思う。

この二人は魔力が空っぽだから常に空腹なのでは、と。

こうして勝利の美酒に酔い、ランドタートルの肉と野ウサギの肉で小さな宴会を開くのだった。

海域に接近する船影に気付かずに――



## 二章 霧の中の貴婦人

### 210

魔王レオと勇者リアが謎の失踪を遂げてから早くも一週間余りが経過した。

二人の失踪は魔界と人間界に混迷を齎らし、魔王に怯えていた人間界の魔物が活発化を開始。

そして魔王レオが不在の魔王城では、数多の魔族達を抑え新たな魔王となった者によつて統治され始めていた。

神官帽子にゆつたりとした神官服を着こなした茶髪の少女——ナナは薄暗く冷たい地下牢の中で、

「わたしが、わたしが！ あの時気を失いさえしなければ……！」

現実を悲観し、あの時もしも気絶しなければ、リアは助けられたのではないか。

牢屋に閉じ込められてから自己嫌悪に陥る日々が続く。

自己險悪に陥ちた所で何も変えられないと頭で理解してながら、感情が、心が自身を責め立てる。

「魔王の魔力は、廊下で戦つてたボク達にも伝わってきたから……気絶するのは無理もないよ。……それに魔王の魔力で何百人の騎士達が発狂したって聞くしよ、うん、だからナナも元気出して」

董色の髪に、とんがり帽子を被つた魔法使いの服装をした少女——フィオナが静かな口調で元気付ける。

まだ十二歳の少女に元気付けられる人物が不甲斐ない。

ナナはそう思うも、無理矢理にでも笑うのだった。

後悔しても時間は巻き戻らない。

それは例え、どんな魔法を使用したところで叶わない儂い夢でしかないのだから。

「……ありがとうフィオナちゃん」

「うん、こういう時はお互い様……でもあの天使は一体なんなの？」

戦場に突如と乱入した大天使ルシファーは、混沌の魔力を使い両軍に壊滅的打撃を与え、新たな魔王と名乗り出た。

ルシファーの行動は未だ謎めいており、フィオナは天界勢力に不信感を宿す。

「分かりません、ルシファーは、以前は知的な方という印象を受けました。……ですがあのお方は冷たい、とても冷たい目をしてました、それこそ全てを壊す様な……」

ナナが見たルシファーの印象はまさにそれだった。

そもそもどうやって混沌の魔力を手に入れたのか、なぜ魔王レオと勇者リア、二人の魔力をずっと宿しているのか。

他者の魔力は時間経過で消滅してしまうのが当たり前だ、それが例え天使であろうとも女神であろうとも。

それに混沌の魔力は一度も聴いた事が無い。あの魔力は一体どんな原理で誕生したのかさえ謎のまま。

「天使のことはさあ、今はいいじゃん。……それよりもどうやって脱出して騎士団と合流するかだ」

凜とした男勝りの口調で話す、身軽で露出の多い軽装を着こなした少女——マキアが鉄格子を睨む。

「それはそうだけどさ、でもどうやって脱出しよ？ 魔法で破壊できれば良いんだけど——」

そう言つてフィオナが掌を鉄格子に向け、

「《炎よ、爆ぜろ》——!!」

魔界由来の火炎魔法——「ファイアボール」が鉄格子に放たれ、地下牢に爆炎を奏でた。

三人は生じる煙に咳込み、やがて煙が晴れるとそこには無傷の鉄格子が障壁を発して

いる。

鉄格子も壁も一定威力の魔法を無効化する障壁によって守られ脱出が困難な状況だ。仮に「ファイアボール」以上の魔法では牢の崩壊を招き、内部に自分達の身が危険に曝される。

と、先程の騒音を聞き付けた看守が慌ただしく駆け寄って来る。

「何事だ!? ……つて、また捕虜達か」

頬を引きつらせ、呆れたため息を吐く看守。

「毎日毎日魔法を唱え、騒音を鳴らすとか頭がおかしいんじゃないか?」

看守は牢屋内で座り込む三人を品定めして、ごくりと喉を鳴らす。

敵の捕虜ではあるが、どれも顔立ちが整った美少女達。

思えば勇者一行には何度も煮湯を吞まされ、屈辱を味わった。

日頃の怨みを晴らすべきだ。

次第に看守の中で邪念が強く渦巻き、牢屋内で何も出来ない三人に対して嗜虐心が芽生える。

「……おい、三人の中から一人選べ」

看守の言葉に、ナナ、フィオナ、マキアは互いに顔を見合わせ小首を傾げる。

看守は何を要求したのか、三人には理解が及ばない。

「……一人ずつ芸でも披露すれば良いの？　ボクは魔法しか取り柄がないけど」

フィオナは指に灯火を作り出しては、灯火をウサギの形に変え、

「芸ねえ、魔族つて娯楽に飢えてんのかなあ？　あたしはスリぐらいかなあ」

マキアが金銭の入った金袋を掌で遊ばせほくそ笑む。

「芸なんでしようか？　なんだか怖い顔して……いつも怖い顔でしたねすみません。

……私は芸の心得は持ち合わせてませんね」

検討外れな言動に看守が苛立ちを募らせる。

「芸じゃねよ！　あと怖い顔つて魔族でもそこそこイケてる顔なんだ！　つて！　人の財布を盗むんじゃあない!!　……はあ、はあ……奉仕だ、奉仕の順番を決めろと言ってるんだよ！」

騒ぎ疲れ乱れた呼吸を整え、冷酷に告げた。

「奉仕？　メイド服を着せて働かせるってこと？　別に退屈だからいいけど」

「その際に脱走されても文句は言えないよな？」

「メイド服にはちよつと興味ありますけど、魔王城のメイド達の服装はちよつと」

ナナは城内や牢屋をせつせと清掃する女魔族達の姿を思い浮かべ苦笑した。

スカート丈が短く、へそ出しに半袖で布面積が少ないメイド服、あれは魔王レオの趣味だろうか。

「違えよ！ 誰がメイドやれって言ったよ！ ……まさか、こいつら……いやいや、そんなバカな」

看守の中に一種の疑念が過ぎる。

まさかこの三人は性知識皆無なのか、それとも天然か、あるいは素で理解していないのか、と。

「……お前ら置かれた状況分かってる？ 女騎士ならそりやあもう酷い目に遭って、『くつ、私を殺せ！』、とか言う状況だぞ……？」

三人は彼が言ってる意味が理解できず小首を傾げ、釣られて看守までもが、自分がおかしいのか、と小首を傾げた。

そんな時だった、

「……何をしている」

呆れ混じりの声が看守の背後から響いたのは。

看守の全身から急激に汗が流れ出し、彼は震える体を抑えながら背後の人物に振り向く。

そこに立っていたのは、四魔將軍筆頭——ザガンだった。

ザガンは鋭い竜の瞳で看守を威圧し、

「要件が無いのなら疾く持ち場に戻れ」

無表情で看守に告げる。

看守は悲鳴を出す暇も無く、その場から逃げる様に走り去って行く。

去って行く看守の姿に、ザガンは肩を竦め、牢屋に目を向ける。

すると三人の少女達が、息を殺し冷たい床に倒れ伏していた。

「……何をしている？ いや、それはまさか……死んだ振りというヤツか」

ザガーンの言葉に三人の肩がビクツ、と動くのを彼は見逃さず、牢の施錠を解除する。

「逃げたくは無いのか？」

「……え？ 逃してくるんですか？」

ナナは起き上がり、意外そうに尋ねた。

事実、四魔將軍筆頭が捕虜を逃す行動に出ているのだから、意外も意外だ。

同時にこれは何かの罠なのでは無いかと勘繰ってしまう。

「ナナ、油断しちゃダメだ。もしかしたら罠かもしれないぞ」

身構えるマキアに、ザガンは眼を伏せ静かに語り出す。

「私が忠誠を誓ったのは生涯でただ一人、レオ様だけだ。……そこで提案が有る」

ナナはやはり何か有ると悟りながら、ザガーンの声に耳を向ける。

「我々と共闘し、レオ様と勇者リアを救出しないか？」

ザガーンの提案に三人は、驚きの余り叫びそうな声を抑えた。

ナナはしばし考え込む。

魔王レオはともかくリアの身の安否が心配だ。

しかし相手は——相手は……。

そこまで考えたナナは、戦場で負傷者を気遣い、敵であるはずの騎士団を治療して生かすザガーンの姿を思い出した。

恐るべき魔力を秘めたザガーンは敵である、そうである筈が妙に敵に優しい、いや甘いのだ。

甘いのは自分達も、とナナは小さく笑みを零す。

結局のところ逃げるにしても、魔族の追手を躲し、メンデル領内に到着するまでに障害が多過ぎる。

特に騎士団の救出が見込めない以上、ザガーンと一時的に手を結ぶ必要が有る。

全てはリアと合流するために。

「分かりました、その提案受け入れましょう」

「正気？」

マキアの疑いの声に、ナナは笑み向ける。

「はい、正気です。四魔將軍筆頭が捕虜である私達にわざわざ協力を提案をすると言う事は、それだけルシファーが信用ならない、また強大な魔力を秘めていることは間違いない」



ありません。……私達が脱走したところで何も出来ずに殺されるかも知れませんが、ですから此処はリアさんの搜索を最優先に行動すべきです」

「その為にはザガーンの手を借りるってことだね。……リアの搜索を最優先にするならザガーンの手を借りない手は無いいよ」

マキアはナナとフィオナの眼をジッと見つめ、堅い意志を宿す瞳に、肩を竦め根負けした。

「しようがないなあ……こうなった以上二人は頑固だ。……ただし、妙な素振りを見せてたら……！」

「背後から刺すか、それも良かろう。……お前達、交渉は済んだ、直ちに部下を引き連れ、騎士どもを解放しつつ離脱する」

ザガーンの手を抜いた声に、音も無く二人の四魔将軍が姿を現す。

薄い青の髪、雪を思わせる肌、黒い和装を着こなした美少女——アルティミアが、やっとかと言わんばかりに、愛刀を抱き寄せながら肩を竦める。

子供の風貌をした翡翠色の髪、そして頭部に角が生えた少年——ククルが楽しげに笑みを浮かべた。

その中に四魔将軍ロランの姿は無く、ナナは訝しむも、三人に急がされる形で脱走を開始するのだった。

奇しくも魔王レオの配下と勇者リアの仲間達が互いに手を結ぶ光景に、魔族達は眼を疑い阿鼻叫喚に包まれたという。

しかし新たな魔王となったルシファーが彼等の逃走を許す筈もなく――

## 2—1

世界には街道を進む人々を襲う野盜が存在している。

魔物が蔓延る世界だと言うのに、全くご苦勞な事だ。

賊は何も陸に限った話しでは無かった。

荒れ狂う海原を超え財宝を集める者、あるいは漁船や客船、果ては行商船や貴族所有の船を襲い金品を略奪する者達。

人々は畏怖の念を込めて彼等を海賊と呼んだ。

レオは七十二年程前にセオドラから聞いた話を思い出していた。

なぜ今になって友と語り合った日々を思い出したのか。

それは単純に今がちよつとしたピンチだからかもしれない。

レオとリア、そして何故かゴブリンをも取り囲み、カトラスと銃を構える一団に目を向ける。

薄汚れた白いシャツに所々破けたズボン、頭にはバンダナを巻き、一様にこちらを凝視する者達。

少しでも抵抗の意志を見せれば、トリガーが引かれ銃口から発射される魔弾が人体を

撃ち抜くだろう。

「……何をボケツとしてやがるんだあ？」

「……やれやれいつだつて現実は非情だ」

仮面越しからため息が漏れる。

「あのねレオ、多分私達つて相当ヤバい状況だと思うの。……具体的には身包みを剥がされて魚の餌にされるとか」

これから訪れる顛末を予想したりアから上擦った声が漏れた。

すると、海賊達は一様に笑い出し、

「ククツ、良い反応をする。……そっちの男はどこかで見た悪趣味な仮面だけだよ」

「……うーん、その仮面どこかで見たつてか、お頭が大事に保管してなかつたか？ や、

そんなクソダサイい仮面よりもお頭はまだ来な——っ!？」

クソダサイと言った海賊が背筋に悪寒を感じた、その時だった。

集団が道を開けたのは。

そこに現れたのは、大柄な体軀を誇り右眼に眼帯を付け、海賊帽子を被り威圧感を放つ男性。

そして彼に付き従うペンギン族と赤髪の妙齢な女性だった。

前者の風格からしてレオは彼がこの一団を纏める船長なのだと当たりを付け、ペンギ

ン族に仮面越しから笑みを浮かべる。

「お前はペンギン族のペンゾウだな……壮健そうで何よりだ」

レオの言葉にペンゾウは首を傾げる。

なぜ自分の名を知り、魔界に伝わる種族名を知っているのか。

人間界では魔界から来た者達を“魔族”と総評している。

それをなぜカッコいい仮面を着けた彼が知っているのか、ペンゾウの中で疑問が浮かぶ。

彼は一体何者なのか、声が仮面のせいでぐぐもり判別が付かない。

「……なぜ名を？ それにペンギン族に付いて知っているのか？」

「……ああ、知っているとも。ペンギン族——魔力量が低く戦闘に関してはお世辞にも強い種族とは言い難い。……だが、彼等の戦場は水中にある……フツ、永久凍土に覆われた魔界ではペンギン族が真価を発揮するのは無理な話だろうに」

水中でこそ彼等は高速で動く事が可能で有り、水辺からの奇襲をもっとも得意とし、なおかつ水質調査に長けている。

レオは彼等のそう言った面から魔王軍に雇用したのだ。

「……あれ？ ペンゾウはレオの事を知らないの？」

二人の会話を静かに聴いていたリアが口を挟む。

するとペンゾウは、魔王の名に驚き仰天した。

「レオ？ レオって魔王か？」

「同名じゃない？ ねえアナタはどう感じる？」

「フツ、分かっついていて聴くな」

しかし騒つく海賊達にペンゾウが平静を取り戻す。

万が一本物であれば、魔王レオを討ち取る可能性が出る。

恩の有る海賊達と魔王軍として争いたくはない、かと言って黙って魔王レオを差し出すなどペンゾウにはできなかつた。

例えそれが五十年前に漂流していた所を助けてくれた。命の恩人達であろうとも。

同時に彼が本物という確証も無い。ペンギン族に関しては魔族なら誰でも知つていて当たり前の常識だ。

ただ、偽物と断じるにはあまりにも早計。仮面を外し素顔を視れば分かるが、それは海賊に彼が魔族で有る証拠を突き付ける事にもなる。

「きつと同名、ゴブリンもそう思うだろう？」

「え？ ランドタートルを討伐した時に魔王って名乗ってたぞ」

そこそこ親しいゴブリンに話を振つたペンゾウは、白眼を向いて仰向けに倒れ込んだ。

話を振ったら暴露された。

それ以前に魔王と知っていた事に驚きを隠せない。

だからこそ彼は刹那の一瞬、自己防衛本能によつて気絶を選択したのだ。

仰向けに泡を吹き気を失うペンゾウを尻目に、船長がレオを見据える。

「……魔王レオか。随分バルディアス大陸を騒がせた様だが一体なぜこんな島に居る？

それにその仮面は……」

静かでないながら力強い声が響く。

「この状況も勇者と行動しているのも大変不本意なのだがな。……ああ、この仮面は人目見て気に入つてな、正体を隠すにも適してるゆえ拝借させて貰つた」

「ほう！ そのセンスが判るのか！」

船長は歓喜に打ち震え、レオに右手を差し出し、

「……！ 勇者には不評だったが、ああ！ これはいい物だ！」

レオは彼の武骨な手と固い握手を交わした。

「フツッ！ オレは白鯨海賊団船長グランバだ！ この出会いは何かの縁だろう、それにランドタートル討伐の話も聴きたいしなあ！」

「フツ、俺も人間の中で美的センスに優れた者と出会えるとは幸先がいい！」

レオとグランバの姿に海賊達は愚かゴブリンとリアまでもが呆然とした。

「…………え？ 何か変な仮面で意気投合しちやっただけど…………!?」

「…………ウチの旦那は魔族寄りの美的感覚をしてるからねえ」

呆れ混じりにため息を交わすリアとカトラは、意気揚々と仮面に付いて語り合う二人を眺めることにしたのだった。

周囲の困惑と戸惑いを放置して。



海を照らす太陽の光、穏やかな波が絶好の船出日和だと語る。

積荷を詰め込み出航の手筈を整える白鯨海賊団は、デツキの清掃に勤しむレオとリアに眼を向けた。

出合いは五日前。拠点に財を置き新たな旅の出発点とするはずが奇妙な縁が重なった。

レオは海賊の父親達の代から世話になったペンゾウが仕える主に辿り、そして島そのものだった陸喰いランドタートルを討伐したのが彼ら。

聞けば二人は、バルディアス大陸を騒がす魔王と勇者なのだから衝撃が大きい。

海賊の中でも未だ彼等が噂の人物とは信じられない者が少なからず居るのが実情だ。

「恐ろしい魔王が意気揚々と清掃に励む姿って……俺は歴史の影を垣間見た気がする」

「後の魔王レオ伝記なんかで語られそうで語られない一説か？ それにしても敵対者の筈であるリアちゃんと普通に接してる姿つても異様だな」

掃除の傍ら談笑しては、リアが晴れやかな笑みを浮かべる。

それが戦争を間接的に知る者から見てもどれだけ異常な光景なのか。

下手をすればリアが国家反逆罪に問われかねない。フルフェイス仮面の下に隠された素顔を知っているのなら。

「魔王レオの素顔……面構えの良い男だったな、普段はあんなダサイ仮面を装着してるのは、情勢のせいってのも有るんだろうけど」

「お頭と並ぶとレオの身長は小さく見えるが、お頭は二百センチを超えてるからなあ」  
加工したカメの肉を詰め込む中、海賊の一人が目敏くレオがゴブリンから魔核を受取るのを見逃さなかった。

彼等は遭難した客として船に乗り込む。詳しい事情はグランバとカトレが知っているが、相手は魔王なのだから警戒するに越した事はない。

そんな時だった。レオとリアがグランバとカトレに連れられて船内に入って行ったのは。

レオとリアが通されたのは、グランバの船長室。

壁には白鯨海賊団の象徴とも言える白鯨が描かれた海賊旗と数本のサーベルと銃が飾られている。

中でも一際目を引くのが海図だ。

レオとリアは把握している地図を浮かべ、少なくともバルディアス大陸付近の海図で

はないと判断した。

船長室に置かれた椅子に腰掛けた格蘭バが、ゆつくりと口開く。

「航海の予定だが、お前さんらをバルディアス大陸の港町に届けるだけで良いんだな？」

「ああ、それ以上は何も望まないさ。何せ今の俺達には払う代価が無いんだ」

払う代価の代わりに労働力として働く事でレオとリアは船に乗せて貰った。

船内の清掃もその一環に過ぎない。

「代価ならランドタートルの肉で事足りるんだけどね……いえ、寧ろ多過ぎるぐらいよ」

カトレが苦笑混じりに零す、するとリアが首を横に振る。

「それ以前に私達はログハウスを無断使用してるわ、レオに至ってはフルフェイス仮面を無駄拝借してるからそれとこれは別問題よ。……あと、ログハウスの食料も結構食べたし……それに私とレオはかなりの量を食べるから」

何かを得て、何かを返さなければならぬ。それが人による物であればなおさらだ。

「真面目ね、リアが勇者だからかしら？」

「違うよ、私がそうしたいからそうしてるだけ。勇者は関係無いし、心を偽ったら剣が鈍るもの」

心を偽り誰かを殺したくは無い。偽ってまで殺してしまえば、それは国にとつて都合の良い兵器と同義だからだ。

剣とは心のままに、誰かのために振るうべきものだからこそ真価を發揮する。

カトレは心を欺き、殺戮人形に身を墮とした人物を知っている。

「心を偽る。そうね、それは偽っちゃいけないわね」

昔を思い出し、感傷的な表情を浮かべるカトレにグランバは咳払いした。

「……まあ代価云々は置いといてだ。バルディアス大陸に到着するにも長い船旅になる、その間海賊共と一戦交えるだろう、途中島に寄る事だつて有るが——」

グランバが、『大丈夫か?』、と言いつ終える前にレオが話す。

「魔物から得た魔核が有れば自分の身は自分で護れるさ」

「今は魔力が無いから凄く弱いけど、魔力さえある程度回復すれば大丈夫よ。……でも、変に期待させると悪いから言っておくね、私とレオは普段は激烈に弱いって事だけは覚えておいて」

恥ずかしげも無く真つ直ぐな瞳で今の自分達は弱い、そうはつきりと語るリアにカトレが微笑む。

強がらず無理をしない。できることとできない事を把握している。同時に現状を正しく認識し、隠さずに伝え頼る事を知っている。

それができる人間はどれだけ居るだろうか。

リアの様に真つ直ぐで頼る事ができる人は一体どれだけ居るのか。

カトレは強がり無理をして散つていた海賊達を知っている。

如何に人間は個々では無理で力及ばずなのか、嫌と言うほど理解しているからこそ、リアの姿勢は頼もしいと思えた。

「旦那もこれぐらい素直だったら可愛げがあるのにねえ？」

「……男が惚れた女の前で弱音を吐けるかよ」

不貞腐れ気味のグランバにカトレは愛しみの眼差しを向けた。

「話は終わりか？ 終わりでもいいな、終わりだな！ 俺とリアは清掃の続きが有る故、これで失礼させて貰う」

見てるこつちが恥ずかしくなる様な熱烈な夫婦愛にレオは、退散を選択す。

しかしグランバが呼び止める。

「待て待て！ 何も航海の予定の話だけじゃあない！ お前さんらは白鯨海賊団の客人だ、二人の眼で見て俺達がどんな海賊なのか理解してくれ……話は終わりだ」

海賊がどんなものか、金品を略奪する賊。

レオとリアはそう認識して、略奪行為に力を貸すつもりは無かった。

尤も相手が海賊ならば話は別だ。身を護るために戦うのは至極当然なのだから。

しかし一概に海賊を賊と決め付けるのも早計、自分達は白鯨海賊団に関して何も知らないのも事実。

「そうか、ならばゆつくりと海賊に付いて観察させて貰おう」

「私とレオもしばらくお世話になるわ、だから必要な時はいつでも呼んでね」

そう言つてリアが先に船長室から退室すると、レオがピタリと足を止めた。

グランバとカトレはどうしたのか、と目を向けると。

「……なあ、こんな事を頼むのも筋違いかもしれないが——」

「まだ出航までに猶予は有るが話を聞こう。女の口説き方からいろいろと相談に乗るが？」

リアが一人退室したタイミング。グランバとカトレは恋愛絡みかと考えた。

魔王が人間、それも勇者に恋する。しかし船員の誰が見てもリアは美少女だ。

内面も包み隠さずハッキリと言え、物怖じしない態度に好感を持てる。ただ、それは相手の立場によつては、危うい一面でもあるだろう。

海を旅する白鯨海賊団にも、戦場で聖剣を振るう姿が戦乙女と評される程美しいとも伝え聞いている。その為敵であるレオがリアに惹かれる要因になつたと二人は推察していた。

「口説く？ ……いや、そうじゃあない。頼みというのは他にでもないリアに関してだ」

「男連中を寄せ付けないとかかしら？」

「ん？ いや、彼女にはどうも羞恥心が欠如してる様でな、カトレにはその辺りを教育し

てやつて欲しいのだ」

恋愛絡みとは程遠い。しかし淀みのない真つ直ぐな声にグランバとカトレは困惑を隠せず、

「……魔王と勇者は敵対関係だろ？ それが何故世話を焼く様なマネを……」

「リアがかわいい女の子なのは理解してるけど、羞恥心を教えるつてその必要は有るのかしら？」

上擦つた声で尋ねた。

「二人の疑問は至極当たり前だ。……だが、リアとは今後共に行動する上で余りにも羞恥心に無知で無警戒のアホでは、俺が非常に困るのだ」

心底深いため息を仮面の中で吐き出す彼の姿に、二人はより一層強い困惑を浮かべた。

しかし男が多い船内で生活する以上、羞恥心が無いのも大問題だ。

船内の秩序を護るためには必要な事かもしれない。特に白鯨海賊団には女性船員は”カトレだけ”でレオが頼りたいのも理解ができる。

「それはカトレの専売特許だが……因みにどれぐらい無知なんだ？」

「男の前で平然と服を脱ぐ程にはだな」

「理解したよ。リアに関してはおたしに任せて貰うわ」

「助かる！ この借りはいずれ必ず返させて貰う！」

そう言ってレオは船長室から退室し、程なくして白鯨海賊団は島にゴブリンを残し出航した。

これからレオとリアの長い航海の旅路が始まる。



## 2—3

白鯨海賊団が島を出航してから早くも三日が経過した。

晴々とした天気、穏やかな風が帆に促進力を与え、順調な航海が続く。

そんな中レオは帆を見上げ、

「……やはり自然の風は魔法よりも良いものだな、冷たくも無い穏やかな風が実に心地良い」

感嘆の息を漏らした。

「魔界の風は、身を凍らせ幼子に死を与えますからね」

足下のペンゾウが穏やかな風に目を細めながら、故郷とは大違いだ、と羽を振るつた。

ペンゾウの言う通り魔界の風は、肺を凍り付かせ体温を奪う。

「ゆえに魔族は丈夫に育つのだが……やはり幼子が死に行く姿を見るのはな」

「だから魔王様はドームを建設したのでしょうか？ 火と風で内部に熱を一定量留める施

設……いえ、都市を」

一つのドームを建設するにあたり、障害となるのが魔界貴族だ。

魔界の強者は弱者を庇護する者も居るが、それは少数派であり大半は弱者がどこで野

垂れ死のうが構わない。

魔界貴族などと呼ばれる古い家柄に高い魔力を持った魔族が、当然弱者に金と資材を提供する筈がなく建設に猛反発した。

弱者に金と資材を割く利点があるのか。そんなことよりも領地の魔族に金と資材を割いた方がまだ建設的だ、と。

「アレは百九十八年も前の事でしたね、魔王様が刃向かい謀反に走った魔界貴族達を血祭りにあげたのは」

ペンゾウの言う血祭りは少々語弊が伴うが、レオにとってそれは些細な事柄でしかない。

「一部貴族勢力が軍勢を率い謀反に出る事は察知していたからな、都合が良かったから叩き潰したまでだ」

「……未だ謎なのですが、なぜ魔王様は魔界貴族の謀反を事前に?」  
ペンゾウは同族内で噂話として語り継がれた事を思い出し、思い切って尋ねた。

「……………」

長い沈黙にペンゾウから冷や汗が流れる。

癩に触ったのかと、恐怖心に身体が震える。

しかし恐怖心よりも好奇心が打ち勝ち、沈黙するレオをジッと見上げた。

ペンギン族内の噂では、普段から注意深く貴族の動向を探っていた。優秀な間者を従えている。魔王ともなれば魔法一つで敵の思考を読める、などなど。

ペンゾウは優秀な間者を従えている、という噂が尤も有力説だと考えていた。

しかし魔族は誰しもが曲者揃いであり、自身の力に絶対の信頼を置き真正面から敵を叩き潰す事を好む。

策を弄するより力で策を尽く打破るのが魔族だ、だからこそペンゾウの長年の疑問が未だ晴れない。

「……………ふむ、気になるか？」

長い沈黙の末、ようやく吐き出された言葉にペンゾウは眼を輝かせる。

漸く長年の疑問が晴れるのか、海賊生活を送る傍らずっと気になっていた疑問が魔王自らの言葉で解決する。

そう、ペンゾウは意気揚々とレオに耳を傾ける。

「お前も知つてると思うがな、四魔將軍のアルティミアとロランは魔界貴族である事を」  
着物と呼ばれる和装を着こなし、蒼天の刀身を持つ刀と氷属性魔法を扱う雪羅族の長——アルティミア。

魔王レオと同じ種族の生まれで、珍しく智略を武器に敵を追い詰め最後には、自身の魔力で打ち倒す事を好む狐顔の魔人族——ロラン。

誰しもが知る魔界貴族の中でも伯爵の地位を持つ貴族であり実力者だ。

それこそ先代魔王と苛烈な覇権争いを繰り広げだ程に。

「まさか彼等が内通者だったと？ 同じ魔界貴族の身でありながら？ いえ、ロラン將軍なら魔王様と種族が同じですから肩入れしても可笑しくはないですがね」

力で捻じ伏せる事を至上の喜びとする魔界貴族が、魔王に内通とは意外だとペンゾウは思う。

「……アイツとは同族では有るが同族以上の意味は無いさ。まあ、話を戻すとだな二人は内通者では無いが、放置したところでアルティミアとロランによって謀反は防がれただろう……だが俺は魔王だ、魔王である以上、俺に謀反を起こすのならば全力を持って迎え討つのが礼儀だ」

魔王としての礼儀を語るレオに、ペンゾウは心から震え、

「流石魔族の頂点に君臨するお方ですね……！」

歓喜の声を漏らし、満足気に船内に歩き出すのだった。

立ち去るペンゾウの背中をレオは仮面越しから見送り、

「……結局ペンゾウは俺がなぜ謀反を察知したのか知らないままだったな」

レオは小さく呟き、ペンゾウがその事に気が付き悶々とした日々を送る事に小さく笑みを浮かべた。

ふとレオは本来の役割を思い出し、周囲に眼を向ける。

「……居心地良さに警戒を怠るところだった」

視界に広がる海原、怪しい影は無く島の姿形も見えない。

海中なら魔物が居るが、海の魔物は大型の船は襲わないらしい。

襲つて来るとすれば大物だと船員から聞いた言葉を頭の中で反復させ、水面に眼を向ける。

緩やかな波、時折海中から覗き見る魔物の姿。

太長く爬虫類の眼が特徴的な魔物に、レオは記憶した図鑑から情報を掘り起こす。

「あれは……確かシーサーペントか。元々は未確認生物の総称だったが、リヴァイアサンの存在が確認されてからは、あの魔物の名として定着したという話だったか。

味は……確か最悪で食う事も憚れるほどと記されていたな」

そこそこ大きいシーサーペント。討伐して魔核を得られれば魔力の足しにはなる。

足しにはなるが、今の自分は白鯨海賊団の客人という立場だ。

シーサーペントが襲つて来る気配が無い以上、自ら刺激して戦闘に持ち込むのは違う。

魔王以前に立場を弁えなければならぬ。

レオが、『お前に用は無い』、とシーサーペントから視線を外すと、それは突如起こった。

突如風が止み濃霧が発生して海賊船を呑み込んだのは、一瞬であり前兆も無い不自然極まらない現象だ。

「……濃霧が発生するには不自然、何者かの魔法か？　何か人体に悪影響が出る類いか、いずれにせよ船長に報告が先決か」

レオが船長室に向かうべくその場所を立ち去ると。

「……………」

濃霧の中に映し出される影が——レオの背中を見つめていた。

## 2—4

濃霧に呑み込まれた海賊船は停泊し、レオから報告を聞いたグランバが訝しむ。

「……無風に突然の濃霧発生か」

「俺は海に詳しくは無い、船長ならば何か知っているのではないか？」

「知っているさ、オレに限らず船乗りなら誰でもな」

船乗りの間で有名なお伽話が有る。

数多の海域、世界広しとは言え必ず何処かの海域で起こる怪現象。

魔法による物、自然現象の一種、魔物の仕業と噂れる中、その現象は必ず何処かの海域で一箇所だけで起こる。

海上を進む船を突如何の脈絡も前兆も無く濃霧が包み込み、船はおろか船員が行方知れずとなる古い言い伝え。原因不明で起こる現象に船乗りは濃霧を恐れたと云う。

しかしそれは過去の話であり、現在では濃霧から生還したとある船員が、『霧の中で美しい女性が船ごと攫って行ったんだ』

恐怖に顔を歪ませ語った事から、「ミス・レディ」と呼称された現象だ。

グランバから話を聴いたレオは吐息を吐く。

「魔物か悪霊の類いか、前者なら対処は簡単だが悪霊は厄介だな。……連中は生者の魂を喰らい、悪霊に魂を喰われた者は悪霊と成り果て、肉体はグールとして蘇る」

「ああ、実に厄介だ。一人が悪霊に魂を喰われちまえば、そいつは倒すべき魔物に成り果てるが……オレ達人間は頭で理解してるが、仲間だった者を手に掛ける事に躊躇しちまう」

「……それが人間の脆さでは有るが美德でも有る」

敵であれば殺し、時には生かして利用する。

味方であれば利用する。

そこに善悪の価値観も情もない種族が魔族だ。しかし稀に突然変異か何かで人間の様に甘い気質を持つ魔族も少なからずいる。

例として挙げればザガンが当て嵌まるだろう。

彼と比べて魔族の情の無さにレオは小さく息を漏らす。

情や愛情を知らない、故に魔族という種は長くは無い。いずれ闘争の果てに種は滅びるだろう。

「魔王のお前は、仮にオレ達が悪霊と成り果てたならばどうする気だ？」

「……」魔王として殺す。躊躇いも慈悲も無く問答無用で殺す。魔物と成り果てた者を情で生かせば、生き残った者に被害が出るだろう？ ならば民を守るためならば情



「はかけない」

「魔族の様に即答できる判断力が有れば、どんなに気が楽か。まあ、オレも海賊の船長だ、そんな事態に陥れる様な真似はさせない」

「では船長としての采配に期待しよう。……それで俺は何をすれば良い？ 魔核を砕き魔法で濃霧を散らすか？」

「濃霧の発生原因が分からん以上それは避けるべきだ。お前とリアにとつて魔物の魔核は生命線だろう？ そんな貴重な物を無駄にさせるほどオレ達は弱くはない」

ニヤリと猛将な笑みを浮かべるグランバにレオは仮面の下で邪悪な笑みを浮かべた。

「ならば」

「ああ、『ミスト・レディ』の討伐を白鯨海賊団が成そうじゃあないか……！」  
 覇気が宿った声が船長室に響き渡った。

グランバの指示で船員は戦闘態勢を整え、甲板に一塊に集まる。

何処から来るかも判らない敵に、一箇所に集まり奇襲に備える。

そんな時だった、無風の中で勝手に船が動き出したのは。

「状況確認！ 報告！」

グランバの一声にペンゾウが海中から飛び上がり、甲板に着地した。

「あ、姿が見えないと思っただら海中に居たんだ」

リアの声にペンゾウは小さく頷き、グランバに告げる。

「海中に異常無し、魔物の姿形もありやせん」

「ミスト・レディの姿は確認できたか？」

「それもありません……船は何処に向かつて？」

「根城か、それとも恐怖心を煽るためか。いずれにせよ警戒は怠るな、油断が命取りとなると知れ」

船員に振り返り、グランバの鋭い声が響く。

レオは密かに懐の魔核に手を忍ばせ、リアに視線を向けた。

「ん？ 何か言いたげな感じ……ああ、うん、理解したよ」

仮面越しに一体どうやって意思疎通を交わしたのか。近場の船員が呆気に囚われていると、

『うふうふう、ふうふうふう』

濃霧の中から透き通るような女性の声が周囲から反響した。

何処から発している声なのか、濃霧の中では姿が見えず船員は恐怖に顔を歪めしきりなしに周囲を見渡す。

「カトレ、笑ったか？」

「あたしじゃないよ、リアじゃないのかい？」

「私でも無いわよ。あれね、レオが仮面越しなのを良い事に声真似で悪戯してるのよ」  
物怖じしない三人の言葉に、グランバが吹き出し、次第に船員達が釣られて笑いはじめる。

こんな状況で洒落を言うのだから、船員達の張り詰めた緊張と抱える恐怖心が自然と和らぐ。

すると、冷たい風が周囲一帯に吹き荒れた。

「……ねえ？ ミスト・レディは何がしたいのかしら」

「恐怖を与え十分愉しんだ後に一人一人喰らう算段か」

「うーん、そもそもミスト・レディってなんなの？ 魔物、悪霊って言われてるけど元々はなに？」

「……ふむ、何か知らないか？」

リアの言葉にレオが全員に問い掛けると、全員一様に首を傾げた。

グランバでさえ、ミスト・レディがそもそも何が原因で誕生した悪霊か理解していなかった。

「……そういえばミスト・レディに関してはお伽話として語り継がれているけど、何がどの様にして誕生したのか全然判らないわね」

過去に船乗りが襲われ被害が出ている以上は敵意が有る。

しかし一向に襲い掛からないのは何故か。

「悠長に話している場合では無いが……ここには魔王と勇者が居る、つまり悪霊にとつては極上の餌に見える訳だが……」

そもそもミスト・レディは本当に悪霊なのか、と疑問が芽生える。

それぞれが疑問を抱える中、ミスト・レディがその日に姿を現す事は無かった。

## 2—5

濃霧に包みれ船が突き進む中、レオ達は警戒したまま船内での生活を余儀無くされることに。

濃霧発生から初日、ミスト・レディは結局一度も姿を見せる事なくその日を終えた。そして二日目の今日。

レオとリアは、食堂で船員達と談笑しながら食事を摂る一人の少女に訝しんだ。白いワンピースに色白の肌と人間には珍しい長い白髪を揺らす女の子だ。

「……む？ あんな子は居たか？」

「どうだろう？ 最初から居た様な気もするし、そうじゃない気もする」  
違和感が二人を襲う。

島を出航して今日までの記憶を掘り起こす。すると、

『ねえ魔王ってどんな事をするの？』

無邪気に問い掛ける少女の言葉が過ぎる。

『ねえリアお姉ちゃんは どうして強いなの？』

レオに質問した様に無邪気に問い掛け、屈託の無い笑みを浮かべる少女の姿が浮か

ぶ。

ただ少女に対してどんな返答を返したのか、昨日は何を一緒に食べたのか記憶から抜け落ちている。

「……ああ、確かに居た、か？」

「うーん、なんだろうこの違和感」

違和感に首を傾げる二人に、少女が気が付き無邪気に駆け寄る。

「レオ、リアお姉ちゃん！ 一緒にごはんたべようよう！」

そもそもこの少女の名は——ミディア。

何故直前までミディアの名を忘れていたのか、疑問が浮かぶ。

レオは配下全員は愚か魔界の民の名を全て記憶している。

中には自らの手で殺した者の名も記憶していた。

記憶力にちよつとした自信があつたレオは、その事に小さくショックを受けた。

人間の歳で言えば化石同然の時を生きているが、ボケるのはまだ早いと。

「どうしたのレオ？」

考え込むレオに小首を傾げるミディアにリアが微笑む。

「うーん、多分レオはミディアの名前をド忘れしちゃったんだと思う。ほら、レオって人間で言うところの化石同然だから」

「そんな……名前を忘れるなんてひどいよ！」

ミディアの今にも泣きそうな声に、食堂に居た船員達から非難の目が一斉にレオに向けられた。

なにかわいい女の子を泣かせているんだ、と。

「むう、魔族の中では若輩者も良い所なのだが……いや、すまんミディアよ、うっかり記憶から抜け落ちていた様だ」

「いいよ、レオはおじいちゃんだから特別に許してあげる！」

「そうか、俺はおじいちゃんか」

困った声が仮面越しから漏れると、ミディアがレオの画面に小さな手を伸ばす。

「お外はは霧だらけで少し蒸し暑いのに、レオはへいきなの？ その仮面取ったら？」  
「いや、平気だ。しかしこの濃霧は一体いつになったら晴れるのか」

「うーん、わかんない！ それよりもごはんたべようよう！」

レオとリアは本来の目的を思い出し、ミディアが座っていた隣の席に着く事にした。

それから出された生魚の刺身と白米に、壊血病の予防として生野菜とラム酒を平らげると、

「魚を生で食えるとは不思議だったが、慣れると良い物だな」

「本当ね。私もこの船に乗ってからはじめて生で食べたけど、脂が舌に解けて美味しい

わね」

二人の感想に近場で焼き魚を食べていたペンゾウが、苦笑を浮かべる。

「魔王様も勇者もよく平気で生で食べれますね」

「逆にペンゾウは生魚を丸ごと一匹食べそうな感じがするんだけど」

ペンゾウを揶揄うリアに船員達が小さく笑う。

等の本人は、ほっとけと言わんばかりにラム酒を飲み込んだ。

「ペンゾウはどっちかって言うとな料理を好んで食べるからな」

「鳥っぽい風貌の魔族が鳥肉を喰う姿つても……いや、不思議じゃないか、カラスだって鳥食べるし」

「それは無理も無い事だ。魔界には魚など生存して居ないからな、野菜なんかは先ずあの極寒の環境では育たん。だから魔族は必然的に肉ばかり喰うのだよ」

レオの言葉にリアと船員達は健康に悪そうな食生活と雑に焼いた肉料理に苦笑を浮かべる。

それでもリアがこれまで交戦した魔族達は全員健康的で逞しい肉体を保っていた。

不健康極まる食生活で一体どうやって健康体を維持しているのか、疑問を感じざるおえない。

とは言え、この男に聴いたところで、『魔族とはそういう種だ』の一言で片付けられ



てしまうだろう。

リアは疑問を呑み込み、ハンカチを取り出して、ミディアのソースで汚れた口周りを拭き取った。

「わっ！　ありがとうリアおねえちゃん」

「うん、折角の綺麗な肌を汚すのは勿体ないからね」

微笑ましい光景のふと誰かがポツリと零す。

「レオとリアちゃん、そこにミディアが並ぶと親子に見えなくもないな」

「あー、レオとミディアの髪は白髪だしな、目の色はリアちゃんと同じで青い……もしかして二人の子か？」

船員の言葉にレオとリアから呆れたため息が零れる。

「そんな訳ないでしょ。私とレオは敵同士なのよ？　第一私にこんな大きな娘はいませんよ」

「同感だ。俺には子は居ないし、仮に居たところで」何の感情も浮かばん……そもそもリアと俺が？　馬鹿な事は滅多に言うものではない」

「悪かったって……うーん、それじゃあミディアは誰の子なんだろうな」

一人の船員の何気ない言葉がレオ達の頭に酷く反響した。

違和感を覚えつつレオはぐぐもった声で告げる。

「家族という概念は知らないが、グランパとカトレの娘ではないのか？ 確かに二人とは似ては無いがな」

「そりゃあ有り得ないさ、お頭と姉御にはまだ子は居ない」

「あれ？ そういえばミディアは海賊船から救出した子供じゃなかったか？」

「いや、違うだろう。確か、海を漂流している所を——」

「いやいや、亡くなった船員の娘——」

「確かにアイツらは死んじまったが、子供は陸地で行商人見習いをしてるはずだろ」

次々と食い違う記憶。

この場の全員に記憶の混濁が起こっているのか。レオとリアは顔を伏せるミディアに目を向けながら疑念を浮かべた。

そもそも、何故古くから乗船している船員達がミディアの素性を把握していないのか。

そこでレオとリアがペンゾウに視線を向けると、

「あれ？ ……そもそも子供なんて最初から乗船していたのか？」

疑念を呟く。その時だった。

「みんなひどい！ どうしてそんなひどい事ばかり言うの!?!」

椅子を蹴り、涙を流しながらミディアが走って食堂を去っていたのは。

その場に残された船員達は罪悪感から深いため息を吐き出した。

「……流石に軽率だったよな」

「ああ、やっぱりあの歳ぐらいの子供には、誰の子なのか、どこから来たのか全員忘れてるってのは酷だよな」

「……全員忘れている。そもそも俺達は忘れているのか？ 俺達は昨日まで何に警戒していたか、覚えているか？」

「あ？ そりゃあ……濃霧の中を進むんだ。座礁や海賊船、航路のズレだろ」

「……昨日まで俺達が警戒していたのは……ん？ ……何を警戒していたのか思い出せないが、決して座礁や海賊船では無い筈だったのは確かだ」

食堂に足を運んだ際には確かに覚えていた記憶の一部分が抜け落ちていく。

レオとリアはその事実にも、何者かが記憶を操作しミディアを最初から乗船していた白鯨海賊団の少女」と認識させていた、と至る。

ミディアと名乗る少女は一体何者なのか――

## 2—6

「ミディアー？ さつきはごめんね！」

食堂を後にしたリアは、霧がかかった甲板で彼女を捜すと。

「……もう怒ってないよ」

樽の横からひよっこりとミディアが顔を覗かせた。

そんな彼女の愛らしい仕草に笑みが零れる。

彼女は何者なのか、濃霧は一体いつ晴れるのか気にすべき点が多いが、彼女の愛らしい姿の前にそんな事は瑣事さじでしか無いのかもしれない。

きつとレオにそんな事を言えば、彼は呆れるか何かしらの反応を見せるだろう。

「リアおねえちゃんは、いつもレオのことばかり考えてるんだね」

「えっ？ そんな事は無いと思うけど、よく分かったねレオの呆れ顔を想像してるなんて」

「うん、レオ以外の考えてる事は分かるよ」

ミディアは真っ直ぐな曇りの無い瞳でそう語った。

幼い娘が他者の思考を読めるというのは、観察眼が優れているという事なのか。

それとも音に聴く魔族の悟り族なのか、単に特殊な魔法の使い手なのか。

あるいは過去に必要に迫られて身に付けた技能なのか。

「ミディアは凄いな、私は他人の考えなんてあまり理解はできないわ」

「すごいのかなあ？ でもレオは何を考えてるのか分かんない。何かを考えてるのは分かるんだけど、すつごく複雑なの」

「複雑？ や、レオの思考を読めること自体が充分すごいことなんだけど」

以前、国家魔法使い達がレオの思考を読み取り、戦略を覆そうと試みた事があった。

しかしレオは思考を読まれていると理解した上で、全く戦略とは関係ない温泉に付いて詳細に語る始末。

普段激務に追われている国家魔法使いの士気は一気に低下するという目も当てられない結果に終わった。

そういうえば、勇者に任命されてからゆつくり温泉に浸かる暇も無かった、トリアは思いうす。

その間レオが優雅に温泉で寛いでいると思うと腹立たしい事この上ない。

「……思いうすだけで腹立たしいわね」

散々振り回された身として眉間にシワが寄る。

恐らくは彼の配下も同様に振り回されているのだろう。

現に魔王城で相対した時は、本来玉座で待ち構えているはずのレオが広場に居た。

あの時は度肝を抜いたし、何処の世界に魔王が攻城戦中に城内を彷徨いエンカウントするというのが。

ミディアはリアの様子に笑みを浮かべ、彼女の手を握った。

ひんやりとした小さな手が、暖かな温もりに包まれミディアの頬が緩む。

「リアおねえちゃんは暖かい。……ねえ今日は、その、カトレおねえさんも混ぜて、えつと、一緒にお風呂に入ってくれる？」

遠慮気味に上目遣いでお願する無垢な少女の頼み。

彼女の頼みを無碍にできようものか、例えそれが疑念を感じさせる少女だとしても。

「いいよ！ でもカトレには一度聴いてみないとね」

「ほんと！ じゃあレオも混ぜるのは……」

「そ、それは……ダメよ」

レオと一緒に風呂に入る。それは異性としても無理な事だ。

以前から何とも思わず二つ返事で承諾したかもしれないが、それは異性の違いに無知だったからだ。

だが今は違う、カトレの人には言えない授業により自分はある程度の知識を身に付けた。

改めて振り返るとレオに対して恥ずかしい行動を何度かしている。

リアは頬が火照るのを感じながら、ミディアの肩を優しく掴む。

「良い？ カトレが言うには男はみんな獣だからかわいミディアに牙を突き立てないとも限らないわ」

「えっ、えっ？ そ、そうなんだ。……みんな獣、魔物？ 恐いの？」

「あー、えっと、魔物じゃないけどいつか理解することよ。私はちよつと理解するのが遅かったけど、ミディアはまだ間に合うわ」

「うん、分かった。それじゃあカトレの所に行こうよ」

ミディアに手を引つ張られながらリアは、カトレの下に向かった。

船内の風呂場は湯気が立ち込め、リア達の身体を包み込む。

熱すぎない丁度いい温度にゆっくりと寛ぐ三人から息が漏れる。

「ふうくやつぱりお風呂は最高。最初は船旅なんだからお風呂には期待できないと思つてたけど」

船員の衛生管理上の問題として、直面するのが航海中による不衛生だ。

不衛生による菌が傷口に入り、化膿する例や病に対する免疫力低下が免れない以上航海には風呂は欠かせない。

「あたしは女だからね、やっぱり身なりに気を使うのさ。それに船員の衛生管理にも繋がる……まあ簡単に湯を沸かせられるのも魔法の恩恵が有ってこそだけだね」

「水属性魔法で水を召喚して火属性魔法で温める。理に適っているけど水はどうやって生成してるのかしら？」

「水属性魔法の使い手から聞いた話だけだね、大気中の元素を水に魔力を加えて生成してるとかなんとか」

「……はふう……魔法ってすごい」

湯船に頬まで浸かったミディアが気の抜けた声を上げ、パシヤリと頬に湯を掛けた。

彼女の言う通り魔法は兎に角便利だ。魔法が無い生活など考えられない程に人々に魔法生活は浸透している。

家事に戦闘から生産、調合から治療まで魔法頼みだ。

だからこそリアは、魔力が回復しない現状に焦る。

もどかしくて魔力が無ければ無力な少女でしかない現状に、深いため息が漏れた。

「私って本当に無力。……魔力さえ在れば濃霧なんて一振りで吹き飛ばせるのになあ」

「魔力が回復しないってのは不可思議な話だけだね……王立魔核研究所に行ってみたらどうだい？」

カトレの言葉にリアは、眼鏡と金歯を光らせニヤリと笑う博士を思い出し、苦虫を噛



み潰したような表情を浮かべる。

「……何度か国王様命令で王立魔核研究所には足を運んだけど、人を実験生物としか思わない連中よ？ そんな場所にレオと行ったら……レオが研究所を吹き飛ばすわ、うん、絶対跡形も無く葬り去るわね」

予感ではなく確信を述べるリアにカトレが興味深そうに眼を細める。

「へえ随分とレオの事を理解してるわね」

「私が仮に魔王の立場だったら、あんな場所は破壊するわよ。……それだけ連中は外道だし、滅ぼされても仕方ない事を裏でコソコソとしてるんだから」

「どんな事してるかは……今は敢えて詮索しない方が良さそうだ」

「……あれ？ リアおねえちゃんの考えが読めない？」

先程まで読めていた思考が突然読めなくなった。その事に不思議に思うメディアにリアが微笑む。

「私は勇者だから、思考を読ませないようにするなんて造作も無いことよ」

「……さつきまで魔力が無いと不安がってた少女とは思えないわね。というか魔法も使わずに一体どうやってたらそんな芸当ができるのかしら」

「うーん、思考を読むという事は心を読むと同義。だから無心になり何も考え無ければいいの、ほら何も考えていないんだから読めるものも何も無いでしょう？」

「……それはそうだけどね、ミディア？」

「……リアおねえちゃん、本当に何も考えてない！」

リアの考えを読もうと目を向けると、彼女は本当に何も考えていない。

頭の中は虚空だが微笑んでいる。

と、長湯に浸かり過ぎたミディアの視界が僅かに歪む。

「ああ、ミディアはそろそろあがった方がいいわね」

「うん、そうする。……リアおねえちゃん、カトレおねえさんまた一緒に入ろうね！」

「ええ、明日にでもまた一緒に入ろう」

リアの言葉に小さく、『約束だよ』、そう呟き浴槽からあがり、ミディアは脱衣所に向かった。

小さな背中を見送り、また一つ約束事が増えたとリアははにかむ。

すると、カトレが静かに問う。

「あの子は何者だと思う？ グランバも違和感を感じてミディアを警戒している。この濃霧もそうだ、あの子は——」

敵なのか。その言葉をカトレは呑み込んだ。

純粹無垢な少女が敵な筈がない、そもそも濃霧の中で少女を刺客として送り込む敵団に心当たりが無い。

「……この後部屋に戻って日記を読み返してみるけど、ちよつと状況に対してゆつくり過ぎかしら？」

「まあ記憶の一部が改竄され、濃霧の中を船が勝手に進んでいるんだ。そろそろ動かないと危ないかもしれないね」

「あの子に直接聞けば楽なんだけど……」

直接聞いたところで答えてくれるとは限らない。そもそもミディアが記憶を改竄した証拠が無い。

魔法を使われたのなら必ず術者に痕跡が残る。魔力の残滓が術者の周囲を飛び散るのだから一目瞭然だ。

だが、ミディアからそれを確認できない以上は疑いの段階に有る。

「疑心暗鬼で壊滅するなんて起こって欲しくは無いわね」

「その場合真つ先に疑われるのはレオとリア……二人は新参者だからね」

「魔力が無いけど魔力を回復させる方法は有るからね、疑われても仕方ないわ」

「おや、少しは焦ると思っただけ」

「自分とレオは犯人じゃないって確証が有るからよ」

カトレは興味深げにリアの言葉に耳を傾けた。

一体彼女はどんな方法で否定するのか。

「だってレオが所持している魔核は一つだけなんだから。それに相手は魔王よ？ 記憶を改竄する程度で済まないわ、仮に私が記憶を改竄するとしたら先ず無理ね。そんな高度な魔法を私は扱え無いし、扱うメリットが無いもの」

やった、やってないという証拠は無いが、カトレにはリアとレオが白だと判断するには十分だった。

そもそもレオとリアが自身を含めた船員の記憶を改竄する根拠と得が無い。損得で考えれば、船を降ろされるデメリットしか無いのだから。

「よく分かったよ。いや、疑うまでも無かったね」

「でも現状では疑いを持つ事は必要な事よ」

「……まあ明日にでも成れば旦那が動くと思うけどさ……もしも——な結果になつたとしたらリアはどうする？」

カトレの言葉がリアの耳に木霊し、こびり付いた様に頭から離れない。

リアは呆然と彼女が湯槽からあがり、立ち去り姿を眺めることしかできない。彼女の言葉に身体が硬直し、思考が止まったからだ。

「えっ……ああ、えっ？ それって——」

漸く動き出した思考に声が震える。

カトレの残した言葉が頭の中で酷く反響する。

決断を迫られた時、自分は動くことが出来るのか。リアは湯船に沈み思考の渦へと堕ちた。

## 2—7

船長室では静かな空気が流れ、ミディアが息を呑み込んだ。

フルフェイス仮面のレオが壁際で佇み、船長椅子に座りこちらを見下ろすグランバに、ミディアは怯えた。

「何もとって食おうってわけじゃないんだぞ？」

「船長、流石にそれは無理がある。俺達を前にして年端も行かない少女が対面してうまく話せると思うのか」

厳格に努めるグランバにレオは、呆れ混じりに肩を竦めた。

事実、呼び出されたミディアは肩を震わせ怯えているのだから、明らかに悪人はこちらだ。

「それでもだ。船長としてミディアに聴いておかなきゃなんねえ。こっちは船員の命を預かる身だ、お前も理解はしてるだろう」

立场上そうせざるおえない。例えそれが少女に不安を抱かせ、怯えさせることであっても。

たった一人の少女と船員五十二名の生命。優先すべきはどちらか。

誰一人取りこぼさない選択が取れるのなら、そうした事に越したことはない。

だが濃霧と記憶操作の痕跡から、誰かを疑う他に方法が無いのも事実。

レオは状況と立場に理解を示した上で、事の成り行きを黙認することにした。

「……とここで……俺は必要か？」

黙認することにしたが、これだけは問わなければならなかった。不要であれば船内の清掃に移りたい。

「お嬢ちゃんは随分とレオとリアに懐いている印象だったからな。それにな？ オレは

強面だ、お嬢ちゃんを泣かせない自信がねえんだよ」

「なるほど、一定の配慮だったか」

グランバの配慮を無駄にしないためにも、レオはフルフェイス仮面を取り外し脇に抱えた。

感嘆の息が漏れ、グランバとミディアは勿体ないと言いたげな眼差しをレオに向ける。

そんな眼差しを向けられた所で対応に困るし、人間と無駄な争いを避けるためには仕方ない処置だ。

「……先ずお嬢ちゃんに聴きたい。お嬢ちゃんはいつからこの船に乗船した？ その経緯を教えてください」

「……忘れちゃったの?」

哀しげな声にグランバの眉が深まる。

ミディアの哀しそうな表情がグランバの良心に訴えかける。

どうして年端も行かない少女にそんな事を訪ねるのか、と。

「……忘れたつてよりは記憶に大分食い違いがある。それが一人だけならまだしも全員だ、全員が記憶に食い違いがあるつてのはおかしな話だろ? だからお嬢ちゃんの疑いを晴らすためにも教えてくれ」

「……………うん、いいよ。わたしが乗船したのは去年の春だよ。白鯨海賊団が海賊船から救い出してくれたのを憶えてる?」

去年の春。確かにグランバには少年少女を海賊船から救出した記憶が有る。

しかし八人居た少年少女の内七人は、家族の下へ帰した。残りの一人は元々病を患っており、適切な治療が間に合わず船内で静かに息を引き取った。

だからあの時救出した少年少女は誰一人この船に乗船している事は無い。

グランバは眉を寄せ、ミディアの正体に行き着く。

「お前はまさか……………まさか、あの時のお嬢ちゃんか」

「うん……………わたしは本当はもう死んでる」

正体が判明したミディアの体が先程までとは違い、人の身体から霊体へと変貌した。



彼女の姿にレオは尋ねた。

「悪霊の類い、には見えないが……」

「ううん、海上で不幸な死因を告げた子供達ってね、ある悪霊に取り込まれる。わたしはその悪霊から零れ落ちた僅かな欠片」

「悪霊の中に僅かに残った善意……いや、清らかな靈魂と言うべきか。オレはその方面に明るくは無いがな……しかしその悪霊には覚えが有るが、どういうわけか思い出せねえ」

「あの悪霊は記憶を弄って、近付いて魂を食べちゃうから」

その悪霊は一体なんなのか。レオが口を開きかけたその時だった。

バン！ と勢いよくドアが開かれ、リアが手記を片手に、船長室に乗り込んで来たのは。

三人の会話を船長室の外から聴いていたリアは、ミディアの姿に驚きはしたものの、彼女に微笑んだ。

「その悪霊ってミスト・レディで間違いない？」

そしてリアは、昨日から今日に至るまでの日記を指し示すと、そこには確かにミスト・レディに付いて書き記されていた。

濃霧の発生原因と警戒態勢に入った事も全て。

「……記憶を弄られたが、文字による記録は弄れなかったのか」

「アレはそんな生易しい悪霊じゃないよ?」

レオとミディアの言葉にリアは胸を張った。

「ふふん! 私の羽ペンはフィオナのお手製でね、この羽ペンで書き記した記録を捻じ曲げることは不可能なの! 詳しくは知らないけど!」

レオは一眼でその羽ペンに事象防護魔法が施されている事に気が付く。

高度な魔法であり、あらゆる事象干渉から護る事に特化した概念結界の一つ。

しかしその羽ペンで書く事で発動する様に限定的な呪文が施されているため、効果はほんの一部に過ぎない。

だが人間が事象防護魔法を発動させるには、消費魔力があまりにも凄まじく実用性に向かない。

だから彼女の仲間フィオナは、魔力消費そのものを抑え、”羽ペンで書いた文字に限定させて”事象防護魔法を発動させたのだ。

「……是非とも魔王軍に欲しい人材なのだが」

「ダメよ、あの子は私の大切な仲間なんだから!」

威嚇するリアにレオは、ここは本人と直接交渉すべきと考え、グランバに目を向ける。

「……ああ、そうだ! そうだった! ミスト・レディ! オレ達はヤツを警戒していた

！」

「ソイツを倒せば万事解決ってこと？ ただ倒せばいいの？」

「うん、魔法で倒せるよ。……もうミスト・レディに誰かの魂が食べられて壊滅していく様を見たくないの。だから、あの子達を終わらせてあげて」

「……あの子達を、か。……つまりミスト・レディは子供達の無念を喰らい取り込んでいと認識しているのだな」

「うん、レオは賢いね」

儂く微笑むミディアの姿に、レオは口を閉ざした。

「ん？ なんの話かは知らないがお嬢ちゃんは、ここで隠れていなさい」

「うーん、違和感はあるけど、一先ず目先の事を解決してからだね。ミディア、大人しくしててね」

グランバとリアが、ミディアに此処に隠れている様にと言い含めると、二人は船長室から駆け出した。

「……お前はそれで良いのか？」

「良いんだよ。これで、良いの」

先程までの元気な笑顔は無く、今のミディアには感傷と薄れゆく体だけ。

一度悪霊に取り込まれた靈魂が零れ落ちるといふ事は、その時点でミディアの魂の僅

かな残りではない。

「……疑いを持ち接したことはすまなかつたな」

「それはもう良いんだよ。レオ達があの悪霊とわたし達に気づいてくれたから」

彼女を救う方法はもう無い、彼女は既に死を迎え魂を悪霊に取り込まれた。

万能と謳われる魔法を持ってしても、死者を蘇らせることは出来ないし、時間を遡る事も不可能。

例え女神であろうとも、それは絶対に覆せない万物の法則。

「そうか。……」向こう”では達者でな」

「うん、リアよろしくね」

彼女に別れを告げたレオは、船長室を立ち去る。悪霊を自らの手で討ち取るために。

## 2—8

グランバの一声で船員が甲板に集うと、濃霧の中から一人の女性が甲板に降り立つ。  
「今日は」馳走よなあ」

貴婦人の様な服装にスラツとした手足、身長が百六十程度。

だが船員はその人物の素顔に息を呑んだ。

「ここ、こいつが!? こいつがミスト・レディなのか……!!」

「お頭から粗方話は聴いたが、よくも記憶を改竄してくれやがって!」

「コイツを倒せばミディアは救えるんだな! やってやる、やってやるぞ!」

猛る海賊達が各々の武器を携え、リアも彼ら同様聖剣ゼファールを抜刀した。

あとから遅れて甲板に到着したレオが、興味深げな眼差しを向ける。

「ほう、噂とは存外宛にはならん様だな。……あの骸顔の何処が美しい女性と言うのか」

レオは魔剣フェルグランドを構え、左掌で魔核を遊ばせる。

「レオ、やるんなら共闘でしよ?」

リアの言葉にレオは、首を横に振った。

それは明確な拒否であり、共闘はしないという意思表示には十分な効果がある。

「……一人で倒すつもり？　そうするだけの理由があるの？」

「……あるとも、記憶を改竄された。魔王として充分過ぎる程の理由だ。故に自らの手でアレを滅しなければ気が晴れん」

「あら一体何を考えてる？　あたし達の手を借りずに魔核を消費してアレを倒すのに、一体何の意味があると言うのかしら」

カトレの言葉にレオは、仮面の下で笑みを浮かべる。

魔核を消費する意味など無ければ、グランバ達だけで充分対処可能の範疇だ。

しかしそれは、真実を未だ知らないからだ。

真実を知ったところで多少の犠牲で済むが、それではあの少女が報われることは無いだろう。

「その意味は俺が決める事だ。どんな誹りだろうとも甘んじて受けよう」

その言葉と同時にレオは、ランドタートルの魔核を躊躇なく砕く。

魔核の魔力を体内に取り込んだレオから、闇の魔力が溢れ出す。

魔力の回復により魔剣フェルグランドの錆が取れ、漆黒の剣身がわずかに蘇る。

「半分も回復してないのに……この威圧感、恐ろしいわね」

魔王の威圧感が周囲に解き放たれ、海賊達が戦慄した。

アレでまだ半分も回復していない。現時点でグランバと同等の魔力だと云うのに。

それでも半分以下となれば、全快時は一体どれだけの魔力量なのか。

海賊達はレオの威圧感から、巻き込まれない様に退がるほかになかった。

「……船長として不甲斐ないが、ここは任せていいんだな?」

「うむ。だが、ミディアの守りは頼んだ」

「野郎ども聴いたな? オレ達の仕事はかつて救えなかった少女の魂をあゝの悪霊から守ることだ!」

グランバの掛け声に海賊達が武器を天高く携え叫ぶ。

「「「うおおおおおー!!」」」

海賊達は素早く船内の入り口に守りを固め、魔力防壁を張り巡らす。

「これなら多少暴れても被害は無いだらうが、炎は使うなのよ?」

「……木造とは難儀なものだな」

レオはゆっくりと魔剣フェルグランドを片手に、ミスト・レディに歩み寄る。

リアの目には彼の後姿が何かを決意した者の背中に見えた。

それは目の錯覚か、それとも彼は何かを決意しているのか。

レオの様子がおかしいのは、甲板に来てからだ。一体ミディアと何を話し、何を隠しているのか。

しかしレオは、それに決して答えようとはしない。

共闘の関係では有るが、隠し事を共有できないのはお互いに、まだ信用できないからだ。

元々敵同士。それも仕方ないが、リアから深いため息が漏れる。

「レオ！ 事情はよく分からないけど、何が有っても私はあなたを信用するわ！」

それが例え取り返しが付かない事だろうとも。

彼の背中が語る決意を信用することに、何の迷いもない。

リアの言葉を背に、レオはミスト・レディとの距離を詰めた。

「さあ、喰らい尽くした子供達の報いを受けるがいい」

「報い？ 報いですって？ 弱肉強食の世の中で何を言うか！ 子供の魂もお前達の魂も等しく妾の晚餐よ！ さあ！ 妾の僕よ、彼奴を喰らい尽くせ！」

骸を軋ませ、濃霧の中からの二十ものグールを召喚し、更にミスト・レディが両掌から炎の塊を作り出す。

燃え盛る業火、振り撒かれる火の粉が甲板に焦げ跡を刻む。放たれたら船の炎上は避けられないだろう。グールどもが殺到する中、そんな事を考えたレオは姿勢を落とし、

歩法魔法技——【縮地】を駆使し回転を加えた一閃でグールどもを斬り裂く。そのま



まレオはミスト・レデイの懐に踏込み。魔剣フェルグランドを右薙に一振り。

闇の波動が業火を風前の灯火の如く掻き消し、咄嗟に左後方に跳ぶ彼女。

しかし、それは悪手だ。広がる闇の波動を避けきれずミスト・レデイの右腕を呑み込んだ。

「うぐあああーツツツ!!」 妾の腕がッ! 妾の腕がああッ!!」

海賊達が異臭に眉を寄せ、目を疑う。

そこにはミスト・レデイの右腕が闇に溶かされ、零れ落ちる光景が映り込む。

グールは数こそ多いがゴブリンに毛が生えた程度の強さ。レオが瞬殺したことに驚きはしないが、ミスト・レデイの状態に海賊達は驚きを隠せない。

「溶かしちゃいまいやがった……リアちゃんは、アイツと死闘を繰り広げていたのか」

「そうだけど、レオの魔力属性は闇。炎と風も混ざってはいるけど、闇である以上は光属性で相殺可能だから何とか対抗はできるわ」

「そもそもレオの……アレは魔法なのか? 詠唱なんかしてないだろう」

「……無詠唱で魔力を節約してるみたいね。第一レオの扱う魔法は消費魔力が大きいものばかりらしいわ。ちなみに今のは魔法技——【常闇ノ溶波】ね」

質問に答えたりアは静かに戦闘の様子を見定める。そんな彼女に海賊達は例に倣いレオを見つめた。

魔王の力の一部、それを観れるだけでも意義が有る。

喚き散らしたミスト・レデイがレオを睨む様に、骸顔を向ける。

眼球と表情筋が無いため、感覚的に怒りを露わにしていると判断するほかにない。

レオは止めの一撃を放つべく、魔剣フェルグランドに闇を纏わせ上段の構えを取る。

その時だった――

「ま、待て！ 妾が消滅すれば残りカスの魂も同時に消滅するのだぞ!! 貴様らはそれで良いのか？ 貴様らはあの少女を守ると言ったな？ では、倒すべき敵はどちらだ!？」

醜く惨くたらしい命乞いを吐き散らしたのは。

ミスト・レデイの言葉に海賊達は愚かりアに動揺が走る。

その中で動揺せず敵を見据えていたのは、グランバ、カトレ、ペンゾウだけ。

それも無理は無い。人間の優しさ、温かな光が僅かな時間とはいえ、ミディアに情を抱いた。

脆さであり魔族には無い強さを誇る人間には、ミスト・レデイと呼ばれる醜悪な化物を討伐させる訳にはいかなかった。

討伐してしまえば、自らの手でミディアを消滅させた事実には彼等は悲観し嘆くだろ

う。

ならばとレオは魔王らしく振る舞う。

「クハハハッ！ だからどうした？ 俺は魔王だぞ？ たかが少女の靈魂の消滅程度、瑣事さしでしかないのだよ……！」

レオの言動に怯むミスト・レディに、彼は容赦なく唐竹からたけを放ち、骸から四肢にかけて断ち切った。

ミスト・レディの切り口から闇が溢れ出し、

「ああ……ああ！ ……苦しい！ ……なんだ、なんだこれはッ？ 妾の肉体が、消えて……い、いや……い、や、だ……！」

醜く悍しい悪霊は闇に抱かれ消滅して逝った。

そして……船長室に居たミディアが微笑みながら、ミスト・レディの消滅と同時に消えて行く。

『皆、ありがとう』

感謝の言葉を残しながら。

濃霧が晴れ青空が現れる中、レオは魔剣フェルグランドを鞘に納め、ゆつくりとリア達の下に歩み寄る。

「……お前は知ってたのか？ 知ってて……知ってて一人で倒そうとしたのか？」

怒りよりも哀しみの感情を向ける海賊に、レオはそれで良い、と仮面の下で笑みを浮かべる。

魔王は人間の憎まれ役として適任だ。魔王である以上、肯定すべき役割。

しかし想定通りと行かないのもまた事実。

「ああ、ミディアの正体を知った際にな。……しかし怒り、

恨みをぶつけられると想定していたのだがな」

「……悪いけど納得はできないんだ。納得はできないけど、仮に自分だけ真実を知っていたら、魔王さんと同じ事をしてた」

仲間と死者の魂、優先すべきは一目瞭然。仲間の生命だと若い海賊が語る。

「……他に方法は？ ミディアちゃんの魂を船に定着させるとか、他に方法は無かったのかよ」

死者の魂という事実から眼を背け、仮初めの救いに縋る者。

実に人間らしい言葉にレオは、一つだけ事実を伝えた。

「あの子が俺達の前に姿を現した時点で、限界を迎えていたそうさ。遅かれ速かれ彼女の消滅は免れない。……救う救わない以前に詰みだ」

詰む。それはミディアが病で亡くなってしまった時点で救う事が叶わない。

海賊達はそれを理解した上で静かに嘆いた。

「……レオ」

静かに背後から呼び掛けるリアに、彼は振り向く。

そこには今にも泣き出してしまいそうな彼女の顔が映り込む。

手を伸ばせば脆く崩れてしまいそうな儂い、まるでひび割れたガラス細工の様だ。

少女一人に胸を貸すことも魔王としての度量、と、かつてアルティミアに言われた事が有ったが、魔王と勇者の立場ではそれも無理だろう。そうレオは仮面の下で苦笑した。

「……生憎と慰める事はできんよ」

「……別に敵でも有るレオに慰めて欲しくなんかないわよ」

「ではなんだと言うのだ？ 生憎とお前の泣き顔を拝む趣味はないぞ？ 泣くなら部屋で泣け」

「……分かんない。救えないのは仕方ない、理解してるけど、また一緒にお風呂に入ろつて約束……守れなかったなあ」

不甲斐ない自分に嫌気が差す。ミディアの消滅に最後まで気が付く事が出来ず、結果全てをレオに背負わせたことに。

言葉にできない感情が複雑に絡み合い心中に渦巻く。

カトレに言われた、『ミディアを殺す様な結果になった時はどうするのかしら?』、結局自分はその言葉に決意も決断も出来ず、勇者としても行動できなかつた。

「そうか。……ペンゾウを抱いて泣くと良い、ペンギン族の毛は中々肌触りが良いからな」

「魔王様っ!?!」

「うん、そうする」

そう言つてリアはペンゾウを抱き上げ、

「えっ!?! ま、魔王様ーっ!?!」

「……それぐらいは構わんだろう」

レオの有無言わせぬ言葉にペンゾウは諦めたのだつた。

突然だが、霧の中の貴婦人——「ミス・レディ」について語ろう。

そもそも彼女は何故悪霊と成り果てたのか？ 未練、悪霊に魂を喰われた？

彼女の場合は「未練」でも有るが、なぜ強い未練を宿し海上を行く人々を襲ったのか。少しだけ語るとしよう。

とある貴婦人は、愛する旦那と愛娘と豪華客船に乗船。煌びやかな調度品に彩られた客船に貴婦人は、間違いなく旅の思い出になると心躍らせる。

愛娘と海を眺めながら食べるアイスクリーム。

朗らかに笑う愛娘の笑顔が、彼女にとって何よりの宝だった。どんな工芸品や宝石であらうとも、愛娘の笑顔が彼女にとってこの世で一番の財。

人の幸福に齎すのは人でもあり、人に不幸を齎すのもまた人だ。

豪華客船に迫る一隻の海賊船が、勧告も無しに砲撃したのは、実に一瞬の出来事であり、また砲撃で数多の生命が奪われたのも一瞬だった。

貴婦人は我が子を抱き締め震える身体を抑え付け、海賊を睨む。

下卑た眼差しを向ける海賊、彼等の狙いは貴族が保有する金品だ。

当然貴婦人は我が身と愛娘を守るため、着飾った宝石と有り金の金貨を差し出しながら命乞いする。

『どうか！　どうか、この子の命だけは……！』

だが、現実は何れにも無情だった。特に貴族の不当な行いによつて島流しの刑に処された海賊達にとつては、貴族は憎むべき敵。

故に海賊達は貴婦人の願いを踏み躪り、貴婦人を娘から引き剥がした上で、刃を愛娘の小さな背中に突き刺したのだ。

絶叫する貴婦人と嗟う海賊。

愛娘の遺体を海へと投棄して、絶望に苛まれる貴婦人が最後に見たのは——血に染まった客船と貴族達の骸と嗟う海賊達だった。

我が子を殺された強い憎悪から、いつのしか貴婦人は悪霊へと成り果てた。

最初は彼女にも理性が有ったが、愛する者を喪った失意が強い憎悪と満たされることの無い飢えて変わる。

だが彼女は僅かに遺つた子の愛情で理性を保ち、同じく海上で不幸にあつた子供達の靈魂を集めた。

喪つた我が子の靈魂を探すため、また一緒になるために。



それでも悪霊と成り果てた彼女の理性が尽きるのは、必然であり避けようがない運命だ。

貴婦人は飢えと憎くて憎くて仕方ない海賊達への報復心から子供の靈魂を取込み、力を付け、いつの日か目撃者に「ミスト・レディ」と。そう呼ばれる様になったのだ。

蠟燭の灯りに照らされた船室で、レオは一冊の古びた本を閉じた。

「ほう、あの悪霊にそんな過去が有ったとはな」

同情はしないが無力感に苛まれ堕ちる事には理解が及ぶ。

レオはそう小さく呟き、本の表紙を撫でた。

この本は「ミスト・レディ」を討伐した後に、船長室に無造作に置かれていた。タイトルの無い無銘、著作者不明の書物。白鯨海賊団の誰の物でもない。

所持者が判らない書物を破棄するのも惜しいと感じたレオがグランバに譲って欲しいと頼み、入手したのが事の経緯だ。

直感的にこの書物を誰が置いたのか、何を伝えたかったのか理解したからだ。

「ミディアも粋な事をする。彼女をただの悪霊と終わらせたくは無かったのだろう。前部には子供達の無念が記されていたが、成る程これは世に広まるべきだな」

人間界の書物を収集する趣味が有るが、この書物は個人で所有するより誰かの手から

誰かの手に渡り、語り継がれるに値する。

「悪霊は人が生きる限り途絶える事は無いがな」

レオはそう一言呟き、瞳を静かに閉じるのだった。

彼が読み解いた書物は、過去に起きた出来事を記録する魔法が仕込まれた魔法書だ。その魔法が仕込まれた魔法書は、世界の何処かに密かに出現し記憶を遺していく。

決して誰にも語られず幕を閉じた物語を遺すために――

### 三章 メルディア島の大海蛇

#### 3-1

〔ミスト・レディ〕の討伐から早くも五日の早朝。

白鯨海賊団はズレた航路の進路を戻し、バルディアス大陸に向けて船を進めていた。

この調子なら一度補給のためにメルディア島に上陸、その後一週間の航海でバルディアス大陸南部の港町に到着する予定だ。

リアは割り当てられた部屋で手記に羽ペンを走らせ、

「予定通りなら良いけど、皆は今頃どうしてるかなあ」

魔王城に取り残された仲間達の安否確認。そのためには騎士団の詰所に寄り、ルシファアの動向を含めた全ての情報を得なければならぬ。

大陸全土に何かしら混乱が振り撒かれている可能性だつて否定できない。

「だけど、情報を得たとしても今の私達ではルシファアは倒せない」

魔力が回復しないこの状況を打開するためには、一度魔核研究所に向かう必要もある。

向かわないに越した事は無いが。マッドサイエンティスト達の姿に頭痛が起きる。

「……はあく、きつとまた身体中を調べられちゃうなあ。嫌だなあ、人類のためにと検査は受けたけど、私の魔核は別に特別でも何でも無いのに」

ギリガン王の命令なのだから従う他に無い。

勇者とは言うが、権力者の前には無力であり個々として力が足りない。

それでも貴族には、後ろ暗い証拠を突き付ける形で婚約の申入れを拒否した事もある。もちろん誰かの手を借りてだが。

勇者の立場が重苦しい。そう感じる事も時にはあつて、それでも人々の笑顔が忘れられない。誰かに手を差し伸ばして助ける自分もまた誰かに救われている。

「うん、やっぱり笑い合える世界の方が良いよね」

いずれ魔族とも戦争が始まる前に、互いに笑い合えればどんなに良いか。

しかし、結局の所は魔王か勇者、どちらか一方が倒れるまで戦争は終わらない。

仮に魔王レオを倒した所で新たな魔王が即位する。しかし聞けば魔王レオとは、魔族の中で並ぶ者は居ないという。

「ペンゾウの言葉を信じるなら、レオを倒せば魔族は大人しくなるのかな？ でも元々

は魔族は無秩序だった。けどレオの政策で今の秩序が保たれているとも言ってたわね」

今頃になって魔王レオを討伐することが間違いなのか。そう思わざるおえない。

レオは決して領内の人間を蔑ろにはしなかった。征服者としてか、魔族領内の人間に

は適切な職を与え、魔族が彼等に手出しする事を禁じていた。

魔族領内の人々が笑って暮らしている姿に、漠然と足元が崩れ去るような感覚に襲われた事もあった。

本当に間違っているのは人間の方で、侵略者は勇者一行である自分達なんだと。そう事実を語られたような感覚。

「……善悪の価値観は立場や見る者によって異なるとは聞いたけど、本当にその通りだったわ」

しかし結局の所、戦争を終わらす為には魔王レオを討つ必要があった。だからあの時決戦に臨んだ。

ふとリアは手を止め、

「……私の考えや想いは、他の人には見せられないわね。間違えてると知っていながら今はそれを正す事も、他の道を模索することもできないなんて……勇者に理想と夢を懐く人々にとつては裏切りよね」

真に両世界を平和に出来るのなら。その方法が今回の旅で見つかるかも知れない。

何せ魔界の王と共闘の関係には有るが、共に同じ道歩んでいるのだから。

「三年前のようにお互いの立場を知らない状況だったら……すごく簡単に済んだかもしれない。国としては簡単にはいかない事も理解はしてるけど」

それでも血を流すよりはずっと良い。

リアは思いの丈を綴った手記を閉じて立ち上がる。

「そろそろ交代の時間ね」

これからレオと見張り番の仕事が有る。

見張りの番の傍ら少しだけ語り合うのも悪くはない。そう感じたりアは、上機嫌に甲板へと向かう。

上機嫌に鼻歌を奏でながら甲板に到着すると。

「前方に海賊旗……海賊船だああー!!」

「アレは!? この辺りの島を荒らす海賊団じゃねえか! 確かブラックホーク海賊団つ

て言ったか」

「戦闘の準備はしておけよ!」

喧騒の音が響く。

リアは前方に見える海賊船に、しばし呆然と眺めては。

(なんでだろう? 物凄くムカムカする)

気付けば聖剣ゼファールを抜刀していた。

「待てリア。お前さんは客人、レオと待機だ。ここは海で相手は海賊、ならばオレ達の戦

場だ」

グランバの声にリアは振り向く。

既に戦斧を片手に、銃を構えるカトレとサーベルを携帯するペンゾウを連れて戦闘態勢に移っていた。

まだ敵船の発見から間もないというのに、素早い行動に感嘆の息が漏れる。

「リアとレオは戦闘状況を眺めてるといいわ。そもそも魔核を失った二人を戦闘に参加させられないもの」

「うっ……」もつともです」

痛いところを突かれた。

反論の余地も無い程に。

そんなリアの横をグランバ達が通り過ぎ、

「野郎ども!! 敵は海賊だ! ならばオレ達の流儀に従い敵を討ち滅ぼせ!」

「「うおおおおー!!」」

グランバの怒声と海賊達の歓声が響く。

そこにレオがやって来て。

「観戦するのだろうか? 俺達は俺達で海賊同士の戦場を見定める必要がある」

頷き彼と甲板に向かった。

## 3—2

「野郎ども！ 砲撃用意！ 当てるなよ」

グランバの怒声が甲板に響く。

砲手達は砲身が敵船の左右の海面に向けて、標準を合わせた。

大砲に魔力を込め、

「ようし！ 撃て撃てえええ！」

砲身から圧縮された魔力の砲弾——魔砲弾が海面に落着し、大きな水飛沫をあげる。

敵船は仕返しと言わんばかりに砲身に向け、魔砲弾を放つ。狙いは正確で直撃コース。

「カトレ、跳ね返してやれ」

飛来する魔砲弾にカトレが両掌を向け、

「《盾よ、力強く、打ち返せ》」

防御魔法——「ラウンド・シールド」を唱えた。

円卓の盾が船の前方に展開され、敵の魔砲弾を弾き返した。

弾き返された魔砲弾は、敵船のメインマストに向けて飛来し、メインマストの上部を



へし折り敵船の後方の海面に着弾した。

海戦によるメインマストの破損は、船の推進力を喪うと同義。

「このまま全速前進！ 敵船に乗り込むぞ……！」

グランバの怒声伴う指示に船は、真つ直ぐと敵船に向かう。しかし敵船も近付けさせまいと魔砲弾による牽制射撃を繰り返す。

だが、操舵者の鮮やかな舵捌きが軽々と飛来する魔砲弾を躲していく。

レオとリアから感嘆の息が漏れる。

海賊同士の海戦、グランバの見事な指揮。経験の無い素人から見ても分かる練度の高い一団。

正規の軍隊とは違い、彼等は自ら考え戦術を編み出す。それがどれだけ難しい事か、ましてや天候と風向きに左右される海上戦で最適解を瞬時に導き出す手腕が問われる。

そして、レオとリアを置いて両海賊団の激突は激しさを増す一方だ。

敵船に隣接した白鯨海賊団が、マストのロープから次々と敵船に移り込む。

防衛に残った海賊達が、レオとリアの周囲で護りを固める。

「お二人さんはここで大人しくな」

「そら、奴さんのお出ましだ！」

海賊の言葉を皮切りに、敵船からブラックホーク海賊団が乗り込み、サーベルを片手

にレオ達に突っ走る。

「よくも船を傷付けてくれやがったなあああ！ 白鯨海賊団！」

サーベルを振り抜く敵海賊に海賊の一人が銃口を向ける。

「さよならだ」

一言発した海賊は引き金を引き、銃口から魔弾が発射され、敵海賊の頭部を容赦なく撃ち抜く。

一人の敵海賊の死を皮切りに、敵海賊が次々とサーベルで斬りかかる。

それに対して白鯨海賊団の海賊達は、冷静にカトラスで刃を受け流し、サーベルを弾いていく。

弾かれたサーベルが虚しく甲板に突き立つ様子に、敵海賊の額から汗が噴き出る。

背を向ければ魔弾が、組みかかれればカトラスで斬られる。ならばどうするか。魔法を唱えるより速く魔弾が頭部を撃ち抜くだろう。

ブラックホーク海賊団は一樣に周辺に目を向ける。すると、そこにレオとリアの姿が映り込む。

魔力が感じられない二人。白鯨海賊団に守れている姿を見るに戦う能力が無いのだから。

無力な二人を人質に取るには、先ずは目の前の海賊達を排除しなければならない。そ

れは本末転倒だ。

今までは魔砲弾を船体に喰らわせ、混乱に乗じて襲撃してきた。しかしブラックホーク海賊団は、今まで経験になかった状況に追い込まれている。

敵海賊が攻められず、かと言って後退もできない状況に陥っていると。

ブラックホーク海賊団の船から狼煙が挙がった。それは正に彼らを袋小路から脱出する合図だった。

「撤収の合図!? くそ！ 何も出来ずに撤収かよ！」

「こつちとら数々の商業船を襲ってきたつてのに！」

「こんな義賊紛いの海賊に敗走するなんて！」

逃げる敵海賊達は、そう吐き捨て海賊船に引き返す。

それと入れ違う形でグランバ達が甲板に降り立った。一人の少年と数々の戦利品を手土産に。

撤退するブラックホーク海賊団を遠目に、レオは気を失う少年に目を向けた。

「その子は？」

「こいつはメルディア島の子供だ。確か——」

「カリムよ。メルディア島はあの海賊達に襲われたのかしらね？」

「掠奪ついでに連れ去られた。……連れ去れたのはカリム一人だけなのか？」

「いや、ブラックホーク海賊団の船長曰く、海を小舟で漂流している所を捕まえたそう  
だ。前から海賊に憧れちゃあいたが、まさか小舟で島を出るとはな、中々見込みがある  
じゃないか」

カリムの度胸と勇氣にグランバが笑みを浮かべる。

「それも気になるけどね、こつちのお宝も気になるわ」

カトレが取り出したのは丸められ封がされた羊皮紙

一塊の海賊団が手にするにはあまりにも質の良い羊皮紙だ。

そして一番眼を惹かれるのが、大鷲が刻まれた封だ。

大鷲を象徴として扱う国家は少なくともバルディアス大陸には存在しない。

バルディアス大陸外の国家からの親書であるのは明白。

「とんでもないお宝を持ち帰ったようだな」

「問題は何処の国がどの国に宛てたのかだ」

「ああ、この象徴はエンドラス王国ね。バルディアス大陸の国ね」

カトレが一眼で象徴を言い当てる様子に、

「詳しいな」

レオは感心の眼差しを向けた。

「海を旅していると色々な国の商業船を助けることが多いのよ。でも、船長であるアナタが忘れるのはねえ？ その様子じゃああたしの故郷の象徴も忘れてそうね」

「……あの大陸は国が多いんだよ！ それに妻の故郷ぐらいちちゃんと憶えてるさ。国名はクルゾナ、象徴はスズランだろ」

「あら、ちゃんと憶えてたのね」

「クルゾナ？ 数年前に姫君が船旅の最中、海賊に攫われたと風の噂で聴いたな。以来第一王子が国を纏めているとも」

「……あー、その話は良いだろ」

あまり話したくはない事なのか、グランバは眉を寄せ話題を切り替えた。

すると大人しくカリムの様子を見ていたリアが、

「それで親書もそうだけど、この子はどうするの？」

「メルディア島に送り届けるさ。丁度バルディアス大陸の航路上に在る島だ。どの道島には食糧補給のために寄る予定だったからな」

グランバの言葉にレオとリアは頷く。

詳しい話はカリムが目覚めてからとなり、海賊から奪った財宝を山分けすることに――

## 3—3

山分けされた財宝の中には魔物の魔核も有り、レオとリアはソレを貰い受けた。

ついでに金銭の持ち合わせがない二人に、海賊達が気を利かせてスピリア硬貨を持たせた。

バルディアス大陸のメンデル国で扱われている硬貨がスピリア硬貨だ。

大きさ九センチに中心に天秤が刻まれ、銅、銀、金の三種類の硬貨が有るが、何度も燻して使い回しているため他国の硬貨と比較すると価値が低い。

戦争の弊害はいつも民に向けられる。だから平民の貴族と騎士に対する当たりが強い。

船内の医務室の中で漏れたため息に、レオが顔を向けた。

「悩み事か」

「うーん？ 戦争の弊害はいつも民が負うんだなあつて改めて認識したところ」

ベットで眠るカリムの様子を見ながら答える。汗ばむカリムの汗をタオルで拭き取る。

「道理では有るが、一国を治める者として頭の痛い話だ。……と、どうやら目覚めのよう

だぞ」

「……………うう……………く、来るなあ……………っ!？」

驚かされていたカリムが目覚め、周囲を見渡しレオとリアに気が付く。

「……………っ!？ か、かわいい女の人と……………なんだ! その怪しい仮面は!？」

リアに見惚れ、仮面を装着しているレオに驚く。

なんとも忙しい少年だ。

「だつてよレオ?」

「やれやれ、このセンスの良さを理解できる者はグランバとペンゾウだけか」

「えっ? グランバとペンゾウ……………!？ もしかしてここは白鯨海賊団の船!」

「そうよ。私はリア、こっちがレオね」

リアはレオに手を向け、カリムは二人の名を記憶する。

島でも見ない可憐で華奢な女の子のリア。フルフェイス仮面に細身長駆の怪しさ全

開のレオ。

カリムの目から見ても二人の組み合わせは、不思議なものだった。

「……………オイラはカリム。……………そうだ! 悠長に挨拶してる場合じゃなかった! 島の皆を助けて欲しいんだ……………!!」

カリムの慌てる様子に、レオとリアは顔を合わせた。

「ふむ。急ぎの様子のようだが、グランバと話をすべきだろう」  
「立てる？ 手貸そうか？」

目覚めたばかりのカリムを氣遣うリア、しかしカリムは差出された手を突っぱねて、ベットから降り立つ。

そのままドアまで歩くと。

「急いでるんだ、速くグランバの所に連れて行ってくれ！」

「さすが男の子ね、元気が良い」

二人は詳しい話を聞くべく、急ぐカリムを連れて船長室へと向かう。

「目覚めたかカリム。って、随分慌ててるな」

「グランバ！ オイラの島を助けて欲しいんだ！ そのためにオイラは小舟で海に出て

……！」

「落ち着け、島に何が有った？」

グランバの論ずる声に、カリムは荒げた呼吸を整え、ゆっくりと語り出す。

「……数日前。オイラ達はいつも通りリヴァイアサンと共存しながら漁に出てたんだ。そしたら空から天使が舞い降りて……ソイツがリヴァイアサンをおかしくしちゃまったんだ！」



天使という聞き捨てならない言葉にレオとリアは眉を寄せた。

帰還途中の旅で天使が事件を起こした、天使の気紛れか、それとも。

「……天使？ ソイツは何枚羽だった？」

「六枚だった！ 六枚羽の天使！ ソイツ、リヴァイアサンの額に変な結晶体を埋め込んで、それからリヴァイアサンが島の付近で暴れるようになったんだ」

「六枚羽の天使……大天使か。ルシファーであれば当たりだが、同時に最悪でも在るな」  
「魔力が回復しない状態でルシファーと遭遇したら、勝てないもんね。というか大天使は何が目的でリヴァイアサンを？ そもそもリヴァイアサンって魔物だよな」

「リヴァイアサンは確かに魔物だけど……他の魔物と違って優しいんだ。オイラも昔海で溺れた時に助けて貰った事だって有るんだ」

島のゴブリンの様な優しい魔物が他にも居た事にレオとリアは驚く。

「リヴァイアサンか……カリムは白鯨海賊団にリヴァイアサンを止めて欲しいってことか」

「当然だよ！ リヴァイアサンはもう島の家族同然なんだ……い」

魔物を家族同然と断言するカリムの姿は、大人顔負けの風格を醸し出していた。

彼の様子にグランバは笑い、

「どの道島には寄る。相手はリヴァイアサンだが正気に戻すっただけなら、まあ何とか

なるだろう」

「ふむ、話を聞く限り額に埋め込まれた結晶体とやらが怪しいな」

「それを砕いたら解決かな？ 魔核も補充できたから今度は私とレオも戦力として数えてよね」

「良いだろう。今回もレオと嬢ちゃんの力が必要になりそうだ。……カリム、島に到着するまで三日は掛かる、それまでの間は大人しくしてくれよ？ お前さんに何か有ればオヤジさんにドヤされるからな」

「……父ちゃんにドヤされるのは多分オイラだよ。父ちゃんの拳骨は死ぬほど痛いから」

遠い眼をしたカリムの様子をグランバが苦笑を浮かべる。

「ああ、心中察するよ」

帰ったら父にドヤされると分かっているカリムは、大きく肩を落胆させた。

ふと淡々とカリムの様子を観察している様なレオの姿に、リアが小首を傾げる。

仮面のせいで表情が判らないが、釈然としない、理解が及ばない事柄に直面した様な様子。

どうしてそんな理解できない者を観察する様子を見せるのか。

リアはこっそりと、彼の服の袖を引っ張り、

「ねえ、どうしたの？ 様子が変だよ」

背伸びしてレオの耳元で囁く。

すると彼は、ぐぐもつた声で小さく。

「家族」という概念が理解できんのだよ」

寂しい事を淡々と告げた。

魔族は“家族”を作り生活を営む事をしない。“家族”を作るのは魔界貴族か少数派だけだ、とリアはフィオナの母から聴いた事が有った。

魔族の子供は、物心付いた頃に捨てられ育つのだとも。

だからレオは目の前のカリムと彼の父の愛情に付いて理解しようと悩んでいるのだ、とリアは直感的に判断した。

「レオは今の魔族を変えたい？」

「種と魔界を護るためならば変えねばならんよ。……ああ、しかし難しくも有るが、それはそれで価値があるのだろう——」

「だが、今は目の前の事に集中すべきだな」

レオは魔王らしく無い優しい声でそう語った。

「……あの二人は先から何の話してるんだ？」

「さあな。まあ、色々と有るんだろうから深入りはするなよ」

カリムは微笑むリアの姿に釈然としないながらも、グランバの言葉に頷いた。

その後グランバはカリムを船長室から退出させ、レオとリアを交え作戦を考案するのだった。

## 3—4

メルディア島に近付くに連れ、それは起こった。

唐突な嵐に荒狂う海。操舵手は船を転覆させまいと、舵を切る。

激しく揺れる船体に、

「荒れてるな」

「海って荒れ易いって聞くけど、さっきまで晴れ渡っていた青空が嘘のようね」

レオとリアは近場の手摺りに捕まっていた。

激しく揺れる船体から身を守るため、各々手摺りに捕まり耐える。手離したら最後に揺れに体が取られ壁に弾かれる事となる。

「リヴァイアサンは魔法で天候を操るって聞いた事がある」

カリムが呟く。

その話が本当ならリヴァイアサンと船で対峙するのは得策とは言えない。

そういえば、グランバは作戦会議の折、『恐らく船は役に立たねえだろうな。出来ることは魔砲弾による援護射撃ぐらいか』と。

「でも、リヴァイアサンが天候を操る魔法を使うのは外敵を寄せ付けなかったためだって」

「ふむ、外敵か。……兎も角この嵐を突破すればメルデイア島なのだろう。先ずは無事に辿り着いてからだな」

「そうね。無事に事が終わったらメルデイア島の“花園”も見てみたいし」

「そ、その時はオイラがリアを案内するよ!」

「それじゃあ、その時はよろしくねカリム。あ、レオも“花園”見に行く?」

「ああ」

短く答えるトリアが笑う。カリムが若干不貞腐れ気味だ。

カリムが不貞腐れたのは、リアに良い所を見せたいという思いから来るのだろうか。彼の初恋という感情がそうさせるのか。

なんとも不思議な感覚だ、とレオは仮面の下で笑う。

これからリヴァイアサンを止めるというのに呑気だ。そう彼等の会話を近場で聴いていた船員が思う。

カリムのリアに対する初恋は、半ば周知の事実となっている。しかし幸か不幸か、リアはカリムの想いに気付かない。

鈍感というより天然で躲していると云った表現が正しいか。

もちろん、白鯨海賊団もリアにアプローチを試みた者達が居る。彼等は宝石類でリアの気を惹こうとしたのだが、『えっ!? そんな高価な物は受け取れないわ! そういう

のは心から愛した人に贈るべきよ』と返されたそうだ。

無惨に散る船員達にリアは、小首を傾げたという。

「ふむ。カリムよ、腕は辛くないか？」

「全然平気だよ！」

「私はもう限界なのに、流星は男の子ね」

見ればリアの腕が震えている。今にも手を離してしまいそうな程に。それはレオも同じだった。

腕の筋力が限界を迎え、今にも脱力してしまいそうな程に。

「……やはり魔力が無ければ無力だな」

「……本当よね。世界から魔力が消えたら人類滅亡しちゃう」

「えっ？ 二人は一体なにを言ってるのさ」

二人の腕力が限界を迎え、遂に手摺りを離す。その時だった。揺れが止み、船体が安定したのは。

甲板に出ると晴れ渡る青空が、船体を照らしている。

そして目的地のメルディア島が視界に映り込む。

船の残骸と思われる破片、人の水死体が波に流される様は、少なくともリヴァイアサ

ンによつて齎させれた被害だと推測できる。

「リヴァイアサンの影は無い様だな」

肝心のリヴァイアサンの姿が見えない。痛む手首を摩るレオに、カリムは焦りと不安を隠しながら呟く。

「もしかしてレオつてオイラより非力？ リアは女の子だから分かるけど——」

カリムの平静を装う姿が傷ましく見える。それでもレオには掛ける言葉が無く、敢えて彼の軽口に乗った。

「否定はしないが、一度魔力切れに陥ればこの辛さも理解できよう」

「はあ、年下の男の子に非力扱いされる私つて……存在価値皆無じゃない」

甲板の手摺りに、手を掛けるリアの哀しげな声が響く。

彼女の様子にカリムは慌てる。

「だ、大丈夫！ リアが非力でもオイラが守るから」

「えつ？ 私はカリムに守られるほど弱くないわよ。今は凄く非力だけど」

カリムの氣遣いが空振りに終わる様子に、レオはため息を吐く。

「難儀だな」

カリムには彼女が勇者である事を伝えてはいない。少年の夢を壊したくないリアの頼みも有つてだ。



しかし仮にリアは勇者だ、と伝えた所でカリムは信じないだろう。

今のリアは非力な少女でしか無く、カリムもそう信じ切っている。ならば行動で示すしか他に無いのだ。

二人の様子にレオはそんな事を思っていると、

「お頭が上陸するから準備しておけってさ」

「うむ、承知した。……とところでペンゾウはどうした？」

「アイツは……」

甲板に集まる船員の中にペンゾウの姿が見えず、尋ねると彼は浮かぬ表情を浮かべた。

ペンゾウに何か有ったのか、とレオに緊張が走る。

「ペンゾウは……倉庫の床にクチバシが刺さって動けなくなってる」

ペンゾウのあんまりな状態に、レオは天を仰ぎ見た。

「くだらぬが、ペンギン族にとっては死活問題か」

「いま何人かが、ペンゾウを引っこ抜こうとしてるらしい。クチバシが折れないといいけどな」

冗談を飛ばす船員にレオは小さく笑う。そして上陸の準備へと移る。

近くに僅かな魔力の残滓を感じ取りながら――

## 3—5

メルディア島の港に船を停泊させ、島に降り立つと島民が出迎えた。

しかし彼らの顔は寔れやつれつに疲れきった表情を浮かべている。

彼らも深刻の様子だが、レオは島に到着してから奇妙な違和感に見舞われ、仮面の下で眉間に皺を作る。

(この違和感は一体)

メルディア島周辺に漂う魔力の残滓、僅かに遺された残滓ではそれがどんな魔力なのか具体的な特定が難しい。

そこでリアに眼を向けると、彼女は島民の様子を注意深く観察していた。

怪我を負った大人、両親の膝に抱き付き怯える子供の様子に彼女の表情が曇る。

「その様子じゃあ、深刻そうだな」

グランバの呟きに一人の老人が前に出た。

「おお、グランバ殿！ その節は世話になり申した。……詳しい話はワシの屋敷で」

船番として殆どの海賊達を残して、レオ達は長老のメストに促されるまま、彼の屋敷へと向かう。

島の中心に建てられた高床式の建物、長老邸に案内されたレオ達は客室に通された。粘土細工の工芸品や花飾りで飾れた室内。それでいて風通しが良く暑さを感じさせず心地い。

「それで長老、詳しい話を聴かせてくれるんだろ？」

グランバの言葉に一人の男性が室内に入つて来る。その男性にレオ達は一樣に眉を潜め、カリムが小さな悲鳴を上げた。

大柄な体躯に恵まれた片腕の男性——ゼストがカムイに、左腕を挙げながら軽快に笑つた。

「と、父ちゃん！ そ、その腕は……っ」

「カリム！ 無事に帰つて来たか！ コイツは、なんてことねえよ。腕の一本ぐらい安いもんだろ」

泣きつくカリムに優しい眼差しを向ける。

「どうして……どうして父ちゃんは平気なんだよ！」

居た堪れなかつたのか、涙を流しながらカムイは、部屋の外へと駆けて行く。

カムイが退出した後、ポツリとゼストが、

「もうアイツをちゃんと抱き締める事も出来ねえんだな」

寂しげな声を漏らした。

「あー、リア。フォロー頼む」

「うん、任せて」

退出して行くリアの背中をゼストが静かに見送り、グランバ達に向き直る。

「済まねえな」

「構わねえけどよ。その腕は……リヴァイアサンにやられたのか？ カムイには話さなくていいのか？」

「カムイには良いんだよ、アイツはまだガキだ。それにこの腕はリヴァイアサンにやられた訳じゃねえ、コイツは灼眼の六枚羽の天使にな」

灼眼の天使。しかしルシファーは金色の瞳だ。

「その天使は何処へ？」

「分かんねえ、一通り暴れたら消えちまったからな」

「……天使の目的はなんだ。無作為にとは思えんが」

「あー、実験が如何とか言ってたが、何の事だかさっぱりだ」

「他には？」

「……何も。そもそもリヴァイアサンに結晶体を埋め込んで用件は済んだそうだが、『退屈凌ぎに遊んでやる』、なんてほざきやがるもんだから奴の顔面を殴り飛ばしてやった

よ

愉快に笑うゼストに、レオは驚きを隠せない。まさかこんな島に大天使を殴り飛ばせる者が居たことに。

思わぬ強者に至上の喜びが沸き立つが、今は闘争心よりも天使の件だ。

”実験” つまるところ天使は何らかの実験のために、この島に訪れた。

それはカリムが言った結晶体絡みなのは明白。しかし天使が、女神に支える天界の住民ともあろう者が人間に危害を加えるとは。

女神ウテナは、生物に強い慈しみを持った女神。そんな彼女が天使に人間に危害を加える様な命令を与えるとは考え難い。

ならば、大天使にそんな命令を与えたはルシファアの可能性が高まる。

(ルシファアの企みはなんだ?)

「実験とか天使の目的はこの際置いといて、今はリヴァイアサンの方が深刻だろ。島の民家を見たか?」

思考に耽るレオに、グランバが問い掛ける。

長老邸に到着する前に、幾つか屋根が抉られ倒壊した民家や、岩肌が何かに貫かれた痕跡を見た。

それら全てがリヴァイアサンが齎した被害だと言うのなら事態は深刻だ。

「……大人しいリヴァイアサンが、あの天使におかしくされてからというもの、彼は何か  
に抗うが如く暴れ出したんじゃ。ワシらは彼奴を鎮めようと船を出したんじゃが……」  
「……結果は返討ちつて事か。負傷者や死者は？　負傷者ならオレンとこの船医で治療  
はできるが」

「幸い死者は居らぬが、負傷者の手当をお願いしても？」

「ああ、手配しておこう」

グランバは、ペンゾウに目で合図を送ると、彼は部屋から飛び出して行く。

「アイツは大海蛇だ。その気になれば島一つを津波で沈めることもできるんだぜ？　そ  
んな魔物が理性で抗ってるってのは幸いだよな」

ゼストの言葉に、レオの肝が冷える。メルディア島はそこそこ大きい島だが、そんな  
島一つですら簡単に沈めることができるという事実には、冷や汗が流れる。

レオは深く息を吐き、ゼストに顔を向けた。

「それでリヴァイアサンが結晶体によつて操られているという推測は間違えでは無いの  
だな？」

「おう、カリムから聴いたのか。恐らくは間違いないだろうなあ。結晶体は紫色の怪  
しげな光を放つてやがるが、属性が判らねえ」

「……ん？　属性が判らないというのは？」

「見たことも感じたこともねえんだ。魔法に明るいつて訳じやねえから何とも言えねえけどよ」

未知の属性によつて生み出された結晶体。レオはそこまで推測して、ふと魔王城で見た光景を思い出した。

” 溶け合い混ざり合う形で一つの魔力として宿つていく ” 光景を。

(あの時は気にしてる余裕も無かったが、今更だな)

事の重要な手掛かりを今更になって思い出す。随分と平和ボケしたものだど、レオは自ら皮肉つた。

島の近海で僅かに感じ取つた魔力の残滓に懐かしい物を感じた。

「……よもや他人の魔力を利用するなど」

仮面の下で紅い瞳が紅い眼光を放つ。

紛れもない怒りに腕が震える。

自らの怒りに重苦しいため息が漏れる。

怒りを抱いたところで意味が無い。そうレオは判断して、平静を取り戻した。

「……何か心当たりが有るのか?」

「推測の段階、確証が得られない」

「そうか。何か分かつたら報告」

「承知した」

グランバは、素直に応じるレオの様子を気に留めながらも、リヴァイアサンの対策に注視した。

「リヴァイアサンがいつ姿を見せるか分からない以上、準備を急ぐ必要があるな」

「そうだな。それで何か策は有るのか？」

「ああ、先ずは島に大砲を十二門置かせて貰う。リヴァイアサン相手じゃあ船が沈められかねえ。それにいざと言う時の避難船は必要だろう」

「う、うむ、背に腹はかえられぬか」

「必要な物が有ったら言ってくれよ。漁獲用のモリや拘束用ネットは残ってるからな」

「ああ！ ソイツは今すぐ用意してくれ！ リヴァイアサンの動きを封じない事にはどうにもならんからな！」

こうしてレオ達は、グランバの指示の下準備に取り掛かる。

天使の目的に一株の不安を抱きながら。



リアは砂浜で蹲るカムイの隣に腰を降ろす。

「カムイは天使が憎い？」

「……リヴァイアサンをおかしくして、島を滅茶苦茶にして……父ちゃんの腕まで奪った。憎くない訳がないじゃないか」

天使に強い憎悪を宿した瞳を向けるカムイの姿に、リアの胸が痛む。

カムイの憎しみは正当だが、彼の歳で誰かに憎しみを抱くのは危険だ。

勇者として見てきた憎しみに駆られた者達の末路をリアは知っているからこそ、

「天使を許せないのは分かるけど、憎んで憎悪を晴らそうなんてしちゃダメだよ」

「なんで、そんなことが言えるんだよ……リアに何が分かるんだよ……！」

「沢山見てきたから。報復心の行き着く果てや、復讐鬼に成り果てた人がその後どうなったのかも」

顔見知りの騎士の少年がまさにそうだった。

魔族との戦争で家族を失った彼が、魔族の全てを恨み、何の罪もない魔族の少女を殺害したことも。

その後、戦時中とは言えあまりにも非人道的であるため、騎士の少年は騎士団を除名され、彼の憎しみの矛先は人へと向けられるようになった。

周りも見えなくなり、声も届かない彼を終わらせたのは他でもない自分だ。

彼はいま、大監獄に幽閉されている。それが復讐に走った彼が迎えた結末。

カムイの状況は違えど、復讐の連鎖に通じる。だからリアは自身の見てきた事と体験してきた事を話した。

「……じゃあオイラはどうすればいいのさ」

「この島を襲った天使を赦せとは言わない。けど、まだカムイは小さいんだから暗い感情なんか抱えちゃダメ」

リアはそつとカムイを抱き寄せ、背中を撫でた。

島の家族同然のリヴァイアサンを狂わせられ、父の腕を奪われた。

カムイは感情を抑え切れず、リアの腕の中で涙が流れる。

しばらくして泣き疲れたカムイを長老に預け、リアはレオ達の下へと向かう。

既に準備に取り掛かっているレオ達を手伝うために。

港では大砲を設置する白鯨海賊団と島民が総出で手伝う光景が映り込む。

「もう終わりそう？」

大砲にモリを装填するレオに声を掛けると、彼はぐぐもった声を発した。

「ああ、島民の協力によつてな。……やはりリヴァイアサンを一刻も早く解放したいの  
 だろう」

「そうだよね。……天使の横槍は？」

「ペンゾウが海中から警戒に入っている。……大天使クラスともなれば、その身に宿す  
 魔力で感知も容易いだろう」

「……でも私とレオは、そんな大天使から不意打ちを受けたわけだけど。それつて魔力  
 を隠していたつてことでしょ」

痛い所を突かれたのか、レオが小さく唸る。

しかし、彼にも何かしら策が有るようだ。

「それでレオはどう対策を打つつもり？」

「……策なら既に打ったさ。ペンゾウが海中に居る、つまりはそういう事だ」

「どういうことよ？」

「なに、タネを明かせば我々魔族の手の内を曝す事になるのでな」

つまり自分には話せない内容のようだ。

共闘関係とはいえ、安易に手の内を曝したくない。レオの考えも重々理解できる。

「でも、魔力を感知させない相手をどうやって探るのか。それぐらいは教えて欲しいな  
 あ」

甘えたような声を出すと、レオは考える素振りを見せ、

「……天使に伝わる魔法が魔力を隠す」

「ああ、なるほど『デイスベル』を使うのね」

解除魔法——『デイスベル』は相手に掛けられた自己強化魔法と防護魔法を解除する魔法だ。

リアにはこれ以外の魔法が思い付かない。しかし、レオが笑い声を漏らす辺りハズレのようだ。

フルフェイス仮面で隠された素顔。いま彼がどんな表情を浮かべているかは分からないが、きつと愉しげな笑みなのだろう。

「……それで解除は不可能だろう。天使に伝わる魔法は特殊だ。それこそまだ神々が何柱もいた頃まで遡る。……連中の扱う魔法は神話の代から受け継がれた魔法なのだよ。いや、この話よりもカムイの様子は如何だったのだ？ ゼストは顔に見せないが、カムイを心配していた様子だった」

あの親子を気遣うレオの姿が魔王らしくない。それともレオ個人として気に掛けているのだろうか。

やっぱり優しい魔王だ、とリアは改めて実感しながら答えた。

「今は泣き疲れて寝ちゃってる。……でも危ないわ」

「復讐心か。……お前が危惧しているのは、人間と天使の戦乱だろう」

あつさりと思念を言い当てるレオに、リアは肩を竦める。

こつちの心中や思考を看破してくる魔王。そのお陰で悩みを抱え込まずに済む。

「うん。正直なところ魔族と戦争中なのに、今度は天使と小さな火種から大きな戦火に変わるのがね。三界を巻き込んだ戦争は避けなきや、人類は終わるわ」

「……人間は終わらせんさ」

「それはレオが……人間を守るってこと？」

「……俺には俺の約束と目的が有る。そのためには人間が必要だ」

彼はそれだけ答えると、グランバの下へ歩み出した。

魔王なのに人間を守ることを否定しない。一体レオの約束と目的は何なのか。

「でも、それは魔族と人間の争いを止めないとね。私も方法を探さなきや」

レオの目的を理解する。その前にメルディア島を取り巻く不穏な影から救う。

そう決意を胸にリアは、聖剣ゼファールを携えながら所定の位置へと向かった。

彼女が予め指示されていた位置に到着した頃だった。晴れ渡った空が分厚い雷雲に覆われ、次第に海が荒れ始めたのは。

そして、有り得ない魔力を感じ取ったのは、その時だった——

天候は嵐へと変わり視界が悪い中、リアは眼にした。

大海蛇リヴァイアサンの姿と額の紫色の結晶体から発せれる魔力を。

決してレオほど魔力に敏感ではない。しかし、それを一眼しただけで理解してしま  
う。

(あの結晶……私とレオの魔力が溶け合ってる)

結晶内部で光と闇が溶け合い混沌とした魔力が渦巻いている。

結晶に封じられた自身の魔力とレオの魔力が混沌となりリヴァイアサンを狂わせた。

つまりメルディア島の事件は、自分達の魔力が利用されたものだ。

「人の魔力を勝手に……っ！」

怒りが湧く。それでも、

「……ギャルルウ」

苦しげなりヴァイアサンの鳴き声がリアに平静を齎した。

混沌の魔力によって苦しみ、意志を奪われまいと抗う様子が酷く痛々しく見える。

リヴァイアサンについてはカムイから聴いた程度しか知らない。それでもリヴァイ

アサンの話をするカイムは誇らしげで楽しそうだった。

そんなリヴァイアサンを苦しめているのは自分とレオの魔力。

あの妖しく輝く結晶体さえ砕けば、リヴァイアサンは苦しみから解放される。

「いま皆が助けるからね」

リアは魔核を掴む。そして、

「まずはリヴァイアサンの動きを封じる！ 撃てええええー!!」

グランバの怒号により大砲から魔砲弾が発射される。

リヴァイアサンは迫り来る魔砲弾に一鳴。

すると、リヴァイアサンの鳴き声に呼応した波が高波となり、魔砲弾を海底に呑み込む。

そして高波が島へと向かう。

「《息吹よ！ 凍てつかせよ》」

海中からペンゾウの詠唱が轟く。

ペンゾウはクチバシから冷たい息を放つ。氷結魔法——【凍える息吹】が高波を瞬く

間に凍結させた。

その瞬間、宙を跳びグランバが戦斧を凍った高波に向けて振り上げ、

「砕け散れ！」

剛腕から繰り出された兜割りが凍った高波を粉碎し、氷片が荒れる海中に降り注ぐ。簡易的な足場が出来上がり、リアとレオが同時に魔核を砕く。

魔力が溢れリアは聖剣ゼファールを構えた。

そして地を蹴り、海に浮かぶ氷片を足場にリヴァイアサンの下へ駆ける。

ふと隣に眼を向けると、既にレオが居る。

魔王レオが隣に立っている。何故かそれだけでリアは戦意が高揚していた。

「さあ！ 二人を援護するわよ！」

カトレの合図に、銃と大砲から魔弾と魔砲弾がリヴァイアサンに飛来する。

弾幕の直撃を受け、それでもリヴァイアサンの鱗を傷付けることは叶わず、島民の悲  
痛な声が漏れる。

そんな時だった——

リヴァイアサンが大鱗を翼のように広げ、空を舞ったのは。

「……ギョルル」

もがくような鳴き声が空から響く。

「チッ！ まさか飛べるとはな……！」

リヴァイアサンの全長が海中から空に浮かび上がったのは、実に一瞬の事でリアとレオに止める術は無かった。



「レオとリアは追撃に備えろ！」

グランバの声に二人は武器を構え直す。

そして、モリと大型漁獲用ネットが装填された大砲が火を噴く。

頑丈で太い縄が括り付けられたモリをリヴァイアサンは体を捻り避ける。しかし対象から逸れたモリは重量に従い海中へと落ちる。それが白鯨海賊団の狙いだった。

大砲の射線が交差する様に配置し、縄を括り付けたモリがリヴァイアサンの体を絡め取る。

そしてその頭上から大型漁獲用ネットがリヴァイアサンの動きを更に封じ込める。

「さあ！ 引つ張りなさい！」

カトレの掛け声に島民と海賊達が縄を引つ張り、空を舞うリヴァイアサンを海へ引き摺り込む。

それでも暴れるリヴァイアサンに島民と海賊達が弾かれる。

そんな中、海面を走り飛ぶ影がリアの視界の端に映る。

「もう暴れんじゃねえええ！」

ベストの怒声と共に繰り出された拳がリヴァイアサンの頭部を穿ち、全身に衝撃が走る。

脳に伝わる衝撃にリヴァイアサンは海中に横たわる。

大抵の水棲生物は衝撃に弱い。例えそれが大海蛇であろうとも生物が持つて産まれた弱点は易々と覆せない。

ゼストはそのままの勢いで嵐の海へと落ちていく。

ゼストの行動に驚く暇もなく、最後の詰めにレオとリアが動く。

グランバでもゼストでもない、今は力不足の二人。そう、結晶を砕くだけならグランバとゼストの脅力は逆にリヴァイアサンを傷つけることになるからだ。

傷を負ったリヴァイアサンが混沌に吞まれ、完全に理性を喪う事を避けるために。

レオとリアはリヴァイアサンの体に飛び移り、額に向けて駆け上がる。

額の結晶目掛け、二人は剣を振り上げた。

「はあああああ……っ！」

レオは右薙を、リアは左薙を繰り返して出し、闇纏う魔剣と光纏う聖剣の刃が交差する。

紫色の結晶体に一閃走る。そして結晶体に亀裂が走り、甲高い音を響かせ砕け散った。

砕けた結晶体から魔力が解き放たれ、混ざり合っていた混沌の魔力が密封された空間から解放されたことにより反発し合い弾けた。

混沌は在るべき姿、闇と光に別れた魔力が元の持ち主の下へと還る。

嵐が止み空が晴れる中、レオとリアは氷片の上で重い息を吐く。

「……やはり俺とリアの魔力か。……それにしても」

今回はリヴァイアサンが理性を保ち抗っていたからこそ上手くいった。

そうで無ければメルディア島はとつくに海に沈んでいただろう。

結果、僅かな魔力取り戻しリヴァイアサンを解放できたのも運が良かったに過ぎない。

レオとリアはその事を実感しながら、周囲へと眼を向ける。

まだ緊張状態が続く。

「……大天使は来てないか？」

「分かんない。けど油断はできないよね」

ここで大天使が現れたら勝算が無い。

緊張から額に汗が流れる。

そんな時だった——

「魔王様、勇者！ 天使が接近してきやすー！」

ペンゾウが右羽から淡い光を発しながら鋭く叫んだのは。

緊張が走る中、レオとリアの背筋が凍る。

「あーあ、やってくれたねえ」

レオとリアの頭上から声が響く。

見上げれば灼眼の大天使がメルデイア島を見下ろしていた。

氣絶したりヴァイアサンが海面に浮かび、メルディア島には島民と海賊達。

そして真下に忌々しい片腕の人間、フルフェイス仮面の男と噂に聴く勇者リアの姿が在り、オマケに混沌結晶が砕かれている。

灼眼の大使——サタナキアは心の底から苛立った。

敬愛するルシファアから任された今回の実験を台無しにされた。それがあろうことか人間によって。

部下がヘマをしたなら咎めれば良い。しかし今回は部下に任せたくない案件だったため自ら出張った。

「また来たのか！ こっちは円満に終わりにかけてんだ！ 帰れ帰れ……！」

ゼストの非難の声がサタナキアに向けられた。

「用が済み次第すぐに帰るとも。忙しいんでね、蟻に構つてる暇はないんだ」

だがここは冷静でなければいけない。

いま、この場に居る人間を島ごと消滅させるのは実に簡単であり、数秒で終わる。真下に居るゼストは厄介では有るが脅威となり得ない、片腕の彼は自分を止めることはで

きない。

ただ、先日ゼストに殴られた頬と腹部が痛む。既に傷は癒えたというのに。

サタナキアは無表情で空に手をかざし、光を収束させる。

広域殲滅魔法——【天槍】が収束された光から解き放たれ、メルディア島に降り注ぐ。

「全員伏せろおおっ！」

仮面の男の鋭い声が響くがもう遅い。

【天槍】が配置された大砲を次々と撃ち砕き、衝撃波が人々を襲い吹き飛ばす。

魔法発動から着弾まで数秒。数秒も有ればメルディア島の人間は愚か島一つ消し去る事も可能だ。

「数秒も無駄にできないか。……やあ、良かったねえ、命拾いして。ああ、御大層な玩具は壊させて貰ったけどね」

島を消滅させるメリットが現状では何一つ無い。加えて自身が派手に動けば人間が反感を抱き徒党を組むだろう。

それはそれで構わないのだが、休眠中のルシファアの手を煩わせることは憚れる。

大砲を破壊された海賊達が敵意を向ける中、サタナキアは彼らに顔を向けた。

冷静にこちらを観察するグランバとカトレの姿に、何もできやしないと愉悦感に浸る。

今は攻勢に出れないゼストは唇を噛み締め、サタナキアを睨むばかり。

「うん！ 大人しく引いてあげるから…… 忘れろ」

サタナキアの底冷えした威圧に島民は泡を吹き、海賊が次々と倒れて行く。

本当に脆い種だ。心の底から来る軽蔑感にサタナキアは身を奮わせた。

心に従うままに生きる事が素晴らしくて堪らない。

「勝手な事をほごく」

歓喜に満ちた心に、釘を刺した声の方へと眼を向ける。

フルフェイスの仮面越しから敵意を向ける男の姿が映り込む。

「……これでも譲歩した方だ。こつちは実験資材を一つ失ったからね……とこで弱い

癪に随分と生意気な口を叩くんだね」

「おっと、これは失礼。どうやら大天使様には癪に障る言葉だったらしい……いやいや、

この程度で感情を揺らがせるとは済まなかつたな」

弾んだ声が海に響き渡る。

癪に障るのは事実だが、ここで暴力に訴えるのは野蛮人のすることだ。

天使とは生物の遙か高見に君臨する種族、優れた種である以上野蛮人と同じ行動は同

族から品性を疑われる。

「言うねえ……センスの悪過ぎる仮面の下はさぞかし醜いんだろうねえ」

「ふむ。仮面の下は……まあ、お前の言う通りさ」

「……その仮面の下を暴きたくなるけど。そういえばキミの隣に居るのは勇者かな？」

「他人の空似だ」

サタナキアは男に対してふざけた人物だと思ふ。

しかし隣に立つ少女が勇者本人だとすれば、ここで始末した方が都合が良い。魔核の機能が封印されているが、人間の中で優れた魔力を持つ勇者は後々の脅威となる。

ただ、普通に始末するのは非常につまらない。魔核の封印は勇者には解けないだろうとサタナキアは思う。

勇者を絶望させ、心を壊し人形に作り替えるのもまた一興。

人間の中でも優れた魔力を持ち、ルシファアの魔力を増大させた。謂わばリアは魔力増幅装置としての価値が在る。

しかし、勇者として人間の精神的支柱であろうとするリアの心を壊すには、相応の準備と時間が必要だ。

サタナキアに自然と笑いが込み上がる。

実験を平行しながら次の計画を実行に移せる。魔王城から逃亡した勇者一行の討伐を。

「……せいぜい数秒伸びた寿命を大切にするといい」



それだけ言い残したサタナキアは、光に包まれ消えて行く。

サタナキアが去り、緊張感から解放されたりアが膝から崩れ落ちた。

「なに、なんなの？ アイツの冷たい眼差しは……っ」

「お前に対して何やら思案していたようだが……いずれにせよヤツは快樂主義者に見える」

「……何しに来たのか、何を企んでるのか疑問は残るけど。ルシファーと繋がりが在るのは明白よね」

「うむ、何かしら指示を受けていたのだろう。……しかし戦闘に成らずに済んだのは行幸と言ったところか」

戦えば間違はなく全滅していた。

それだけ脅威であり、二人に焦りが滲み出る。

「大陸に何が起きているのか。天界の動向、実験の目的、ルシファーの最終目的が不明。加えて魔力を取り戻す方法は見つかったが……」

結晶体を砕く必要が有る。しかし、その機会は天使が何かしら事件を起こした時だ。

それではルシファーが何か行動に出る前に阻止できない。

万全な状態で戦えない現状に齒痒くもどかしい、とレオは息を吐く。

ただ、リアは今後の方針が決まったようで、真つ直ぐとレオを見つめた。

「天使が起こす事件を辿りながらルシファーの下を目指す。……長い旅になりそうね」  
「基本方針はそれで構わんが、魔力に関しては他の方法も模索すべきだな」

レオとリアにゼストが駆け寄り、

「なら、あの天使は二人に任せていいんだな？」

強い眼差しで二人を見据えた。

レオとリアは、『任せろ』と言わんばかりに頷き、氷片を足場に陸地へと戻るのだった。

メルディア島とリヴァイアサンを救い、二人は僅かな魔力を取り戻したが、事件の根本的な解決には至らず――

夜空に浮かぶ星々が輝く下では、メルディア島で宴が開かれていた。

島民達がリヴァイアサンを救ってくれた白鯨海賊団とレオとリアに感謝の意を示して。

村の広場に造られた焚火を囲み、踊り子達がメルディア島の伝統の踊りで場を盛り上げる。

中には宴会芸と評し、グール顔で現れる船員に島民だけでなくレオとリアは度肝を抜かれた。

「アツハツハツ！ どうだい？ 本物そっくりだろう」

「驚いたな、変身魔法か？」

レオの質問に船員は胸を張り、得意げな顔で語った。

「違う違う。コイツは特殊メイクさ……変身魔法だと看破の魔法で見抜かれるだろう？」

「確かにそうだな」

レオは思う。彼の技術は様々な面で大いに役に立つと。

まず魔王城で毎年十二月に開かれるパーティーの席、配下を労う催し物に必須だ。そこからレオの行動は速かった。

「なあ、その技術を俺に伝授してくれないか?」

「おつ? 魔王さんも特殊メイクに興味があったか! いいぞお! 折角の宴の席だ、後で教えるよ」

レオは船員と約束を取り付け、仮面の下で満足気に笑う。

そんなレオを少し離れた所から見ていたリアは、小首を傾げる。

「なんか、レオが楽しそう」

「宴だからじゃないかしら? それとも美しい踊り子に見惚れてるのかもね」

「……レオも男ってことねえ」

彼が誰に見惚れようが構わない。それよりもレオが人らしい一面を見せたことにリアは嬉しきを感じた。

もつともリアが思っているような事をレオは決して思っていないのだが――

ふと、リアはカムイとゼストに目を向けた。

二人も宴を楽しみ笑っている。カムイの瞳に復讐の念を感じられないことから杞憂だった、とリアは安堵の息を吐く。

「これで心置きなくメルディア島を出発できるわね」

「そうねえ、村に被害も無ければ特別治療が必要な島民も居るわけじゃないわ。明日は少しゆつくりしてから出航になるわね」

「うん、それじゃあ時間までは何か手伝おうか？ 魔力が少しだけ回復したからちよつとは動けるけど」

ゆつくり休めとカトレが朗らかに語り、リアは言葉に甘え、明日はレオとカムイの案内で“花園”に向かおうと思案した。

メルディア島の“花園”は昔、この島を訪れた王女と彼女を憎みながらも護衛として付き従う騎士が結ばれたという言い伝えがある。

そんな伝承が残る“花園”に恋の一つもしてみたい年頃のリアは、是非とも一度は観てみたいと考えていた。

「ふふっ、随分と頬が緩んでるわね」

「そりゃあね、料理は美味しいし明日の楽しみが有るから！ ……まあ、あの天使に付いては考えないようにしてるけど」

「……アレは本当に天使なのか疑いたくなるわね」

天使とは謂わば女神ウテナに仕える神聖な存在。特に大天使はそれぞれ一人に特別な役職が与えられるほど。

時に女神ウテナの言葉を神官に代弁し、人間の繁栄や苦難の解決の糸口を授ける。

「……天界で何が起こってるのかな。ルシファーをどうにかしただけで根本的な解決にはならない気がする」

仮にルシファーを排除することで簡単に解決できる問題なのか。

それどころか大天使が人間界で討たれとなれば他の天使がどう動く予想も付かない。

そもそも天界の意志でルシファーが動いているか、単独行動なのかさえ今は分からないのだ。

天界に向かうには天界の門を通らなければならないが問題が在る。

リアは天界の門が何処に在るのか知らないのだ。

あれから考えていると。

「天界の動向に付いては白鯨海賊団も調べてみるわ。あたし達が向かう国には名高い大神官が居るから」

「ほんと？ 直接天界に乗り込むことも視野に入れてたけど……あつ、連絡の交換はどうすれば……」

「そうねえ、村か街の酒場——【水竜の寝床】を尋ねなさい。あの酒場はどこにでも在るから」

カトレは、【水竜の寝床】は海賊同士の連絡網や情報を取り扱っているという。時にそこで陸で起きた事件も調べるのだと。

「うん、それじゃあ頃合いを見て尋ねてみるわね」

そしてリアは、優しい目付きで島民達を眺めるリヴァイアサンに眼を向けた。

「キュルル」

嬉しそうに鳴き、島民の子供達と戯れるリヴァイアサンの姿に、改めて救えてよかったと思う。

リヴァイアサンが人間と家族のような間柄になったのは、メルディア島の先祖が瀕死の重傷を負った彼を救ったという経緯がある。

きつと人間が持つ温かさに触れ、彼らは敵ではないとこの島のリヴァイアサンは本能的に理解したのだとリアは推察した。

翌日の朝。レオとリアはカムイに連れられ、メルディア島の中心に在る“花園”に案内されていた。

澄み切った空気が流れ、多種多様な花々が群生する光景にレオとリアは目を奪われた。

四つの季節花が一齐に咲き乱れ花卉が空を舞う光景に。

「これは……見事としか言いようがない。いや、それ以上の言葉は早速不要だ」

どんな言葉を尽くそうとも目の前の光景を、言葉一つで表現できないとレオは思う。

それほどまでに美しく咲き乱れる花々に声を失う。

「……昔、王女と彼女に対して恨みを抱いた騎士が此処で結ばれたんだって。……たぶん、この光景を前にして恨みとかどうでもよくなちゃったのかな」

「その話知ってる。オイラ達が住むメルディア島は、最初は名も無い無人島だったんだ。でも”花園”で結ばれた二人が此処に人を集めてメルディア島って名付けたんだって  
さ」

メルディア島の起源にレオとリアは納得し、カムイが二人の前に立つ。

そして誇らしげに胸を張って――

「オイラ達の自慢の”花園”はすごいだろう」

満面の笑みを浮かべたのだった。

程なくしてレオとリアは海賊船に乗船し、バルディア大陸を目指して旅立った。島民とリヴァイアサンの声援を背にして――





まつさえ配下一人一人に見せる細かい気遣いから魔界のために苦悩する——」

一呼吸で語り出す彼女にマキアは若干引いた。

「あく、はいはい。聴いたあたしがバカだったよ。……それよりもこれからどうるんだい?」

マキアの問いにアルティミアは、先程とは打って変わり真剣な眼差しを結晶体に向けた。

「……あなたが魔王城から盗み出したソレ——混沌結晶はルシファーにとって大事な物のようね。当然と言えば当然、何せソレはレオ様とリアの魔力を融合させ封じ込めた一種の魔核——」

アルティミアは言葉を区切りながら愛おしく抱き締めた魔刀を引き抜く。

鮮やかな蒼天の刃が煌き、マキアの喉元が鳴る。

あの刀は並の武器よりも優れた業物だ。恐らく魔界に一振りしか存在しない貴重な刀。マキアは刀の価値を盗賊の勘から見抜く。

「私達の行動は単純よ。レオ様とリアを捜すついでに追手を攪乱しつつ連中の計画を阻むこと。今頃ザガン達も難民と魔族を連れながら動いてるでしょ……!」

言い終えると同時に、魔刀——蒼天氷雪を茂みに一振り。

斬撃が直線に弧を描きながら茂みに飛ぶ。

「ぐわあああつっ!? う、腕がああああー!!」

茂みから弾け飛んだ腕が血を噴き出しながらマキアの足下に転がる。

そしてアルティミアは不敵な笑みを浮かべ刀身を向けた。

「さあ、私の可愛い同族達よ。連中を捕らえなさい」

静かに命令をくだした。

彼女の言葉に雪羅族達は一齐に茂みに踊り掛かり、辺り一体から悲鳴が聴こえる。

そして羽が宙に舞う。ついでに次々と捕縛された天使達が捕らえられ、茂みの中から

アルティミナの眼前に差出される。

「捕らえました!」

「速っ!? ……あー、あたしらつてとんでもない連中を相手にしてたねえ」

「……マキア殿。確かに敵にすれば恐ろしいですが、今は心強い味方ですな」

頬に刃傷が刻まれた騎士団の隊長の一人——カムランが軽快な笑みを浮かべる。

マキアは呑気なオツサンだと思う。

それでも体と大剣一つで隊長格まで成り上がった武人だ。きつと今も絶えず周囲に

警戒を飛ばしていることだろう。

そもそも既に十名からなる天使の一部隊が差し向けられている。

「さあて天使がわざわざこちらに来たという事は、それだけでコレが大事な物だとい

確証を裏付ける証拠になるわね」

捕らえた天使達は己の失態を呪いながらアルティミアを睨む。

アルティミアの刀身が天使の頬を抉る。

「拷問は趣味じゃないけど、早く白状した方が身のためよ」

優しく促すアルティミアに天使は嘲笑う。

「我々が情報を話すだけでも……っ!？」

頬を抉られた天使の表情が凍る。アルティミアに対する恐怖心では決してない。

何か体温が奪われるような感覚が天使を襲っているのだ。

「早く話さないと傷口から、どんどん凍っていくわよ? 最期には天使の氷像がそこに

出来上がってるかもね」

急速に体温が奪われる様子に天使の頬が引き攣る。それでも天使は決して話そうと

はしない。

数分と続く沈黙を天使は頑なに拒む。

やがてそうこうしている内に、一人の天使は全身が凍り付き氷像と成り果てた。

「あら残念」

「なあ、そいつは死んだのか?」

「簡単に殺すへまはしないわよ。寧ろ喋る必要は無いもの……それに天使よ? 人間と

違ってこの程度では死なないわ」

そう言つてアルティミアは部下に目を配る。

「出番よハーゲル」

「御意」

雪羅族の老人ハーゲルは短く頷き、氷像となつた天使の頭部に掌をかざす。

「な、何をする気だ!」

「《記憶よ、我らに真実を》!!」

ハーゲルは記憶魔法——「メモリーロード」を唱えた。

するとハーゲルの頭の中に、天使が持つ記憶が情報として流れ込む。

「アルティミア様、こやつらは何も知らないようです。なぜ人間を襲っているのかも」

「まあ、そんなところでしようね。用意周到ナルシファーが部下に話すとは思えないし、

二枚羽の天使なんて所詮捨て駒よ」

「それじゃあ、コイツらはどうするんだい?」

「このまま放置よ。天使を斬つたつて面白くもないもの、せいぜい先代魔王フェルミナでも魔界か

ら引つ張り出して来ることね」

アルティミアはいたずらつぽく身を翻し天使にそう告げた。

魔界の門は鍵を持たなければ開けない。当然ルシファーには魔界の門を開く術はな

い。

「アンタも随分いじわるだね」

「分断された仕返しぐらいわね」

舌を小さく出して笑うアルティミアに、マキアは笑みを返す。

「そうだねえ、この財布で美味しい料理にありつくでしょう」

「マキア殿……盗賊稼業から足を洗ったのでは？」

「昔の癖だよ」

マキアは屈託のない笑みを浮かべながら、捕縛した天使達から盗った財布を大手に振るった。

「丁度保存食には飽きてきたしシャワーも浴びたいからねえ」

こうして捕縛した天使を放置したまま、アルティミア達はその場から離れるのだった

## 4—1

レオ達が行方を眩ませ一月余りが経過し、バルディア大陸では梅雨が訪れようとしていた。

バルディア大陸の南西。メンデル国領内のハウゲル地方の港町シルケに白鯨海賊団が寄港した。

「世話になったなグランバ！ お前達は仁義に熱い海賊……いや、義賊だった」

「お前さんにそう言われるのはむず痒いな……まあ、オレ達が海賊である事には変わりねえさ」

別れの言葉を交わすレオとグランバは堅い握手を交わした。

今生の別れにはならないが、海上では何が起こるか予想も付かない。「ミスト・レディ」のような存在が居ないとも限らない。

それでも彼らは悉く障害を乗り越えていくだろう。それに彼らはこれから敵船から奪った親書をエンドラス王国に届ける旅が始まる。

そこでレオはペンゾウに顔を向け、

「お前も達者でな」

たった一言だけの別れを告げ、ペンゾウが深々と頭を下げた。

「魔王様……有り難き御言葉！」

レオは軽く頷き、リアに眼を向ける。

「カトレ……皆も元気でね！」

「ええ、教えたこと決して忘れないようにね。でないとレオが狼になっちゃうから」

「……！　わ、忘れないもん！」

カトレの言葉に赤面したリアに、レオは安堵の息を吐く。

余計な心労を負うことも無くなりそうだ。

「や〜！　リアちゃんと離れるのは寂しいなあ！」

「またいつでも船に乗ってくれよ！」

「レオも達者で！　あの技術で魔族を驚かせてくださいませ！」

彼らの別れの言葉を受け取ったレオとリアはシルケの市場へと歩む。

商人が威勢の良い声と共に商品をこれ見よがしに宣伝し、物に惹かれた客人が財布の紐を緩め購入に踏ん切る。

しかし、市場の出店は少なく通行客も多いとは言えない。

儲けが少ないのか商品の扱いが雑な商人が多く活気が在るのは、ほんの一部だけ。

「ふむ、人通りが少ないな」



すれ違う人々がレオとリアを一瞥見ては、関わりたくないと言わんばかりにあからさまに視線を外す。

「……五十年も戦争が続くとね」

「……早々と用件を済ませるとしようか」

「気になってたんだけど、レオが市場に立ち寄る用件ってなに？」

「コイツを市に流そうと思ってる」

そう言つてレオが取り出したのは一冊の魔法書だった。

リアはその書物を一度読んだことがあつた。他ならない「ミスト・レディ」の起源とミディアが遺した書物だからだ。

本の内容は人々に知られるべき事柄だと理解を示したうえで、レオに微笑んだ。

「なら、早く済ませて出発しましょ」

レオは足早と書物を取り扱う商人の下へ向かった。

ビール樽のような腹に、伸ばされた顎髭をした商人が気怠るような表情を向ける。

「少しいいか？」

「なんだあ？ 本の購入なら一冊で銀貨十枚だぞ」

「ふむ、この書物には興味が有るが……俺は生憎と旅人でな」

「あー、それじゃあ本は宝の持ち腐れってわけだな。冷やかしたら帰んな」

あつちへ行けとぶつきらぼうに手を振る商人に、レオは魔法書を見せた。

すると商人は眉を潜め、それが価値ある書物だと瞬時に見抜く。

「この露店は港から吹く潮風を受けない位置に在る。俺としてはこの価値在る書物を是非ともそちらに譲りたいのだが——」

「ふん、悪いがこの店には価値在る書物を買取取る金なんざねえ」

「まあ、慌てるな。俺はこの書物は大勢の人の目に触れるべきだと考えている。……そこでお前にコイツをタダで譲ろうと思うのだが、どうだ？」

レオの言葉に商人は訝しんだ。怪しい仮面にダークコート、背には背囊はいのうを携行し、腰には剣を携帯しているところを見ると旅人ということに偽りは無いようだ。

しかし表情が見えないことには信用できる要素が薄い。

「望みはなんだあ？」

「さつきも言った通りだ。……いや、言葉が足りなかったな、この書物には「ミスト・レディ」の発生源と子供達に纏わる悲劇が書き記されている。……お前は港街で露店を構えているんだ、噂話には聞いたことがあるだろう？」

商人は顎髭を撫で思索した。

彼の言う話が本当なら、魔法書に書き記された内容を写本すれば売れると考え付く。

ここ最近に起きた税の徴収の値上がりで厳しい生活を強いられ、冬を越すのも難しい

現状だった。

特に魔法書なら考古学者や民話研究者に買い手がいくらでも居る。そう判断したうえで商人はレオに視線を向ける。

「念のため中身を改めても？」

「構わんとも」

商人はレオから魔法書を受け取り、ページを巡り始める。

しばらく読み耽っていた露店主は顔を上げ、

「こんな貴重な書物をワシが扱っても良いのかあ？」

「ふつ、当然だ。店主の店構えは本が傷まぬように配慮している、露店の位置もその一環だろう。それに軽く見渡してみたが他の商人ではダメだ」

商人はよく見ていると感心しながら、レオから魔法書を受け取った。

「……儲けの分配の話もいいんだなあ？」

「うむ、俺は旅人の身。金は有って困らないが荷物になるだろう」

「気前のいい客人がいたもんだなあ」

気怠るな商人は笑みを浮かべた。

レオは暇を持って余していたリアの下へ戻る。

「シルケの北西にグランガルって街が在るけど、まずはそこを目指す？　此処から徒歩で六時間ぐらいで着くそうよ」

「そうだな、特に結晶体について手懸りがある訳でもないからな」

次の目的について話し合う二人に、しよぼくれた男性が声を掛ける。

「グランガルへ行くのか？　あそこは止めておけ」

「えっと、どうして？」

「グランガルの領主がイカレてるからさ。毎晩屋敷に若い娘を招き人肉を喰らうんだ。

……俺の娘だって屋敷に招かれた翌日に……っ」

しよぼくれた男性の悲痛な言葉にレオとリアは驚く。

娘を亡くして間もないのか、目の前の男性が啜り泣く。

彼の言う事件は人間の領主が起こした問題だ。魔王である自身が解決に介入する訳

にはいかない。

そう考えたレオは彼にあえて質問を投げた。

「人が人を喰らう？　騎士団は動いたのか？」

「……グランガルの騎士は領主の私兵だ、動く訳がないだろうっ」

「それならグランガルから西のゼバルの領主を頼ったら？　あの人は平民の言葉に親身

に耳を傾けてくれるでしょ」

「ゼバルの領主はそれほどろじゃねえんだ。……魔王レオが死亡したとかで新たな魔王が即位。結果終わるはずだった戦争は続行され……魔物もメンデル国各地で急激に活発化して行商人に被害が出てんだ」

「新たな魔王……だ、と!?!」

まだ存命な自分を差し置いて誰かが魔王に成り代わり、魔物が各地で活動を活発しているという話に、レオとリアはこれ以上ないくらい驚いた。

魔王城からルシファーが撤退したなら、魔界から先代の魔王フェルミナが代理として統治することには納得がいく。それとも別の誰かが魔王となったのか。

リアは思考に耽り硬直したレオを見兼ねて尋ねた。

「……そ、その、新しい魔王って……?」

「娘さんはメンデル人だろう? 魔王ルシファーの宣戦布告を聞かなかったのか」

「る、ルシファー!?!」

魔力を奪われ何かの実験に利用されているだけでなく、魔王の座も人知れず奪われていた事実にはレオは、仮面の下で怒りの表情を浮かべる。

「バカな! 天使が魔界の王などと……!」

「……まあ、とにかくグランガルの領主は新魔王に通じてるとか、そんな噂も有るくらいで」

「お、驚いたけど忠告ありがとう。それでも私達は北西に向かわなきゃならないから」  
「意志が堅いようで……」

平静を取り戻したレオは彼の瞳を見つめ、

「お前は、俺達にこの話をして解決でもして欲しいのか？」

「……違う、違うんだ。誰かが領主の悪事を白日の下に曝して欲しいんだ。本来なら勇者リアを頼るべきなんだろうけどよ、彼女は行方不明だ」

どうやら目の前の男性はリアの素性に気が付いていないようだ。

しかしグランガルの事件も無視できないのは事実。現に天使が結晶を使い何らかの実験を始動している以上、魔王としても無視できない。

そこでリアは男性に語りかけた。

「グランガルの領主に付いては私達も調べてはみるわ。でも、それで罪を暴いたとして」

法で領主を裁けるとは限らない。そう言いかけた時だった。

「いいんだ。少しはヤツの悪事が民衆に知られればそれでいいんだ」

しよぼくれた男性はそれだけ言うと、近場の酒場へと向かって行ったのは。

悲壮感漂う背中。今は彼に対して何かしてあげることが無い。

「……兎に角、先を急ぐとしよう」

「うん、グランガルのことも気になるし」

一先ず噂を頼りに、レオとリアはグランガルの街を目指して出発することに。

## 4—2

港町シルケの外に広がるグラドス平原。魔物と動物が苛烈な生存競争を繰り広げ、時には街から逃げ出した馬が住み着くことも。

そんなグラドス平原に雨が降り草木に恵みを与え、雲の隙間から竜の影が垣間見える。これも人間界に広がる大自然の光景だ。

魔界では決して拝むことが叶わない喪った光景――

雨に打たれながらレオとリアが、グラドス平原に整備された石畳み造りの街道を三時間ほど進んだ頃だった。

「むう……めんどいな」

「もう！ どうしてこうなるだろうね！」

額に汗を滲ませ悲鳴を挙げる足の筋肉を突き動かしながらリアは叫んだ。

背後に視線を向ければ、石斧や石槍を携えたオークが大群を成して追い掛ける光景が映り込む。

軽く見渡せば五十頭余りのオークが鼻息を荒げ、口元から涎を滴らしている。

「絶対村でも襲撃に行く数よね！」



「そうだろうな。……このまま走り続ければ街に着くが、いつそ騎士団に押し付けるか？」

「うえっ!? そ、そ、それは、ちよつと」

魔物を街の門を護る騎士に押し付ける。それは下手をすれば街に魔物の侵入を許すことに繋がる。

そんな事はリアにはできず、レオの提案に上擦った声で難色を示した。

と、その時だった――

「貫ったああああー!!」

雄叫びと共にレオとリアの頭上を飛び越え、石斧を構えたオークが着地したのは。

オークはすぐさま振り返り、レオに石斧を左薙に振るつた。

レオは鞘から魔剣フェルグランドの剣身を僅かに引き抜き、剣身を押し当て迫る石斧を弾く。

大きく弾かれ、腹部がガラ空きのオークにレオは右脚で駆け上がり、オークの後頭部に向けて身体を捻り、左脚でオークの後頭部を蹴り飛ばした。

するとオークは蹴りの勢いに負け、濡れた石畳みに足を取られ転げた。

「お、おわあああー!?!」

「お、おま?! こつちに來るなあああー!」

一頭のオークに次々とオークどもは脚を引つ掻け総崩れとなり、レオとリアは全力でその場から逃げ出す。

「……ふう、ふう……っ。何とか撒けたか」

「……はあ、はあ……んっ。途中で諦めたみたいね」

乱れた呼吸を整え、雨と汗で濡れた顔を拭う。

もしも魔力が僅かでも回復せず、あのオークの大群と遭遇していたら。

きつと逃げ切ること叶わず、オーク如きにレオとリアは今頃食べられていただろう。

二人は改めて魔力の有り難みを噛み締め、視界に映り込む街の外壁へと眼を向けた。

グランガルを囲む高く積み上げられた石壁、魔物迎撃用に配備された大砲が野晒しとなっている。

「……ここがグランガルか」

「私も前に一度だけ来たことがあったけど、グラドス平原で採取できる琥珀を使った装飾品が有名なあ」

「装飾品の類には興味は無いが……速いところ検問を済ませてしまおうか」

雨に濡れた身体を抱き寄せるリアの様子に、レオはそう提案したのだった。

街の門に常設された行商人から旅行者、果ては旅人に難民と思われる者達が並ぶ検問

の列に二人は並び、程なくしてレオとリアの順になると。

騎士が訝しげな表情を浮かべた。

「……勇者リア様？ なぜあなた様がこんなところに……」

「うーん、詳しく話したいところだけど」

チラリ、とレオに目を向けると騎士が眉間の皺を深め、携えた騎士剣を引き抜く。

その様子に検問に並んでいた人々から悲鳴の声が漏れる。

「怪しいヤツめ！ その仮面を外し正体を現せ！」

彼の怒声を合図に待機していた騎士達が躍り出る。

レオを取り囲む騎士の様子にリアの心臓が跳ね上がる。

こうなることは予感していた。しかしレオは検問に関しては任せろの一点ばかりだった。

それでもレオは、今は共闘関係であり連れだ。

「ええつと、彼は私の連れなの。だから見逃して……？」

マキナ直伝かわいく小首を傾けおねだりすると、騎士は頬を赤らめた。

「ダメです！ いくら勇者様の頼みとは……いま、なんと？」

「私の連れって言ったのよ」

「……こんな怪しい仮面で素顔を隠したヤツが？ 大変申し上げ難いのですが、もう少し

し連れは選ぶべきかと」

「……別にいいじゃない」

リアの不機嫌な声に騎士の一人はたじろぐ。しかしこちらも職務、怪しい仮面の男が人間に扮した魔族とも限らない。過去に変装した魔族を悉く見逃しているのだからなおさら。

その意味では職務は忠実に全うすべきだ。

「さあ、怪しいヤツよ！　これ以上勇者様に御迷惑を掛けたくないのなら潔く素顔を曝すのだな！」

「ふむ、火傷の傷が酷くともでは無いが人に晒せないのだが」

「そ、そんな事情が……！　い、いや、しかし……！　身の潔白のためにも素顔を拝借させてもらう！」

なんとも真面目で忙しい騎士だとレオは内心で想いながら、ゆつくりとフルフェイス仮面に手をかける。

周囲に緊張が走る中、レオはフルフェイス仮面を外して見せると、

「えっ!？」

「っ!?!　こ、これは……酷い火傷だ」

「確かに酷い……!」

「ああ、素顔を隠したなるのも納得がいく」

リアが驚く中、騎士達は口々に反応を示した。

しかしリアには腑に落ちない点があった。いま目の前に曝されたレオの素顔は、顔の右半分が酷い火傷で潰れ左目は水色だ。

自分の知っているレオは、魔族の紅い瞳に綺麗な顔している。

「果たして俺の疑いは晴れたのだろうか？」

何処か不安な声で呟くレオに、今度こそリアは目の前の人物が偽物ではないかと疑いはじめる。

こんな状況下でも魔王レオなら自信に満ち溢れた言動を発する。少なからず自身の知るレオという男はそういうヤツだ。

だが声は正にレオのもので、腰まで伸ばされた白髪が何よりの証拠だ。

「う、うむ。……失礼した。こちらの書類に必要事項の記載を！ ああ、勇者様は後ほど騎士団の詰所に出頭願います」

「う、うん。私も魔王城で起きたことを報告したいから」

空返事で返すリアの様子に騎士達は首を傾げる。

しかし当のレオは特に気にした素振りを見せずフルフェイス仮面を再び装着し、書類に記載していく。

リアは、考えても仕方ないとため息を吐きつつレオに倣う。

旅人なら訪問理由と通過か滞在かの記載、行商人ならば取扱う商品と蓄積量の記載が求められる。

レオとリアは事前に取り決めていた通りに書き記し、騎士に提出したのだった。

「……では既に知つてるとは思いますがこれも職務の一環ですので……門を通り抜ける際に看破の魔法が魔法による偽装を暴き出しますが、まあ勇者様とその連れとなれば何も心配は要らぬでしょう！」

（心配だらけなんですけどおお!!）

騎士の規定通りの言葉にリアは心の中で叫ぶ。

ここで誤魔化しても怪しまれるだけなため、リアは大人しく門を通過した。

すると門の天井と地面に設置された魔法陣がリアの身体を上下に動き出す。

リアは何も偽っていないため魔法陣は何も反応を示させず、彼女はそのまま門を直進していく。

そして、門の外側でレオを待つと——彼は何の問題もなく門を通過した。

「む、どうしたのだ？」

そんなレオの声に、自分の心配は何だったのかりアはレオを睨む。

「一体その火傷と瞳の色はどうしたのよ」

「ああ、コイツは白鯨海賊団の船員に教えられた特殊メイク技術にカラーコンタクトだ。……フツ、どうやらこのクオリティにお前すら騙せたようだな」

レオは仮面の下で勝ち誇った表情を浮かべた。

門に施された看破の魔法は、魔法による嘘偽りを暴く魔法だ。だから化粧品によるメイクや技術は嘘と見做されず看破の魔法は反応しない。

とはいえ三年前にレオが訪れた街では、看破の魔法はまだ検問に設置されていなかった。

東の大陸から伝来した魔法技術をギリガン王が取り入れたという経緯が有る。

「まあ、これからは検問の心配が無くなったって事でここは一つ納得しておくわ」

こうして二人はレンガ造りで統率されたグランガルに到着し、騎士団の詰所に足を運ぶ。

いつでも魔核を砕けるように備えながら――

## 4—3

グランガルの中央広場に設けられた騎士団の詰所にレオとリアは踏み込んだ。

案内された待合室で待機してる最中、レオは窓の外から風に揺れる旗に目が行く。

グランガルの領主アルバート伯爵の家紋が刺繍された旗が、雨風に揺れ動いている。

貴族の象徴の内の一つ。

そういえばメンデル国の国旗は不死鳥。昔、愚かにも不老不死を体現しようとした国家に対しての戒めなのだ。

「羊か、この街の領主は牧民だったのか？」

「そうらしいわ。正確には先祖がグラドス平原の遊牧民民族で羊飼いだっただけ。それがハウゲル地方が三百年前の戦乱に襲われた時に、挙兵して武勲を挙げたって聞いたことがある」

「なるほど。……しかしグラドス平原には遊牧民の影もなかったが」

「詳しいことは分からないけど、彼らは大陸東部に追い立てられたみたい……」

遊牧民民族とは自然と共に生きるとレオは、かつてセオドラから聞いたことが有っ



た。

彼らは風と大地と対話し、大自然の中で研ぎ澄まされた五感が悪意に敏感だったとい  
う。

少なくともセオドラが存命時は、遊牧民を東部に追い立てることなどしなかった。

昔の思い出に浸っているとドアが開き、乱暴気味な足取りで老年の騎士とタイプライ  
ターを抱え込む少年騎士が入り込む。

老年の騎士——ハングはレオを一睨みしてからリアに甘い目線を向ける。

「遅れて申し訳ございませんなあ、勇者様」

「事前連絡も無しだから別にいいわよ、ハング部隊長」

「……して、報告に聞いてはいましたでしたがその者が勇者様の連れと？」

「そうよ、お互い利害関係が一致してるから目的を果たすまでだけど」

ハングは目的と小さく反復し、タイプライターの小刻み良い音が室内に響く。

どうやら少年騎士は記録保持係のようだ。

「……時に勇者様はなぜ魔王城から離脱を？ ああ、決して咎めている訳ではありません

んで、時に撤退も必要ですからな。しかし、解せぬのは北西部の魔族領からなぜ遠く離  
れたこの地に……？」

「魔王と戦闘の最中、大天使ルシファーに奇襲を受けてね。それで咄嗟に魔王が轉移石

を作動させたの。気が付いた頃には私は遙か南の島、仲間の姿は何処にもなく……そんな時だったわ、彼と出会ったのは」

真実混じりの嘘にハングは、納得した様子を見せながらレオに顔を向ける。

「なるほど、貴殿はなぜそんな島に？ 過去に罪でも犯し島流しの刑にでもあったのかな」

嫌味を隠さないハングに、レオは仮面の下で笑みを作る。

世界各地に放った諜報員からの情報の中には、勇者リアは騎士の間で崇拜され慕われているという報告があった。一部騎士の熱狂振りは、正にアイドルだという。

大方ハングもその内の一人なのだろう。それならリアの言葉一つで手駒にするのは簡単だ。

「……フツ、まだ人類が見ぬ世界の果てを目指したのだが、船が転覆してしまつてな」

「……勇者様、怪しい男と行動を共にするのはよした方がよろしいのでは？ 我が隊から数名の部下を派遣してもよろしいなら」

「島から大陸に帰還して知つたけど、魔物が活発らしいじゃない。戦力は魔物に充てるべきよ……それよりナナ達の情報は何か無い？」

「……何も存じてはおりませぬ」

リアの問い掛けにハングは、僅かに彼女から視線を外した。

レオはそれを見逃さず、注意深くハングを観察する。

挙動こそ堂々としているが皺が寄った手は汗ばんでいる。

「そう。……そういえばルシファアの宣戦布告にギリガン王はなんって？」

「……引き続き同盟国と連携し、対応に当たるそうで」

「戦争は続行、魔王レオが居なくなっても終わらないのね」

「……魔族と共存など夢物語ですぞ。しかし、長きに続く戦乱によって我々は疲弊しているのも確かですな、引き続き勇者様には民の希望であって欲しいのですが」

ハングの言葉は、そのまま意味だ。リアに引き続き戦線に向かい魔王ルシファアを討ち果たして欲しい。

少なくともレオにはそう聞こえ、内心馬鹿馬鹿しいと感じながらリアに眼を向ける。

「……その事だけど、私は今、殆どの魔力をルシファアに奪われちゃってるの。魔核が不調なのか、魔力も一向に回復しないわ」

「な、なんと!?! 魔力が……では、勇者様は魔力を取り戻す事を先決に、いやしかし、魔核研究所に向かわれた方がよいのでは？」

「……どうにも私の魔力が紫に輝く結晶体に封じ込められ、利用されてるみたいだね。それを碎けば魔力を取り戻せるんだけど、多分私が直接碎かないと解放された魔力は大気に溶け込んじゃう」

「紫の……心当たりはありませんが、この一件は領主様にも報告しましょう——」

レオとリアは、シルケで聴いたアルバートの話を思い起こした。

「この騎士は警戒すべき相手。しかし騎士である以上、国にリアの現状を報告する義務が有る。」

そんな事を考えているとハングが、

「ところで、何やら領主様に対して根も葉もない噂が囁かれているようですが、何か聴いてたりは？」

「うーん？ 特に何も聴いてないわ。ちなみに噂って？」

「ああ、何も聴いていなければけっこう。勇者様がお気に召すような事ではありませんが、何か聴いたらな。……それと一度領主様の下に向かわれるのが宜しいでしょう、勇者様に会いたがっておられましたから」

「日を改めて訪ねてみるわ」

リアは今日は雨に濡れて土臭いし、と付け加えて。

ハングは彼女の言葉に笑みを浮かべ、報告書を纏めた少年騎士の耳元で囁く。

「それじゃあ私から報告する事はもう無いから、帰らせてもらおうわ」

「おや、是非とも騎士の訓練を見て頂きたかったのですがな」

「うーん、興味は有るけどまだ宿も取ってないから」

そう伝えるとハングは名残惜しそうにしては、レオとリアを見送るのだった。

西通りの小さな古びた宿屋に到着した二人は、早速受付カウンターに向かったのだが、

「悪いけどねえ、用意できる部屋は一人部屋だけなのよ。最近、魔物から逃れた難民が避難して来てるからねえ」

受付嬢の言葉に驚愕し、言葉を失った。

二人で一つの部屋に寝泊まりする。それこそ本来敵同士の二人が同じ部屋に寝泊まりなどなんの冗談だ。

しかし街の中に溢れた難民の様子を見る限り、何処の宿も似たようなものだろうとレオは判断した。

「……………そ、それじゃあ……………一部屋でお願い……………します」

顔を赤く染め上げたリアの言葉は、最後には消えてしまいそうな程に小さくなった。

そんな彼女に対して受付嬢が優しく微笑む。

随分とかわいい宿泊客が来たもんだと。

「一部屋で宿泊料としてスピリア銀貨二枚になるよ」

「……………はい」

財布からスピリア銀貨二枚を取り出して支払いを済ませ、従業員に宿屋まで案内され

る。

「浴室は二十二時までなら解放されていますのでご自由にお使いください。クローゼットの中に旅人用の寝間着が入っているおりますので是非ともご利用くださいね——」

「あと食事が必要でしたら、地下が酒場となりなっておりますのでそちらまで、タオルなど必要な物が有りましたら受付カウンターまで、それではごゆっくりと」

従業員は爽やかな笑みを浮かべ静かに退室して行く。

案内された一人部屋は木製で室内はそこそ広く、窓から街の中央広場まで一望できる。

部屋はいい位置に有るが、ベットは一つだけでどうにか詰めれば二人で寝れる程度。

加えて古びた床と壁から隙間風が吹き込む。

「俺は床で寝るが構わんな」

「……この部屋、少し寒いよ」

「む、梅雨時期とはいえ人間にとつてはまだ肌寒いか。まあ、雨で濡れた身体だ、風呂に入り温めれば問題もないだろう」

「そ、そうね」

リアはぎこちない足取りで部屋を出て行く。

雨が窓を叩く音が響く中、一人部屋に取り残されたレオはポツリと。

「……俺も風呂に入るか」  
囁き浴室へと向かうのだった。

## 4—4

風呂に入り体の汚れを清め、芯まで温めた二人は地下酒場で食事を済ませ、部屋に戻るのだが――

「……レオもベットでね」

寝間着に着替えたリアは、ベットに腰掛け意を決して言った。

「なぜだ」

レオから低めの声が唸るように発せられる。

「お風呂で体を温めたけど、やっぱりこの部屋は寒いわ。丁度詰めて寝れば温かいか  
なって……それにレオは魔王でしょ？ 仮にも敵国の王を床で眠らせるのはちよつと」

「ならばお前が床で眠れば問題はないだろう」

「ちよ!? 女の子に冷たい床で寝ろって普通言うかなあ!」

レオは知ったことかと言わんばかりに、カーテンを閉め切りフルフェイス仮面を取り外す。

そしてポケットからメイク落としを取り出し、顔に施したメイクを落とし始める。

「……じよ、冗談だよね?」



「ああ、本気だ」

綺麗さっぱりメイクを落とし、カラーコンタクトを取り外すと元のレオの素顔に戻った。

そして腰に携行していた魔剣フィルグランドを壁に立て掛け、ベッドに腰掛けた。

「床で寝たら私が寒いでしょ!」

「はあく恥じらいを身に付けたと思えば、おかしな提案をするものだな」

レオは呆れ気味にため息を吐く。

正直彼の言っている事は正しい。ベッドが一つしかなければ誰かが床で寝るのは道理。しかし、それでは結局の所人間であるリアは寒い。

同室で今もなお恥ずかしい事に変わりは無いのだが。

そもそもなぜこの部屋に暖炉が無いのか。

「今の状況も随分恥ずかしいのよ」

「お前と同じベットで寝るほど馴れ合う気はない」

はつきりと告げられた言葉が胸を強く締め付ける。

本来魔王と勇者は敵同士、だからレオの対応も納得がいき理解もできる。

「……私は、もう少しお互いに気を許してもいいと思う」

ポツリと漏れた言葉に、レオはいよいよ頭を抱え始めた。

彼は困り顔を浮かべながらしばらく考え込み、

「……………仕方ない、お前が風邪を引いては元も子もないか。それこそ回復までに数日要するな」

観念したように答え、紅い瞳がリアに向けられる。

ベットで寝る寝ないの話は片付いたが、まだ話しておくべき事が有る。

「明日にでもアルバート領主と会おうと思うんだけど」

「例の話か。早急すぎる気がするが？　まだ俺達は屋敷に結晶が在ると断定した訳でもない」

「うん。結晶を壊して速い所この街から離れようと思ってたけど、やっぱり証拠は必要よね」

「やけに先を急ぐではないか」

もちろん先を急ぐ理由が有る。魔王と勇者では決して解決できない問題に直面するからだ。

「あの人の願い通り領主の罪を白日の下に曝したところで、情勢の関係でアルバート領主は法で裁かれないわ。でも罪を知った領民、特に娘を殺された人達は許さないでしょ」

「それは道理だな。お前が懸念しているのはその後の影響だろう？　今は難民が溢れ、

「この騎士は文字通り私兵。果たしてこの状況下で領主に何か在れば……」

「当然街の防衛機能を失うわ。特に難民が東のラグリナから流れて来てる以上、グランガルまで失ったら次はバルゼが危機に陥る」

浴場で宿泊客から聴いたここ数日の間に起きた出来事。

その内の一つが魔物によって東の街ラグリナが陥落、ミルゼ村が焼かれそこから逃げ出した難民が隣街に位置するグランガルまで逃れた。

ラグリナの領主は領民を逃すべく先陣を切り、若い命を落としたのだという。

「ギリガン王も戦線から遠いハウゲル地方を気にしている余裕はないわ」  
「……しかし、お前は見過ごせぬのだろうか？」

頭でグランガルの問題を解決した場合の皺寄せを理解しながら、心は無視して良いのか、と訴えかける。

良いはずがない、平民を守るはずの貴族が平民に牙を向けているのだから。

こんな時に頼れる伝、より確実に騎士と代理領主を派遣できる人物は一人に限られる。

「うん、方法は有るけど上手くいかなんかはどうかは分からないわ」

「……ふむ、方法とやらは敢えて詮索はせぬよ。しかし提供する物的証拠は難しいが証言を得られればな」

「……そのためには街で情報集め、屋敷に乗り込む必要があるわね」  
レオは頷く。

結局の所行動に移さなければ何もできない。

先ずは何から調べるか。事件が起きた事実確認とアルバート領主の噂、屋敷の出入りに怪しい人物が居ないかどうか。

特に紫色の結晶体の目撃情報とアルバート領主がイカれた詳しい経緯と時期だ。他にも仲間の安否確認と戦場に居た騎士団がどうなったのか、あれこれ考えるリアを他所にレオはドアへと視線を向けていた。

「……………」

「…………？ どうかしたの？」

「いや、隙間風が騒がしいと思っただけ」

そう笑みを浮かべては、彼は寝転がる。

「随分話し込んだな、もう夜だ」

言われてカーテンに眼を向けると、月明かりが隙間から差し込んでいる。

「明日も忙しくなりそうね」

「…………ああ、しかしルシファーが魔王とわな。四魔将軍とお前の仲間の安否も確かめねば」

「うん、皆無事よきつと」

皆は無事だと言いつ聞かせながら、リアは睡魔に身を委ねた。

寝息を立てるリアに、レオは一つため息。

「全く、気を許し過ぎだろう」

恥じらいを覚えたと思えば、寒い理由で手狭なベットで寝ることになった。

結局折れた自身にも非は有るが、我が好敵手ながら警戒心が薄い。

「俺がここで寝首を掻くとは考えもせぬのだろうな」

リアは気を許し過ぎている。

（お前は果たして俺を討つべき敵として殺すことができるのか？）

この間の仕返しと言わんばかりに、以前より少しだけ伸びた金髪を撫で心中で呟く。

ルシファアの横槍で始まった共闘はいずれ終わりを迎える。それはお互い覚悟の上

での共闘。

「ふむ、今は考えても仕方ないか」

小さく呟きながら、レオは起き上がった。

フルフェイス仮面を装着し、魔剣フェルグランドを片手に静かに部屋を後にして――

## 4—5

カーテンから差し込む朝日にリアは、二、三度寝返りを打つ。

朝だ、起きなければ。きつとレオはもう起きてる。

リアは気怠げな身体を起こし瞼を摩る。

そして辺りを見渡すと、

「……あ、れ？ レオ？」

レオの姿形が無い。あろうことか立て掛けられていた魔剣の姿や仮面すら無い。

「先にご飯でも食べてるのかな」

それなら起こしてくれても良いと思う。

リアは手早く身支度を整え、一階へと向かう。

地下酒場でレオを探し、何処にも姿が見えず結局一人で朝食を食べた。

何処へ行ったのか、とリアは受付カウンターへ足を運び、

「あの、連れを見なかった？」

「昨日の連れかい？ 夜に『散歩に行つて来る』なんて言つて、それ以来帰つてきてない

ねえ」

所在を尋ねれば出掛けた主を伝えた。

夜にレオが出掛けた。しかし彼は未だ帰らず。

この街にはレオが興味を示す物は無さそうだが、それとも一人で先に事件の調査へ向かったのか。

「ああ、そういえばねえ。また娘の遺体が発見されたらしいね。しかも今度は領主様の宝石まだ持ち出されたとか」

「領主の？ 物騒な話ね」

「お客さんはまだ知らないだろうけど、これで二十人目だよ」

二十人の娘が犠牲になつてゐる事にリアは眼を見開く。

自分は事件について何も知らない体を装わなければならない。

「まだ殺人犯が彷徨いてゐるってこと？ 騎士団は何をやつてゐるのかしら」

「さあねえ、領主様はこんな時だつてのに毎晩屋敷に若い娘を集めてパーティーさ。二週間前じゃ考えられないぐらいさ」

そもそもアルバート領主は美食家であり大変真面目な領主だと認識していた。

とは言え、会つたのは一度だけで彼の内面を深く理解してゐる訳でもない。

「二週間前……あつ、私は出掛けるからレオが戻って来たら伝えておいて貰える？」  
「お安い御用さ」

受付嬢は快よく引き受け、リアがドアに手を掛けた時だった。

ドアが開け放たれ、武装した騎士団が仰々しく入り込んだのは。

リアは何事かと訝しむと、一団を引き連れたハングが厳つい表情を浮かべながら、  
「やってくれましたな。あなた様のお連れは勇者様の連れを名乗りながらアルバート邸  
に侵入及び目撃者のリムルを殺害し、宝石を強奪したのですよ」

淡々と事務的に答えた。

突然の事に金槌で頭を殴られた衝撃がリアを襲う。

ハングの物言いにリアは違和感を覚えながら、頭の中で状況を整理する。

（レオが犯行？ 確かにレオは夜更けに出掛けてる。でもレオが人間の娘を殺す理由は無い。ましてやアルバート邸に忍び込む理由は……有るわね）

娘殺しは免罪だが、盗み出した宝石が例の結晶体なら肯ける。

しかし相談も無く騒ぎを起こすとは思えない、なおさら相手は魔王レオだ。証拠を残すとも思えない。

リアは平静を装いながら告げる。

「私の連れが？ それは何かの間違いじゃないかしら？」



「ええ、我々もそう信じたい物ですよ。ですが我が隊員が死体入りの藁袋を水路に投げ捨てるレオの姿を見た」と

「嘘よ」

「信じたい気持ちは理解できますが、あなた様は選ぶ連れを間違えたのです」

このままではレオが疑われる。アルバート領主の情報集めもそうだが、何かがおかしい。

「ねえ、被害者の遺体を調べさせて貰える？ レオが本当に犯人なら遺体には刃傷があるはずよ」

「……………生憎と遺体には刃傷は見回りませんが……………おい」

ハングは複数の騎士に眼を向けると、彼らは一歩踏み出す。

「昨晚、この目でレオが魔法で殺害する処を目撃しました」

「それはどんな魔法だったの？」

「炎魔法——【ファイア】でしたね」

ああ、彼らは嘘を付いている。リアは騎士の証言から一つの嘘を読み取った。

「我々はレオを捕らえるべく囲みましたが、吸収魔法——【ドレイン】によつて魔力を奪われ……………クッ……………！」

一人の騎士は悔しそうに唇を噛んだ。

レオが敵を無力化する手段として「ドレイン」も有るが、初級魔法を数発扱える今の彼なら恐らく。

恐らくレオは睡眠魔法——「スリープ」で眠らせるか、目撃者を殺害せず記憶を消すか幻覚を見せる筈だ。

彼は無益な殺しを好まない。戦場に現れたレオは正に恐怖の象徴だが、市街戦に於いては決して一般人を巻き込まない。

リアは直感的にどういう訳か、騎士団がレオを嵌めようとしている事を理解した。なるほど、領主の私兵とは言い当て妙だ。

「私にレオが無罪だって確定付ける証拠は無いけど、あなた達はレオをどうする気なの？」

「捕らえ次第、罪人として処断されるのが妥当でしょうな。ああ、あなた様の現状は重々理解してます。代わりの者を派遣致しますよ」

「……仮にレオが犯人だったら、私はしばらく一人で旅をするわ。だって私は信じてた人に裏切られた事になるわ……その後には別の誰かと旅なんてできない」

リアの言葉にハングは表情を顰め、口惜しそうに頷く。

「なるほど、心中お察ししますよ。……一応あなた様の部屋を改めても？」  
「構わないわよ」

そうやってリアは客室に案内し、騎士団に調べさせた。

もちろんそこにレオが犯行を行った証拠は一切出て来ず、騎士団の行動は徒労に終わった。

用が済んだ騎士団は足早と宿屋を立ち去り、見送るリアに受付嬢が声をかける。

「なんだか大変な事態になっちまったねえ」

「そうね、本当に大変な事態だわ」

騎士団がアルバート領主の犯行に加担している。

まだ推測の域でしか無いが、そうなればアルバート領主を捕らえたところでいよいよこの街の騎士団の信頼は失われる。

なら誰がこの街を守るのか。少なくとも頼りになる宛ては有るが、先ずは証拠とレオを捜すことが優先だ。

リアは宿屋を後にして、街で聞き込みをする事にした。

大通りを道行く人々に一人ずつ尋ねる。

「あの、フルフェイス仮面に白髪の髪を男性を見掛けませんでしたか？ あのおく白い髪の、白い……白い髪、白い髪の無駄に堂々してる男性は……」

次第にレオの怪しき全開の容姿から、声が沈んでいく。

人々の反応はイマイチで誰も知らないの一点ばかり、あろうことか。

「フルフェイス仮面、なにそれ？　舞踏会の参加者？　そんなことより俺つちとデートでもしない？」

などと言われる始末でリアのレオ捜しは難航し、

「ちよつと聞きたいことが——」

「……あなた可愛いわね。悪い事は言わないわ、すぐにこんなイカれた街から離れなさい。ほら、騎士の見張りが付いているでしょう？」

身を案じて小声で警告する女性の言葉に、リアは笑みを返す。

「ありがとう」

「ふふ、それじゃあね」

リアは注意深く領民の表情を観察した。怯えを隠し平常に振る舞う彼らの表情。中には騎士に路地裏に連れて行かれる男性の姿まで。

これではこの街の騎士の信頼を気に掛けるだけ無駄だ。リアはこの街で起こる事件に息を吐き、別の場所へと移動を移す。

騎士団の監視と尾行に気付きながら——

## 4—6

——レオが姿を眩ます少し前——

晴れた夜空に浮かぶ月明かりがレオを照らす。

王都ともなれば魔力によつて灯された照明が街を照らすのだが、月明かりに眼を細める。

太陽が無ければ月も星も輝かない。人間界に來たばかりの頃は毎晩夜明けまで星を眺め、自身の名の由來となつた獅子座を探したものだ。

物思いに耽けながら暗い通り道にレオは足を進めた。

特にこの先に用がある訳では無いが、宿屋で盗み聞きを働いた者の正体を探るために必要なこと。

(さて、どう出る?)

後方から物陰に身を潜めながら忍び寄る金属混じりの足跡。

お粗末な尾行にレオは、連中の練度の低さに息を吐く。もつとも前線から程遠い騎士、ましてや領主に雇われた者では経験不足も領ける。

この国の騎士は徴兵による兵ではない。騎士学院を卒業した生徒達がその後各々の

適性と成績に応じて配属が決まる。

（ふむ、何か事件を隠蔽するには不慣れ過ぎるな。やはり最近の事なのだろうか）  
そんな時だった、静寂に包まれた通り道に一陣の風が駆け込んだのは。

「何者だ？」

目前に現れたフード仮面の男に問い掛ける。フードで髪が隠され、仮面で瞳を隠している。そこまでして正体を隠す者が訪ねたところで名乗らないのは、レオも承知のうえだった。

案の定と言うべきか、男は問い掛けに答える代わりに、両手に短剣ダークを構える。

誰かに雇われた暗殺者に狙われている。考えられる理由としては、リアに近づく不審人物の排除、アルバートに探りを入れる邪魔者の排除か。

それにしても、とレオは思う。早急に監視され宿屋での会話を盗み聞きされたと。

暗殺者はゆらゆらと徐々に、確実に距離を詰める。

考えている暇は無い。この場をどうにかして気に抜けるには、些か魔力が足りない。レオは魔剣フェルグランドを引き抜き構える。

フード仮面の男——カイクスは訝しむ。

暗殺者を目の前にして堂々と構えるレオの姿に。

標的の魔力量は少ない。初級魔法を数発程度分だ。油断さえしなければ確実に仕留

められる相手。

そう頭で認識する自分と、不用意に間合いに入るな、と警戒する自分が居る。

(……何者だ?)

勇者リアに付き纏う不審人物の排除及び領主に対し、不穏な動きを見せる危険人物。そう評され依頼を言い渡されたのだが、下調べとして宿屋の会話を盗み聞きしたが、勇者とは少なくとも気心知れた間柄と見受けられる。

勇者の近寄り彼女を隠蓑に悪事を働く下手人。単純な悪党ならば外道の方法で仕留められるが彼は違う。

(……いや、これも彼らのためだ)

多額の報酬が約束されている。少なくとも当面は彼らの生活を賄える額だ。

カイウスは一気に勝負を決めるべく、腰を低めに地を蹴る。

一瞬の内にレオの懐に入り込み短剣で急所を抉る。事はそれで済むはずだった——  
 【ドレイン】——っ!!」

無詠唱から吸収魔法——【ドレイン】が陽炎の腕を形作り、カイウスに放たれる。

しかしカイウスは、地を弾むように蹴り強引に体を捻り方向を変え、寸前の所で【ドレイン】を躲す。

不意打ちの魔法を躲した。これでヤツは無防備だ、と。しかしその見通しは魔王を相

手にするには甘い。

避けられた「ドレイン」が方向を変え、カイウスを背後から掴む。

「ぐあつ……き、貴様……っ！」

不自然なまでに魔力が少ない相手。だが、繊細な魔力コントロールで魔法の軌道を遠隔操作で変えた。魔法の駆使には其れ相応の精神集中力が求められ、なおかつ方向転換を加えるとなると魔力コントロール技術が必要だ。

理解した所でたちまちカイウスの魔力を奪われる。

陽炎の腕がレオの下に還り、彼の総合魔力量が増える。

（バカな、魔力量の上限が増えただと？ いや、違う。何らかの原因で残り魔力が少ないんだ）

魔力を使い果たした後、しかし街中で標的は一度も魔力を使っていない。

ならば街に来る道中か。これも違う気がするが、現状で納得いく答えはこれしかない。浮かばない。

幸い奪われた魔力は戦闘継続に支障をきたさない程度だ。まだ自分はやれる。

カイウスは再びダークを構え直す。

「……ふむ、お前が俺を襲う理由はなんだ？」

ぐぐもった声を発しながらレオは視線を向けた。



「ここで死ぬ貴様には必要ないことだ」

「そうか」

それだけ眩いた瞬間、レオはカイウスの目前に姿を現す。

（歩法魔法技——【宿地】だど!?!）

【縮地】の速度と筋力が合わさった強烈な力が乗った右薙が繰り出され、カイウスは両手のダークで魔剣の刃を挟み込む形で受け止めた。

その瞬間カイウスの身体は押し返され、レオは隙を逃さんと距離を詰めるが、カイウスは三本の隠しナイフを投擲する。

だが、左右に移動を挟み飛来するナイフを避けた。

距離を詰めるレオの腹部に上段蹴りを放つが、レオは放たれた右脚を素手で受け止め、カイウスの体を投げ飛ばす。

仰向けに倒れるカイウスの首筋に魔剣の剣先が当てられる。

完全に油断した。その隙を突かれた結果がこれだ。

「魔力が少ないと油断したな。お前の敗因は魔力回復を許したことだ」

「……多少の回復でここまで化けるのか」

「なに、魔力の扱いにも技量が必要なだけだ」

カイウスはここまでか、と息を呑む。

だが、レオは魔剣を振り下ろさず鞘に納めた。彼の行動にカイウスは目を見開き狼狽える。

「な、なぜ……殺さない」

「お前は腕が良い、殺すには惜しいと思つてな」

「……惜しいだ、と？ 次また貴様を殺しに来るのにか？」

「お前では俺を殺せんよ。俺を殺すのはアイツと決まっている、それまでは誰にも殺されてやるつもりは無い」

そう言いながら背を向けるレオに、カイウスは戦意を削がれた。

飛び込んだら最後、次は確実に殺される。彼の背中が、『それ以上は殺す』と物語っているからだ。

カイウスは闇に溶け込むように、その場から姿を消す。次は必ず殺すと決意しながら。

暗殺者が立ち去つた通り道で、レオは仮面の下で笑みを深める。

暗殺者との戦闘の最中、物陰からこちらを観察する騎士の姿が見えた。

つまり、彼は騎士団に雇われた者。殺せば殺人罪として捕縛する算段だったのだらう。

「もう、引いたか」

戦い足りない。騎士が襲い来るなら応戦も視野に入れたが、流石に二度目の不意打ちは通用しない。

あろうことか手の内を一つ晒した。

（まあ、取るに足らん問題では有るが「ドレイン」は警戒されたな）

【ドレイン】を警戒するなら別の魔法を使うか。

レオはそんな事を考えながら、夜風に当たりながら散歩を続ける。

（む、そういうえば暗殺者は結局何者だったのか、魔法も魔法技も使わなかったな）

レオはその意味では相手が一枚上手だったと、笑いながら水路へと足を運ぶ。

街の中央広場へと続く石橋に到着したレオは、物陰に忍び込む。

丁度ここからアルバート邸がよく見える位置だ。

（まさか、すぐには女の遺体を運び出したりはせぬだろう）

しかしレオの想いとは裏腹に、藁袋を持ち運ぶ一団が屋敷から現れた。

その光景にレオは思わず、空を仰ぎ見る。

（バカな、工作も無しに堂々とだ、と!?)

まだ藁袋を廃棄するとは決まっていはいない。きつとアレには難民用の麦が入ってい

るに違いない。

だが、一団は橋の淵に近付き辺りを見渡した。

そして誰も居ない事を確認すると、藁袋を水面に放り投げた。

「ふう、毎晩運び出すのは面倒なんだよなあ」

「でも、良いんですかい？ こんな街の真ん中の水路に捨てて」

「大丈夫だろ、ここは上流だ。後は難民が集合する難民キャンプに流れ着くさ」

レオはその言葉を背にして、下流へと足を向けた。

水路を流れる藁袋を回収し、中身を改める。

するとレオは顔を顰めた。

「これは……惨いことをする」

藁袋の中身は死体と箱。それも若い娘の死体だ。

問題は、胸から腹部にかけて肉がごっそりと無い。剥き出しの肋骨と背骨、そして太ももの肉が無くなった死体ということ。

加えて若い娘は、生きたまま肉を切り取られたのか表情が苦痛と絶望に歪んでいた。

遺体の側に有った箱を開けると、そこには高価な宝石類が納められている。

「今回の事件を難民に被せる気か」

いや、違う。もっと罪を被せたい相手が居る。

藁袋の中身は口実に過ぎない。現にこんな夜更けに出歩いているのは誰だ。他ならない自分だけ。

「……リアよ、しばしの別れだ」

それだけ呟くとレオは闇に紛れ姿を消した——

昼時にリアは難民が集まる広場へと足を運んだ。

そこは所狭しに難民用のテントが張られ、水路に近い位置に面している。

難民達が一箇所に集まり、中心に居る若い男性に眼が行く。

灰色の髪に紅い瞳と金色の瞳のオツドアイ、鍛えられた瘦躯の体が特徴的な男性だ。

「もう少しだ。もう少しで纏まった金が得られるから我慢してくれ」

「そうは言っても……わたしはお前さんに無茶だけはして欲しくないんだよ。特にお前さんに流れる血を知られたら」

老婆の言葉に灰色の男性は何でもないと笑みを浮かべる。

リアは集まる彼らに声を掛けようか、と一瞬躊躇しては、このままでは無駄足になると考え踏み込んだ。

「あの、ちよつと話いいかしら？」

リアの声に気付いた難民達は一様に驚き、灰色の男性が訝しむ。

「キミは……勇者が何か用でも？」

勇者と知って警戒されている様子にリアは苦笑を浮かべる。

誰しもが勇者を歓迎するとは限らない。特に難民という立場に追いやられた者達は、『どうして自分達を守ってくれないんだ』と怨みがましい眼差しを向けることも有る。

今もここに居る難民達は、敵意までとはいかないが疑念とぶつけない不満を必死に堪えている。

勇者は人々の象徴であると同時に行き場の無い憤りの吐口だ。それを受け入れた上でリアは勇者であらうとする。

ただ、時折りそう言った感情と向き合う事が恐くて仕方ない。

「ちよつとこの街で起きた事件に付いてね、あとは昨晚から所在が掴めない私の連れの行方捜し」

「……………連れの所在？ 見ての通り此処は難民キャンプだ。キミの連れが居るとは思えないけどね」

灰色の男の言葉に、改めてリアは辺りを見渡す。

そこにはレオの姿が無いことは確かだ。

「どうやらそうらしいわ。……………全くよりもよつて殺人犯に担ぎ上げられるなんて」

「殺人犯？ キミの連れは誰かを…………？」

「ううん違うわ。容疑を掛けられているだけ、でもこのままじゃ犯人にされそうでちよつと困ってるのよ」

「因みにどんな人なんだ？」

「フルフェイス仮面に白髪的男よ」

灰色の髪は眼を細め、ほんの僅かに身じろいだ。

彼の様子にリアは小首を傾げると、老婆が口を挟む。

「グレイは今から仕事なんだろう？　話はわたしが引き継ぐから行ってきな」

「ああ、後は任せた」

そう言つてグレイは足速にその場から立ち去つて行く。

「えっと、それでおばあちゃん？」

「わたしらはそんな怪しい男は見ちゃいけないけどね……ああ、そういえば孫のリムルが

領主の屋敷に行つたきり帰つて来ないんだ。何か知らないかい？」

その名は昨晚殺害された娘の名だ。

リアは眉を顰め、

「うーん、ちよつと判らないわ」

嘘を吐いた。

まだ何も掴んでいない、それにある場所に一報入れなければならぬ。

そうでなければ目の前の老婆の何も真実を伝える事ができない。

真実を告げればどうなるか。周囲に耳を澄ませると、リムルを心配する声が多数聴こ



える。

きつとリムルはこの人達に愛されていたのだろう。

そんな彼女の死を伝える事がリアにはできない。

「そうかい、いつになったら帰って来るんだろうねえ」

「私はもう少ししたら領主の屋敷に顔を見せるけど、その時にそれとなく聴いてみるわ」

「……そうかい、ならもう少し待ってみるよ」

「ええ、何か分かったらまた来るわ」

そう言つてリアは逃げるようにして難民キャンプから立ち去つた。

後から自分がリムルがどうなつたか知っていると知つた彼らは、きつと怨むかもしれない。

それでも怒りの矛先が自分に向けられるだけまだ良い。リアはそう感じながらながら空を見上げた。

(ままならないなあ)

こんな事は何度も経験してきた、その度に恐怖で足が竦んでしまう。

情報収集に奔走して速くも夕暮れとなった頃、リアは食事のついでに情報を得るため酒場へとやって来た。

大抵の酒場には仕事帰り、街の無頼漢から羽振りのいい行商人が集まる。まさに情報収集に打って付けた。

看板にデカデカと書かれたメニュー表に眼を通し、

「マスター！ から揚げ定食とチルナサラダを」

カウンター席に座り注文、リアは早速隣りで酒を呷る行商人に眼を向けた。

フードを深く被り素顔が見えないが、景気が良いのかこの店で一番高いワインを飲んでいる辺り、儲けがいいことが分かる。

「儲かっている？」

「おー？ 見ての通りこんだけ美味しい酒にあり付けるぐらいにはな」

「そう、私は旅人だから正直お金に困ることもあって、簡単に儲けられる方法はないかしら？」

「商売ってのは簡単にはいかないもんさ、お嬢ちゃんはそれを理解した上で、なぜそんな

質問をしたんだ」

内面を見透かされた事にリアは笑みを浮かべる。

話が早くて都合が良い。問題は騎士が店内にも居ることだが。

「……………ここからはおじさんの独り言なんだがな、この街の領主は二週間程前にとある行商人、いや来訪者から混沌結晶を買い取ったそうさ。

その日を境に領主は魔に魅入られたのか、人が変わったように毎晩娘を招待し、喰らうんだとよ」

「それは……………確かなの？」

「おう、何せ本人が酒の勢いで喋ってたからな。大方権力と戦況で罰せられないと踏んで強気なんだろうよ」

リアは有益な情報を頭の中で反復させ、来た料理に手を付ける。

混沌結晶をアルバート領主に渡した何者かが居る。これでは国内各地で混沌結晶による被害が続出しそうさ。

フードの行商人は酒を呷り、考え事に耽るリアに視線を向けた。

「そういえば、お嬢ちゃんは勇者だろ？　こんな所に居る理由なんかはとある筋から聞いちやあ居るが、お前さんの仲間に半分魔族の血を引いたガキが居るだろ」

思い掛けない言葉にリアは、食べる手を止め聖剣ゼファールの柄を掴む。

そしてフードの男を鋭い眼光で射抜いた。

「あの子の素性なんて私には関係ないけど、もしもあの子に何かしようなんて企んでるなら容赦はしない」

さつきまでリアが纏っていた気配が一変し、フードの行商人は冷や汗を浮かべた。

冷え切った殺意が眼光に乗せられ、彼女の仲間にかかすればどうなるのか容易に察しが付く。

同時にフードの行商人は心底安心した表情を浮かべ、

「何もしないさ。ただ、ソイツが元気にやれてんのか気になってな。情勢の影響も有るが、魔族と人間の間に産まれたガキは生き辛い世の中だからよ」

「そうね。私はこの国の内側でしか見たことがないけど差別が酷いわ」

仲間の一人も出会う以前はそれで苦勞し、同時に顔も見たことがない父親をいずれ天の果てまでぶっ飛ばすと公言するほど。

彼女の望みは、自分と同じ立場に在る混血児を受け入れる拠り所を作ること。

「はあく魔王レオに混血児のための集落を作るって言われたらそつちに行つちやいそうね」

「あん？ 魔王レオ様は既に幾つも集落を作ってるだろ。ただ、戦時中の影響で混血児を迎えられないだけで……あつ」

フードの行商人にリアは笑みを深めた。

いま彼ははつきりとレオを様と呼んだ。魔族が人間に溶け込み生活を送っている者も居ることを知っているため驚きは少ないが、

「ふーん、もしかして絶賛姿を眩ませ中のレオの居場所を知ってるのかしら？」

「……知らない」

間を開けて答えたと言うことは知っているということになる。

あるいは何らかの連絡手段を持っているか。

そこまで考えたリアはポツリと。

「それじゃあ今晚にでも私は、領主の所に行くだけで伝えておいてよ」

「今のお嬢ちゃんじゃあ死に行くようなもんだぞ？」

「そうね、私一人だったら死ぬけど……魔王は共闘関係者を見捨てないでしょ？」

微笑むリアにフードの行商人は拍子抜けた表情を浮かべ、やがて肩を震わせ笑い出した。

一体どの世界に魔王を信じる勇者が居るのか、それが堪らず可笑しくてついぞ笑ってしまう。

「クックツ……：そうかい、居場所は知らんが何とか言伝ては伝えておこう」

フードの行商人は立ち上がり、実に愉快だと言わんばかりに立ち去って行く。

そんな彼の背中を見送りながら、リアは一瞬だけ見えたフードに隠された素顔に考え込む。

(野生人を彷彿とさせる強面、董色の髪と頬に刻まれた紋章……や、まさかね)

魔族は体の何処かに紋章が刻まれているという。

そんな話を何処で誰から聴いたのか、それは彼女の母親からだ。懐かしみながらそれでいて今でも想っている表情を浮かべていたのが印象に残っている。

リアは食事を済ませ、硬貨を置き一度宿屋に戻り、用事を済ませてから領主の屋敷に向かうのだった。

## 4—9

燭台の火に照らされた地下水路の中で、レオは足元に座り込むクマのぬいぐるみに視線を向けていた。

やがて背後から忍びよる気配に振り返る。

「お前か……ジドラ」

ジドラはフードを取り外し大胆不敵な笑みを浮かべる。

魔族の一部は人間の生活に溶け込み、魔族領に帰還せずふらりと気の向くままの旅を送っている。

行商人ジドラはそんな魔族の一人で、レオは彼が人間との間に子を成したと記録していた。

「レオ様、先程勇者リアとお会いしましたが……本日中には領主の屋敷に向かうのと」と

「……そうか、俺は俺の用件を片付けた後に向かうとしよう」

「ああ、レオ様に襲い掛かった暗殺者の件ですかい？ 彼なら領主の屋敷に呼ばれたところで此処には来ませんぜ」

その言葉にレオは顔を顰めた。

暗殺者が追ってくるならここで迎え討つ算段だったが、予測が外れ屋敷に乗り込まなければならぬ。

もつともこの地下水路は屋敷の厨房と中庭の井戸まで続いていることは、一日中調べて判明している。

潜入するならここから、本来なら真正面からと行きたいところだが、それでは無駄な戦闘を強いられるだろう。

特に魔力量に限りがある状態では正面突破は自殺行為だ。

「ふむ、なら屋敷に侵入するがお前は どうする？」

「遠慮しておきますよ。……ああ、それと混沌結晶についてですがね、アレはどうも人を狂わせ魔物を魅了するそうで、魔核研究所にも運び込まれたらしい」

ルシファーが名付けたにしてはいいセンスだと、レオは混沌結晶を評価しながら眉間に皺を寄せた。

あの頭のぶつ飛んだ連中に混沌結晶が渡っただけでも胃が痛む。

今でも魔核研究所は、不老不死誕生の実験を進めているという情報が有る。

人間の魔核に魔族の魔核を溶け込ませることで、長寿と再生力を得ようと試みた。

噂では実験対象に選ばれているのは、勇者リアとその仲間達だという。



「……やはりリアの再生力は……」

彼女本来のものなのか、それとも弄られた魔核の影響なのか。

そもそもレオがその情報を掴んだのはつい先程。

それ以前に不老という形は、魔法使いの到着地点「魔女」が体现しているが、アレは魔核に宿る膨大な魔力で若さを保っているに過ぎない。

（世界、土地に恵まれているというのに人間の欲は底知れんな）

「諜報員として放ったぬいぐるみ族ですらやつと掴んだ情報だが……お前達は引き続き人間社会に溶け込み情報収集に当たれ。ああ、ここ一月余りの情報は魔王城に送るなよ」

クマのぬいぐるみ族は立ち上がり、

「了解しやした魔王様！」

野太い声で水路に入り込み流されて行く。

このまま地上に流れ、誰かに拾って貰う計画のようだ。それそれでゴミとして処理されないか心配では有るが、彼らなら何とか生きていけるだろう。

「……やあ、まさか百年前に人間の市場にぬいぐるみ族を紛れ込ませるなんて思いもしなかったなあ」

「連中の同族間による長距離念話魔法に着目した結果だ。それに愛玩として適している

だろう？」

確かにあの見た目は人間を虜にするとジドラは思う。

現に勇者リアとその仲間達ですら虜にされているのだから。噂では滞在している王城の部屋には彼女達が集めたぬいぐるみが大量に置いてあるとか。

「……ふむ、しかし聞けば二ヶ月程前から樹海国家ユグドラシルの情報が途絶えたそう  
だ」

「……あそこは戦乱当時から鎖国はしちゃいますが、行商人は通してますからねえ。し  
かし——」

「うむ、ユグドラシルには天界の門が存在している。俺も一度あそこから天界に向かっ  
たが、ルシファーは天界の門を通過したと思うか？」

レオの問いにジドラは考え込む。

通常の手段で有れば門を通る必要が有るが、取り分け魔力が高い者は次元の壁を超え  
た転移魔法で移動可能だ。

しかし、それは異空間の流れに押し流されるリスクもあるため誰も多用しようとはし  
ない。

そもそもレオ自身が過去に、三界世界とは全く異なる法則が働く世界に流れ付いたこ  
ともあるぐらいだ。

ただ、ジドラは思う。人間界側の次元の壁に修復不可能な孔を開けばそこから通り抜けることも可能だと。

「次元の壁に孔でも開けたんですかねえ」

「天界の兵器ならば可能だが、女神ウテナが許可するはずがない代物だ……しかし、その女神ウテナもどうなったことやら」

「殺されたら何かしらの崩壊は起きるかと思えますがねえ」

「うむ。神々が死に絶えし時、世界の時は停滞し灰色に染まると言い伝えられては居るが……そんな前兆は無いな」

レオは女神ウテナの件は考えても仕方ないと思考の外に追いやる。

仮に女神なら自らの民の手綱ぐらい握っておいて欲しいと思わなくもないが、とレオは息を吐く。

「……ところでお前はまた行商人として旅に出るのか？」

「ええ、十二年も放ったらかした嫁さんにそろそろ会いに行こうかと」

「……お前は、随分変わった。昔は近付く者は殺す、抜き身の刃のような男だったのにな」

「ハハッ、昔の話ですぞ？ それに人間界に来て太陽を見たら……なんだか誰かを愛したいそんな感情が芽生えたんですよ」

レオはそんな感情を未だ芽生えていないが、少なからず人間界に来てから百年の間で魔族は多少なりとも変化しつつ有る。

家族を持つ者が僅かではあるが増えつつ有る。しかしそれは千年以上生きた魔族のみに現れた変化だ。

それも人間を愛する者も現れ始めたのは、レオとセオドラにとって大きな兆候と呼べるものだった。

(太陽、あの温かさが冷え切った魔族の心を溶かすか)

やはり魔界に太陽は無くてはならない。

「……愛する感情が芽生えたのなら、なぜ妻子を放置した？」

「……どう愛すれば、どう育てればいいのか分からず逃げてしまったんですよ。理解できない感情が胸を占めることに恐怖を感じたと言えば分かりますか？」

「ふむ、概ね人間界で家族を捨てた者はそう語っているな。……戦乱が落ち着き次第、新たな法を立てるとしよう」

ズドラはきつと良い方向に持っていく方だと確信しながら、フードを目深く被り直す。

「それじゃあそろそろ行きますんで、他に何かご要望は？」

「ああ、この周辺の魔物が活発化しているそうだ、ついでに数を減らしてくれぬか？」

「お安い御用で」

ジドラは一礼し、静かにその場から立ち去っていく。

レオは身を振る返し屋敷の地下まで足を運ぶのだった。

全ては混沌結晶の破壊するために――

## 4—10

美食家として名を馳せるアルバート領主、彼の屋敷には多くの料理人が集い様々な食材を扱う。毎晩開かれる晩餐会のために。

料理人と使用人が忙しなく働く中、リアはアルバート領主が待つ執務室に通されていった。

「おお、勇者リア様！ よくぞいらしてくれました！」

「え、ええ……本当にアルバート領主？」

肥えた頬に脂肪で揺れる腹部、混沌結晶が使われたペンダントをぶら下げたアルバート領主にリアは心底驚いた。

少なくとも去年の王族主催の晩餐会に呼ばれた時には瘦躯だったのが、今ではすっかり別人のようだ。

リアが思わず本人かどうか疑ってしまうのは無理もないことだった。誰だって暫くぶりに再会した人物が変わり過ぎているならなおさらだ。

「ハハッ！ 最近素晴らしい食材を発見しましてなあ！ もう毎日毎日食べても食べても……飽きないぐらいには食べ続けてしまう、そんな食材を……」

触った瞳で濁いた笑い声を上げ、不穏な気配を漂わせるアルザード領主に、リアは身を引く。

ここで話を聞き出す前に襲われては意味が無い。

リアはわざとらしく手を叩き、アルバート領主に尋ねた。

「あつ！ そういえば毎晩娘を招待しているのは美味しい食材を振る舞うためかしら」

すると彼は触った笑みを浮かべ、リアの体を頭部から足元まで見渡した。

リアは彼の視線に不快感を感じながら平静を取り繕う。

「……おやリア様の耳に届いておりましたか。……ええ、あなた様が言う通り」

「でもこの屋敷に招待された娘達は誰一人帰って来ず、遺体として発見されてるって聞いてもいるんだけど？」

「……大方貴族に怨みを持つ快樂殺人鬼の仕業でしょうな。全く困った風評被害だ。

……ああ、ですが昨晚の来客はあなた様のお連れに殺害されたようで……」

「……その件ね。ねえ？ 騎士まで使つてレオに罪を擦り付けようとするなんてどういう了見？」

「言つてる意味が分かりませんな。それともリア様は私の騎士を疑うと？ いくら勇者様とはいえ、それはあまりにも横暴というもの」

レオが殺人を行なっていない確たる証拠が有る。

騎士はレオが炎魔法——「ファイア」を使い焼き殺したというが、それは紛れもない嘘だ。

レオは魔族、人間界由来の魔法を使う必要がない。そもそも人間界に伝わる魔法の威力は魔界の魔法よりも劣る。

彼が使うとなれば火炎魔法——「ファイア・ボール」だ。

ただ、馬鹿正直にレオが魔族と言う訳にはいかない。だからリアは嘘に嘘で返す。

「私の連れのレオはね、炎属性の魔法を使えないわ」

「……ほう。それは仮面を付けている理由にも繋がることですか？」

「そうよ、酷い火傷を負ってから炎属性は精神不調で使えなくなっただけ。ほら魔法って術者の精神に左右されるでしょ？」

「確かにそうですなあ。……しかしレオという名は、一体どんな由来で名付けられたのか、あの忌まわしき魔王と同じなど」

リアが知っているアルバート領主は、決して他人の名に対して侮辱めいた言葉を言わなかった。

何がここまで彼を変えてしまったのか、それとも元々だったのか。

リアはアルバート領主に冷ややかな視線を向け、

「それは知らないけど、人の名の由来に疑問を持つ前に私の質問に答えて。あなたは



……招いた娘達をどうしたの？」

その質問にアルバート領主の瞳が不気味な眼光を宿し、彼は三度手拍子した。それは騎士を呼ぶ合図だ。

執務室に一齐に入り込む騎士団、リアは瞬く間に彼らに取り囲まれてしまう。

しかしそこにリアの焦りの色は無かった。こうなることは想定済み、後はどのタイミングでレオが現れるか。もちろん無抵抗にやられるつもりは無い。

そんな中、アルバート領主はゆつくりと口を動かした。

「美味しく頂きましたよ」

アルバート領主の言葉にリアは眼を伏せる。

あの噂は事実でアルバート領主は混沌結晶の影響によって狂った。

同時に疑問が湧く、本当にそれだけが原因で狂ったのか。

「……あの噂は事実だったのね」

「バレていたのなら隠す必要はありませんなあ。今から我々の主食として並ぶあなた様の前に、お教えしましょう」

アルバート領主は柵から幾つかの薬瓶に指を触れながら、

「この混沌結晶が力を与え、こう囁くのですよ『欲望のままに喰らえ、さすれば食の深淵へと至るだろう』と。最初はバカな事をと疑いましたがね、いざ人を眼にすると、絶え

ず衝動が湧き上がるのです。食べたい、人の肉を、未知の食材を、と」

「……魔の誘惑に負けちゃったのね。……でも、どうして主人の凶行を正すべき騎士が同調してるのよ！」

騎士団をリアが睨み付けると、ハングが目の前に現れる。

「我々も領主様に素晴らしい食材を振る舞われ食したのですよ。それが人間の肉だと知った時は、吐き気がしましたがね。……不思議とまた食べたい、そんな欲求に駆立てられるのですよ。あなた様も一度食せば、あの病み付きになる味と食感の虜となるでしょう」

「……詳細をありがとう、でも私は食べないわ！ むしろここであなた達を止める！」

リアの言葉にアルバート領主が嘲笑い、騎士団の面々から失笑が漏れる。

「止める？ 我々を法で裁けばこの街がどうなるのか理解しての発言でしょうか？」

「ええ、だから事前に打てる手は打たせて貰ったわ。大方私の報告なんてして無いでしょうから、懇意にさせて貰ってるソフィア姫に一報をね」

ギリガン王とその御子息であるアンドレイ王子が戦場を支えるなら、第一王女ソフィア姫は民に寄り添い国民を支える。

この国の王族はそうやって分担し今まで国政を維持してきた。

王族宛の手紙は確実に届くよう転移業者に頼んで。だから今頃はソフィア姫が代理

の領主を探し騎士の派遣に動いている頃合いだ。

「……っ！ 王族を当てにするのか！ 流石は勇者、自身に権力が無いから王族の地位を利用するのも厭わないか！」

先ほどもまで丁寧な口調が崩れ、アルバート領主は顔が焦りと怒りで染まり上がる。

「確かに私は権利も無いけど頼れる友を頼っただけよ」

「しかし証拠は!? 証拠が提示できなければ我々を裁くことは愚か拘束することさえ不可能……っ！」

「証拠？ あなたの首にぶら下げてる混沌結晶だっけ？ それ、私と魔王の魔力を奪った新魔王ルシファーが産み出し、何らかの実験に使用している代物よ。果たして、あなたは魔王軍の内通者と疑われないかしら？」

「っ、これは……、これは……」

アルバート領主は混沌結晶を撫でながら、

「ええい！ リアを拘束しろ！ 生きたままだ！ 生きたまま肉を削ぎ落とせ！」

アルバート領主は狂気的な笑みを浮かべ、騎士団に命令を下す。

リアは聖剣ゼファールを引き抜き、魔物の魔核を一つ砕く。

魔力が尽きる前に騎士団全員を無力化するのは無理だ。魔力は体を動かすだけで消耗する。これはレオを信じての賭けだ。

背後から組み伏せようと取り掛かる騎士を、リアは聖剣の鞘で顎を強打し打ち上げる。

打ち上がった身体に回し蹴りを叩き込み、背後に控えていた騎士にぶつけた。

リアの背後から剣を振り下ろす騎士に対して、彼女はそれよりも速く騎士団の鎧を狙い、群がる騎士団に勢いよく回転斬りで薙ぎ払った。

魔力が全結なら騎士の胴体は鎧ごと切り裂かれていただろう。

多少の魔力回復の隙を与えてしまったハングは、忌々しげに舌打ちを鳴らす。

「チッ！ 流石は聖剣ゼファールを受け継ぐ末裔……しかし」

ハングは騎士剣を握り締めながら、部下に眼を配る。

すると部下は廊下から拘束された少年と少女を強引に引っ張り出す。

目に涙を溜め、恐怖に身を震わせる少年と少女にリアはハングを睨む。

「……ッ！ ちよつとその子達は無関係でしょ！」

「フツ、この者は難民。我々の護るべき領民では無い。しかし勇者で有るあなた様は違う……さあ、武器を棄てて頂こうか」

少年と少女の首筋に剣を当てる騎士に、リアは迷わず聖剣を上空に放り投げる、同時に、

「《光よ、極光となり照らせ》」

魔法技——【極照】を放つ。

光の極光が剣身から解き放たれ、光が執務室全体を包む。

「ぐわあああ、め、目がアアアアっ!？」

手元に戻った聖剣を鞘に納めたリアは、すかさず少年と少女を拘束していた騎士の腹部に、

「寝てなさい! 【鋼破掌】 っっ!」

詠唱破棄の魔法技——【鋼破掌】を叩き込む。

騎士の体内に衝撃波が襲い鎧が砕ける中、彼は叫ぶ暇も無く意識を手放した。

そしてリアは少年と少女の手を引きながら駆け出す。

「ええい! 何をしている、総出で捕らえろ! 奴を使つても構わん……!」

アルバート領主の怒声を背にしながら、リアは二人の安全を最優先に逃げる——

## 4—11

——リアが少女と少年を連れ逃亡してる頃——

レオは地下水路の抜け道から厨房に入り込むと、調理台を囲む数人の料理人が居る。しかし彼らは気付かないのか鉈を研いでいる。

気付かないのなら都合。このままさっさと通過してしまおう、レオは抜け道から這い上がると不意に視界に映り込む。

そこには狂気的な光景が繰り広げられていた。

調理台に磔にされた裸の娘に、数人の料理人が狂気を宿した虚な瞳で鉈を振り上げる光景が、本来遭ってはならない光景がレオの目の前で行われようとしている。

「い、いや……し、死に……死にたくないっ！」

口を震わせ叫ぶ娘の声にレオは魔剣を引き抜き踏み込んだ。

魔剣の柄を料理人の後頭部に叩き付け、漸くこちらに気付いた料理人に掌を向ける。

「眠れ、『スリープ』」

睡眠魔法——「スリープ」が料理人達の意識を奪い床に倒れ込む。血と油に汚れた床でいびきを奏でる料理人はしばらく起き上がれないだろう。

レオは周囲を見渡し、シルクの布を手に取り娘に掛ける。

拘束具を外しながら、恐怖に顔を歪ませる娘に静かに語り掛けた。

「そこ」の抜け道は地下水路に続いている。あとは第四区画まで行けば難民キャンプに出られるが……一人で行けるな？」

今にも泣き出してしまいそうな娘は頷き、拘束具が外れるとすぐに地下水路へと駆けて行く。

彼女の背中を見送ったレオは、厨房を堂々と抜け廊下へと出る。

清掃に勤しむメイド達が、厨房から出て来たレオに一樣に目を向け、

「し、侵入者?」

「いえ、違うわ! 見て、あの堂々とした佇まいを……!」

「侵入者ならあんなに堂々としてないわ……!」

堂々とした姿勢に眼を見張るメイド達にレオは声を掛けた。

「ふむ、清掃か。時にこの厨房で何が行われていたか知っているか?」

ぐぐもった声にメイド達は体を強張らせ、厨房の方へ視線を向ける。

「元々厨房の立ち入りは調理人のみに限定されているで……」

「そうか、ならいい。そのまま清掃に励むがいい」

そう言つてレオはそのまま歩き出し、メイド達は言われた通りに清掃の続きに移つ

た。

立ち去る彼の背中に騎士に伝えるか迷うが、最近の騎士は何処か異質でおかしいのも事実。

メイド達はレオの存在に目を瞑る。もしかしたら最近おかしい旦那様が治ると信じて。

屋敷を進むに連れて響く騒ぎ声にレオは、近いと感じながら声の方向へと進む。避けて通るべきだが、目的はリアと合流して混沌結晶を砕くこと。

廊下の右角を曲がると、刃が風を斬り真つ直ぐと首筋を狙う。

それにいち早く気付いたレオは強引に体を引き刃を避ける。

そして真正面に視線を向けた。

そこには先日、遭遇したカイウスが気配を殺し佇んでいた。

「やれやれ、またお前か」

「言っただろ、次は殺すと」

「……金で雇われているのなら悪い事は言わん、今すぐに手を引け」

「一度請け負った依頼、簡単に破棄できる訳がないだろう」

カイウスは姿勢を低くダークを構えながらレオに駆ける。

魔剣を引き抜くと、カイウスが突如してレオの視界から消えた。



代わりに四方から弾むような音が響く。

レオは音を頼りに体を捻り背後に魔剣を振るう。

廊下に刃が弾かれる音が響く、しかしそこにはカイウスの姿が無い。

(……………これは)

魔力回復の隙を与えず、四方から襲い来る刃。そして姿が見えない。

そこに残されたのは音だけ、しかし完全に消えた訳では無い。

そこからレオは一つの結論を導き出す。これは歩法魔法技——【瞬身】だと。

【瞬身】は短距離の【縮地】とは違い、音速で移動し続けられる魔法技だ。

下手に移動できない、特に狭い廊下ではなおさら。

(今は魔力が足らんか)

レオは周囲の音、魔力の残滓から次にカイウスが現れる方向を計算し、魔剣を振るい、彼のダークの軌道に合わせ刃を弾く。

一ヶ月も魔力が回復しない状況が続けば、嫌でも体をどう動かせば最善に動けるか理解できる。しかし経験だけで防ぐには限界があり、更に速度が上昇するなら反応しようがない。

と、レオはそこまで考え、彼に一つ伝え忘れたことがあった事を思い出す。

「……この領主が人間を人肉に加工していると知っているのか？」

「……なっ！ 戯言だ……！」

感情の乗った声が真横から聴こえ、走る刃を魔剣で受け流す。

少なからず彼は真実を知らない様子だが、レオの言葉を信じる要因には成り得ない。

仮面で素顔を隠し、勇者リアと共に行動しているだけの男の言葉は人間には信用されない。

レオはその事を理解しながら敢えて一つの事実として伝えた。

廊下でレオとカイウスの攻防がしばらく続く。

カイウスの猛攻とも言うべき苛烈な剣戟に防戦一方のレオ。

次第にレオの体に刃傷が刻まれ劣勢に追い込まれていくが、依然としてレオは焦らない。

カイウスの魔力が減り続けている。無理もないことだ、それだけ連続で【瞬身】を使

えば魔力がやがて底を尽きる。

レオは次の一手に動く。

そんな時だった、廊下の先から慌しい足音が響いたのは。

それにレオとカイウスは気を取られ真正面に姿勢を向けた。

「ああ、もう！ しつこいなあつ！」

両脇に少女と少年を抱えながら騎士団に追われるリアの姿に、

「リアー！」

「ルウ、リク……っ!?!」

それぞれ反応を示し、互いの刃を弾く。

するとリアはその声に気付き、レオに一瞬驚く。

「えっ!?! ちよ、急には止まれ……!?!」

「なにつ!?!」

走った勢いから止まろうとするも、勢い余ったリアはルウとリクを巻き込みながらレオに衝突し、リアの膝がレオの腹部に重く突き刺さることに――

## 4—12

衝突の果てにリア達はレオを下敷きに、打ち付けた箇所を摩る。

「うう、痛いなあ……君達は大丈夫？」

「お星様ぐるぐる〜」

「顔が鎧にぶつかって痛い……」

二人に対した怪我がないことにリアは、安堵し下敷きになったレオから体を退けた。

「いつまで倒れてるの？」

「き、貴様……」

レオは蹠跟めきながら立ち上がり、再度カイウスに体を向ける。

「まだ続けるか？」

カイウスによく気が付いたリアは、聖剣の柄に手を伸ばした時だった。

「あつ！ グレイお兄ちゃん！」

「違うだろ、仮面を付けてる時はカイウス兄ちゃんだろ」

「そうだった」

ルウとリクという言葉にリアはカイウス改めグレイに視線を向けながら、既に追い付いた

騎士団に警戒を向ける。

「……ふーん、グレイね。難民キャンプに居たあなたがどうしてこんなところに？ それにレオも！ 一体何処に行つてたのよっ！」

「……今は呑気に話してる場合か？ いや、悪かった、そう睨むな」

睨むリアにレオは顔を背け、魔剣を構い直す。

そんな中グレイは騎士とリアに視線を向け、

「どういうことだ？ なぜルウとリクが此処に……」

「分かんない、気が付いたら人質にされてた」

「此処の領主様がね、お姉ちゃんを食べたいんだって……凄く怖かったの」

「……本当なのか。……貴様らの狙いはこの仮面の男ではないのかっ!？」

二人の言葉に事の重大性を悟ったグレイが騎士に向けて吠えた。

激昂するグレイに騎士が嗤う。

グレイは彼らの反応を肯定と捉え、二本のダークを騎士に向ける。

この状況では昨晩招待されたリムルの行方が気掛かりだ。グレイは彼女の行方を知るべく冷ややかに問う。

「リムルはどうした！ アイツは此処に呼ばれていた筈だ！」

「おやおや察しの悪い暗殺者だ。そんなもの、とつくに食べたに決まっている。もつと

もその遺体を利用し、難民に罪を着せようと企てたのだが……」  
何処までも腐り切った騎士の言葉に、

「クツハツハツ！ 騎士ともあろう者が魔族よりも劣る外道に成り果てるとは何たる滑稽！ これではギリガンのヤツもさぞかし苦労してるだろうな」

レオは高笑いと共にギリガン王に哀れみの言葉を吐き捨てた。

騎士の一団の後方で静観していたハングが国王に対する不敬に、顔を怒りに歪める。

「貴様アアアアッ！ 国王侮辱するかつ!!」

「いやいや、国王を侮辱され怒るのは道理だがな？ 貴様らがその名を汚したのではないか、アルバート領主の片棒を担ぐ形でな」

「……っ!? 黙れ！ 黙れ！ 美味な食事に舌を肥やして何が悪い!」

ハングの国王への忠誠心は有る。だが、それが有ったところで彼らはアルバート領主の罪に加担した言い逃れもましてや否定する道理もない。

レオはハングから視線を外し、リアとグレイに向ける。

「さて、他勢に無勢だな」

「そうね、やるべき事は決まってるわね」

乱戦に持ち込むには狭過ぎる廊下、加えてルウとリクの二人が居る。

ましてやリアがストックしていた魔物の魔核はさつき砕いたので最後、正に不利な状

況と言えるだろう。

しかしレオは懐から魔核を一つ取り出し、リアに手渡すと魔剣を中段に構え左掌を騎士に向ける。

「ふむ、グレイと言ったな？ 貴様はどうする？」

「悪いが連中に従う義理は無くなったが、この子達の安全を優先させてもらう」

「それが良いだろう、くれぐれも激情に駆られ短慮は起こしてくれるなよ」

レオの忠告にグレイは、悔しげに唇を噛みながらルウとリクを抱えると、【瞬身】を駆使してその場から姿を消した。

「これであなた達を潰せるわね」

「屋敷は巻き込むなよ？」

「分かってる、レオこそ屋敷ごと破壊しないでよね！」

魔核を砕き駆け出すリアと、魔力を発するレオにハングが吠える。

「前衛部隊は勇者を抑えろ！ 後衛部隊はアレに備えろ！」

ハングの指示に騎士は即座に反応し、リアの前に立ち塞がり阻む。

そして後衛部隊がレオに掌をかざし、

「『《我らの身を守りたまえ！》』」

同時に防御魔法——【シールド】を展開した。

それに対してレオが駆け出すと同時にリアが前衛の剣を弾き、前衛部隊に展開された防衛魔法に、

「《我が拳に鋼を砕きし業よ宿れ》」

渾身の魔法技——【鋼破掌】を放つ。破壊に特化した衝撃波が【シールド】を砕く。しかし騎士団は慌てる様子も無く、レオの【ドレイン】に注視する。

ハングは【ドレイン】で魔力さえ回復しなければレオは無力だと、そう信じて疑わなかった。

しかしハングの想いとは裏腹に、レオは魔剣に陽炎の炎を宿らせ前衛の騎士団に一閃放つ。

魔剣に斬られた騎士団の体から魔力が吸い取られレオに魔力が集まる。

「バカなっ!？」

「ふむ、即興とはいえ中々使い勝手のいい魔法技を思い付いたな」

吸収魔法——【ドレイン】の基礎魔法理論と構築式を武器に付与し、魔法技に応用した。結果斬った対象から魔力を吸い取る魔法技——【吸魔一刀】が完成した。

しかしこれでも魔法の魔法技への応用は魔族にとつては当たり前の技術だ。

「思い付きだと！　思い付きで魔法技を扱うとは！　貴様は一体何者だ！」

闇の魔力が溢れ出るレオにハングは狼狽える。



「訳あつて勇者リアと共闘関係に在る者だ。それ以上でもそれ以下でもない」

レオは左掌を騎士団に向ける。それに対していち早く察知したリアが、後方へと身を低く。

「お前達が次に目覚める時は全てが終わつた頃だろうな、『ウインド・ストライク』——  
!!」

無詠唱からの魔法行使にハングは一瞬驚愕し、すぐさま騎士団に防護魔法の指示を。

しかし経験の浅い騎士達は動揺し防護魔法の詠唱が間に合わず、騎士団の中心に風圧の衝撃波が襲う。

狭い空間内で襲う衝撃波に騎士団は薙ぎ倒され薄れゆく意識の中、

「……貴様らは……食われて、しまえば……」

ハングは呪詛を吐き捨てた。

その言葉にレオとリアはため息を吐き、アルバート領主を下を指した。

限なく屋敷を内を搜索し、何処にも姿が見えないアルバート領主。

初心に帰りレオとリアはアルバート領主が先程まで居た執務室へと向かうと。

そこにはアルバート領主の姿が無く、残されていたのは乱雑に書類や宝石が散乱した部屋だった。

そして机の上に放置された混沌結晶のペンダント。

「逃げられた!？」

「ふむ、目的の物は手に入るのだ、放置しても構わんだろうよ」

「そんな! 沢山の犠牲者を出して……っ」

今は彼を追い掛けても仕方ないことだと、理性が呼び止める。結局の所彼はどんな罪を犯そうとも事実、法では裁けない。代わりの領主と騎士団が派遣される。この事件はそうして静かに終わる。

自身の悔しさに顔を歪めながら混沌結晶のペンダントを摘み上げた。

「……これは物的証拠品として派遣される王都の騎士団に調べて貰うけどいいかな？」

「いや、それに付いて問題が有る。……混沌結晶が魔核研究所へ運び込まれたそうだ」

「……ねえ、絶対に口クなことにならないと思うんだけど。というかコレも騎士団に渡したら誰かが悪用するよね」

砕けば一部の魔力が取り戻せる。しかしそれでは混沌がどの様に作用するのか理解する機会が遠く。

ましてや国内にばら撒き何かに使っている。単純に考えれば国内を内部から混乱させ崩壊させること。しかしそれではあまりにも周りくどすぎる。

レオはそう感じながらリアに一つ提案をした。

「ソイツに付いては俺が調べるが、お前は騎士団に上手く誤魔化しておいてくれ」

「……分かったわ。ねえ騎士団が到着するまでの間、この街で出来ることをしていいよね？」

「……まあ良いだろ。どの道コイツを調べるのに最低三日は欲しいところだ」

「ありがとう、早速行動に移すわよ！」

リアの勢い付いた言葉にレオは、仮面の下で笑みを浮かべ彼女と共に行動に移す。

それが責めて事件に関わった者の責任と務めだからだ。

それから三日後——

レオは調べた混沌結晶について大まかに説明し、より詳しい事はハーヴェストの落ちて着ける場所に着いてからと語った。

そしてその日、王都から派遣された新たな領主と騎士団をレオとリアは彼らを出迎えていた。

王都に勤めていた騎士団というだけは有り、誰もが屈強な兵士でレオの仮面に驚くことは無かった。むしろ彼の仮面に興味を示す者も……

「勇者リア様、ご無事で何より」

青年の領主とその彼に率いられた騎士団がリアの無事に安堵し、

「あはは、まあなんとかね。それより事件の事なんだけど」

「それに付いて後は我々にお任せを……捕縛された騎士、いえ、ハング達は自問の末に王都中央裁判所に護送されるでしょう。ですがアルバート元領主については——」

あれから行方を眩ませたアルバート元領主を発見するに至らず、結局彼が何処へ行つたのか分からずじまいとなった。

ただ、あの日の晩に屋敷から馬車が出発する姿が目撃されていたそうだ。

そして彼が乗っていたと思われる馬車が平原で発見されたのだが、そこにはアルバート元領主の姿は何処にも無く、おびただしい血痕のみが残されていたという。

「私が気にしても仕方ないわね。後は任せるわね」

「はっ！ しかしよろしいのですか？ このまま王都へ向かわなくても」

「うん、魔核に関して調べたい事が有るから魔核研究所にね」

「……研究者の街ハーヴェストですか。馬車をお出ししますので、道中お気を付けて！」

結局の所、今回の事件は被害者の遺族達に深い傷痕を遺し、レオを襲った暗殺者グレイは何処かへ姿を眩ませた。

グランガルはこれから新たな領主の政策によって運営されていくだろう。そこに勇者の出る幕は無く早急に立ち去るのが得策だ。

もつとも今回の事件は騎士団が関与していたため、彼らにとつても非常に面白くない

結果だろう。

リアとレオは騎士から馬車を借り受け、次の街ハーヴェストへと馬車を走らせる。

機能不全に陥った魔核に付いて調べるため、そして運び込まれた混沌結晶を破壊するために――

## 4—13

混沌結晶のペンダントを置いて逃げたアルバートは、用意した馬車に揺られながら頭を抱えた。

「……なぜあんなことを、なぜあんな言葉を……なぜ罪も無い者達を……っ」

混沌結晶のペンダントを外し程なくしてからだ。アルバートが理性を取り戻したのは。

しかし今更後悔しても遅い。自分は悍ましい事を平然と実行し、この肥えた体に収めたのだから。

込み上がる吐き気を抑えながらアルバートは、

「……あの結晶は不味い。人の悪意を、悪性を浮き彫りにし狂わせる」

自身が最初に混沌結晶を手についたあの日の事を思い起こした。

珍しい天使の行商人が訪れた。魔王となったルシファアの事を考え、アルバートは慎重に対応すると彼は、取り繕った笑みを浮かべて。

『このペンダントを是非とも善政を敷くあなた様に献上したく』

そう言って差し出したのが混沌結晶のペンダントだった。

その後何が有ったのか、気が付けば自分は混沌結晶のペンダントの虜に。

それからは以前から心の奥底に仕舞い込んでいた未知の食への探究心が、混沌結晶のペンダントによつて悪意として引き出されていた。

「……心の何処かで人を食べてみたい、と思つてしまつたのだろうか」

後悔しても遅い。後悔するぐらいなら処刑を受け入れるべきだ。なのに自分は今も必死に馬車で逃げようとしている。

「私という人間は何とも愚かで罪深い」

こんな事は間違つている。そう理解しながらも、結局自身の処刑を嘆願したところで今まで築き上げた数多の功績と情勢によつて裁かれることは無い。

罰せられない事実がどんな裁きよりも苦しい。

アルバートは、喰らつた人々を想いながら瞳から涙を流す。

「そんなに裁かれないのなら此処で死ぬ」

御者に扮したグレイがアルバートに宣告を告げる。

ルウとリクを逃したグレイは、愛したリムルを無惨に殺された怨みを拭いきれず、こうして馬車の御者に扮していた。

そしてアルバートを乗せた馬車はどんどん速度を上げ、前方に見えるリザードマンの群れに突っ込んで行く。

グレイは突つ込む寸前に「瞬身」を駆使し、一人馬車に取り残されたアルバートの愚かな行いとその罰を受け入れ、

「良いだろう、この世の理は食うか食われるか……ならば私の裁きに相応しい」

そう言つて彼は取り囲むリザードマンの凶刃を受け入れ果てたのだつた。

後にアルバートの血に汚れた馬車はその場で放置され、彼の最期を見届けたのは復讐に走つた暗殺者のグレイただ一人。

しかしグレイの気が晴れる事は無かつた。

混血児の自分を『あなたはあなたよ、血や生まれなんか関係ない』そう言つて受け入れ愛してくれたリムルはもう二度と戻らない。

慟哭を叫ぶ彼の傷を癒す者、また癒されることも無い一つ結末が此処に終始した。



## 五章 平常の狂気

## 5—1

暗く密集した空間の中、ククルとフィオナは互いに体を密着させていた。

少女の艶やかな口から息が漏れる度に頬にかかる。

「もつと顔をそつちに向けるよ。先から吐息がかかつて鬱陶しいんだ」

「狭いんだから我慢して……ん、動かないでよ」

ククルが体を少しでも動かす度に足が腹部に当たり、彼の二角が頬を掠める。

「本当にこんな方法しか無かったの？ 真正面から堂々と乗り込めば良いのにさ」

「ダメ、ククルは魔族。それも鬼人族だから住民が不安がっちゃうし、魔核研究所の職員には見つかりたくないでしょ」

鬼人族は強靱な肉体を誇り、単純な筋力ならミノタウロスすらも凌ぐ。例え目の前の華奢な少年にしか見えないククルも侮れない。

彼は素手で大地を破り魔法でマグマを生み出す程魔力も高い。当然ククルは第一級警戒指定に認定されている。

そんな彼が街に入れば住人はたちまち怯えてしまう。

フィオナがそう思っているとククルは面白くなさそうに呟く。

「チツ、真正面から破壊した方が速いって」

「だからそれはダメ！」

力任せに事を解決しようとするククルにフィオナが声を荒げると。

「あの、もう少しお静かに……ククル様も將軍ならばレオ様の立場をお考えください」

「フィオナ様、もう少しの辛抱だ」

外から鬼人族と騎士の呼び掛けにフィオナは一つ咳払いを鳴らす。

これからハーヴェエストに侵入する。魔王城から共に脱出した騎士団もそれに協力してくれているが、天使の戦闘となればククルの鬼人部隊の力が必要不可欠。

調査中に捕らえられても不味い、しかし潜入に使えそうな物が子供二人がなんとか入れそうな物しかなかった。それに少数での潜入が好ましいと判断したフィオナはククルと積荷に扮して潜入する方法を選んだ。

レオとリアが一向に姿を現さない。それはつまり魔法が使えないほど魔核に何かしらの影響を受けていたら、そう推測したフィオナはリアなら嫌々ながらも魔核研究所に足を運ぶと睨んだ。

ところがいざハーヴェエストへ出発すると、天使がハーヴェエストに向かい混沌結晶を魔核研究所に譲ったとの情報が行商人の魔族から齎され、樽の中に入り込み今に至る。

「……そういえばお前の家族はこの街に住んでるらしいね」

「そうだけど、話したこと有った？」

記憶を探るが話したことは一度も無い。ここ最近で記憶に新しいのはククルと口喧嘩ばかり。

「魔族には優秀な諜報員が居るからね、それこそお前達の趣味趣向や細かい情報まで何でも調べるほどに」

見かけの年相応の笑みを浮かべるククルに、フィオナはジト目を向ける。

自分達の動向及び細かい情報は調べられていた。それはつまり、とフィオナは疑念を思い浮かべ、ククルに告げる。

「ふーん、えつち」

「……えっ?」

「だってボク達の趣味趣向、それこそ下着の色なんかも——」

「そ、そんな訳ないだろおおっ!」

下着と聞いて顔を真っ赤に染めるククルに、フィオナはちよつとだけ可愛いと思いつから小首を傾げる。

「……趣味趣向は花とかそういうのだよ。だいたい調査員が余りにも細か過ぎる情報を送ってくるからレオ様が、『人間の下着だとか報告せんでいい、動向及び人間関係を詳細

に調べよ!』って釘を刺してるんだ」

「レオって意外と常識有るんだね」

戦場の中魔族の兵士に紛れ込んでいたレオの姿が思い浮かぶ。

王自ら戦場に立つことは珍しくないが、兵士の戦列に加わっている姿はどう見ても異様だ。

そんな事を考えていると樽が揺れ出し、その衝撃でククルと密着してしまう。

「……んっ」

「——っ!？」

ククルは突然の柔かな感触に声にならない悲鳴を必死に堪える。

こうしてククルとフィオナは樽の中で互いに声を押し殺し、ハーヴェストへと入り込む。

## 5—2

ハウゲル地方から更に北西のデユメリア地方に在るハーヴェストは、魔核研究所が置かれたメンデル国にとって重要な街の一つ。

研究者の街と言われるだけはあり、医学研究所から魔法研究所、果ては魔物研究所が日夜研究に励む。

そんな街に到着した二人は検問を済ませ眉を寄せる。

検問を担当したのが騎士では無く代理人を名乗る騎士学院の生徒だった。

そして馬車を走らせ門を通過すると、石畳が面した道路と色鮮やかなレンガの街並みが訪れる者を歓迎していた。

入口から最奥に見える研究施設群は鋼鉄製の建造物に取り囲まれ、近づく者に畏怖の念を与えるには十分な存在感を放っている。

旅人を装い一通り街並みを見渡したレオは、こちらを観察する視線と違和感に気がつく。

「……近くに何人居る？」

レオの問い掛けにリアは僅かに視線を動かす。

本来街を守る騎士の姿が見当たらず、代わりに研究者の姿が多く見える。

研究者の街と呼ばれる由縁の一つだが、そこに騎士の姿が無いのは異様と言っているのだ。

「騎士は居ないわね。代わりに五人……その路地裏から様子を窺ってるわ」

路地裏の物陰から研究対象を値踏みするかのような視線を送る研究者達の姿。

でも、とリアは眩く。

「この街じゃこれが当たり前。騎士が一人も見当たらないのは不自然だけど、さっきの門兵は騎士学院の生徒だったし、でも騎士学院って王都に在るんだけど実地訓練中かしら？」

リアを見て酷く緊張した様子を見せていた生徒の顔が思い浮かぶ。

憧れの人に偶然出会った。そんな印象を受ける何とも若い少年だった、とレオは思う。

「実地訓練中なら騎士の監督官が居てもいいだろうよ」

手綱を握るレオにそれもそうだと頷く。

すると停車している馬車に疑問を持ったのか、一人の老婆が歩み寄って来る。

その者を見るからに占師と言わんばかりに、黒衣のローブで素顔を隠していた。

「もし旅人さんや。一つ占いで……？」

枯れた声で片手で水晶玉を見せる占師にリアは、やんわりと微笑む。

「えつと占いは結構だけど、この街の騎士は何処に行つたのか知ってる？」

「ほほつ、お嬢ちゃんや。情報を得るには対価が必要さね。……勇者になつて三年、そんな当たり前のことも忘れちまつたのかねえ？」

「……そうね、危うく初心を忘れるところだつたわ。でも此処は往来の通路よ、馬車置き場に預けてからでいいかしら」

「いいとも、いいとも。……ああ、儂やああそこで待つてるからね」

そう言つて占師は寂れた露店を指差した。

先ずは情報を得るにも占師に占つてもらふ必要が有る。住人に聞けば済む話だが――

（あの占師……）

妙な違和感を感じるが、霞がかかったような感覚にレオは眉を寄せながら馬車を走らせる。

馬車置き場に馬車を預けた二人はすぐに占師の下へと向かつた。すると枯れた笑い声を発しながら占師は尋ねる。

「さて、何を占うか。……ああ、恋の悩みかい？ それとも――」

「恋って……別に私は恋はしてないんだけど」

「同じくだ」

「おやおや、そうさねえ……この先に訪れる災害についても占おうかねえ」

地震か竜巻か。二人はそう考え頷くと占師は皺枯れた手で水晶玉を撫で回す。

すると水晶玉が輝き、紅蓮の業火に燃やされる街の光景が映り込んだ。一頭の竜によつて齎される厄災の光景にレオとリアは息を呑む。

白銀の鱗に覆われ白鳥のような翼を掲げる竜が街を破壊し、人だけを喰らい続けている。

一体この光景は何を暗示しているのか。未来視に等しい占いにレオとリアは驚嘆した。

「……災害級の魔物による被害か？」

ようやく振り絞った言葉は疑問だった。

「遠く無い未来に訪れる災害さね……まあ、信じるも信じらないのも御前さん達次第だね」

「……気になる内容だけど、私達にそれを倒して欲しいの？」

占師は首を横に振った。

「ただの警鐘さね。あの竜は女神に封じされた災害級の竜アルビオン、天使の企みを阻



止しなければいずれ人間界に解き放たれよう」

具体的過ぎる占いレオは威圧を込め、

「妙に具体的過ぎる。それは本当に占いか？」

「この歳になるとねえ……視えなくていいものも視えるようになるのさ。例えばその仮面の素顔も」

占師の言葉にレオは肩を竦める。どうやらこの老婆は人の在り方や深い本質まで視えるようだ。

下手に藪を突き、胸の内に秘めた計画を暴露されても不味い。そう考えたレオは納得した素振りをみせる。

「なるほど、歳の功か」

「……本当に色々と気になることだらけだけど、料金は幾ら？」

「ほっほっ。スピリア金貨十枚じゃよ」

結構な値段にリアは顔を青く染めながら、スピリア金貨十枚を支払う。

痛い出費にリアは仕方ないよね、とため息を吐くと本題に移った。

「それで街の騎士団は何処に行ったの？」

「彼奴らは、混沌に惹かれ集う魔物を掃討しに出陣しておるよ。尤も強力な協力者がおるようじゃから心配は無いさね」

「混沌……それは何処から発せられているのか分かるか？」

レオの問い掛けに老婆は微笑んだ。

「そこはほれ、若い御前さんらの仕事じやろうて」

「む、それもそうか」

一本取られた。そう言わんばかりに笑い返した。

占いを終えた二人は占師と別れ、街中を歩き出す。

「何処に向かっているのだ？」

「フィオナの家に、もしかしたら帰って来てるかもしれないからさ。それに彼女のお母さんに用事があったね」

そう言つてリアは迷いなく進み、レオは何も言わずついて歩くばかり。

そんな中、やはり気になるのが研究者達の視線だ。勇者リアの姿を見て微笑む者、ようやく研究対象が帰ってきたと言わんばかりの視線。

実に不快な視線にレオは息を漏らす。気にしても仕方ないこと、今はどうやって魔核研究所の混沌結晶を破壊するかが優先事項だ。

そうこうしている内に、薬草の匂いが漂う一軒家の前にリアが足を止めた。

【魔女の治療薬邸】と書かれた看板にレオは眼を向けた。

「此処よ、ごめんくださいーい！」

ドアをノックすると中から金茶色の髪の妙齡な女性が姿を現れた。

「リア、無事だったようね。さあ、中に入りなさい」

フィオナの母——アリアはそれだけ告げると、二人に中に入るように促す。

どうやら一階は店でポーシヨン類が陳列し、釜戸に架けられた鍋が如何にも魔女の店を思わせる。

そしてアリアに付いて行くと、二階の住居スペースへと通され一室から、

「美味い！　美味いすぎる！」

「お母さんの料理は美味しに決まってる」

中から聴き覚えの在る声が響く。

リアは彼女の声に、良かったと安堵と共に涙を流した。

「……本当に無事でよかった」

「ウチの自慢の娘だからねえ、タダでは転ばないよ。それに二人もお腹が空いてるだろう？　いま料理を持って来るから中で待つてなさい」

アリアに促されるまま、騒ぎ声が響くドアをゆつくりと開けると——彼女は驚きのあまり硬直した。

何事かとレオが覗き込むと、そこには押し倒される四魔將軍ククルと彼に覆い被さるフィオナの姿があった。

「……邪魔をしたな」

「ま、待ってええええ!! 誤解なんだあああつ!」

顔を真っ赤に染め騒ぎ立てるククルの口元から、フィオナはパンクズを掬い取り小首を傾げる。

やがて硬直したリアに気が付き、

「リア……! 会いたかったよ……!」

勢いよくリアに抱き着いた。その様子を見ながらレオは仮面を外し息を吐く。

「ええ、私も会いたかった。本当に無事で良かった……でも、どうしてククルが?」

フィオナは今までの経緯を話した。ザガン達と共に魔王城を脱出したこと。

そしてようやく我に帰ったククルがレオに駆け寄り、

「レオ様! ご無事で本当に良かった! 一先ず火急の知らせから……四魔將軍ロラン

がルシファーに寝返り……」

ククルは拳を握り締め、今にも彼の所業に怒りをぶつけそうな程に体を奮わせた。

そんなククルの様子にレオは、

「そうか、アイツは裏切ったか」

たった一言、それが何だ? と言わんばかりに笑っていた。

「……ロランの指揮でボク達は分断されたんだけど」

「ふむ、まあ無事ならそれで良いではないか」

「……………でも、レオは裏切られて平気なの？」

「一向に構わん」

ばつさりと切り捨てるレオにリアは目を疑う。

配下の謀反には心を痛めていたレオが、腹心たる四魔將軍の一人ロランの裏切りに対して何も思っていないことに疑問が宿る。

「それよりも混沌結晶について話をしようではないか」

レオはそう言って砕かれた混沌結晶のペンダントを取り出すのだった――

## 5—3

レオは調べた混沌結晶について話を切り出した。

「調べたところ、混沌の魔力が魔物なら洗脳を、人間ならば悪意を浮き彫りに暴走させるというものだった。器となる結晶に小さな魔法陣が描かれていたが恐らくは天界に伝わる魔法式だろう」

レオは砕かれた混沌結晶の一部分に指差す。そこにリアとフィオナが眼を細めると、確かに人の肉眼で辛うじて見えるサイズで魔法陣が刻まれている。

そしてレオとククルは魔族にしか見えない魔界式の魔法陣の痕跡に気が付きながら、敢えてその事は伏せた。

というものが在ったという痕跡だけが残されている状態であり、どんな効果を及ぼす魔法陣なのかが判別できないからだ。

「細かつ!? もしかして一つ一つにこんな細かい魔法陣を……」

「感心してる場合では無いぞ? 所持しているだけで危険なのだからな。かくいう俺も混沌に囁かれたが……まあ心を強く保てば防げるようだ。現にリヴァイアサンが抵抗して見せたからな」

リヴァイアサンは心を強く保つことで混沌に抗った。しかし一体どれだけの生物が混沌に抗えるのか。現に人々と繋がることで心の強さを示した人間は混沌に支配された。

レオは、アルバートとは一度も顔を合わせることも無かったが、彼が弱者だったとは思わない。それ以上に人間にとって混沌の囁きは危険極まるものだった。

そしてフィオナとククルに視線を向ける。

「調べて理解したのはここまでだ。お前達はこれ以上の情報を持ち合わせているのか？」

「ううん、だいたい魔王と同じぐらい。……でも天使が各地にばら撒いているみたいで、それにロランの動向も気になるかな」

「アイツの事だから、策を何重にも張り巡らせて妨害してくるんじゃないけどさ、何もして来なかったんだよ」

二人の言葉にレオは眼を瞑る。

天使が各地で混沌結晶をばら撒いている。それは実験のため、問題は何故実験をする必要が有るのか。

あの占師が見せた災害の竜アルビオン。アルビオンは魔物だ、それを制御するための実験なのか。そうで有るとすればルシファーとアルビオンを同時に相手にすることと

なる。

（天使の計画とはそういう意味を指すのか？ いや違う。それは工程に過ぎん、最大の目的は何だ？ ……女神の座を奪うことか？ それとも……）

レオはそこまで考え、一度思考を止める。今は混沌結晶と魔核の問題を解決するのが先決だ。

「二人は気付いていると思うが、俺とリアの魔核はほとんど機能していない。今は取り戻した僅かな魔力が有るが全快には程遠い状態だ」

「……まさかこのちんちくりんの推理が当たるなんて思わなかったよ」

「むっ、そのちんちくりんのお陰でいち早く魔王と再会出来たのは誰のおかげかな？」

フィオナはククルに強気な姿勢を見せ、彼は罰の悪そうな表情を浮かべた。

「お前のおかげだよ！ それでちゃんとレオ様の魔核を治す方法は知ってるんだろうな！」

「魔核を観て見ない事には何も言えないよ。それにボクとリアは何度も魔核の検査をされてるけど、魔核分野に明るい訳じゃないからそこは専門家を頼らないと」

結局はこの街の魔核研究者を頼らなければならぬ。そのためには魔核研究所に入る必要があり、混沌結晶も砕く必要が有る。アレを研究者が所持しているだけで不気味という個人的な問題も有るが。



レオはそこまで考え、フィオナに眼を向ける。

「……」先ずリアの魔核を視るだけみてやってくれ」

「そのつもり、次は魔王のも視るから……でも二人はお腹空いてるよね」

丁度良いタイミングでアンナが部屋に料理を運び込んだ。

湯気が立ち上がるシチュー、焼き立てのパンに雑に焼かれた怪鳥の丸焼きがたちまちテーブルに並べられた。

「待たせたね。魔界式と人間界式の料理、おかわりも有るからたくさんお食べ」

「……食べてからでも遅くはないな」

「賛成、お腹空いてもう死にそうだったし」

二人は早速アンナの料理に手を付ける。

リアにとつては懐かしい味が口に広がり、レオにとつては味わい深い、人間界でしか食べられない温かな食事を堪能した。

同時にレオは思う。母親の料理とはこういう物を差すのだろうか、と。

二人は温かな食事を心ゆくまで堪能し、フィオナに魔核を調べて貰うことに――

## 5—4

食事を終えたレオとリアはフィオナの部屋に通されていた。

愛らしいぬいぐるみが至る所に飾られている様子は、年相応の少女らしい部屋だ。

そんな彼女の部屋には、魔法書が所狭しと納められた本棚に囲まれている辺り、魔女を志す彼女らしいとも言える。

何度もリアを招いた部屋にフィオナは、三人に入るように促すとククルが頬を引き攣らせていた。

そんな様子に小首を傾げ、

「女の子の部屋ははじめて？」

「そんな事は無いさ、無いけど……随分ぬいぐるみが大量なんだね。ぬ、ぬいぐるみ族!!  
なぜ彼女の部屋に……」

黒熊を可愛らしくデザインしたぬいぐるみから竜まで実に様々なぬいぐるみを取り揃えられている。

我ながら良く集めたものだどフィオナは胸を張る。

「ボクの自慢のコレクション、王城に充てがわれた部屋にも沢山あるよ」

「ああそう。同情する……ところで僕まで必要なのかい？　正直僕は魔核を投影できないんだけど」

ククルは苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。手っ取り早く二人同時に魔核の検査をしようとしたのだが、投影できないのでは仕方ない。

仕方ない魔核の検査は一人でやろう、そう考えていると食事を終えてからずっと沈黙を貫いていたレオが口を開く。

「……ではリアの検査が終わるまでの間、しばし話し相手になって貰うとしようか」  
「喜んで!!」

ククルは忠犬の如くレオに駆け寄り部屋から出て行く。

あんなに美味しそうに、しかも微笑みながら食べる魔王の姿がフィオナには恐ろしい存在には見えなかった。

案外一緒に食事をするに見えて来ることも有るのかもしれない。

そうならリアがレオに対して親しげなものも納得がいく。食いしん坊のリアと同様彼も食いしん坊だ。きっと何かと馬が合うのだろう。

「早速始めるから服を脱いで、ベットに横になってね」

「お手柔らかにね」

気恥ずかしいそうに鎧を外し始めるリアに、何故かこつちまで恥ずかしくなる。

いつも堂々と何の躊躇いもなく鎧を外し服を脱ぐというのに。

それ自体は特に同性のため気にもならないが、リアは変わったと思う。

何処を、と言われると判断は付かないが、少なくともフィオナの眼にはリアは変わったように見える。

女性が変わる時は何かがあった。特に恋をした時にその変化は現れやすいと母から聞いたことが有る。

フィオナはその考えをすぐさま、まさかと否定した。

そうこうしている内に柔肌を晒したリアはベットに仰向けになり、

「準備良いわよ」

声を掛けた。

フィオナは横になつたリアの近寄り、心臓の位置に掌で触れる。

ほんのり冷たい感触が掌に伝わる。

リアは特にこれといった外傷も無く、健康的で艶やかな調つた体だ。

と、彼女の裸を観察するのも悪いと思ひフィオナは作業に入る。瞳を瞑り魔力を用いながらリアの魔核に意識を集中する。

魔核が網膜の裏に映し出される。

白い球体が雫の上に浮かぶ。知覚化された魔核だ。

しかしすぐさま異常に気がつく。

リアの魔核に絡み付く鎖の存在、魔力の源泉兎とも言うべき魔核の中枢に打ち込まれた杭。

魔核には光輝く魔力が有るが、その魔力は源泉に戻ろうと杭の周囲を漂っている状態だ。

事細かなに観察しながら、魔核に絡み付いた鎖が何処へ伸ばされているのか、視線を動かして追っていく。

と、その内二本の鎖が朽ち果て壊れている。

(もしかして混沌結晶からリアの魔力を回収すると鎖が壊れる?)

フィオナは推察しながら、鎖の発生源をようやく見付ける。

魔核を囲むように魔法陣が展開され鎖が打ち出されている。そして杭を起点に本来リアの魔核に供給されるはずの魔力が吸い出されていることが分かる。

つまりこれを施した人物は、リアが生きている限り魔力供給を受け続けているということだ。

(本来他者の魔力は時間経過で消滅する。だけど魔核に直接鎖を打ち込んで吸い上げるなら擬似的な魔力供給が可能になる)

フィオナは鎖の解除を試みたが、すぐに取り止めた。

一本でも解除しようものなら魔核が自壊するように魔法陣に組み込まれている。そのため解除を諦めざる終えない。

同時に腑に落ちない点が見つかる。何故これほどまでに用意周到にも関わらず、既に二本の鎖が朽ち果てているのか。

ルシファーなら一本の解除も赦さないはずだ。

フィオナは瞳を開けリアに問う。

「リアはこれまで混沌結晶を砕いて自身の魔力を取り戻したんだよね？」

「そうよ、それから魔力を使っても取り戻した分だけは回復する様にはなってるわ」

「あのね、魔核の源泉に杭が打ち込まれている。本来なら戻るべき源泉に魔力は戻らず回復もしないはずなんだけど」

「……回復、してるよね」

リアの疑問を露わにした声に頷く。

考えられるとすれば、取り戻した魔力の分だけ鎖を通してルシファーから取り返しているのかもしれない。

でなければ魔力は魔核に留まられず体の外に抜け出してしまふ。

「……魔王の魔核を見る必要があるから、レオを呼んで来てもらって良いかな？」

「分かったわ、私も私なりに考えてみる」

そう言ってリアは一瞬で服を着て、部屋を出て行く。そこから程なくしてレオが入れ替わる形でやって来た。

「早速服脱ぐ、横になる」

淡々と告げると彼は黙って従い上着を脱ぎ捨てた。

長身瘦躯に筋肉質の肉体、そして長い白髪で隠れがちな背中に、頭となる紋章にフィオナは眼を細める。

紋章、細部は異なるが自分と似た紋章をレオが宿している。手に触れると、より近い紋章ということが判る。

「……紋章が珍しいか？」

言われてハッと気づく、いつの間にか自分にはレオの背中に触れていた。

敵である魔王に無用心にも触れてしまった。

だが、良い機会かもしれない。そう考えたフィオナは検査前に聞く事にした。

「ボクのお腹に似た紋章が在るんだけど……魔王はボクのお父さんのの？」

「まさか、俺には子など居ない。ましてやそう言った経験も……在るには在るが魔界に居た頃の話だ。それにお前の母親とは初対面だぞ？」

「そうだよね……仮に魔王がお父さんだったらお母さんはもつと反応してると思う」

「父に会いたいのか？」

「……分かんない。会ってみたい気もするし、会いたく無い気もする」  
曖昧に答えるとレオは、苦笑を浮かべていた。

「そうか。だが俺はお前の父について知っているぞ?」

「ふーん、どんな人? ううん、どんな種族だったの?」

母と娘を捨てた男の素性に奇妙が湧き、レオの言葉に耳を傾けた。

「種族は魔人族。魔界でも数が多く特徴はほとんど人間と変わらん、違いが有るとすれば身体の何処かに紋章が在ること、後は高い魔力だろうな」

「じゃあボクは魔人族と魔女の混血児ってことになるね」

「うむ。お前の父の髪はお前と同じ董色だ……頬に紋章が在る男だ、何処かで出会ったら今までの鬱憤でも晴らすと良いだろう」

レオはそれだけ答えるとベツトに仰向けに倒れた。

気を遣うところを見ると案外優しいのかもしれない。彼のようななら魔王なら争う理由も無くなるのに。

そこまで考えたフィオナはレオに近寄る。

今は検査が先だ、平和の道筋はリアと、仲間達と模索していけば良い。

「それじゃあ早速、調べるよ」

そう言つてフィオナは同じ要領でレオの魔核を視覚した。



黒い魔核が映し出される。闇、炎、風の三つの属性が宿っている。

そしてレオの魔核はやはりというべきかリアと同じ状態に在る。

少しだけ違うのはリアの魔核よりも鎖の本数が多い事だ。

それだけルシファーは魔王レオを警戒しているという事になる。

ただ警戒しておいて殺さない辺り、まだルシファーにとつて二人の魔力は必要だという事が判る。

同時に二人に残された時間の猶予は案外少ないのかもしれない。

用が済んだ魔核はどうなるのか？ きつとあのルシファーの事だ、レオとリアの魔核を最悪な形で砕くだろうことが予想される。

「魔王とリアはルシファーに命を握られてるね」

「やはりそうか。あの時俺達を取り逃がした時点で何か有るとは思っていたが……」

深くため息を吐くレオにフィオナは、同情の眼差しを向けた。

誰だつて心臓にも等しい魔核を握られていては落ち着かないだろう。

「……うん、ククルも含めてボクの推測も話すね」

— そう言つてフィオナは、レオ達を集めて調べた結果導き出した一つの推測を話した—

雨が降り出した夜。

レオは薄暗い一室でソファに我が物顔で座り考え事に耽っていた。

フィオナが二人の魔核を調べた結果、自分達の魔核はルシファアの掌であり、魔核の鎖を外すには混沌結晶を砕かなければならない。

やる事は今までと変わらないがレオは思う。

（混沌結晶に関しては唯一の隙だ。もしもあの魔法陣がルシファアに知られれば俺達が魔力を取り戻す機会は失われる）

用意周到なルシファアはきつと気が付けば、混沌結晶に細工を施した魔族を炙り出し、自分とリアの魔核を破壊してしまうだろう。

そうなれば死を持ってしての敗北だ。

深いため息が漏れる。

「随分遠回りをさせられている」

ルシファアの策略を見抜けなかった時点で今回の事件は必然に起きた。

もしもあの時、と人は後悔するがレオは、今の道もそれもまた一つの道と受け入れた。

現に好敵手のリアと共に旅をし、寢食を共にして彼女の底知れない優しさに改めて気付く事がある。

言つてしまえばあの時ルシファーに不覚を取らなければ、新たな見聞を得られずに終わっていた。

思考に没頭する中、蠟燭の火が部屋を照らす。

レオは一度思考を中断し、そちらに視線を向けた。

「お前か。夕食も大変美味だったぞ」

蠟燭を手を持ったアンナがくすりと笑つた。

「そいつは良かったよ。……しかし魔王も物思いに耽る時があるんだね」

「魔王だつて考える時はあるさ、次の政策に資金繰り、民の安寧から都市部の開発計画なんかもな」

「その割には別の事を考え込んでいたようだけどね」

彼女は魔女だ。他者の僅かな挙動で思考を読み取る事は雑作もない。

「流石は魔女と言いたいけど……人としての寿命を捨てた今は後悔しているのか？」

アンナはテーブルに蠟燭を起き、向かい側に座つた。やがてぼつりと言葉を紡ぐ。

「もちろん有つたさ。最初はね魔女に至ることを目標にしていたけど……至つた後に気付いたのさ、私は魔女になつて何がしたかつたのかつて」

「つまり魔女に至るのは過程に過ぎないが、得られる長寿の前に”その後”のことなど視野に入っていないかったと」

「そう、人は恵まれた環境下で作業工程を省くために日夜研究を続ける。それが永く生きたいという欲が現れ「魔女化」が生まれた。魔王は知っているかい？ 南東の大陸には人間の命令通りに動く人形技術が発展していたことを」

レオは眼を瞑り頷いた。人形に思考する工程を与え、命令通りに動く技術がかつて開発された事があった。

しかしその大陸のとある国は一夜にして滅びた。それは何故か、人形の反乱によつてだ。

「過ぎた技術によつて身を滅ぼした話は有名だからな。確か人間界の暦で千二百八年のできごとだったか」

「そう、今から約東四百年前だね。とはいえ今はちよつとした物語として語られる程度の話さ」

命令通りに動く人形技術は危険と判断され廃棄された。表向きには。

何か魔法プロセスに誤りがあった。そう考えた技術者は次へ、次へと研究を重ね、最後に出来上がったのは命令通りに生物を殺すゴーレムだ。

何処かの過程で強度に欲を掻いた者が、人形ベースからより強靱なゴーレムベースへ

と技術転用したが、結局の所ゴーレムは、生物を殺す、命令通りに人間も殺し始めた。何度も繰り返される過ちはやがて成功する。その過程で生じた犠牲を致し方ない犠牲と切り捨てて。

「……長寿を得た人間は何処へ行き着くのだろうか?」

「間違ひなく破滅だろうね。不老の次は不死を、死ぬことも老いることも無くなった人間は、人間らしい道徳をいつかは忘れてしまうのさ」

「まるで見て来たように語るな。お前が人間の先に悲観するには早いと思うが?」

蠟燭の火に照らされたアンナの口元がクツクツと笑う。

「魔女は今の時代じゃあ珍しいけどね、私の代……少なくとも三百年前は魔女も多かったんだよ」

「ほう、それは初耳だな。魔女は希少と聴いていたが」

「確かに今は希少さ。……人は老いを怖がり避けようと日夜研究に励むけどね、いざ目の前に老いない者が現れたらどうなるか、魔王ならよく理解しているだろう」

「……ああ、経験済みだ。アレは五十八年前、ギリガン王の八歳の誕生祭の時だった。……その日ギリガン王の乳母が歳から老衰してな、あの時だなアイツが俺に恐怖心を抱き始めたのは——」

「魔族を良く思わない輩の口車に乗っかり、魔族排除の機運が高まり出したのは翌年の

ことだ」

寿命の違い。その程度の問題だがそれは魔族からしての些細な問題だ。

人間と魔族が真の意味で平等になる日は決して訪れない。それこそ人間が魔族同様の寿命を得ない限りは。

「拒絶して迫害して、そして目の前に不老の秘術が有ると知れば飛び付く。自分勝手な種族なんだよ。それでも……フィオナが産まれてからは混血児が自然な形で魔族と人間の関係を修繕していくんだと、私はそう思ったんだ」

「……その道も有りだが、結局のところ人間は迫害の道を選んだ。いや、俺達の蒔いた種が次世代に苦楽を与えているのだな」

「そう、私が魔王にこんな話を切り出したのはね……フィオナがちゃんと恋して生きられる居場所を作り出すためなんだよ」

アンナの言葉にレオは眼を瞑った。母親というものはそこまでして子を想えるのか、と。

ただそれは日の光の下で育った人間だからこそなのかもしれない。中には過ちを犯す者も居るが、それも生物なのだから仕方ない。

「魔族領に混血児のための人里が在るが、移住を希望するか？ そこには混血児とその家族だけが住む事が許されている。お前の言う迫害は起きないが……」

「それじゃあ混血児が人間に受け入れられないじゃないか。それじゃあが意味が無いんだよ」

「ああ、魔王の名にかけて約束しよう。いずれ混血児の差別問題は解決してみせると。むろんお前には気長に待ってもらう必要があるがな」

レオの言葉にアンナは望むところだ、と力強く頷いた。

そしてアンナは寝る前に一つだけ尋ねた。

「旦那はいつか帰って来るのかい？」

「ふむ。グランガルで再会したが、アイツは妻に会いに行くと言っていたぞ……まあ、何か事情があつて帰って来れずにいるのかもしれんが」

「……そうかい、なら私は変わらずあの人の帰りを待ち続けるさ」

そう言つてアンナは可憐な笑みを浮かべ、その姿にレオは呆然とした。

それはアンナが立ち去った後もしばらく呆然とする程に。

（なるほど、アレが人を愛するということか。ジドラめ、随分良い女を見つけたものだな）

想い続ける妻から逃げた彼に、レオは深くため息を吐く。

愛情を知らない魔族は変わらなければならぬ。先ずは自分からその姿を民に見せて行く必要が有る。

(……相手が居なければどうにもならんな)

意気込んだはいいものも、重大な問題に気付いたレオは肩を竦めた。そして彼は蠟燭の火を吹き消し、ゆっくりと瞼を閉じる。



## 5—6

翌日の雨降る朝、レオ達はそれぞれ別行動を取っていた。

リアの帰還は昨日の内に研究者に知られているが、フィオナとククルは積荷に紛れ込んだため、まだ誰にも存在を気付かれていない。

そんな中、ククルは頭部の角を魔法で隠し路地裏を歩く。

「おや、君は一人かい？ 薄暗い場所は危ないよ、表通りの人通りの多い所を歩きなさい」

路地裏で物乞いをしている老人に声を掛けられたククルは、年相応の愛想笑いを浮かべた。

隣で透明魔法——「ステルス」を使用していたフィオナが、誰と二、三度見直すのは無理も無いことだった。

「おじちゃんありがとう！ でもこの先に用が有るんだ」

「そうかい、この先には研究施設の裏口が……ひよつとして研究施設に行くのかい？」

「……お父さんが病気になっちゃったから」

ククルの寂しそうな声に老人は気の毒そうに眉を寄せ、

「そういうことなら何も言わないよ。ただ、最近の研究者……特に魔核研究者は見境が無くなってる、まるで何かに取り憑かれたように、だから君も気をつけるんだよ」

老人の忠告にククルは一言だけ礼を告げ、最奥を目指して歩く。

老人は二人分の足音に首を傾げ、ククルの背中に視線を送るが、そこには一人だけ。彼は気の所為かと思いい直しては瞳を瞑った。

「……さっきのはなに？」

「何って人間社会に溶け込むための演技さ。知らないのか？ 魔界から人間界に移住するには人間界語と社会の成立ちを知らないと通行許可さえ降りないんだ」

「初耳、ボクはてつきり魔界の言語も人間界と共通だと思ってた」

ククルは透明化しているフィオナに悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「——、——」

人間では理解できない言葉を発した。

フィオナは半分魔族の血を引いているが、人間界で育ち魔界語を学習してる訳では無いため、言葉の意味を理解できない。

「なんて言ったの？」

「さあね、悔しかったら魔界語を覚えることだね」

むっと頬を膨らませるフィオナにククルは愉快的な笑みを浮かべながら魔核研究所の裏口へと進んだ。

本来なら正面から堂々と入りたい。しかしそれは敬愛する魔王レオに止められたため、ククルは渋々裏口からの侵入を試みていた。

裏口から侵入して混沌結晶を盗み出す。そのための別行動であり、魔核研究者がリア達に気を取られている隙に盗み出すという作戦だ。

裏口に到着したククルは鉄網を掴む。

そのまま握り締め、鉄網に穴を開け通るとフィオナがそれに続く。

裏庭に入り込んだ二人は周囲を見渡すと。

「おい、リア様が正面ゲートに来てるってよ！ 仮面を付けた変な男を連れて！」

「よっしゃー！ ついでに仮面の男の魔核も観察だ！」

「これで行き詰まっていた研究が進歩するぞ！ 者共いざ！」

「「「おおおおっ！！」」」

声高らかに叫び、正面ゲートへと駆け出していく研究者達の姿に、ククルは眼を疑う。熱気と情熱の影に隠れた狂気じみた笑みが不気味だった。

「…………お前と勇者には同情する」

「分かってくれる？ アレが国に認定された研究者達だよ」

国に認定さえされていなければ、とククルはため息を吐く。

魔核研究所に混沌結晶が有るとはいえ、国家経営による公的機関だ。勇者がそんなところに乗り込み研究資材を破壊したとなれば、彼女の立場は勇者から国家反逆罪として問われかねない。

その点を配慮したレオが、裏口からの侵入を提案したのが今回の作戦の経緯だ。

「……頭のおかしい連中に権力を与えるとロクなことにならないね」

「でも魔核の病気に対しても明確な治療方法を確立させているから、一概には否定できない」

二人は重いため息を吐いて、ククルは自らの体に「ステルス」を施してから研究施設に内部に入り込む。

そこはコンクリート製で造られた通路が広がっており、ククルは魔界に無い建造物に息苦しさを感じていた。

密閉さ気密性の高い通路、幸い窓が有るがこの施設に慣れるまで時間がかかりそう  
だ。

ククルは周囲に人が居ない事を確認してから、小声で話し掛ける。

「それで何処に行けば良いんだよ？」

「大抵貴重な研究資材は所長室に一度置かれる事がある。一旦そつちに行つてみよ、結構話の分かる人では有るから」

ククルはこの所長が誰なのか小首を傾げ歩き出す。

いずれにせよ、この研究者を纏め上げる人物だ。きつと曲者に違いない。

そんな事を考えながらフィオナの案内に従う。

その時だった。

「おや？ おやおや?? ここに魔族の臭いとフィオナの匂いがした気がしたんですがねえ……はて、勘違い？」

扉から現れた眼鏡に薄い青髪の男性が鼻を動かしながら、周囲を見渡し出したのは。

余りにもアレな行動に鳥肌が立つ。

(ファウスト博士……いつも以上にキモい)

(知り合い?)

(ん、ボクとリアの担当者だけど一応それなりの良識と常識は持つてる人……残念な人だけ)

ククルは周囲に視線を巡らせるファウストに視線を向けた。

するとファウストは白衣のポケットから棒付きキャンデーを取り出し、

「おつとこんな事をしている場合じゃない……早急にアレの対応策を講じねば、全く人

使いの荒い」

ため息混じりに愚痴を零して行く。

ククルは「アレ」という言葉に後髪引かれる感覚を覚えながら、早急にその場から立ち去った。

## 5—7

リアは非常に困惑していた。

「ようこそリア様！ 我々研究員一同お待ちかねえしておりましたとも！」

目の前に居る研究者全員が一礼しながら道を空ける姿に。

なぜ彼らはいつても以上にテンションが高いのか。

これも混沌結晶の影響なのか。そうだとしたら恐ろしい、とリアは喉を鳴らしながらレオに視線を向ける。

仮面越しから彼が非常に困惑している様子が窺え、それだけで少しだけ安心できる。

なぜ安心できるのかと、聞かれると心がそう感じるとしか答えられないが。

「リアよ、コイツらは何だ？」

困惑を宿した声で問い掛けられる。

「国家公認の偉い研究者達……って言えば信じる？」

「……癖の強い連中だな」

ようやく絞り出された声にリアは深い息を吐く。

目の前に小刻みにダンスを決め、中には鼻息荒くしながらメモを取る者も。

特に今回は酷い。通常研究者の出迎えは二、三人程度でいずれも妙にテンションが高いが、今の状態程では無かった。

せいぜい興奮しながら早口で、それでいて嫌な感じを与えさせないように気を配っているが、今の彼らは気配りなど微塵もない。各々が研究対象を見詰める熱狂的な視線だ。特に全身隈なく調べる感覚が険悪感を伴う。

以前はまだ羞恥心に疎かったが今は違い、彼らの視線は不快だ

研究者達の熱狂じみた視線にここから逃げ出したい。そんな弱気になる自分が居る。それでもこの先に進まなければ何も事態は進まない気がする。

リアはそう考え、

「私の魔核を詳しく調べて欲しいんだけど、博士は居る？」

「博士ならご自身の研究室……つと、噂をすればなんとやらですな」

一人の研究者が振り返り、それにリアも釣られて顔を覗かせた。

するとファウスト博士が両手を広げながらこちらに走って来る姿が見える。

「リア様ー!! 会いたかったですよおおおおおっ!!」

勢いよく飛び付くファウスト博士にリアは膝蹴りを腹部に入れ、すかさず首に腕を回し込み、地面に投げ付ける。

一連の動作にレオは感心した様子を見せるが、ファウスト博士は受け身を取りすぐさ



ま体制を整えた。

やがて良い笑顔を見せると、

「おやおや、リア様はだいぶ不調の様子。動きにキレがない、普段よりも膝を上げる動作が一秒遅いですね……となると魔核に問題があると……なるほど、であれば魔力量の少なさに説明が付く」

眼鏡を抑えながらリアの現状に付いて詳細に見解を述べた。

優秀だが変態を体現したファウスト博士にリアとレオは深いため息を吐く。

これが国家研究者か、と。

「ふむ、そちらの仮面の男からは魔族の臭いがしますね……ああ、我々は魔核研究者、魔核以外に興味はありませんとも。しかし、これは良い研究サンプルだ」

ファウスト博士の言葉にリアは青ざめた。

臭いでレオの正体を看破した。ここはシラを切るべくリアが口を動かそうとすると、

「リア様？ 不必要な嘘は付かなくとも結構ですよ。あなたは嘘が苦手だ、嘘を吐く際にあなたは口角と耳が若干動くのですから」

「えっ!!? そうなの!!」

自分でも知らない癖をファウスト博士はリアを観察して看破していた。それは彼女が研究対象だからか、それとも単に彼女が分かり易い性格をしているのか。

眼鏡が妖しく陰る様子にリアは体を強張らせた。今までは観察者と患者のような関係だったが、改めて対面すると彼は恐ろしい存在だと、警戒心と恐怖心が浮かぶ。

「まあ、我々は相手が魔族だろうとも人種に関係なく魔核を調べ尽くすだけですよ。……解剖してでもですが、あなたにソレは悪手のようだ」

「ほう、賢明な判断だな」

「ええ、これでも研究対象は慎重に観察する主義なので……とところで要件は魔核でよろしいんですね？」

話を切り替えるファウスト博士にリアは冷や汗を浮かべながら頷く。

彼は随分嫌われたものだ、と肩をすくめながら自身の研究室へと歩き出した。

ファウスト博士の研究室に入り、患者服に着替えたりアはレオを睨む。

「どうしてレオも着替えないのよ」

「この男に俺の魔核を調べられるのはな……」

「まあ、ほぼ同じ状態だそうで、それなら二人分観る必要は無いでしょうから。……それに調べるならかわいい女の子と男の子の方が良いですし」

そんな事を言うファウスト博士に、二人はククルの身を案じた。絶対にコイツとククルを出会わせてはならないと。

「そういえば、先程魔族の臭いとフィオナの臭いがしたんですよ……」

「ほう、姿は見たのか？」

「いえ姿は見えませんが、私の嗅覚は特殊ですの」

レオは、だろうな、と肩を竦めリアに視線を向ける。

布面積が少なく、ちよつと動けば下着が見えそうな程に恥ずかしい患者服。

今の彼女を視界に入れるだけで頬に熱が宿るが、レオはファウスト博士に視線を戻す。

「アレはお前の趣味か？」

「いいえ、私はどちらかと言うとあんな露出度の高い患者服よりもナース服の方が好み

……コホン、アレの趣味は所長と一部の研究者ですよ」

「ふむ？ 確かこの所長は……」

「レオ、考えるだけ無駄よ。あの人はね、見た目で推し量れるような人じゃないから……一応良識的で常識的な人ではあるけど」

リアは所長の姿を思い浮かべて苦笑を漏らした。

三十半のあの人を見たらきつとレオは、仮面の下で間抜けな顔をするに違いない。

そんな事を考えているとファウスト博士は、ベットに備え付けられた魔法機具を動かす。

ガルディアス大陸に在る都市国家ラプラスヘイムは、高度な魔法技術を有しており魔法器具はその内の一つにあたる。

レオはまだ知らない魔法器具の内部構造に興味を示し観察する。

「さあ、横になってください。すぐに済みますよ」

リアはその言葉に従い、いつも通りに仰向けになり目を瞑ると、急激な睡魔に襲われる。

いつも検査を受けると時、リアは魔法による睡魔に襲われ眠ってしまふ。

赤い光がリアの身体全体を走り抜け、画面にリアの情報映し出される。

体重から身長、血液型、現在の魔力量にレオはファウスト博士に視線を移す。

「おや？ リア様は以前より体重は変わらない……寧ろ細胞に変化が無い様子……ふふつ、ということはいわゆる研究は成功しつつ有ると」

「……やはり不老の実験か、貴様らは彼女に何を求める」

「不老を求めているのはギリガン王だ。我々はただ依頼を受け、資金を提供されているに過ぎませんよ。それに我々なりに人間と魔族の平和の道筋を模索しているんです」

ファウスト博士の真面目な顔にレオは息を吐く。

「長寿を否定し、混血児を迫害する国とは思えん思想だな」

「彼らは愚かなんですよ。老けない？ 変わらない？ それは何だと言うんです？  
我々は研究者だ、だったら彼らの長寿の必要を解明し理解できるものにする。それこそ  
が我々の使命の一つ」

ファウスト博士の嘘偽りの無い真つ直ぐな言葉。

それでもレオは問う。

「そのために魔族を解剖したと？ 理解はできるが賛同はできません」

「必要な犠牲と断じるのは簡単ですがね、それは間違い無く我々の咎ですよ」

それを罪と認めるファウスト博士の姿勢。

何処までも真つ直ぐな男だ、だが、理解はできても理性的な部分で納得がいかない。

仮に人間の解剖が必要に迫られた時、自分ならどうするか。結局の所狂気的な行いを  
彼らのような者達に押し付けけるのではないか。

そう考えたレオはファウスト博士の言葉を否定しなかった。

「なるほど、事が終わり次第お前達は罰せられる覚悟あると？」

「勿論だ。この戦争が終結した先、魔族と人間の共存には我々は不要でしょう」

「ふむ、ならばお前達は永劫罪を背負うが良い」

「我々を罰しないと？」

ファウスト博士の疑問にレオは静かに答えた。

「それが罰だ。……もう少し道理を弁えない連中なら施設ごと破壊したのだが、お前は話の判るヤツだった」

「それは……ありがとうと答えるべきか。それとも私以上にイカれた研究者を野放しにするということですか？」

「…… 多数が減つても気に留めんだろ」

「ええ今は戦時中ですからね、何が起きても不思議ではない」

そう言つてファウスト博士はレオの懐に折り畳まれた紙を入れ、リアの検査に移つた。

やがて彼は眼鏡を曇らせ、呟く。

「この鎖……魔核から直接魔力を吸い取る。「ドレイン」の一種と断定するのは早計……ならば神々の時代に使用された鎖でしようか？」

「かつて魔界で神王が使用したグレイプニルが存在していたが、アレは魔狼フェンリルに砕かれたと記録されている」

「魔界の歴史にも興味が出て来る話ですね……しかし朽ちた鎖を見るに模造品……いえ、似せて作成されたものですかね」

「鎖は混沌水晶を砕けば一本破壊できるようだが、問題は魔核に仕掛けられた魔法陣だ」

レオの言葉にファウスト博士は画面に映し出された魔法陣に眉を寄せる。

「芸術性の無い魔法陣だ。さながら魔核に仕掛けられた時限爆弾と、あなたの魔核にもこれがあるとするなら、一刻も早く解除したいでしょう。ですが、少しでも解除に移行すればコレは爆発しますよ」

「……やはりそこまで用意周到か。となれば時間との勝負か」

猶予はいつまでなのかは分からない。その前に魔核の機能を完全に取り戻す。あとはもう賭けだ。

ルシファーが速いか、それとも自分達が速いかの勝負になる。

「混沌結晶ですか。アレが天使の行商人が運び込んでから一部の研究者は、おかしくなり始めましたね。今も地下研究施設で恐ろしい研究をしてるでしょう」

「恐ろしい研究？ いや、混沌結晶は何処に在る？」

「所長室と地下研究施設に……ああ、恐ろしい研究というのですね——」

ファウスト博士は不慣れな魔界語でレオに内容を語った。

それはレオにとっても衝撃的で何としても阻止しなければならぬ恐ろしい計画だった——

リアが目覚めた後、二人はファウスト博士に案内される形で地下研究施設へと向かう。

レオはファウスト博士から聞かされた計画に、彼女を向かわせて良いのかと思いつむ。

そこで並走するリアに問い掛けた。

「良いのか？ 地下施設ではお前の心に苦痛を与えるような実験がなされているそうだが」

「だって私に関することなんでしょ？ だったら私が止めないと！ というか何よR計画って」

「彼らが超えてはならない一線を超えてしまった結果、誕生した計画さ。これも全て混沌結晶が原因だけぞ」

混沌結晶は人が心に秘めた強い欲や悪意を浮き彫りにする性質を持っている。

つまりここの研究者達は心の奥底に、とんでもない計画を胸に秘めていたということになる。



流石に計画の全容を聞かされたレオも驚いたが、何より実験対象がリアということ。責めてこの手で計画を阻止したいが、リアは付いて来ると聞かない。

こういう所は頑固だとレオは思う。

「やれやれ、国家施設で大立ち回りを演じればリアの身が危ないというのに」

「うっ、そうだけどさ！ もしもそのR計画が戦場に導入されたら魔族だつて困るでしょ？ 具体的な内容は分からないけど」

「そこは安心したまえ。リア様が帰還しても良いように、常に不幸なシナリオは出来上がっているからね」

「用意が いいな」

ファウスト博士に感心した様子を見せると、彼はにやりと笑みを浮かべた。

「この気に内部改革もしたいからね。たかが混沌結晶で理性が暴走するなんて研究者として三流さ。我々は常に渦巻く欲望を抑えなければならぬのだから」

「そう言ってる割には、私達の体を随分調べてたわよね」

「……おっと、それはそれこれはこれだよ。何せ君達の魔核は人の数倍の魔力量を誇っているんだから、人類の総合魔力量を増やす好機を逃す手は無いよ」

ファウスト博士の言葉にリアは、深いため息を吐く。

彼らの実験の内容を概ね知っているレオからすれば狂気だ。

リアは不老に成りつつ有る。腹部を貫かれ即死しない辺り、生命力も強化されていると見るべきか。

メンデル国が目指すものは不老不死の勇者。それではリアの心は民衆によつて壊されてしまふだろう。

人とは時に愚かで怖い生き物だ。魔女狩りによつて魔女の排除。魔族との戦乱、混血児の迫害がそれを証明している。

中にはそんな彼らに寄り添う者も居るが、果たしてリアはその時耐えられるのか。

「どうしたのレオ？　なんだか考え込んでるようだけど」

不意にリアの声に思考の渦から現実に戻され苦笑する。

「お前は随分と俺の思考が読めるようになったようだな」

「仮面越しだけど、レオって考えごとしてる時つてき、指で魔剣の柄を叩く癖があるのよ」

「……治そうとはしているんだがな、どうにも治らんようだ」

無意識の内に出る癖をリアに看破されていたのには驚かされたが、一ヶ月以上も行動を共にしていればそれぐらいは普通なのか。

それとも彼女がどんな時でも観察しているからだろうか。

監視を含めたリアの観察は不思議と不快にはならない。

誰かに理解されていることが嬉しいからだ。

「おやおや、リア様は随分とレオにお熱のようですね」

「そう？ こつちの思考は見透かしたような態度も取るから、これぐらいは仕返ししないと負けた気分になるじゃない」

「……二人の関係は不思議ですね。私はレオの正体は魔族ということ以外は決して知りませんが……ああ、その突き当たりを真つ直ぐ進むと地下施設への入り口です」

ファウスト博士の言葉に従い突き当たりを真つ直ぐ進みながら、リアは彼がレオの正体を察しているとみていた。

変態という一面が目立つが、観察眼に関しては研究者としても優れている。

そんな彼が眠っている間にレオと話していたのだから、正体を見破っても不思議ではない。

そんなことを思っていると地下施設の入り口を目前にして足が止まる。

地下に続く階段が分厚い鋼鉄の扉に閉ざされていた。

「こんな扉……あつたかな？」

「いえ、私もこんな扉は知りませんよ。……ん？ よく見ればこれは地属性魔法を硬質化させた物のようですね」

「……破るには魔力が足らんが、博士ならどうだ？」

その問い掛けにファウスト博士は顔を顰める。

「私の魔力量は元々あなた達ほど多くはありませんよ。それに攻撃魔法は不得意なので」

今の状況では扉を破れない。リアの魔法技——【鋼破掌】も残りの魔核が無い状態では破れない。

ここはククル達と一度合流する必要がある。そう考えた二人は所長室へと足を向ける。

「ああ、待ってくださいよ！ 私も最後まで付き合いますよつとー！」

できればここにファウスト博士を待機させたいが、言つて聞くような輩ではない。

僅かな交流、しかしそれだけでレオはファウスト博士という人物をある程度は理解していた。

## 5—9

レオ達が所長室を目指している頃。

ククルとフィオナの二人は所長室の前に到着していた。

「今から出会う人に驚かないでね」

「そんなにヤバイヤツなのかよ」

ヤバくはないが、何か常識が覆されそうな存在では有る。そう言った意味でフィオナが頷くと、ククルは険しい表情を浮かべた。

「魔族の解剖を指導するヤツだ。きつとイカレタていて横暴な狸爺に違いない」

酷い偏見と誤った情報について吹き出してしまふ。

案外魔族の調査員も大した事が無いのかもしれない。それともここが特別嚴重に警戒されているからか。

しかし現に「ステルス」で侵入できてしまっている。

フィオナは警備体制に疑問を浮かべながらも扉を開けた。すると、

「全く裏口から「ステルス」で侵入なんて随分と他人行儀じゃないか、フィオナ」

白衣を着た薄い金髪の女の子が所長室の椅子で、足を組み不敵な笑みを浮かべてい

た。

見た目は十歳ほどの女の子だが、彼女こそが魔核研究所所長セレスだ。

そんな事を知らないククルはフィオナに目線を向ける。

（おい、ガキに「ステルス」を見破られているぞ……なんだ？ 所長の娘かなにか？）

小声で話しかけるククルにフィオナは息を吐く。

潜入場所から既にバレていた。つまり警備の薄さはセレスの指示だったのか。

フィオナは自らに施した「ステルス」を解除して悔しげな視線をセレスに向ける。

「ああっ！ 良い！ 魔女っ子ロリ娘が屈辱を浮かべる表情……っ！ これはたまらな  
いわっ！」

白衣を着た体を抱き締めて悶えるセレスの姿に、ククルは呆然と口を開けた。

それは無理もない事だ。幼い容姿をした女の子が悶絶する姿を見せられているのだから。

「ああ、でも……そこの魔族も姿を見せてくれないかね？ 『デイスペル』っ！」

解除魔法——「デイスペル」がククルの「ステルス」を強制的に解除させ、彼女の前に姿が顕らとなる。

するとセレスはククルの姿に驚愕し、しばし呆然とするや否や鼻血を噴き出した。

「鬼シヨタ……だどっ!？」

「誰がシヨタだ！ これでも百十二歳なんだぞ！」

ククルの主張にセレスは、興奮冷めぬ状態でお息を荒げた。

何処からどう見ても危ない女の子だが、彼女こそがメンデル国の魔核研究学における最高権力者。

フィオナは改めて理不尽な存在だと思ひ直す。無駄に権力と地位を持っているため奇行に走ろうと騎士団に厄介にならない。

それどころか容姿を武器にする始末だ。

ククルはいつまでも悶えるセレスに、蔑みの目を向けながらフィオナに問う。

「なあアレは何なんだよ？ 普通のガキじゃないよな」

「……彼女こそがセレス所長」

「へえ、セレス所長ねえ……うん？ 所長……あのガキがつ!? どう見たつてお前よりも幼いだろ……！」

何を言っているんだと言わんばかりの眼差しに、それが真実だと頷くばかり。

改めてククルはセレスに顔を向け、彼女こそが研究所所長。しかし到底信じられない光景だ。

ククルは、自身の常識では推し量れない彼女の姿に頭を抱え始めた。

「……んっ！ いけないいけない、理性がはち切れるところだった。フィオナの用件は

何だい？ 一応こちらには君達を拘束する義務があるんだけど、どうかわたしが拘束してあげようか!？」

「……混沌結晶がこの施設に有るでしょ？ アレを譲って貰おうと思つて」

変な事を口走る彼女を尻目に、フィオナは淡々と要件だけを伝える。

そんな彼女にセレスは肩を竦める。

「たかがあの石ころ二つのために侵入を？ キミらしくないね、それとも混沌結晶が此処に在る時点で嫌な想像でもしたかな」

「うん、混沌結晶は人の悪意と欲を浮き彫りに暴走させるつて調べが付いてる。だからこここの研究者達がいつも以上に奇行に走つたり、なりふり構わない実験をしてるかと思つてる」

まるで信用してないと言われているような言葉に、セレスは椅子から転げ落ちては涙目を浮かべた。

「ひ、酷いなあ……影響を受けて暴走してるのは一部の三流研究者だけだよ。わたしもファウストも平常だ」

「平常でそれなのかよ」

「タチが悪いよね。きつと元々欲望に忠実に生きてるような人達だから目立った影響も無いんだと思うけど」



フィオナの辛口にセレスは頬を赤らめながら、一つ咳払い。

「コホン……兎も角要件は理解したよ。そんな事のためにわざわざ侵入しなくとも混沌結晶ぐらい譲る……って即答できたら良かったんだけどねえ」

「何か問題でも？ 危険なのは理解してるんでしょ」

「影響を受けた三流研究者が、地下施設に籠って混沌結晶の意のままに実験してる。それこそわたしが立場と世間の風評とキミ達の好感度を天秤にかけて、リスク計算をしたから我慢してたような研究をね」

セレスの言葉に堪らず二人は、『どんな実験だよ』と突っ込んだ。

「ボク達に嫌われるような研究……？ 普段の検査だけでも嫌なのに、これ以上何かあるのに驚き」

「……いや、薄々わたしはね、もしかしてリア達に嫌われてる？ なんて思ってたりはしてたんだよ？ だけどギリガンの命令だから逆らえないしね、わたしにも立場が有るか」

「冗談だよ、でも体を調べられるのは……」

「分かってるさ。わたしも似た実験を自らの体に施されているからね……全く狂人の父を持つと大変だ」

ため息を吐くセレスにフィオナとククルは本題に移る。

「それで？　此処に在る混沌結晶は譲つて貰えるんだよな」

ククルの言葉に彼女は机の引き出しから混沌結晶を取り出し、それを投げ渡した。

しっかりと受け取つたククルは掌に収まる混沌結晶に視線を落とし、拍子抜けしたような表情を浮かべる。

「随分簡単に渡すんだな」

「それは魔物と人間を惑わせる以外に研究的価値が無いからね。確かに混沌属性は希少だけど、魔力増強に使いには身の破滅を呼び込む……正に諸刃の剣だ」

「諸刃の剣……天使の目的が何なのか。所長はどう考えているの？」

混沌結晶を譲り渡した天使を思い浮かべながらセレスは息を吐く。

興味が惹かれない実験資材。それを破棄してしまふかと考えた矢先に現れた彼。

彼は混沌結晶を破棄するのは早計、然るべき人物に譲るべきだと忠告を残して行つた。

「ふむ……わたしの考えはね。天使は実験成果を得るついでに人間の破滅を目論んでいる。ただ、その一方で天使の計画を阻みたい勢力が居るといふこと……正直言つて天使のやり方は非効率で回りくどい、きつと混沌結晶で何かを操りたいのだろうね」

「災害級の魔物とか？」

「概ねそうだと見てもいい。現に東のテイラの森に生息しているケンタウロスの群れが

暴れ出し、ハーヴェエストに進軍を開始したそうだけど……これも実験から目を逸らす動に過ぎないとわたしはみてる」

その件に付いてはククルとフィオナは知っていた。

街中で潜伏の折に騎士団から伝えられた一報を受けて、ククルは自らの部隊をテイラの森へと差し向けた。

そこには騎士団の協力もあり、そう時間のかからない内にケンタウロスの群れは鎮圧されるだろう。

「それについては騎士団が対応してるよ」

ケンタウロス自体は中堅程度の強さを誇る魔物だ。

それが群れとなると騎士団を動かさざる負えない。

その反面街の防備が手薄にはなるが、そのためにククルは街に残った。彼一人で魔物大群ですら雑兵に過ぎないからだ。

「天使に潰け込まれない限りは安心だろうね。……と、話が逸れたね、現状では混沌結晶を放置するにはリスクが高すぎる、だからキミ達が例え貴族の屋敷から持ち出しても罪には問われないよ。何せ人を惑わす危険物だからね」

彼女の言葉にフィオナは安堵な息を漏らす。

勇者一行として貴族が犯した罪と向き合うことが有った。その時は立場の問題から

何も出来ずにいたことも。

しかし混沌結晶が関与した事件なら別問題だ。それはルシファアの策謀であり、メンデル国を守る正当性を与えている。

「とは言っても、一度王都に帰還して正式任務として受諾しないとね」

「あつ、そうだった。ボク達の活動はあくまでもギリガン王から与えられる任務だった……困った人達の依頼ばかり熟してたから忘れてたよ」

「フィオナはたまに抜けてる所が有るからねえ……そこもかわいだけどっ！」

セレスが声を高らかに上げた、その時だった。二人の背後の扉が開いたのは。

「……彼女が所長？ 何の冗談だと聞きたいが、あの奇行……信じるしかないのか」

「しっ！ 子供大好きな所長で多少変態で奇行が目立つけど、アレでも数々の魔核の病気の治療方法を確立された賢者なのよ」

「見た目は口り、頭脳は奇人変人ですがアレでもこの国に居なくてはならない重要人物なので、困ったことに」

所長室にやって来たレオ達にククルとフィオナは駆け寄った。

「ファウスト博士も一緒なんだ……それでどうして二人はここに？」

「地下研究室に混沌結晶が有るらしいんだけど、地下の入り口が頑丈な扉で塞がれてて入れないよ。だから二人の力を借りようと思って」

リアの言葉にフィオナとククルは目を合わせ頷く。  
早速二人はリア達と所長室を飛び出すだった——

## 5—10

道中で混沌結晶を砕いたレオ達は、地下研究所へと続く扉の前に到着した。

レオは侵入を阻む鋼鉄の扉から視線を外し、ククルに告げる。

「四魔將軍ククルよ、障壁を砕き散らせ」

「御意」

短く呟くククルは右拳と左脚を引き、鋼鉄の扉に一気に叩き付けた。

凄まじい衝撃音が研究所全土に響き渡り、異常を察知した警報装置が鳴り出す。

これで地下研究施設に居る研究者には侵入がバレるだろう。しかしセレス所長のお墨付き、ファウスト博士の事後処理が在る。

充分な後ろ盾が在る以上、リア達の立場を気に止める必要も無くなった。

激しい音を立てて崩れる鋼鉄の扉に視線を送りながら、レオは歩き出す。

「うへえ、凄い破壊力ね」

「ふん！ ザガーンの一撃を受けて破壊できない鎧を装備しててよく言うよ」

ククルは鬼人族とはいえまだ子供だ。対してザガーンは邪竜族であり成人している。

単純な魔力量と筋力を比較してもザガーンが上だ。だが、ククルは脳筋思考の鬼人族

の中では珍しく魔法の扱いが巧い。

レオはククルの将来性を見出し四魔將軍へと抜擢した経緯が有る。

五人は地下研究施設へと降り立つ。

広々とした通路に幾つもの研究室へと続く扉の前に、ファウスト博士が先頭を取る。

「この道を真っ直ぐ、最奥に連中の研究施設が在ります。リア様とフィオナは覚悟がよろしいですか？ もしも出来てないのなら今回の一件から手を引く事を強くおすすめしますが……」

ここに来て今更な言葉にリアとフィオナからため息が漏れる。

「今更よ。私に関わってる事柄なら解決しないと、それにレオとククルに任せ切りにしたら共闘の意味が無くなるわ」

人間の起こした事件は人間の手で解決しなければならぬ。

今回は混沌結晶が絡んでいるからレオとククルは手を貸しているが、それでも無ければ二人が手を貸す理由が無い。

リアは思う。混沌結晶はきっかけに過ぎないと。人はいつか大きな過ちを犯し、その度により越えていく。

混沌結晶が悪意を浮き彫りにさせているが元々は人々の心の問題だ。

自分を深めた人は心の何処かで何かに対しての欲や恨み、悪意を抱いている。

「ボクも」計画とか、身体と魔核を調べ続けている理由が知りたい」

「……そうですか。前者の方は見れば理解できますが……きつと度肝を抜かれるでしょうね。後者については、国家機密ですの」

ファウスト博士はポケットから棒付きキャンデーを取出し口に咥えた。

勇者一行を使った研究が何なのかはリア達に嚴重に伏せられている。

それに対してレオは告げる気が無かった。告げずともいずれば知られる事実だからだ。

もつとも混血児のフィオナには殆ど影響の無い話では在るが、人並みの寿命を迎え一生を終える筈が、いつの間にか長寿を得ていたなどと地獄でしかない。

人間の平均寿命は五十数年。魔族にとつて短過ぎる時の中を懸命に生きるからこそ、人間は眩しく時に羨ましいとはさえ感じていた。

だが、それも結局の所は人間の業で奪うのもまた人間なのだろう。

（ああ——天使は人間の業に嫌気が差したのか）

人間界が誕生し、人類が知恵を得てからずっと見守り続けてきた天使。それは永劫とも呼べる時で、人間に失望し見限る天使が現れても不思議ではない。

レオは人間界と天界の關係性に重いため息を吐く。



しばらく通路を走り続ける。特にこれといった妨害も無く順調に最奥に到着。L計画に絶対の自信を持つているようだ。

ファウスト博士は扉に手を掛け、

「覚悟はよろしいですね？」

改めてリアとフィオナに問う。すると二人は当然と言わんばかりに頷く。

ファウスト博士は彼女達の力強い視線に息を吐き、扉を押し開けた。

開け放たれた扉の先には——筒状のガラスケースの中で眠るリア達。まさに異様と呼べる光景が広がっていた。

人間の複製体は製造、研究自体が禁忌とされているが、彼女達の体を注意深く観察すると、露出した関節部分の繋ぎ目から人形であることが分かる。

そんな中リアは呼吸を荒げながら、顔色を真っ青にして聖剣ゼファールを引き抜く。

「なによ……なんなのよこれ……っ！」

異様な光景に眼を背けるフィオナと怒りを露わにするリアに、ファウスト博士が静かに、それでいて冷淡な口調で告げる。

「これがL計画の全容ですよ。勇者リアを模倣した人形を量産し、戦線に導入するといふ狂気的な実験」

「確かにこれは魔族にとつても脅威だが、魔力までは模倣できんようだな」

「ええ、魔力も含めた属性は個人によって異なりますからね」

歩き出すファウスト博士にレオとククルは続き、リアとフィオナに視線を向ける。

「お前達はここで待つか？」

「……行くわよ、どんな理由でこんな計画を実行したのか……色々問い詰めたい！」

ガラスケース群の奥に在る扉から研究室の中央室へと進むと、そこには魔法器具を操作する二十人の研究者達と彼らの側に佇む<sup>リッ</sup>達の姿が在った。

扉の閉閉に気が付いた一人の研究者が振り向く。

金歯の光らせ、でっぷりとした白衣の男——クルド博士がリア達に眼を細める。

レオは数体の<sup>レ</sup>に視線を向けると、本物と細部が異なることに眉を寄せた。

メイド服を着た<sup>レ</sup>、騎士団の正装を着た<sup>レ</sup>、可愛いらしいフリルのドレスを着た<sup>レ</sup>。そのどれもが本物よりも胸が大きい。

なぜ、とレオとククルが首を傾げる中、リアは聖剣ゼファールをグルド博士に向けた。

「グルド博士！ どうしてっ……いつからっ……こんな実験をっ！」

「おお、リア様。いつから？ この実験の実行は三週間前程になりますが、着想は三年程前からになりますな——」

「どうして……その質問の答えは実に簡単だ。我々はリア様の様々な一面を見てみたい、もちろん魔族を退ける優秀な戦力としての側面も期待してますがな。やはり、リア様ほどの美少女を望む形で体現できる。これほど素晴らしい実験はない！ここに居る同士一同は皆がリア様に惹かれているのですからなっ！」

熱弁するグルド博士に拍手を送る研究者達に、リアは鈍痛に頭を抑えた。

そんなに前から計画は存在していた事と、変態思考の研究者達にリアはファウスト博士を鋭く睨む。

睨まれたファウスト博士は、僅かに彼女から視線を晒しながら震える腕を抑えた。

「確かに提案はされましたが、セレス所長が許可を出さなかつたので計画は永久凍結が決定されたのですよ。……第一既に我々は罪を背負う身だ、そんな我々がこれ以上リア様達の人権を侵すマネなど許可できるわけがない」

「……今すぐに混沌結晶を差し出して計画を中止して！」

「流石に勇者と言えども、至高なる計画を中止にはできませんぞ。それに混沌結晶は実に素晴らしい、我々が踏み止まっていた理性という壁を壊してくれたのですから」

そう言ってグルド博士は懐から混沌結晶は取り出し、掌で遊ばせるように転がした。

「なら力付くでっ！」

リアが駆け出すと、一人の研究者がスイッチを押した。

その瞬間背後の扉が開き、ガラスケースで眠っていたリア達が動き出したのだ。

「さあ！ 実験の始まりだ！ L計画が本物に迫られるのか否かを！」

L達に囲まれたレオ達は冷や汗を流す。

武器こそ通常の剣だが、彼女の剣技は厄介だ。

ククルはそれを身を持って体験している。

「リアそつくりの……胸が大きいけど、攻撃するのはちよつと」

仲間そつくりの人形に攻撃を加えることを躊躇うフィオナ。それは無理もないことだった。フィオナは混血児である自分を分け隔て無く受け入れてくれた。例え紛い物でもリアを傷付けることに心が躊躇ってしまう。

葛藤するフィオナの様子に、レオは仮面の下で優しい笑みを浮かべた。

「やり辛いか。ならばフィオナはファウスト博士と援護に徹するがいい」

魔剣フェルグランドを構えたレオがL達の動きに警戒する。

ククルは素早く背後の守りに着き、掌に渦巻く風を出した。

「それじゃあ後方は引き受けますよ」

「頼むが、魔法技には注意しろよ」

ククルは自身の体を大きく吹き飛ばしたりアの魔法技に、脂汗を浮かべながら頷く。

そしてリアは、

「どうして私より胸が大きいとか、色々気になる事はあるけど……代々受け継いできた剣技をそう簡単に真似られると思わないでよっ！」

聖剣を上段に構え、魔力を解き放つ。

遂にL計画との戦闘が火蓋を切ったのだった——

## 5 — 1 1

聖剣を構えるリアに飛び掛かる五体のR。<sup>リア</sup>

それに対してリアは臆せず、聖剣に光を纏わせ、

「《光よ我が敵を滅せよ》」

リアは勢いよくRに向けて、右薙から魔法技——【洗斬】を繰り出す。

鋭い刃と化した光が一体のRの体を斬り裂くが、残り四体のRは剣を盾に【洗斬】で【洗斬】を受け止める。

だが、リアの勢いは止まらない。彼女は光と火花が散る中、更に足を踏み込みそのまま勢いで左薙からRを斬り裂いた。

硬く冷たい床に転がるRの残骸。人形とはいえ自分そっくりの相手を切り捨てたことに吐き気が込み上がる。

「……っ」

まだ人じゃないだけマシ。そう言い聞かせながらリアは込み上げる吐き気を呑み込む。

「ああああああっ!! ぼ、ぼくの、ぼくのリアたんがああああー!!」

一人の研究者が絶叫をあげ、Rの破壊に精神が耐えられなかったのか泡吹いて倒れた。

「たんつてなによ」

人を模倣した人形で着せ替え人形の如く、様々な衣装に着飾ったR達に眼を向ける。

この研究者の暴走した欲望のせいなのか、彼女達の衣装は少々マニアックな物まで含まれていた。

(ネコ耳メイドつて……や、ネコ耳はかわいいけど……恥ずかしいじゃない!!)

ふとリアは気がつく。人形は関節部の繋ぎ目と胸の違いさえ無ければ本人と変わらない。自分もあんな衣装は似合うのか。年頃の少女として気にはなる。

リアが葛藤する中、レオがRを相手に「ファイアボール」を放つ。

今は戦闘中、集中しなければならぬ。左右からRがリアを挟み込む。

リアは左右から同時に繰り出された斬撃を寸前のところで避けた。

僅かに前髪を掠め、数本の金髪が宙を舞うと、

「リア様の髪の毛はサンプルとしても貴重だ……! いや、毛髪から遺伝子情報を読み取り、今度は複製人間の製造に……!」

グルド博士が狂氣的に言葉を並べ、研究者達が彼の言葉に賛同し、雄叫びをあげている。

そんな中、リアは今すぐ彼らを斬り伏せたい衝動に駆られながらも、二体のRの剣を聖剣で受け止める。

そして三体目のRが背後から、丁度リアの死角から刺突の構えに入った瞬間、Rが鎖に絡め取られ自由を封じられた。

背後に目線を向ければ、拘束魔法——【チェーンバインド】を放つフィオナの姿。

「ありがとうフィオナ！」

「うん、でもやっぱりボクにはRを攻撃できないや」

フィオナの優しさを理解したうえでリアは微笑む。

それにしても、と思う。なぜ人形であるRが魔核も無しに魔法技を扱えるのか。

その答えはすぐに辿り着く。魔法陣による魔力供給だ。過去にレオはアルデバランの森全域を魔力結界によって包み込んだ。四方に建造された砦に魔力供給用の魔法陣で砦同士を結ぶようにして。

前例が有る以上、何処からかR達は魔力供給を受けている。正確な位置はリアには掴め無いが、魔力の扱いに長けたものなら。

「無理はしなくていいから。それにこういうのは私とレオ達に任せて……！」

リアは二本の剣を押し返し、二体のRの体勢が崩れると、

『吸魔ノ一刀』



二体のRを斬り伏せ、魔力を奪い取りながら駆け寄るRの頭部を左手で鷲掴みにしたレオはそのまま、

「そら、爆ぜろ『ファイアボール』」

爆発で頭部を吹き飛ばす。

床に崩れる首無しRにまた一人、研究者が絶叫しては気を失う。

Rを倒す度に彼らは気を失うのか。それほどRが大切なのか。それともただ単に興味の集大成のような人形を壊されたからか。

混沌結晶の影響とはいえ、同情できない彼らに重いため息が零れる。

リアは彼らの考えが理解できず顔を顰めた。

「リア様、あまり考えない方がいいですよ。我々研究者の思考は常識外れですから」  
「それを自分で言っちゃやう辺り、さすがファウスト博士ね」

元から思考回路がイカれていると認めているファウスト博士には、少しだけ好感が持てる。

ただ彼も研究者だ。自分達を使って影でどんな研究を行なっているのか分かったものではない。

しかしその点レオは、何かに気が付いている様子で何も告げようとはしない。

また彼はそうやって隠し事をする。あの時も、ミディアの時もそうだ。大切な事を最

後まで隠そうとした。

なんだか無性に苛つく。リアは力強く聖剣を握り締め、「縮地」を駆使ながら槍を構えるRの懐に入り込む。

聖剣を自身の身体ごと斬り上げた勢いから、聖剣に光を纏わせる。

「《光よ刃となり走れ》！」

飛ぶ斬撃を放ち、前方に控えるメイド服のRに光の斬撃が走る。

魔法技——【洗波斬】がメイド服のRを一刀両断し、魔法器具まで斬撃が届く。

だが、流石に重要施設の魔法器具だけあつて備えも万全だ。斬撃が魔力結界に阻まれ、リアは着地と同時に舌打ちする。

「……相当機嫌が悪いようだな」

「あそこまで不機嫌なリアは見たことないよ」

「……勇者は怒らせるとヤバいな。……って、魔法器具の破壊も大変そうだなっ！」

ククルは首元を狙う刃を避け、Rの腹部に拳を叩き込む。拳がRの腹部を貫き、そのままRを投げ飛ばし両掌を向けた。

「ああもう吹き飛ばせ！ 『ストーム』——！！」

嵐魔法——【ストーム】が後方からぞろぞろと迫るR達を呑み込んでいく。

嵐に呑み込まれたR達は、無数の風の刃に体を斬り刻まれ、次々と破片が床へと落ち

ていく。

その様子を尻目に見ていたリアは僅かに体を震わせた。

自分そっくりの人形が無惨に壊されていく。もしも彼女達の立場が自分だったら——肉片になっていたのは自分だと、恐怖に顔が引き攣る。

「安心しろ、共闘の間は惨い死に方はせんだろう。第一お前なら「ストーム」に呑み込まれたところで容易く脱出するだろう」

「そ、そりゃあ、内側から魔法技を思いっ切り放つけどさ……でもね、やっぱり——何でもないわ」

此処まで着いて来ると決めたのは自分だ。彼らは何度も止めようとしていたのにも拘らず。

だから今更になつて怖くなった、なんて弱音は吐けない。特にレオにだけは弱い自分の姿を見せたくない。

見せてしまつたら好敵手として失望されてしまう。

そう考えただけで、何故か胸が苦しくなる。魔王の敵として情け無い姿を晒したくない、リアはそう考えることで一つの疑問から思考を逸らす。

「まだだ！ まだR計画は終わらんよ！」

そう言った一人の研究者がまた一つスイッチを押す。

すると今度は両サイドの壁からガラスケースが現れ、次なるRが目醒める。  
「ちよとおお!! なんて幼い頃の姿なのよ! 何をさせる気!」

幼いR達の姿にリアが声を張り上げる。

するとフィオナが幼い姿のRに、

「昔のリアもかわいい……一体お持ち帰りしていいかな」

「えっ、ちよつとフィオナ? フィオナの方がかわいいからね」

フィオナの場違いな言葉にリアは困惑を浮かべながら、自分の幼い頃よりも今のフィオナの方が充分にかわいい。

「まあ、確かにちんちくりんの方がかわいいかもしれないね」

意外にもククルは幼いRとフィオナを見比べて、そんな事を言った。

彼の言葉にフィオナは満更でもなさそうにはにかんだ。

「おやおや、緊迫した状況で色気付くとは……良いぞお! もつとやれ!」

「喧しい! あんたも妙な事言つて無いで魔法で援護しろよ!」

「なっ!?! 私にあのかわいい容姿のリア様を攻撃しろと! 鬼かつ!!」

「鬼だよ!?!」

騒ぎ出すククルとファウスト博士のやり取りにレオは、肩で笑い出し魔剣を構え直

す。

更なる増援に窮地に立たされてなお、魔王レオの闘争心は衰えない。

## 5—12

「おにいちゃん……りあをいじめないで……っ」

幼いR達は魔剣を構え歩き出すレオに向かって悲痛な表情で訴えた。

不味い、意外と子供好きなレオにはアレは効く、とククルは内心で冷や汗を浮かべる。

「朽ちろ」

闇を纏った魔剣を大振りに左薙から一閃。

魔法技——【常闇ノ一刀】が幼いR達を薙ぎ払う。

斬られた箇所から幼いR達を闇が飲み込んでいく。あとに遺されたのは朽ち果てた人形の残骸のみだった。

ククルの杞憂はレオの容赦ない攻勢によって終わった。しかし、そこに安堵は無い。有るのは魔王レオに対する畏怖だ。

彼は知っている。レオが容赦しないということは、静かな怒りを宿しているということに他ならない。

「レオ様……ばんざい」

震える口から紡がれたレオに対する賛美の言葉。

ククルは改めて後方から続々と現れるRに身構える。

「しつこいなあ！ だいたいコイツらの魔力は何処から……っ!？」

頬を掠める斬撃にククルは眼を見張る。

先程とRの動きが違う。

そんな時だった。グルド博士が不敵な笑い声をあげたのは。

「外部から魔力を供給される限りR達は戦い続けられる！ あなた方に魔力の供給が断てますかな」

「……ククル！ 供給ラインはこの室内全体だよ……!」

静かに援護している間、ずっと魔力の流れを探っていたフィオナが鋭く叫ぶ。

ククルはその言葉に自然と動き出した。掌に風を集め圧縮させる。

やがてそれを研究室の中心に向けて放つ。

同時にレオ達はその場に伏せると、

『『バースト・ストリーム』』

荒狂う暴風が解き放たれ、衝撃波が研究室全体を襲う。

壁に刻まれる無数の破壊痕、吹き飛ばされるRと研究者。その中でグルド博士は余裕の表情を浮かべていた。

「無駄ですぞ！ 室内全域には魔力結界が……っ!？」

グルド博士は眼を見開く。「バースト・ストリーム」によって魔力結界が破壊されたことに。

だが、衝撃波は供給ラインまで届かない。研究者達はR達がレオとリアに飛び掛かるのを見て、勝利を確信する。

魔力が減り消耗した二人には、もうRを迎撃する余力は無い。

しかし、勝利の確信はすぐさま消え去った。

室内の中央に業火球が形成され、フィオナが魔法を唱える。

「業火よ降り注げ」

広域爆炎魔法——「フレイムバースト」が四方に向かって業火を放つ。

床、壁に着弾と同時に爆ぜる。すると砕かれた箇所に供給ラインの要である魔法陣が顕となった。

全部で八箇所の魔法陣をファウスト博士が視線を巡らせ、

「魔よ我が魔力によって砕けろ」

解除魔法——「スペルブレイク」が八箇所の魔法陣を同時に解除していく。

魔力の供給が止まったR達は剣をレオに突き刺す——寸前の所でその機能を停止させた。

次々と停止するRに研究者は悲鳴をあげ、グルド博士が困惑を浮かべる。



「我々の計画は完璧だったはず……何処で間違えた？ いや、そうだ……最初から計画は間違っていた。人形などでは無く、完璧なりア様の複製！ それこそが真のR計画……！」

狂ったように口早に述べるグルド博士に、起き上がったレオが歩く。

「おお？ キミも我々の計画に……ふっ……はっ？」

グルド博士は吐血した自身に理解が追い付かず、呆けた表情を浮かべた。

ゆつくりと視線を落とすと、グルド博士の胸を魔剣の刃が貫いている。

「ば、ばかな……我々の計画は人類の……た、め……」

眼を見開きながら鮮血が流れる中、グルド博士は事切れた。

レオはそのまま魔剣を引き抜き、

「まっ、待ってくれ！ 我々のR計画は人類に必要なものなのだぞ！」

「そうだ！ もはや不老化した勇者一行の次に必要な戦力は……っつ！」

御託を並べる研究者の声に耳を貸さず、レオはその場に居た研究者達の首を刎ねた。

そしてリアに振り向き、

「不服か？」

「……さつき、不老化した勇者一行って言ってたけど」

間違いであって欲しい。不安に歪んだ表情を浮かべるリアにレオは口を開く。

「コイツらの戯言だろうよ」

いずれは知る真実だが、今は知るべきでは無い。そう考えたレオはリアに嘘を吐く。

「……それならいいけど。でもレオが殺す必要はなかったんじゃない」

「お前は連中を斬れたのか」

「うん、あの人達の計画は後世に遺すべきじゃないわ」

「それはこちらと同じだ。俺は魔王として魔族の障害を排除したに過ぎん。お前が気にかける必要など無いのだぞ」

遅かれ速かれグルド博士をはじめとした研究者は、レオ、リア、ククルの誰かに殺されていた。魔族にとつてR計画は脅威であり、リア達にとつても悍ましい計画は阻止しなければならぬ。もっともリア達が動けたのはセレス所長から大義名分を与えられたことが大きい。

「そう、またレオには助けられちゃったかな」

「俺は助けたとは思ってはいないがな」

「じゃあ、私は助けられたって思うことにする」

軽口を叩きながらリアはグルド博士達の遺体に歩き出す。

今回の一件を全ては混沌結晶の影響と簡単に片付けていいのかと迷うリアに、ファウスト博士がゆっくりと告げる。

「元々彼らは平常から人体実験を繰り返す外道達の一人です。我々も含めていずれはこうなる、彼らはそれが速かったというだけのこと」

「それって……」

ファウスト博士の言葉の意味を問おうとした、その時だった。

魔法器具が爆発したのは。

「ふむ、脱出が先決だな」

ファウスト博士の言葉は気になるが、ここで問答を繰り返している場合では無い。

そう判断したりアは脱出を決意し、グルド博士の側に転がっていた混沌結晶を回収。その後全員で地下研究施設から脱出するのだった。

幸い火災を感知した魔法器具が、隔壁を降ろしたことによって被害は地下研究施設のみになり、今回の一件はセレス所長の手によって永遠の闇に葬られることになる。

既にセレス所長がR計画の資料を破棄し、隠蔽したことでグルド博士達は事故死として片付けられる。これがファウスト博士達が事前に用意したシナリオだったとは、リアとフィオナが気付くことは無い。

あの爆発もセレス所長の指示を受けた研究者が仕掛けた爆弾によるもだということも、彼女達を知る機会は来ない。

その日の晩。リアはベルトに腰掛け、静かな寝息を立てるフィオナの髪を撫でる。

まさか自身を量産する計画が進行していたとは思っても見なかった。それほどまで特別な存在では決していない、とリアは重いため息を吐く。

そもそも計画自体が混沌結晶を入手する前だったと、記録資料に記載していたことが判明。つまりグルド博士達は全て混沌結晶の影響と偽っていたということになる。

「本当にそうなのかな？ でもあのRに対する狂気性はアルバート元領主と通じるところがあったのは間違いないわね」

もしもあのままグルド博士達を生かせば、R計画を知ったギリガン王は迷わずに戦線導入を決行するだろう。

騎士の代わりになる消耗品として、同時に戦時中において戦力として有用と確立されてしまえば、他国に売り利益を得る可能性もある。

現に戦争国家は自国で開発した銃を様々な国に流し、利益を得ている。その得た利益でまた戦争を始める。

その意味でもレオの魔王としての判断は正しい。

レオと自分ではそもそも立場が違う。レオは民を守る立場にある。その違いはあまりにも大きすぎる。

「悔しいな……本当なら私が蹴りを付けるべきだったのに」

リアはまたレオに任せてしまったと、息を吐き眼を瞑った。  
やがて深い眠りに就く。

## 5—13

R計画阻止をした翌日。透き通った青空がハーヴェストを照らす。

そんな中、「魔女の治療薬邸」でアンナがフィオナと共に薬の調合をしていると呼び出し鈴が鳴る。

「まだ開店前だ……うそ」

来客に眼を向けたアンナは口元を覆い隠し、眼を見開く。次第に彼女の瞳から涙が流れ頬を伝う。

フィオナは母アンナの様子に戸惑いながら来客に視線を向けた。

フードを外した来客の頬には魔族の証である紋章、そして董色の髪が顕となる。

レオから聴いていた父親の人物像そっくりな魔族の男性にフィオナは戸惑いと困惑を向け、

「……お父さんなの？」

弱々しい声で尋ねた。そんなフィオナに彼——ジドラは頬を吊り上げ笑った。

「ああ、お前の父ちゃんだ。アンナも随分待たせちまったな」

目の前に長年待ち続けた夫がやっと帰って来た。アンナは両手を広げる彼に駆け出

す。

そしてジドラはアンナを愛おしそうに抱き締めたのだ。

そんな中、一人フィオナは戸惑う。長年の目的の一つだった母と子を捨てた男を空の果てまでぶつ飛ばす。そんな目的はジドラを目の前にしてどうでも良くなっていた。何よりも母が彼の腕の中で嬉しきで泣いてる姿を見ているとなおさら実行できない。

「やっぱ父ちゃんって言われても理解が追いつかねえよな」

「……そりゃあ、アンタはフィオナが産まれてすぐに飛び出したからね」

「でもボクが娘ってだって事は理解してるんだ」

フィオナは口を尖らせると、ジドラは豪快に笑った。

「そりゃあ目元はアンナそっくりだからな。愛した女の面影を継いだ子だ、子として認識できねえ訳がねえだろう」

彼の言葉にアンナは腕の中で恥ずかしそうに顔を赤く染めている。母の珍しい姿にフィオナは、本当に二人は愛し合っていると理解した。

まだまだ言いたいことは沢山有るが、

「……じゃあ、おかえりなさいお父さん」

先ずは父として彼を受け入れることから始めよう。そのためには自分から歩み寄らなければならぬ。そう決意したフィオナは父と母の下へ駆け出す。

偶然にも親子の再会を目撃したレオ達は階段で身を潜めていた。

「あの人……まさかとは思ったけどフィオナのお父さんだったんだ」

「あれー？ どつかで見た覚えがあると申したらロランの腹心じゃないか」

「おい、此処に居ては親子の再会に水を差すことになるだろ。俺達は大人しく部屋に戻るとしよう」

レオの言葉にリアとククルは頷き、部屋に引き返すと。

「レオ様、ククル様に勇者……火急の知らせが」

階段に身を潜めていた三人に気付いてたジドラが声をかける。

邪魔しては悪いと思いつつ、火急の知らせにレオ達は一階に降り立つ。

すると十分に甘えたアンナはジドラから離れ、小瓶にポーションを入れ始めていた。

「……邪魔したな。それで火急の知らせとは？」

「ええ、お嬢ちゃんのご郷に天使兵が進軍する模様……同時にこの街にも侵攻の動きアリ」

リアのご郷の村キュアリアに天使兵が進軍しようとしている。だがリアはその報告に焦らず冷静に返す。

「私の故郷に天使兵。それにこの街にも……それって前線の防衛線が突破されたってこ



と?。」

「いんや、転移魔法による直接侵攻さ」

「転移魔法……本当に敵軍が使うと厄介な魔法よね」

「転移したい場所の座標さえ知ってればどんな距離でも魔力一つで移動可能にする魔法。軍隊にとってこれほど厄介であり利点だらけの魔法はそう多くはない。」

「だが、それは魔族と天使が使用する場合に限り。人間が扱う転移魔法では、消費魔力の多さから一度で最大で四人までしか転移できないなど、人間にとっては少数精鋭の侵入以外に使い道が少ない。」

「ふむ、ではククルは部隊と共にハーヴェストの防衛に当たれ」

「レオ様のお供ができず残念でなりません、人間の街の一つや二つ護ってみせましよう」

レオの判断にリアは良いのか、と目線で問うと彼は笑う。

「構わんよ、我が同胞の家族が暮らしている。それだけで守る価値は在る……まあ、魔核研究所に守る価値があるとは思えんがな」

民思いのレオがジドラの家族が住むハーヴェストを見捨てる選択肢は既に無い。

「防衛困難となれば住民を避難させる必要もある。そのためには鬼人族をはじめとした魔族の力が必要になってくる。」

それに魔族が人間を護る姿を見せ付けければ、いずれ魔族を理解して受け入れる人間がまた現れはじめる。レオは二つの目的のために四魔將軍ククルをこの街に残すことを決めていた。

「ボクはリアと一緒にいきたいけど……ここに残ることにするよ」

「分かった。それじゃあ王都でまた再会しろ」

「天使の軍勢を退けたらすぐに王都に向かうね。だからリアも気を付けて」

再会の約束を交わした二人。リアはレオに向き直り笑みを浮かべる。

「それじゃあ故郷に帰りましょうか」

「確かお前の故郷は温泉が有名だったな……いや、入浴は天使を片付けてからの楽しみに取っておくでしょう」

次の目的地が決まった二人は、早速出発の準備に取り掛かる。

そしてアンナから回復ポーションを数個受け取り、

「ありがとう！ 大切に使用させて貰うわ！」

「幾ら回復力が凄いいはいえ油断は禁物だよ。それからレオ、アンタも魔族だからってケガを舐めるんじゃないよ」

「ああ、肝に命じておこう」

二人は出発前に老婆の占い師に別れを告げに行つたのだが、彼女の店は既に無く。周囲の人々に何処へ行つたのかと尋ねると、『最初から老婆の占い師なんて居なかつた』と返された。

確かに占い師の老婆は二人の目の前に存在し、アルビオンに付いて予言を与えた。だが、誰も老婆を知らないという。この事に二人は白昼夢でも見ていた可能な衝撃を受け、なんとも言えない表情を浮かべた。

その後、レオとリアはファイオナ達に見送られる中、ハーヴェストを出発した。あの老婆について後髪が惹かれながらも。

この街から馬車で東に一週間。樹海国家ユグドラシルとの国境が隣接するフェルドラン山脈の麓に、リアの故郷キュアリアが在る。

リアは手綱を引き、馬車を走らせ故郷を目指す――

## 六章 氷華戦乱

## 6—1

梅雨明けが近づく中。

メンデル国内のとある街道に轟音が響く。

焼けた大地に散らばる無数の武器。魔族、天使、騎士の遺体が転がる戦場の中で、アルティミアは雪羅族を率いて騎士団を王都に逃すべく敵軍の注意を引き付ける。

「ほら、私の首が欲しいなら早くかかって来なさい」

アルティミアの安い挑発に槍を携えた天使兵が一本踏み込む。その瞬間、踏み込んだ天使兵の首が宙を舞うと同時に金属音が鳴る。

蒼天氷雪を納刀した体勢で構えるアルティミアの姿に、敵軍は戦慄を浮かべた。

彼女の間に一歩踏み込む。それだけで眼にも止まらない速度から駆り出される斬撃が首を刎ねる。

徐々に戦意を削がれる敵軍にアルティミアは後方で指揮を執るロランに目を向け、「随分と若い連中を編成して来たわね？ 舐めてるの？」

僅かに睨むと、ロランは肩を竦める。

「まさか【雪羅の姫】を舐める真似など誰がするものか。貴様の實力は身を持ってよく知っているが、同時にどのタイミングで攻めれば良いかも理解してる」

右頬に浮かぶ紋章が印象的な狐顔の優男。戦場では不釣り合いな瘦躯の体。彼と相対した者は、見掛けから討ち取れそうだと判断し命を散らしていく。

四魔將軍のロランという男は、自身の容姿も含めた全てを駒として扱う。昔からそういう奴だ、とアルティミアは息を吐く。

現に自分はロランを注視して攻め込めない。ロランが姿を見せている事が策略の一つだからだ。

「やはり此処は我々が……」

「さっきも言ったでしょ？ 騎士団は王都へ逃げろって」

ロランの脇に抱えられたマキアが居る以上、既に騎士団に突進力は無い。

カムランは唇を噛み締めながら、後方に待機している騎士団の面々に撤退の合図を出す。

女騎士達はマキアを置いていく判断に渋々従うざる負えない。彼女達も理解しているからだ、下手に動けばマキアの首が飛ぶことを。

(ロランの奇襲を赦した私の失態ね)

丁度行軍の速度を緩め、休息に入ろうとした矢先にロランが率いた部隊に奇襲を受け

た。奇襲事態は想定無いだが、それがいけなかった。ロランはマキアの背後に転移すると同時に彼女を昏倒させ確保してしまう。

「……………どうかご無事で！」

深々と一礼して駆け出すカムランの背中を雪羅族達は見送り、天使が放った【天槍】が雪羅族によつて斬り落とされる。

「我々を相手にしてそれが通るとでも？」

「魔法を斬るなんて……………ロラン様、何か策を！」

天使の一人がロランに吠えようと、彼らは煩わしそうに息を吐く。

「既に人質の確保は済んだ。たかが一軍のために兵を無駄にするのは下策」

「しかし！ 四魔将軍の首を前にして撤退など！」

意を唱える天使にロランは顎に手を添え、しばし考え込む。やがて考えが纏まったのか、天使兵に告げる。

「天使兵は魔王城まで後退、【昇華】に入るルシファー様の防備を固めておけ」

「ぐつ……………分かりましたわ」

渋々と天使兵が転移魔法を発動させ、撤退していく。

残ったロランの手勢とアルティミアの手勢が睨み合う。

「……マキアを返せ、って言えば返してくれるかしら」

「無理だな、彼女は計画に必要なだ」

「計画ね。一步踏み込めばマキアの首が飛び、この辺り一帯は溶岩の海に替わるか……」

両軍の境界線に挟み込まれた魔法陣がアルティミア達の進軍を拒んでいた。

向こう側が近づく分には発動しないが、ロランが敵と認識したものが踏めば、殲滅魔法——【崩炎】が発動する。

近場に小さな村が在る。魔法の範囲は村から王都の郊外まで届く規模だ。敵でもある人間を護る義理は無いが、レオが多大な犠牲と無意味な死を嫌う以上、アルティミア達が踏み込む訳にはいかない。

彼は自らの大将首を戦場に晒すことで、罠に誘導している。現にそれに引つ掛かり全滅した敵は数知れず。

「全く……【崩炎】を阻止する魔法も間に合わない。発動させれば人間とこの辺に生息する魔物だけが死に絶える。本当に容赦ないわね」

「容赦が無い？ 何を言う、魔界ではごく当たり前だろ。もつとも我々の扱う魔法が人間界の土地では耐えられないが……」

だから魔王レオは人間界で魔法を全力で放つことを禁じた。そうでもしなければメーデル国は愚かバルディアス大陸は消滅していただろう。

魔王レオが人間界に生きる生命を尊重する以上、忠臣である自分達が従わない理由など無い。それが例え戦局を左右されようとも。

「裏切つてなお律儀に従う辺り、あんたも可愛げがあるわね」

「……我々魔族には人間界の土地が必要だからな」

ロランの言葉の真意をアルティミアは理解していた。彼が裏切つた理由もその目的の全てを。

マキアも殺されることは無い。そう判断するだけの確信がアルティミアにはある。

「難儀な男ね。……良いわ、一旦マキアを預けてあげる。けど今度は勇者リアを連れて取り戻しに行くわよ、それまでその子を殺さないことね」

「ならば勇者の故郷に向かえ、そこに貴様が愛する——」

ロランが最後まで言い終える前に、

「全軍キュアリアに向かうわよ！」

アルティミアの言葉に雪羅族達は後退していく。嬉々として駆け出す彼女の姿にロランのため息が街道に響き渡った。

恋する乙女は部隊を率いて街道を駆ける。

この出来事は丁度レオ達がハーヴェストを出発した頃のこと——





## 6—2

樹海国家ユグドラシルとメンデル国を隔てるフィルドラン山脈の麓。

そこには温泉の源泉が沸き、勇者リアの生まれ故郷として名高いキュアリアが在る。

馬車を走らせるリアは温泉の熱気に故郷に近いことに心を躍らせた。

幸いまだ天使兵が進軍した形跡は見られない。それでも転移魔法が存在する以上は油断を許さない状況が続く。

「そろそろ村に着くわよ」

「まさかお前の故郷を訪れる日が来るとは……人生というのは分からんものだな」

「そうかもね、私も魔王レオを故郷に連れ帰る日が来るとは思ってもみなかった。みんな元気にしてるかな？ 近所のポチも元気かな」

随分とありきたりな名前のペットだ、名前から察するに犬。そんな推測を浮かべたレオは仮面の下で小さな笑みを浮かべる。

道中の天候と気候も穏やかなもので、天使兵が進軍した痕跡は見られなかった。しかし、転移魔法が在る以上は油断を許さない状況には変わりない。

ようやく村の入り口に到着すると、馬車から降りたリアの姿に、

「ああー!! リアちゃんよ! みんなリアちゃんが帰って来たわよおおお!」

卵を入れた籠を腕に抱いた村娘が声を張り上げる。

すると続々と村人達が入り口に集まり、リアはあつという間に囲まれた。

口々に歓迎の言葉を並べる村人達にリアは笑顔を浮かべる。

そんな中、レオは仮面越しから一通り周囲を見渡した。話に聞いていた通りに村人は全員女だ。

「みんな、ただいま!」

リアの言葉に村人全員が笑みを浮かべ、口々におかえりと返す。すると杖を付いた老婆が一步前に出ると、

「おかえり、ところでリアよ。そちらの御仁は……仮面で素顔を隠しておるが魔族じゃな?」

レオの正体を見破り、村人達は一斉にレオに注視する。敵意も疑念も無い様子にレオは戸惑う。

自分は言ってしまうはこの者達の家族を奪った側だ。なぜ恨みの一つをぶつけないのか。

「長老……あの、彼は……」

珍しく言い淀むリアに長老。パスカルは微笑む。

「騎士に志願した息子や父親が戦死するのは戦時中の常。あやつらも覚悟を持って戦場に向かった、だからワシらは魔族を恨みはせぬ」

戦場の常と割り切るパスカルの言葉に村人達は同意を示すように頷いた。

どうやら勇者リアが育った村は、村人まで寛大な心を持っているようだ。

だからこそレオは仮面を外し、

「戦争の主犯である魔王を前にしてもか？」

パスカルに問うと彼女は笑った。

「魔王が勇者リアと行動を共にしているとは思議なこともあるのう。しかし、ここは温泉村……温泉の前には人種や立場など関係ないのさ」

「そうか、寛大な心遣い感謝する」

「よいよい、先日この村は天使に襲われたがのう、雪羅族の部隊に救われたからお互い様じゃって」

「雪羅族が……ということとはアルティミアは来ているのか？」

パスカルに尋ねたその時だった。

「レオ様——!!」

村人達の後方からアルティミアが勢いよくこちらに向かって来る姿が見えたのは。

そしてアルティミアは村人達の頭上を飛び越えて、そのままの勢いでレオの飛び付く。

レオは彼女を受け止め、深いため息を吐いた。腕に押し付ける柔かな感触、彼女の甘い匂い。毎度のこととは言えついついたため息が漏れる。

「もう少し落ち着きを持ってとあれほど……」

「やつと会えましたね！」

「人の話を最後まで聞け」

レオに抱き付いたまま頬を緩めるアルティミアの姿に、村人達はそういう関係と認識した。そんな中リアだけは胸を押さえながら首を傾げた。

どういう訳か面白くない。胸がチクリと痛む。ただレオとアルティミアが再会しただけのこと。なのにどうして二人の関係が気になるのか。

リアは疑問を浮かべながら、アルティミアに一つ問う。

「どうして此処にアルティミアが？」

アルティミアはようやくレオから離れ、リアに体を向ける。

「王都を目指す道中でロランの部隊に奇襲を受けてね。その時にレオ様の居場所をロランが零したのよ」

「それって、ルシファー側にレオの居場所がバレてるってことじゃ……」  
「ああ、大丈夫よ。アイツはそういう男だから」

はぐらかすアルティミアに、どういう意味だと視線で問うと彼女は笑みを浮かべるばかり。

（むう、美しい顔立ち……笑ってるだけで絵になるなあ）

リアは彼女に対して思った事を内心で思い浮かべ、話を続けた。

「それでアルティミアは誰かと一緒に居なかったの？」

「……マキアと一緒に居たけど、彼女はロランに捕まっちゃったわ」

マキアがロランに捕まったと、落ち着き払った様子で告げる彼女にリアは頭を抱える。

此処で彼女に怒りをぶつけるのは違う。その時自分は居らず、魔力も万全ではない。

それにと、リアは思う。アルティミアほどの実力者が裏切ったロラン相手に何もせず  
に撤退するとは考え辛い。つまり彼女は撤退せざる終えない状況に陥っていた。

「随分と落ち着いてるのね。てつきり怒りに身を任せて聖剣を抜くと思ったけど」

挑発的な笑みを浮かべるアルティミアにリアは落ち着き払った様子で返す。

「確信が有るのよ。あなたが捕まったマキアを見捨てて撤退するなんて有り得ない  
て」

「まあ、結果マキアを見捨てた事には変わりないからね。私からは何も言えないわ」

二人の話を黙って来ていてレオは、ロランの行動に苦笑を浮かべる。

十年前にロランは王都に侵入し、スラム街を隠れ蓑に活動していた。その時出会い一時的に面倒を見ていた少女がマキアだった。

（彼女はお前にとって大切なのか？ ロランよ）

だとすれば難儀な男だとレオは思う。

一先ずロランがマキアを殺す可能性は低い。そう結論付けると、

「……立話もほどほどに旅の疲れを癒すといいじゃろう」

パスカルに促されるままレオ達は温泉旅館「福音の館」に案内される事に。そこでレオとリアが予想もしなかったことが――

## 6—3

レオ達は温泉旅館〔福音の館〕に案内された。

木造の建築式に赤い絨毯が引かれ、従業員は魔界から伝来した着物に身を包め愛想笑いを浮かべる。

受付の側に有る大窓から山脈がよく見え、風景を楽しむためにテーブルイスが用意され、側には暖炉が炎を揺らめかせ訪れる者を癒す。

そしてパスカルに通された客室で寛ぐことに——レオの傍らにアルティミアも伴つて。

「……アルティミアは此処に居ていいの？ 部隊の統率とかさ」

有るんじゃないのかと尋ねるリアにアルティミアは笑みを浮かべる。

「ハーゲンに任せて有るから大丈夫よ。今は天使兵を警戒して山脈を巡回中でしょうけど」

「ハーゲンならば何も心配は要らんな。しかし、リアは帰らなくともいいの？ お前の家はこの村に在るのだろう？」

「大丈夫。帰っても誰も居ないし、それに天使兵を片付けたらまた村を出発するから」



誰も居ない伽藍堂とした自宅に帰っても寂しいだけ。リアの顔はそう物語っており、そんな彼女にレオとアルティミアは納得した様子を浮かべた。

「さて、天使兵を片付けこのまま樹海国家ユグドラシルに入国したいところだが……」  
「ダメだよ。ユグドラシルに入国するには国から一定の信頼を得た行商人だけに発行される通行許可書が必要なんだから」

「やはりか。では一度王都に向かう必要があるな」

王都に向かいギリガン王と謁見し通行許可書を得る。そのためにはキュアリアを狙う天使兵を蹴散らす。

国民を救った者をギリガン王は無碍にはできないだろう。キュアリア救出を口実に通行許可書の交渉材料とする。そう考えたレオはほくそ笑む。

彼の怪しい笑みにリアは身を引き、アルティミアはレオの悪巧みに微笑んだ。

「レオ様？ ギリガンを脅すなら私が、この蒼天氷雪で承諾させてみせましょう」  
柄に指先を滑らせる彼女に、レオは笑みを返す。

「それはダメだ。アイツは頑固だからな、刃を向けられれば意固地になるだろう」

「うーん、流石に情勢を考えると脅しは得策じゃないわ。それでどうしてユグドラシル  
に？」

疑問を浮かべ小首を傾げるリアにレオは口を開く。

「あの国には天界の門が在る。ユグドラシルは天界に向かうための通過点に過ぎん」

天界の情勢を調べるためにも必要不可欠。もしも天界全土、ルシファアの侵攻が女神ウテナの意志によるものだとすれば情勢は変わる。そうでなければ、ルシファアの独断と暴走によるもの。

しかし女神ウテナが一向に動かない状況を見るに、彼女に何が有ったのかもしれない。それを確かめるためにも天界に向かう必要がある。

「レオ様が天界に？　今のレオ様では危険……あつ」

アルティミアはレオを危険と身を案じると、一つ大切なことを思い出す。ロランに奇襲を受ける直前にマキナから手渡された物のことを。

アルティミアは胸元に仕舞い込んだ混沌結晶を取り出し、レオとリアに差し出す。

「忘れるところだったわ。さきつ、サクツと砕いて魔力を取り戻してくださいな」

レオはアルティミアに促されるまま、混沌結晶を素手で砕く。もう五回目となる光景に二人は小慣れた様子で、自らの身体に還る魔力を受け容れた。

これで半分の魔力を取り返せた。もう少しばかり砕く必要が有ると踏んでいた二人は肩をすくめる。

五つの混沌結晶で半分、しかしアルティミアが所持していた混沌結晶の魔力は今までの物よりも魔力量が多かった。

これで魔核に施された鎖も一つは外れるだろう。

「ようやく半分か……地道に混沌結晶を探し砕く事には変わりないか」

「でもどうしてマキナが混沌結晶を？」

「あの子は魔王城から脱出するどさくさに紛れて盗んでいたのよ。流石はあなたの仲間ね、抜け目が無いわ」

「流石はマキナね」

盗賊稼業から足を洗っていたが必要な物は盗み出す。特にそれが敵軍の計画に使用される物ならなおさら彼女の鑑定眼が働く。

仲間の働きにリアが感心しながら頷いているとレオは、アルティミアを引き剥がして立ち上がる。

「どちらへ？」

「うむ、せっかくの温泉だ。入らなければ損だろ」

表情を綻ばせ語るレオの様子に、リアとアルティミアは顔を見合わせて笑った。

魔王レオが温泉一つに喜ぶ姿が見られたのだから、自然と笑みが浮かぶ。

と、くすりと笑う二人にレオは疑問を浮かべると、扉が開き。

「おや、今から温泉へ？　せっかくですからリアとアルティミアさんもお入りになられては」

お茶菓子を持つてきた従業員の言葉に、せっかくだからと二人は頷く。すると従業員が笑みを浮かべ、

「ゆつくりと混浴をお愉しみくださいね」

お茶菓子をテーブルに置くや否や、そんな言葉を残して部屋から退出していく。

彼女が残した言葉。人間界の温泉には元々男女の境はなかった。しかし時代が進むに連れて男女の境が用意されるように——そこまで混浴に関してぎつくりと知識を浮かべたレオは驚愕に顔を歪ませた。

「な、に？ 混浴だと？」

「昔から混浴温泉を売りにしてるから……あれ？ レオと混浴——」

「さあレオ様！ 今すぐ共に温泉に参りましょう！」

混乱するレオとリアを他所に平常運転のアルティミア。

レオとリアは彼女の様子に、混浴だから別に恥ずかしがることでも無いのか。そんな答えに至る。

「うむ、では行くとするか」

「あれえ？ 魔王と混浴って、何がどうなつて??」

「嫌なら来なくて良いのよ。というか私とレオ様の二人きりの時間にして欲しいわ」

「広い温泉に一人で入るとかどんな罰よ。寂しいから私も行くわ」

こうして三人は温泉へと足を運ぶ。

王城の浴場よりも広く、湯船から湧き上がる温泉。そして両隣にはアルティミアとリアの二人。

他の宿泊客は愚か村人も居ない。広々とした空間に三人だけの貸し切りとは、中々ない贅沢だとレオは小さく笑う。

レオはタオルを腰に巻きながら、体の汚れを丹念に落としてから湯船に浸かった。肩まで浸かり数分と経たずに、芯から温まり旅の疲れが癒される。しかしレオは重いため息を吐く。

右腕に寄せれる柔かな感触。それはアルティミアの柔肌と小さく寄せられた谷間の感触だ。

彼女に視線を向ければ、長く伸ばされた薄い青髪を団子に纏め、薄く白い艶やかな肌を汗が滴れる様子はどんな男も虜にしてしまっただろう。

そして左隣に視線を移せば熱気によるものか、頬を赤く染めたりアが映り込む。

健康的な艶やかな肌と熱気のせいのか色っぽく見えるのは温泉の影響。そして彼女を視界に移すと心臓が高鳴るのはきつと、温泉の効能だとレオは自身に言い聞かせた。

「な、なに？ あんまりこっち見ないでよ」

「すまん」

「う、うん。……ところでアルティミアはずっとレオに抱き着いてるけど——」

「いつものことよ？ 私とレオ様はお風呂を共にする仲だからね」

レオを挟みリアにイタズラっぽく笑みを浮かべる。

「そ、そういう仲って……」

「アルティミアよ。誤解を招く様な言葉は慎め……だいたいお前が毎度浴場に侵入するからだろ」

魔王城に常設された魔王専用の浴場。魔王城建設当初は不要と断ったが、配下達の強い意向によって設けられることとなった。

「あら、王が入浴に女を侍らせるのは当然のこと。先代魔王だってメイド達を侍らせていたじゃない」

「アイツは女だろ」

「なんだかレオは大変そうね」

二人は特別な関係ではない。そう認識したりアはわずかに息を吐く。それは安心した様なため息だった。

「……慣れとは恐ろしいものでな、彼女が寝室に侵入しようが気になりませんよ」

「そ、そんなことまで……というか寝室に侵入って何を目的に？」

「野暮なことを聞くのね——愛した者の側で眠りたいと思うのは当然のことですよ？」

頬を赤く染めながら答えるアルティミア。彼女のレオに対する想いは深くそして本物だ。

「だつてよレオ？ 応えてあげないとね」

「……俺は愛に付いて何も理解してない。そんな状態で応えられんよ。だがいずれは応えるさ、アルティミアよそれまで待つていろ」

アルティミアは柔かな笑みを浮かべ答えた。

「ええ、いつまでもお待ちします」

同時にリアがレオに特別な感情を懐きつつある事を、彼女は女の勘から判断した。リアは自身が秘める感情に気が付いている様子は無いが、レオに体を密着させる度にリアは苦しげに顔を歪めている。

本人が気づかないとは滑稽だとアルティミアは思う。だが、いずれ彼女が恋心に気付いたなら。

果たしてレオはリアを受け入れるのか。それならそれで構わないとさえアルティミアは笑う。

魔王が嫁を二、三人摂ることは何もおかしくないからだ。特に魔界再生計画と移住計画を確実のものにするためには、魔王に人間の嫁が必要となる。魔界と人間界を繋ぐ混血児が。

こうして三人は心ゆくまで堪能し、疲れを取るのだった。



## 6—4

充分な休息を摂ったレオ達はキュアリア村の中を歩く。村娘は陽気に語り合い、村を歩くりアに気付くと微笑みながら手を振る。そんな彼女達の様子はまさに陽気そのものの。

この村の中央広場には勇者アリオスの石像が在る。リアの先祖にして聖剣ゼファールで災害級の魔竜を討伐した伝説の人物。

(アリオス伝記は魔族の間でも人気ね)

普通の冒険者が聖剣ゼファールを手にして魔竜に挑む冒険譚。一人の人間が冒険者から勇者となり世界を救う苦難の道が描かれた物語だ。実は魔界の子供達に好まれている書物の一つでもある。

後は人間界の食物が最も好まれて入荷されている。特に穀物や野菜類は魔界での生産性が低いため、輸入頼りだ。

レオの方策の一環で魔界に農業プラントが建造され、栽培は可能となったが、やはり人工の光では人間界と同じ品質の野菜は生産できない。

アルティミアが勇者アリオスから魔界について思案しているとレオは空に向け魔法

陣を構築した。それにアルティミアは做う。

村の中心から広がる魔力結界が村全土を包む。これで空からの侵入に対する一定の防衛が見込める。

天使は翼で空を飛び上空から魔法を放つ事を好む。

「ふむ。雑兵にはこれで充分か」

「私の故郷の空が要塞化してる件について」

「我々は守る戦いが苦手なのよ。だから過剰に迎撃魔法を構築しちやうわけ」

守る戦よりも攻める戦の方が得意だ。電光石火の如く攻め、力で敵兵を蹂躪する戦を魔族は好む。

「だからなのね、四方の砦に攻め込んだ天馬騎士団が一夜で壊滅したのは」

メンデル国の同盟国の一つフィルエナが持つ最高戦力の天馬騎士団。天馬に騎乗した突撃部隊による突進力はバルディアス大陸一を誇っていた。

「ペガサスって翼が挽がれると普通の軍馬と変わらない。いえ、空を飛ぶことに特化したせいで脚力が普通の馬よりも劣るのよ

天馬騎士団の迎撃を担当したのがアルティミアだ。突進力を奪うために空に迎撃魔法陣を展開させ、陸と空から挟撃し、時には翼を挽ぎ地中に引きずり落とす。

後は雪羅族の独壇場だ。動きが鈍った天馬騎士団を壊滅させることなど片手間で終

わる。

「空が飛べていいなあって思ってたけど、脚が弱くなるんじゃないやあねえ」

剣士にとって脚力は重要だ。そう息吐くりアにアルティミアは同意を示す。

それでも何の策も無しに真正面から天馬騎士団と戦闘しては、こちらの損害が多少なりとも出ていただろう。

「……ふむ。村を守るのはいいが、ルシファーは何のためにこの村を攻略するのか」

天使兵は王都の陥落を第一に進軍していた。アルティミアは王都を目指すついでに敵兵力を多少なりとも削つてはいたが、キュアリアを襲う理由は不明だ。

先日撃退した天使兵も戦略的要素が皆無の村を襲う理由について知らない様子だった。

「そういえばロランはルシファーが【昇華】に入ると言っていたけれど……」

魔王城からキュアリアでは遠く離れ過ぎている。それとも何か関係が有るのか。

「ふむ？ 聞き覚えの無い言葉だな……だがルシファーがそうするということは何か意味があるはず——」

ロランの口振りでは【昇華】中は無防備になるということが読み取れる。しかし天使兵が防備を固める以上は容易に攻め込めないのも事実だ。

その割にはキュアリアに戦力を割っていることにアルティミアは、釈然としない疑問

を浮かべた。

「うーん。ナナなら何か知ってるかも、けどいまは何処に居るのか分からないわね」

「あの神官の子？ あの子ならザガンと行動してるはずよ。邪竜族は竜に成れるから移動範囲は私達の比じゃないわ」

邪竜族だけに赦された魔法——【ドラゴン・ソウル】が在る。竜の魂を解き放ち邪竜族本来の姿を取り戻す魔法。魔族の中でも強大な魔力を誇る種族が邪竜族だ。

それ故に邪竜族は先代魔王フェルミナに危険視され、魔界の中でも極悪な環境に追いやられた歴史が在る。彼らが争いを好まない穏やかな種族ということもあつたが。

そういえばとアルティミアは思い出す。レオが先代魔王フェルミナを降し、彼女から魔王の座を奪ったあとに邪竜族を配下に加えたのは丁度その頃だったと。

（あの時は名も知れない魔人族に、あの女が負けたことに衝撃を受けたわね。今では懐かしい思い出で私の初恋の始まり）

「どうかしたかアルティミアよ」

はじめてレオと対峙した時の事を思い出していたアルティミアは彼の声に現実に戻る。

「何でもありませんわ」

そうアルティミアは微笑んで返した。

すると村にハーゲン達に戻って来るのが見え、三人は彼らと合流するべく村の入り口へと歩く。

ハーゲンをはじめとした雪羅族達はレオに臣下の礼を取り、

「レオ様、ご無事で何より」

「うむ。お前達も無事で何よりだ」

「有り難きお言葉！」

雪羅族の老人ハーゲンは尤もレオに傾倒している。齢五千を超える彼にとつてレオという新たな闇は刺激だったのだろう。

アルティミアはハーゲンにそんな事を思いつつ、鈴を転がしたような声で尋ねた。

「それで山脈の方は如何だったのかしら？」

「山頂からユグドラシル方面まで巡回しましたが、天使兵の痕跡有り」

そう言つてハーゲンは天使の羽を懐から取り出した。

彼らは定期的に山脈からこの村を偵察している。更にハーゲンは続けた。

「特に山脈の山頂に仕掛けられた魔法陣ですな。起動すれば山を崩す程の魔法が発動し

ましよう——」

「そう、その魔法陣は解除したんでしようね？」

「抜かり無く。連動式でしたがね、我々雪羅にとってあのような魔法陣は玩具に等しい。ついでに欺くために真似た魔法陣を遺しておきましたぞ」

抜かりがない。命じられずとも必要な事、やって欲しい手を打つ優秀なハーゲンにレオとアルティミアは感嘆の息を吐く。

そしてレオは口角を吊り上げ笑った。

「パーフェクトだハーゲン！ 流石は師と並ぶ猛者よ」

絶賛の言葉を送るレオにハーゲンは皺が寄った顔を綻ばせる。

「この老兵、役に立てる事と言えば知識を活かす他にありません」

「レオ様もお喜びになった事だし、あなた達もゆっくり温泉で身体を休めると良いわ」

アルティミアの言葉に雪羅達は、喜びを顕に温泉宿へと駆け出して行く。

その様子をリアは見送りながら、

「レオに師匠が居たの？」

「ああ、理不尽の塊のような御仁だが——今も何処かで放浪の旅を続けているだろうよ」

レオが理不尽の塊と称する人物にリアは、どんな魔族なのか想像が付かない。

「どんな人よ」

恐る恐る聞くと。

「理不尽が服を着て呼吸してるような人ね」

「ごめん、想像できないわ」

「まあそうでしょうね。……敢えて言うならあの人を前にしたら自分がどれだけちっぽけな存在か、嫌でも知ることになるわ」

身を持つて知っているレオはアルティミアの言葉にしみじみと頷き、やがて修行時代を思い出したのか深いため息を吐く。

「師の話はここまでにしておこう。噂をすれば何とやらだ」

「そ、そうね！ きつと次元を突き破って来ちゃうわね！」

「だからどんな人なのよ!？」

リアの叫びは空に響くが、レオとアルティミアは頑なにかの人物に対して口を閉ざした。

それだけ触れてはならない人物という事をリアは理解し、聞く事を辞めた。

## 6—5

レオ達が村全体に魔法陣を仕掛け終えた頃。

村人達は武器を手入れに勤しんでいた。

彼女達のその姿はまるで戦に向かう戦士のような面構えだ。この村にはただ守られるだけの弱い女性はいない。

そう理解したレオとアルティミアは小さく笑った。

「ああ、辺境地とはいえ。こども強い者達に出会えるとはな」

「そうね、我々もうかうかしてると本当に負けてしまいそうですわ」

人間の本領は守るべきもののために戦う時だ。彼女達は故郷を天使から守りたい。その一心で武器を手を取った。

こうなった人間は有した魔力以上の働きをする。それを身をもって体感した二人は闘争心を沸き立たせていた。

そんな二人を尻目にリアは、彼女達について呟く。

「みんなは、まだ私のお父さんとお母さんが元気な頃に剣技を習ってるから下手すると私よりも剣技は上かもね」



「あら、それは愉しみね」

剣の世界に生きる二人にとって実力者は良い刺激となる。特にリアよりも優れた剣の使い手が村に多いとなれば、アルティミアの闘争心が刺激されるのは当然。

魔王である自身よりもアルティミアの方が剣の腕は格上だ。自身が彼女より優っている点といえば魔力量だけ。

「うーん、剣の腕はアルティミアの方が遥かに上かも。だって普通は空間を斬り裂けないわよ？」 というかどうやって素の太刀筋だけで……」

「ふふん！ それは魔剣にも劣らない自慢の愛刀のおかげよ。……とは言ってもね、私も昔はレオ様に敗北してるのよね」

「所有者の魔力に依存する魔剣と違い、お前の蒼天水雪は使用者の腕に左右されるが——お前が愛刀を自慢したい気持ちにはよく理解できる」

彼女の蒼天水雪は魔界でも二振りと無い業物。レオは蒼天水雪以上の業物を見たことが無かった。

それは人間界に訪れてもだ。数々の宝剣や聖剣の類を目にして戦ってきたが、蒼天水雪より一步劣ると言った印象だ。それは自身の魔剣フェルグランドも彼女の愛刀の前には価値が下がるほどに彼女の愛刀は美しい。

「レオの気持ち分かるかも。だって戦闘の最中でもつい見惚れちゃうもん……アルティ

ミアがすごい美人つてのもあるけど、何とか蒼天氷雪は彼女のために有るって感じがするのよね」

実際に彼女が刀を振るう姿は、銀雪の中を舞う如く美しく見張れてしまう。

事実レオは、アルティミアとはじめて相對した際に彼女に見張れていた。命の奪い合い、極限の戦闘の最中ですら彼女の太刀筋には心が引き込まれる。

三百年経とうとも色褪せることが無い記憶だ。

「ふ、二人に褒められるとなんだか照れるわね……!」

意外にも彼女は褒められることに耐性が無い。彼女のそう言った一面も愛らしいのだが――

(余計な事は言わぬ方が吉か)

あまり褒めるとアルティミアは喜ぶ。それだけならまだ良いが彼女の行動は積極性を増すだろう。美女に言い寄られるのは悪い気はしないが、時と場所は弁えてもらわなければ困るのも事実。

「仕掛けも施した、そろそろハーゲン達と策を練るか」

「一応この村の地形は頭に叩き込んだと思うけど、見取り図を用意しておくわ」

「ああ、頼む。可能なら山脈の地図も有れば用意してくれ」

「分かったわ」

レオとリアは温泉宿「福音の館」を歩き出すと、

「あつ！レオ様お待ちください！」

一人で照れていたアルティミアが後を追いはじめた。

雪羅族とキュアリアの村人。天使兵の規模は不明だが、山脈の崩壊を企てる連中だ。まだ策略を忍ばせている事が予想できる。

（敵の指揮官は大天使クラスか？）

メルディア島に現れた大天使サタナキアは、リアに対してよからぬ事を思案していた。あの様子を考えるに指揮官はサタナキアの可能性が高い。

そう判断したレオは魔剣の柄に指を滑らせる。全ては居心地の良いキュアリアを守るために――

## 6—6

既に陽は沈み月明かりが差し込んでいる。

レオ達は「福音の館」の大客間に集まり、魔照明に照らされる室内の中、テーブルを囲い地図を広げていた。

ここに居るのは雪羅族の部隊とキュアリアの村人達。まさか魔王と勇者が協議する日が来るとは、ここに集まった者達は考えもしなかつただろう。

「フィルドラン山脈には幾つか狭い谷間が在るな」

「魔物が多く出る谷間、行商ルートに登山客用から湖に繋がる谷間ね」

レオは地図の谷間に羽ペンを走らせ、ハーゲンに眼を向けた。

「魔物の出没場所は崩すには適していたか？」

天使兵を誘い込み、崩落で一気に戦力を削る。レオが策を取ること自体が意外だが、村人達の被害を考えれば自然のこと。そう判断したハーゲンは静かに首を横に振る。

「その先は崖となっており、誘導したとしても……」

「崩落に巻き込まれるか……いや、誘導は俺がやろう。魔王の首となれば天使も無視で  
きゃあー」

「流石はレオ様。自らの首を危険に晒す真似を平気でお選びになろうとは。さすが足が早く、上手い具合に敵の意表を突けるのは、この場ではレオ様の他におりませんな」  
アルティミアをはじめとした雪羅族はレオなら心配ない。彼に絶対の信頼を寄せている者達はレオを信じて頷いた。

しかしレオの考えは違う。何事も「絶対など無い」。例え天使諸共生き埋めになろうとも、自分なら生き長らえ脱出することが可能だ。

自身が生きられるという事はそれは天使兵も同じ。ただ生き埋めにするだけでは足りない事は明白。

「ハーゲンよ、崩壊と同時に広範囲殲滅魔法を撃て」

「御意」

レオの淡々とした指示に流石にリアは黙ってはいられなかった。

「そんな事したらレオまで巻き込まれるじゃない！」

「なに、構わんよ。魔力が半分戻ったのだ、単独転移など造作も無い」

「誘導だつて一人でやるつもり？ あなたは地理も把握してないでしょ？」

「どの道山脈の掃除はしておかねばならん。そのついでに細かい地形を把握するなど造作もない」

そこまで言うレオにリアは黙るしかなかった。二人の様子を静かに見守る村人達は

息を吐く。

そんな中、一人パトラが笑みを浮かべながら口を開いた。

「リアはレオが心配なのね」

「え？ ……べ、別に心配なんかしてないわよ。もう！ パトラ姉も変なこと言わないでよ」

「ごめんなさいね。でもこの周囲に生息してる魔物は、比較的弱いけどほとんどが竜種と両翼種よ？ 早朝に村を発つてその谷間の魔物を掃討するのは大変よ」

「ああ、だからお前達の力も借りたい。この村がそんな危険な種が蔓延る中、今日まで無事だったという事は自力で討伐できるのだろう？」

レオの指摘にパトラは笑みを崩さず肯定した。

比較的竜種の中で弱い分類に入るデュアル・ドラゴン。しかし弱いと言っても小隊が入念に準備を整えてよやっと討伐できるほど。

「デュアル・ドラゴン程度なら村のみんなは既に討伐してきたわ。当然だけどリアもね」  
「だってデュアル・ドラゴンって双頭竜って呼ばれてるけど思考は別々に有してるから、ちよつと仕掛けると喧嘩し出すから」

「……一頭に苦戦を強いられる騎士団が聞けば卒倒ものだな」

この村には一般人とかけ離れた猛者しかない。そう再認識したレオ達は乾いた笑み

を浮かべていた。

どうりでリア一人に損害を被るわけだ、と。こんな猛者ばかりの村で育った彼女もまた猛者だったということ。

「デュアル・ドラゴンの尾肉って美味しいって聞いたけど」

「ちよつと辛味があるけど、鍋で煮込むと良い味が出て美味しいわよ」

「そう。それだけでデュアル・ドラゴンを狩る価値は高いわね」

美味しい食事であり付け、更に竜種の魔核を獲られるのだから討伐しない手はない。

「では、明日は俺と村人の数人で魔物の一掃に出るとしようか」

魔物の一掃に戦力を回し過ぎては、いざ天使兵が攻めて来たに守りが手薄になる。

雪羅族を残すのは天使兵の手鼻を挫く意味でも効果がある。特に連中は仕掛けた魔法陣の影響で偽りを見続けるのだから。

既にレオとアルティミアは手を一つ打った。あとは敵の指揮官がソレに気付くかどうか。

気付かなければそのまま叩く。気付いたのではあればそれもまた良し。向こうが気が付こうが気付くまいが、既に次の手が作動するからだ。

レオとアルティミアの悪い笑顔に、リア達は若干身を引いた。魔王が魔王らしく凶悪な笑みを浮かべ、その隣でアルティミアが愛刀を愛おしそうに、抱き締めながら妖美な

笑みを浮かべる姿に恐怖を感じる。

「頼もしいんだけど……私達も二人に負けないように頑張ろー!」

リアの言葉に村人達は一樣に頷く。大切な村を守るために魔族の手を借りる。例え明日には敵になると理解しながらも、魔族と共に勇者の故郷を守った。その結果は後々に大きな影響を与えるだろう。

特に国外問わず沢山の人が訪れるキュアリアは、まさに人々の心に与える影響は大きい。

リア達がそんな事を考えてるとも知らずに、レオはアルティミアとハーゲンと共に詳細な戦略を詰めていく。

「天使兵が仕掛けた魔法陣を利用するタイムリングは、ハーゲンに一任するが——敵主力はリアとアルティミアに担当してもらうことになるだろう。任せていいな?」

「ええ、レオ様の命令ですもの。必ずや遂行してみせますわ」

こうして静かな会議は終わり、彼らは明日に備えるために各々動き出す。

それは天使兵も同じこと——



## 6—7

満点の星空が輝く中。

キュアリアを上空から見下す一軍の姿が有った。

人間の無駄な足掻きを眺め、一人また一人と天使は失笑を浮かべる。

「……」

天使兵が失笑する中でサタナキアは一人、眉を寄せていた。彼の様子が気になった一人の天使が恐る恐る尋ねる。

「あ、あの……何か問題でも？」

「……いや、問題は無いが疑問が有る」

「ぎ、疑問ですか？ 先日斥候部隊を蹂躪したアルティミアが率いる部隊の姿が無いことでしょうか」

キュアリア村からフィールドラン山脈、更に国境の関所に至るまで雪羅族の姿は一切確認できなかつた。毎日欠かさず監視されている中で、魔力の高い雪羅族が発見できないのも不可解な話だ。

「連中は村に立ち寄ったのは確か……しかし姿が見えないのは気掛かりになりますね

え」

苛立ちを抑えるように丁寧な口調で語り出すサタナキアに、天使兵は身震いした。今  
は非常に機嫌が悪い。彼が丁寧な口調で話す時は決まって機嫌が悪い時だ。

サタナキアは青ざめる天使兵に視線を送り、静かに問うた。

「……馬車の出入りを目撃した者は？」

すると五百人の天使兵が同時に手を挙げ、サタナキアは思案する。

キュアリア村に一個部隊が出入りするには十分な馬車が出発した。その入れ違いに  
なる形で一台の馬車が村に到着。それに乗っていたのはメルデイア島の実験を阻んだ  
仮面の男とリアの二人。

自身の見た光景に偽りは無い。天使を幻覚に嵌めるなど人間には決して不可能。し  
かし魔族ならば、そこまで考えたサタナキアは自身の考えを否定した。

「魔族がわざわざこの村の人間を助ける義理など無いか。雪羅族は既に撤退したと見て  
良いでしょう。では、何処に向かったのか……大方レオを探しているのでしょうか」

アルティミア達が騎士団を救ったのは、ルシファー打倒のため仕方なくだ。それは自  
然な考えで有り、ましてやあの状況でも無ければ誰も好き好んで人間と手は組まないだ  
ろう。

人間とは下等生物であり、愚かな生き物。それでいて身の程も弁えず底無し欲望を

抱えた恐るべき生物だ。

「ルシファー様の【昇華】が完了次第、人間殲滅計画は本格的に動き出す、その前に勇者という障害は人形として手中に収めなければ——」

そう呟いた時だった。サタナキアの目の前に六枚羽の大天使が現れたのは。

サタナキアは眼を細め、忌々しげに睨む。

「睨んでばかりのサタナキア」

薄い水色の髪、金色の瞳でこちらを見つめる彼女にサタナキアは槍の矛を向ける。

「何しに来たアガリアレプト」

「独断先行。ルシファー様の計画と大きく外れる行動をされるとこちらも困る」

ルシファーの右腕、軍師気取りのアガリアレプトにサタナキアは眉を吊り上げた。

「必要な事、それに今回はルシファー様から許可も得ている」

「ならいいけど……それよりも一つ忠告。一人の人間に執着すると身を滅ぼすよ」

わざわざ忠告を告げに来たこと彼女にサタナキアは僅かに驚く。

普段なら彼女は自分に対して動かない。こちらに嫌われていると理解してるからこそ、全てやり取りは部下を通じてだ。しかし、だからと言って彼女の忠告を聞く義理など無い。

「ふん。言われなくとも……そんな事よりロランの監視の方はどうだ？」

「……アイツねえ。心はルシファー様への忠誠一色、そこにかつての主人に対する心なんて無い。そんなヤツを監視し続ける必要が何処に有ると」

「ルシファー様、お前、そして私の眼に奴の心がそう映り込む。いや、私だけでは無い。天使の皆に奴の心は完全にルシファー様に心頭していると分かる……だが、魔族の忠誠など不要」

サタナキアの冷え切った声に、アガリアレプトは底知れぬ笑みを浮かべる。

恐ろしい会話だ。大天使の二人はいずれ魔族も滅ぼすつもりだ。そう理解した天使兵の一人は、自分達の上する事が正しいのか疑問が湧く。

疑問を浮かべた瞬間、その天使兵の身体を槍が貫き青い炎が身を焼く。

一瞬の事に天使兵は悲鳴を挙げる暇も、恐怖も懺悔を浮かべる暇さえ与えられず散って逝った。

「ルシファー様の行動に疑問を感じるなど愚か！」

目の前で同胞が一人散った。しかし彼に誰の一人も理解を示すことも嘆くこともない。

人間界に居る天使全員がルシファーに絶対の忠義を誓った兵士だからだ。主を疑うことは明確な裏切り行為だ。

「……そういえばアレは何処に？」

彼女の言うアレについてはサタナキアも未だ所在が掴めずにいる。

「さあ？ 何せよ器無き者に何もできない」

「……そうだと良いね」

杞憂な表情を浮かべるアガリアレプトにサタナキアは息を吐く。もうこれ以上は顔も見たくない、そう示すように手を振ると彼女は、静かにその場を去って行く。

白い羽が舞い散る中、サタナキアは再びキュアリア村に意識を向けた。

一瞬では終わらせない。あの村の人間には勇者の心を砕くための人柱になって貰わなければ困る。

サタナキアは満点の星空の下で顔を歪めながら嗤った。

## 6—8

その日の晩、リアとアルティミアは同室で一晩過ごす事になったのだが。

「レオ様と眠りたいわあ」

隣のベットで呟きが聴こえる。どうしてそうまでしてレオの側に居たいのか。折角の機会だ、思い切つて聴いてもいい。そう考えたリアは自然と口にしていた。

「どうしてアルティミアはそうまでレオと……」

口にした言葉に胸が苦しくなる。

「決まつてるでしょ、レオ様のことが好きだからよ」

鈴のような声で真つ直ぐと返された言葉。それでいてアルティミアは愛する者を想う表情を浮かべていた。

それはフィオナの母アンナが帰らない夫を想う時と同じ表情だ。

「そうなんだ。どうして好きになったの？ きつかけがあるんでしょ」

「当然在るわよ。……レオ様に完膚なきまで負け、手を差し伸ばされた時ね。【雪羅の姫】と呼ばれて、魔界の貴族でも有る私を、私として見てくれてる彼の真つ直ぐで力強い瞳に惹かれたのよ」

確かにレオなら色眼鏡で誰かを見ず、その者の本質で接する。アルティミアはそういったレオの心にも惹かれたのだという。

身も心も全てレオのためになら。そう言つて彼女はレオの配下に加わつたと。

つまり彼女はレオに惚れたから四魔将軍になり、今でも彼のために力を振るつていゝ。誰かのために力を振るえる彼女の姿は羨ましいとさえ思える。

恋は女性の魅力を引き出すと言うが、正にその通りだろう。

「アルティミアが羨ましいわあ」

「……この話を他の魔族にすると苦虫を噛み潰したような顔で、『恋？　へえ、何というか……変わつてるね』つて言われるのよ」

魔族の恋愛事情は冷え切つていゝと聞ぐが、そこまでとは思ひ寄らず、つついゝ微妙な表情を浮かべてしまふ。

「魔族の心は冷えてて力が全ての脳筋……でもアルティミアを見てるとやつぱり感情は人間と変わらないわね」

「魔族の脳筋振りは頭の痛い話だけど……我々も多くの事を人間から学んでるのよ」

百年も魔族は人間に理解を示し続けていた。それなのに自分たち人間は、魔族を理解するどころか拒絶して戦争なんかはじめてしまった。

戦争に正しさは無いが、こちらのしてる事はただ気に喰わない相手が居る。だから排

除しよう、そんなちっぽけな理由だ。

「……レオ様はね人間界に向かう前にこう言っていたのよ、『いずれ人間と魔族は争うだろう。だがそれで良い、争いの果てに互いに理解し和解できるだろう』ってね」

「そんな事を……本当に器が大きいわね」

「少し喋り過ぎたかしら？ まあでも、月が綺麗だから口も軽くなるのね」

アルティミアは小さく笑みを浮かべ、空に浮かぶ月を視線を向けていた。

レオもそうだが、彼らは空に浮かぶ夜空を愛しそうに見つめる。

もう少し彼女と話したいが、これ以上は明日に支障をきたす。それにアルティミアは魔族の雪羅だ、共闘が終わればまた敵になる。先の事を考えるだけで心が痛いほどに辛い。

リアはこの共闘が永劫に続き、魔族と人間の争いが無くなれば良いと切に願い瞳を閉じた。



太陽がフィールドラン山脈を照らす中、あちこちで爆音が響く。

レオは荒れた地面を走り抜け、目の前の魔物——デュアル・ドラゴンに不敵な笑みを浮かべながら魔剣で唐竹からたけを放つ。

硬い竜種の鱗に護れた肉を、魔剣の闇が容赦なく斬り裂く。

胴体を斬られた双頭竜は吠え、空から別の双頭竜がレオに向けて灼熱の息吹を放った。

「甘いなー！」

左掌を地面に叩き付け、レオは魔法を唱えた。

『サウザンド・ストーム！』

地面から上空へ向けて巻き起こる暴風魔法——『サウザンド・ストーム』が千の刃となり、空に居た双頭竜を呑み込んでいく。千の刃に囚われた双頭竜の血肉が他に降り注ぎ、大地を竜の血で穢していく。

半分取り戻した魔力を遺憾無く発揮するレオの姿に、同行していた村のパトラとアルカは驚嘆の息を漏らす。

メンデル国の敵。魔王が村一つ守るために魔力を出し惜しめない姿勢に、嬉しさと同時にまた彼は国の敵になる。パトラとアルカは複雑な心情を宿しながら、双頭竜の首を落としていく。

二人の女性にとっては、双頭竜の討伐は日常の中の作業の一つでしかない。それか当たり前前の如く、剣を撫で下ろすように双頭竜の二つの首が宙を舞う。

「竜の血肉を嗅ぎ付け、獰猛なワイバーンが釣れたか」

空の一面を覆い尽くすワイバーンの数。そこにレオの焦りの色は無い。魔力が半分戻った時点で大抵の魔物はどうにでもなるからだ。

と、レオの眩きに対してあの一歩にパトラが、大地を蹴り跳ぶ。そしてワイバーンを一太刀で斬り裂くと、死骸を足場に次のワイバーンへと飛び移る。

ワイバーンが放つ火球を彼女は身を捻るだけで躲し、また一頭、二頭とワイバーンの血肉が宙を舞う。

(キュアリア村を攻め落とすとなれば、多大な損害を被るか。……ならば魔王軍がこの地を攻めるのは無駄だな)

村人一人一人が洗練されている。一体勇者の血脈は彼女達に何を齎してきたのか。戦う術を授け、ただ守れるだけの存在から必要な自衛を備えた者達へと成長させた。

時の流れ、時代に翻弄され何も出来ずに消えていく者達に溢れている。恐らく勇者ア

リオスはそんな理不尽を嫌ったのだろう。

レオは地上に降り立つワイバーンと双頭竜に右薙を繰り出しながら、彼女達に笑みを浮かべた。

（セオドラよ。観ているか？ お前が望んだ強き民はここに居る。彼女らは心から魔族を受け入れたぞ）

亡き友が望んでいた強き民とは、きつと彼女達のような時代に翻弄されない者達のことを示す。

良い物を見た。レオは左掌から業火を振り双頭竜を焼き尽くしながら現状に感謝した。

きつかけがルシファアーとは正に皮肉だが、それも人生の経験の一つに過ぎない。

そんな事を胸に秘めたレオは、村人達と共闘しながらフィールドラン山脈に巣食う魔物を一掃。

魔物を一掃したレオ達は魔物の死骸から魔核、肉を得る。そしてレオは魔物が多数生息していた谷間を隅々まで調べ、

「（ト）だな」

谷間の中心点に手を触れ魔法陣を描く。決して天使に悟られないように、誰にも見え

ないように。それでいて発動後に谷間を確実に崩す魔力を込める。

「ひやあー、魔族つて空を飛べるつて聴いていたけど、本当に飛べるんだね」

アルカの気の抜けた声にパトラが笑みを浮かべて返す。

「私もはじめて見るけど、空から攻められる騎士団には同情するわね」

「他人事じゃないような？」

そんな会話を耳にレオは手早く作業を終わらせ、地上に降り立つ。やがて空に鋭い眼孔を飛ばした。

空に何か有る。そう悟った村人達は警戒心を浮かべる。

「急ぎ村に戻った方が良さそうだ」

その言葉に村人達は一齐に駆け出す。上空から天使兵に見られていると察しながら。

魔王レオに睨まれた天使兵は、恐怖で戦慄していた。

空高く飛び上がった自分に目を合わせながら鋭く睨まれた。

魔力も気配を隠していた。なのに自分の存在が勘づかれた。あの男は一体何者なのか。

そう天使兵が疑問を懐き、急ぎに報告せねばと翼を羽ばたかせた、その瞬間。

鋭利な闇が身体を貫く。

「……ま、ま、まさか!?」

慌てながら天使兵が周囲を見渡すと、そこには魔法陣は無い。何一つ、自身の身体を貫いている魔法の出所も一切この場に存在しない。

(ダメだ、私はもうダメだ。魔核を貫かれた。もう間も無く死ぬ……!)

血反吐を吐き出し、迫り来る死の恐怖を強引に抑え込み思考を巡らせる。

では、この闇は何か。次第に薄れゆく意識の中で天使兵は答えを探した。死ぬ前に同胞に伝えなければならぬ。

しかし、すぐさま異変が天使兵を襲う。貫いた闇が身体を侵蝕する様に拡がっていく。闇に侵蝕された箇所から消えて行く間隔に天使兵は恐怖を浮かべる。

「ッ、こんな……こんな死に方は……嫌だ!! 頼む! 誰か私に気付いてくれえええ!!」

叫ぶ。必死に叫んだ。責めて同胞が自分を発見してくれることを願って。喉が張り裂けそうな程に天使兵は叫び声を上げた。

彼の断末魔は山脈中に響き渡るが、誰一人として彼の下に駆け付けける天使兵は居なかった。

とうとう彼は全身が闇に侵蝕され、やがて闇は光に溶けるように消えて行く。

レオ達はキュアリア村に帰還すると、そこには既に村の防備を万全な物としたリア達の姿。

誰しもが戦の準備を終え、覚悟を示した面構えにレオは鋭い笑みを浮かべた。そして、

「……さて、問題はいつ天使兵が現れるかだな」

天使兵が攻めて来る具体的な時間が分からない。戦争では患者が侵攻時間を調べるのだが敵は天使。

普通の戦争とは違う。敵に魔族領以外の拠点が無いからだ。これでは兵糧攻めも拠点落としも実行できない、だから此方が取れる選択は拠点防衛の一点のみ。

「忍耐強く待つって苦手なのよね。やっぱり守るより攻める方が性に合ってるわあ」

愛刀を抱きながら空に向けて呟く彼女に、雪羅族達は苦笑を浮かべる。血の気が多い魔族にとって”待つ時間”は非常に長く感じるだろう。

「耐え忍ぶのもまた戦だ。沸る闘争心は敵に一気に解放してやればいい」  
レオの言葉を合図に彼らの耐える戦いが始まった。

天使兵はキュアリア村の上空を囲んでいた。

既に夜が訪れ、頼りになるのは月と星の灯りのみ。

「村に人間が集まっている。おまけに勇者とあの仮面の男もだ。ここで一気に殲滅するのにも一興」

サタナキアの愉悦の籠もった声が夜空に響く。

闇夜に咲く聖なる光が、愚かな人間どもに裁きを与え、勇者の心を壊す。

これは聖戦だ、とサタナキアは酔いしれていた。

開戦の号令を告げるべく、サタナキアが右手を挙げると、

「お、お待ちを！ 監視隊のマルファが消息を断ちました！」

「それが？ 何か問題でも？」

名も覚えていない雑兵が消えた。その報告にサタナキアは、何一つ感じることも無く淡々と聞き返す。価値の無い報告だ、雑兵が与えられた任務一つ熟せないのだから。

冷え切った視線を向ける彼の様子に、マルファと戦友だった天使兵は恐怖を抑えながら必死に訴える。

「これはっ！ 何か敵の策略かっ！ 敵の全容が見えない以上迂闊に攻め込んで……っ！」

我々が危険だ。そう告げる天使兵の言葉をサタナキアは笑って返した。

「ほー？ ならば我々の威光を持ってして策略ごと打ち碎けば良いではありませんか」  
何か小細工をしようとも所詮は人間。彼らに山脈に仕掛けた魔法陣を解除することは叶わない。

既に村の上空は五百に及ぶ天使兵が包围している。村人はたった五十人だ。逃げることも叶わず、彼女らは天使兵に蹂躪される定めにある。

例え騎士団の増援が来ようともそれこそ望むところ。我々は天使だ、人間よりも遙かに優れた種族が遅れを取る筈がない。

必死の訴えに耳を貸さないサタナキアに、天使兵は苛立ちを隠した。彼は下級天使を替えの効く駒の一つとしか捉えていない。彼に仕える価値は在るのか。そう天使兵は内心で疑問を並び立てていた。

これならまだ魔族の方が眩しく見える。彼らの指揮官ロランは配下の一人一人の名を覚え、気に掛けているというのに。これでは戦を知らない我々は不利だ、と。

そんな彼に特に気にした素振りも見せず、サタナキアは配下に言葉を紡いだ。

「ああ数人は生かし、混沌結晶を埋め込め。まだ人体に直接埋め込んだ混沌結晶がどん



な作用を起こすか調べてませんからね」

いま手元に在る混沌結晶は六つ。一つは魔物を暴走させるための物。一つは天使兵の魔力底上げ。一つは自身に施す物。後の三つは捕らえた村人の実験用。

そこまで先を見据えたサタナキアは、一つ計画を変更した。混沌結晶を一つ勇者リアに取り込ませればどうなるか。

その経過を見るのも一興だ。

「さあ皆の者！ 愚かな人間どもを蹂躪せよ！ これは魔王ルシファー様に捧げる聖戦である！」

戦の合図に天使兵は雄叫びを挙げ、村に向けて掌をかざす。

放つは天の雷。人間に裁きを与えるに相応しい魔法。そう天使兵の誰もが信じて疑わずに「天雷」を放つ。

地上に降り注ぐ数多の「天雷」が建物ごと人間を吹き飛ばすだろう。

村に向かつて一斉に墮ちる「天雷」を目にした天才兵は嘲笑う。

だが、その嘲笑いはすぐにと消えて行く。

「……は？ えっ、何だあれは？」

目下の光景に天使兵は戸惑いの声を絞り出す。

こちらの魔法に反応したかのうに、村の真上に無数の魔法陣が出現。そして魔法陣は

【天雷】を弾き、代わりと言わんばかりに火球を撃ち出す。

「迎撃魔法か!? いつだ! 連中はいつ仕掛けた!？」

監視の日々の中で人間にそんな素振りは一切ない。ましてや天使に気付かれないように魔法陣を隠す芸当など不可能だ。

僅かに混乱に堕ちたサタナキアは一瞬反応が遅れ、迫る火球が身体を掠める。

少しだけ焼けた衣服に、サタナキアは血が滲むほど拳を握り込んだ。

「上空から無理ならば、地上から攻め落とすまで! 連中は生かしておかん! 絶対にだ!」

怒り心頭に地上に向かうサタナキアに、二百の天使兵が追走する。

村を覆い尽くす魔法陣が迎撃に入る。しかしそれで止まるサタナキアでは無かった。彼は迫る火球、風雷、氷結を巧みな槍捌きで打ち払っていく。

その姿に追走する天使兵は魅力され、戦意が高揚してていく。彼に付いて行けば間違いない。自分達は負けることも犬死することも無い。そう信じて。

サタナキアがキュアリア村に迫る中、威圧的な声が響く。

「ハーゲンよ、アレを解除せよ」

「御意!」

その声を合図に一つの魔法陣が弾き飛んだ。するとサタナキア達の前に、魔王レオ、

勇者リア、アルテイミアを筆頭に武器を携えた村人と雪羅族の姿がそこに在った。

天使兵が驚く暇も混乱する暇もなく、鈴を転がしたような声が夜空に凜と響き渡った。

「さあ、魔王レオ様の命令よ！ 天使兵を討ち取りなさい！」

彼女の声を合図に雪羅族が一齐に上空へ飛ぶ。

剣と魔法が夜空に飛び交い、天使の羽がキュアリア村に舞う――

## 6—11

轟音と剣戟が響く中、レオが天使兵に向けて吠える。

「魔王は此処だ！ 不意打ちでしか勝てぬルシファアの代わりに俺の首を討ち取る覚悟が在るか!!」

ルシファアによつて行方不明になっていた魔王レオが、キュアリア村に居た。そして勇者リアと行動を共にしている。その事実だけでも天使兵に大きな衝撃を受け、ある者は混乱しまたある者は絶望した。

サタナキアはレオを視線を向け、彼にしてやれたのだと気付く。

メルディア島に出会った仮面の男の正体が魔王レオだった。あの時既に自分はレオに気が付かず見逃してしまっていた。それは多きな失態であり、ルシファアに知られればどうなるか。

「魔王レオ！ なぜ貴様が此処につ!! ええい、貴様の首を手土産にしてくれる!」

サタナキアはなりふり構わず天使兵に命令を下す。

「今の奴は魔力……いや、待て！ なぜ貴様の魔力が回復している!? 決して解けぬ楔を一体どうやって!!」

ルシファーは用意周到だ。レオとリアが魔力を回復する隙など決して与えない。ならば誰かが混沌結晶に細工を施した。陣営に裏切り者が潜んでいる、それこそ女神の配下たる天使兵が。

サタナキアはそこまで考え、内部を一掃する必要があると舌打ちを鳴らした。混沌結晶がこの場で使えない。そう判断した彼は、忍ばせていた全ての混沌結晶を転移魔法で魔王城へと送り込んだ。

「どうした？ ビビったのか、魔力を半分程度回復させた魔王に……いや、失敬。お前の上司は不意打ちでしか勝てぬ男だったな」

この場に居ないルシファーに対する侮辱の言葉をレオは吐き出す。

そして彼は魔剣を構えながら地を駆け出し、サタナキアに一閃放つ。

サタナキアは聖槍を盾に魔剣の刃を防ぐ。レオはそのままの勢いで、サタナキアの頭上を飛び越え、山脈へ向かって駆け出して行く。

「なっ?! 逃げる気か!!」

「フツハツハツ!! 逃げる? そう思うならば俺を捕まえてみせろ!」

高笑いに挑発を返すレオに、天使兵は我慢できないとばかりに彼を追い始めた。

「あの者は我々に任せてサタナキア様は、勇者どもを!」

レオを追い掛ける天使兵の背中に、サタナキアはリア達に振り向く。そして憎悪を浮

かべた眼差しと共に、

「……良いでしょう。貴様を斃り殺しにしてくれる!!」

殺意を振り撒く。大天使の殺意に村人達は怯むどころか、勇敢に武器を構える。

そして彼女達の隣には四魔將軍のアルティミアの姿。天使から見れば、人間と魔族が共に並び立つ姿が奇妙でしかない。いや、異質と言つて良いほどの光景だ。

「どう？ 私達だつて共通の敵を前にしたら手を取り合えるのよ」

「ふん、そんなものは幻だ！ 共通の敵が消えた時こそ貴様らは再び争う！」

「それは否定しない！ でも、ルシファーを倒して魔族と共存の道だつて示してみせるわ！」

力強いリアの言葉にサタナキアは怯んだ。

真つ直ぐに見つめる空色の瞳がサタナキアを離さない。

彼女の気持ちに嘘偽りが無い。間違ひなく気迫や、先程の策略の面では此方の敗北だ。それは認めざるおえない。否、認めなければ天使もまた成長しないのだ。

サタナキアは深く息を吐く。そしてようやく冷静を取り戻し魔力を解き放つ。

「認めよう、戦略に於いて我々の敗北だ。だが、武力ではどうだ？ 我々が魔王レオを討ち取り、勇者リアの心を完膚なきまで碎けば我らの勝利だ！」

槍を弓放つ要領で限界まで振り絞り、一気に目前の村人に向けて放つ。

一息で繰り出される神速の突きをアルティミアが涼しげな顔で受け止める。

「面白いことを抜かすわね？ レオ様を雑兵如きに討ち取れるわけが無いでしょう」

槍の先端を愛刀で地面に叩き落とす。そのままアルティミアは身を屈めると、リアとパトラが左右から刃を一振り、交差する刃をサタナキアは体を捻り刃が衣服を掠める。

リアはそのままの勢いで聖剣に光を纏わせたまま、刺突きを繰り出す。

「こんなもの！」

サタナキアは槍を回し彼女の聖剣を弾く。無防備となつた彼女の腹部に彼は掌を押し当て、

「《光よ衝撃となれ》」

光の衝撃がリアを呑み込む。その様子に村人達は涼やかな顔でサタナキアに駆ける。

「私に光は効かないわよ！」

光の衝撃から突つ込むリアの姿にサタナキアは、何度目かの驚愕を浮かべた。光が通じない人間が存在しているなど長い歴史に於いて前例が無い。

彼女は確かに光属性を扱うが、人間である以上は完璧に防ぐことは不可能なはず。

すぐさまサタナキアは、まさかと刃を捌きながら思索した。

(ルシファア様は彼女を知つた上で目を付けた？ なぜ私に情報を……)

ルシファアが混沌の素材として選んだ二人がレオとリアの二人。天界黙示録に記さ

れた項目には、”魔王と勇者が現れ争う運命に在る”と。闇と光の争いは古来より続く終なき争いだ。

だが、その争いの原因は混沌の神が死に際に光と闇に魔力を分けたのが原因とされている。

(ええい！今は考えている暇では無いか！)

村人一人一人の剣を捌き漸く理解した。この村人達は天使兵よりも強い。

魔力量では此方が圧倒的だが、武力面では人間よりも劣る。

(チッ！ぬるま湯に浸かった弊害か！闘争こそが進化のきっかけ！天使に足りないのは闘争心……女神め！こうなることも織り込み済みだったか……っ!!)

サタナキアは槍を地面に突き刺し、両側から迫る村人に対して腕を交差させ、

「鬱陶しわあ！」

光の波動が掌から放たれ、リアは息を呑む。

光の波動を目の前にして村人は死を覚悟、目を閉じた。しかしいつまで経っても衝撃が襲わないことに村人は不審に思い瞳を開くと。

「全くもう！天使も無詠唱から魔法を放つてこと忘れない！」

村人と光の波動の間に氷結の壁が割って入っていた。

「あ、ありがとうアルちゃん！」



「あ、アルちゃん!? ……リア? あなたの村人は面白いことを言うわね」

「あの人達なりの愛称よ! けど、危ないところだった、本当に助かったわ!」

「やっぱり大天使の相手は私とリアが受け持った方が良いわね」

村に入り込んだ天使兵の数は多い。サタナキア一人に村人を割り当てていけば手が足りなくなる。幾ら村人が規則外の強さを誇ろうとも物量戦、大群戦に加えて防衛戦では徐々に押されていく。

「雪羅族達よ、各々の最善を尽くして村人と勝利しなさい」

アルティミアの声一つに雪羅族はすぐさま動き出す。

雪羅族の一振りで天使の魔法を斬り払い、キュアリア村の民の一振りが天使の矛を砕く。そして村に天使の鮮血が舞う。

レオを追った天使兵は二百。村に残った天使兵が三百だったが既に百が討ち取られた。

サタナキアの槍と魔法を抑え切るリアとアルティミアの二人。

火花が散る中、フィルドラン山脈から爆音が響く。

その後に両軍は一瞬だけ攻勢の手を止めた。

## 6—12

——フェルドラン山脈が爆発する少し前——

月明かりに照らされた険しい山脈を駆け抜けるレオ。彼を討たんと追い掛ける天使兵が駆け抜けていた。

天使兵が投球する槍をレオは紙一重で避け、真つ直ぐと進み続ける。

「逃げてばかりだ！ ヤツは逃げてばかりだぞ！」

「腰抜けの魔王め！ ヤツは腰抜けだ！」

背後から飛ぶ天使兵の罵声にレオは決して足を止めない。それどころか顔を向け、「どうした？ 貴様らは弱体化した魔王一人に追い付けん腑抜けどもだったのか？ 人間ならば追い付けるぞ……ああ、普段空を飛ぶ貴様らは走ることも辛いか、いやいやこれは失敬」

にんまりと笑みを浮かべて挑発を挑発で返す。その姿に天使兵は空を飛び、魔王レオを追い駆ける。

飛翔する彼らは背後から魔法を放ち、時に槍と魔法弾を放つ。しかしそのどれもが軽やかに避けるレオに擦りもしない。

天使兵は迷う。このままヤツを追い掛けていいのか。これは罨なんじゃあないのか、と。

「罨……そうだ！ 我々にはアレが在る！」

「サタナキア様の指示も無しにアレを起動させるのかい!？」

「構うものか！」

そう言つて一人の天使兵が空に手を挙げ詠唱した。

「《眠りし魔よ、我が言霊に従い目覚めよ》」

「《全ては天より裁き、全ては大いなる威光の下、彼方を崩落せよ》」

長い詠唱を唱えつた天使兵の掌から空に向かって光の柱が生み出される。光の柱はフェルドラン山脈全域に設置した魔法陣へと降り注ぐ。

「まさか！…この地を崩壊させる気か！」

魔物が多く生息していた谷間に到着したレオは、天使兵が発動させた魔法に足を止めて焦りの色を強めていた。

余裕だった彼の表情が焦り、次第に絶望に染まる様子に天使兵達は愉悅に笑い声を嘯み殺す。

「我々を舐めていたようだ！ 貴様が我々を舐めた結果だ！ 間も無くこのフェルドラン山脈は崩壊する！」

「我々には天を駆ける翼が有るが、お前達にはそれが無い！ さあ！ 絶望の地鳴りに恐怖しろ！」

声高らかに勝利を宣言する天使兵に、レオはにやり、と嗤う。

フェルドラン山脈を崩壊させる魔法陣は既に解体され、別の魔法陣にすり替わっている。特に意味の無い、天使兵が仕掛けた魔法陣を真似た別物。

ハーゲンをはじめとした雪羅族の完璧な仕事にレオは改めて心から満足していた。天使兵は解除された事に一切気が付かず、それどころか大天使サタナキアまでも欺く始末。

「……貴様らの言う絶望とはコレか？」

「な、に？ ……いや待って、何故崩壊が始まらない!？」

「種を明かす気は無いが、そうだな……貴様らがやろうとした事はこう言う事だろう」

いつまで経っても魔法が発動しない事に驚き狼狽える天使兵に、レオは魔力を指先に込め指を鳴らした。

すると谷間に施した無数の魔法陣が紅く輝き出し、

「ま、待て！ 正気か——」

”お前も巻き込まれるぞ” そう言い掛けた天使兵は時既に遅く、谷間が大爆発を起す。

耳をつん裂く轟音。硝煙が視界を呑み込み、激しい地鳴りに天使兵は空を飛ばうと羽ばたく。

だが彼らの行動は間に合わず、天使兵は谷間の崩落に呑み込まれていく。最後に彼らの耳に届いたのは、崩落の中で高笑いを奏でる魔王レオの声だった。

ハーゲンを始めとした雪羅族は崩落した谷間を見下ろし、

「……天使兵はまだ生きておるか。やはりしぶとい」

「では、手筈通りに」

雪羅族は生き埋めになった天使兵に向けて魔法を唱える。例えレオの脱出が間に合わなかったとしても、敵兵力は削る。それが魔王レオの命令だからだ。

「『《地よ灼熱の業火に溶けよ》』」

トドメは慈悲も無く入念に。広域殲滅魔法——「メギド」が崩壊した谷間を溶解させ、生き埋めになった天使兵は悲鳴をあげる事なく、肉体が岩盤と共に溶けていく。

「最期の仕上げだ。《憎き忌々しい吹雪よ、業火を凍て付かせよ》」

ハーゲンが吐息を吐くとソレは激しい吹雪に変貌し、瞬く間に溶解した大地を凍結させていく。

やがて処理が済んだ雪羅族は辺りを見渡す。主君の姿が何処にも無い。つまり、レオ

は転移が間に合わず天使兵と運命を共にした。

雪羅族の面々が悲観する中、ハーゲンだけは何も無い空間に目を向けほくそ笑む。

「レオ様も悪戯が過ぎますな」

その一声に、ハーゲンが見詰めていた空間が裂ける。そして虚数空間の中からレオが姿を顕した。

「やはりハーゲンは騙せんか」

「ああもう！ レオ様の悪戯好き！」

雪羅族が喜びを露に叫ぶ中、ハーゲンは最初から理解していた。魔王レオが魔力の半分を取り戻した時点で確実に生存することを。

「フツ、やはり自力での転移魔法は素晴らしいな。転移石による転移も悪くは無かったが——」

「場所指定できぬ転移ですから。お陰で捜すのに苦労しましたぞ」

軽口を叩き合う二人に雪羅族は息を吐く。なぜこうもレオとハーゲンは気が合うのか。

疑問を浮かべる雪羅族にレオは一つ咳払いをして、

「さあキュアリア村に戻るぞ」

キュアリア村を見下ろし、拡がる戦場に心躍らせた声で指示を発する。

魔族と人間が共闘し、敵を討ち取る姿にレオとセオドラが待ち望んでいた光景が広がっている。彼が心躍らせるのも無理は無いと雪羅族達は納得しながら、フェルドラン山脈を下山すべく疾走して行く――

## 6—13

フェルドラン山脈で何が起こったのか。サタナキアは山脈が崩壊しない様子から、こちらの策略が失敗した事を悟る。

同時にリアとアルティミアはレオとハーゲン達が成功したのだと悟り、

「レオ様が成功したわよ！　これで敵兵は残り二百余り！　一気に蹴散らさないさい！」

アルティミアの言葉で雪羅族の闘争心が上がる。天使兵の槍を砕かれ、魔法をも弾かれる中でサタナキアは笑みを浮かべる。

そこに焦りの色は一切無く、むしろ余裕すら感じ取れる笑みだ。

「……アルティミア、何か隠してるわよ」

「そうでしょうね——村人も我が雪羅も村の中央に集まりなさい！」

サタナキアが何を企んでいるのか、アルティミアは戦の直感から急ぎ全員に指示を出す。

村人と雪羅族が天使兵との交戦を中断し、村の中央へと駆ける。それと同時にサタナキアは掌を空にかざし、

「さあ！　我が僕達よ顕れよ！」



言葉と共に空間が裂かれる。空間の裂け目から天使の羽根が散り、キュアリア村を包囲するように天使兵が続々と出現した。

ざっと見渡すだけで五百の天使兵。これで敵兵力は七百余り。

「何か企んでると思つたら増援？ えっ、それだけなの？」

アルティミアは拍子抜けと言わんばかりに肩を竦めた。

予備戦力の用意。だがそれを投入したのは理解できるが、その程度でキュアリア村の民が絶望する事はない。

「……この数を相手に人間を守り切れるのか」

「余裕よ。既にお前達は私の間合いだ」

底知れぬ冷気を発するアルティミアに彼の体が震える。生存本能が、『逃げろ!!』と叫ぶ。

天使兵は身の危機を感じ取り、マズい、彼女を動かしてはマズい。その場の全員が、二人を囲んでいた五十に及ぶ兵が一斉に判断。武器を携えアルティミアに殺到する天使兵に、彼は鋭い声を張り上げる。

「ソイツの間合いに入るな!!」

瞬間。一振りの斬撃が走り、天使兵の身体が凍てつく。

一瞬だった。隣に居るリアを斬撃に巻き込まず、殺到した天使兵のみを氷像に変えた

のは、まさに一瞬のこと。

氷像へと変わり果てた天使兵は自身の状態に理解が追い付かず。凍結した肉体、動く思考回路と保たれた意識により混乱を強め——ようやく、

(いま、何をされた!?)

疑問を呼び起こす。

しかし、全てが遅過ぎた。彼らの氷像に亀裂が走り、花卉の如く空に散って逝った。

「……き、貴様！ 私の眼には今！ いま、貴様が六つの斬撃を同時に放ったように見えただが……っ！」

そんな事が有り得るのか。眼にした光景を疑うサタナキアに対して、アルティミアはイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「その眼で見えたんならソレは紛れもない現実よ。ああ、幻覚かもね」

飄々と語る彼女の姿にリアはため息を吐く。

視覚で視認した彼女の動き。間違いなくアルティミアは天使兵一人に対して六つの斬撃を放っている。それを五十も目に止まらない速さで繰り出す。

自分を巻き込まずアルティミアは、一呼吸で六つの斬撃に膨大な冷気を纏わせ同時に五十の天使兵に放った。

ソレは紛れもなく彼女の魔法技——「六華ノ太刀」によるもの。

凍結を防ごうとも六の斬撃が肉を裂き、人体の内側から冷気が全身の体温と水分を奪い尽くし瞬間凍結に至る。

改めて見ると恐ろしい魔法技だ。そもそも彼女の剣速を防ぎ、肉体を侵食する冷気を魔力で防いではじめてまともにアルティミアと戦うことが赦される。

「天使兵は村人の殲滅に死力を尽くせ。私はあの女と勇者を討つ」

サタナキアはここに来て、漸くリアを人形にする拘りを捨てた。拘りを捨てなければ此方が全滅する。皮肉な事にアガリアレプトの忠告通りだ。

忌々しい女だが、今は感謝しなければならぬ。そうサタナキアは槍をアルティミアとリアに向ける。

金属が弾かれる音と魔法の音が響く中、リアとアルティミアは一呼吸置く。そして同時にサタナキアに駆け出す。

リアは聖剣を下段から斬り上げ、同時にサタナキアの右側面から蒼天氷雪による左薙が迫る。

サタナキアは右掌で魔力障壁を創り出し、アルティミアの刃を防ぐ。そのまま槍で聖剣を弾き、リアの腹部に蹴りを放つ。

だがリアは、身を翻してサタナキアの蹴りを避けた。彼女はそのまま勢いで鋭い回転

斬りを放つ。

同時に魔力障壁がアルティミアによって碎かれ、リアの放った渾身の一撃がサタナキアを斬り付ける。

大天使の鮮血がキュアリア村の大地に散る。

サタナキアは流れる血に呼吸を整え魔力で止血。一瞬周囲に目を向けた。

次々と倒れて行く天使兵。村人と雪羅族によつて蹂躪される彼らの姿がサタナキアの瞳に焼き付く。

この結果を齎したのは自分だ。勇者リア一人に固執した事が原因。栽培の甘さ、過信と慢心が齎した恥ずべき結果。

これでは兵力を無駄に消耗したに過ぎない。認めようこれは自分の過ちだ、と。そうサタナキアは心中で過ちだと認めた。

(……私の負けだ。だが……タダでは死なん！)

サタナキアは魔力を槍に集めながら、空に飛翔する。

「天使兵は撤収し、ルシファア様の下へ！」

天使兵に命令を下すと、彼らは一斉に転移魔法で戦場を去っていく。

その様子にリア達はサタナキアを睨む。溢れ出る魔力が槍に集まる様子に、彼はその

槍で村を破壊するつもりだと。

アルティミアを始めとした雪羅族が一斉にサタナキアに魔法を放つ。だが、サタナキアは魔力障壁を展開し、魔法を防ぎ切った。

魔力の塊となった槍を振り絞る様に構えるサタナキアに、リアは聖剣に魔力を集める。

あの槍を弾く事はできるが、大出力の魔力を人の身で受け止める事になる。ソレをすればリアの身体は無事では済まないだろう。最悪二度と剣を振れない身体になる。

リアはそれでも、村を守るためならと聖剣を構えた。

アルティミアは万が一に備え、魔力を愛刀に集めていた。リアはあの槍を受け切れるが肉体の損壊は免れない。それはレオが深く哀しみ、彼と彼女が決着を付ける機会が失われる。それでは意味が無い。

アルティミアはリアの隣に立ち、

「ダメよ、あなたにはちゃんとレオ様と決着を付けて貰わなきゃ」

「そうだけど……良いの？」

「良いのよ。衝撃を肩代わりするだけだから、最後は勇者の仕事よ」

弾き返すのはリアの役目だ。そうアルティミアは微笑む。

(この状況下で互いを守るか！)

地上を見下ろすサタナキアは見た。雪羅族達が村人の守りに入る姿に。美しくも儂い光景が目下に広がっている。

しかしサタナキアは攻撃の手を止める事は無い。自分はルシファーのために勝利しなければならぬ。

そしてサタナキアは限界まで振り絞った槍を、リアに向けて投擲した。

避ければ大地が吹き飛ぶ程の魔力の塊、それこそキュアリア村は大陸から消滅する程の威力だ。

鋭く穿たれた魔力の塊がリアに迫る。

彼女は地面を踏み抜き、大きく聖剣を振り抜いた。

「はあああああつ!!」

聖剣が魔力の塊を受け止め、アルティミアの愛刀がリアの聖剣を支える。

衝撃が分散される中、リアは渾身の一刀を放つ。

魔力の塊が彼女の気迫と聖剣によって弾き返され、真っ直ぐとサタナキアに飛翔していく。

魔力障壁が碎かれる中、サタナキアは間一髪の所で自身が放った槍を避けた。

天に昇る魔力の塊を見上げたサタナキア。もう転移魔法を駆使する程の魔力は遺されてない。

(私はここまでか)

そう断念した、その時だった。誰かの細腕がサタナキアを空間に引き摺り込んだのは。

「……っ、撤退した？」

「あの様子じゃあ、そう見て良いわね」

「ふうっ……終わったのね」

サタナキアの撤退によってキュアリア村を守れた。誰一人の犠牲者を出すことも無く。

これ程の成果はそう得られないだろう。特に今回は魔族の力添えが大きく影響していた。

「アルティミアも！ 雪羅のみんなもありがとう！」

リアは満面の笑みを浮かべて、彼らに心から礼を告げた。

そして帰って来たレオ達を総出で暖かく迎え、勝利を祝う宴が始まる――

## 6—14

勝利の宴を終えた翌朝。

リアは一人、村の森林地帯を歩いていった。

歩き馴れた原っぱの道、風に騒めく森、川のせせらぎに彼女は笑みを零す。

同時に幼い自分を両親が温かく迎える姿が、幻覚として現れる。

「懐かしいなあ」

懐かしさと寂しさが同時に込み上がる中、リアは歩き続ける。やがて森林地帯を抜けると三つの民家が視界に映り込む。

その最奥に在るのがリアの家。何の変哲もない一階建ての木造の家だ。

民家の間を歩くリアに、一匹の老犬が嬉しそうに尻尾を振る姿が映り込んだ。

「ポチもすっかりおじいちゃんね」

老犬ポチの姿に寂しげな声が漏れた。生物は歳を重ね老衰していく。それが自然の在り方というのに、いざ老犬の姿を目にすると目尻が熱くなる。

幼い頃からポチとその飼い主とよく遊んだ。だから思い出がより悲しくさせるのだ。

それでも思い出とは大切な物。昔、思い出は悲しくなるからと言って、全ての思い出



を捨てた王が居た。思い出は記憶と同じ、だから思い出を捨てた王は自分が誰だったのかさえ忘れてしまい、彼に遺されたのは何も無い自分だけ。

そんな話をリアは母から聴いたことがあった。昔話の教訓、ポチの姿は見ていただけで辛い、日に日に弱り果てる姿を見守る飼い主の方が辛い。ポチとの思い出は大切な記憶の中に仕舞い込んでリアは手を振った。

「全ての思い出は大切よね……ポチ、また来るからね」

リアはしょんぼりとしたポチに苦笑を浮かべ、自宅の方に歩き出す。

みんな宴で酔い潰れてしまっているためか、元々人が少ないこの辺りはなおさら人が無い。

森林の風が寂しいものに聴こえるのは、きっと人の声が無いからだ。

自宅に到着したリアは玄関のドアを開け、

「お父さん、お母さん、ただいま」

誰も居ない家に帰宅の挨拶。そのままリアは家にながり込んで中を見て歩く。

パトラが掃除してきてくれたお陰で、自宅に埃一つ無い。

「パトラ姉には今度王都のお菓子を贈らなきやね」

リアは暖炉の前のソファに腰を掛け眼を瞑った。

聖剣ゼファールは必ず次代に託し続けなければならぬ。勇者アリオスの血筋を途

絶えさせてはならない。

両親の死に際の言葉が頭の中で流れる。

「死を前にしても使命の事ばかり。本当は笑って欲しかった、頭を撫でて欲しかった。勇気付けて欲しかったのに」

病気になる以前は優しく頭を撫で、哀しい時はそっと抱き締めてくれた。

優しい両親だった。それは間違い無いが、死が近づくに連れて二人は人が変わったように焦り出した。

二人の焦りは当然と言えば当然だったのかもしれない。聖剣ゼファールの担い手が女の子でまだ五歳。剣の腕も未熟で気弱で寂しがり屋な女の子。女の子の取り柄と言えば人並み外れた魔力と代々受け継いだ光属性だ。

両親が剣技と使命を伝えることを優先したのも、先の未来を想えばこそ必然だと、今なら理解できる。特に戦時中の情勢を考えれば、両親の判断に意味があった。

「厳しい師匠だったわね。剣を受け継ぐ家系に産まれた宿命って言うけど、本当のことだったわ」

何かを受け継ぐ家系は積み重なった歴史を背負うことになる。それがどんなに重荷か、今となっては馴れたものだが昔はよく恐くて泣いていた。

その時に励ましてくれたのはいつだって村のみんなだ。

過去が在るから今が在る。だが、いつまでも過去を思い出している訳にはいかない。明日に向けて切り替えねばならない。

リアは戦後について少しだけ考える。

「戦争が終わったら勇者としての役目も終わり」

戦争が終わったら魔物狩りで生計を立てる。時に【福音の館】で働く。勇者以前にそうやって生計を立ててきた。

「でも、しばらくは魔族と共存に向けて頑張らなきゃね。……そのためにはルシファー打倒！ 少女のお腹を貫いた代償は大きいわよ!!」

ずっと隠してきたルシファーに対する怒りをリアはここで爆発させ、握り拳を作った。

サタナキアの故郷襲撃の件も有る。そしてメンデル国は愚か他国で増え続ける天使兵の犠牲者をこれ以上産まないためにもルシファーは止めなければならない。

勇者一人で止められる戦争では無いが、今は魔王レオが居る。彼とその配下、そして自身の仲間達と共にならばルシファーは止められる。

「うん、そうと決まれば明日に向けて準備ね！」

レオと話し合った予定では、アルティミア達を連れて王都へ向かいギリガン王と謁見。

リアは予定を頭で反復させ、明日への準備に取り掛かる。

そして、村人全員に見送られながらレオ達が出発したのは夜明け——二人はアルティミアと雪羅族の部隊を連れて王都へと進んで行く。

サタナキアは敗戦を受け入れたが、目の前の女性に助けられた事実は到底受け入れ難いものがあった。

彼の心中を占めるのは屈辱だ。そして目の前の女性は愉悦を込めた眼差しで、

「不様なサタナキア」

彼女は嘲笑う。嫌いだ、消えて欲しいとさえ願った彼女に助けられた事実は、サタナキアにとって一生拭えない不覚であり、これ程の屈辱はそうそう無いだろう。

彼は怒りに震えるな体を堪え冷静を取り繕う。いまは魔力が枯渇している。この夕イミングで彼女に何かしようものなら、それこそ嫌いな相手に殺される。それは死んでも死に切れず、悪霊と成り果てる事は確実。

あんな醜い悪霊になるぐらいなら、この屈辱は堪えるべきだ。

「……なぜ私を助けた。なぜだ？ 笑うためか」

「笑うため。人間と魔族に翻弄され不様を晒したお前の姿には、随分と笑わせてもらった。……彼らには礼を言わなきゃね」

心底本心から語るアガリアレプトの姿に、サタナキアのこめかみに青筋が浮かぶ。

「……まあ、お前が死ぬと不都合が有るのは確か。ルシファー様の重臣は多い方がいい」  
「貴様がそんな事を考えていたとは……意外だな」

「お前と違つて考える方だから」

言葉を返せば皮肉を返される。両者にとつていつも通りのやり取りだ。そして殺し合いに発展するが今回は違う。

「それで、お前はなぜ敗北したと思う?」

「……ふん、見ていたのなら分かるだろう? 私は連中を侮り敗北したと。特に魔王レオの生存を認知していなかったのは大きい、魔力を失つたヤツは死んだとばかり考えていたが……」

「魔力が無ければ誰しもが無力。それはルシファー様も女神も変わらない。——そんな状況下で魔王レオと勇者リアは生存していた。どう考えてもゴブリンに殺されるような状況でよ、余程運が良かったのかもね」

彼らが生き残つたのは運によるもの。そう推測するアガリアレプトにサタナキアは息を吐く。

たかが運一つでこちらの計画が阻まれたのか。それはある意味で恐ろしい事実だ。

しかし魔力が無い状況で彼らは如何にして魔核を得たのか、どうやって一部の鎖を解いたのか。前者は運に恵まれた結果なのは明白。だが、後者は違う。誰かが意図的に仕

掛けなければ不可能だ。

「裏切り者が居るか。戦いの最中、それは予感していた。だが、ルシファー様の下に集った天使は、皆が心から心頭している者達だ。天使に裏切り者が居ると思うか？」

「確信が有る訳じゃない。天使の中に女神派が紛れ込んでいるかもしれない、それに外部戦力——魔族が怪しむ」

「……魔族は、連中は魔王レオを裏切り此方に寝返つた者どもだ。いまさらルシファー様を裏切りるとは思えんが」

「最初から誰かの策略だとしたら？」

最初から、それはいつからを指すのか。魔王レオと勇者リアの魔力を奪つた時か、それ以前からなのか。

前者は有り得ない。魔王城の広間に殺到した魔族にそこまで考える能力が無い。では後者か、それも違う。魔王レオが此方の動きに勘づいた様子は皆無だった。

でなければあの時、ルシファーよりも膨大な魔力を宿しているレオが不意打ちを許す筈がない。

そもそも「最初から」は間違いで、状況に合わせて策を練られたのなら。それが出来る人物は魔族内に複数人居る。

魔王城の文官達がそれに当たるが、サタナキアはロランが怪しいと睨んだ。文官の動

きは魔界の内政、財務を支えるため公務に集中しているに過ぎない。彼らに何かを仕掛ける余裕も度胸も無い。

逆にロランは違う。度胸も適切なタイミングも全て把握、あるいは自ら作り出す能力が有る。

「やはりロランが裏切り……いや、違うな。ヤツは最初から魔王レオを裏切つてなどいなかったということか。つまり我々はヤツ一人に騙され、踊らされていたということか」

「あの時、ルシファア様が混沌を得た時点でロランは策を練っていた？　だとしたら恐ろしい、心を偽り我々を欺いた事にもなる。下手をすれば死ぬというのに」

「死など恐れてはいないのでしょね。……いや、しかし我々もロランを見倣うべき点がある」

今の天使は戦争を知らない。軍の動かし方も知識として理解してるが、実際に動かすとなると思うように事が運ばない事が多い。特にキュアリア村の襲撃がそれに当たる。

こちらの経験が圧倒的に不足していた。天使兵同士の連携も取れていたとは言いがたい。そこに来てロランの策略に嵌れば、紛れ込んだ間者捜しによって陣営内の疑心暗鬼が拡がる。そうなつてしまえば経験不足のこちらは、立て直す暇も無く敗戦していた。

「ロランはどうする？」



「……………」  
サタナキアの言葉にアガリアレプトは一瞬だけ驚いた表情を浮かべ、薄寒い笑みを宿した。

そしてクツクツと肩で笑う彼女の姿に、またサタナキアも笑っていた。

ここからが本当の戦いだ。魔王レオと勇者リアの次の行動は把握しやすい。彼らは天界に向かうだろう、だがその時こそが二人の最期だ。

## 七章 天へと至る国

## 7—1

夏の到来、日照りが増す昼下がりに。

レオ達が王都フェニスに到着したのは、キュアリア村を出発して実に一週間のことだった。

本来馬車の速度なら二週間と三日を要するが、魔法により馬に強化魔法を施し、馬車を軽量化させることで移動速度を上げた。

更に魔物が多数生息する森を最短ルートで強引に突破し、

「私、もうレオに手綱を握らせないわ」

「……流石レオ様、魔法のこり押し……うぷっ」

馬車が激しく揺れ続けた結果、アルティミアは気持ち悪そうに口元を押さえた。そんな彼女らに、

「こうでもしなければ早急に到着できんからな。……次はユグドラシルへ向かうのだ、その時はまた俺が担当しよう」

レオの不敵な笑み浮かべ、リアとアルティミアの二人は絶望に顔を歪めた。

責めて王都に有る翼竜車を借りられれば、馬車よりも速い速度でユグドラシルに到着できる。リアはちらりと並走する馬車に視線を送った。

雪羅族が手綱を握る馬車。彼らもよくレオの強引な操縦に着いて来れた、と感心を寄せ外の景色に視線を移す。

王都フェニスを囲う城壁、不死鳥を記した国旗が風に揺れる。そして外壁一帯に増設されたテント郡にリアは顔を擧めた。

「あれは……避難者？　王都に入りきれない人々がこんなにも」

レオはテントの周りに集まる人々の顔触れに小さく息を吐く。

「いや、彼らは難民だろう。あの者達は俺の領地の人々だ」

「レオの……それじゃあギリガン王はこの状況下で難民が王都に入る事を拒んだ？」

「俺の民は人間だけでも二万を超える。……魔族領の人間全員が避難したとなれば、容易に收容はできぬだろ」

二万人の大移動。魔族領から天使兵の追撃を振り切りながら、ここまで避難するのは容易では無い。だが、二万人も收容できる施設が王都には無い。

「今頃騎士団の隊列に魔族兵も加わつてることでしょう。それにウテナ教会が親切に炊き出してるようですわ」

シチューの入った皿を神官が差し出すと、人々は受け取り列を離れていく。どうやら

炊き出しの最中だったようだ。

「そろそろ東門に到着か。さて、どうでるかな」

楽しそうに呟くレオにリアはため息を吐く。

「お願いだから一戦交えないだよね。あなたの振舞い一つであの難民が危険に晒されるんだから」

その言葉にレオは素直に頷く。彼らは謂わば魔王レオに対する人質だ。王都でレオが何か起こせばすぐさま城壁の大砲が難民を吹き飛ばす。

大砲がテント郡を射程に捉えているのが何よりの証拠だ。敵国の王に対して難民を人質にする真似は戦時中によく有ること、レオはそれを悪と断じる気は無い。

それに迫る魔物の盾として利用するなら、わざわざ炊き出しも騎士団を配置する真似はしないだろう。

やがて東門に馬車が到着すると、二人の門兵が騎乗槍を携え、素顔を晒しているレオに彼らは驚きのあまり小さな悲鳴を上げた。

人間にとって正に宿敵であり恐怖の象徴が目の前に居る。彼一人にどれだけの被害を被ったか。門兵は溢れ出す怒りを堪え、職務を全うすべく口を開く。

「ま、魔王レオ!! 遂に来てしまったか!」

「ええい！ ソフィア姫の敵命ゆえ仕方なく、そう仕方なく貴殿を通すが……！」

怒りは堪えるが、やはり不満は有るようで二人の門兵は唇を噛み締め、嫌々と吐き捨てた。そんな彼らにリアは馬車から降り立ち、

「ソフィア姫の敵命なの？ ギリガン王じゃないんだ」

門兵に問うと彼らは静かに答える。既にリアと魔王レオが行動を共にしていることは、フィオナから聴いてる。そのためリアが馬車から現れた事に冷静に対応して見せた。

「ええ。……ギリガン王はルシファアの宣戦布告以来、各地の防備、避難民、騎士団の派遣、増員に多忙でして、細かい事はソフィア姫とアンドレイ王子に任せているのですよ」  
「そう、フィオナとククル達は王都に？」

「はっ！ 先日こちらに到着し、ククル殿はフィオナ様と共に最前線に助太刀に向かわれました」

既に二人は最前線に参加している。フィオナと鬼人族が戦列に加われれば安心だ。

その後、必要最低限の話を済ませたレオ達は門兵が見送る中、門を超え城下町へと進んで行く。

白亜の街並みが広がる光景にリアはやつと帰ってきたと息を漏らす。馬車が走る中、街の人々の声に耳を傾け、

『いつになったら戦争が終わるのよ』

『魔王ルシファーさえ倒せば終わる、きつと終わるさ』

『いやいや、ギリガン王のことだ。魔王ルシファーを打ち破った次はまた魔族を狙うに決まっている』

『勘弁してよね。まだ戦争を続ける気？ まだ戦死者を増やす気？ この戦争に何の意

味が……っ』

『魔王ルシファーと魔族さえ滅びれば人間による平和な時代の到来だ。それまで我々は耐えるべきだ』

人々の嘆きの声がりアの耳に届く。

『ようやく王都に勇者様が帰還するそうだ。ようやく戦争が終わる！』

『そういつて、魔王レオの討伐に失敗したじゃあない』

『アレはルシファーの策略によるものだろ？ きつとリア様なら平和を齎したくくださるに違いない！』

勇者リアに縋る者の声にレオとアルティミアは眉を顰める。

人々の象徴である彼女に誰しもが縋る様を、改めて目にするると異様な光景に見える。十五歳の一人の少女が背負うには余りにも重い。しかしそれでもリアは、

「早くギリガン王に会いましょう。会って残された問題を一つ一つ片付けよ」

いつも通りの笑みを浮かべていた。

「お前は、これで良いのか？」

馬車の車輪の音、馬の蹄の音が響く中、レオは静かに問いかけた。

「それが勇者の仕事よ。彼らの嘆きは私が受け止める事もね」

「お前の嘆きは誰が受け止めるといふんだ」

「それは、ほら……ナナ達と上手くね」

「……我々に非が在る話とは言え残酷よ」

ポツリと呟くアルティミアにリアは苦笑を浮かべ、外の景色に眼を移す。

城下町を抜け、貴族街に差し掛かり馬車はそのまま真っ直ぐとフェニス城へと進んで

行く。

## 7—2

王都フェニスの中央に在るフェニス城。

入城したレオ達は出迎えた將軍セルゲイに謁見の間に通される。レオは何かしら悶着が有ると予想していたが、予想に反してすんなりと事が進む事に落胆を浮かべた。

そして玉座に鎮座したギリガン王がレオを忌々しそうに一睨み、その様子をソフィア姫に咎められ、アンドレイ王子が苦笑を浮かべる。

薄い金髪に老年の男——ギリガンは重々しく口を開く。

「……………ほん。いまいま……魔王レオよ、よく余の城へ参つたな。勇者リアも無事で何よりだ、その男に何かされておらぬか？　もしされたのならば、即打首に処すが——」

リアはそんな事は無いと言いかけたその時だった。

長い銀髪に翡翠色の瞳でギリガン王を睨む少女——ソフィア姫は呆れ気味に言葉を吐いたのは。

「お父様？　約束したではありませんか、この状況を打開するためには魔王レオ様の力添えが必要だと。いい加減にしませんと、一週間は口を聞きませんかよ？」

そんな二人の様子に金髪を短髪に切り揃えた男性——アンドレイがため息を吐く。



「父上もソフィアもその辺にして置きたまえ。あまり見苦しい姿を見せては魔王レオに……ああ、既に笑われているな」

肩で笑いを堪えるレオの姿にアンドレイ王子は落胆した。

「なんだ？ 緊迫した状況下で親子のコントを見せられたのかと思つたぞ」

「ああ、その物言い正に本物。貴様は相変わらずだな」

「そう言うお前は老たな。以前よりも声に覇気が無い——いや、それよりも我が民の受け入れ感謝する」

レオの返答にギリガン王は面白くないと言わんばかりに目を瞑る。そして、ゆっくりと口を再び開いた。

「……それは構わぬ、余として街中に収容できぬことは心苦し限りだが。……いや、その話よりも貴様宛にザガンから伝言が在る」

ギリガン王は控える大臣に眼を配らせ、彼は一つ咳払いをすると、

「『魔王レオ様。我は神官ナナと共にユグドラシルへ潜入致しましょう。邪竜隊の一部は戦線に参列させる故、自身の独断をお許しください』と」

伝言を正確に告げた。

「ふむ。ヤツが必要と判断したのなら構わん。それに俺もユグドラシルには用が在る」

現在鎖国しているユグドラシルに入国するためには、行商人だけに発行される特別通

行許可書が必要だ。それを発行するにも条件があり、

「貴様に特別通行許可書は発行できませんよ。ザガーン同様にな」

「それは道理だな。俺もザガーンもメンデル国の行商組合に籍を置いた訳では無い。何より行商人としての実績が無いのでは、幾らお前でも簡単に発行できんだろう……王が定めた法を王が歪めては要らぬ弊害もでしょう」

「それじゃあ、私とナナにも発行できないよね？　じゃあザガーンはどうやって……？」

リアの疑問にソフィア姫は笑みを浮かべながら応えた。

「簡単なことですよ。ザガーン殿とナナ様には我が国の信を置ける行商人を同行させたのです」

「それならば何も問題は無かろう？　故に既に魔王が必要とする許可書は別の者に預けた——ジドラよ、入って舞いれ」

ギリガン王の呼び掛けに、大扉が開きジドラがギリガン王に頭を下げた。

「お招き頂き光栄。レオ様も勇者も、アルティミア様もご無事で何より」

「ふん、時間が惜しい。……勇者リアはこれまでの経緯を報告。魔王レオ及びその配下は出立の準備が整うまで城の滞在を許可しよう——父セオドラの墓参りもしたいだろうしな」

「フツ、お言葉に甘えよう。……ああ、防衛戦力としてアルティミア及びその配下をアン

ドレイ王子に預ける。上手く使ってみせろ」

レオの言葉にアルティミアは一礼し、アンドレイ王子は頷く。

「貴殿の大切な臣下、謹んでお預かり致そう」

要件を済ませたレオはアルティミアとジドラを連れ、謁見の間から退出して行く。リアは彼らを見送り、微笑む三人に向き直った。

「改めましてご帰還の挨拶を遅ればせながら……ただいまリアは戻りました」

「まあ！ 私とリアの仲じゃないですか。堅苦しい挨拶は無しよ。それにグランガルの一件で無事を認知してますもの」

「その節は助かったわ。ソフィア姫、ありがとう」

リアは彼女に礼を告げ、これまでの細かい経緯をギリガン王に報告した。魔王城の決戦の日から今日に至るまでを。

彼女の話にギリガン王は耳を傾け深いため息を吐く。

「……リアよ、随分と苦勞したようだな。しかし何故混沌結晶の件を隠したのだ？」

「アレは非常に危険だからですよ。人の悪意を増幅させ暴走させる……もしもギリガン王の目の前に有ったら、あなた様は魔族殲滅に突き動かされるでしょう」

リアの真つ直ぐな答えにギリガン王は押し止まった。

紛れもない事実だからだ。混沌結晶がこの場に有れば、間違いなく自分はなりふり構

わず魔族殲滅に動いていた。それこそ目先のルシファーを放置してまで。

「否定はせぬよ。余は今でも、この状況下でさえも魔族殲滅、いや魔王レオ打倒を願っておる。ルシファーの次は魔王レオ……邪魔者を排除した次こそはアヤツと決着を付ける」

「今回の一件で魔族と和睦の意思は無いんですか？　魔族は今もメンデルのために戦っているのに、それに彼らはキュアリア村を救ってくれました」

「違うな。連中はメンデルのために戦ってはおらんよ。奪われた領地を取り戻すために戦ってるに過ぎん。大方キュアリアの件も敵兵力の消費を狙ったこと」

頑固なギリガン王にリアは眼を瞑った。ルシファーを止めたとこでこれでは戦争が終わらない。

ギリガン王は戦争を継続する腹積りだ。やはり簡単には戦争は止められない、止めるにも全てがもう遅過ぎた。民の心は限界を迎えているというのに、なぜそうまでして争うのか。

リアにはギリガン王の考えが何一つ理解できない。

「……父上、もう我が国には魔族と戦争を続けるだけの余裕は無いのは承知のはず、民の苦悶の声が届かないのですか？」

「そのための勇者だ。……しかし民の魔族に対する認識も変わりつつ有る。これも時の

移ろいか……リアよ、もしもそなたが魔王レオを打倒した暁には何でも願いを叶えよう」

勇者と言えど人の子。彼女が望む願いを何でも叶える。この恩賞の前に領かずにはいられないだろう。

ギリガン王の言葉にリアは空色の瞳で真っ直ぐ、王を見つめた。

「何でも？ その言葉に嘘偽りは無いわね？」

確認するように問う彼女にギリガン王は頷く。周囲の人々が見守る中しつかりと、

「異論は無い」

「お父様のお言葉はしつかりとソフィアが聴きました」

「同じくアンドレイ、父上の言葉をこの耳にしかと」

王族二人が承認した。これでギリガン王は約束を反故にできない。破れば最後、ギリガン王の王としての権威が危ぶまれることになる。

「分かりました、ルシファー打倒後。勇者として”最後の使命”を全うしてみせましょう」

リアはそれだけ告げ、謁見の間を退出する。

リアが去った後、ソフィア姫は深いため息を零す。

「お父様はいつまでレオ様に拘るつもりなのですか？」

「……もう止まれんのだよ。余が始めた戦争、多くの民を死なせたからこそ……もう止まれぬのだ」

ギリガン王は静かに眼を閉じながら、弱った声で吐き捨てた。齡を重ねるに連れて日を追うごとに弱っていく父の姿。

彼の姿に想うところは在るが、いつまでも過去の因縁に国が縛られては民が笑って暮らせない。

ソフィアは玉座から立ち上がり歩き出す。

## 7—3

フェニス城の空中庭園の墓に祈りを捧げる三人の背中にソフィア姫は静かに近寄る。改めて魔族である彼らと言葉を交わしてみたい。その衝動に突き動かされ、祖父が眠る墓へと足を運んでいた。

祈りを終えたレオ達が振り返り、

「ソフィア姫か。祖父に挨拶にか」

ちらりと祖父セオドラの墓に眼を向ける。彼と祖父は親友の間柄だったと記録に記されていた。それは事実で毎年祖父の命日が近付くと「誰かが」ルルイエの花を捧げているのだ。

祖父の広い交友関係の中で、誰にも気付かれず城に忍び込める者などそう多くは無い。今もなお健在な者はもう一人だけ。

「いえ、朝の内にお参りは済ませましたわ。……今年はルルイエの花は持参なさらなかったのですね」

ソフィア姫は自信と確信を持ってレオの紅い瞳を真っ直ぐ見つめると、彼は小さく笑った。それは人を惹きつけるような優しい笑みだった。

「気付いていたか。……まあ、ギリガンのあの口振りではヤツも気付いていた様子」

「如何でしょうね。お父様はもう三年はお墓に祈りを捧げてませんか」

「……親不孝者と言うのか？ この場合」

「そうでしょうね。お父様はお祖父様の願いを無碍にした。その意味でも親不孝者ですわ」

祖父のことは記録の中と肖像画でしか知らない。ただ、彼の遺した多くの功績が祖父は偉大な人物だったとソフィア姫は理解している。

西南の小国が災害によつて飢えた時、国が安定するまで支援を続けたこと。ユグドラシルの女王と共に各国の王を集めてバルディアス会議を開催したこと。

長年争っていた南西のガレルア王国との和平の実現。彼が一代で成してきた功績は余りにも多い。

「……そうか。それでソフィア姫は一体何用で？」

兄は戦場でよくレオと剣を交える機会が有るのだと、その度に言葉を交わし理解を深めた。

なら自分是对話で彼らに付いて理解を示さなければ、それが王族として、ソフィア個人の勤め。

「ええ、改めて魔王レオ様とお話ししたいと思ひましたね。私は城に籠つてばかりでお



兄様とは違って、中々お話しする機会に恵まれませんもの」

「拙い世間話程度なら付き合おう」

「では、あちらの椅子へ！」

レオ達はソフィア姫に、促されるまま花畑がよく見える椅子に座る。

「……随分と気さくな姫様ね。どうか護衛を連れなくて良いのかしら？」

「護衛の方々は魔族と話すだけで五月蠅いですから、置いて来ましたよ。今頃は城内を駆け回つてることでしょう」

にっこりと微笑むソフィア姫の姿に、アルティミアとジドラは彼女の護衛に同情した。

「それで話とは？」

魔王レオなら祖父セオドラをよく知っている。だが、今は彼について聞く時ではない。祖父に付いては真に平和が訪れた時、ゆっくりと聴けば良い。

「リアのことをどう思っているのでしょうか？」

男女二人で共に窮地を脱した。御伽噺や物語ではその後二人が結ばれる。よくある展開にソフィア姫は乙女心からそんな事を尋ねる。

彼女の言葉にアルティミアの耳がぴくりと動き、ジドラが興味深そうな眼差しをレオに向ける。

そんな視線の中レオは、『そんな話か』と肩を竦めた。

「以前と変わらず我が好敵手。それ以上でもそれ以外でもない」

「え〜リアはかわいいじゃないですか。性格も良いですし、ずっと行動していたら恋愛感情が芽生えますわよ。同姓の私ですら偶にリアにはドキツとしちやいますわ」

魔王レオにはリアに対して恋愛感情は芽生えていない。それとも単に彼が気付いていないのか、恋愛そのものに興味がないのか。

リアの口振りから予想するに、彼女は少なからずレオに気が有る。そうソフィア姫は乙女の直感から認識したのだが、これではお互い進展も何もないだろう。

そもそも魔王と勇者という立場がより邪魔をしている。

「先から考え込んでるようだけど、恋愛なんて時が進めば収まるところに収まるらしいわ」

「そうでしょうか？　そういうアルティミア様は如何なのですか？」

「わ、私？　私は毎日暇さえ有れば積極的に行くけど……」

そこでアルティミアはレオに熱の籠った眼差しを向け、

「……その話は後日な。だいたい恋愛話ならばジドラが居るだろ？　正直恋愛に付いて理解が及ばな俺よりは面白い話が聴けると思うが」

「まあ！　フィオナのお父様でしたわね！　種族の壁を越えた愛！　じっくりとお聞か

「せください……！」

積極的なソフィア姫の姿にジドラはたじろぐ。

なぜ人間の娘はこの手合いの話題が好きなのか。女魔族なら鼻で嗤うというのに。

空中庭園に魔族達の困惑が続く中、ソフィア姫の愉しげな声が響き渡った。

一方その頃。リアは城下町に在る酒場——「水竜の寢床」を訪れていた。

天井から吊るされたランタンが店内を照らし、水竜を象った模型が訪れる者を歓迎する。本物の竜と見間違う造形にリアは一瞬だけ驚いたが、すぐさまカウンターへと進む。

白鯨海賊団と別れてからしばらく経つ。何か天界に関する情報が有るかもしれない。そう考えちよび髭を生やしたマスターに話しかける。

「白鯨海賊団のカトレから何か情報を預かってない？」

「リアだな。ええ、早朝に情報が届いておりますとも」

マスターはこほんの一つ咳払い。

「ウテナ教会は白。大神官は一月以上前に天使の助けを乞う声を聴いたと。しかしながら、声を聴いた大神官はその翌日に何者かに磔にされ殺害された。……これがガルデイア大陸で世間を賑わせた事件です」

自分達が魔王軍と争っている間にそんな事が起きていた。もちろん遠い大陸の情報が伝わり辛いということも大きな要因だ。

「他には何か情報は無い？ カトレ達は今頃如何してるのかな」

「……天使兵がバルディアス大陸に限らず、各地の大陸を襲撃しているようですがね……その地に住う英傑達に敗戦しているようだ。一先ずは天使兵による大陸征服は有り得ないでしょうな。ああ、白鯨海賊団はエンドラス王国から正式にヘルリア公国に親書を届けるよう依頼されたようで、多忙を極めているとか」

「そう、あの親書の届け先に。……それじゃあ私からも得た情報を一つ」

リアは混沌結晶の危険性。それが大陸外に出回った可能性を考慮し、白鯨海賊団に情報を伝えた。

彼らならリヴァイアサンをも狂わせる混沌結晶の危険性を身を持って理解している。

「ふむ。混沌結晶を流している天使の行商人ですな。……それについてはあらゆる大陸から目撃情報が寄せられており、やはり混沌結晶の被害は計り知れない様子」

既にマスターは混沌結晶に付いて情報を得ていた。船乗りを相手に情報を扱うだけあり、やはり仕入れも速いとリアは感嘆の息を漏らす。

そして彼女は情報料を支払い、混沌結晶の危険性に付いて改めて情報の散布を依頼。ルシファーを止めたその後は、混沌結晶の破壊のために世界中を回る必要が有る。

(レオは……その旅に着いて来てくれるかな)

先の未来。彼と決着を付けた先の未来に、リアは想いを馳せながら城下町を巡り歩くと、

「おやまあ、また会ったねえ」

何時ぞやの占い師が街を歩くリアを見かけ声をかけた。リアは老婆に驚くも、

「あつ、ハーヴェストの。出発前に会いに行ったら居なかつたけど、王都に来てたんだ。それともあなたは幻?」

「おやおや、生い先短いとは言え……幽霊扱いは頂けないのう」

「……前に幽霊の女の子が正者と変わらなく過ごしてたからさ」

リアはミディアと似た存在なのでは無いのかと、目の前の老婆を疑った。その様子に老婆は微笑むばかりで、

「経験で疑った訳かい。……まあ良いさ、ワシはふらつと霧の様に消えて現れる占い師だからねえ」

「ふーん、今までそんな噂話は聞いたことが無かつたけど、やっぱり世の中は広いわね」  
「世の中の広さは星々が輝く空の果てと同じさね。……時にお主はユグドラシルに向かうそうじゃな」

何故それを知っている、とリアは訝しむと占い師の老婆は水晶玉を見せて笑った。

行き先を占い言い当てた。そういう事なのだろうとリアは納得し、

「そうだけど、ユグドラシルに何か有るの？」

「さあのお。じゃがなワシはユグドラシルから天界に向かわねばならん。そこでお主らに同行させて貰おうと思つての」

「……それは良いけど、凄く危険よ」

「覚悟の上じゃよ。天界にワシの占いを必要とする若者が居ると結果も出たしのお」

天使が大神官に助けを求めた事実が有る。つまり天界は人間界にとつても最悪な状況——内戦状態にあると予想できる。

そんなところに占い師を連れて行っていいものか。リアは判断に迷う。

普段なら迷わず危険だから同行を拒否する。しかし、リアの直感が老婆を連れて行かなければならないと訴えている。

リアはしばらく悩み、漸くため息と共に答えを出した。

「多分だけど断つたら一人で天界に向かうよね」

「当然さね」

「知り合つたお婆ちゃんが魔物に食べられたんじゃ、私も目覚めが悪いわ。……だから天界までよろしくね」

「おお、お主ならきつとそう言うと思つておつたよ」

そういえばとリアは占い師に改めて尋ねた。

「ところであなたの名前は——」

「ワシかい？　ワシはフランという」

「それじゃあフランお婆ちゃん、改めてよろしく！」

その後リアは、占い師フランの同行をレオ達に伝え無事に同行許可を取り付けるのだった。

## 7—4

薄暗い洞窟の中、マキアは深いため息を吐く。

自分の記憶が正しければ、ロランに奇襲を受け捕縛された。

マキアはメモ用紙にペンを走らせるロランに、

「見えてるか？」

「問題ない。我々魔族は夜目が効く」

眼を合わせず答える彼に、マキアは胸が締め付けられる。彼と出会ったのは十年も前だ。

王都フェニスのスラム街で、行き場を失った自分を拾い生きる術を教えた恩師であり

——最愛の人。

「こつち見て話せよ。人の眼を見て話せて教えたのはアンタだろ」

「……待て、すぐに用は終わる。それまで大人しくしている」

子供をあやす様な優しい声色で語るロランに、マキアは彼の背中を鋭く蹴り付けた。

だが、ロランはびくともせず笑い声が薄暗い洞窟内に反響する。

「手癖が悪かったが、足癖も悪くなったのか」



「アンタがあたしを子供扱いするからだ！」

「……子供扱いか。そんなつもりは無かった、が。昔の癖とは抜けないものだな」

ロランはペンを動かす手を止め、メモ用紙を細かく折り畳んだ。そしてその紙に転移魔法を施し、何処かに飛ばす。

何度目の作業だろうか。彼は自分を捕らえてからも部下が居ない間にこうしてメモ用紙を何処かに飛ばしている。今回は鍵を添えてに成るが、ロランが自前で用意したものでしょうか。

「一体誰宛なんだい？ とういか、そろそろアンタの目的を教えてくださいよ。あたしを捕らえて盗みまで働かせてさ」

彼は捕縛したマキアにある物を盗み出す様に依頼した。事が終わったらロランの身を好きにしたいと言う破格の条件付きで。

それに対してマキアは迷わなかった。彼との思い出が、『ロランは主君を簡単に裏切る様な男じゃない』そう語るからだ。

確かに奇襲され仲間達と逸れたが、それ以上に魔族を理解する機会に恵まれたのも事実。そんな事を考えているとロランはゆっくりと口を開いた。

「目的、か。全て一貫している、アレも必要な……いや、我々にとっては意味をなさない物だが、盗み出された者にとっては非常に困る代物。お前は傲慢な者の面が焦り、怒り

に変わるさまを見てみたいとは思わないか？」

「なんだいそれ。超見たいに決まってるじゃん！ ……それとこれとは別にさ、いい加減あたしには話してくれても良いじゃん」

「そうだな。お前なら話せるな。 ……天使などに魔王が務まる、あの傲慢な考えが気に入らん。第一レオ様が築き上げた全てを掠め盗る真似などもつての他だ！」

結局のところロランは魔王レオを裏切つてなどいかなかった。全てはそう見せかけた彼の策略。

ロランは語る。誰かが混沌結晶に細工をしなければレオとリアが死ぬ。それを阻止するためには誰かが裏切り者を演じる必要があった。

もちろんロランはこの件を誰かに話した訳では無い。軍師である自身の立場、過去に魔王の座を巡り戦乱に明け暮れた事実が、今も魔王の座を狙っている事に真実味を与えている。

結果、サタナキアを始めとした大天使は疑つてはいるもののロランを仲間に取り込んだ。だ。

そして心を自己暗示によって偽り、レオの裏切り者ロランを演じ続けた。

「魔法を使わない思考技術とは、時に潜入にはもつてこいという訳だ」

「はあ、それってさ。 ……自分を見失わないのかい？」

「フツ、心配は無用だ。お前が側に居れば俺はお前の敵対者ロラン。つまり魔王レオの配下であるロランに戻る」

ロランの真つ直ぐな言葉に、マキアはまるで告白みたいだ、と頬に熱が灯る。

「そ、そうかい。あたしが必要だったのか、なら良いや。けどあたしはリアが勇者である以上……」

「分かっている。お前はお前の居場所を大切にしろ。ようやく掴んだ安寧を手放すな。……だが、事が終わるまでは一緒に居てもらおう」

「そ、その言い方はズルい」

顔を赤く染めるマキアと薄暗い中で、愛しい者を見詰める眼差しを向けるロランの姿がそこにはあった。

## 7—5

行商人に扮した翼竜車がフェルドラン山脈の国境に近付く。

メンデル領とユグドラシル領を隔てフェル関所に降り立つ。

様々な商隊や行商人が並ぶ最後尾にジドラは翼竜車を付け、空から降り立った魔族の行商人ジドラに商人達はどよめき声を上げた。

「空飛ぶ行商人ジドラ……ってか」

馬車からリアが顔を出すと更に行商人のどよめきは強まり、困惑へと変わる。

何故勇者リアが魔族と共に居るんだ、と。遠く離れた地方からやって来た商人、隣国から遙々ここまで来た商人にとってリアと魔族が共に居る光景は、異様に見えることだろう。

リアはそう理解しながら行商人達に微笑んだ。

「今は行商人見習いのリアよ」

行商人にとって情報は最大の武器だ。特に大陸を取り巻く情勢は商人の売買に大きな影響を与える。今はどの国も魔王ルシファアの対応に覆われ、武器と鉄が高値で売れると誰もが睨んでいる。

だが、勇者リアが行商人を装いユグドラシルへ入国しようとしている。つまりこの国には何かがある。行商人は頭の中でユグドラシルの長期滞在は危険だと判断し、各々行商ルートを変更していく。

行商人があれこれ試行錯誤する中、フルフェイス仮面を装着したレオは、行商人の商品に目を向ける。

様々な武器種に防具の数々。中にはガルディアス大陸から仕入れたと思われる銃器の数々。更に大所帯の行商人は大砲まで扱っている始末。

「連中は武器商人か？」

「いやあ、顔馴染みも居る。……上質な毛皮を扱っていた商人なのですがね、どうやら武器が売れどきと考え変更したのでしよう」

「ふむ、ユグドラシルの通貨はユグド硬貨だったな。確かスピリア金貨はユグド銅貨二枚程度の価値しかない」と

燻して使い回したスピリア硬貨の下落。それに対してユグド硬貨は質も信頼度もバルディアス大陸で一、二を争うほど。

「うーん、ユグドラシルでメンデル国の商品を買っても利益には繋がらないんじゃない？」

「いやあ、メンデル国からユグドラシルへ商売に向かう商人は、国から信用された保証付

きだ。商人はユグドラシルで売るだけでも利益に繋がるものさ。顔馴染み、新たな仕入れルート、更にユグドラシル国内の特産物なんかもな」

ジドラの言葉にリアは成る程と理解する。

ユグド硬貨はメンデル国の何倍も高い価値が有るが、ユグドラシルで仕入れた商品自体にも相当な価値が出る。そこまで理解したが、細部の流れは理解できず、

「難しいのね」

「そりゃな。行商人をはじめて八十年に成るが、妻子を成しなうだけで……」

そこまで言いかけたジドラは突如口を閉じ、僅かなポケットの膨らみとずっしりとした重みに息を呑む。

彼の様子にリアは小首を傾げると、レオは仮面越しで瞳を閉じた。

「ふむ。俺達は何も気付かなかった、でいいな」

レオは静かに水晶玉を見詰めるフランに視線を送った。

「ワシは水晶玉に気を取られて何も気付かなかったよ。例え誰かが転移魔法で荷物を飛ばしたとしても、そりゃあ不慮の事故じゃって」

フランの言葉にジドラは苦笑を浮かべ、積荷のチェックに回る門兵に視線を送る。

いよいよこちらの順番が周り、レオは馬車の奥に引っ込み、リアは顔が見えない様に疼くまる。

「む？ 魔族の行商人か……お引き取り願おうか。我々は魔族の行商人は通さない、そもそも特別許可証を持っているとは思えんしな。それに随分と連れが居るようだが、魔族が居るだけで不許可だ」

横暴な態度を見せる門兵にジドラは強気な笑みを浮かべ、懐から特別許可証を突き付けた。

ギリガン王の署名入りの特別許可署に門番は、目を見開く。

「こ、これはギリガン王の直筆……！ い、いや、まだだ！ まだ積荷のチエックが済んでおらん！」

「へいへい、こつちも急ぎなんだ。なるべく早く頼むぜ」

門兵は荷車の藁を捲る。そこに並べられたのは酒瓶の数々だ。葡萄酒、林檎酒、蜂蜜酒に白ワインと赤ワインが取り揃えられた品数に門兵は息を呑む。

扱う商品に何も問題は無い。麻薬の類も違法品の類も見当たらない。幻覚魔法も仕掛けられた痕跡も無い、門兵は唇を噛み締めながら。

「通つてよし」

小さな声を発した。それに対してジドラは悪い笑みを浮かべ、

「なんだって？ 聴こえねえなあ！」

「通つて良いと言ったんだ！」

「へっ！　ご苦労さん！」

ジドラは翼竜車を走らせフェル関所へと入る。

そこでレオ達は一晩宿泊し、翌日に国境を超え樹海国家ユグドラシルに入国することに――



樹海が広がる広大な大地。その中心に天まで聳える大樹ユグドラシルがユグドの地をその影で覆う。

樹海国家ユグドラシルとは、大樹ユグドラシルの幹に建造された都市国家だ。

黒髪に鋭い目付きを宿し、無表情に大地を見詰める大柄の男——ザガンは息を吐く。

「鍵は何処へ……これではいつまでも天界に入れぬではないか」

天界の門を開く鍵がユグドラシルから消えた。それを知ったのはザガンとナナが邪竜隊と共に入国してから三日後のできごと。

二人は早速鍵の行方についてユグナ女王に尋ねたが、鍵の所在に付いて何も知らない様子。

そもそも鍵の管理は王家の役目なのだそうだが、ある日忽然と鍵が目の前から消えたという。

誰かが転移魔法で鍵を盗み出した。そう考えていたユグナ女王はザガンとナナの素性を知りながら、調査に協力した。

だが、行商人見習いに扮し調査を行ったが、結局の所今日に至るまで鍵の所在は掴めず、情報収集に当たらせた部下からも有益な情報も無く、悪戯に時間ばかりが進んで行く。

「本当に鍵は何処に行つたんでしようか」

悩むザガーンを隣から話し掛けるナナに、彼は首を横に振る。

「怪しい連中は隈なく調べたが、鍵の所在を知らぬのではな。……調査も一からやり直した」

「……そうですね。また見習い行商人ザガーンとその妻ナナですね」

行商人リドの下で修行に励むザガーンとその妻。この国で活動するに当たって用意した偽りの身分だ。

ただ、偽りの行商人見習いと夫婦生活も存外に悪くな

いと感じる自分が居る。

「偽りの関係はいずれ本物になり得るのか？」

心から漏れ出た言葉に、ザガーンは僅かに眉を寄せた。自分は一体なにを言っているんだ、と疑問が遅れてやってくる。

突拍子も無い言葉に、ナナは風で靡く髪を抑えながら微笑んだ。

「お互いが心から望めば本物になり得ますよ。例え立場も種族も異なるとしてもです」

「そうか。では、リドの下に戻り商売の続きと行こう」

ザガンとナナは商業区へと歩き出す。

「安いよおー！ チルド産の野菜にチルド牛の燻製肉が今ならたったのユグド銅貨二枚だ！」

赤髪の青年——リドの威勢の良い声に惹かれたユグドラシル人の客人が露店に脚を運ぶ。

そして一人が燻製肉を凝視すると、リドは攻勢に出る。

「試しに燻製肉を試食してみても如何でしょう？」

リドの言葉にナナが愛想笑いを浮かべ、一口サイズのチルド牛の燻製肉が盛られた取皿を差し出す。

「それじゃあ試しに」

香料の効いた匂いに食欲を掻き立てられた客人は、燻製肉をひとつまみ、そのまま口に放り込みゆつくりと噛み締める。

「……！ これは中々。三日分！ 三日分くれ！ あとそつちの水々しいレタスも追加で！」

羽振りの良い客人にリドは微笑む。

「毎度あり！」

注文から素早くザガンが三日分の燻製肉とレタスを別々に包み、紙袋に入れナナに手渡す様に促す。

ザガンの風貌では客人を威圧させ、怯えさせてしまう。だが、逆にナナの様な可憐な少女は客引きにも持って来いで、

「お待たせしました！」

「お、おう！……惜しいな。ユグドラシルを放れる自分が惜しい。君の様な可愛い娘と離れなきやならないなんて」

「あつ、すみません。わたしは夫が居るので……」

口説く客人から裏方で商品を補充するザガンに、ナナが目を配る。するとたちまち口説いた客人の表情が青ざめ、

「す、すいやせんしたあぁー!!」

購入した商品をしつかりと忘れずに走り去る彼の後姿にナナはポツリと。

「怖く無いですよ。本当に優しい方です」

誰にも聴こえない言葉を漏らした。

リドの手伝いを終え、夕暮れが大樹ユグドラシルを照らす頃。

リドは酒場で上機嫌に酒を呷る。

「いやあく旦那とナナ様のお陰で商売繁盛ツスよ！」

「ふふ、上手くいって何よりです。でもわたしと彼はこれと言って何もしてませんけどね」

特別な事は何もしていない。リドに教えられた接客術を実行し、狼藉を働く者にザガンが応対する。たったそれだけの事だ。

ナナがザガンに視線を移すと彼は、静かにパンを齧る。行商人の日々の食事は後先考えなければならぬ。

今の商が上手く行くとは限らないからだ。商品の価値の下落、通貨の暴落が頻繁に起こる戦時中では特にだ。

「足りませう?」

「……後で樹海の魔物を狩る」

ナナは思う。リアも結構食べる方だったが、ザガンはその倍以上は食べる。パン三つとシチューでは彼の腹を満たす事は叶わない。

「旦那、少しは加減してくださいよ? 旦那のお陰でユグドラシルの魔物は大人しく成りましたけどね、その分兵の仕事が無くなると女王様もぼやいてましたし」

「……善処はしよう。しかし今日で仕入れた商品は全て捌いたのではないか?」

商品の在庫に付いて尋ねるザガーにリドは名残り惜しように、

「ここで売る商品が無くなつた以上、今度はメンデルの顧客に商品を仕入れ売り付けなければなりません。王都まで二週間、仕入れの日取りを考えても……旦那方とは今日で御別れでしょうね」

「そうか」

別れを惜しむリドに対してやはり無表情のザガーに、彼は肩で息を吐く。

滞在中にザガーの表情の変化が見られなかった。それは仕方ないかもしれないが、もう少し別れを惜しんでもいいじゃないか、とリドは不満気にナナに視線を送る。

「彼は充分惜しんでますよ。ほら、僅かに肩が下がつてるでしょう?」

言われてリドは注意深くザガーの表情を凝視すると、確かにナナの言う通り彼の眉が下がっている。

「旦那あゝ!!」

「お前も達者でな」

ザガーの言葉にリドは酒を呷りながら咽び泣く。彼の様子にナナは微笑み、商人リドと最後の夕食を共に終えるのだった。

## 7—7

ザガンとナナが商人リドと別れた翌日の朝。レオ達はユグドラシルに到着していた。

天まで聳える大樹を見上げ、その幹に造られた街にリアは感嘆の息を漏らす。

「ここがユグドラシル！ 樹海からでも見えてたけど近くで見ると圧巻ね！」

「ふむ、火属性魔法で攻め落とせるな」

「いやいや、樹海の特産物は貴重ですぜ。燃やすよりも生産地に変えた方が効率が……」

「こらそこ！ 侵攻を考えない！」

侵攻するつもりが無いのに敢えてその話題を出す辺り、魔族とは意地悪な種族だ。

「魔界ジョークだ」

「そのジョークは人間界で流行らないわよ」

ため息混じりに返すと、レオが心なしか沈んでいる様に見えるのはきつと気のせいかもしれない。

「二人は仲が良いのう。敵同士とは思えない程に」

「そうか？ 傭兵は敵同士であろうとも酒場で出会えば酒を酌み交わすと聴くが」

メンデル国の傭兵がそれに当たる。以前リアは傭兵同士の衝突を目の当たりにした事があったが、それも彼らの職業柄。勇者として傭兵の戦闘を止める事はしない、一般人を巻き込むならその限りでは無いが。

そうした衝突を目撃したその日の酒場で、彼らは互いに肩を並べ酒を酌み交わしている光景に、依頼の範囲に及ばない無駄な戦闘はしない。彼らの持論にリアは納得したことが有った。

「昨日の敵は今日の友って言葉が有るでしょ？ 私とレオは今は共通の敵が居るから共闘してるだけ、その過程で仲が良いのはそれはそれで良いことよ」

「あまり馴れ合う気は無いのだがな」

「そう言って私が困っていると助け舟を出す優しい魔王さんよ、彼は」

リアの真つ直ぐな言葉にレオは押し黙り、ジドラが堪え切れず吐き出す。

「これは一本取られましたなレオ様」

「……そうだな」

そんな当たり障りも無い会話を繰り返していると、翼竜車が幹の通路を登り始める。幹の通路は広く太くちよつとの事では折れない。はじめて大樹に都市が在ると聞いた時は耳を疑ったが、これだけ丈夫で地上の魔物の侵入を阻むなら防衛面では心配は無



いのかもしれない。

そして所々大樹から漏れる樹液の甘い匂いが、道行く人々の心に癒しを与える。

「良い香りね。下を向けば広大な樹海、大樹から流れる滝。あれつて貯まった雨水なのかな？」

初めの国外に興味が尽きないリアにレオは、

「あの滝はユグドラシルの根が吸い上げた地中の水だそうだ。水は大樹の内部を通し、頂上から噴水の如き湧き上がり地上に流れる。そうやって大樹は循環していると聞いたな」

「そういえばレオはこの国ははじめてじゃないんだよね？ 前ははどうやって入国したのかしら？」

「ユグドラシルが鎖国する前にな。今では面倒な手続きが必要だったが、当事は一国の君主として入国したからな」

レオが最後にこの国を訪れたのが戦乱前のこと。その時に彼は天界へ向かい、ルシファーを通して戦乱介入に釘を刺したのだという。

その話にフランが深い息を吐く。

「当時の天界は武力介入の機運が高まっていたそうじゃよ。もつとも女神ウテナがそれを許す筈が無い——」

「ふむ。俺が取次いだ時には女神ウテナは不在だったが、思えば既にルシファーは企んでいたのだろうな」

「人間殲滅を目的とした計画らしいですがね。人間界に棲まう人間を滅ぼして何をするつもりなんだか」

物騒な計画に額から冷や汗が流れる。混沌結晶、天竜アルピオンの件も有ることからルシファーの計画には真実味がある。

「殲滅して人間界を綺麗にしたら残された大地を利用するとか？ 例えば農地拡大とか」

実際にレオは制圧した土地を広大な農地に変えた事も有った。今ではスピカ農地と呼ばれる魔族領屈指の農業地帯だ。

「魔界の土地柄、仕方なく制圧地域一帯を農地に変える必要が有ったが。天界は何か不足しているという事は無かったな。寧ろ恵まれ過ぎて争う必要も無い程にだ」

「ワシも聴いた話だけだね、生産力は三界一を誇るそうじゃよ？ 土地は人間界の方が広いけどねえ」

「魔界は生産力も土地もどの世界よりも劣るが、まあその分民は武力重視というわけだ」  
小さくポツリとあまり嬉しく無いが、とレオの呟きにリアは苦笑を浮かべた。

（土地に恵まれても人は争うのよね）

レオ達からすれば実に人間とは贅沢な種族だと、嫌でも改めさせれる。そのうえ向上心や上昇志向が高いときた。

「……レオが人間に愛想を尽かしたら滅びちゃうわね」

「その時はお前が阻止するのでは無いのか？ 黙って滅ばされる達でもないだろ」

「うん、最初は抵抗を考えてたけど……優しい魔王が愛想を尽かすって時つてき、私達人間側の問題でしょ？ だったら失望させない様に頑張らなきゃなって、でもそれでもダメだったら私は魔王に殺されても良いわ」

その時は、レオと戦い死ぬなら勇者としても悔いは無い。誰かが聞けば身勝手だと糾弾するだろう。

「でもその時は、私の命一つで思い止まって欲しいなあ」

「……良いだろう。もっともお前が命を賭けるほど価値が有るかは知らんがな」

仮面越しから放たれたぐぐもった声に威圧感を感じる。彼は本気だ、そうこれは勇者と魔王の約束。

「約束よ」

翼竜車が揺れ動く中、リアはレオに向けて微笑んだ。

この場に居る者しか知らない二人の約束にレオは諾く。

彼は魔王だが、それ以上に信頼信用できる相手だ。レオならきつと約束を破らない絶

対的な自信がリアには有る。だから約束を結んだ、これで人類が最悪な選択をしようとも自分の命一つで無関係な人々は延命できる。

決まって誰かが選択した影響を知らずに受けるのが、何も知らない一般人だ。人は無知は罪と言うが、例えば国がひた隠しに内密に悪事を進めていけば一般人が気がつく機会というのは限られている。

そんな理不尽な流れから護るには勇者の命をレオに差し出した方が確実な方法だ。

だが、今も続く戦争だけは自分の命一つでは終わらない。自分が死ねば次の勇者が選出されるだろう。

行商人の馬車とすれ違う中、リアはそんな事を考えては大樹を見上げた。

ユグドラシルの中間に位置する商業区。そこでレオ達は二手に別れた。ジドラとフランが商業組合に申請書を提出しに、その間レオとリアの二人は軽い街の観光に駆り出す。

風に大樹の葉が騒めく中、人混みに紛れ聴こえる声に耳を傾ける。

『あの二人って夫婦らしいけどよ。なんつうか美少女と野獣?』

『熊と美少女だろ、いやどっちでも良いけどよ。あの娘の方は神官だろ? それは何でまた行商人の真似事なんか』

『神官って言えばルシファーが人類に宣戦布告した影響で、色々と大変らしいな。なんでもっと早く察知できなかつたのかとか、グルなんじゃないか、とかさ』

レオとリアは、熊と美少女の夫婦に首を傾げる。

熊は兎も角、神官の娘という言葉にナナの顔が浮かぶ。

「まさか、いやいや……そんな、ナナが」

「確かザガンと行動しているらしいな。……む? 熊と言えば、アイツは熊の様な体軀——」

言葉を失うとはまさにこの事。自分の配下がいつの間にか敵でもある神官ナナと結婚していた。これには幾ら魔王レオであろうとも驚きを隠せず、仮面の下で空いた口が塞がらない。

噂が人違いかどうか、確かめずにはいられなかったのかりアは近場の男性に声をかけた。

「あ、あの……その噂の美少女って長い茶髪でスタイルも良い娘？」

「ああ、君と違って胸が大きい非常に美しい娘だったよ」

ケラケラと笑う男性の言葉にリアは胸元を隠しながら、

「えっと、その娘って今どこに居るか知ってるかしら」

居場所を尋ねた。すると男性に心当たりが有ったのか、彼は迷いも無く指先を向ける。

「それなら、あそここの角に小さな露店が見えるだろ？ その娘ならそこに居るはずだ」

露店が並ぶ角に、一際小さな露店が一つ。そこにザガンとナナの魔力を感じる事から確かに彼らはそこに居る。

レオは随分速い合流だ、と息が漏れる。同時に部下の結婚祝いの一つでも見繕わなければ。この場合魔王として魔界のベヒモスの肉でも贈りたいところだが、生憎と魔界には帰れない状況。

「兎に角結婚祝いが先か」

「そ、そ、そうね！ 大切な仲間の幸せだもの、ちゃんとお祝いしないと……！」

レオとリアは近場の露店から、肉と干し魚に加えて酒を数点取り急ぎ購入し、言われた角の露店に歩き出す。

露店の前で掃除に勤しむナナの姿がそこには有った。リアは感極まりながら彼女に、

「ナナ！ やつと会えた！」

「えっ!? り、リアさん……！ ど、どうしてこちらに……！」

抱き着くりアをナナは驚きながらも抱き留める。弾む胸にリアは顔を埋め、

「ああ、この安心感を与える母性……！ 本物のナナだあ」

「あ、あはは……安心してくださいさるなら何よりです」

これでマキア以外の仲間とは再会できた。だが、その前にレオは彼女に告げなければならぬ。

「まさかお前とザガンが結婚していたとは……！ うむ、これは選別というヤツだ」

差し出される食料にナナは戸惑いながらも受け取り、漸く仮面の男の正体に気がつく。あの物言いとザガンを知っている。何よりもリアと行動している、かつ仮面で素顔を隠す必要があるのは魔王レオぐらいだ。

「ま、魔王レオ……えっ？ 待つてください！ 誰と誰が結婚して……えっ？ ”まだ

”結婚してませんよ……!”

「えっ? さつき噂で夫婦だつて聴いたけど」

レオは露店の奥から顔を出したザガンに視線を向け、

「その仮面。……良いセンスですなレオ様」

「うむ。やはり魔族はこの良さが分かるか、いや、それよりもお前達は結婚してなかったのか?」

「それは……偽りの夫婦。大変心苦しくは有つたが、訳有りの商人見習いを演じるには必要な事でしたので」

ザガーンの言葉に成る程と納得がいく。だが、例え偽りだとしても彼は生真面目だ。ナナは”まだ”と言つた、つまり彼女にはそれなりにザガンに気が有るということ。

あの戦闘からもう二ヶ月が経過しようとしている。その間にザガンとナナの間に愛が芽生えたとしても不思議ではないのかもしれない。

レオは未だ理解が及ばない愛に、苦心しながらもザガンとナナに理解を示す。

「まあ、俺からは言うことは無いが……しかし、他の邪魔族はどうした?」

「彼らなら情報収集へ。天界の門を開く鍵が何者かに盗み出され、今は鍵捜しに追われている」

ユグドラシル王家が管理していた鍵が何者かに盗み出された。それは紛れも無く天



使の仕業だろうとレオは推測する。

鍵を盗み出してまで誰かを天界に入れさせないため。しかし例の鍵は、  
「……ザガンとナナよ。鍵捜しの件だがな——」

これまで鍵捜しに奔走していた彼らに事実を伝えるのは若干憚れる。レオが言い淀んだその時だった。

「あれ？ ザガン將軍に神官ナナ……鍵なら此処に有るんで早速天界へ……なんすかい？ その眼は……？」

苦勞して鍵の行方を捜していたと言うのに、ジドラがポケットから天界の鍵を取り出しながらレオに語り掛ける姿に、ナナは膝から崩れ落ちた。

「わ、わたし達の苦勞は一体……！」

「あ、あのね！ 私もジドラが鍵を持つてることなんて知らなかったの。というか何で鍵を？」

「あつ、ああ……そりゃあ。アレだ、間抜けな天使が誤って他人のポケットに転移させちゃったんだろう」

「ほっほっ、何やら苦勞したようだねえ」

ザガンは深いため息を吐き肩を竦めた。

（鍵はヤツから？）

(そう捉えて間違いが、ヤツが動き出したとなると危ういかもしれんな)

アイツに関しては何も心配は要らないが、と小さく呟くレオにザガンは頷く。

「では、部下を収集しユグナ女王にも報告を」

「ああ、ジドラは待機だ。向こうの門が破壊されんとも限らんからな」

「ええ、承知しました」

レオは崩れ落ちたままのナナに視線を向け、

「リアよ、あとは任せた」

「う、うん。それじゃあ近くの宿酒場で部屋を取っておくから」

「ワシも門が開くまでは、休ませて貰おうかねえ」

ナナを連れ歩くリアとフランの背中を見送り、レオとザガンは宮殿へと歩き出す。

レオとザガンは合流した邪竜隊と共にユグドラシル宮殿へとやって来ていた。

レオにとっては約五十年振りに訪れることになる。

兵士に玉座の間に通されたレオは仮面を外す。魔王レオの姿に驚きどよめく家臣団。正体に驚いたのか、それとも消し忘れた特殊メイクに驚いたのか、彼らの様子にレオは小さく笑う。

そして紅い瞳に翡翠色の髪に、まだ幼さを残した少女に視線を向け——ユグナ女王、彼女の祖母の面影を幻視した。

(セオドラもユリフィリアも居ない今、あの時円卓を囲った者はもう俺だけか)

友の姿が浮かぶ。立場も種族も関係ない円卓を集った茶会の光景がレオに蘇る。

今は感傷に浸っている場合ではない。広々とした空間、外の景色が良く見える解放的な玉座の間にレオとザガンは、ユグナ女王に敬愛の礼を示す。

そんなレオに対してユグナ女王は、

「あ、ソナタが魔王レオか。ザガンと母から良く話は聴いているよ。……ザガンも同行しているところを見るに鍵が見つかったのかな？」

年相応とは不釣り合いな威厳を感じるさせる口調にレオは笑みを浮かべる。幼さと威厳が同居する奇妙な感覚を覚えるが、他国の王はみな曲者ばかり。彼女なりに舐められまいと振る舞っているのだろう。

「ああ、鍵の件についてだが、俺の配下がメンデル領内で回収したそうさ」

「メンデル領内……やはり天使が持ち出したと見て間違いのだな」

ユグナ女王の推論にレオとザガンは頷く。天使はどうあっても天界に来られると不都合が有るらしい。

門の破壊は容易では無い。ならば鍵を何処かに隠してしまえば、人間界からは天界に入ることは不可能。

「連中はどうも随分前から人間界侵攻を計画していたようだ。ガルバディア大陸では大神官殺しが世間を騒がせていると聴く。同時に聖都でも似た事件が勃発したそうさ」

「うむ。その件なら此方も存じているぞ。鎖国しているとは言え、商人の出入りは自由だからな。……しかし天使が大々的に侵攻してとなると、ウテナ教会の信仰は下がる一方——」

「メンデル国には教会の数が少ない。そのためウテナ教会の抱える問題に気付くことが遅れた訳だが、この国の教会はどうなのさ？」

レオは宮殿の近くに在る大聖堂を頭に浮かべながらも問うと、ユグナ女王は深いため

息を吐く。

「天使の『助けて』という声を聴いた者は、その日の内に死亡。ああ、殺された訳では無いぞ、アヤツは老年故に老衰によるもの。……まあ、その件もあつてな国内ではウテナ教会の立場が弱まりつつある」

「人間にとつては守つてくれる者が信仰の対象となるが、女神ウテナが解決すべき問題が放置されている以上は信仰低下は免れんさ。……だが、これもルシファアの策の一つと睨んでいる」

人間界に宣戦布告するために、混沌という強大な魔力を得た。そして混沌結晶を作り出し各地に放ち、実験と並行して混乱を招く。

更に同時に進行していたであろう天界の内戦。ウテナ派とルシファア派の争い。

女神は人々の信仰が無くとも何も影響は無いが、謂わば神仏の信仰とは人と神の信頼関係を示すもの。それを失う、それは人間が神を信じなくなつた、信用できないと判断した時だ。

いま戦争を仕掛けているのは天使だ。何も事情を知らず、家族を奪われた者は、『天使に家族を！ 連中に報復を！』と恨みが蔓延し、人類と天使の戦争へと繋がるだろう。（リアはこの件を危惧していたが、天界の状況次第だな）

女神ウテナが動けば人はすぐにまた神を信じる。その方が自分達の身を守る安全策

にも繋がるからだ。

レオは自身の推測をユグナ女王に伝え、彼女は顎に指を添え考え込む。

「ルシファーは既に各地の大陸にも天使兵を差し向けたと聴くが、各地の猛者達によって最悪の事態は免れたそうだ。……ただ、このまま状況が続けば魔族も人間も巻き込んだ大きな戦乱に繋がる。それを阻止するためにはソナタらを天界に通した方が最善のようだ」

「まあ、俺達が行って出来ることはルシファー勢力の一掃ぐらいだ。いや、待てアイツは天竜アルビオンの解放を目論んでいるそうだが、アルビオンに付いて何か知っているか？」

「……天竜アルビオン。女神が封印した災害級の魔物としか。そもそも何故倒さなかったのかな」

簡単な話だ。倒せないから封印した。女神は神だ、そんな超常現象のような存在が倒せない生物などいない。

だが、アルビオンは封印に留まった。レオは嫌な予感を抱きながらザガンに視線を向ける。

「そもそも竜とは生物の頂点に君臨する存在。中には神に匹敵する竜が存在してもおかしくは無いのでは？ 人間である勇者リアがレオ様に匹敵するように」

「うむ、それも道理か」

しばしレオとザガンはユグナ女王と今後について話し合う。ルシファー勢力打倒後の情勢の変化をはじめとした取り組むべき課題に付いてを。

——一方その頃——

「それでザガンと夫婦生活はどうだったの？」

「え、えつと……悪くは無いですよ。寧ろお料理の時なんかも色々お手伝って頂きまして、重い物を持つと何も言わずに持つてくれるんですよ」

無表情で何を考えているのかイマイチ判らないザガンを、ナナは紳士的な男性だと評した。

「それにですね。竜化した彼の背中中は温かくて、不思議と安心感を感じてます」

「そうなんだ。竜に乗った事は無いけど、邪竜族って争いを好まない種族ってレオから聞いたことがあったわ。だからなんじゃない？ 心が優しいからナナも惹かれたのは」

リアの言葉にナナの頬が赤く染まる。彼女はもうザガンに惚れている。それは仲間としても心から祝福べきだ。ただ、問題が在る。

戦争が終わらなければ結婚もできない。最悪亡命も選択しなければならない。その事にリアとナナがため息を吐くと、フランが水晶玉を光らせ。

「安心せい。お主らの恋は成就する。そう占いの結果が出たからのう」

「お主ら？ 待って、まだ私は誰かを好きになつて無いわよ」

「ホツホツ、リアにとつては先の話じゃよ」

そう言つて笑うフランに釈然としないながらも、ナナと恋話に勤しむ。

その翌日、レオとリアはザガン率いる邪竜部隊とナナ、そして占い師フランと共に天界の門を通り抜ける。

そこで彼らが眼にしたのは――



## 八章 天界争乱

## 8—1

ユグドラシルの天界の門から天界に入り込んだリアとナナは、天界の光景に息を呑んだ。

人間界よりも明らかに近い空、爛々と輝く太陽と昼間でも見える星々の輝き。そして虹の橋が至るところに雲を繋いでいる。

更に空から辺りに視線を移すと倒壊した白い構造物が建ち並ぶ街並み。至るところに上がる硝煙と魔法、激しくぶつかり合う金属音。

「……予想通り内戦中か」

「こんな綺麗で神秘的な世界でも争い。世界を巻き込んでルシファーは一体何がしたいの」

美しさを誇る天界までもが戦火に吞まれている。避ける事ができたはずの戦乱に。

疑問を口にする中、武器を構え周囲に警戒を向ける邪竜族の面々に、ナナが念の為に防護魔法を施す。

「ユグナ女王様の話ではルシファーは、天界の門を通らず自力で人間界に転移した。か

つてレオ様がしたように」

「ああ、百年前には人間界には魔界の門が無かったからな。……まあ、ルシファーが何をしたのかは奥へ進めばいずれ分かるだろう」

魔界と人間界を繋ぐ門。そして自分の背後には天界と人間界を繋ぐ純白の門が存在感を主張している。

そんな中フランがじつと最奥に在る神殿を見つめている様子にリアは首を傾げる。

「どうしたの？ ああ、あの神殿に何か在るのかしら」

「ワシが行くべき場所じゃよ。……如何やらお出ましの様じゃ」

金属音が伴う複数の足音に、リア達は武器を構える。いまの自分達は内戦の折に現れた第三勢力だ。誰が敵なので味方なのか、それとも味方など居ないのか。今は警戒すべき時だ。

天使の軍勢が様々な武器を携え行進する中、リアとナナは先頭を率いる人物に眼を向ける。

白銀髪に小柄な天使の少女が神々しい旗を構えながら、軍勢を率いる様子に彼女はきつと部隊を任された指揮官なのだ、そう直感的に判断。

「全軍警戒を維持したまま止まるッス！ ……あなた方はルシファー派ッスか……？」  
旗を地面に突き立て問い掛ける彼女の様子に、リアが一步前に出る。

「違うわ。私達はルシファーに付いて調べに来たのよ。そのついでにルシファーの企みを阻止するためでも有るけど」

「……！　じゃあ味方ツスね！」

あつさりと信じて喜びを顔に飛び跳ねる彼女の様子に、近くの天使が小言を漏らす。

「セリナ隊長、もう少し疑う事を信じろ。……減点二、給金の削減決定」

「あ、あんまりツス！　これ以上給料を減らされると人間界旅行が出来なくなりますよ！？」

「知らんよ。……失礼だが、ウチのポンコツ隊長に代わり、ヴァルナが貴殿らに問う。人の娘らと魔族……それも魔王と邪竜族が何故共に行動を？　それにそつちらのご老人は……」

部隊にしては奇妙な関係だ。隊長が部下に苦言を申され、それに悲鳴を上げる辺り人間界の軍隊形式とは異なる様だ。

そんな事を考えながらリアはレオとザガン達に眼を向ける。

彼らは堂々とした面構えで、

「勇者リアと魔王が共闘……長年沈黙し、戦乱の行方を見守っていた天使からすれば異な光景だろう。だが、争いの中で共通の敵が現れ、あまつさえ俺と彼女の魔力を奪い、人間界に更なる混乱を齎した共通の敵を討つために共闘している。……疑うのならばそ

の眼で心を見通せば良い」

「同じく我々は魔王レオ様の忠順なる部下。主君がかつて敵であった勇者と共闘を選ぶなら我々も従うまで。そのためならどんな障害も排除しよう」

レオとザガーンの言葉に、セリナはヴァルナを見上げた。

「ほら！　みんな本心から語ってるツスよ！」

レオ達をじつと見つめたヴァルナは息を吐く。

「……その様だな。しかしそちらのご老人は？　何故死地に連れて来たのだ!!　人間は老人を敬うのでは無いのか……!」

怒鳴るヴァルナにセリナは肩を強張らせる中、リアとナナは正論の怒りに何も言えず頬を掻く。ヴァルナの怒りは正しい、フランが望んだとは言え危険な場所に老人を連れて来ることで自体が間違いだった。

「ワシが望んだこと。主らの為でも有るのじゃぞ？　天竜アルビオンに備えるためにもな」

「……如何してそれを？　……ッ！　そういうことね」

さつきまでの口調とは異なる話し方をするセリナに、リアとレオは訝しむ。彼女には何かある、一瞬感じた膨大な魔力。だが、それは余りにも一瞬の事で彼女が何を隠しているのかは分からない。

そんな時だった。空から続々と天使兵が現れたのは。

「女神派が動いたと聴き駆け付けて見れば……セリナ隊と遭遇するとは！ よくも大天使アザゼル様の顔に泥を塗り傷を付けてくれたなあ!! 泣いて命乞いしようが、貴様の羽根をむしり取り浮遊魚のエサにしてくれるわああ!!」

怒り心頭の敵勢力に思わずレオ達はセリナに視線を向ける。

「ぐ、偶然ツスよ!」

「セリナ隊長。ここは好奇だ……敵兵力を減らす好奇!」

ヴァルナの言葉にセリナは頷く。そして旗を掲げルシファー軍に向けて、  
「連中を一網打尽にしてやれツス! 女神解放のため……!」

セリナの怒声に天使達の指揮は高まり、一斉に駆け出す。そして交差する矛にレオは頬を吊り上げていた。

それと同時にリアは聖剣に光を宿し、ナナが魔法の詠唱に入る。

「ルシファー派を蹴散らし女神派に加勢する」

「**「御意!!」**」

レオのその言葉にザガン率いる邪竜族が動き出す。それに合わせてリアとナナも動く。

激しくぶつかり合う両軍にレオ達もまた戦火に身を投じて行く。

両軍の魔法が飛び交う中、リアは聖剣の一閃で敵陣形に穴を開けて行く。そこにレオの魔法が飛来し、陣形を立て直す暇も無く天使兵が地はと落ちて行く。

その様子にセリナは息を呑む。人間界に数多く居る大天使にすら匹敵する魔力の持ち主。それが金髪を靡かせながら舞う様に斬撃を繰り出す彼女に見惚れてしまう。

(しゅ、集中！ またヴァルナに怒られる)

セリナは魔力を込めながら旗を振る。すると淡い光が味方部隊に降り注ぎ、戦意を高揚していく。

神殿に飾られていた旗をルシファアの反乱時に、偶然手に取り応戦。その結果、何故か臨時の部隊長に任命されるまでに至るが、今でもセリナは大天使ミカエルの采配に納得が行っていない。

彼女のあの指示にも。と、戦闘の最中集中力を欠いた彼女に敵軍が掌を向ける。無言から放たれた不意打ち。

真つ直ぐと鋭く飛来する光の矢がセリナに飛ぶ。

光魔法——「セイントアロー」がセリナに迫る中、彼女は右に身体を逸らし、僅かに

頬に矢が掠める。

セリナは魔法を放った天使に息を呑む。彼は聖院学校で同級生だった男の子だ。それが今では戦場で相対した敵。

「冗談キツイツス」

「チツ！ 外したか。鈍臭いお前に避けられるなんてな……！」

殺意を向ける同級生だった天使。だが、その彼は右側から飛来した灼熱の業火に呑み込まれていった。

灼熱魔法——【アグニの業】を放ったヴァルナがセリナを睨む。

「まだ顔見知りを討てないのか、とんだ甘い隊長だ」

「ぐめん」

「……隊長が軽々しく部下に頭を下げるな。ほら、魔法が来る」

自軍に向かって飛来する数多の魔法を前にセリナは、旗を地面に突き立てた。そして、

「《紺碧の守護壁よ我らを脅威から護りたまえ》」

詠唱を唱えると旗を起点に紺碧の守護壁が自軍を包み、飛来する数多の魔法が着弾していく。

「守護壁を砕け！ 火力を全面集中……！」

聴き覚えの在る声が響く。学校の教員の声だ。それを合図にまた魔法が増す。襲撃が守護壁を激しく揺らす、徐々に亀裂が走る。

このままでは守護壁が砕けるのも時間の問題だ。冷や汗を流すセリナを他所に、敵軍から悲鳴が聴こえる。

「や、闇がああ!! た、たすけ……っ!」

「バカな! 光が効かない人間だと!」

守護壁の外で敵軍を蹂躪するレオ達の姿に、自軍からどよめき声上がる。戦を知らない自分達にとって、手勢が五十にも及ばない彼らが敵軍に対して優勢に出ている。一体どんな指揮と采配を取ればあんな動きができるのか。

「すごいッスね」

「兵一人の動きが違う。違いすぎる、俺達のやっている事は喧嘩に武器を与えただけだ……女神解放と謳い始まった内戦だが——」

「それは言っちゃダメ。意味が無くなる、戦って死んでいった仲間も敵も……意味が無くなっちゃう」

セリナの弱々しい声にヴァルナは眉を寄せる。部隊長としてであろうと無理をする彼女の姿が余りにも痛々しい。かつての同級生として責めてあの時と同じように接して来たが、内戦が彼女の心を苦しめる。



ヴァルナはセリナに何も言わず視線を外す。掛ける言葉が無い。今は魔王レオと勇者の動きから学ぶべき事を学ぶ。そのために彼は戦場に眼を向けた。

「……爆音が止んだ。俺達も攻勢に出るべきだ」

「分かっているツス。敵と味方を間違えない様に！ それから彼らに誤って攻撃されないように……！」

セリナは守護壁解除と同時に仲間伝えた。自軍は領き、武器を構え直す。

そして守護壁解除と同時に自軍はまた敵軍へ駆け出していく。

響き合う金属音と轟音。あんなに穏やかな天界が、ルシファアの反乱によつて戦火によつて都市が燃やされた。少なく無い犠牲と人間界と天界を繋ぐ大神官殺しが勃発し、今も混迷を極めている。

（同族同士が殺し合うなんておかしい、如何して隣人だった天使も、友達だった天使も敵対し合い殺し合えるの？）

セリナの疑問は戦場では意味を成さない。彼女は戦場に蔓延する悲しみを堪え、支援魔法を自軍に施していく。負傷者には迅速に治療魔法を、その中で神官服の少女——ナナが倒れた仲間を治療する姿が視界に入る。

少し視線を逸らすと自軍と協力して敵部隊を攻撃する邪魔族達の姿が映る。

そんな時だった、不利を悟った敵軍が撤退していく。

「……撤退したツスね。あつ、その茶髪の人、仲間を治療してくれてありがとう」  
「いえ、わたしにできる事をしただけですから」

「……そういえば、あの老人は？」

突然の戦闘の始まりに避難させる余裕は無かったはず。そう考えていたセリナにナは微笑んだ。

「フランさんならあそこの物影に、ほら魔力結界が張つて有るでしょう？」

言われた場所に視線を向けると、そこには無傷の魔力結界と戦闘によつて破壊された通路の残骸が見える。

それだけで激しい魔法が飛来したと理解できるが、それ以上に魔力結界が強力だった。

「ヴァルナ、この人達を拠点に案内したいんツスけど……」

「セリナ隊長が決めたんなら指示に従う。総司令には報告を入れておけよ？」

「分かつてる」

セリナは頷くと、拠点に念話と目の前の光景を投影。

『セリナ部隊長……こちらでも戦闘を観測していましたが――』

『それなら大丈夫ツス。……天界の門から人間界の来訪者が到着。彼らのおかげで危ないところを助けられたツス。今後の為に拠点に連れて行つても……？』

『ええ、ミカエル総司令からセリナ部隊長の要望は通すようにと。まだ市街地にはルシファー勢力が蔓延ってますから道中気を付けて』

その言葉を最後に念話が切れ、セリナは話し合うレオとリアの下に歩み寄る。

「是非とも我々の拠点に同行して欲しいんツス」

「良いの？ それは願ってもない申し出ね」

「ああ、俺達も天界の情勢を知りたい。詳しく教えてくれ」

セリナは二人に微笑み、部隊に撤退を指示する。

そして天門広場から離れ、美しい街並みから崩壊した市街地へと進んで行く。

崩壊した大通りを歩く中、レオは過去に訪れた天界の街並みとは程遠い光景に息を呑む。

瓦礫の山を壁に巡回中の天使兵を避けながら進む中、レオはポツリと疑問を呟く。

「いつからだ？ 一体いつから天界はこんな事になったのだ」

女神が治る世界、それが天界だ。彼女の秩序の下で統治されていた天界は争いも無い理想郷とさえ思わせる程の平和な世界だった。

レオの疑問にセリナが哀しそうな表情を浮かべ、空を見上げながら答えた。

「二年前に大天使ルシファーがウテナ様に反旗を翻したんツス。それで内戦が起こり、街は破壊され色んな天使が死んで逝ったんだ」

ルシファーの反乱が起こったまでは理解できる。だが、何故女神ウテナはルシファーを野放しにしているのかが理解できない。彼女は神だ、簡単に敗北するとは思えない、そもそも神を殺せるのは巨人族や同じ神族。

尽きない疑問を他所に、響く足跡と天使兵の会話にレオ達は足を止めた。

「連中の拠点は一体何処に在るって言うんだ？ こんな瓦礫だけの都市を見るのはいい

加減うんざりなんだけどな」

「そう言うなつて。ルシファー様の計画が次に移行する前に天界の敵勢力を討伐しなきゃなんねえだからさ」

「本気で……ルシファー様は本気で人間の絶滅を？ 俺たちは人間の小さな、本当に些細な悩みの声を聴いてきたが、何故だ？ 何故ルシファー様は一年前にあんな事を……」

天使兵の疑念を孕んだ声が聞こえる。如何やらまだルシファーの行動に疑問を示す者も居るようだ。

「いまさらそんな事を言ってもなあ。俺たちはあの言葉が、『神に至り女神に代わり、お前達をかつての栄光と繁栄に導こう』つて、あの言葉に惹かれたんだろ？ それをいまさら……いまさら言ったつて隣人や同級生を手に掛けてしまったんだぞ」

ルシファーを崇拜しながらも殺しに対する罪悪感を孕んだ言葉に、レオ達は静かに聴き耳を立てた。

「けどさ！ 俺たち下には何も情報が伝わらない！ 何もだ！ 次の目的も、何故天竜を目覚めさせるのかもだ！ 全部人間の絶滅の為つてんならそんな方法を取らずとも……！」

叫ぶ天界兵の背後に乾いた足跡が響く。レオ達は最大限魔力を抑え息を呑み込んだ。

「人間界を禁断魔法で消滅させれば良いってか？ ソイツは勿体ねえ。あの豊かな広大な土地、その地に棲まう人間以外の生物には罪なんざ無いねえからな」

威圧感を宿した声にセリナをはじめとした天使達が身体を震わせる。

（あの声の主って誰なの？）

（大天使バラキエル……戦う事が大好きなイカレタ男）

辛うじて聴き取れる小さな声で話すセリナ。現状で彼と遭遇するのは好ましく無い。戦闘に入れば負ける事は無いが、不明瞭な敵兵力を相手にするほど無謀な行動は取れない。

特にここに占い師フランが居る。彼女は不思議な老人だが、戦う力は無い。そんな彼女を魔力結界で守りながら連戦となれば、こっちの魔力が保たない。

「バラキエル様は……本当は人間界の戦列に加わりたかったのでは？」

「そつちも魅力的だったがな……サタナキアのアホとアガリアレプトとは反りが合わねえ。それにミカエルだ、あの女が健在な以上、いつ状況がひっくり返るか分からんからなあ」

愉しそうな声が反響して響く。

「……バラキエル様はルシファー様の計画の全容をご存知何ですか？」

「いや、知らねえなあ。アイツは誰も信用しねえ臆病者だが、アザゼルなら知ってんじや

ねか？」

バラキエルですらルシファアの計画を知らない。確かに計画は全員が知る必要性は薄い、配下の士気に拘ること。情報漏洩を恐れるなら本の一握りだけに伝える事も得策。

逆に部下には指導者の意志と欲を示さなければ、疑問を抱きやがて反乱の火種に繋がる。また敵の聴き心地いい言葉で寝返る事も有り得る。

そもそもルシファアは自らの下に集った天使を仲間とは見做していないのかもしれない。人間界の天使兵は計画も何も知らされて無い状況で戦い死んで逝く。

盲目的な思考とルシファアに従えば間違いないという単純な思考。捕らえた天使兵の記憶を見てきたハーゲンはそう語っていた。

「何にせよテメエらは学生だった。だが、望んで同胞を殺したんだよ。テメエの感じる疑問は殺しの罪悪感と理解が及ばない存在に対する畏れからだ……良いか？ 殺戮という名の快楽に全部委ねろ。殺し殺される刹那の時、そこに疑問なんざ介在の余地もねえんだからな」

闘争に身を委ねるのもまた道理。バラキエルという男の思考は魔族と似ている。いや、産まれてくる種族と世界を間違えたと言っても良いだろう。

「分かったんならとつと移動すつぞ。……しかしまあ、逃げ足の速い連中だな」

部隊が移動する足跡が響く中、バラキエルのボヤキ声が反響する。如何やら市街地で戦闘していた天使は撤退した様だ。いまこの市街地に居るのは敵兵力だけと予測できる。

レオ達は敵兵力と遭遇を避けながら、セリナ達の先導に従い崩れた建造物の中に入っていく。

「此処なら大丈夫だ。……セリナ隊長」

ヴァルナの声に彼女は頷き、

「《我らを安息の地へ》」

呪文を唱えた。

『セリナ部隊長の固有魔力を認識。……来訪者数十名の魔力を認識。同胞の帰還と来訪者の訪れを歓迎しよう』

この場に居る全員の頭の中に無機質な声が響く。

そういえば天界はどの世界よりも魔法技術が発展していた。その事をすっかりと忘れていたレオはため息を零す。

それと同時に光が目の前に溢れ、眼を開くと見知らぬ光景が広がっていた――



## 8—4

辺りを見渡せば鋼鉄の通路が広がり、床に敷かれた線路が在る。

上を見上げれば一面に拡がる星空に太陽と月、決して同時に見られない天体が存在している。

しかし太陽の温かさを感じ無い。つまりアレは魔法で模した偽りの太陽と月だという事が判る。

「えつと……此処が拠点?」

「そうッス! 天界の地下に存在する我々の拠点〔メトロ〕によろこそ!」

セリナの天真爛漫な表情にリアとナナの二人は笑みを浮かべた。

微笑ましい光景に天使と邪竜族は頬を綻ばせる中、レオは周囲を見渡す。

「ふむ……広い通路に両壁。上の光景は魔法だと理解しているが、此処は何かの通り道か?」

床の線路はトロッコを走らせる鋼鉄の道。それが長く続き広い空間一面に見える。レオの興味は少女の笑顔よりも技術の方に向けられていた。

「何かを運搬するための通路か? だとすれば魔界の鉱山都市を結ぶ大掛かりな……」

「むう……如何にしてあの氷結した地面に走らせるか。毎日吹き荒れる吹雪、地面に敷いた線路は直ぐに埋もれてしまふな。やはり、宙を走る線路の方がカッコいいか？」

「それは……カッコいいでしょうな」

大掛かりな工事が必要だが、いずれは魔界の氷を溶かす。その日が来れば折角の工事も全て文字通り水の泡になる。

「やはり、何が始めるにも太陽の創造が先か。いや、線路の件に関しては人間界で実行すれば問題は……」

「我々の魔法技術に感心を示して貰って嬉しいツスけど、ミカエル様を待たせているんで先に進むツス。しばらく線路の上を歩く事になるけど我慢ツスよ」

セリナに急かされ、レオは一度考案した計画を頭の隅に追いやり、フランの前に屈む。

「老人の足では辛かろう」

「助かるのう」

フランをおぶり、そのまま歩き出すと背後から感じる生暖かい視線にレオは息をため息を吐く。魔王が人間の老婆を気遣う姿が珍しいようだ。

「ねっ？ 魔王の癖に物凄く優しいでしょ」

「魔王の意外な一面に驚きツス」

そんな時だった、ふとナナが疑問を口にしたのは。

「ところでこの線路？　には何を走らせているんですか？　それに先程は地下と言いましたよね」

天使の拠点であるメトロは地下に存在していた。空を浮遊する大陸の地下にだ。

天界は魔界や人間界とは違い、大陸そのものが空を浮き、その真下に海だけが拡がっている。その海にはリヴァイアサンとベヒモスをはじめとした強力な魔物が生息。浮遊大陸から落ちれば当然命は無いし、仮に助かったとしても強力な魔物の群れに襲われ、どの道助からないだろう。

「……大陸の強度はミカエル様のお墨付きだ。例え魔族が『フレア』を放ったところで天界の大地には傷一つ付かん」

ナナの疑問を払う様にヴァルナが答えると、彼女は安心したのか安堵の息を吐いた。彼女の心配も理解できる、戦時中の地下に潜む事はそのまま生き埋めにされる危険性を孕むこと。

特にリアとナナの二人は人間界以外の世界を訪れた事が無い。だからそんな心配も及ぶし、危険性にも目が行く。

「それならレオとザガンが本気出しても安心かな。巻き込まれちゃうかもだけど」  
「味方を巻き込む様な下手は打たん。味方ごと巻き込むのは三流以下だ」

ザガンの言葉に確かにとリアは頷く。先程の戦闘も敵味方の区別を付け、攻撃に巻

き込まずにいた。

それはレオも邪竜族のみんなもだ。そして此処に居る天使も全員が配慮していた。

「本当に心強いわね」

彼女の紡がれた言葉に耳を傾けながらレオは歩き続ける。

此処で人間、魔族、天使の三種族が共闘している。全くもって不思議な事だ。幾ら魔王の歴史を遡ろうとも、勇者と天使と手を取り合った魔王は存在しない。

存在しなかったがこの日、この時に前例が生まれた。これは良い傾向とも言えるだろう。

しばらく歩き続け、壁伝いのドアを開け階段を降り、また線路を歩き、また階段を降り。それを四度程繰り返し返してやっと天界が集まる広々とした空間に到着した。

中央に在る円形のカウンターで魔力盤を忙しく叩き、宙に映し出される地上の様子を観察する女天使達にレオ達は息を呑んだ。

「凄い光景……投影魔法であんな事もできるんだ」

「フィオナちゃんに見せたい光景ですね」

魔女を志す彼女にとつて正に天界の魔法技術は、眼にするだけでも良い刺激を与える。かく言う自分も目の前の技術に興味を尽きない。

「時間が有ればゆっくりと解析したいのだが」

「……技術を盗むか。それも統治者として必要な事なのか？ 魔王よ」

目を瞑り静かに問い掛けるヴァルナ。彼にレオは口元に笑みを浮かべ、

「ああ、あの投影魔法は空の果てを観測するには打って付けだ。魔界には星読みが無ければ星占術も無い、今も暗き果てを彷徨う魔狼の同行を監視するには……」

「魔狼……太陽さえ飲み込んだというあの？」

レオは静かに肯定の意味を示す。太陽を人工的に創り出したところで、また魔狼に喰われては意味が無い。寧ろヤツに極上のエサを与えるだけに終わる。

「……女神様を救えば褒美を頂けるかもしれないが？」

「褒美が欲しくて天界に来た訳では無い。そこは勘違いされては困るな、あくまでも目障りな敵を討つため……そうだな、あとは楔を外すためもあるな」

レオの言葉にセリナとヴァルナは、それでも心強い味方と位置付け、中央カウンターまで歩き出す。

しばらくして戻って来た二人が、

「ミカエル様はすぐに会って来れるツス」

「セリナ隊長が彼らとミカエル様と面会するが、俺達は装備を整え地上に戻るぞ」

そう告げ、ヴァルナ達と別れミカエルの執務室を目指す。

ミカエルの執務室に到着すると、セリナは緊張した表情でドアを三度叩く。

「どござい」

短くそれでいて凜とした声が返ってくる。

セリナがドアを開けると、長い金髪に六枚羽の大天使ミカエルが微笑み歓迎の意を示す。

「よく来てくれましたね。人間界の勇者リア、神官ナナ、そして魔王レオと四魔將軍ザガンにその配下の方々……あなたも元気そうで何よりです」

ミカエルはフランを見つめながらそんな事を言った。

リアはミカエルがフランを知っている事に、不思議に思い小首を傾げた。

そんな自分にミカエルは察したのか、

「人間界の女神を信仰する者は記憶してますとも。特に彼女とは“永い”ですから」

疑問を解消するように答える。ただ、それでもリアは一つだけ違和感を覚えるが、それが何なのか理解が及ばないながらも、

「レオと云い、誰かの上に立つ者って覚えが良いのね」

「……ミカエル様は意外とねちっこいだけツス」

感心するリアを他所にそんな事を言うセリナに、ミカエルは微笑む。

「あらあらねちっこいとは言ってくれますね。……それにわたくしの前ではいつも通りの口調で話すようにと言ったでしょう？ それとも貴女がうっかり割った女神様の水瓶の——」

「わあああ!! やめてええ!! それは言わないでよお〜!!」

泣きつく彼女にいい笑顔を浮かべるミカエルに、レオ達が呆然とする中、フランだけは笑っていた。

何故かその眼は笑っていないのは、女神を信仰する信者からしたらなのだろうか。

「ええっと、本題に入りたいんだけど良いかな？」

「ええ、構いませんよ。こちらでも動かなければならぬ状況ですから。ですが、その前に色々と話す必要がありそうですね」

静かに紅い眼光で見つめるレオ。どうやらレオは何か聞きたいことが多いらしい。それは自分も同じ事、疑問を解消しなければ戦えないということは無いが、何故こんな事態に陥ったのか、後の教訓として知っておく必要が有る。

「ミカエルよ。ルシファーが【昇華】に入ったそうだが、それは何を意味する?」

レオの問い掛けにミカエルが眼を見開く。

「ルシファアが【昇華】を……そんな、いえ、そもそも儀式を実行するには魔力が足りないはず」

「奴には俺と勇者から奪った魔力が有る。……俺と勇者の魔核に楔を打ち込み、魔力を吸い上げる形でな」

通常なら有り得ない現象をルシファアは可能とした。

本来魔力は本人の魔核にしか宿らない性質を持つが、直接魔力を吸い取り続けるなら全ての疑問も解消される。

「……破格の魔力を有したお二人の魔力を取り込んだ……なるほど、それならばルシファアが【昇華】を実行しても不思議ではありませんね」

ミカエルは一呼吸置いて話を続けた。

「我々天使は魔核が内包する魔力量が増えるに連れ、儀式を行い羽根を増やす必要があるのです。それが【昇華】と呼ばれる儀式なのですが、私もルシファアも一万年以上の時を過ごしてますが、魔力の上昇はとうに限界点に到達しています。ですから本来ならば不可能な儀式だった」

「つまり、私とレオの魔力が原因で不可能が可能になったってことね。それで羽根が増える以外に何が有るの？」

「天使は【昇華】を重ねる度に、その身が神に近付くのです。今では六枚羽が現状の最高



位でしたが……かつては、そう【終末戦争】以前は十二枚羽の天使長が存在していました」

聴き覚えの無い言葉にリアとナナは小首を傾げる中、レオをはじめとした魔族は苦虫を噛み潰した表情に歪めた。

「……神族と巨人族が魔界で起こした【終末戦争】か。あの戦争で女神ウテナ以外の神は死に、魔界から太陽が失われ、世界は永久凍土に閉ざされた。……全く忌々しい」

「その件は……私の口からは言及できませんが、魔王レオはあの件の恨みを、魔族を代表して晴らしに来たのですか？」

「見くびるな、一万年も前に終わった話だ。いまさら蒸し返す気にもならんよ。恨みを晴らすなんざよりも魔界に太陽を取り戻す事に意義が有る」

そもそもレオはその当時を知る魔族では無い。だから歴史で知り得た知識でしかないのだという。

「……さつき天使は神に近付くって言うていたけど、ルシファーの目的は神になること？」

「ええ、目的の一つでは有りますがね」

神に至ることすら目的の一つでしかない。なら最終目的はなんだ。またルシファーに対する疑問が湧く。なぜそうまでして力を求めるのか。

「ルシファーはどうして人間を襲うの？」

「……彼は過去に人間に知恵を授けたのです」

彼女の言葉に、リアとナナに肝が冷えるような感覚が襲う。

「知恵を？ ルシファーが人間に知恵を与えたとは本当なのですか……っ」

狼狽えるナナの様子にミカエルは静かに声を発する。

「紛れもない事実です。当時のルシファーは謙虚で散つていく生命に嘆く男でした。

……ですが、ある日人間の祖が魔物に一方的に蹂躪され、絶滅に追い込まれた時です、彼が女神様の静止の声を振り切り知恵を、考え戦う知恵を授けたのは」

今日まで人間が魔物によって絶滅せずに生きていたのは、遠い昔にルシファーが祖に知恵を与えたお陰だった。それならばどうして滅ぼそうなどと考えるのか。

違う。ルシファーは自然の流れに逆らい知恵を与えた事を後悔している。彼に後悔させたのは、人間が繰り広げる戦争も原因の一つだろう。

リアとナナはその結論に至り息を呑む。

「私達がルシファーを失望させてしまったのね」

「……それは結果論に過ぎませんよ。生物は生存競争の過程で争う。彼は人々の生活の営みを見守る過程で傲慢になつていただけのことです。ですからあの愚か者が人間を肅清しようなどと大きな間違いなのですよ」

はつきりとルシファアを否定する彼女の言葉。

それでも息が苦しくなる。確かにルシファアは知恵を授けたが、人が傲慢になり自らの欲のために他者を蹴落とす。それでも自分達にとっては全て過去のこと、しかしルシファアにとっては当時の事。

例えどんな理由があろうとも人間の絶滅は阻止しなければならない。それが勇者としての務めでも有るからだ。

「そう。天界はルシファアをどうするつもり?」

「……女神様に刃を向け、天界に戦乱を呼び人間界に多大な犠牲者を出したルシファアは裁かれるべきでしょうが、それも女神様の御心次第」

「それは……つまり自分達でルシファアの処遇を決めないということですか?」

ナナの質問にミカエルは瞳を閉じて静かに首を横に振った。

「天界の秩序は女神ウテナ様、我々には同族も他種族を裁く権利も決定権もありませんよ」

女神の僕たる天使が彼女を差し置いて、判決を下す真似はできない。つまり天使の立場を一国に置き換えるなら、女神は王であり天使は民だ。

こちらの常識で当て嵌めるなら理解できる部分もある。ただ、戦乱によつて家族を失った者達はそう簡単には、ルシファア派の天使を許すことはできない。

そんな時だった。静かに静観していたレオが、ようやく口を開いたのは。

「……異世界では欲に取り憑かれ、誤った道を辿った天使は墮天するそうさ。……墮天はその者の罪の証、永劫付き纏う罪なのだ」と

この三界とは違う異なる世界について、話を持ち出したレオにミカエルとフランが興味深そうに耳を傾ける。

「ルシファーは傲慢であり、神を目指すのなら真逆の存在に墮としてしまえば良いのではないか？」

「……それは興味深い話ですね。女神様復活の暁には、進言してみましよう」

穏やかな笑みを浮かべるミカエル。しかし、彼女の笑みは穏やかだが、体が震える悪寒を感じるの、きつと彼女が静かにルシファーに怒りを宿してるからだろうか。

「……ルシファーの件は一旦置いておいてさ、天竜アルビオンの封印は何処に在るの？」

私達はそれも阻止しなきゃならないんだけど」

「天竜アルビオンは女神様の神殿に封印されていますが……すみません、具体的な解除方法をわたくし達は知らないのです」

封印解除方法をミカエル達が知らないのは無理もないことだ。万が一封印解除を試みる者が現れる事を予想すれば、解除方法を残さないのも一つの方法だ。

ただ、それでもルシファー派が封印解除に動いている点に引っ掛かりを覚える。

「誰も知らないのに……? でもフランの占いでは、ルシファーの企みを阻止しなければ天竜アルビオンが解き放たれるって」

「じゃあどうやってルシファーは封印を? とリアは出かけた言葉を呑み込んだ。封印を解除する方法が無ければ物理的に、強引に封印を破ってしまえば良いのではないか。そんな考えが頭に過つたからだ。」

「……強引に封印を破壊する気なのかな?」

「まさか、そんな魔族並みの力付くに出るとは……」

「実に手っ取り早い方法だが、幾ら脳筋思考の魔族でもそんな無謀なことにはせんぞ。だいたい、お前達は魔族をなんだと思っっているんだ」

レオの虚しい声が執務室に響く中、改めてミカエルはレオに向き直る。

「魔王レオ……あなた方は我々に手を貸してくださいと認識して間違いありませんね?」

「邪魔者を排除するためには必要だからな。それに、此処に来たのは俺と彼女の楔を外すためでもある。……そうだな、共闘の条件を付けるならば楔解除。これがまず一つ目だ」

レオが一本の指を立てるとミカエルが何かを察したのか体を抱き締め、

「二つ目はわたくしの身体ですか!」

「貴様の体に興味は無い」

即答だった。冗談を冗談で返す暇も無い程なく真面目に返すレオに、ミカエルは苦笑を浮かべた。

「じよ、冗談ですわ。……それで他の条件は？ 太陽の生成でしようか？」

「見くびるな、太陽は俺達の手で創り出す。例えそれが神の業だとしてもだ。……二つ目はリアの魔核に施された魔法陣の解除だ」

確かにレオの言う通り、自分の魔核にはルシファーが施した時限爆弾が在る。だが、それはレオも同じこと。

「待ってよ！ レオはどうするの!? あなたの魔核にだって同じ魔法陣が仕掛けられてるじゃない……っ！」

「そんなもの魔力が全結すればどうにでもなる。だが、お前は自力で魔核を護る術を持たないだろう？」

レオのように転移魔法も魔力結界を展開できる訳でもない。

ナナのように治療魔法も支援魔法を扱える訳でもない。彼の言う通り、自分にはルシファーの魔法陣をどうにかする方法が無い。

「レオは本当に自力でどうにかできるのね？ ……失敗して死ぬなんて許さないわよ」

そう言い放つと、彼は不敵な笑みを浮かべた。レオのその自信に満ち溢れた笑みを見

るだけでも安心だ。

彼は失敗しない。そんな確信が満ち溢れる。

「……どうやら話は纏まったようですね。他に条件は無いのでしょうか？」

「もう一つ。人間界のメルディア島に住むゼストという男。ソイツはサタナキアから島を護るために腕を失った、彼に天界の技術を使用した義手を与えてやって欲しい」

利き腕を失ったゼスト。彼の腕を作って欲しいとレオは条件に加えた。そんな彼は紛れもなく優しい魔王だ。

旅の道中で出会い、僅かだが共闘した彼を気に掛けるのは、紛れもないレオの優しさだ。

「それぐらい造作もありませんが、よろしいんですか？」

「ああ、条件はこの三つだけだ。俺達はルシファー打倒まで天界と同盟を結ぼう」

レオが差し出す右手を、ミカエルは微笑みながら掴んだ。

「これで我々との正式な同盟締結となりましたね」

彼女の言葉によって、リア達は女神派と正式な共闘関係を結ぶに至る——

ミカエルはレオとリア、そしてセリナを執務室に残して、早速楔の解除に取り掛かる。床に魔法陣を描き、

「お二人は魔法陣の中心に、セリナはわたくしの側で魔力供給を」

それぞれに指示を促す。すると案の定セリナは不服そうに頬を膨らませた。

「自分の魔力は低いんですけど？」

「この場で隠す必要は有りませんよ」

彼女は学生天使だった。一介の天使の家系に産まれ育った平凡な天使。少なくともルシファーをはじめとした大天使はそう捉えている。

だが、それは大きな間違い。彼女は産まれながらにして大天使並みの魔力を誇る天使だ。それでも彼女は全ての魔力を十全に發揮することは叶わない。

【昇華】を得て肉体に、魔核に宿る魔力を馴染ませなければならぬ。加えて彼女はまだ天使の中では子供だ。

「えっと、その口振りだとやっぱりセリナは魔力を隠してるのね」

「ええ、この子は高い魔力を有していますが上手く制御ができません。それに優しい



子ですから、魔力で誰かを傷付けることも躊躇してしまふんです」

「……なぜ部隊長に？」

確かに部隊長に推薦した際には誰もが反対した。ミカエルはそんな反対を押し切り部隊を編成した。全てはセリナの精神に成長を促すために。

次代の大天使を育成することも古き時代の者の役割だからだ。

「天使の成長の機会のためですよ。それにこの子は鼓舞する才能を秘めていますからね」

「自分の得意魔法は守護壁なんですけど……」

セリナは自身の才能に気付いていない。仲間をその場に居るだけで鼓舞し、士気を上げることは早々できる事では無い。

いつの日か遠い未来に於いて、彼女の鼓舞する能力は必要になる。そのためにもセリナの成長が必要不可欠。

「セリナはすごく不満そうね。良いわ、これが終わったら色々と話してみない？ 例えば天界の美味しい物とか、人間界のこととかさ」

「……！ ぜ、ぜひー！」

リアの言葉に照れながら答える彼女に、ミカエルは微笑んだ。その様子を黙って見守るレオに目を向け、

「そろそろ始めましょう。お二人とも準備はよろしいですね?」

そう問い掛けると、二人は力強く頷く。

ミカエルは魔法陣に魔力を送り、視界に映り込む二人の魔核に息を吐く。

渦巻く闇と光、天界黙示録に記載された存在が目の前に居る。これも永い時を生きる種族の運命。

と、ミカエルはリアの魔核に違和感を感じる。本来魔核とは肉体の成長に合わせて魔核も成長していく。老いれば老いるほど魔核は、魔力生成効率を失っていく。

まだリアは若い過ぎる。だが、魔核の時が、成長が止まっているのは何故か。注意深く観れば観るほど、リアの肉体の成長そのものが止まっている。

眉を歪める自分に気付いたのか彼女は、

「どうかしたの?」

「いえ……何でも無いですわ」

今は魔核の楔が最優先だ。意識を集中させ、ミカエルは楔に掌を向ける。

「セリナ、リアの楔解除と同時にルシファアの魔法陣に妨害魔法を!」

「はい……!」

模造品のグレイブニルの鎖。かつて魔狼フェンリルを封じ込めるために使用された

神具の模造品。

模造品故に脆い。ミカエルは口を開く。

「偽りの鎖よ朽ち果てよ」

短い詠唱と共にミカエルは魔力で楔に圧力を与えていく。その度にリアに施された魔法陣が輝き出すが、セリナの放つ妨害魔法で、魔法陣に偽りの情報を与えていく。

魔法陣を誤認させ発動を遅らせる。特にルシファーと繋がっている状態だ、力技ならすぐに気取られるだろう。

ふと、ミカエルはレオの方に眼を向けると、彼は闇の魔力でルシファーの魔法陣を覆い尽くしていた。

解除でも無ければ、破壊でも無い。闇で魔法陣の消滅、それがレオの選んだ選択だ。

しばらく一本一本、確実に楔を壊す作業が続くが、それも最後の一本を前にして漸く終わりが見える。

滲む汗にミカエルは構わず、最後の楔を外す。その瞬間、二人の魔法陣が赤く輝き蒸気が生じる。

魔核付近で起こる水爆、それがルシファーの仕掛けた魔法陣の正体だ。

ミカエルはすぐさま、リアの魔法陣に指先を差し向ける。

「魔よ虚無へと還れ」

魔法陣を膨大な魔力で砕く。砕かれた魔法陣はなおも魔法を発動しようと輝きを増

す。それも見越したうえで、ミカエルは魔法陣の破片だけを、亜空間へと吸い込む。「お、終わったの？」

リアは冷や汗を流しながら、床にへたり込んだ。

無理もない、体内に爆弾を背負いいつ爆発するかも油断できない状況だった。特に少しでも制御を誤れば、リアは愚か拠点ごと滅んでいただろう。

「あつ！ レオ、レオは……!？」

隣に立つリアは静かに佇むレオを見上げた。

じつと眼を瞑り指先一つ動かさない彼に、ミカエルとセリナも緊張を浮かべる。

失敗したのか、それとも成功したが死んでしまったのか。

静かにレオを見守る中、

「……ふむ、やはり消滅が手っ取り早いな」

彼は何事もなく眼を開き、そんな事を言つてのけた。

そこに慌てた様子も無い。寧ろ余裕の表情だ。

「……えっ、心配するだけ損だったの？」

確かに彼の行動は心臓に悪い。それでも魔法陣を単独で無力化する辺り、やはり魔王としての実力は本物。

「お見事ですな。……セリナもお疲れ様です」

「き、緊張……緊張したよぉ!!」

まだ経験が浅い彼女にとつては、これも良い経験になっただろう。自分の後任には彼女が相応しい。そのためには多少の無茶も押し通すつもりだ。

と、それよりもミカエルはリアに視線を移す。彼女の現状を知る必要が有る。

「……リア、貴女の魔核……いえ、肉体の成長が停止してますが、何か心当たりは？」

「……えっ？」

何を言ってるんだ、と眼を疑うリアの眼差し。そしてその隣でこちらを紅い眼光で睨むレオの眼差し。

リアは狼狽えながらも、漸く思い有る節が有るのか、

「……魔核研究所で……勇者一行の不老化って。あ、あれはっ……本当のことだったの……っ」

涙を浮かべるリアに、レオは深いため息を吐く。

「……お前が今まで魔核研究所で受けていた実験が、勇者一行の不老実験だった。それを知ったのは魔核研究所を訪れた頃だったが、お前に事実を語るつもりは無かった」

「ど、どうしてよ」

「知ればお前は戦えたか？ 傲慢な人間のため、不老計画を指示したギリガン王のため

に」

人間界でそんな研究が行われていた。ハーヴェストには教会が無い。そのためそんな実験が行われているとは知る由も無かったが、知らないとはいえ余計な事を聞いてしまった。

「……それでも私は……！ 私は最後まで戦うわよ！ レオと決着を付けて、平和にするためにも！ ……でも、不老になった私は、人間なの!? それとも化け物!?!」

不安を叫ぶリアの言葉に、ミカエルとセリナは胸の痛みに顔を歪めた。

そんな中、魔王レオだけははつきりとリアの瞳を見つめて、

「お前はお前だ。勇者でも化け物でも無い、人間の娘リアだ。……お前が不老に成ろうが俺がお前を見る眼は変わらん」

レオは魔族で長寿だ。そんな彼と同じになったリアは、彼からすれば歓迎すべき事なのかもしれない。

判らない、ミカエルには二人の關係に理解が及ばない。

「……そ、そう。でもさ、ギリガン王は魔族を排除するために戦争を起こしたのよ？ それじゃあ、私もナナ達もメンデル国には居られないわね」

帰るべき居場所を失った。ただ、リアの表情から迷いと不安が消えている。

「ならば、ルシファーを打倒しお前と俺が決着を付けた後……俺の下に来るか?」

まるで告白の様な言い方をするレオに、リアはきよとんとした。

「…………へっ？　そ、それは…………まるで…………違う違う！　うん、魔族領に亡命するのも悪くないわね！」

次第に焦り頬を赤くしては、すぐに落ち着きを取り戻す。何とも忙しい娘だ、とミカエルは思う。

「…………すみません、どうやら余計な口を出してしまったようですな」

「いや、いずれ彼女達には知らせるつもりだった。それが少し早まっただけのこと……まあ、リアとフィオナは兎も角、残りの二人は如何かな」

「…………分からないわ。でも私はナナとマキアが戦線離脱しても仕方ないと思うわ、だから二人の判断に委ねる」

強い心の持ち主。成長性が薄い天使の身として、リアの示す心が羨ましく思う。

「わたくし達も人に負けてはいられませんわね」

「そうだよね。…………もつと理解するために人間界旅行を提案します…………！」

「…………セリナ？　経費で落とそうと考えてませんか？」

そう指摘すると明後日の方向を向き、口笛を吹く彼女に呆れたため息が漏れる。

セリナの提案も悪くはない。どの道被害を受けた人間界の復興に携わらなければならぬ身。その過程でセリナと温泉で羽を休めるのも悪くない。

「ふふっ…………どれだけ成長したか見る良い機会ですわね」

「……っ!？」

こうしてレオとリアの楔解除は終わった。

残すはルシファー勢力を打倒し、女神を解放するだけ――



仰々しい〔メトロ〕内を、リアはセリナに連れられて歩いていった。

複雑な内部構造のおかげで迷い易い道順。女神派の天使ですら道に迷うという。

「あら？ リアさんとセリナさん、もう終わったんですか……あのリアさん、少し顔が青いですけど」

大丈夫か、と心配そうに顔を覗き込むナナに、リアは苦笑を浮かべる。流石に今から不老化の話をするには気が重い。それでも話さなければ。

そんな自分の心情を察したのか、

「あ、あの……お、お話なら……自分の部屋で、ゆっくりと」

先程までのセリナとは違い、彼女の声は明らかに緊張していた。これはどう言う事なのか、思わずナナと顔を見合わせると、

「じ、自分は“ツス”を付けないと……人と上手く——」  
ポツリと呟いた。

セリナの恥ずかしがる姿がかわいい。リアとナナの心情の割合が彼女に対するかわいさと理解を深めたいという切な思いが二人を動かす。

「セリナの話し易い口調で話せば良いと思うわ」

その言葉にナナも同意を示す様に頷く。

「はい、無理をする必要は無いんですよ。わたし達にはゆつくりと慣れてくれれば良いですから」

「ほ、本当ツスね！ 今からかなり重い話になるのに大丈夫ツスよね!？」

底知れない明るい笑みを輝かせる彼女は魅力的だ。

「その方が私も多少は気が楽かな」

リアとナナはセリナに案内され、彼女に充てがわれた部屋に入ると。

そこは年相応の女の子らしく、花瓶に活けられた白い花に、可愛らしくデザインされた翼の生えたゴブリンや犬と猫のぬいぐるみが見飾られている。

そして本棚は数々の書物が、その中でも眼を惹くのが教本だ。

「適当に座ってくれツス」

言われるままに二人は適当な椅子に座り、早速ナナがこちらに視線を向ける。

「それでリアさんに何が有ったんですか？ 元気の塊で人前で悩みを余り見せない貴女が、その、真っ青に成るなんて余程の事ですよね」

「うん、流石に私もね。……ナナ、今から話す事は全部事実よ。もしかしたら人を嫌いに

「ちやうかもしれないけど、それでも良い？」

「わたしにも関係する事ですか……」

ナナは思いたる節を探ろうとしばし考え込む。すると眼を見開くとどうやら心当たりに行き着いた様だ。

「……魔核研究所が不穏な実験にご執心という事は、ザガンからそれとなく聴いてましたが、その事と関係が？」

どうやらある程度の話はザガンから聴いていた様だ。レオとは違い、彼は事前に話しておくことで精神的ショックを和らげようとしたのか。

どの道真相を聞けば精神に掛かる負担は大きい。レオの前では何とか持ち堪えたが。

「そう、ザガンが。……あのね、私もフィオナにマキア、そしてナナは魔核研究所で定期的な検査を受けていたでしょう？」

「ええ、人並み外れた魔力を有するため魔核の影響を調べたいという名目でしたね。マキアさんはスラム街に寄付金を受け取るという条件で合意しましたが——」

「うん。……その検査は人を不死にするための実験だった——って言えば信じる？」

ナナは実感が湧かないのか、顎に指を添えて考え込む。

正直言つて自分の体に起きた事について実感が湧かない。確かに去年よりも身長が伸びて漸く百五十二センチに届いたぐらいだ。

だから間違いなく成長はしているが、レオはハーヴェストを訪れた時には肉体の成長が止まっていたという。

すると何か思い当たる節が有ったのか、ナナは瞳を大きく揺らし、

「……まさか、ザガーンの言っていたのはこの事なんですか？ わたしとリアさんもマキアさん、それにフィオナちゃんも既に……」

彼女の弱々しい問い掛けにリアは、ただ頷くばかり。

そんな二人にセリナが慌てながら、

「ぼ、ポジティブに考えるツス！ 仮に好きな人が長寿だったら、自分達はずっと側に居られるって……！」

慰める様にそんな事を言った。

「フィオナちゃんは混血児でしたから……あの子が抱える悩みをやつと共有できる機会に恵まれた、という事ですね」

真つ直ぐな言葉に涙が頬を伝う。一番寿命の差で悩んでいたフィオナが居る。

たまに彼女は、自分達に置いて行かれる夢を見る事が有ると教えてくれた事が有った。その時は置いて行かないと答えたが、改めて考えれば寿命が迎える死がフィオナに孤独を与えてしまう。

例えどんなに楽しい思い出が溢れようと、長寿にとっては忘れられない記憶であ

り、思い出す度に寂しさを与える事になる。

「……そうだよね、フィオナとずっと一緒に居られるって考えると些細な悩みなのかも」  
 「それに自覚が持てない事が大きいですね。……ですが、改めて戦後はどうするか考えなければなりませんね」

「私はレオと決着を付けて魔族領に亡命かなあ。混沌結晶を全て破壊する一仕事も有る訳だし」

レオを倒すした暁には、ギリガン王が自分の望みを叶える。

そのためには絶対にレオには負けられない、元々三年前から彼に負けるつもりは無かったが、寧ろ勝利して人の強さを見せ付けようと考えていた。

ただ、その考えは不老化した時点で無意味にも等しい。

「わたしは、その……偽りを本物にする努力を……」

ボソリと頬を赤くしながら答えるナナに、リアとセリナは興味深い気に視線を向ける。

目の前に恋する乙女が居る。それ即ち、

「セリナは恋話に興味ある?」

「無い女の子って珍しいッスよ。女学生も恋話で盛り上がるッス」

徐々になじり寄る二人にナナは頬を引き攣らせ、

「あ、あのおく、あまり話せる事は無いですよ？　一方的な片想いかもしれまんし、第一お二人の顔が怖いです」

身を引く彼女にとつておきの武器を向ける。

「ええ〜？　夫婦仲が良好な海賊の話聴きたい？」

「興味有りますね！」

とつておきの武器が効いた事にリアは笑みを浮かべ、三人の恋話が展開されることとなつた――

その後話になり過ぎたセリナが、ヴァルナ達が戻つて来るまでに仕上げる筈だった書類を忘れ、こつてりと絞られることに。

ミカエルと会合した翌日。

セリナは眠気覚ましにと浴室へと足を運んでいた。

「うう〜昨日も遅くまでヴァルナに怒られた」

自分は部隊長だが、同級生の彼には頭が上がらない所も有る。いきなり部隊長に任命されたセリナを変わらない態度で接してくれるのは、実に有難いことだ。

部隊としての規律は重視するべきだ。そう言う意見も少なからず耳にするが、

「ウチの部隊のやり方の一つ……よね」

部隊一つ一つに秩序は有るが、細かい運用方法は部隊長に委ねられる。それに、とセリナは息を吐く。

魔界の王であるレオと配下のザガン達の気取らないやり取りを見ていると、彼らの在り方に憧れを感じるものがある。

セリナは湯船に足を入れ、辺りを見渡す。

「ミカエル様は……居ないよね？」

彼女の過激なスキンシップには身の危険を感じる。だが、今は一人だけの空間だ。

セリナは湯船にゆつくりと浸かりながら息を吐く。

腕をゆつくりと伸ばし翼も伸ばす。

「昨日は楽しかったなあ。なんか、久し振りの気がする」

リアとナナとの語らい。恋話をはじめとした人間界の話はセリナにとっては充分刺激で魅力的だった。

だからこそ戦争を終わらせて人間界旅行に行きたいという思いが強まる。

旅行には日頃の感謝を込めてヴァルナも連れて行きたい。彼ならなんだかんだ言っ  
て着いて来てくれる確信が有る。

「キュアリア村から港町シルケに行つて、海鮮料理を食べてみたいなあ」

天界の食事は赤ワインと果実ばかりで、人間界の暮らしを見守る天使にとっては、彼らの食事は非常に羨ましい。現に実の所ルシファー派に与する者の中には、人間界の食事を目的とした者が居る程に。

「……ルシファーに疑問を抱く天使をこちら側に引き込めないかなあ」

天界の住人の大半は実のところは学生だ。年齢五歳から千二百歳まで通い、その中で人間界の暮らしについて理解を深めていく。

そこから魔物の脅威から護る天界兵に進路を選ぶ者、予言者を選ぶ者。商人や女神の付人になる者と別れる。



「学校が崩壊したあの光景は忘れられそうに無いなあ」

ルシファアの放った魔法が聖院学校の校舎を粉碎し、一瞬で瓦礫の山に変えたあの恐ろしい光景を。

多分あの光景を目の当たりにした同級生達は、恐怖心からルシファアに降った。それを悪いと非難する気も無い、一万年以上の時を生きる大天使が敵になるからだ。恐れが上回っても仕方ないこと。

辛い思い出を冷静に見つめ直しながらセリナは、羽根を撫で羽毛の手入れに入っている。

ふと自身の可哀想な胸に目が行く。そういえばリアは自分よりも大きかった、そしてナナは自分とリアが比べ物にならないほど実っている。

「う、羨ましいなあ。背も低いし……はあ、ミカエル様の様な綺麗な女性に成りたいなあ」

セリナがため息を零したその時だった。

『セリナ部隊を始めとした天使兵は、協力者を連れて「メトロ」第八線へ至急集合してください』

室内に流れる無機質な声にセリナは湯船から立ち上がる。そしてバスタオルに身体を包んでその場を速やかに立ち去って行く。

(いよいよ反撃？ それとも哨戒任務？)

何も聞かされていない事に、セリナは若干の戸惑いを覚えながらも素早く身支度を済ませ、部隊が集まる隊舎広場に駆け出した。

「メトロ」第八線に集ったレオ達は、そこに存在を主張し鎮座する物体に目を見開いた。

長い車体に、施された防護魔法陣に見た者には堅牢という印象を与える。

「これが天の柱を駆けるアークツス」

天界が誇る列車。それが目の前に鎮座している。特に人間であるナナは大きな衝撃を受けていた。

トロツコのような小さな乗り物かと考えていたが、それは大きな間違いでトロツコは比較にもならない乗り物だ。もしも人間界で列車を再現できるなら、交易の幅が大いに広がるだろう。

同時に列車を走らせる線路開拓のために、少なからず争いが起こるだろうかとも予見できる。

そんな事をナナが考えていると、ミカエルが現れこの場に居る全員を見渡す。

「皆さん揃いましたわね。……これより市街地解放作戦を実行する事を宣言致しますよー！」

ミカエルの宣言に天使達が声高らかに勇敢な声を叫ぶ。どうやらかねてより予定されていた作戦のようだ。

何も知らされていない事に若干の不満を覚えるも、自分のすべき事は敵から仲間を守り、傷付いた者を癒すこと。

ただ、怖くないと言えば嘘になる。相手は魔族と同等の魔力を有する天使兵、そして市街地で見かけたバラキエルをはじめとした大天使。激戦は必須、もしかしたら自分は戦いの中で倒れてしまうかもしれない。

そんな不安と恐怖を押し殺すように、ナナは神官服の袖を握り締めると、  
「安心しろ。お前を敵の脅威から守って見せよう」

ボソリとザガンが自分にだけ聴こえる声で囁いた。

彼の言葉に先程まで抱いていた不安と恐怖が消えていく。我ながら現金だ、とナナは自嘲気味に笑った。

天使がアークに乗り込む中、レオとリアがセリナ部隊に付いて歩き、ナナとザガン、そして邪竜隊もそれに倣う。

全員が乗り込んだ頃、アークはゆっくりと線路を走り出す。

中に入ると広く長い通路、大振りに剣を十分に振るえる程に広い。そして壁際に並ぶ

長い座席に腰掛ける天使に倣う。

「わあ、意外と座り心地が良いんですね」

一見硬い印象を受ける座席だったが、座ってみると案外柔らかく、これなら長時間の移動も苦にならないだろう。

「そういえば……【メトロ】の入口は転移でしか開かないと聞いたのだが……？」

邪竜隊の副官——ファグラがそんな事をポツリと呟く。そんな彼に向かいの座席に座った天使が仏頂面で答えた。

「このアークには空間移動魔法が備わっている」

乗り物一つに一体どれだけの魔法が備わっているのだろうか。語学のために聴いてみたいとナナは思うが、今は市街地解放作戦に付いて気にかけるべきだろう。

「あの、市街地解放作戦について何も知らないのですが？」

「ああ、敵兵力を蹴散らしながら市街地の中央広場を目指す。ただ、昨日の偵察で敵兵力が市街地に集結しつつあると、だからこのアークを囿に利用する」

「帰り？ 皆さんで転移でしょうか？」

全員で拠点に帰るには、隊長と副隊長のみが知っている鍵を利用して転移する必要がある。一度に運べるのは隊長一人に付き一部隊と五十五人が限度。

「そうなるけど、市街地を解放さえしてまえば帰り道に心配する必要は無いさ。それに

アークは女神様の魔法に耐える程に頑丈なんだ……まあ、神々の乗り物だったって保証付きって事で納得してくれ」

超次元のような存在に耐える列車アーク。なるほど、とナナとザガン達は納得がいく。それほど強度ならば囿に利用しても問題が無い。寧ろ籠城戦を移動しながら展開できる。

これは兵力数で劣るこちら側の隙を補えるだろう。

「ええっと、ミカエル様から事前に受け取った指示を話すッスー！」

セリナは咳払いを鳴らし全員の注目を集める。彼女はゆっくりと辺りを見渡し、

「先ず市街地外周をアークが運行。敵の注意を引きつつサドリナ隊とブリア隊を南市街地に降ろすッスー！」

サドリナとブリアと呼ばれた女天使は、静かに領き槍に指先を滑らせる。

「アークは次に西市街を周り、そのまま東市街地に直進するッス。東市街地にグース隊とファルキン隊を降ろし、アークはそのまま中央市街地に停まるッスよ」

敵の注意が最も集まる中央市街地にアークを停泊させ、敵戦力を中央市街地に誘導する。話を聴いてそう結論付けたナナは、昨晩リアから受け取った魔核に指で触れた。

竜種の魔核が懐に有る。継続能力が乏しい自分達にとつて魔力を回復させる手段が有るのは実に心強い話だ。

「そして最後に自分達の部隊と協力者で敵陣営に一気に強襲を仕掛けるツス！ ……いま名を呼ばれなかった部隊はアークの防衛戦になるツスけど……」

ミカエルの采配なら間違えは無い。そう信じている天使達と、やはり自分達が囿になる不安を拭いきれない天使が居るのも事実。

そんな彼らにレオは視線を向け、やがてこちらとザガンに目を向けた。

「ふむ、アークの防衛戦力に犠牲を出す訳にはいかんな。ならば邪竜隊と神官ナナをさらに廻そう……リアとナナもそれに異論は無いか？」

「私はナナを信じるけど、大丈夫？」

「わたしは大丈夫ですよリア。安心して戦って来てください」

心配そうな表情を浮かべるリアに笑みを返す。

そんな時だった、窓に光が差し込んだのは。

市街地解放作戦が決行される中、アークは市街地外周の空を走る。

「あ、あれは……!!? 連中が動き出したぞおお!!」

それを目撃したルシファー勢力が声高らかに叫ぶと、市街地に潜んでいた天使兵が一斉に空へと飛翔する。

車内の窓から様子を見ていたレオは息を吐く。

「まさかたかが列車一つに警戒も無く、接近戦を試みるつもりか?」

幾ら天使兵と言えども、空を走るアークには追いつけないだろう。移動速度がそもそも違い過ぎる。

「ええつと……敵兵力は市街地を離れ、アークの背後に着いたツスけど……どんどん引き離されてるツスね」

市街地に部隊を降ろし挟撃する作戦だったが、これでは逆に神殿の天使兵と挟み込まれるだろう。

そして気掛かりなのが、あの中に大天使の姿が無かったこと。つまり市街地内か、神殿内には確実に居ることになる。



「しかしまあ、アークは速いねえ。これだと南市街地を通り越すんじゃないの?」

「あつ、途中下車はこの紙の転移魔法を使うツス。途中で停車させたら不自然だからね」  
紙を取り出し、呟いたザドリナは頬を引き攣らせながら紙を受け取る。

まだ風を切る音を奏でながら走るアークから飛び降りないだけマシ。ザドリナ達はそう心に言い聞かせていた。

「そろそろ南市街地に差し掛かる。……準備は良いな?」

ヴアルナの言葉にザドリナ隊とブリア隊は頷き、紙に記された転移魔法で出陣して行く。

そしてアークは走り続ける中、東市街へと向かう。そこでまたグース隊とファルキン隊が転移魔法で出陣して行く。

中央市街地に停車したアークにナナ達を残し、レオ達は降り立つ。

此処も廃墟と化した様子に、移動しながらリアは呟く。

「復興も大変そうね。……ルシファア勢力に組みした天使はどうなるの?」

復興作業には労働者が必要となる。決して少なくない天使がルシファア派に回っている以上は、全員を処断はできないだろう。

「……全て女神様の御心次第。天使の半数が消える事態になろうとも、魔法一つで都市

は再建できるからな。だが、失った生命は——」

「ヴァルナは『戻らない』と言いかけた言葉を呑み込んだ。それも自然の摂理だ、死亡した者が蘇る事は決して有り得ない。それは神々も同じことだ、でなければ神は一柱を遣して滅びたりはしない。

と、廢墟を駆け抜ける中、ルシファー勢力の旗を基点に設けられた駐屯地を見付ける。意外とあつさり見つかった駐屯地にレオは落胆気味に肩を竦めた。

「中央をしばらく走らせると思っていたが……案外近くに有つたな」

「みんなアークに釣られたんツスカね？ 全然姿が見えない」

此処に至るまで天使兵の姿が一人も見掛ける事は無かった。市街地にはルシファー勢力が集結しつつあるという話だった。

まさか、セリナの言う通りアークに全部隊が釣られた。とは到底考えられない。

すると、この場に居る全員を安心させるかのように、駐屯地のテント内から天使兵が続々と姿を現した。

「何でだろう？ 敵が居なくて安心するべきなのに、敵が居て安心するのは何でだろう？」

「俺達は人知れずに敵の罠に嵌った可能性が低くなるからじゃないか」

隊列を作り、レオ達に向けて武器を構える勇ましい天使兵。そしてその先頭に大柄の

大天使がにやりと口元を吊り上げ嗤う。

「バラキエル……っ」

苦虫を噛み潰した表情でセリナが囁く中、バラキエルは大槍を構え、

「さあ！ 楽しい時間だ！ 全員狂気に躍り狂ええええ!!」

雄叫びを轟かせ天使兵が一齐に駆け出す。

レオ達は迎え撃つべく武器を構える中、市街地の至る所で爆音が鳴り響いた――

バラキエルの大槍を魔剣で受け止めながら、左掌を天使兵に向け、

『フレア』

天使兵の足下に亀裂が走り、蒼炎の爆発が天使兵を呑み込んだ。

バラキエルはその様子に愉しげな笑みを浮かべ、大槍を強引に薙ぎ払う。

レオは力強い薙を魔剣フェルグランドで斬り返し、大槍の先端を大きく弾き返した。

そのまま攻勢を緩めず、彼の腹部に鋭い刺突を繰り出す。鈍い音が周囲に響き渡る。

「おっと……危ねえなっ！」

腹部に展開された防護壁に魔剣の刃が阻まれる。だが、レオは口角を吊り上げ、

「甘っ」

魔剣の剣先から闇の波動を放つ。防護壁ごと身体が大きく弾き飛ばされたバラキエ

ルは、宙で体勢を整えたのも束の間。

既にレオがバラキエルの目の前に現れ、掌に闇の炎が集っていた。

「チツいいー！ 流石に速えし強い……っ！」

闇の炎が解き放たれる刹那の一瞬、バラキエルは無言詠唱からの高速転移魔法を駆使し、闇の炎から逃れる。

闇の炎は地上に降り注ぎ、駐屯施設を呑み込んで行った。

「……レオって優しい魔王って聞いたけど……全然優しく無いツスよ!」

「うーん、敵には慈悲も無しかなあ」

天使兵を迎え討ちながら、そんな事を話すりアとセリナにレオはため息を吐く。

緊張感の無い戦場だ。そう思った瞬間、背後の空間から現れたバラキエルに、彼は鋭い笑みを浮かべた。

背後から迫る突きを、振り向き様に魔剣の刃で受け流す。金属音を鳴らしながら弾かれる槍、だがバラキエルはそのまま勢いで大槍を強引に引き戻し、魔力を込めながらも鋭い突きを放つ。

レオは魔剣に闇を宿しながら、鋭い一閃を放った。

バラキエルの縦に走った斬撃に彼は戦慄を浮かべる。

(一瞬で切り裂かれた、だと!?)

大槍は砕け散り、真つ二つに切り裂かれたバラキエルが地面に落ちて行く。

その様子を見ていた天使兵が、次々と武器を落としていく。

恐怖だ。この場に居るルシファー勢力の天使兵に有るのは恐怖一色だけ。あの戦闘

狂で知られる大天使バラキエルが成す術もなく討ち取られた。

そう理解した天使兵達は、震えから歯を鳴らしながら、

「こ、降伏する……！ た、たのむ！ 殺さないでください……っ！」

レオに向けて命乞いした。

「……だそうだセリナよ。お前達は戦意を失ったこの者達を殺せるか？」

レオの静かな問い掛けにセリナは首を横に振った。

「……拘束して鳥籠に放り込むツス。後の事は女神様とミカエル様の判断に任せるツス

よ」

その言葉にセリナ隊は敵兵力を一カ所に集め、拘束した後、鳥籠と呼ばれる牢を召喚して彼等を閉じ込めるのだった。

鳥籠は「メトロ」の無人地帯に転送され、レオ達はそのままの足で北市街地へと転戦することに――

市街地の戦闘を静かに見詰める者が居た。

乱雑に短く切られた黄金の髪。右眼に一筋の傷を付けた紺碧の瞳の大天使——アザゼルは重いため息を吐く。

真つ白な神殿の中、空中に映し出されるバラキエルの死骸を、アザゼルはイスに座り足を組み直し、

「まさかお前さんが早々に脱落するとはね」

戦友の死をアザゼルは笑った。戦闘狂のアイツは強者に討ち取られて戦死したのだから戦士として本望だ。

彼の表情は何をされたのか理解が及ばず、混乱した表情だ。それは果たして本望と言えるのだろうか。

アザゼルは思う。あの魔王レオは躊躇無く殺した、そこに甘さも無ければ慈悲も無い。バラキエルは戦いを愉しむ余裕は果たして有ったのか、と。

「恐い魔王さんだこと。……だが、そうじゃねえとこつちとら困るってもんよ」

アザゼルは巨大な結晶の中で静かに佇む天竜アルビオンに視線を移す。

十二枚の翼、聳え立つ角に白銀の竜鱗に覆われた躰が、そこに鎮座している。

「八千年も眠りに付いてよ、そろそろ暴れたいんじゃないのか？」

アザゼルは懐から掌の上に乗せた混沌結晶を、結晶に近付ける。

すると混沌結晶は結晶に吸い込まれ、アルビオンの額に宿った。その時だった、混沌結晶に亀裂が走り砕けたのは。

「ありやま……お気に召さないようで」

人間界からわざわざシルシファアが直接送った混沌結晶が無惨にも砕けた。これでは残る方法を試すしかない。

幸い封印の邪魔をする女神ウテナは、神殿の最奥で石化している。後はいつ女神派がここに到着するかだ。

バラキエルが戦死した以上、市街地ほどの道解放される。それからミカエルは早急に動くだろう事が予測できる。

「あのポイン姉ちゃんも早く来ねえかなあ。……俺の顔に傷を付けた愛くるしい天使も」

アザゼルは指先で傷を撫でながら、あの時の戦いを思い出していた。

小柄で気弱そうな天使セリナ。だが、いざ戦闘となると冷徹な一面を垣間見せ、右眼を傷付けられていた。

何をされたか理解は及ぶ。アレは一瞬の出来事だった、彼女から大天使級の魔力が放出され忽然と目の前から消えた。

その直後だ、右眼を旗の先端で切り裂かれたのは。

「大方おじさんという強大な敵の前に、生存本能が刺激されたんだだろうな」

今のところは全魔力を扱うには肉体が付いて行かない雛鳥。

その魔力を隠している様だが、隠し切れない程に膨大だ。

将来が楽しみな反面後々の脅威になりかねない敵にアザゼルは笑みを浮かべる。

「やれやれ、敵さんは高い魔力持ちが六人もいやがる。こりゃあおじさん死ぬかもなあ」

ケラケラと笑うアザゼルに、若い女天使が慌てた様子で駆け付ける。

「し、市街地各地の駐屯地が次々に制圧され、アーク制圧に向かった部隊も、り、竜の群れと大洪水によって……捕縛されました……っ！」

竜の群れというのは邪竜族の竜化と推測できるが、大洪水とは一体。アザゼルは疑問に顎を撫で、映像に中央市街地を映し出す。

水を操る茶髪に神官服の少女に、アザゼルは眼を見開く。

「おおっ！ 随分とかわい子ちゃんじゃねえか！ しかも巨乳ときたっ！ いいねえ、

人間界の娘は発育が良くてさ！ ……その点、女天使は……はあく」



「や、やめてください！ セクハラですよっ！」

貧乏な胸を隠す女天使にアザゼルはため息を吐き、

「捕縛された連中は殺されはしねえから安心しな。しっかし、いよいよおじさん一人で連中を相手にすんのか、ダリなあ」

気の抜けた声を発した。

「あ、アザゼル様ならあんな連中に負けませんよ……！」

「へえ、なら一発やらね？」

「だからセクハラはやめてください！ セリナにセクハラして油断したところ、顔に傷を付けられたのを忘れたんですか？」

確かに戦闘の最中、アザゼルはセリナの小さな尻を揉んだ。だが、それは彼女が全魔力を解放した瞬間、決して油断などしてはいなかった。全力で尻を触りに行った名譽の負傷だ。

自業自得な結果のため、油断したと部下には言い訳をしたが、バラキエルには爆笑されたのは、今となっては彼との最後の思い出だ。

「……まあ、お前さんとこうして気の抜けた話をすんのも最期になるか」

アザゼルの言葉に狼狽えた女天使は取り繕う様に、

「そ、そんな！ あの【終末戦争】を生き延びたアザゼル様がやられる——」

話すとアザゼルは目の前に移動しており——そして彼の手刀が女天使の心臓を貫いていた。

口から噴き出る血に女天使は疑問の声を投げ掛ける。

「な、なぜ……？」

女天使の視界に最後に映ったのは、申し訳無さそうな、それでいて哀しそうな表情を浮かべるアザゼルの姿だった。

真つ白な床を鮮血で汚す女天使に、アザゼルはポツリと答える。

「悪いな。……アルビオンの解放には必要な事なんだよ」

天使の命を生贄に災害を解き放つ。それが残された最後の方法だった。無論生贄には自分も含まれる。

だが、決して女神派には気取られてはならない。そのためにもアザゼルは遺体を処理し、床の血痕を綺麗に落とすのだった。

「ルシファアの奴はどうしようもねえ馬鹿だが、まあ俺が居なくともあの二人が支えてやんだろ」

ポツリと呟かれた言葉が、虚しく反響する——

## 8—12

市街地各地で行われた駐屯地襲撃戦は、各部隊の奮闘とアークの囮作戦によつて無事女神派の勝利に終わった。

加えてルシファア派の天使兵が次々に降伏。女神派にとつてはこれ以上に無い戦果だろう。

そしてレオ達はそのままアークで一晩。もつとも天界には昼夜の区別が無いため、レオ達にとつては今は昼かさえ分らない。

「ふう。後は神殿の解放だけ……で、終わらないよね」

座席に座り一息吐いたリアは、神殿の方に顔を向ける。

真っ白な石造りの神殿。あそこに女神ウテナが封印され、大天使アザゼルが居る。

「他に大天使は居ないの？」

「残りはアザゼルだっけッスね。元々大天使はそんなに数が多く無いッス」

天界の大天使は六人だけ。そういえば、まだアガリアレプトには遭遇したことが無い。

ザガンンにも聴いてみたが、彼も一度も戦場で姿を見る事は無かったと。

唯一判明しているのは女性、軍師の立場に有ることのみ。

「アガリアレプトってどんな天使」

「うーん、一言で言えば一途ツス」

セリナの言葉にアルティミアの顔が浮かぶ。一途と言えば彼女もレオに対して一途だ。

「それは……とても苦戦しそうね」

恋する乙女は油断ならない。愛する者のためにどんな無茶もやってのける。リアがアルティミアに懐いた印象が正にそれだ。

だからと言ってアルティミアと同類とは限らない。

リアはそんなことを考えながら、レオに視線を向ける。ザガン達と楽しげに話す彼の姿が映り込む。

どんな話をしているのかは、少し離れた座席のため聴こえないが、  
「なんで気になるんだろう」

どんな話をしているのか気になる。それは何故かは理解できない。

(違う、違うよ。……理解する事を拒んでる)

この内から湧き上がる感情を理解しようとすればするほど、胸が締め付けられる。その度にリアは深く理解する事を拒んできた。

これ以上湧き上がる感情に踏み込めば全てが変わる。それは最悪の変化か、それとも良い変化なのか。

ただ、言える事は現状維持が好ましい。彼とは決着を付ける。それは共闘の終わりを意味する、つまり彼との旅の終わりを意味している。

「旅はいずれ終わるのね」

ポツリと呟いた声が、隣に座っていたナナが小さく微笑む。

「終わりは来ますが、同時に始まりでも有るんですよ？　旅に一区切り付けて新たな一歩を踏み出すために」

「そう……だよ。旅が終わったら全部終わりじゃないもんね」

まだ実感は無いが不老化した身、時間は飽きるほど有る。その永遠の時を何に使うか。

「永い人生を有意義に過こさなきやね。……でも、私は魔界の件にも協力したいなあ」

永い人生を得たのだから、リア個人として魔界の為に何かできることが有る。そう考えて紡いだ言葉に、ナナは顔を顰めた。

「……魔界は魔界に住む生物以外の侵入を拒むそうです。昔、メンデル国の使者が魔界の門を取り抜け、魔界に入ったそうなんですが……結果は使者の凍死だったそうです」

詳しく語るナナに耳を傾ける。

先代の王セオドラに派遣された使者は、魔界の門の直ぐそばで氷像となり凍死していたそうだ。

無論そこにレオは関与して無ければ、魔族の誰も知らなかったこと。

正確には魔界が人間には生きられない環境だった事を、レオ達は初めて認識することとなった事件なのだ。

「それじゃあ……私も即死しちゃうわね」

「多分、魔力量関係無いですね。事実天使の氷像も発見されることがあったらしいですから」

改めて聴くと過酷な環境だ。市街地を移動している最中レオは、『魔界に太陽を取り戻す』そう言っていた。

つまり彼の望みは魔界の氷を溶かす事に他ならない。その為に彼は人間界の土地に降り立った。

全部、彼の望みは全部が”魔界のため”に集約している。

「その話はザガンから聴いたの？」

「ええ、魔界に付いて理解を深めたいと尋ねたら、彼は丁寧に歴史を教えてくださいましたよ」

自分は三年前にある程度はレオから聴いているが、細かい事は何も知らない。特に歴

史の方面には疎い。

そんな事を思っていると、通路に転移魔法陣が現れ、ミカエルとフランが現れたのは。「皆様お疲れ様ですわ。……明日はいよいよ神殿に攻め入る事になりますが、何も聴かず彼女の言葉に耳を傾けてください」

フランは水晶玉を片手にゆっくりと言葉を紡ぐ。

「天竜の封印、輝く結晶の前に、天使の魂を与えてはならぬ。災害は魂の生贄によつて復活を果たすであろう」

具体的な内容に息を呑み込んだ。

フランの占いの通りなら、それは紛れもない天竜アルビオンの解放手順に他ならぬ。い。

「誰も知らない封印解除の方法を……占いで知れるものなのかしら」

改めてフランの正体に大きな疑問が湧く。

目に映るものが真実とは限らない。そうで有るようにフランという老人は本当に何者なのか。

「リアよ、今は疑うよりも封印を解かないように努めることが先決じゃろうって。……じゃがな、封印は時の運によつて如何なるかは分かりやせんぞ？」

「うん。……でも、フランおばちゃんは大人しく待つてよ？」

お年寄りを戦場に連れて行くつもりは無い。そう訴えると、フランは朗らかに笑った。

「生憎とワシはあそこに行かなばならぬ。女神の封印解除にはワシが必要じゃからな」  
フランの言葉に時が止まった様な錯覚に陥る。

如何してフランが女神の封印に必要なのか、理解が及ばない。おまけに胸が激しく騒つく、動揺しているのか。チラリとレオに視線を向けると、彼は静かに何かを探るようにフランをじつと見つめている。

思えば彼は初めてフランと出会った時も、何かを疑っていた。

「リアさん、それに魔王レオも……疑念は百も承知ですが、話してしまえば事が上手く運ばないでしょう。動揺は最大の間となり得ますからね」

「ああ、お前の言う通りだな。……なら俺は詮索しないでしょう。まあ、疑念を向けているのは多いようだがな」

レオの言葉に、周囲を見渡すとセリナとヴァルナを除いた天使、ザガン率いる邪竜族の彼らも同様にフランという老人に疑念の眼を向けていた。

「終わったら全部説明してくれる？」

一瞬だけフランは呆けた表情を浮かべると、



「……もちろんじゃとも」

間を空けた返事を返した。

「はい！ フランさんに付いては以上ですわ！ 明日に付いて話し合いますわよ」

ミカエルのその言葉に、リア達は中央に集まり神殿の見取り図に眼を向ける。

そして細かい話し合いの末、天竜の間に自分とレオが向かうことに――

翌朝にアークは浮上し神殿へと走り出す。

まだ神殿内部には多数の敵兵力が居ると予想されている。そのためアークで神殿へと向かい、一気に内部に突入するという作戦だ。

今回は市街地解放作戦とは違って、大天使ミカエルが直接指揮を執る。

「女神様の解放で……やっと内戦が終わるっ！」

「市街地の復興だとかやる事は多いけどよ……ここが正念場か……っ！」

気合い充分に拳を握る天使。アザゼルを倒し女神の解放。そして天竜の解放阻止で漸く終わる天界の内戦。たからこそ気合が入るのだろう。

ザガンは神殿の方向から魔力の流れを感じ取り、外に視線を移し神殿に鋭い眼差しを向ける。まだ距離はあるものの、神殿の周辺の地面から姿を見せる砲台が映り込む。

砲身が照準をアークに合わせる中。

「如何やら神殿には迎撃装備が有る様子」

竜の視力を持って得た情報を呟くと、ミカエルが微笑む。

「ええ、魔物が時折り侵入しますからね。そのための迎撃設備ですわ」

このままではアークは砲門による集中砲火を浴びることになるだろう。

だが、アークの強度は先日の戦闘で保証済みだ。自分達邪竜族が竜化し、全力を振るっても傷一つ付かない程に頑丈だった。

「ただ……衝撃によつて激しく揺れるでしょうね」

ミカエルがそう口にした時だった。

全砲門の砲身から圧縮された魔砲が一斉掃射が開始されたのは。

神殿から放たれた無数とも思える魔砲の集中砲火が、アークを迎撃し始めたのだ。加えてまだ僅かに距離が有る中、正確に標的を狙い撃つ精度と弾速にザガンとレオを唸らせた。

(天界の魔法技術はここまでは……！)

窓一面に広がる魔砲。アークが無ければ近付くことすらままならない防衛網だ。加えて神殿周辺に転移封印領域まで展開されている始末。

「ふむ、この為のアークだったか」

魔砲の直撃を受け車体が激しく揺れる中、彼は冷静に呟いた。流石は魔王レオだ、とザガンは感心を寄せながら今にも倒れそうなナナを支える。

レオはアークの堅牢さに舌を巻き、その隣でリアが魔砲に息を呑む。

「アークが無かつたら陸路であの集中砲火を……？　ちよつと無理ね」

魔砲集中砲火を受けながら、アークはそのままの勢いで、

「ちよつ!? ぶ、ブレーキ! ブレーキ!! このままじゃ衝突するツス……っ!!」

神殿との距離が近付く中、衝突を察したセリナが叫ぶ。

「何言ってるのよ……衝突させるに決まってるじゃない!」

ミカエルの言葉にザガン達は度肝を抜き、冷や汗が頬を伝う。

だが、幾ら覚悟を決めようともアークは止まらない。それどころか速度を上げ、魔砲の集中砲火を突つ切り神殿へと――

耳をつん裂く激しい轟音、全身を絶え間なく揺らす衝撃。

悲鳴をあげる暇も無く、訪れた衝撃に誰もしもが備えられず、アークの床に倒れ伏していた。

その様子を窓から覗き込む天使兵とザガンは目が合う。

「お、おい! 中の天使が全滅してるぞ……!」

「……物凄い衝撃だったものね。でも! これで我々は戦わずにして勝利したってこと

よ! ざまあみなさい!」

外で湧き上がる歓声に、魔王レオと勇者リアがふらりと立ち上がる。

ザガンとナナも立ち上がり、それに続くように邪竜隊と天使達も立ち上がった。

「……っ!? い、生きてる! 連中は生きてた……っ!!」

異常な速度と衝突による衝撃は、どう考えても死ぬレベルだった。

だが、それでも無傷なのはアークの材質が物理衝撃を外へと逃した影響が大きい。特に御老人が乗車している中での突撃の実行は、アークへの信頼度の高さが起因しているのだろう。

驚愕し怯える天使兵を他所にザガンは、そんな事を考えながら拳を握る。

「さあ! ルシファー派を蹴散らしこの内戦に終止符を!」

ミカエルの号令にレオ達は一斉に出撃する。

白い内装の神殿に響く金属音。ザガンは拳を繰り出し天使兵の槍を砕き、そのまま勢いで顎に強い衝撃を与える。床に倒れ気を失う天使兵に目もくれず戦場を見渡す。

ルシファー勢力の拠点なだけあり、敵兵力の数も数千を超える規模だ。

レオとリアが雑兵に時間と魔力を消費させる訳にはいかない。

「邪竜隊! レオ様と勇者に道を作れ!」

自分の部隊に指示を投げると、彼らは一斉に掌に業火を創り出し、

「『『バーン・フレイム』 ツツ!!』」

敵戦力の防衛に業火の爆炎が飛ぶ。

だが、天使兵もタダでやれるほど柔ではない。

晴れる爆炎から現れた防壁に、ザガンは歩術魔法技——【縮地】で一気に敵部隊の真ん中に移動し、

「竜の拳を受けよ！」

白い床に拳を叩き付ける。魔法技——【竜波衝】が衝撃を生じさせ天使兵を薙ぎ倒す。穴の空いた防衛網を一気にレオとリアが駆け、

「ザガンよ、そちらは任せたぞ」

「ナナのこと頼んだわよ！」

すれ違い様にそんな言葉を遺して行く。

二人はあつという間に戦域を抜け地下へと駆ける。魔力が全結した二人ならばもう何も心配は要らない。

二人を見送ったザガンは戦場に眼を向ける。

女神派の天使が奮戦し徐々に戦線を押し返す様子に、思わず頬が緩む。

「ザガンさん、一人で突っ込まないくださいよ」

隣から聴こえた声にザガンは息を吐いた。いつ間にか隣に移動していたナナが側に居る。

「ああ、背中は任せる」

「はい！ 怪我の治療も援護も任せてください！」

微笑むナナを背に、ザガンは拳を構える。

この場を制圧し、女神の下へ向かうためにも。

ザガンは拳を振り抜く。天使兵を殴る感触、鋼鉄を砕く感触が拳に伝わる。

《《我らに護りを》》

ナナが掌を向け、戦場に居る味方全員に支援魔法——【プロテクト】を一度に施す。

その直後、刃が弾かれた天使兵が、

「く、くそっ！ 人間の支援魔法なんぞに防がれるとは……！」

「落ち着きなさい！ 解除！ 解除すれば良いの！」

罵声と共に飛び交う言葉に、セリナは旗を振るう。

「みんな！ ここが気合の入れどころツス!!」

魔力を宿した声が戦場に拡がり、ザガンは身体が身軽になる事を実感し拳を握り直す。

鼓舞により女神派の天使は、徐々に勢いを増して行く。

それでもこの場を突破するには突進力が足りない。

そこでザガンは、先んじて天使を女神の下へ向かわせる事を優先した。

「ミカエルよ、邪竜隊がこの場を受け持つ！」

「感謝しますわ！ さあ、天使達よ行きますわよ！」

ミカエルが放った光弾が敵兵力を薙ぎ倒し、穴の空いた敵陣にセリナ達が駆けて行く。

階段を駆け上がる彼女達を背に、ザガン達は敵陣営の前に立ちほだかる。

「さあ！ 後を追いたくば我々を倒して行くが良い！」

拳を叩き合わせ、空気が震撼する様子に恐れ慄く天使兵にザガン達は前へと出る。

この場の制圧はそう時間は掛からないだろう――



## 8—14

ザガン達を遺して駆け出すセリナは、チラリと背後に眼を向ける。

あの場所に置いて来た事に、後ろめたさと罪悪感が後髪を引く。

「彼らなら大丈夫だ」

自身の心情を察したのか、ヴァルナがフランを背負いながら静かな口調で語った。

いつも彼の氣遣いに助けられている。

「ヴァルナ、ありがとう」

緊張せずに言えた。すると彼は顔を逸らして、

「ふ、ふん、連中を気にかける前に自分の身を気に掛ける。お前はいつもボサツとするか

らな」

やっぱりヴァルナは厳しいと思う。

そんな事を思っていると、

「なにあれ？ ベタよベタベタのツンデレよ」

「男なら男らしく告白の一つでもしちやえれば良いのにね」

ザドリナとブリアのそんな声が聴こえる。誰が誰に告白するのか、と興味深くも疑問

から首を傾げる。

すると、二人は何故か呆れ気味にため息を吐いた。

(自分、何か余計な事をしちやった?)

不安からヴァルナに顔を向けると、彼は物凄い表情でこちらを睨んでいる。正直言つて恐い表情だ、同級生とは思えない程に恐い。

「て、敵に警戒するツス！」

顔を逸らし、駆け抜ける通路の先に眼を向ける。

先頭を飛ぶミカエルと天使、その先には驚くほどに誰も居ない。

畏なのか、と警戒心が浮かぶ。それとも単純に女神の封印が解けない絶対的な自信の顯なのか。

天使と周囲辺の空間を警戒してた矢先、突然神殿が揺れ足を取られてしまう。

セリナ達は転ばない様に浮遊し、揺れから難を流れる。

「何の揺れツスかね? まさか天竜が……?」

「いえ、違うわね。これは強大な魔力の衝突による余波ですわ」

冷静に先程の揺れを分析したミカエルが、衝突によるものだと言った。

考えられるとすれば、アザゼルとレオ達が衝突した。或いはザガン達の一方的な戦闘によるものかもしれない。

しばらく通路を駆け抜け、やがて十字路に到着すると。

「急げ！ アザゼル様に増援を……！」

「そつちも大丈夫だけど、広間にも増援を……つ！」

天使兵の慌てた叫び声が聴こえる。ミカエルの合図に従い走る速度を緩め、慎重に十字路を覗き込むと、左右の通路に集う天使兵が今にも転移しそうだ。

この状況下でレオ達に増援を向かわせるのは得策では無い。何より天使の問題を外  
部戦力に全て任せてしまうのも気が引ける。

そんな個人の感情を抱いていると、ミカエルがゆっくり十字路の真ん中に歩み寄る。

「不意打ちの好機ですわ！」

両掌を左右に向け、彼女は無詠唱から閃光を解き放った。

「み、ミカエル……様!？」

「て、転移をいそ……つ!？」

転移魔法が発動する暇も無く、天使兵は閃光に呑み込まれ、全員床に倒れ伏していた。

「み、ミカエル様……容赦無いツスね」

「敵に組みした以上はそれはもう敵ですわ」

ルシファー派に同情心が宿る中、確かに彼らがやってきたことは自業自得。

そう考えるとある意味同情の余地は無い。

「ううっ……ひ、ひかり……が」

どうやら彼らはまだ生きている様子。それならばと、セリナは左右の敵部隊に掌を向け、

「《虚しき鳥籠よ》」

詠唱を唱え天使兵を鳥籠に閉じ籠める。

「これで解除しない限りは出られないツス」

「ホッホッホッ、翼を持つ者にとつてはこれ以上に無い屈辱じやのう」

「セリナってかわいい容姿しててやることは結構エグいよね」

「……っ!? そ、そんなこと……無いもん」

天使を封じ込めるにはこれ以上に無い魔法だ。そもそもこの魔法は元々犯罪を犯した天使を閉じ籠めるための魔法。

「あまりウチのセリナ隊長を揶揄ってくれるな。揶揄うなら全てが終わってからにしてくれよ」

そこは止めて欲しい。

「……ヴァルナ……なんか嫌い」

悲しみからそんな事を呟くと、ヴァルナの表情は虚無を浮かべていた。一体どうしたと言うのか、ここに来てからヴァルナは変だ。

「わたくしのセリナに手を出すよりも、さっさと進軍しますわよ」

ミカエルの言葉にセリナ達は再び駆け出し、しばらく進むと漸く大扉の前に辿り着く。

ミカエルは大扉に手を掛け、魔力を流し込む。

この大扉は大天使の魔力か女神ウテナ、それか女神ウテナの世話役にしか開かない扉だ。

ミカエルによつて大扉が解錠され、扉が一人でゆつくりと開く。

その先の光景に誰しもが息を呑んだ。

「……ああ、ウテナ様……っ」

石像と成り果てた女神ウテナの巨像が玉座の前で、静かに鎮座している。

はじめて観る者は眼を疑い、セリナとヴァルナは息を呑む。

ミカエルから厳命された事、『決して女神ウテナの魂が不在で有る事を誰にも話しては成りません』その指示には釈然としなかったが、いまとある人物の出会いで理解が及んだ。

あの巨像から女神ウテナの魂が感じられない。だが、女神という存在が死ねば世界に莫大な影響を齎し、全ての時が停止した灰色の世界へと成り果てる。

そんな兆候は見られない。故に女神ウテナは抜け殻を遺して、まだ生存している。

もつとも魂だけの状態を生きていると言って良いのかは疑問に残るが。魂はすぐ側までやって来ている。

そんな事を考えているとフランが、ゆったりとした足取りで女神の巨像に歩み寄る。

「良いんツスか？ リア達に話さなくても」

思わず彼女に声を掛けると、彼女は微笑んだ。

「……皆の者、今までご苦労じゃったのう」

フランの口から発せられた彼女では無い声。

その声はこの場に居る天使の誰しもが耳にした声だった。

頭の理解が追い付かない。女神ウテナの声がフランから発せられている事に、天使達は理解が追い付かず、ただ事の成り行きを見詰める他に無かった。

「セリナ、レオ達には妾自ら説明するわ」

その言葉を合図にフランの身体が眩い光に包まれていく――

## 8—15

地に倒れ伏す天使兵をレオとリアは素通りし、大扉の前に足を止めた。

神殿地下は広大な迷路のような構造になっており、レオとリアは道に迷いに迷った挙句の果てに最終手段を取った結果が彼らだ。

そもそも事前に仕入れた地下構造とは大幅に異なる造りから、これも敵の防衛策だったのだろう。

「随分と親切な天使兵達だったな」

道が分からないなら知っている者に聞けば良い。

「……そりゃあさ、魔王にあんな形相で迫られたら誰だって答えちゃうわよ。それにアレは尋ねたとは言わない脅しよ、脅し」

気絶した天使兵に視線を向け、こちらに呆れた眼差しを向ける彼女にレオは笑う。

「魔界流だ、時間も惜しいからな。その方が手っ取り早いだろ」

「うん、それに戦死者も出て無いから私としても文句は無いわ。寧ろ次からレオに倣おうかしら?」

聖剣の柄に指を滑らせながら笑うリアの、彼女の表情に心臓が高鳴る。

何かの病気か。レオは疑問を払うように大扉を蹴り開け、魔剣を引き抜く。

その先には、真つ白な空間の中に鎮座する天竜が封じ込められた結晶とその前に鎮座する大天使が待ち構えて居た。

「お前が……大天使アザゼルか」

魔剣の剣先を向けながら問うと、彼は口元を吊り上げた。

「ああ、おじさんがそのアザゼルだ。……御前さんらは敵として此処に来たんだろ？  
なのに、何故敵を殺さねえ？ 先日はバラキエルの野郎を殺したろ」

確かにバラキエルをこの手で殺した。そこに罪悪感は一切無い、討つべき敵を討つただけのこと。

アザゼルの問いにリアがゆっくりと口を開く。

「ルシファアーってさ、用意周到というか用事深いわよね？ 天竜の解放方法も知っていて何か策を巡らせている。そう警戒すると神殿内の天使兵は殺せないのよ」

リアの言葉にアザゼルは間の抜けた表情を浮かべる。どうにも彼の覇気の無さと掴みどころの無い佇まいに、闘争心が萎える。

「……ルシファアーのことよく理解してんじゃねえか。だけどよ、アイツは俺達を信用して天界を任せただ。天竜を利用して人間界の人間を滅ぼすためにな」

「随分とお喋りじゃないか。てつきり情報を喋らないと思っていたが……？」



こちらの指摘にアザゼルは肩を竦めながら笑った。

「どうせそつちも有る程度はルシファアの目論見を掴んでんだろ？ なら隠す必要はねえだろ。だいたいおじさんは隠し事が苦手なんよ」

「ルシファアが選んだ配下と警戒していたが……徒労だったか」

アザゼルは嘘を吐いていない。彼の瞳は敵ながら晴々とした真つ直ぐな瞳を向けている。

「おじさんとしては、アンタらにはガツカリだけどなあ。敵を殺さねえ甘さにはガツカリだ……まあ、大事な部下を殺さないでくれて感謝はしているんだけどよ」

そう言いながら大剣を構え、魔力を放出するアザゼルにレオとリアは構える。

バラキエルの比ではない魔力量。紛れもない一万年以上の時を生き抜いた大天使が牙を抜いた。

相手は全力でこちらを殺しに来るだろう。だが、こちらは天竜の解放を阻止するため不殺で無力化しなければならぬ。

”一人でならば苦戦は必須”。だが、今は魔力が全結し、頼もしい好敵手が隣に居る。どんな敵にもどんな条件でも勝てる自信がレオには有った。

「さあ、リアよ。不殺でいくぞ」

「ええ、天竜は絶対に解放させないわ！」

リアの言葉を合図に彼女と同時に駆け出す。

両側からアザゼルの挟み込み、魔剣と聖剣の刃が両側から迫る中、アザゼルは大剣を大振りに薙ぎ払う。

重く魔力の乗った斬撃に二人の刃が受け止められる。

火花が散る中、レオは左掌をアザゼルに向ける。

「闇の炎でも喰らえ、『ダークネス・フレイム』っ！」

左掌に集う闇の炎にアザゼルは、足を踏み込み大剣で二人の刃を押し退けた。

レオは僅かに重心が逸れ、闇の炎が天井へと放たれる。天井を闇が侵蝕しながら炎が焼き尽くす様子にアザゼルは息を吐く。

「危ねえな」

そんな彼にリアは右薙を繰り出し、アザゼルはわざと自らの首を無防備に晒した。その直後リアは斬撃の軌道を無理矢理に逸らした。それが隙となり、アザゼルの蹴りがりアへと迫る。

だが、レオはアザゼルの蹴りに蹴りで抑え込み、その隙にリアの拳がアザゼルの腹部に重く入る。

「ぐお!!」へへっ、お嬢ちゃんのようなかわい子に殴られるのも悪くはないねえ」

「そんなに殴られたいなら、遠慮なく……!!」

拳に魔力を集めたりアはアザゼルの腹部に、

『洗波掌』っ!!』

魔法技——【洗波掌】による衝撃がアザゼルを襲う。

だが、確かに腹部に入った攻撃にアザゼルは怯まず、大剣を上段に構える。

「どうよ？ 硬質魔法つてのは」

腹部の筋肉を硬質化させリアの魔法技を防いだ。そしてアザゼルは大剣に光を集め、

「仕返しだ！」

大剣の刃を縦に叩き付ける。レオとリアは同時に大剣の刃を避けた。

しかし、地面から溢れ出た光の柱にレオは、素早く魔力結界を展開し光の柱に呑み込まれながらも魔法技を防ぐ。

「強固な魔力結界を一瞬で展開するなんざ、とんでもねえ化け物だ」

「バカ言え、貴様こそ化け物だ。無言詠唱からの魔法技を放つなど十分化け物に値する」

レオの指摘にリアが二人にため息を吐く。

「私から見たら二人は十分化け物よ」

「光が効かねえお嬢ちゃんも化け物だよ」

結局この場に三人の化け物が居る。無論誰も自分が化け物などと決して認めようとはしないが。

認めてはならない一線だ。世界には理不尽な塊が今も存在している。その様な存在と比べてしまえば、自分達の戦いなどまだまだちっぽけに過ぎないのだから。

「ふん、それ以上の化け物が貴様の背後に居ると考えると……全く頭の痛い話だ」

レオは天竜アルビオンを見据えて呟いた。

「おじさんに苦戦してるようじゃあ、天竜アルビオンはどうにもできねえだろう？ それにルシファアもだ」

「それは道理だな」

「けど、人は壁が大きいほど高く飛び越えるものよー」

縮地からアザゼルの背後に周り混んだリアが、聖剣の刃を斬り上げ、アザゼルは大剣を背後に向け彼女の刃を防ぐ。

レオはアザゼルに左掌を向け魔法を放った。

アザゼルの足元に魔法陣が現れる。そこにリアはアザゼルを逃しまいと聖剣を振るう。

「おいおい、巻き込まれるぞ」

「レオはそんな下手を打たないわ」

彼女の言葉を合図に魔法陣から闇の鎖を放つ。レオは魔力で鎖を操り、リアに決して当てぬように気を配りながらアザゼルの両腕両脚を拘束していく。

しかしそれだけでは、彼は楽々と拘束から逃れるだろう。魔力さえ健在ならば。

「…………!? ま、魔力が抜ける、だと…………っ」

「どんな生物であろうとも魔力に依存する以上、魔力が無ければ無力だ。例えば魔王や勇者がゴブリンに負けるようにな」

ルシファアの不意打ちによる魔力消失、その後の優しいゴブリンと戦い負けた経験。

魔核を砕かなければ戦えない状況下が続き、蓄積された経験によりレオは敵を無力化する術を編み出した。

吸収魔法——【ドレイン】ではアザゼルに抵抗されるだろう、魔法技——【吸魔一刀】はアザゼル相手には一度限りだ。

ならばルシファアが使用した方法を模倣すれば良い。無論そこは、ルシファアのようには他者の魔核に杭を打ち込む様な事は出来ないが。

「闇は全てを呑み込む。そこに吸収魔法の性質を掛け合わせれば……………どんな魔力をも吸い尽くす鎖となり得る、貴様ら天使にとっては皮肉な魔法だろうか？」

「……………ああ、これ以上に無いぐらい皮肉な魔法はねえな」

力が抜け大剣を地面に落とすアザゼルに、リアは息を吐く。

「もう抵抗する力も無いわよね？」

「ねえよ。けどよ、お嬢ちゃんはスカートを履いてなせばんつが見えねえんだよ!!」

不満を顕にした、それでいて気の抜ける言葉にレオは頭を抑えると、リアは不敵な笑みをアザゼルに向ける。

「身嗜みは女として当然だけど、剣を扱う者が戦闘の最中にはぱんつを曝すのは三流。常にスカートが受ける風圧を計算に入れて立ち回るものよ」

そういえば彼女は戦闘の最中に今まで一度も、ぱんつを一眼に晒したことは無かった。有ったとすれば、それは戦闘と関係の無い木登りの際にだ。

「……はあ、ポイン姉ちゃんのミカエルとか、愛くるしいセリナはセクハラのやり甲斐が有ったつてのによ」

「……最低ね」

冷え切ったりアの声に、アザゼルは苦笑を浮かべる。

戦闘が終わり気が緩む時が流れ、アザゼルは両手を挙げ、降参の意を示す。これで天界の内戦は終戦へと向かう。

そう喜んだ束の間。

突如としてアザゼルの周囲に魔法陣が現れたのは。

レオとリアは咄嗟にアザゼルを護ろうと剣を振るうが、光の槍は二人の刃をすり抜けアザゼルの身体を串刺しに貫く。

「……………っ！　そういう……………事かよ。……………あ、い、つは、はなっから俺達を……………」

レオは鎖を解除し、魔力をアザゼルに分け与えるが、

「……………いい、もう良いんだよ。俺は、部下を犠牲にした、その咎を受けたっただけだ……………天竜は解き放たれちまうが……………女神さえ解放すれば……………」

そう言つてアザゼルは静かに息を引き取つた。

悔いが残る戦いだ。レオは握り拳を作り、展開された魔法陣を鋭く睨む。

「ルシファー、貴様か？ 貴様は配下さえも切り捨てるのか」

「そんな、それじゃあ内戦の意味は……………これじゃあ犠牲者は……………っ」

最初からとは思えないが、ルシファーはアザゼル達の敗北の可能性に保険を掛けていた。

天竜アルビオンの解放を成し遂げるための保険を。

そう理解した時、結晶に亀裂が走る。

結晶から溢れ出る膨大な魔力に空間が揺れ、レオとリアを光が呑み込んだ——

## 8—16

レオとリアは気が付くと、そこは神殿の外だった。

辺りを見渡すとミカエルを始めとした天使、ザガンとその部隊、そして神官ナナの姿がそこには有った。

そして空に眼を見上げると一面に広がる雷雲と、神殿の上空に佇む天竜アルビオンの姿が映り込む。

「……目覚めたようじゃな」

背後から聴き慣れない声に振り返ると、レオとリアはその人物を見上げた。

「……お前は……女神ウテナか？」

「えっ？　女神って巨人だったの？」

「これはその様に姿を取っているだけじゃよ。……アルビオンは解き放たれようじゃが、戦う意志は有るか？」

女神ウテナは真つ直ぐだアルビオンを見据え、そんな事を問うた。

アルビオンが解放されたならまた再封してやれば良い。レオは魔剣を握り締め立ち上がる。



「無論だ、解放の隙を招いた償いが俺には有る」

「当然私も戦うわよ！ 責めてアルビオンを再封印してルシファアの出鼻を挫きたいもの！」

そうでもしなければ天界の内戦に意味が無くなる。

アルビオンを見上げると、背の天輪を輝かせ竜は女神を鋭い眼光で睨んだ。

封印された明確な殺気とアルビオンの周辺を渦巻く魔力が向けられる。

「邪竜隊、至急竜化せよ」

レオの指示にザガーンを始めとした邪竜族が、

「『『我が真の姿を顕現させよ』』』」

五十一名にも及ぶ邪竜族が一斉に竜へと変貌する。

レオは近場の邪竜族の背に飛び乗り、

「リアとナナはザガーンの背に乗れ！ 天使達よ、急ぎこの場を離れるぞ！」

アルビオンに集う魔力が此処に居ては破滅を齎す。そう察したレオが鋭く指示を飛ばす中、リアとナナはザガーンの背に飛び乗った。

雷雲を飛翔する邪竜の群れと天使の軍勢。しかしウテナはその場から動かない。

アルビオンの狙いはウテナ並みに集中している。つまり彼女は自ら囿を選んだのだ。

「女神よ、吹き飛ばええええ!!」

アルビオンは大口を開け、膨大な魔力が閃光となりウテナへと放たれる。

迫り来る閃光を、ウテナが神殿ごと呑み込まれていく様をレオ達は目の当たりにした。

閃光が弾け、神殿が在った土地は灼熱に晒され溶解していく。やがて閃光が収まると、神殿は溶け大地は溶岩地帯へと変わり果てていった。

神殿は無くなってしまったが女神は生きている。寧ろ閃光に呑まれる刹那の一瞬で彼女は逃れていた。

「女神は何処だ……隠れるつもりか？ ならば貴様のかわいい子らを喰らい尽くしてやろう」

殺気を振り撒き漸くこちらに視線を向けたアルビオンに、レオは口角を吊り上げた。

「丁度いい、これも魔狼スコルを討伐するための糧にきて貰おう」

その言葉を合図に、ザガンは口からアルビオンに灼熱の業火を放つ。それに続く様に邪竜隊が息吹を放った。

アルビオンは迫り来る業火の前に、十二枚の翼を羽ばたかせ息吹を掻き消す。だが、ザガーンの放った灼熱の業火だけは消せず、アルビオンの翼に火傷を負わせた。

「小賢しい」

アルビオンは上空に向けて光を放った。放たれた光が弾け、レオ達に向かって降り注

ぐ。

「させませんよ！ 『プロテクトフォース』 ツツツ!!」

「皆んなを守るツス！ 『ガーディアン』！」

ナナとセリナが唱えた防御魔法が戦場全域を包み込む。

降り注ぐ光と雷雲から落ちる雷を防ぐ。しかしアルビオンがザガンに向けて飛び、前脚を振りかざした。

アルビオンの前脚をザガンは身体を大きく捻らせ、迫る前脚を避けた。

レオは戦況を冷静に見つめ、アルビオンに掌を向ける。

「闇の彼方より来たりし災害よ」

珍しくレオが詠唱を唱える姿に、邪竜隊は冷や汗を流す。

雷雲よりも遙か上空から轟く音に、ミカエルは頬を引き攣らせる。

「れ、レオ？ 貴方……まさか!？」

「《流星となり降り注げ》!!」

雷雲を切り裂き、アルビオンの頭上に降り注ぐ隕石群にミカエルは悲鳴をあげた。

「誰が天界に『メテオ』を唱えて良いと言いましたか!？」

「天界の強度ならば『メテオ』の十発は耐えられるだろ」

そもそも狙いはアルビオン一頭のみ。レオは再び魔力を解き放ち魔法の詠唱に入る。

隕石群を前にしたアルビオンは、十二枚の翼を羽ばたかせ飛ぶ。軽やかな旋回と飛行を駆使して隕石群を避ける中、

「避けは悪手だ！」

アルビオンの背中に転移魔法を展開させ、竜が避けた隕石群が転移によって現れる。

「ぐぬおおお!!？」

背に絶え間なく直撃する隕石群の爆発と衝撃にアルビオンは悲鳴を上げた。

そこに畳み掛ける様に、

「『『『セイントアロー』』』」

光の矢がアルビオンの翼を射る。

貫かれた翼が崩れ始めるが、それでもアルビオンから飛行能力を奪うことは叶わな  
い。

「みんな！ 頑張るツス！ 災害を乗り越えて明日を迎えるために！」

魔力を乗せて旗を振り、味方全員を鼓舞するセリナにレオは改めて感心を寄せる。

「ふむ、やはりあの手合いはウチにも欲しいな」

「スカウトはダメですよ？」

釘を刺すミカエルにレオは舌打ちし、浮遊魔法を駆使しながら空を駆ける。

狙うはアルビオンの首。魔剣フェルグランドに闇を纏わせ接近すると、邪竜族の背を

足場に跳ぶリアの姿が視界に映り込む。

無防備なアルビオンの首に、二人の全体重を乗せた魔剣と聖剣の刃が交差する。

「ぐぬわあああ!!」

首を切り裂かれ悲鳴が轟く。それでもアルビオンは未だに倒れない――

傷を負うアルビオン。一見こちらが優勢に見えるが、それは大きな間違えだ。

リアはアルビオンを見据える。衰えない魔力、確実にダメージを与えた筈がまるで手応えが無い。

確かに鱗と肉を斬り裂いた感触が手に残ってはいるが、

「……血は流してるけど、大した痛手にはなってるわね」

リアがそう呟くとナナが魔法の詠唱に入る。

「《穏やかな水よ暴水となりてかの者を押し流せ》」

ナナの周辺に漂う水の魔力が次第に大きな唸りとなっていく。

大きな唸りはアルビオンの頭上から激流となり降り注ぐ。

水流魔法——「アクアストリーム」がアルビオンの動きを封じる。

「みなさん！ わたしの魔力が尽きる前に……！」

魔法を途切らせまいと過疎に魔力を送るナナに、リアは聖剣を握り締める。

既にレオは次の攻勢に出ている。彼は一人でアルビオンの上空に浮かび、魔剣に闇と炎を集めている。

なら自分の出来ることは、斬撃を絶えず飛ばすこと。

「《光よ刃となり走れ》」

リアは聖剣を大きく振り、魔法技——【洗斬】を放った。激流を斬り裂き、アルビオンの肉体に、確実に傷を負わせていく。

「《大いなる裁きの雷よ》」

ミカエルの詠唱が聴こえる。

【アクアストリーム】に対して追撃の如く放たれる【天雷】が合わさり、アルビオンの鱗を焦がしていく。

「水により雷は威力を増しますわ……ずっと耐えられるかしら？」

「……ミカエル様が凶悪な笑みを浮かべてるツス……！」

「ば、バカ！ 今はそんな事を言っている暇じゃあない！」

戦闘の最中というのに賑やかな声だ。

リアは【洗斬】を絶え間なく放つ中、レオに僅かに視線を向ける。すると彼が所持していた魔剣が、闇と灼熱の刃へと変貌している様が視界に映り込む。

前にサタナキアも似たような事をした。ただ、あの時とは威力も範囲も異なる。繰り出すのは魔王だ、今では魔力が全快状態の彼が放つのは正に一撃必殺。

「全員衝撃に構えろよ……！」

大きく右腕を振り絞ったレオは、弓を射る要領で魔剣をアルビオンに投擲した。

魔剣が空間を歪ませながらアルビオンへと迫る。迫り来る脅威を前にアルビオンは、激流と雷に身動きが取れない。

しかしそこに焦りの色、生物としての恐怖心が一切見えないことにリアは、聖剣に魔力を急速に集める。

何か嫌な予感がする。そんな直感からリアは動いていた。

魔力を集める中、魔剣がアルビオンの肉体を闇で侵蝕しながら溶解させ、凄まじい衝撃波が周囲一帯に振り撒かれる。

アルビオンの肉体を貫いた魔剣は、レオの魔力一つで彼の手元に還る。

肉体を貫かれ、白銀の鱗が醜く溶解し、十二枚の翼が欠け見るに絶えない姿へと変わり果てたアルビオンは——不敵に笑った。

確かにアレは致命的な一撃だった。それだと言うのに、アルビオンの傷が急速に癒えていく。それは正に一瞬のことで、

「……嘘、生物としての致命傷を一瞬で回復させた……？」

自分の声が震えている。それでもリアは聖剣に集わせた魔力を刃に変え、唐竹からたけを放つた。

限界までに集められた魔力の刃に、アルビオンの頭部は斬り裂かれ、リアはそのまま



の勢いで刃を振り切る。

真つ二つに斬り裂かれたアルビオンの姿に、天使の歓声が轟く。

頭部を、脳と心臓ごと斬り裂いた。なのに終わらない戦いの予感が強く肌を感じる。

「みんな！ まだ、まだ油断しちゃダメ！」

斬り裂かれたアルビオンは、

「我をこの様な姿にするとは……！」

斬り裂かれた喉から確かに声を発し、周辺に魔力を解き放った。

魔力が鋭い刃となり、無数に拮がる斬撃をリアは聖剣で弾く。

一度弾いて理解する。重く鋭い完全な暴力だ。腕が痺れ二度目は防げない。

「勇者とナナよ！ 振り落とされるなよ！」

ザガンは高速で旋回しながら無数の斬撃を避ける。

ただ、運悪くりアの視界に一発の斬撃が映り込む。目の前に迫る斬撃に腕が動かない。  
い。

(……あつ)

声を出す暇も無い。死が目前と迫る刹那の中、突如白髪の長い髪が割り込む。

頬に舞う鮮血、遠へ落ちていく左腕が映り込む。震える視線を向けると——左腕を失ったレオガリアを庇っていた。

「れ、レオ……っ!!」

夥しい量の出血に悲痛な声が漏れる。それでも彼の横顔は笑っていた。

「たかが腕の一本だ。腕など魔力でどうにでもなる……!」

彼の闇が左腕を形造り形成されていく。レオは左腕の維持に常に魔力を使用している状態に陥っている。

紛れもない自分の責任だ。自分を庇わなければレオが腕を失うことなど無かった。

自身の不甲斐無さと力不足に涙が頬を伝う。

「リアよ。腕よりも人命だ。生きてさえいればどうにでもなるものだ。それに俺は代わりの腕を手に入れたぞ? 前よりも随分とカッコいいと自負しているのだが……?」

不敵に笑みを浮かべながら、『如何だ?』と問い掛ける彼に、

「……レオ、レオのセンスなんか分かんないわよ」

涙声で訴えた。すると彼は困った表情を浮かべ、

「む、むう……そんなに悲しむとは……なんだ、思ってもみなくてな」

「レオ様は……少々無茶が過ぎる。いや、咎は我が受けるべきだと言うのに」

「ザガンよ、あの嵐の如く斬撃を全て避けろというのは無謀な話だ。防ぐにも腕が痺れて敵わん」

絶え間なく続く斬撃の嵐をミカエルは、自身を含めた天使の周囲に転移魔法を施すこ

とで、その凶刃から難を流れていた。

よく周りを見渡すと邪竜隊の周囲にも転移魔法が張られている。

「レオも……みんなを守っていたのね」

「俺は魔王だ。配下を守らずしてなんとする?」

さも当然のように言つてのける彼に、次第に涙が引いていく。同時に彼に対して心の内側から熱く燃えるような感覚が頬に熱を灯す。

「リアさん、今はアルビオンの対策を練らないと……。それに魔王、治療魔法は必要ですか?」

「いや、魔力は温存しておけ。俺にはアンナから受け取った治療ポーションが有る」

そう言つて闇で形成した左腕を器用に操り、瓶の蓋を開け口に運んでいく。

一気に飲み干した空の瓶をアルビオンに向けて投げ付けた。

瓶が割れアルビオンの瞳に突き刺さる。

「……レオは……いつも左手で魔法を使っていたけど」

「まあ、右手でも放てるが剣が邪魔だな」

魔法を放つためには剣を地面に突き刺すなり、鞘に収まるか口に咥える必要がある。

これは明らかな弱体化だ。

「だが、魔法とは空間把握能力さえ備わっていれば方向を定める必要は無い。……それ

にアルビオンは不死身だ、見る既に斬り裂かれた肉体が元に戻りつつ有る」

言われてアルビオンに視線を向けると、真つ二つになつた肉体が徐々に接合されている。

はつきり言つて不気味な姿だが、如何やら今のアルビオンは動けない様子。

レオはアルビオンを見据えながら詠唱を唱える。

「《無限の闇よ全てを闇へと誘う虚無の渦となり敵を呑み込め》」

珍しく長い詠唱を聴き入っていると、アルビオンの周辺が闇に照らされていく。

闇が渦を巻き次第に大きな孔を創り出し、闇が雷雲とアルビオンの羽を引き寄せ呑み込む光景が映り込む。

「な、なに？ あの魔法は」

リアの疑問の声にザガンは静かに答えた。

「闇魔法——『ブラックホール』……無限に拡がる虚空の海へ引き摺り込む凶悪魔法」

膨大な魔力が急速にレオから失われている。恐らく発動は一日に一度だけの魔法。幾ら魔族が魔力回復量が多くともあれだけの魔法を放つには、レオの全ての魔力を使わなければならぬ。

恐らくレオは左腕が健在ならば『ブラックホール』を放つた後も余力が残るはずだつた。

「身体が……！　私の身体が引き寄せられる……っ！　虚空への孔を開く者が存在しようとは……！！　だが、我には無意味！」

闇の孔に呑み込まれまいと抵抗を続けるアルビオン。天使の一人が援護として「セントアロー」を放つが、それさえも闇に呑み込まれていく。

つまりあの魔法が発動中は、全ての魔法を吸い込んでしまう。現にアルビオンが放った魔力の斬撃は孔に吸い込まられている。

レオの魔力が枯渇が先か、アルビオンが吸い込まれるのが先か。

誰しもが見守ることしかできない。そんな時だった。

空間が割れ、中からアークが飛び出しのは。

「あ、アーク!?　誰が運転を……っ」

天使の疑問の声に、

「遠隔操作じゃよ」

自分達の頭上に現れたウテナがやんわりと答えた。

アルビオンはウテナの姿を認識すると、

「女神、貴様ああ!!　漸く出て来たか!　こっちは来い!　その肉を引き裂き血肉を喰らってやるっ!」

激昂し吠えた。

「嫌じゃよ。しかしのう、流石の天竜といえども『ブラックホール』の吸引力には抗えぬようじゃな」

ウテナが手を払うと、アークがアルビオンは向けて急速発進し、そのまま速度で巨大に車体を衝突させた。

だが、アルビオンは両腕でアークを抑え込んだ。

アークの速度が緩まった一瞬、アルビオンは前腕を大きく振りかざし、アークの先頭に叩き付けた。

天竜の一撃は防護魔法もアークの装甲をも容易く砕き散らし、破壊されたアークが落ちていく。

「ああ、アークがー」

アークの破壊に悲鳴をあげる天使の声が響く。

だが、アークはタダでは犠牲にならなかつた。アルビオンがアークに気を取られ攻勢に出た一瞬、竜は闇の孔に対する抵抗を緩めてしまった。

大きく引き寄せられるアルビオンは翼を羽ばたかせるが、

「《神聖の鎖よ大いなる厄災を鎮め閉じ込めたためえ》

ウテナの詠唱によってアルビオンの周囲に魔法陣が展開される。

そこから放たれた鎖がアルビオンを貫き巻き付く。鎖に雁字搦めにされたアルビオ

ンは身動きが取れない。

それどころか鎖を起点に結晶化が始まり、

「ま、また我を閉じ込めるのか！　だが我は何度でも復活するぞ……っ！」

「殺せぬ以上はそうじやろうな。ただ、次は誰の手も届かない暗き海じやがな」

ウテナの冷え切った声にアルビオンは息を呑んだ。

それでもアルビオンは足掻き、口に魔力を圧縮させ集わせた。その速度は余りにも早く、莫大な魔力が一点に収縮され、アルビオンはソレを女神に向けてブレスを解き放つ。しかし、闇の孔に引き寄せられる身体がアルビオンのブレスが大きく逸れる。空へと続くブレスは、空を燃やし空間が震撼する。

最期の足掻きを終えたアルビオンは、とうとう全身が結晶に包まれると、闇の孔が結晶を呑み込み、孔は消滅した。

魔力を使い果たしたレオの身体が大きく揺れる。リアは咄嗟に彼の肩を支えた。

「終わったんだよね？」

「……流石に魔力が空っぽだ。……戦闘で魔力をここまで使ったのはいつ以来か」

「うん、お疲れ様……ゆつくり休もう」

ゆつくりと頷くレオをリアは支えながら、周囲に視線を向ける。

戦いが終わった事に涙を流す天使達。隣で疲労から座り込むナナ。

晴れ渡った天界の空を悠々と飛ぶ周る邪竜隊。

戦死者が出なかつたのは正に奇跡だ。

その後リア達は地上に降り、疲労困憊のまま拠点【メトロ】に帰還するのだった――



## 8—18

天界の内戦は終わり誰しもが疲労を癒す中、レオは眼を覚ました。

右手が温かい温もりに包まれている。何かと視線を向けると、右手を握り締めて眠っているリアの姿がそこにはあった。

「……全く無防備な」

彼女の甘い息遣いが右手にかかる。ソレがむず痒く、得体の知れない感情が胸の奥から沸々と湧き上がる。

闇属性で作りに出した手をリアの頬にそっと近付け、レオは思い止まった。

「……闇で触れる訳にはいかんか」

ただ腕を形成しているに過ぎないが、何故かこの腕では彼女に触れたくないという想いが押し留めていた。

理性が戻ると、今度は何故自分は眠っていたのか。そんな疑問が過ぎる。

改めて辺りを見渡すと、治療器具が置かれている事に漸く気が付く。

「……は医務室か」

そんな呟きを漏らすと、ドアが開き片手に果物の山を抱えたザガンが入室した。彼

は起き上がったこちらを見るや肩を竦め、

「お目覚めでしたか。何故倒れかは覚えて？」

「……戦闘を終え、市街地を歩いてたところまでは覚えているが……その先は記憶に無いな」

彼はそうだろうな、と呟き、リンゴを一つ投げて寄越す。レオはソレを左手で受け取り口に運んだ。

水分と甘味がたっぷりのリンゴに喉の渇きと空腹が紛れる。

「あなたは移動中に倒れた」

ザガーンという言葉に耳を傾け、倒れた事に息が漏れる。

「む、魔王としては恥じるべきか」

「絶対に倒れない魔王など実在しない。……それに倒れたレオ様を背負い運んだのは、そこで眠っているリアなのですよ」

いよいよ魔王として如何なのかと自身の在り方に疑問が湧き起こる。勇者に看病される魔王など聴いたことが無い。

呆れた眼差しを向けるザガーンに、

「むう……リアにか」

「ええ、倒れたのも左腕を失ったのも自分の責任と言って聞かなくてな。……それに彼

女ならレオ様を任せられると判断したまで」

彼の言葉を聴いて胸の中を罪悪感が占める。

「なるほど。……なあ、ザガン」

「何でしょうか？ 食事ならば生憎と果実しか有りませんが」

それはそれで死活問題だ。いや、それよりもレオは口を開いた。

「俺は随分と彼女を悲しませたようだな……それは理解できる。だが、何故罪悪感が——」

「罪悪感を感じるのか、理解できない」

長年の付き合いからこちらの聞きたいことを答えるザガンに、レオは苦笑を浮かべる。

「ああ、そうだ。心は感じるが頭の理解が追い付かん」

「それはそうでしょう。感情の揺らぎなど頭で理解しようとしたところで、完全には理解できないのですから。それに……アルティミアもきつと悲しむでしょう」

ザガンの言葉に、涙ぐむアルティミアの顔が浮かぶ。彼女の泣き顔が頭に浮かんだだけで、心臓が激しく締め付けられる。

「……リアとアルティミアか」

同時に心に宿る温かさに、レオは漸く答えを見い出した。ただ、その感情を言葉にす

ることは無い。

まだ人間界の戦いは終わっていない。それに勇者リアと魔王レオとして決着を付けなければ、魔族と人間の争いも終わらない。

見出した答えを、二人に告げるのはその後でも充分間に合うだろう。もしかしたら自身の勘違いという事も有る、事は慎重に運ばなければならない。

「ああ、それと女神から勇者も目覚めたらミカエルの執務室に来るようにと。何でもフランの事や話すべき事が有るとか」

「ふむ、要件は分かった。時に投降したルシファー派はどうなった？」

「……生が続く限り殺めた者達への償い。それと戦後は監察付きで人間界での無期限の奉仕活動という処罰に落ち着いたそうだ」

ルシファー派の決して少なくな無い天使兵を労働力に充てる。ルシファーという神に成り得た者を崇拜した結果、彼らは敗北を受け罪を背負いながら生きることとなる。

それは生き地獄か、それとも——レオはそこまで考え、

「……それにしてもリアはいつ起きるんだ？」

右手を握ったまま眠っているリアに視線を向けては、ため息が漏れる。

どんな夢を見ているのか、人の手を握り安らぎの寝顔を浮かべている辺り、楽しい夢なのだろうか。

「しばらくはこのままで良いか」

優しい笑みを浮かべるレオに、ザガンは笑みを浮かべ彼と彼女を温かく見守った――

## 8—19

羞恥心が収まらない中、リアはレオと共にミカエルの執務室の前に来ていた。

「はううう〜」

「まだ気にしてるのか」

無防備な寝顔をレオに見られた事が何よりも恥ずかしい。加えてずっと彼の右手を握ったまま。

「だ、だつてえ!! だいたい起きたなら起こしなさいよ!」

そう叫ぶとレオは詫げられる様子も無く、にやりと笑みを浮かべる。

「看病に疲れていたのだろう? 流石の俺も看病に尽くしてくれた者を無碍にはできんよ」

無防備な寝顔を晒したのは自身の過ちだ。それは認めよう。だからと言って起きるまで眺めているのは如何いうつもりなのか。そう喉から出掛けた言葉を飲み込み、漸く扉に手を掛ける。

そのまま扉を開けると満面の笑みを浮かべながら、温かい視線を向けるセリナ達の姿が映り込んだ。

扉をそのまま閉めて全力で人間界に帰りた。そして毛布に包まり絶叫したい衝動を抑えながら、

「い、いま……来たわよ」

「ええ、扉越しから存じてましたわ」

微笑むミカエルの言葉がリアに突き刺さる。

「羞恥心に悶えるリアに言葉の矢を突き刺すとは……いやはやミカエルは案外——」  
 「満更でも無い魔王が言えた言葉でしょうかね？」

レオはミカエルの指摘にギリつと齒を食いしばった。

「……さては覗き見していたな？」

「あらあら何の事でしょ？ セリナ、彼は一体何を言ってるのでしょうね」

とぼけるミカエルにセリナはジト目を向け、深いため息を吐く。

「覗き見なんて趣味が悪いから辞めましょうってあれ程言ったのに」

「セリナ、あとでその話を詳しく聴かせて」

「い、よ」

特にこれと言って確認することは無いが、人様の寝顔を観察していたレオがザガンとどんな話をしていたのかが、非常に気掛かりだ。まさかとは思うが、間抜けな寝顔を笑われていたのかもしれない。

微笑むセリナにレオは鋭い眼光を向け、

「セリナよ……他言は無用だ」

「あつ、はい」

彼女に威圧を放ち黙らせてしまった。

リアは改めて女神ウテナに視線を向ける。そこには、巨大な姿から人並みの身長姿の彼女が居る。

「それで話って何かしら？ フランおばあちゃんのこととか聞きたい事もあるけど」

「先ずはフランのことから話そうかのう」

改めて聴くとウテナの口調は老人のようだ。それが何処となくフランを思わせる。

「フランは妾の仮初の器。妾はお主らの言う占い師フランでも有るのじゃぞ」

そんな事を言うウテナに、リアとレオはあまり驚かなかつた。

そもそもフランという老人の素性は怪しい点ばかりだった。ハーヴェストに長年住むアンナは占い師フランに付いて何も知らなかつた。特に往来の多い街の門の側で占い師をやつて居ながら、誰も存在を知らないという方が余りにも不自然だった。

極め付けはセリナの反応だ。フランと少ない言葉を交わした彼女は、『そういうことなのね』と確かに呟いた。そして女神解放には自身が必要だと。

「何じゃ驚かぬようじゃな」



つまらなそうに呟くウテナにリアは苦笑を浮かべる。

「フランの正体が女神だったなんて答えには辿り着かなかったけど、言われてみると腑に落ちる点が多いのよね。それにレオは薄々察してたみたいだし」

「うむ、疑いの段階だったけど……俺も正体には気付かなかったぞ」

レオの言葉にウテナはわざとらしく肩を竦めながら、

「そうかのう。……時に二人はアルビオンが最期に放った一撃を覚えておるかのう？」

「うん、覚えているわ」

忘れられそうに無い光景だ。空間が歪む程のあの攻撃を。それだけで無く、レオの左腕を失う結果も決して忘れられない。

「……最後の悪足掻きがどうかしたのか」

ウテナは深妙な表情を浮かべ、静かに頷いた。

「うむ、彼奴の最期の一撃は三界世界が存在する次元空間に大穴を空けおつてな。……そこから別の世界に三界世界の魔力が流れ込んでいるようじゃ。もつとも妾はこの次元からは出られん以上、如何することもできぬが」

「穴を閉じる事は？」

「無理じゃ。そもそも次元空間とは世界の始まり以前から存在する空間。妾達は転移魔法で異空間を開き、転移できるが……次元空間ともなれば修復は時の流れに任せる他に

無い」

次元空間に穿たれた大穴は修復できない。魔力が異世界に流れるとして、それは何かしらの影響を及ぼす。

例えば魔力の概念が存在しない世界だった場合だ。存在してない概念が存在する。世界はそれを受け入れようと在り方を変えていく。

ウテナはゆつくりと語り、リアは大きく頭を抱えた。

これはもう自身がどうにかできる許容範囲を超えている。

「……現状大穴に付いては放置しかあるまいな。……しかし俺がかつて訪れたあの世界には何も影響が無いのは安心だな」

そんな事をいうレオにリアは疑問を浮かべる。

「どんな世界だったの？」

「……人間、魔族、天使、魔物そして神が存在するが、そうだなこの世界には存在しない墮天使と悪魔が存在するようだ。まあ、悪魔は時の流れによつて魔族と種を改めたそうだが」

レオの語る異世界にリアは興味深々に耳を傾けると、ウテナが一つ咳払いを鳴らす。

「異世界の話も良いが、人間界についても話をせねばな。ルシファーを打倒するために」

リアとレオは頷き、漸く戦乱の終わりが見え始めた事に笑みを浮かべたのだった——

## 8—20

アルデバランの森に在る魔都市アルデバラン。そこにはレオが築き上げた魔王城が都市を見下ろしている。

だが、そこにはもう魔王レオは居らず、魔族もアルデバランから姿を消していた。残されたのは天使兵と中央広場に鎮座する魔界の門のみ。

都市に吹く風が虚しく吹き通る。

しかし、そんな状況はルシファーには関係の無い話だ。最初からレオに代わり魔族を導く事も、内政に尽力する事も無い。

彼にとつては人間の殲滅が最優先事項であり、それ以外の事など眼中に無いのだ。

ただ、人間殲滅を円滑に行い最終計画のためにレオとリアから魔力を奪ったに過ぎない。

【昇華】から目覚めたルシファーは十二枚の翼を広げ、眼前に跪くサタナキアを見下しながら耳を傾ける。

「報告が……天界制圧部隊が鎮圧され、バラキエル及びアザゼルが戦死……っ！」

僅かに動揺を見せるサタナキアにルシファーは、冷やかな視線を向けた。

その程度の事で何故動じるのか。そもそも天界に居た部隊が鎮圧されようが計画に何ら支障は無い。

ルシファーは、それよりもと重々しく口を開く。

「……私の計画に狂いは無いが、天竜アルビオンの解放は如何した？ 確実に解放させるために女神を封じ、神殿に小細工を労したが……失敗したのか？」

「……解放はされた様だが……そ、その、アルビオンは再び封じられたようで、おまけに女神も解放されたと」

天竜アルビオンとは無限に等しい生命と魔力を持ち、あの女神ウテナでさえ討伐し切ることが叶わなかった災害だ。

それが再び封印された事にルシファーは、目覚めてから感じられないレオとリアの魔力に眉を歪める。

もう用済みだ。そう思い、仕掛けた魔法陣を起爆させようと魔力を送り込んだが、魔法陣は既に解除されたのか反応が無い。

「……魔王と勇者が鎖を外し魔力を取り戻したか。用済みとなれば始末する予定だったが、まあ良いどの道奴らは此処に来る。その時こそ我が自ら首を刎ねよう」

「女神の始末は？」

幾ら混沌の魔力を得たところで、女神を二度封印することは叶わない。あの時はゴル

ゴーンの瞳で石像に変えたが、ゴルゴーンの瞳は一度使用すると砕ける。そのため別の方法で封じる必要がある。

「今は捨て置き。奴も此度の戦乱に介入するかもしれないが、その時は私の魔力の糧にしてやろう」

女神の魔力を得る。そして自分は神へと至り漸く計画が大幅に進む。

神に昇格することなど通過点に過ぎない、それはアルビオンの解放も同じこと。

全ては人間を滅ぼし、新たな人類を創造するための下準備に過ぎない。

「ルシファー様の計画は偉大だ。……しかし、ロラン。アイツの策略で魔王と勇者の魔力回復の隙を生み、天界の鍵を奪われ、そして魔族はみなアイツに着いて行った」

確かにサタナキアの言う通り、ロランは想定外だった。幾ら自分とは言えども、心をあそこまで完璧に偽られ見抜くことは叶わなかった。

「ふん、ロランは魔王と合流する腹詰まりだろうがな、手間が省けるといふもの。サタナキアよ、貴様には混沌結晶を預ける、巧く活用しロラン討伐の任を果たしてみせよ……失敗は赦されないぞ？」

サタナキアは失敗を犯した。部隊を率いながらキュアリア村から敗走したこと。

二度目の失敗は無い、そう暗に告げるとサタナキアは、

「我が命に代えても成し遂げてみせましょう！」

気合い十分に答えた。

ふと、サタナキアは辺りに目線を向けると。

「あの、ルシファア様？ アガリアレプトは……？」

彼の意外な質問にルシファアは面食らった。サタナキアが彼女を気にするなど意外だったからだ。

意外だが、アガリアレプトがこの場に居ない理由を隠す意味も無い。

「彼女は我の子を産むために身を清めている。戦に絶対など存在しない、万が一我が倒れた後の後継者は遺しておくべきだろう？」

「そのためにあの女を抱くと……？」

「配下の女天使で魔力量の水準を満たしているのは、アガリアレプト一人だけだからな」  
 次代のために魔力と血を遺す。仮に自分が倒れた場合、次の後継者が人間殲滅に動くように。

自身の意志を遺してまで成し遂げねばならない。それが自分の最大の過ちを償う方法だ。

「なるほど。……では、最後に……何故勇者リアに光属性が通じないのか」

「さあな、我もそこまでは知らん。ただ、利用するには都合の良い魔力だった、それだけの事よ」

そう答えると、サタナキアは納得したのか改めて臣下の礼を取り急足に立ち去って行く。

サタナキアは勇者の心を壊し人形にすると息巻いていた。それはそれで人間殲滅が捗るため都合が良かったが、人形にもなり得ない小娘を生かすほど甘くは無い。

彼の背中を冷ややかに見送りながら、ルシファーはそんなことを思っていた。

そしてルシファーは玉座から立ち上がり、掌を真上に挙げる。

「さて、人間殲滅のために一石投じるとしよう」

自らの物にした混沌の魔力の試し撃ち。そのためにルシファーは魔力を練り上げ、無言で混沌の矢を放った。

それは空まで飛び上がり、弾けると地上に向かって矢が降り注ぐ。

対象は人間の住む全ての領域。一発で事が終わるならそれで良い、そうルシファーは嗤った。

しかし、地上に降り注ぎ破滅を齎す矢は、上空に現れた魔法陣によって阻まれてしま

う。

「……女神め、既に動き出したか」

人間界全土を包み込む女神の結果が空に映り込む。

まだ自身の魔力は女神に届かない。それを暗示するように無傷な魔法陣が鎮座して



いる。

「まだその領域には届かんか」

まだ魔力の制御が上手くいかない。渦巻く混沌の中で光と闇が強く反発し合う感覚がまだ在る。

光と闇が持ち主に似たのか強く反発する事に、ルシファーは人知れず笑いを噛み殺した。そうで無くては面白くないと――

## 第九章 攻勢に向けて

## 9—1

天界の内戦が終わりを迎え。荒れ果てた天界の復興に一部天使とルシファー勢力の捕虜を遺し、女神ウテナと大天使ミカエル率いるルシファー討伐部隊がレオ達と共に人間界に帰還を果たした。

天界に向かった魔王と勇者が、天使を仲間に戻した事にユグナ女王は驚くも束の間。

レオ達はユグドラシルに帰還するや否や、ジドラと合流するとメンデル国の王都フェニスへと足速に転移魔法で移動。ギリガン王に事の報告を告げに王の間を訪れる。

「……貴様が……まさか、腕を失うとは」

左腕を欠いたレオの姿にギリガン王は、漸く声を振り絞ったのだった。戸惑いと唾然を浮かべる彼にレオは、

「何だ？ 意外そうだな。戦闘に身の安全の保障など何処にも無いだろう」

そう告げた。簡単に答えるレオの姿にギリガン王は、眩暈を感じながらもウテナとミカエルに視線を向ける。

魔王レオと勇者リアはとんでもない偉業を成し遂げた。それは人類史上類を見ない程の偉業だ、後世に語り継がれるべき歴史の転換点とでも言うべきか。

そんな言葉をギリガン王は呑み込み、確認するように問う。

「女神様は我々人類に手を貸してくださる。そう捉えて良いのですな……?」

「細かく言うならばのう。魔族にも手を貸すじや」

一瞬だけ上手く事が進めば天界の兵力を魔族の戦に使えるかと考えたが、やはりそう上手くはいかない。

と、ギリガン王は企みを呑み込んで、

「実は先日……魔王城から混沌の矢が放たれたのだが、それは空に浮かぶ奇妙な結界によつて阻まれ事なきを得たのだ。……アレは女神様の加護で間違いは?」

「うむ。紛れもない妾の加護じや、人間界全域の空に急ぎ展開したが、どうやら間に合ったようじやのう」

流石は神。あの破滅を簡単に防ぎ人類を延命させた。

これには心から感謝しなければならぬ。

「二人間として改めて礼を」

そう言つて玉座から立ち上がり、ウテナに頭を下げるギリガン王にレオは意外そうな表情を浮かべていた。

「お前が他人に頭を下げる光景を目にする日が来るとはな。……セオドラも喜んでい  
んじやあないか？」

「黙れ！ 余とて礼儀知らずではないわ！ 第一貴様に掛ける礼節は存在しないが、女  
神様は別……！」

茶化すレオに眼を見開き叫ぶギリガン王。そんな二人のやり取りにミカエルは笑み  
を零した。

「もつと殺伐とした仲かと思つていましたが、存外仲が良いようですわね」

ギリガン王はミカエルの言葉に非常に嫌そうな顔を浮かべ、そんな彼にレオは一つ問  
うた。

「俺達魔族はいつでも出陣できるが……騎士団は如何だ？」

「……魔物の影響により武器と兵糧の調達に遅れが生じている。三日だ。三日だけ待っ  
てくれ」

攻勢に出るには三日の期間を有すると語るギリガン王に、レオは笑みを浮かべる。

「ふむ、俺達が天界に向かっていている間にいろいろと準備は進めていたようだな。しかし  
三日はある意味都合が良いか」

「そうですわね。騎士団の方々との連携に細かい詰め合わせ……いろいろ準備は必要か  
と」

三日で格部隊の連携をある程度調える必要が有る。少数精鋭ならばそこまで問題にはならないが、大軍の連携ともなればそう簡単にいかない。

それにすぐに人間が天使を味方として受け入れられるかどうか。

リアとナナがセリナ達を連れて方々に駆け回っている。円滑に事を運ぶために、レオはそれはリアにしかできない事だと考えていた。

彼女の信頼度の高さと誠実さが人々の心を動かす。だからレオはその件に関して何も心配はしていなかった。

報告と今後の方針について話を終えたレオは、充てがわれた部屋へと赴き、早めの睡眠を摂るのだった——

月夜が美しく輝く満点の夜空。

カーテンが風に揺らぎ、レオは不意に訪れる気配に目覚めると、月明かりを背後に窓辺に佇む美しい青髪の持ち主——アルティミアが映り込んだ。

彼女の苦痛に満ちた表情が鮮明に映り込む。その視線に先に在るのは失った左腕。

「……悲しませる覚悟はしていたが……ああ、やはりお前の悲しむ姿は胸が痛むな」

はじめて目にする彼女が涙を流す姿に、胸が苦痛を訴える。

アルティミアは堪え切れず、窓辺を蹴りこちらに飛び込んだ。それを拒むことはせず受け入れ、右手で彼女の頬の涙を拭う。

「……これ、お……さまあつっ!!」

レオは彼女が泣き止むまで胸を貸し与えた。

しばらく泣き続ける彼女に何をしてやれば良いのか。レオにはそれが分からず彼女の髪を撫でるばかり。

しばらく泣いていた彼女は漸く泣き止み、今ではレオの膝上に座りながら甘える様子を預けている。

そんな彼女にぼつりと眩く。

「悪いな、心配をかけたようだ。だが、俺には代わりの腕が在る」

闇で左腕を形成し、何事もないように手を振って見せると、アルティミアは左手を愛おしそうに指で触れ、指先を滑らせた。

やがて、彼女のひんやりとした温もりが左手を包んだ。

「……どんな腕になろうともレオ様はレオ様なのね」

「……俺の負傷に失望でもしたか？」

何となしにそんな事を聞いてみると、彼女はまさかと言いたげに首を振った。

「それこそまさか。私は心から、あの日あの時アルティミアとして手を差し伸ばしてくれたあなた様を、私は愛しているのですから」

鈴のような声で淀みの無い真つ直ぐな答えを返された。そんな彼女の言葉がむず痒く、頬に熱を灯るを感じる。

「そ、そうか。そう改めて言われると……なんだ、照れるものがあるな」

「それこそ今更よ。それに闇で形成した左腕もすごくカッコいいですし、寧ろ以前よりも男前になったかと……っ！」

どうやらいつも通りの調子に戻ったようだ。そんな安心感と、一つだけ聴いて置かなければならない疑問がある。

「俺が負傷したのも咄嗟の判断……いや、心に従った結果なのだが、それでもお前は彼女を恨むか？」

「戦いに絶対は無い。レオ様が常々言ってるじゃありませんか。ですから私はリアを恨みませんわ、寧ろ身を挺してまで好敵手である彼女を守ったことに嬉しくもあるのです」

「ん？ それは、何故だ？」

「純粋な疑問だった。本来敵である相手を魔王が守ったのだ。普通は怒っても良いはず。」

「そんな考えが顔に出ていたのか、アルティミアはイタズラっぽい笑みを浮かべ、人差し指をこちらの口に押し当てた。」

「ふふっ。レオ様は敵とはいえ好敵手や気になる相手は無碍にはしないでしよう？ それに今はリアと共闘関係ですわ、レオ様は絶対に自ら約束を反故にしないと信じておりましたから」

改めて面と言われると弱い。自身の最大の弱点とも言える心の甘さだ。

昔から気に入った相手を害することができない。例えそれが自身にとって脅威と成り得たとしてもだ。

特にリアに対しては渦巻く感情が恐らく最大の原因。



「レオ様は……漸く知ったようですね。誰かを好きになる感情を」

まるで思考を見透かすように、慈愛に満ちた眼差しを向けながら彼女はそんな事を言った。

「……まあ、漸くと言ったところだ。……何とも切ないようで情熱的な感情だな」

「ふふっ。レオ様も漸く理解してくれて、私は嬉しく思いますわ」

自分の事の様に喜びを顕にするアルティミアの表情をじつと見つめ、レオは小さく笑みを浮かべる。

彼女の好意ははつきりと伝わっている。ただ、自分は魔王では有るが、元々は無名の魔族に過ぎない。

そんな自分が魔界貴族であり「雪羅の姫」と結婚。と何度か考えてみた事は有った。

しかし、他者を愛せない自分と愛情を知らない自分が居る。それでは愛を向ける彼女に申し訳ない、心苦しいという感情が渦巻いていた。

だが、自分は漸く恋心を理解した。ならばもう迷う必要はない。改めて恋心から愛情を学んでいけば良い。

「アルティミアよ。人間界には戦前に誰かに想いを告げると死に直結するらしいが、俺達はそんな事には負けんだろう？」

アルティミアは突然の言葉に僅かに戸惑い、やがて何を告げたいのか理解したのか、

頬を赤らめ潤んだ瞳を向けていた。

「俺はお前を愛そう。魔王としてでは無く、レオ個人として」

「っ!? よ、喜んで！ このアルティミアは一生レオ様の伴侶としてお側に！」

はじめて誰かを愛する誓いを立てた。熱意に胸が躍り、絶え間ない感情の波が心を駆け巡る。そんな感覚を抱きながらレオは息を吐く。

するとアルティミアが鈴を転がしたような声で、

「私に向けた言葉……どうかリアにも向けてあげてくね」

そんな事を真つ直ぐな瞳で言つてのけた。

「私はレオ様が嫁を何人娶ろうとも構いませんわ。その代わりに私達に惜しみない愛情を」

「……リアとは決着を付けるが、——」

レオは魔界語で計画している事を話すと、彼女はくすりと笑みを浮かべる。

「ええ、乙女心を一度は傷付けるのですから、レオ様は一度刺されるべきですわ」

彼女の言葉にレオは小さく笑った。

夏の熱気が照らす王都フェニスで、リアは戦の準備に追われながらもソフィア姫と密会していた。

自身に用意された寝室、ぬいぐるみが大量に置かれた部屋で、リアはイスに座り紅茶を差し出す。

「それで、わざわざお部屋にお呼びしてまで話したい事とは何でしょう？　恋ですか？

喜んで相談に乗りますわよ」

「あはは。いや、そうじゃなくて私達の身体のこと」

如何しても聞かずにはいられなかった。ソフィア姫はギリガン王の計画を知っていたうえで、見過ごしていたのかどうかを。

彼女は大切な友人だ。友情に身分など関係ない、だからこそ彼女を友人のまま信じた  
い。

僅かに乱れる呼吸を整え、リアは問うた。

「ギリガン王が不老計画を主導していたって知ってる？」

その言葉にソフィア姫は眉を寄せ、何を言ってるんだと言わんばかりに疑問を向けて

いる。

「ハーヴェストの魔核研究所。そこで私達……勇者一行は定期検査を受けていたわよね」

「え、ええ。何でも高い魔力をいかにして魔核が精製するのか。その様に聴いておりましたが……」

ソフィア姫の疑問を孕んだ真つ直ぐな瞳がこちらに向けられている。それだけで彼女が嘘を付いていない事がリアには分かる。

付き合いの長い友人が嘘を吐いているかどうかぐらいは、すぐに分かるものだ。例えば魔法を掛けられようとも。

「……その様子じゃ知らないみたいね。うん、安心したわ、でも疑ってごめんなさい」  
「い、いえ……ですが先程の口振りですと……お父様は——非道を働いていたという事ですわね」

「そうね。でも、今は戦時中で決戦前よ。ギリガン王の隠居は少なくとも混乱を齎すわ」  
何をすることも戦後だ。魔核研究所のセレス達を問い詰めるのも、全てルシファーを生きて止めない事には話にならない。

万が一勇者一行の不老化が民主や騎士に知れ渡れば、その影響は計り知れない。そもそも不老長寿の魔族を嫌い、戦争を仕掛けたのはこちら側なのだ。

それが不老化の研究を続けていたと知られれば、もう戦争の意味は無くなり、国の信頼も消えてしまうだろう。

「……そうですわね。同盟国は魔族の不老長寿を恐れ、戦争に賛同した国家ばかりですわ。それでは、メンデル国の一方的な裏切り……それに建国の祖が掲げた理念を今代の王が自ら否定したという事になります——」

「国のことは私とお兄様に任せてください。リアはリアの思う道を、心のままに進んでください」

ソフィア姫は微笑みながら、そう告げた。その言葉に思わず瞳が潤む。

まだ幸いな事に不老したという自覚症状は無い。自覚が出るのは五年か十年後か。

「……ソフィア姫にそう言つて貰えると楽になるわね」

「ふふつ、明るく振る舞い周囲を元氣付けるリアですが、その実内に抱え込みがちですわね。でも、フィオナにはもうお話ししたのでしよう？」

リアは昨夜の事を思い返ししながら、

「……フィオナは……えつと、『それじゃあボクは一生ロリのまま!』つて、別の方面でシヨックを受けていたわ」

混血児も魔族同様成長が遅いが、フィオナは幼い容姿のまま成長が止まった。

爆笑し腹を抱えるククルを背景に、フィオナは割り切ったのか。

「でもね、あの子はこうも言っていたわ、『でもボクはリア達に置いていかれずに済んだ』って。そのあとはクルと口喧嘩を始めちゃったから話はそこで終わったけど、でもフィオナの悩みが解消されたから、何というかそれもアリなのかなって」

「仲間のために不老化を受け入れるんですね」

リアは頷くと同時に口を開く。

「それも有るけどね、本当に単純かもしれないけど……不老に成ろうとも私は私、人間のリアとして見てくれる人が居るから。だからかな？ 現状を受け入れられたのは、まあ、自覚症状が無いってのも有るけどね」

「リアはリアですか。そうですね、その言葉を贈った殿方はきつと素敵な男性なのでしようね……！」

何を察したのか、そんな事を言うソフィア姫にリアは笑みを浮かべて誤魔化す。

紅茶に一口付けては落ち着ける緩やかな時間に息を吐く。

もう少しだけ休憩を取った後、騎士団、魔族、天使との連携訓練が有る。各部隊長が一同に顔を合わせる機会だ、是非とも参加しなければならぬ。

「午後から歴史に刻まれる光景が見れますわね」

「魔族、天使そして人間が共に肩を並べるんだもん、歴史に遺されない訳が無いわ。訓練場所は外壁のすぐ側で、魔物を相手に実戦向き訓練になる予定ね」

「実戦の中で急拵えの連携を物にするというわけですわね。生命の危険を伴う訓練では有りますが、命が掛かっている以上、非常に効率的かもしれませんね」

魔族と天使が居る以上は戦死者は出ないだろう。そもそも魔物が近寄って来るかさえ怪しいところは有るが、

「魔物は来るかしらね」

「尻尾を撒いて逃げるかもしれませんがね」

魔物が来なければ来ないで、三種部隊に分け実戦訓練に移行すれば何も問題は無い。

リアは午後の予定を確認しながら、ゆったりとしたひと時を過ごすのだった——

昼下がり、夏の熱気が照らす中。

人類史上はじめての三種同盟の結成及び三種部隊の設立、そして合同訓練が行われることに。

王都フェニスの外壁からソフィア姫は、真下の訓練を見学していた。

騎士団の士気向上を兼ね、要らぬ問題を起こさないための監視も兼ねて。

「相手は都市崩しの異名を持つ魔物——ハウンドですか」

漆黒の毛並み。禍々しい牙と爪を持った狼の魔物。数多く存在する狼の魔物の中でもハウンドは特に危険度が高い。

一頭一頭が高い魔力を有し、それが群れで動く魔物だ。加えて騎士団並みに統率の取れた動きを見せる。

騎士団なら損害は出るが王都を護り切れるだろう。だが、今回は相手が悪過ぎた。

ハウンドの群れの前に陣を取る三種同盟の部隊が魔力を滾らせ、獲物を睨んでいるのだから。

「（愁傷様ですわね）」



「……何度あの魔物に苦渋を味わったことでしょうか」

控える護衛の女騎士は遠い目をしながらそんなことを呟いた。

そこにはハウンドに対する同情が見え隠れしている。

無理も無いことだ。ただでさえ魔族という強力な種族が居て、そこに天使が加わっているのだから。それでも人間も負けてはいない、とソフィア姫は自負する。

それに、とソフィア姫は息を吐く。事前に難民は全員を都市内部に避難させた。あとは思う存分に彼らが武を振るうのみ。

「あつ、ハウンドがまた動き出しましたわね」

ハウンドの群れは視認できるだけでも千を超えている。高い魔力を有し繁殖力も高い魔物だ、それが都市崩しの由縁の一つでもある。

ただ、ハウンドが轟音と共に宙を舞う光景が映り込まなければ、彼らに同情などしなかつただろう。

「空、舞いましたわね」

「ええ、ついでに頭部も飛びましたね」

三種部隊による魔法での面制圧、そしてリアとアルティミアが先陣を切つてハウンドの群れに突撃する姿が在る。

三種部隊に常に展開される防護魔法がハウンドの魔法を弾き、振われる武術にまた一

頭と確実に群れの数を減らしていく。

「……？ 魔王が大人しいですね。相変わらず隊列に紛れ込んでいるようですが……」  
「今回は訓練。レオ様も指揮に専念しているのでしよう」

逐一人間と天使と連携の指示を出すレオの声が聴こえる。今回の訓練の主で在る連携を念頭に置いた部隊の動き。特に彼は新兵、取り分け若い魔族の指導に当たっている様子。

レオとアンドレイ、そしてミカエルから届く指示を各部隊長がそれに従い兵と共に戦闘に入る。

その様子を見ていたソフィア姫は微笑んだ。

「彼らの顔に蟠りが有りませんわね」

「共通の敵を前にしたからでしょうか？ いえ、私も戸惑いは有るんですよ、ルシファアが現れてからというもの、状況があまりにも一変したことに」

良くも悪くもルシファアは、人間に魔族と天使との共闘の機会を与えた。もちろんこれは結果論だ。

もしもレオとリアの不在が続いてたのなら、四魔將軍とフィオナ達の協力、騎士団の帰還が間に合わずメンデル国は蹂躪されていたことだろう。

加えて国内で騒がす混沌結晶が引き起こす事件。未だ混沌結晶による事件は発生す

るが、事件発生から間も無く何者かに混沌結晶を破壊され、天使の首だけが遺されているという。

「戸惑う気持ちは理解できますわ。でも、もう五十年も争ったのよ？ 充分だとは思いませんか？」

「……ええ、私もそう思いますよ。もう戦争を終わらせるべきだと」

どの道戦争はいずれ終結するだろう。人類は女神ウテナの協力を得てルシファーを打倒する。

まさか、神の協力を得たにも関わらずなお戦争を続けるという愚か者はいないだろう。

「……ああ、お父様は愚か者でしたわね」

ソフィア姫は陣の後方から戦局を見据えるギリガン王に視線を移しては、ため息を吐いた。

彼の瞳には何が映っているのか。共闘する騎士団の姿に、何も思わないのか、民が魔族と天使に心を許し始めている事に気付かないのか。それとも目を逸らしているのかはソフィア姫には推し量れない。

ハウンドを相手にした三種部隊による共同訓練は無事に終わり、ソフィア姫は明日に

向けて最後の詰めに入るのだった――

晴れ渡った朝日が照らす中。

フェニス城の広場に三種部隊は集った。

ギリガン王と女神ウテナが各部隊に視線を向け、

「我々は本日をして、アルデバランへ進軍を開始する！」

「此度の戦に人種の優劣など関係は無い。各々、それぞれの務めを果たして来るが良い」  
出陣の言葉を述べた。いよいよ始まる出陣にレオを筆頭に魔族が先陣を切って出陣を開始する。

天使と騎士の混成部隊が彼らに続き出陣して行く。

フェニス平原を超え、魔族領に近づくに連れ此度の戦乱の爪痕がはつきりと顕となる。  
。

天使兵や魔物によつて崩壊した村や街、荒れ果てた高原が映り込む。

戦争の爪痕を再認識した三種部隊は、ルルリア盆地に在る魔族領の入り口となるアリエス砦へと進軍を開始。

それは出陣から一週間の出来事だった。

夜間の暗闇に紛れる様にアリエス砦の門に近寄り、硬く閉ざされた門に近寄る。すると門が一人でに開き、リア達は眉を寄せた。

「罨？ それとも……」

アリエス砦の開門は、門番の魔力か門を破壊する他に開く方法が無い。

リア達は前回の戦で門を破壊し内部に攻め入った。だが、今回は門が勝手に開いた、罨を疑うのは無理もないこと。

「恐らくは内部の魔族による反乱かもしれないな」

耳を濟ませると騒ぎ声が微かに聴こえる。

攻め込み、アリエス砦を陥落させる好機だ。そう判断したレオはミカエルとアンドレイイに眼を配らされた。

「では、我々は手筈通り左右に分かれ各所の制圧を」

「右は任せない」

アンドレイイにリアとフィオナ、ククルとアルティミアが続き、ミカエルにナナとザガンが続いて部隊を率いていく。

レオは配下の人狼族に眼を向け、

「さあ、人狼族よ！ 疾風の如く敵陣を粉碎せよ！」

彼らは尻尾と耳を揺らしながら先陣を切る。

部隊戦に於いて統率が取れかつ迅速な動きで敵を翻弄するのが人狼族だ。

レオの護衛として残された人狼族の少年——アヌウが尻尾を振り、レオに視線を向ける。

自分も突撃したい、そんな意思を込める彼にレオは頭を撫でやった。

「落ち着けアヌウよ。お前は漸く戦場に出れる歳になったばかりだ。ここは先人の武を見て学べ」

「そ、そんなあ〜」

「しかし、俺の背後を守るのは重要な使命なのだぞ？ それこそ四魔将軍が羨むほどの」

彼らは將軍の立場に有る。そんな有用な兵力をたかが自身の護衛に当たらせるのは勿体ない。

それにレオにとっては護衛は不要だが、新兵を育てるには良い機会だ。

敵は大將首を狙うために向かつて来る。ここに格好の餌に吊られた敵は若い狼の餌食となる。

そんな事を考えていると、

「ま、魔王が砦門の前に布陣しているぞ！ 戦力は魔族の少年少女ばかりだ！」

「うおおお!! 討ち取るなら今だ！ 片腕の魔王なんぞこわかねええ!!」

蛮勇とともとれる雄叫びをあげながら、向かう天使兵にレオは、

「さあ、若き狼達よ敵が来たぞ」

その言葉を合図にアヌウを筆頭に、人狼族の少年少女達が武器を携え駆け出す。

地を疾走する素早い身のこなしで天使兵を翻弄し、複数人が同時に四方向からナイフを投擲する。

それに対して天使兵は避けるまでも無い、そう判断し防護魔法を展開するとナイフが、防護魔法を貫き天使兵の腹部、脚部、腕に深々と突き刺さった。

「なっ!? お前達には突破できない魔力だぞ……! そ、それが、なぜ……!?!」

種を明かせば簡単だ。人狼族の扱うナイフには収束した魔力を散らす魔法陣が刻まれている。

彼らだけが扱える魔法は、暗殺や強襲に最大の効果を発揮するため、レオは兵士としても癒しとしても重宝していた。

特に狼は群れで動き獲物を狩る。それは人狼族も同様だ、特に月夜の晩は彼らの狩猟本能を強く刺激する。

数分と掛からない内に攻め込んだ天使兵のみに屍を築き上げた、アヌウ達が勝利の遠吠えを奏でる。

それを合図にアリエス砦の各所から爆発音が響く。



「ふむ、訓練は生きているな。初陣で敵兵を討ち破ったのは、紛れもない功績だ」

アヌウ達に褒美を与えたいが、生憎と私財も財産も全て魔王城にあるためそれは叶わない。

「ほ、褒美に！ ボーンドラゴンの竜骨を希望します！」

「うむ、褒美は後日になるがそれまで我慢してくれるか？」

待てないのであれば、アルデバランの森に生息するボーンドラゴンを一匹討伐する。そう考えていたレオにアヌウは、

「だ、大丈夫です！ みんなも平気だよな？」

「うん、待つ事も大切って先生も言ってた」

口々に平気だと答える人狼族。そしてレオは人狼族に笑みを浮かべ、アリエス砦内部に歩き出す。

所々で火の手が上がる中、アンドレイイの勇ましい声が響く。

「どうした天使兵よ！ 貴様らの気概はその程度か!? 魔王軍はもつと堅牢で齒応えが有ったぞ！」

「くっ！ 人間の分際で……！」

鉄が弾かれた音と共に肉を斬り裂く音が響く。

レオは眉を歪め、アヌウが心配そうな表情で覗き込む。

「魔王様？ 左腕が痛むのですか？」

「いや、違う。歯応えが無さすぎる。……敵は最初からアリエス砦など護るつもりは無かったのか？」

司令官らしき姿が見えない。辺りを見渡し右手で魔剣を抜くと、物影から魔人族が姿をレオの前に姿を現した。

「フェムスか」

「レオ様……この砦の兵力はロラン様掃討のために既に出陣した後でございます」

「なるほど……ロランはアリエス砦の防衛に穴を空けるため陽動に走った……そう認識して良いのか？」

フェムスはレオの言葉にゆっくりと否定した。

「サタナキアにロラン様の計画がバレたようで、そのための討伐部隊が既に……」

ロランは敵側に寝返ったと見せ掛けて実際は裏切りを働いていない。

ただ、ククルだけはロランが裏切ったと疑っている様だが、そこは付き合いの短さによる不幸な誤解だろう。

従ってレオはロランの動きを思索した。

「いや、ロランのことだ……計画の露呈も策の内。アイツの側にマキアは居るのだから」

「ええ、アリエス砦から北の集落に陣を構え、サタナキアの主力部隊と交戦中」

ロランは農業集落スピカに陣を取り、サタナキアと交戦。しかし部隊は挟撃にされているとフェムスは伝えた。

アリエス砦からスピカまでの距離は八時間程度だ。

「承知した。こちらですぐに動ける様に話し合ってみよう」

今は同盟として動いている以上は、レオが勝手に部隊を動かす訳にはいかない。フェムスは領き急足でその場を立ち去って行く。

彼の背中を見送ると、背後から声を掛けられる。

「レオ？ 敵陣のど真ん中で堂々としてどうしたの？」

「なに、サタナキアに動きが有ったと報告を受けてな」

「……そう。こつちも制圧は終わったわ、でも妙にあつさりし過ぎよね」

リアはアリエス砦の防衛力の脆さに訝しげに眉を歪めた。

「ああ、お前の疑念通りだ。ここの兵力は既に出陣した後だ。連中はスピカへと向かった」

「スピカに？ あそこって穀物地帯と集落だけよね？」

「そこにロランとマキアが居る。いま、部隊は挟撃されていると」

「……やっぱりロランは最初から裏切つて無かったのね」

天界の門の鍵、自分達の前によく現れたジドラは魔人族だ。彼はロランから密命を受

けずつとこちらの支援を行なっていた。

天界の内戦終息も実の所ロランの働きが大きく、騎士団の主力が無傷でフェニスへ帰還を果たせたのも、全てはロランの策略による影響だ。

「アンドレイとミカエルならば、ロランの働きを説明すれば喜んで手を貸してくれるだろうよ」

レオは確信を持って二人が待つ場所へと歩む——四魔將軍と勇者一行が揃う時はもう間もなくだ。

## 十章 戦場に散る者

## 10—1

見渡す限り穀物地帯に布陣する天使兵にマキアはため息を吐いた。

「うんざりするような光景だなあ」

スピカの櫓から北に陣を敷きこちらを睨むサタナキアの姿がよく見える。

「しばしの辛抱だ」

同じ様にサタナキアを睨むロランが、今は耐える時だと謳った。

すると静かに物陰から忍び寄る気配に振り返ると、

「なんだいフェムスかい」

音も無く現れたフェムスにマキアは、そつと短剣の柄から手を離す。

「申し上げますロラン様……アリエス砦は三種同盟により陥落！ 現在レオ様は部隊を動かすべく各々に駆け回っている様子」

フェムスは懐からネコのぬいぐるみを一つ取り出し、ロランに手渡した。異様な光景だ、ぬいぐるみを持ち上げるロランもそうだが、懐に隠し持っていたフェムスにも疑問が浮かぶ。

「なあ、あんたにぬいぐるみを愛でる趣味でも有ったの？」

「生憎とそんな趣味は無い。……まあ、そろそろ教えてもいい頃合いかもな」

「……レオ様の許可無く宜しいのですか？」

魔王レオとぬいぐるみに一体何の関係が有るのか。気になり視線を向けるとロランは笑みを浮かべる。

「現場の判断だ。それにアリエス砦にぬいぐるみは置いて来たんだろう？」

「ええ、しつかりと目立つように」

ぬいぐるみを利用して何か情報のやり取りでもしようと言うのか。その度にフェムスが敵陣営を突破し、連絡を受けるといふのか。

それではあまりにも危険が伴う。

「ぬいぐるみ族のベルガーよ、アリエス砦の状況は如何なっている？」

そんな疑問を抱えているとロランがぬいぐるみに語り掛けた。恋心を抱いた相手の意外な趣味、それでも恋心は色褪せないのだが、

「……いま、ぬいぐるみ族って言ったかい？」

彼は確かにぬいぐるみ族のベルガーつと言った。それではまるでそのネコのぬいぐるみが生きている生物だと言っている様に聴こえる。

「ぷはあく！ 息を殺すのも楽なもんじゃないなあ！」

愛らしいネコのぬいぐるみとは裏腹に、非常に野太い声がぬいぐるみから聴こえる。マキアはこれは夢かと疑い、自らの頬をつねった。頬に走る痛みにはこれは現実だと証明され、

「……………う、そ……………あたしはいままで魔族を抱き締めて寝ていたのかい……………っ!」

仲間内で唯一気が合う趣味がぬいぐるみの蒐集だった。それが自分達は知らずの内に、魔族を懐に招き入れていたことになる。

「……………戦う能力も無く、あの極寒の大地に埋もれ死んでいくだけのぬいぐるみ族……………」

レオ様は同族間の念話魔法に注目し、諜報員として活用する事を思い付いたのだよ」

騎士団の間で魔族の諜報員は必ず何処に居るはずだ。そんな噂は確かに有ったが、まさか子供だけでなく女性に根強い人気を誇るぬいぐるみが、魔族の諜報員だとは誰も気が付かないだろう。

そもそもマキアは一度もぬいぐるみが動いたところを見たことが無かった。

「り、理由は理解したよ……………はあく、リアとフィオナになんて話せば良いんだい!」

ベルガーは地面に降り立ち、愛くるしい身体を見せ付けるようにその場で一回転。そして瞳を潤ませながら見上げてくる。

「くうっ! 反則だ!」

愛らしい仕草に悶える中、ロランが口を開く。

「……ベルガーよレレスから連絡は？」

「現在、魔王様はアンドレイ王子と大天使ミカエルと共にスピカへ進軍準備を急ぎ進めておりやす！」

「……流石はレオ様だ、動きが速い。それでは、次に潜伏中の同志達に一報入れておけ、『我らスピカに集結せよ』と」

スピカの北、サタナキアが陣取る背後には都市アプスが在る。そこには沢山の魔族が今も息を潜めていると、マキアは事前にロランから知らされていた。

「今は挟撃されてるけど、防護魔法はいつまで保つんだい？」

「スピカを守る防護魔法ならばあと三日は保つぞ。サタナキア以外の天使兵は雑兵……だが——」

何か気掛かりが有るのか、ロランは空を見上げた。

「アガリアレプトは一向に動きをみせん。互いに不仲だったが、よもやルシファーに迫る軍勢を無視はできない」

未だ見たところも無いアガリアレプト。魔王城に潜入し、天界の鍵を奪った時もアガリアレプトの姿を見ることは叶わずじまい。

「警戒しとくには越したことは無いってことだろ。……それにしてもルシファーは随分と余裕そうだね」



「事実奴は余裕だろう。魔力が全結したであろうレオ様と勇者リアの二人に、全兵力を導入したところで苦戦は必須」

それも同然だと思う。ルシファーは自身の魔力二加え、魔王とリアの魔力を自身の物にした。正直に言えば大天使と魔王と勇者を同時に相手にするようなものだ。

混沌を得たルシファーに対するこの戦争の勝算は限りなくゼロだった。しかし、ゼロから一に変えたのは紛れもないロランだ。

「魔王とリアはちゃんと魔力を取り戻したんだらうね？」

「問題無い。ジドラから詳細の報告は入っているからな」

コイツこそ用意周到だ、とマキアは息を吐く。

マキアは南、アリエス砦の方角に顔を向けては、小さく笑みを零した。

もうすぐリア達と再会できると――

## 10—2

アリエス砦が陥落した早朝の朝。

此処を魔王城攻略の足掛かりとするため、アリエス砦の機能をそのまま使用する事を選んだ。

スピカへは最短最速で三日。既にアリエス砦が落ちたことは敵に知られているだろう。

「奇襲は不可能ですわね。ですが、相手はスピカに釘付けのようですわ」

「うむ、四魔将軍のロランがああ場所に居る。どうあつても討ち取りたいのじゃないな」  
それは無理も無い話だとリアは思う。レオから聞いたロランの行動の全て。それは紛れもなくこちら側に利点の有る動きばかり。

いや、間接的にずっと彼に助けられていたことになる。

ただ、裏切り者として認識されていたロランの救援に難色を示す騎士が多かったのも事実だ。

しかしルシファアの計画を大幅に阻止したのもロランの働きがあつてこそだと、レオは全員に訴え彼らの心を動かした。

騎士は恩人に対して白状では無い。寧ろ受けた恩を返すことを忘れない。それが彼らの騎士道精神の一つだからだ。

「ロランの所にマキアも居るわ。絶対に助けないと……って、これもロランの策なのよね」

自らを囿に敵部隊を誘い込む大胆な策略。そしてスピカを陣取り籠城戦に持ち込む用意周到さ。

アリエス砦から見えるスピカ方面の光と爆発。間違いなく彼らは耐える戦いをして  
いる。

「……ちえ、ロランの奴。そういう事なら最初に言っておけよな」

ククルが不服そうにボヤク姿にレオが苦笑を浮かべた。

「お前がロランの策や言動に気付かないのは無理もないことだ。付き合いが短いからな、それにお前は嘘が苦手だろ」

「うっ……そ、そんな事は……」

ありません。と言いたいのか、彼は眼を大きく逸らした。なるほど、確かにククルは嘘が苦手なのかもしれない。

ハーヴェストの時はそんな素振りを見せなかったが、それは嘘その物を付いていなかったためか。

リアが一人で納得していると、

「そうだよ、ロランは戦闘中にボクのスカートの中身が見えちゃった時に、『見た?』つて聴くと正直に言っちゃうもん」

突如フィオナの暴露にロランは慌てた。

「おおい! それは言わないって約束だろ!? ジドラが凄い形相で睨んでくるんだぞ!」

「大丈夫、此処にはお父さんはいないから」

和気藹々とした微笑ましいやり取りだ。そんな二人にレオ、ミカエル、アンドレイ王子は笑みを浮かべている。

それに釣られるようにリアも笑みを浮かべていると、

「さて、そろそろ出陣の時刻だ。だが——」

「サタナキアの策略には注意を払えでしょ? 大丈夫、アイツは狡猾つてのを前回の戦いで理解してるから。今回は穀倉地帯、地面と地中に注意を払わなきゃね」

罠を仕掛けるならそこだろう。そう考えて話すと、レオ達は満足そうに笑みを浮かべていた。

しかし、気掛かりなことも有る。天使兵の兵力が思った以上に少ないこと。姿を見せないアガリアレプトと動かないルシファア。

そしてサタナキアはロランとマキアを追い詰めているが、わざわざアリエス砦の戦力を削ってまでの決行。

昨晚議論したアリエス砦そのものが罍の可能性。しかし、アリエス砦以外に兵を潜伏させるとなると、西の平原と東の高原に限定される。

「アンドレイ王子は西のアルマイル平原、ミカエルは東のヴァルゴ高原へと手筈通りに」  
真正面からスピカ穀物地帯へ進軍するのは魔王レオを筆頭にした、四魔將軍の部隊に自身を含めた勇者一行だ。

アルマイル平原にはアンドレイ王子が率いる騎士団の精鋭部隊、かつて魔王城まで進軍した精鋭達が務める。

そしてヴァルゴ高原には大天使ミカエルが率いる天使部隊、そこにはセリナ達が居るため心配は無い。

しかしサタナキアには一度に四魔將軍を相手にする覚悟がある。でなければスピカに逃れたロランとマキアを攻めないだろう。

だとすれば、トリアは考える。天使兵各自に混沌結晶を持たせている、と。

「アンドレイ王子もミカエルも混沌結晶には気を付けてね？ アレの影響で同士討ちなんか始まったら危険だからさ」

するとアンドレイ王子は大丈夫だ、と言いたげな表情を浮かべる。

「ふふつ、その為にウテナ様から加護を授かったのだよ」

そういえば、出陣式の直前に女神ウテナが部隊全員に加護を授けていた事を思い出す。

アレが混沌結晶を防ぐ加護だったのか、と一人納得しているとフィオナがリアの手を握る。小さな手をリアは握り返した。

「リア、頑張ろう。またみんなでご飯を食べるためにも」

「うん、その為にも全力でサタナキアを討ち倒さないとね……い」

お互いに気合を入れ直して、足早にと廊下へと駆ける。四人の見送る視線を背中に感じながら。

こうしてリアはフィオナと共に戦列に加わり、やがてレオが率いる部隊の一人としてアリエス砦から出陣するのだった――

## 10—3

スピカ穀物地帯へと進軍するレオ達は、天使兵の陣營を遠目から見据える。

穀倉地帯へ陣を張る天使兵だけでもその数五千。何よりも一樣に眼に付くのが額に混沌結晶を埋め込まれた数多の魔物の群れだ。

取り分け厄介な竜が、幼体とは言えども十頭。紅蓮に燃え盛る様な鱗を有した炎龍が天使兵に命じられるまま、スピカへとブレスを放っている光景が視界に映り込む。

だが、スピカは防護結界によって守られ、炎龍のブレスを弾き返す。

「……！ 連中はわざわざグランドウォールの炎龍を連れて来たのか」

アルデバランの森から更に北に向かうと聳える険しい峡谷が在る。

険しく空を飛ぶか運河を泳がない限りろくに進めないグランドウォールは、未だ人の手が入らない未開拓の土地。そこには数多の竜種が生息し、魔王レオは竜を刺激しては面倒だと判断し、開拓を断念した過去が有る。

「厄介ね。炎竜……しかもまだ幼体」

「……討伐は可能だが、炎竜の親を怒らせることになるか。……ならばザガンよ、邪竜隊と共に連中を混沌結晶から解放してやれ」

その言葉にザガンは頷き、ナナを編成した邪竜隊と共に炎竜に駆け出して行く。彼らの背中を見送り、レオ達は天使兵の陣営へと駆ける。

「……サタナキア様の予測通りだ！ 魔王率いる軍勢が現れたぞ！」

天使兵が吠ええると、スピカに集中していた部隊の一部が転進。こちらの部隊に魔物と共に駆け出す。

両軍の衝突が差し迫る中、東のヴァルゴ高原が光り出す。それをレオは伏兵による魔法だと判断し、

「やはり伏兵か！ 防護魔法を展開せよ！」

レオの指示に魔族が一斉に防護魔法を展開する中、防護魔法に閃光が降り注ぐ。

防護魔法によって閃光が防がれる中、フィオナが迫る軍勢に向けて、

「《荒狂う風よ刻め》」

風の刃が軍勢に吹き荒れ、迫る魔法に対して天使兵は魔物——オークを盾にして風の刃を凌いだ。

代わりに全身を風の刃によって刻まれたオークは、哀しげな悲鳴をあげ、鮮血を撒き散らしながら穀物地帯に倒れ伏す。

オークの屍を強引に退ける天使兵に、レオは闇で左腕を形成しながら魔剣の刃の向ける。



しかし、レオが突撃するよりも先に鬼人族を率いたククルが立ち塞がる。

「レオ様、ここは我々が……!」

ククルの言葉にレオは真正面を見据える。

まだ天使兵の分厚い陣形が進軍経路を塞いでいる。ここは一撃が必要だ。

「ああ、ここはお前達に任せた」

「御意! さあ! 鬼人の戦を見せる時だ!」

ククルの怒声に雄叫びをあげる鬼人族が、天使兵へと殺到する中、彼らは剛腕を持つてして天使兵の骨を打ち砕く。

ククルの部隊により敵陣に穴が空き、その隙をフィオナの爆炎が天使兵へと飛来し魔物部隊を飲み込んだ。

燃える穀倉地帯をレオ達は駆け出す。

（今年は収穫の秋が迎えられんか。……いや、仕方ないことだ、農民にはしつかりとした補填を与えねばな）

彼らの財産が戦火に巻き込まれていく。元よりスピカが戦場になるということは、穀物地帯に被害が出ると同義。それは最初から覚悟の上だ。

レオは駆け出し、正面の天使兵の首を魔剣の一刀で撥ね、迫る天使兵を勢いのまま回し蹴りで蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた天使兵が後方の部隊にぶつかると、レオは追い討ちをかけるように左掌を向ける。

『イビル・シヨック』

闇の腕から放たれた波動が天使兵を呑み込む。

呑み込まれた天使兵は次々と倒れ、

「あ、ああああああっ?!」

絶叫を轟かせた。

闇魔法の一つ——「イビル・シヨック」は対象に対して精神に苦痛を与える魔法だ。

久しぶりにその魔法を眼にしたアルティミアが息を吐く。

「無傷の人体、それでも心が負うダメージに数多の廃人を生み出した恐ろしい魔法……

!」

「……廃人は言い過ぎだろうか？　しばらく、せいぜい一月は寝込む程度だぞ」

穴の空いた敵陣を突っ切るように進むレオ達の上空に「天雷」が降り注ぐ。

「甘いわね!」

アルティミアのその一声に、雪羅族が刀を払い魔法を斬り払う。

止まらないレオ達に天使兵は僅かに足を後退させ、

「い、幾らサタナキア様の指示が有ったって……!」

「だ、ダメ！ 後退は命令違反よ……っ！ それに連中はアザゼル様とバラキエル様の仇！」

確かにレオはバラキエルをこの手で討ち取った。それは紛れもない真実だ。

それでもアザゼルの死の切っ掛けを生み出したのは紛れもない自身だ。レオはそれを受け止めながら、

「どうした？ 仇を討つ好機だぞ」

敢えて敵を挑発する事を選んだ。所詮は利用されるだけされ、上司の考えに流される意志なき兵だ。

そんな連中に掛ける情けを持ち合わせていなければそんな暇も無い。

レオに向けて迫る槍を、雪羅族のハーゲンが十字手裏剣で弾き返し、大きく弾かれ隙を見せた天使兵の腹部を刀が貫く。

「魔王様の首を討ち取ろうなど甘い」

雪羅族の一人——シオンが居合いの構えから刃を振り抜く。同時に放たれる斬撃が天使兵の首を刎ねる。

刃にこびり付いた血を払うシオンに、リアは眉を顰めながら感嘆の息を吐く。

「やっぱり雪羅族の刀って凄いわね」

「それだけじゃないぞ。アイツらの絶え間ない鍛錬の末に身に付いた技量だ」

雪羅族が天使兵の部隊を呑み込み、鋼が碎ける音が戦場に響き渡る。

## 10—4

アンドレイ王子は目の前の敵部隊に舌を打つ。

アルマイル平原に潜んでいた伏兵を捜し当て、攻勢に出たまでは良かった。

天使兵の目論見はレオ達をヴァルゴ高原の部隊と挟撃すること。

そこまでは予測範囲内だった、だがいつも現実というのは残酷だ。

アンドレイは目の前に迫る魔物——ファルコンの群れに息を呑む。

「空を自由に飛び廻り、獲物を決して逃さない魔物……者共！ 迎撃用意……っ！」

地上に隊列を成す天使兵と空から奇襲を仕掛けるファルコンの群れに、アンドレイの部隊は苦戦を強いられていた。

合図と共に上空に放たれる迎撃魔法を、空を自由に飛び廻るファルコンが避ける。

「無駄だあ！ 人間如き魔法でファルコンを撃ち落とせるものか！ 者共、畳み掛ける！」

こちらに突撃する天使兵に、セルゲイ將軍とカムラン隊長の部隊が迫る槍を受け止め突撃を抑え込む。

「やらせん！」

セルゲイ將軍は大剣で槍を弾き、力強い一振りを放つ。天使兵の一団は重く鋭い一振りに弾き飛ばされ宙を舞う。

弾き飛ばされた天使兵の一団は、上空を滑空し獲物を定めるファルコンの群れに衝突。衝突の勢いで体勢を大きく崩した敵軍。

そこにカムラン隊長が騎士剣を掲げ、

「今だ！ 焼き払えエエエ!!」

「『業火よ降り注げ』」

騎士団の魔法騎士隊が唱える詠唱に、天使兵の指揮官の表情が歪む。

騎士ではフィオナやナナの様に大規模な魔法は扱えない。だが、隊員全員が扱える魔法も存在する。

それが放熱魔法——「クリムゾン・レイン」だ。

業火の雨となり、天使兵の一団とファルコンの群れに降り注ぐ。

部隊による面制圧を兼ねた魔法、撃ち落とされたファルコンと天使兵が落下し地上部隊の逃げ場を奪う。

アンドレイ王子は人間もまだまだ捨てた物では無い。そう思いながら、剣先を敵指揮官に向ける。

「今が好機だ！ 指揮官を討ち取れえええ!!」

アンドレイ王子の勇敢な号令がアルタイル平原に響く。

メンデル国が誇る精鋭の騎士団が天使兵を呑み込むのは、そう時間の掛からないことだろう。

ヴァルゴ高原に出陣したミカエルは、何度目かの「天罰」に息を吐く。

高原に陣を敷いた天使兵が、凹凸した地形を利用しながら身を隠し魔法を放っている。

だが、「天罰」は魔力消費の大きい魔法だ。部隊戦に於いて奇襲による初撃は実に有効だになるだろう。

しかし、天使兵が奇襲した相手が悪過ぎる。そこにミカエルは同情を浮かべながら、「部隊に接近は未だ気付かれてはいませんか。では、手筈通りに一気に畳み掛けましょうか」

「了解ッス！」

静かな凜とした声を合図に、セリナを中心とした天使が敵陣営に駆け出す。

地形を利用し、身を隠したのは上策だった。しかしそれは奇襲を悟られていない事が前提だ。

ここは魔王レオが治る土地の一つ。彼はヴァルゴ高原の何処が脆く、崩れ易いかを正

確に把握していた。

何の悪戯か、丁度敵陣營が身を潜める場所は崩れ易く早急な補修工事を必要としていた場所だった。

そして所定の位置に到着したセリナ達は、崖に向けて掌を向ける。

「『『聖なる衝撃よ大地を砕け』』」

崖崩れをより正確に敵部隊を呑み込むために、セリナ達は、衝撃魔法——「セイント・インパクト」を地面に向けて放つ。

無音から放たれる衝撃が崖一帯に走り、亀裂を生じさせていく。

「な、何だ？　地響き……っ!？」

やつとこちらの接近に気が付いた天使兵が驚き眼を見開く。

彼らがこちらの接近に気付かないのは、単に警戒を怠った訳では無い。

天界に伝わる魔力を隠す魔法——「ベール」がミカエルの部隊を包み込んでいるからだ。

そして、漸く気が付いた彼らが攻勢に出ようと動き出した瞬間。

激しい地鳴りと共に彼らの頭上に位置する崖が崩れ、落石が降り注ぐ。

「た、退避いいいいいい!!」

この場から逃げると指示を出す天使兵。だが、それも手遅れだ。



頭上から降り注ぐ落石と土砂に呑み込まれていく天使兵に、ミカエルは慈悲なく告げる。

「これが貴方の罪。地の底で甘んじて受けなさい」

彼らは間違いなく生きているだろう。落石と土砂に呑み込まれた所で死ぬほど柔では無い。

だが転移魔法が封じられ、残り魔力も少ない現状で戦場に復帰するのは困難だ。彼らが魔力を回復させ、這い出た所でスピカの戦鬪は決着を迎えているだろう。

そう息を吐くミカエルは、遠目に見える旗に眉を歪めた。

「あの国旗は……メンデル国の同盟国——フェルエナの」

嫌な予感がする。フェルエナ公国はメンデル国の北東に位置する隣国。

その国がわざわざ国境を超え、ヴァルゴ高原に布陣しているのは、ミカエルからした解せない話だ。

（どさくさに紛れて領土侵犯？ それともギリガン王の策略かしら）

ギリガン王から増援を送るなど、何一つ聴いていない。

これは早急にレオに一報入れるべきだとミカエルは判断。

「ヴァルゴ高原に潜む天使兵は壊滅したわ！ 我々はこれより転進し、魔王レオの増援に向かうわよ！」

ミカエルの指示に、天使はそれぞれ今回の戦が簡単には終わらない、そんな予感を抱きながら足を穀物地帯へと向けるのだった――

## 10—5

レオ達が穀物地帯で戦闘を繰り広げている頃。

ロランは戦局を静かに眺め、ヴァルゴ高原から魔法が止み、炎竜が天使兵に攻撃し出す光景に笑みを浮かべた。

「流石はレオ様、俺の想定以上の働きをする」

「ロラン様！ ご報告が……アルマイル平原に陣取っていた敵軍が騎士団の手によって壊滅！」

密かに斥候に出していた魔人族が告げた報告。やはり騎士団も中々強者揃いだ、とロランは思う。

これで漸く攻勢に出られる。そう判断したロランは片手を挙げ、

「我ら同胞に狼煙を挙げよ！」

その指示に魔人族は迅速に動き出す。

スピカに藁を集め火を炊く。狼煙が晴れ渡った空に昇るのを見て、ロランは最後の詰めに入る。

「後方の憂いはレオ様の手によって断ち切られた！ 我々はサタナキアの首を取りに行

くぞー！」

自身の配下に檄を飛ばす。

漸く天使兵を領地から追い出す日が来た。雄叫びを挙げる魔族にマキアは息を吐く。

「凄い気迫だねえ。士気も熱気も違う」

「連中の魔法攻撃から耐えに耐えたからな……ここで憂さ晴らしもしたいんだよ」

肩を竦めながら語るロランにマキアは、そんなものか、と思う。

夜間問わずスピカに降り注ぐ魔法を防護魔法が弾く。身の安全は確保されているが、

騒音被害は着実に出ていた。

今すぐ出陣し、敵兵を蹴散らしたい魔族を抑えるのは実に大変なこと。

幾ら長の命令だとしても、彼らは耐える戦いには向いていない。自身も皆もよく耐えた方だとロランは内心で笑みを浮かべる。

「さあ、行くぞ」

「分かっているって。背中では安心して任せな」

ロランは部隊と共に出陣する中、マキアに僅かに視線を向けていた。

思い返せば、縁とは不思議だ。あの幼く少し触れれば折れてしまいそうな痩せ細った少女が、まさか成長して勇者と共に戦う仲間となり戦場で再会することになるうとは。

そして今は、背中を預けられる大切な者となつてゐる。

そこまで想うロランは、敵陣營が視界に映り込む距離に近付くと、思考を戦闘へと切り替える。

「前方に障壁を展開！ 魔法を面制圧および波状攻撃で展開せよ！」

指示に合わせて即時魔法を展開する魔族に、続けてロランは前方のサタナキアに向けて掌を向ける。

「《大地の憤怒よ敵を飲み込め》」

詠唱によつて大地が裂け、裂け目から溶岩がサタナキアの部隊に向けて流れ出す。流動する溶岩は真つ直ぐと迫る中、

「《大海の波よ飲み込め》」

サタナキアの詠唱によつて川辺の水面が荒れ狂い、やがて高波へと変わつていく。高波は溶岩と衝突し、急激に冷やされた熱気が蒸気を生じさせ両陣營の視界を奪う。

「水蒸気を吹き飛ばすかい？」

「いや、コイツも利用させてもらう」

そう言つてロランはフェムスに視線を送ると、彼はすぐさまに動き出す。

蒸気に紛れる様に姿を消すフェムスに続く魔族達。次第に剣戟の音が周囲一帯に響き渡る。

だが、フェムス達だけではサタナキアは討ち取れない。

「俺達も前線へ進むぞ」

「あいよ……にしてもサタナキアは大人しいねえ」

確かに不気味な程に大人しい。彼はアガリアレプトと並んで策謀を巡らせる事に長けている。

彼は謂わばルシファアの軍師だ。部隊を分け、挟撃に持ち込むだけが戦略ではない。その事からロランは注意深く地面に視線を巡らせる。

蒸気によって湿り踏み荒らされた土だ。そこに魔法も仕掛けられていなければ、次に空へと視線を移すがやはり魔法の痕跡が無い。

警戒を浮かべている中、

「こ、後方から魔族が……っ!」

「さ、サタナキア様! これは……っ!?!」

どうやら潜伏させていた部隊が間に合った様子。

これで終わるはずが無い、そう警戒を浮かべるロランの耳に、

「狼狽えるな! 我々はルシファア様の忠順な僕、全員混沌結晶を取り込めええ!!」

そんな言葉が届く。

「サタナキアめ、自滅する気か」

「……混沌結晶を体内に取り込むとどうなるんだい？」

人間が混沌結晶に当てられ悪意を刺激される様に、魔物に対しては洗脳効果が有る。ならば天使にはどんな作用が有るのか。一度だけロランはその結果を目にしたことが有った。

天使が混沌結晶を自らの体内に埋め込んだ結果、理性無き化け物が破壊衝動のままに暴走するさまを。

「暴走を引き起こす理性無き化け物の誕生だ。……総員！ 警戒せよ！」

ロランの指示が響く中、戦場を地響きが揺らす――

「あ、ああアア!! こ、混沌が……ひ、ひろが……ルウウツッ！」

次々と敵部隊から響き渡る絶叫、次第に理性を失っていく声。

水蒸気の中に僅かに見える影。それは翼とおおよそ人体とは程遠い影だ。

次第に水蒸気が晴れるとロラン達の視界に映り込んだのは、皮膚が剥がれ落ち、卵の様に肥大化した箇所が口のように裂け鋭い牙を覗かせる。

紛れもなく異形へと成り果てた天使兵だったもの。

アレを魔物と定義するべきか否か。そんな異形の最奥に佇むサタナキアがこちらを見据える。

彼の胸元には混沌結晶が埋め込まれ、混沌の魔力がサタナキアの周囲を渦巻いてい

る。どうやら彼は混沌結晶に適応してみせた様だ。

「主への忠誠心が成した結果とも言うべきか？ それそれで何とも愚かな」

「……天使兵への同情心しか浮かばないね」

異形に成り果て訳も分からず辺りを見渡し、目に付く同胞だった者に牙を向けている彼らに、ロランは哀れみの眼差しを向けた。

「貴様らは付き従う主人を間違えた。いや、貴様らの選択肢を否定する気は無いが……貴様らの主人は化け物に変貌する事を命じる様な奴なのか？ そんな君主の間違えを正さず命じられるまま従うなど愚かだ」

ロランは剣を構えゆつくりと歩み出す。

彼の隣を歩むマキアもまた短剣を構え一息吐く。

同時に二人は異形の天使兵が蠢く戦場を駆け出し、サタナキアに武器を振りかざす。戦場に響き渡る鉄の音、異形の天使兵の虚しい叫び声が響く――



## 10—6

ロランとマキアが振るった武器を片腕で受け止めるサタナキアがにやりと笑みを浮かべる。

刃を通さない肉体を得た彼に、マキアは忌々しそうに舌打ちを鳴らす。

「鋼を叩いてるみたいだ！　ロラン、何か方法は無いのかい!？」

「表面が硬いのなら衝撃を内側に加えれば良い！」

そんな芸当はリアの専売特許だ。ただ、硬い敵を相手にいつも彼女に頼ってばかりはいられない。

そう考え、密かに編み出した魔法技がマキアには有る。

マキアは短剣に風の魔力を集め、

「《風よ断ち切る刃となれ》」

短剣に集った風が鋭い刃に変化し、渦巻く風が空気を斬り裂く。

マキアは風を高密度に束ねた魔法技——【ソニック・ブレイド】を振り抜き、サタナキアの右腕を斬り払う。

舞う鮮血が確実にサタナキアにダメージを与えていると証明する。

それでもサタナキアに対しては痛手となるには、まだ程遠い。

マキアは一度サタナキアから距離を取り、魔法を放つべく魔力を放出すると、異形の天使兵が彼女に向かうつて牙を向ける。

「邪魔すんな！」

歩術魔法——【瞬身】で迫る牙を避け、異形の天使兵の頭部に彼女は勢いそのまま踵落としを繰り出した。

重く素早い踵落としを受けた異形の天使兵は、衝撃に頭を揺らしその巨体をサタナキアの方に倒れ込む。

しかしサタナキアは片腕で異形の天使兵を掴み抑えると、無言詠唱から雷の閃光を放ち、異形の天使兵の頭部を貫いた。

「貴様にとつてそれは同胞か？」

「ふん、ルシファア様の施しを受け止め切れない者に価値などない」

傲慢な物言いを冷たく言い放つサタナキアに、マキアは拳を握り締める。

それが信じて付き従った者達へ言う言葉なのか。

「あんたもルシファアも上に立つ者としては失格だよ。第一これだけの天使兵を犠牲にしてまで人間を絶滅に追い遣る意味があるのか!？」

マキアの問いにサタナキアは煩わしそうに、右手の槍を振るう。

魔力が乗った槍がマキアの喉元まで迫る中、彼女は素早い身のこなしで避け、サタナキアの顎に蹴りを入れる。

僅かに怯んだ彼に対してロランが畳み掛けるように、「メギド」を放った。

サタナキアは獄炎に呑み込まれるが、混沌の閃光が周囲一帯に降り注ぐ。

魔族を薙ぎ倒し、異形の天使兵を貫く閃光。ロランとマキアの二人は、地面を疾走し閃光を避ける。

「メギド」の中から現れるサタナキアにロランはため息を吐く。

「しごとくなりやがって」

「魔力量が上昇するだけでしごとくなるもんなの？」

「いいや、奴は肉体の表面を魔力で覆うことで防御に転用しているようだ」

だからこちらの攻撃は通り辛いと。

しかし、それでは可笑しな点も有る。サタナキアは「ソニック・ブレイド」で傷を受け、ただの膝蹴りに怯んだ。

それでは「メギド」が防ぐ防御力に説明が付かない気がする。そんなマキアは疑問を顕にした。

「そこは奴の慢心だ。人間に対する慢心が防御への転用を遅らせているんだ」

魔力の扱いは心で決まるとフィオナから聞いたことが有る。精神面が魔力制御に直

結する様に、心は魔力を動かす原動力となる。

人間の攻撃を魔力で防ぐ程の価値が無い。恐らくサタナキアの心の奥底に有るそんな慢心が最大の隙を生じさせた。

そうマキアは結論付けながらも、慢心を捨て切れないサタナキアに再び刃を構え直す。

魔力が防御力へと変換されている以上、ロラン達に勝ち目は薄い。だからと言って自分がサタナキアを討ち取れるほど甘い相手では無い。

(これは賭け、ロランの為の危険な賭け。それでもやる価値が有る！)

「それじゃあ、あたしが頑張らないとね」

戦場に居る魔族達はみんな異形の天使兵の対応に追われている。

隣にロランが居る。彼の前から少しは良い所を見せたい、そんな女心も有る。

マキアは地を蹴り、素速い動きでサタナキアの懐に入り込む。彼の腹部に「ソニック・ブレイド」を地を這う様に斬り上げる。

風を纏う刃がサタナキアの腹部を斬り裂く中、マキアの横腹に重い蹴りが突き刺さる。

重く鈍い衝撃に呼吸が止まり、体が吹き飛ばされる刹那の一瞬。マキアは必殺の左手を【瞬身】の応用で繰り出す。

硬い鉱石の感触が左掌に収まるのを感じた瞬間。地面にマキアの身体が二、三度弾かれ、

「かはっ……ひゅっ……んっ……がはっ、ごほっ……っ！」

ゆっくりと冷静に呼吸を整え、立ち上がる。そしてマキアは左掌に収まった混沌結晶をサタナキアに見せ付けた。

「っ！ 私の魔力がっ！ ルシファー様から頂いた魔力が……っ！ 己えええ!!」

急速に魔力が抜けるサタナキアを尻目に、マキアは混沌結晶を握り壊し、脇腹の鋭い痛み顔に苦痛で歪める。

急いで治療ポーションを飲まなければ。怒り心頭で槍を振りかざしながら迫り来るサタナキアを前に身体が思う様に動かない。

「死ねええええ!!」

だが、サタナキアはマキアの下に近付く事さえ叶わない。

ロランが彼女前に立ち塞がり、彼の槍を剣の腹で受け止めていたからだ。

余りにも一瞬の出来事に三度瞬きすると、

「後は俺に任せろ。コイツに引導を渡してやろうっ！」

ロランがサタナキアと斬り結ぶ。そんな彼の背中に安心したのか、脱力感が全身に駆

け巡る。

ここは戦場だ。倒れてはロラン達の負担になる、そう意地でも倒れまいとマキアは足を踏み堪えた。

ポーチに在る最後の治療ポーション。その半分をマキアは飲み込み、身体の治療に努める。

責めてロランの邪魔が入らない様に、異形の天使兵だけでも抑えなければならない。背後から迫り来る異形の天使兵の群れにマキアは振り向く。

「ロランの邪魔はさせないよー」

痛む身体を抑え、彼女は異形の天使兵の群れに駆け出して行った――

ロランはマキアに背中を託し、サタナキアに右薙の一閃を繰り出す。

それに対して彼は槍で弾き返し、素早く槍を引き絞る。

繰り出される高速の突きをロランは、刃で弾き火花が散る。

「軍師の貴様はやはり知恵だけでは無いのだな」

「魔族にとって注視すべきは武力と魔力だ。お前はこの二ヶ月、魔族に対して理解を深めなかったようだな」

「理解してるとも……弱った主を平然と裏切り、力を取り戻せば掌を返すこともな」

サタナキアの指摘をロランは否定する気は無かった。

彼の言葉は紛れも無い事実だ、魔王レオに刃を向けた若い魔族達はルシファアの力を前に従う事を選んだ。

だが、それも若気の至りの一言で済ませられる些細な問題だ。

刃がぶつかり合う中、ロランは言葉を発する。

「それでも我々はレオ様を選ぶ。彼が魔界を変えてくれると信じているからだ」

「……なぜだ？　なぜ、魔王レオをそうまで信じられる」

サタナキアの愚問にロランは笑った。

「当然だろう？ 我々はレオ様の臣下だ、当然彼が道を誤れば我々は敵に成ろうとも彼を止める覚悟がある」

言葉に覚悟を乗せ剣を払い、サタナキアの槍が大きく弾かれる。

「……ルシファー様の間違いを正そうともしない私達とは大違いだな」

「在り方は人それぞれだが、お前は気付くのが遅過ぎた」

刃がサタナキアの腹部を貫く。

彼の瞳に映り込んだのは、異形の天使兵が次々に魔族とマキアに討ち取られる姿だった。

結局、ルシファーから与えられた力を持つてしても魔族の誰にも届かなかった。

その理由をサタナキアは覚悟と支えるべき主人への想いの違いだ、と結論付けロランの刃を引き抜く。

「まだだ、まだ私は終わってはいないぞ」

腹部から血が滲む。それでも天使にとつては魔族同様、致命症にはなり得ない。

「そうでなければ討ち倒す価値が無い」

ロランはサタナキアから一度距離を取り、懐からナイフを数体取り出しては、彼目掛けて投擲した。



迫るナイフを前にサタナキアは槍を一閃、ナイフを打ち払う。

地面に突き刺さるナイフを他所にサタナキアは、〔縮地〕からロランとの距離を一気に詰める。

だが、ロランは目前に現れたサタナキアに無言詠唱から業火球を放った。

駆り出された業火球にサタナキアは勢い止める事なく、槍を引き絞る。

そして業火球を貫き刃がロランに差し迫る。

だが、槍はロランを目前にして勢いを失速させ動きを止めた。

ナイフの柄に仕込まれた魔法陣から放たれた鎖が、サタナキアを拘束し、槍の勢いを殺した。

「こ、小癩なー！」

「脳筋ばかりでは魔族は生き永らえない。俺のように小細工を労する魔族も必要だろ？」

「……貴様の策略によって我々の計画は殆ど阻まれたも同然か」

珍しく他者を認める言葉を吐くサタナキアに、ロランは苦笑を浮かべる。

もつと速くに他者を理解し、主人の過ちを正してやれば良かったのに。そうサタナキアに思わずにはいられない。

「……最後に聞くが、お前はなぜ魔法を使わなかった？」

魔法を使えば結果は多少なりとも違った。少なくともこんな無様な結果にはならなかった筈だ。

彼は飛ばされたナイフから敢えて意識を逸らしていた、彼ならナイフに何か仕込まれていると疑うと踏んでいたが結果は違った。

「……同胞を犠牲にした私だけが生きるのはお門違いだろう？」

「確かにお前ならこの状況でも、逃げ帰れたただろう。なぜ命を捨てる真似を？」

「どの道、私はお前の討伐が失敗した時点で死ぬ。ルシファー様がそうお決めになさったからな」

その言葉にロランはサタナキアに眼を凝らす。

彼の体内に施された魔法陣に眉を歪めた。

「自壊式か。ルシファーは配下の失敗に許容できない器の小さな男だったか」

「……それだけ彼は人間が、いや人間に知恵を与えてしまった自分が憎いのだよ」

「だから人間を滅ぼし、己の誤ちを正すと？」

ルシファーらしい傲慢な思考なロランは息を吐く。

そこに呆れもなければ、同情も浮かばない。ただ、彼が人間に知恵を与えなければ自分にはマキアという少女に出会うことも無かっただろう。

「もう良いだろう……トドメを刺せ」

サタナキアの最後の言葉にロランは、一太刀で彼の首を斬り落とした。

穀倉地帯に転がるサタナキアの首に、ロランは呆気ない彼の幕切れに息を吐く。

「自暴自棄か、それともお前なりの償いのつもりだったのか？」

ロランの呟きに誰も答える者は居ない。

サタナキアが率いた天使兵は、レオ達の部隊によつて拘束された者も居るが、果たして彼らはルシファアの所業を受け入れられるのか。

「……盲信者には無理か」

ロランは天使兵の盲信にため息を吐き、部隊を率いてスピカへと後退するのだった。  
魔王レオ達と合流するために――

天使兵を拘束し退けたレオ達がスピカへ入った頃には、ロランの手によってサタナキアが討ち取られ戦局は終わりを迎えていた。

「……むう、俺達が急ぎ駆け付けた意味はあまり無かったか」

出遅れた、と呟くレオにロランは敬愛を込めた笑みを浮かべる。

「そんな事は無い。レオ様が動かなければ後方はがら空きだった」

「……気掛かりな事も有るが、まさか混沌結晶にあの様な性能があるうとは」

スピカの北に広がる異形の天使兵の死骸に付いて、レオは事の経緯をロランから聞いた。

天使が混沌結晶を取り込めば混沌の魔力を得るが、混沌結晶に耐えられない者は異形に成り果てると。

逆にサタナキアのように混沌結晶に適応した天使は、魔力が大幅に上昇するという。

しかし取り込んだ混沌結晶を引き剥がせば、魔力は元通りとなる。

騎士団が今後混沌結晶に適応した天使兵と戦うとすれば、その事を念頭に置かなければならない。

「……魔王城には混沌結晶を取り込んだ天使兵が居ると思うか？」

「居るのが自然と考えるべきだ。ルシファーはそれほど手段を選ばない男……いや、自分以外の者は早速どうでも良いのかもしれないな」

慕い付き従った者さえ切り捨てられる冷酷さ。

それは魔王レオには無い性質だ。だが、レオは誰かを切り捨てまで目的を達成しようとは思わない。

冷酷非道に振る舞い目的達成のために盲目的に突き進んだ者は、孤独という名の牢獄に囚われるからだ。

特に長寿の身であればある程、孤独が与える精神的苦痛は計り知れない。

魔王と呼ばれる男にも恐いものがある。それは孤独が与える精神的苦痛だ。

「俺には孤高を貫く事はできそうにないな」

「……レオ様は誰かと繋がってこそだからな」

誰しものが最初から強かった訳では無い。

レオの場合は幼少の頃師に拾われ、魔法と戦い方、生き方を教わり名を与えられた。

もしも、師と出会わなければ魔界の雪原に埋もれる名も無き遺体の一人だったかもしれない。

だからこそレオは思う。何かのきっかけで縁を結び、繋がりを得て人も魔族も天使も

強くなるんだと。

「ルシファーには心から支え導く者が居なかった。もしも俺がセオドラと出会わなければ……何度か考えた事は有るが、やはり人間に失望してしまっていただろう」

「セオドラに教えられた人の強さと尊さ、そして彼らが大切に紡ぐ愛情を無ければ人間を滅ぼしていたのは自分だった。」

それは間違いないとレオは認める。結局の所きつかけ一つで自分とルシファーの立場は変わっていたかもしれない。

そう考えると彼と自分はどこか似ている部分も有る。

「レオ様とルシファーは人を惹き付ける魅力と力が有る。ただ、二人の決定的な違いは信用するかしないか、そんな些細ながらも重要な要素だと俺は思うぞ」

ロランの言葉にレオは成る程と肯く。

やはり知識者である彼との会話は自分にとつても為になる。

そんな事を内心で考えていると、アルティミアが歩み寄り、

「相変わらずロランは、レオ様に敬意を表した言葉遣いを使わないのね」

話を聴いていたのか、そんな事をジト目で咎めた。

「俺とレオ様の仲というヤツだ」

「あら！ それなら私とレオ様は恋仲よ！」

アルティミアの一言にロランは、眼を見開きこちらを凝視した。

やはり自分が誰かと恋仲の関係に至るのは、軍師の彼でも予測できないことらしい。

「レオ様……その話は本当なのか？」

「ああ、本当だ。魔界でアルティミアほどうい女は居ないだろ？」

「……人の色恋には何も言わないが、勇者はどうするんだ？ 俺の見立てではあの者は

……」

そんなにリアの恋心とは分かりやすいものなのだろうか。漸く恋という感情を知つて理解したが、彼女はそんなに分かり易いのか、とレオは頭を抱えた。

「その話は、アイツと決着を付けた後だ」

「誰と決着を付けた後ですって？」

背後から掛けられた声にレオは激しく鼓動する心臓に、冷や汗を浮かべながら振り返る。

そこには楽しそうに笑みを浮かべるリアの姿があつた。

「……何処まで話を聴いていた？」

「ん？ 誰と決着を付けるかって下りからよ」

「そうか。……ミカエルから話は聴いたか？」

レオはヴァルゴ高原に、フェルエナ公国の騎士団が布陣した話を思い浮かべながら切り出すと、

「まだ何も聴いて無いわ」

彼女は知らないと言った。首を横に振った。

「……レオ様、あの話は本当なの？」

「ああ、本当だろうな。ミカエルから聴いた話だが、ヴァルゴ高原にフェルエナ公国の騎士団が布陣しているそうだ」

「ヴァルゴ高原にフェルエナ公国の……増援なの？」

増援ならどんなに有り難いか。だが、生憎と彼らは増援では無い。

それはアンドレイ王子に確認したところ、彼は愚か將軍までもが知らない情報だったという。

「増援では無いさ。大方ギリガンが要請したんだろうよ。俺達がルシファーに敗北した後の予備戦力、疲弊した魔族を討つための戦力として」

「……それって私達ごとルシファーを葬り去るため？　でもフェルエナ公国の騎士団だけじゃ足りないわよ」

「いや、あくまでもギリガン王の保険だ。ルシファーを完全に討ち取れない事はアイツも十分理解しているさ」



ルシファーを打倒した魔族を討つための保険。それがギリガン王の考えだ。

「……それってさ、私がレオと決着を付ければ回避できること？」

「恐らくはな、ただお前が負ければ——俺はフェルエナ公国を容赦無く滅ぼすぞ」

向こうは領域侵犯を犯し攻め込むのだから、民を守る為には手加減の必要は無い。

「どうあつても私とレオは決着を付けないといけないようね」

「その時は俺を全力で殺しに来い」

「……望む所よ！ 私なりの方法で決着を付けてみせるわ！」

不敵な笑みを浮かべ合う二人に、ロランとアルティミアはため息を溢す。

「全く、どんな状況でも二人の関係は変わらないな」

「そうね。でもそれが二人らしいと言えばらしいのかしら」

そんな言葉の背にレオとリアは互いの役目に戻る。

今はアルデバランの森への進軍が最優先に——

レオと別れたリアは雨雲に陰る空に息を吐く。

「保険って……分からなくもないけど、どうして私達を最後まで信じてくれないの？」

ギリガン王が掛けた保険。確かにルシファーは人類の脅威だ。

人類を守る為に保険を掛けるのは決して悪い事ではない。

寧ろ国王の立場からしたら、保険は掛かるべきなのだろう。

そう理解しつつも、リアは思う。

レオの言う通り、ギリガン王は自分達の勝敗に関係無くフェルエナ公国を動かすつもりだ。

そうなれば人類と魔族との決別になるかもしれない。そんなのは嫌だ。心からそう感じる感情にリアは、

「ルシファーを倒してフェルエナ公国が動く前に、レオと決着……多分時間はそんなに残されていないよね」

漸く一部の、それこそ自分を含めた人間が魔族に歩み寄れた。共に過ごした時間を泡沫の幻想で終わらせたくない。ギリガン王の過去の遺恨にこれ以上振り回されてたま

るか。

リアは新たに決意を胸に誓った。必ずレオと戦い勝利してみせると。その為にも生きてルシファーとの戦いを終わらせなければならぬ。それこそリアにとって望むところだ。

「……魔核研究所の件と合わせてちゃんと落とす前は付けなきゃね」

「お、おおう……リアが珍しく怖い声を出してるな」

マキアのそんな声に振り返ると、彼女は頬を引き攣っていた。

ちよつとそんな反応をされるのは心外だ。自分だつて怒る時は怒る。

それに一番怒ると怖いのはナナだ、とリアは内心で思う。

「しょうがないでしょ、ギリガン王が色々やらかしてくれたんだから」

「あく、あたしらの不老化のことか。あたしは、そうなつて良かったとさえ思うけどね」

きつぱりと答えるマキアにリアは興味を示す。彼女なら真つ先に怒りを顕にするかと考えていたが、予想とは遥かに違う結果だ。

「そうなの？ 私はてつきりマキアならキレると思つてたけど」

「そりゃあ、ロランと同じ時を生きられるからね」

「……前々からマキアは、会いたい人が居るって言うてたけど、それってやつぱりロランだったんだ」

彼女はスラム街で育ててくれた最愛の恩人に会いたい。

そう言うて自分達の一行に加わる事を申し出た。

当時金銭管理も儘ならない自分達にとって、しっかりした彼女の申し出は有り難く、また目的を持つ彼女の意志を尊重して受け入れた経緯が有る。

「そつ、アイツはあたしに生きた方を教えてくれたんだよ」

「でも、ロランはマキアを置いて行った……」

「理由はアイツなりに色々有るんだろうけど、もうその件は四方砦攻略の時に鬱憤を晴らしたから良いんだよ」

ロランが守る砦での戦闘が頭に蘇る。

嵐の如く襲い来る魔法の中をマキアは、「瞬身」を駆使して突破した。

そして彼の顔に勢いのままから飛び蹴りを放ったのは、今でも忘れられない記憶だ。「だから、あの飛び蹴りだったのね」

「あの澄まし顔を蹴り飛ばしたらさ、十年の悩みなんてばからしくなったんだよ」

彼女のその姿勢が羨ましい。

そんな話をしていると、雨がポツリ、ポツリと降り出し、

「そろそろ宿に戻るか、リアの事だから明日の準備は済ませて有るんだろ？」  
「うん、私達は明日レオ達と行動するから、まだ私達に慣れていない魔族への挨拶は済ませて来たわ」

特に人狼族の少年少女達には怯えられ、心に傷を負ったのは真新しい記憶だ。

耳と尻尾をへたれさせて怯える姿に、それほど勇者である自分は脅威であり、彼らにとつて恐るべき存在だった。

改めて再認識して、やはり魔族との共存を叶えたい、そう強く思うようになった。

リアとマキアは雨が降り出すスピカを駆け出し、宿屋へと向かった。

スピカの特産品の麦のパンで腹を満たし、明日の出陣に向けて最後の調整へと入る。

スピカからアルtail平原を抜た一週間後に、いよいよアルデバランの森に入り、魔都市アルデバランの攻略が開始される。

これが良くも悪くも命運を掛けた戦いになる。長引いた最終決戦を漸く終わらせる事ができるのだと、リアは人知れず意気込むのだった。

## 10—10

雨が降り雷が鳴り響く中、ルシファアは玉座に座り天使兵の報告に耳を傾けていた。

「……サタナキアは何も果たせずに逝ったか」

失望混じりのため息が零れると、報告を告げに来た天使兵が眉を歪める。

「あの、差し出がましいかとは思いますが、葬いの言葉を捧げてやっては……っ」

「……何の意味が有る？ 何もなし得なかった彼奴に掛ける言葉など無い」

責めて混沌結晶を利用し、一定の成果を果たせると期待がしていたが、結果はアリエス砦の防衛戦力をスピカへと出撃させ、アリエス砦陥落と魔王レオの帰還を許した。

更にサタナキアが率いた部隊は、ロランの部隊と魔族兵の挟撃に遭い全滅。

所詮は有象無象と侮る事は出来ない。魔王と勇者が共闘の道を選び、そこに人間と天使までもが加わった。

「……サタナキアの件よりも進軍中の敵兵力だ。現存する兵力では対処は不可能」

「それなら一体どうするのですか？ 全魔族が既に魔王レオに合流したとの報告が上がつていますが」

「我一人で大軍を薙ぎ払うのは造作も無い。だが、女神だ。我が問題視するのは女神が

解放された件だ」

戦場に姿を見せない女神ウテナが、絶好の機会を窺っているのは間違いない。

その為に魔族領の空間を固定化し、転移魔法を封じた。逆に言えばその影響で向こう側も転移魔法の対策を講じた。

これもルシファアの狙い通りの結果だ。互いに転移を封じられれば地上を進む他に無い。

「女神は必ず隙を突くはず……だが、それも我が魔王共を討ち果たせば済む話だ。早速連中に魔王共以外に期待する戦力は無いのだからな」

ルシファアは内心で思う。

未だ不自然なまでに魔界に動きが無い。

特に魔王レオはあの男の弟子だ。かつて神と巨人王の戦争に於いて、魔族を護るために破滅を振り撒いた理不尽と破壊の塊の様なあの男が沈黙を貫いている。

それとも今回の一件を次世代が解決すべき問題だと傍観しているのか。尽きない疑問にルシファアは息を吐く。

「ルシファア様がお一人で……？ それでは我々は、貴方様に付き従った我々は不要なのですか？」

恐れを顔にする天使兵にルシファアは、残存兵力を頭に浮かべた。

来た天使兵は各大陸の制圧に向かい、魔族領に残された兵力は僅か二万。

加えて各大陸の勢力によって天使兵は、徐々に追い詰められ、天界から駆け付けた女神派によって討ち取られていると聴く。

混沌結晶をばら撒かせた天使兵は、暗殺者を名乗る混血児に殺害され回っているという報告も有る。

「……これ以上の損害は無意味。かと言って我も貴様らにも還るべき場所は無い。ならばどうするか？ 敵を討ち払う他に道は無いだろう？」

ルシファーは懐に忍ばせた混沌結晶を掌で遊ばせ、目の前の天使兵に見せ付ける。

混沌の純度をより高め圧縮した結晶。紫の輝きは深淵に染まり、天使兵に重圧を与える。

「砕きその魔力を取り込めよ。さすれば汝らに膨大な魔力を短時間ながら与えるだろう」

天使兵はそれが危険か物だと理解しながら、力の塊である結晶の魔力に抗えず、その手を混沌結晶に伸ばした。

彼はルシファーから混沌結晶を受け取り、

「で、では……我々はアルデバラの森にて防衛線を貼りましょう」

「うむ、貴様に二万の混沌結晶と全兵力を預ける。上手く活用せよ」



二万の混沌結晶を名も知らない天使兵に預け、戦に出向く彼の背中を見送ったルシフアーは、

「アガリアレプトよ」

声を掛けると柱の影に隠れていた彼女が姿を現す。

「何でしようかルシフアー様？」

「汝は直ぐにグランドウォールを超え身を潜めよ。必ず次世代の、私の保険を遺す事に勤めよ」

「ルシフアーの最後の命令、しかと承りましたわ」

ルシフアーの命令を聞き入れたアガリアレプトは最後に、

「……ルシフアー様、私は貴方様の事を愛している。それだけはお忘れなきように」

それだけ伝えると彼女は、玉座の間から静かな足取りで去って行つた。

これでルシフアー勢力の大天使は居なくなつた。

バラキエルとサタナキアは戦死し、アザゼルは自らの策略によって滅ぼした。

そしてアガリアレプトは戦線離脱。

当初の計画と想定通りに進んでいる事にルシフアーは、

「私の誤算は魔王レオと勇者リアの生存、ロランの策略。女神ウテナの解放とアルビオンの再封印」

一つのミスが計画を阻んだ。

ロランを配下に引き入れた事がルシファアの最大の過ちだ。それを彼は自らの責任と認め眉を歪めた。

「私の過ちも全て、人類を滅ぼし新たな人類を再誕させる事で漸く罪の償いが始まる……」

ただ、とルシファアは想う。

魔王レオと勇者リアの二人が争い他者を虐げ、隷属化させる人間を変えるのでは無いか、そんな期待感も有る。

「魔王レオ達が我に打ち勝つか我に滅ぼされるか。最初で最後の戦いか、どの道に転ぼうとも私の望みは叶う」

誰も居ない玉座の間でルシファアの笑い声が響く。

反響する音がどこか虚しく孤独を与えるのは、彼が本当の意味で一人だからだろうか。

愛され慕われた彼の内面は、他者と決して交わる事を赦さない贖罪の意識のみ——滅ぶ運命だった人類に知恵を与え、存続させ自然の摂理を歪めた事が彼の罪の根幹。

## 終章 共闘の終わり

11-1

アルタイル平原を超え、野山を越え、峡谷の北西部に広がるアルデバランの森へとレオ達は軍を進めていた。

一週間の行軍は、混沌結晶を埋め込まれた魔物による襲撃を受けるも、互いの連携と魔族の地の利を活かした戦術によって損害も無くアルデバランの森へと無事に到着。

眼前に広がる森をレオは紅い眼光で鋭く睨んだ。

「……天使兵は森を防衛拠点と選んだか」

ここから比較的に近い砦に、天使兵は影も無く砦は魔王軍と騎士団との戦闘痕のまま放置されていた。

「前は森を突破するだけでも大変だったわ」

リアは森を眺め、広大な森の中に存在を主張する魔王城へと眼を向ける。

伏兵に適した土地、北のグランドウォールの滝から下流に向けて流れる川辺。

前回の戦でリア達は魔族の伏兵に遭い、地の利を活かされた戦闘に苦戦を強いられた経験が有る。

特に川辺だ、草木に潜伏していると見せ掛けて水中からの奇襲には、騎士団共々驚かされたのは記憶に新しい。

「さて、人類の明日のために進軍するとしよう」

「そうね、戦争はもう終わりにしなきゃね」

レオとリアは、既に確認することも無く森へ足を踏み入れる。

そして彼らに続く様に、三種同盟の部隊が続いて行く。

陽光が木々の隙間から照らす道を進軍する中、レオ達は地面に散りばめられた痕跡と森から漂う混沌の魔力に武器を構え、警戒心を周囲に向ける。

森の至る所から漂う混沌の魔力にレオは、

「今度は防衛の要に混沌結晶を与えたか？ 全部隊に告げる、伏兵に気を取られ過ぎるな！ 魔王城からの魔力にも注意を向けよ！」

その言葉を聴いた者達は、魔王城から発せられる膨大な魔力に警戒心を宿す。ルシファーは用意周到であり、味方を駒の如く捨てる非道な男だ。

ならば、魔王城から長距離魔法の一つや二つ放つてもおかしくないは無いです。

既にここはルシファーの魔法の射程圏内だ。

「ルシファーの長距離魔法。……何日単位も続くとすれば、我々人間には防ぎ切る術が

無い」

アンドレイ王子のそんな言葉に、ミカエルが笑みを浮かべる。

「大丈夫ですわ。何が起ころうと貴方達を守護してみせましょう」

「おっと、これは心強いお言葉だ。魔法はそなた達に任せ、我々騎士団は迫り来る天使兵を相手にしよう」

意気込むアンドレイ王子に、ミカエルとセリナをはじめとした天使が心強いと言わんばかりに微笑んだ。

レオは思う。アンドレイ王子の懸念は正しいと。

行軍中の部隊に絶え間なく向けられる長距離魔法の懸念。いつ放たれるのか、それとも放たれないのか。油断のできない状況が続く中、混沌結晶と天使兵の伏兵だ。

人間で無くとも精神的に気が滅入るのは当然と言えば当然。

レオはそんな事を考えながら、右手で握った魔剣を大きく振りかぶる。

それに合わせてリアとアルティミアが同時に構えを取る。

レオは、羽根が散らばっている茂みに向けて漆黒の飛ぶ斬撃を放つ。それと同時にリアとアルティミアの飛ぶ斬撃が木々を斬り倒した。

茂みから舞う鮮血と悲鳴、倒れる木々と共に落下する天使兵にレオ達は鋭い笑みを浮かべる。

しかし、天使兵に焦りの色が無い。それどころかよく眼を凝らせば彼らの胸元に埋め込まれた混沌結晶が、漆黒の輝きを放っている。

そこで漸くレオ達は気がつく。地面に散りばめられた痕跡は、片付け忘れでは無かつたこと。跳ね上がった魔力量による絶対的な自信の現れからだ。

「ふっ、愚かな」

嘲笑うレオに天使兵の一人——先程レオに斬り付けられた天使兵が鋭く睨む。

「何がおかしい！ 我々の魔力は爆発に増加したのだぞ！ それもルシファア様の恩恵によって！」

声高らかに吠える天使兵の一人に、アンドレイ王子が問う。

「捨て駒に利用されているとしてもか？」

彼の言葉に天使兵は、真っ直ぐと瞳を向けながら槍を構える。

「それがなんだ！ 俺達にはもう帰る場所も無い！ 自らの手で壊したんだよ！ ルシファア様の待望成就のために！」

決意を声高らかに叫び、アンドレイ王子に向けて突き進む天使兵にセルゲイ将軍が立ち塞がる。

彼は槍を大剣で受け止め、鋭く重い突きに眉を歪めた。

「っ！ 重い矛だ！ 皆の者、連携し各個撃破に持ち込め！」

次々と天使兵に突撃を仕掛ける騎士団に、レオ達は魔法の詠唱に入る。

しかし、その瞬間。魔王城に混沌の魔力が集う。

集う魔力に震撼する大地と空気に次第に足を取られる騎士団。

そんな彼らに自らも巻き込まれる覚悟で攻勢に出る天使兵。

このままでは長距離魔法によって騎士団が危うい。そう判断したレオが足を踏み込むと右腕が引つ張られる。

視線を向けると、そこには任せると微笑むアルティミアの姿だった。

「レオは私にお任せを」

レオは彼女の技量に全面的信頼を起き、命を預ける覚悟で一言だけ告げる。

「任せた」

彼女はたった一言に、喜びを頭に氷の魔力を解き放つ。

アルティミアを中心に草木と地面が、銀雪に飲まれていく。

そして彼女は蒼天氷雪を上段に構えた。

「魔王城から混沌の魔砲が！」

騎士団の一人が死の恐怖に足を竦ませ叫ぶ。

彼の一声が合図となり、圧縮された混沌の魔力がレオ達の陣営に向かって解き放たれた。

森を混沌の魔砲に巻き込み迫る破壊の象徴にアルティミアは、愛刀に魔力を集わせ一呼吸吐く。

そして迫る魔砲を、

「……斬っ！」

気迫の伴った一声と共に魔砲に向けて蒼天氷雪を振り下ろした。

魔砲に孤の軌跡が一閃走る。

軍勢を呑み込まんとしていた魔砲は、たった一振りによって空間ごと斬り裂かれ、空間の修復作用と共に異空間へと消滅していく。

そんな光景を目の当たりにした者達は、声を失い呆然とアルティミアを見詰める。

しかし、当の本人はそんな視線などお構い無しに、愛刀を鞘に納めていた。

「……ッ!? ば、バカな! あ、有り得ないっ! こ、こんな……!?!」

狼狽える天使兵の声に、同意を示す様にアンドレイ王子は頷く。

あの魔砲はレオとリアの二人の魔力を合わせた塊だった。それを意図も容易く斬り裂くなど、彼女の技量を理解している。

しかし、魔力がレオとリアよりも一步劣る彼女が魔砲を空間ごと斬り裂けたことに理解が及ばない。

「あら? 私と愛刀に斬れ無いものなんてそんなに無いのよ」



イタズラぼつく微笑む彼女に、彼女を知るよく知る者達も感嘆の息を吐く。

呆然としていた天使兵が動き始め、

「だが！ 此処で引く訳にはいかない！ 者共かかれエエエ!!」

攻勢に出る天使兵に、気を取り直した騎士団が迎撃に当たる。

「魔王よ！ この場は我々騎士団が引き受けた！」

アンドレイ王子の覚悟を宿した言葉にレオは頷き、部隊と勇者一行と共に戦場を突破するのだった――

## 11—2

戦場を突破したレオ達を見送ったアンドレイ王子は剣を構える。

「さあ、我々もこの場を制圧し彼らに追い付くぞー！」

気迫を込めた掛け声に騎士団が武器を挙げ雄叫びを叫ぶ。

そんな彼らの気迫に天使兵は一步、足を後退させた。

セルゲイ將軍とカムラン隊長が騎士団と共に攻勢に転じる。それに合わせる様にセリナ率いる天使が追撃に入った。

敵兵力は二万だが、混沌結晶により増幅された魔力が戦力差を覆している。

「うおおおお！ 一人で相手にしようと思うな！ 魔族との戦争を思い出せー！」

騎士団は五十年も魔力が高い魔族と戦闘を繰り返してきた。

今更だ、魔力量が遥かに高い敵陣営と戦闘するなど、実に慣れたものだ。とアンドレイ王子は自負する。

こちらは常に劣勢の状況で戦って来たのだ、二万の混沌結晶などどうにでもなる。

アンドレイ王子は迫る槍を、刃で絡め取る様に受け流し天使兵を地面に転がす。

地面に倒れた天使兵が体制を立て直す前に、アンドレイ王子は刺突を放った。

素早く駆り出された刺突が混沌結晶を貫き、結晶は音を立てて砕け散った。

すると天使兵から魔力が失われ、彼は立ち上がろうとするも、脱力感からか何度も足を滑らせ地面に倒れる。

いつまでも起き上がれない天使兵にアンドレイ王子は訝しむ。

(彼の本来の魔力は……?)

混沌結晶は所持者の元々の魔力を増幅させていた、そう認識していたが、いつまでも起き上がれない天使兵。

そんな彼に一つ推測が浮かぶ。

混沌結晶は魔核から魔力を限界まで吸い上げ、増幅させている。そのため混沌結晶に集まった魔力は、結晶が砕けると共に大気へ分散されてしまうのではないか。

「誰か……この者を拘束せよ!」

立ち上がれない天使兵を討ち取れる気にはなれない。

そんな想いからアンドレイ王子が声を発すると、近場の天使が駆け寄り、天使兵を鎖で拘束したのだった。

アンドレイ王子は魔王城に目を向けると、静まり返った魔王城が佇んでいる。

そこには膨大な魔力の流れも無く、ただ在るだけの建造物として静かに存在を主張しているだけの城。

「魔力の消耗を抑えた？」

ルシファーがレオ達との決戦のために魔力を温存していると、肌で感じ取ったアンドレイ王子は息を吐く。

騎士団と天使が互いに連携し、混戦に持ち込み天使兵を攪乱から各個撃破を展開。

セルゲイ將軍とカムラン隊長による波状攻撃に、混沌結晶を失う天使兵。

絶え間なくセリナの鼓舞と守護魔法によって護れる部隊。

対して敵軍は次々に混沌結晶を破壊され、戦闘不能に陥る天使兵。それでも果敢に攻勢に出続けている。

そんな中、戦局を見極めているアンドレイ王子に天使兵が「セイントアロー」を放った。

だが、過剰すぎる魔力によって制御困難に陥った「セイントアロー」は、アンドレイ王子から外れ、彼の後方に着弾したのだった。

爆音と共に響く悲鳴にアンドレイ王子は眉を歪める。

「今の声は……いや、戦場に流れ弾は付き物」

僅かに視線だけを背後に向けると、焼かれた国旗が宙を舞っている。

密かに進軍していたフェルエナ公国の騎士団が戦闘に巻き込まれた。

同盟国の騎士団に被害が出るのは心苦しいが、平和の未来を歩むためには致し方ない

犠牲だ。

それでもフェルエナ公国の騎士団は、まだ大規模な軍勢を誇っているだろう。

「あらあら。流れ弾を受けるなんて不運な方々も居た様ですわ」

ミカエルはわざとらしく肩を竦めながら語りながら、襲い来る天使兵を光の波動で吹き飛ばしていく。

こうして戦闘が続き、漸く三種同盟は勝利を掴んだ。

勢い付く自軍を前に、敗走していく天使兵。この場の戦闘は人間と天使の揺るがない勝利だ。

ただ、アンドレイ王子は思う。今回の戦闘そのものが運が良かったと。

混沌結晶により過剰な魔力増加、制御不能に陥る魔法。刃を交えて天使兵の身体が増幅した魔力を扱い切れていないこと。

それらの要因が重なり、損害を出さずに勝利したのは正に運が良かった。

もしも、混沌結晶がそんな代償だらけな代物で無ければ結果は大きく違っただろうとアンドレイ王子は思わずにはいられない。

「……アンドレイ王子。捕虜は念入りに拘束し混沌結晶を全て破壊したが、やはり彼らの魔力は枯渇した様だ」

「將軍、枯渇なんて生易しいもんじゃありませんぞ。ありやあ魔力が消滅したとしか思え

ない」

カムラン隊長の報告にアンドレイ王子とミカエルは訝しむ。

「魔力の消滅？ それは一体」

「魔核にグレイプニルを打ち込まれている形跡はありませんわよ。それに消滅なんて穏やかではありませんわね」

悩む四人に拘束された天使兵が弱々しく呟いた。

「我々の魔力は……力を得る代償として失った……しばらく回復することは無い」

彼の言葉にアンドレイ王子は、どうするべきか迷う。

動けない天使兵をこのまま放置して進軍していいものか。かと言って連れて行くには彼らは邪魔だ。

捕虜を連れて行くか、見捨てるかの二択にアンドレイ王子は空を見上げた。

戦いに勝利し、これ以上生命を奪うのは強欲だ。それに彼らは無抵抗だ、このまま放置すれば魔物かフェルエナ騎士団によってどの道殺されるだろう。

ならばと、アンドレイ王子は選択を告げた。

「このまま捕虜を連れて行く」

「……感謝しますわ。彼らは道を踏み外したとはいえ、わたくし達の同族ですもの」

その同族に対してえげつない魔法を放っていたのは、誰か。そんな言葉をその場の全

員が呑み込み、捕虜を連れながら進軍を再開させる——

## 11—3

戦場を抜け、そのままの勢いで魔都市アルデバランへ侵攻したレオ達は、魔都市に魔族の気配が無いことに息を吐く。

アルデバランの入り口となる商業区から見える街並みに漂う寂しげな光景。

日の陽光に照らされ、斜めった屋根が特徴的な建物が並ぶ都市は、誰も住まない廃墟同然となっていた。

「私達が侵攻した時は、住人までもが武器を携えて抵抗してたわね」

リアをはじめてこの都市に侵攻した時の光景を思い出し、ナナ達が苦笑を浮かべた。

あんなに精神的にも戦い辛い戦闘は、侵略の立場になって初めて実感する。

もう二度と経験したくない戦場だ。

「あたしらはあの時は魔族にとつて、排除すべき侵略者だったからね」

住む場所を守るために、魔族を統治するレオを守るために彼らは武器を取った。そうつぶやくリアに、魔族が大きく視線を逸らす。

「……魔族にとつて戦闘は謂わば祭りのようなもの。コイツらに誰かを守るなどと思考は限り無く薄いぞ」



視線を逸らした魔族に、なんとも言えない眼差しを向けるレオに思わず笑みが零れる。

「そんなあく、やだなあ魔王様！ 貴方様のお陰でオレ達は満足の行く生活を送れてるんですぜ？ 何処かのバカが謀反を働いた時は、そりやあもう激怒したぐらいつすよ」

そんな言葉に歯切れの悪そうな表情を浮かべる数人の魔族。

彼らの様子を見るに、ルシファーに魔力を奪われ窮地に堕ちたレオに、ここぞとばかりに謀反を働いた者達なのだろうか。

生憎と自分はその時、情けなくも気を失っていたため誰が誰だか知らない。

しかし、結果的にレオが転移石を使用して逃れることとなった。そう考えると軽率な行動も時には重要な役割になるかもしれない。

リアがそんな事を考えていると、レオが石畳の道を歩き出す。

「……このまま進み中央区を抜け城に進軍するぞ」

レオの言葉に従い、軍が行軍を始める。

それに倣い、リアはアルティミアの隣を歩く。

歩を進める中、ふとアルティミアがこちらに視線を向け微笑む。

何だろうか、とか首を傾げると、

「あなたはレオ様と決着を付けたら、どうするのかしら？」

「そりゃあ、魔族と戦争が起こらない様にするわよ。私個人の問題だけど、ギリガン王とは交渉のカードも有るしね」

その時はアンドレイ王子とソフィア姫が味方になってくれる。

それにギリガン王は多数の臣下が居る中で、約束を守ると王として発言した。その言葉は例え偽りだったとしても、彼は発言の代償を払わなければならぬ。

特に魔核研究所とフェルエナの騎士団を動かした点も二人に追求されるだろう。

「ギリガン王を失脚でもさせるのかしら？」

「失脚ってよりは、後継者に王位を譲るかもね」

「なるほど、しばらく国は立て直しに追われるでしょうね」

そういう事になる。軍備に注がれていた力は、民のために向けられるだろう。

ただ、平和が訪れた頃にリアはメンデル国を去る決意を固めていた。

復興に入る祖国を見捨てる形になるが、後は王族、貴族と政治家の仕事だ。そこに自分の様な力と不老の小娘は不要だ。

商業区を抜け中央区を進み、中央広場へと到着するとレオが魔界の門の前で足を止めた。

「…………ふむ、フェルミナは大人しくしているか。いや、あの引きこもり気質はこちらの事

態に気が付いていないか？」

行軍を止めた中でリアはポツリと、

「フェルミナって……確か先代の魔王だったかしら？」

そんな事を呟くとアルティミアとロランが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、クルが疑問に応える様に呟いた。

「昔、フェルミナ様……鬼人族の長とアルティミアとロランは魔王の座を掛けて争っていたからね。ま、僕はまだ産まれても無い頃の話だけだ」

「お父さんから最近聴いたことあるかも……基本引きこもりで、メイドを侍らせるろくでなしだったって」

鬼人族の長というのは初耳だったが、実力は確かなのは窺える。

アルティミアとロランという強者から魔王の座を守り続けていた、しかしそれはレオが現れてから一変したのだと。

「そのフェルミナが大人しくしてるって良いことなの？」

「「「もちろんだ」」」

口を揃えて応える魔族達にリア達は苦笑を浮かべた。

そこまでフェルミナという女性は危ないのか。

「あいつ、暴れるだけ暴れて破壊した都市はそのまま補填も無しだからな。統治者とし

ては無能だが、力だけは一級品だった残念な女だ」

ロランの棘の有る言葉に、リアは直感で理解する。

恐らくこの戦場にフェルミナが現れれば、敵味方関係無しに暴れるだけ暴れて帰るかもしれない、と。

「……ボク、魔界に行ってみたいかも」

そんな事を思っていると、父ジドラの故郷を見てみたいのか、フィオナが魔界の門を見つめながらポツリと呟く。

「むう。幾ら混血児のお前とはいえ、魔界の環境によって死ぬ危険性が有る以上は許可できないな」

「それ以前にちんちくりんは、魔界語を完璧に覚えるのが先だろ」

ククルがフィオナの帽子を指で軽く弾くと、彼女はむっと頬を膨らませた。

彼女はククルに対して感情的になり易い傾向に有る。見た目の年齢が近いからか、それとも――

そこまで考えに至ったりリアと同じ結論に至ったのか、ナナとマキアが温かい眼差しを二人に送る。

「……魔界の門の確認も済んだ。明るい未来を掴むためにルシファーは邪魔だ」

そう言って歩き出すレオに、リア達は行軍を再会するのだった。

## 11—4

魔王城の城門に到着したレオ達は、行軍を止め訝しむ。城門の向こう側から重々しい足音が絶えず響く。

「……この重量の有る足音は、ゴーレムか？」

魔法人形ゴーレム、土に魔力を与え形造る人形の一つ。

ルシファアの魔力によって生成されたとなれば、その防衛力は並みでは無いだろう。加えて重々しい足音に僅かに紛れる足音も有る。

魔都市に何も備えが無いと思えば、城内の防備を固めていた。油断を誘うつもりだったのか、とレオは鋭い笑みを浮かべる。

「レオ様は張り切っているようですが、雑兵の相手は我々、配下が受け持ちましょう」

大型の十字手裏剣を片手にハーゲンが提案を述べた。

四魔将軍と勇者一行を連れ、迅速にルシファアの下に辿り着く。その為には雑兵の相手を配下達に任せなければならない。

彼らなら心配は無い。きっと道を切り拓いてくれるだろう。

「では、魔王が命令を下す。ハーゲンを筆頭に雑兵を喰らい尽くせ」

レオの命令一つにハーゲンを筆頭に、魔人族、雪羅族、鬼人族、人狼族、邪竜族が勇ましい雄叫びをあげる。

ハーゲンが十字手裏剣で城門を斬り裂き、崩壊する門を合図に内部に各種族が突撃していく。

城の入り口に、それこそ数えるのも馬鹿らしくなる程ゴーレムが展開されていた。

それに混ざる様に、影で形作られた人影が武器を携え待ち構えている。

そんな人影をフィオナが足を止めずじつと見つめると、

「ルシファアの魔法？ 魔族風で「シャドウ・ポーン」かな」

大変素晴らしい命名を与えた。

「くっ……フィオナの癖に魔族の琴線を刺激するじゃあないかい」

ライバル意識からかククルが悔しそうに呟くと、そんな彼にフィオナは小さな舌を出して笑う。

そんな中ハーゲン達の魔法がゴーレムを粉碎し、人影に魔力を宿し刃を振るった。

霊体同様に実体の無い者を倒すには、魔力が必要不可欠だ。

魔族の手によって斬り裂かれ、潰され、燃やされる人影。

魔族が縦横無尽に暴れ、作り出される道をレオ達は駆ける。

城内に入り廊下を疾走する中、レオはちらりと背後に目を向けた。地面から無尽蔵に湧き上がる人影とゴーレム。

「ルシファーを倒さぬ限り、無尽蔵か」

「その分ルシファーの魔力が減る……甘い考えよね」

リアのため息混じりの言葉にレオは静かに頷く。

「奴は天使だ。魔族と同様に魔力の回復速度が速い、魔力の全結に半日はかからないだろうよ」

どんなに策を巡らせ、消耗させようとルシファーは人間とは違って魔力の回復量も傷の治りも速い。

加えて魔力量がこの場に居る誰よりも遥かに高い。彼と戦うという事は、正に高みに聳え立つ山を崩すような行いだ。

そう、彼という巨大な高みを崩すには急所狙い。この一点に勝機が有る。

「総力戦になるが、奴はたった一人だ。ここは人間界流で繋がり強さというヤツを見せ付けようではないか」

疾走する中、そんな事を口にするとりア達が温かい眼を向けて来る。

嫌いじゃないが、むず痒くなる視線に顔を逸らした。

すると、レオ達の視界を埋め尽くすように、ゴーレムと人影が出現し道を阻む。

しかし、一陣の強風がレオ達の間を駆け抜けると。縦横無尽に戦場化した廊下をハーゲン達が駆け巡り、ゴーレムと人影を蹂躪していく。

「レオ様、お先へ！」

「ああ！」

ハーゲン達の活躍によって廊下を抜け、誰も居ない広場に出る。

リアとナナと一戦交えた広場は、あの時のままの状態で残されていた。

自ら放った【フレア】によって残された爪痕も闇と光の衝突によって生じた亀裂も、全てあの時のまま。

「まるで二ヶ月前に戻って来たようだな」

「修繕も無しに放置なのね……ルシファアって魔王城を何の為に占拠したのよ」

リアのそんな疑問にロランが、指を立て眉を歪めながら口を開く。

「二つは混沌結晶を量産するため。二つめは魔族の戦力を多少なりとも当てにしていたこと。そして三つめは、これが奴にとっての本命である【昇華】の儀式を安全に実行するため」

「確かにここ以上に安全な場所は無いだろうな。騎士団は安易に攻め込めない場所、ましてや当時は総力戦だった。……俺とリアが敗戦し、四魔将軍が離脱した状況下ではヤツを止める者は居なかっただろう」



二人から魔力を奪ったルシファーは、混沌の魔力で両軍を鎮圧。

ナナ達と生存した騎士団を幽閉し、四魔将軍を配下に置こうと目論んだ。

改めて聴くと、なぜナナ達を始末しなかったのか疑問が浮かぶ。

「なぜヤツはナナ達を始末しなかった？ 人間の殲滅を謳うヤツが、なぜ生かす真似をしたのか」

そういえば、とナナ達が首を傾げると、ロランが深く息を吐いた。

「ルシファーは人間の殲滅を円滑に行う為に、戦力を欲していた。……いや、天使兵という十分過ぎる戦力を持っていたが、連中は戦を知らない素人集団だ——」

ロランは続けて言う。

「ナナ、マキア、フィオナの魔力は勇者の次に高い。だからヤツはレオ様と勇者にしたように、三人を生かしたまま魔力の供給源とする事を計画に入れていた」

「それじゃあボク達は、ザガンから提案を受けなかったら牢屋の中でずっと魔力を奪われ続けてたってこと？」

人の尊厳も何も無い、正に魔力を得る為の装置。ルシファーはその役割をナナ達に求めていた事になる。

「魔力を奪われたら、身体なんて思う以上に動かないし剣を振るうのも一苦勞。私とレオは運が良かったから何とか島からも脱出できたけど……敵の本拠地で孤立無援だつ

たらと思うと……」

魔力の源として生かさね続けると末路を想像したりアは、恐怖心と一歩でも間違えれば訪れていた結末に肩を震わせた。

「何にせよ、やはり俺の臣下は優秀だったと言う事だな」

主君が居なくとも自ら考え行動し、実行に移す行動力と柔軟な思考力が有る。

そう褒めるとザガン達は照れたのか、頬を掻きむず痒そうにしていた。

レオは廊下から響く戦闘音に耳を傾け、広場から玉座の間を指して駆け出す。

広場を抜けた廊下先に有る螺旋階段を駆け上がり、階段の途中に在る廊下へと入る。

そこは常日頃文官達が、書類の山と資料の山を運びながら通い詰める廊下だ。だが、今は誰も居ない寂しい廊下。

そして玉座の間が在るのがこの廊下の最奥だ。

真つ直ぐと歩き、重々しい扉の前に立ち止まる。

この扉一枚の向こう側にルシファーが待ち構えている。

レオが周囲に視線を向けると、全員が準備万端と意気込んだ。

(良くも悪くもこの一戦が人間の未来を変えるか)

明日はどっちへ転ぶのか。少なくとも明るい明日のために全力を尽くそう。

人間と魔族が手を取り合い、互いに認め種族の隔たりを超えた共存を、セオドラと夢見て語り明かした約束のために。

魔王レオは右手で扉を開け放った。

玉座の間の中央でルシファーが不敵に笑い、身から溢れ出る膨大な魔力を発しながら待ち構えていた。

## 11—5

十二枚の翼を広げ羽根が舞う中、圧倒的な強者として余裕を見せるルシファーに、レオは紅い眼光で鋭く睨む。

「随分と余裕だな」

一見すると余裕に見えるが、ルシファーには油断も隙も無い。

「我と相対して臆さないのは、流石は魔王と言ったところか。……他の者も貴様がその場にいるからか、臆さぬな」

「お前を恐れる者はこの場にはおらんよ」

絶対的な強者として君臨するルシファーに、この場に居る全員が誰一人として臆してはいない。

共通の絶対に倒すべき相手が一人。周りを見渡せば心強い仲間が居る。それが人に勇気を与える源。

”一人では絶対に勝てない相手だ”だからこそその人間と魔族、そして天使との共闘だ。

「ふん……では、貴様らを我が殺し尽くしてやろう」

混沌の魔力を解放し、空間を圧力で震撼させるルシファーに対して、レオ達は自らの魔力を解放し各々の得物を構える。

ルシファーが地を蹴った瞬間、レオは前方に向けて魔剣を片腕で振るった。

【縮地】で迫ったルシファーの刃を上段に弾き、同時にザガーンの重い拳がルシファーの腹部を殴り飛ばす。

それとほぼ同時にマキアが風の短刀を投擲し、ルシファーに迫る。

押し退けられたルシファーは、宙返りを繰り返す風短刀を二本の剣で弾きながら同時に体勢を整えた。

地に足を付ける彼の足元に、フィオナ、ナナ、ククル、ロランの魔法が放たれる。それに合わせてレオとリアが動く。

爆炎と水流、暴風と溶岩がルシファーを呑み込む。だが、彼は右腕を払うだけで四人の魔法を掻き消した。

「舐めるなよ、孤独の魔王」

背後から魔剣と聖剣を振り抜くと、ルシファーの双剣の刃で受け流す。

「片腕だが剛腕による刃、速度を乗せた刃……だが軽い！」

ルシファーは二人の刃を弾き返し、体勢を崩した二人に混沌の波動を繰り返す。

目前に迫る混沌の波動。だが、レオとリアには恐れの色が無い。

それもその筈だ、すでに仲間が動いているのだから。

周辺の温度が急激に下がりが息白が口元から漏れる中、混沌の波動が氷塊に呑まれた。「そんなんじや、レオ様とリアの首は取れないわよ」

イタズラっぽく笑みを浮かべ、凍り付いた混沌の波動からアルティミアが三步退がる。するとザガンとククルが拳を繰り出し、氷塊を打ち抜く。

打ち出された氷塊が迫る中、ルシファーは双剣でザガンとククルに向けて撃ち返す。

その瞬間、ルシファーの表情は驚愕に染まった。

氷塊の影に隠れ、目前に現れたレオとリア。そして背後を取るマキアとアルティミアが、なんの示し合わせも無しに行動している事に、ルシファーは心の底から驚きを隠せずに居た。

たった二ヶ月でここまで連携ができるものなのか。違う、彼ら全員が合流したのはほんの一週間前だ。たったそれだけの期間でこれほどまでの連携を可能にできるのか。

疑問を浮かべる中、鋭い刃が四方から迫る。

ルシファーは混沌の壁を周囲に放つことで四人の刃を防いだ。

混沌の壁に火花を散らす刃。そんな中、レオが失った左腕を闇で作り出し不敵に笑

う。

欠陥を補うべく形成された闇の左腕がルシファアの眼前に迫る。

「こいつならどうだ？」

レオは闇の拳を混沌の壁に叩き付け、衝撃を内部へ走らせた。

壁に生じる亀裂。しかしルシファアはそんな事はお構い無しに、双剣を構え鋭く回転を放つ。

遠心力と放出される膨大な魔力を加えた刃が竜巻を作り出し、ルシファアの周囲を囲んでいたレオ達が弾き飛ばれる。

弾かれるレオ達と入れ替わるように、四属性の魔法がルシファアに着弾した。

魔法が翼に傷を付け、僅かにルシファアの肉体に痣を付ける。

「致命傷には至らぬ魔力、消えない闘志……貴様らは何のために我に刃向かう？ 人間にそこまでして守る価値が有るといえるのか？」

そんな彼の言葉にレオはため息を吐く。

「俺の計画のためには貴様は邪魔だ、ただそれだけのこと」

「レオはああ言ってるけどさ、私は魔族と人間、そして天使との共存のためよ！」

今回の一件で天使とも短いながらも手を取り合えた。例えそれがルシファアの引き起こした事件の結果だったとしても。

ルシファーは此処で討たなければ犠牲者が報われない。

「共存……共存か。人間が共存を語るか……貴様らは共存相手をいずれ優位に立とうと蹴落とす。……寿命の違い、絶対的な魔力の差から始まった魔族と戦争を引き起こしたのは誰だ？ 他ならぬ人間ではないか、あんなにも手を差し伸べたというのになあ？」

邪悪に嗤うルシファーにレオは静かに語り出した。

「……ある日、突然長寿の男が現れそいつを長寿だから受け容れる。なんて簡単に理解も納得がいく筈が無いだろ。……だから俺を理解するためにセオドラは”言葉”で語り掛けたんだよ」

そこから魔族と人間の始まりだった。最初は人間が武力に訴えるのならば害することも視野に入れていたのも事実。

だが、結果的にセオドラは言葉で語り、魔族の理解を深めようと努力した。だから魔族のレオも人間を理解するために努めた。

なんて事は無い、他愛のない話から始まりいつの間にか、互いの夢を語り合う間柄、友になつていた。ただそれだけのこと。

「お前は人間の何を理解しようとした？ 生物が生きるために他生物を蹴落とすのは当然だ」

「……生物の生命さえ弄び、自分達が神である如く振る舞う傲慢な人間の何を理解しろ



と?。」

「やれやれ、貴様も神に至ろうとしているだろうに」

結局のところレオは、ルシファーに共感もできないければ理解を示すこともできない。

何故なら彼は寄り添った者達を、信じた者達でさえ切り捨てのだから。

「全ては神に至り、新人類を創生するための計画に過ぎん」

「傲慢な考えね、それは人間と同じよ」

「ぬかせ」

ルシファーはリアの放った一言が気に食わなかったのか、彼女の目の前に転移すると双剣を振るった。

しかし、リアは迫る刃を難なく弾き返す。

「あんたの様に剣に魔力を上乗せして、重さと鋭さを増すけど……弾くのは簡単よ」

聖剣の柄を掌で回し、左薙にリアが聖剣を振るう。そして刃がルシファーの腹部を斬った。

鮮血が玉座の間に舞った瞬間、空間が混沌に呑み込まれる――

## 11—6

ルシファーによって放たれた混沌が玉座の間を呑み込んだ。

無事な身体にリアは、状況を理解しながら周囲に視線を向ける。

隣に立つレオとアルティミア、少し離れた位置に居るナナ、フィオナ、マキア、ザガー  
ン、ロラン、ククル。全員無事な姿に安堵の息が漏れる。

「リア、まだ安心するには速いぞ」

「うん。ルシファーは何処に？」

「この空間内に居る事は確かよ……背後に気を付けて、また魔力を奪われたら嫌でしょ  
う？」

それは嫌だ、とリアは頷きながら周囲に警戒を向ける。

確かにルシファーの魔力は、この混沌の中から感じるが肝心の姿が見えない。

足場も壁も全てが混沌だ、一体どこから攻撃が繰り出されるのか。

警戒を浮かべる中、一部だけ空間の揺らぎが見える。注意深く観察すると揺らぎが次  
第に膨れ上がり、

「みんな気を付けて！」

全員に警告を飛ばす。

すると、何も無い虚空からこちらに向かって斬撃と混沌の炎が放たれた。

虚空から飛来するルシファアの斬撃と魔法を、リアは素早く駆け出し避ける。

同様にレオとアルティミアが斬撃と魔法を弾きながら、空間の揺らぎへ駆け出し刃を振るつた。

二人の斬撃が空を空振り、嘲笑うかのようにレオとアルティミアの背後に混沌の雷が放たれる。

「《二人に鏡の護りよ》」

素早くナナが反射魔法——【リフレクション】を二人の背後に発動させ、混沌の雷を撃ち返す。

だが、ルシファアが放ったと思われる混沌の雷さえも空間に消えていき、何も起こす事も無く空振りに終わった。

魔法が放たれた場所にルシファアが居るとは限らない。

何処に姿を消しているのか、リアは上を見上げ聖剣を構える。

宙からこちらを見下しているかもしれない、一か八か。

リアは魔法技——【洗斬】を宙へと放つ。

孤を描いた斬撃が宙へ飛ぶ。しかし【洗斬】は真つ直ぐと宙を飛ぶだけで、やがて空

間の揺らぎに吸い込まれていった。

「……アルティミア、お願い！」

「任されたわ」

アルティミアが足幅を一分広げ、蒼天氷雪を構えた。そして一呼吸から刃を振り抜き、一閃が空間を斬り裂く。

斬り裂かれた混沌の空間の裂け目が生じ、そこから玉座が見える。

だが、空間の裂け目は僅かな時間で閉じてしまい、アルティミアが息を吐く。

「ちよつと一人逃すのも無理そうね。空間の修復が想像以上に速すぎるわ」

「成る程……ロランよ、そちらは如何だ？」

ロランの方に視線を向けると、彼らは魔法を周囲に放ち様子を確かめていた。

ロランは肩を竦め、息を吐く。

「魔力の無駄遣いだな」

「手応え無しか……さて、困ったな」

レオはそんな事を言うが、あまり困っているようには見えない。

唯一の突破口がアルティミアの斬撃、それともいつそのこと全方位に全員の攻撃でも放てば何か起こるのだろうか。

「みんなで全方位に仕掛けて見る？ ルシファーが何処に居るのか分かんないしさ」

「そうだな、物は試した。全員リアの下に集まれ」

レオの言葉一つで全員がこちらに駆け付ける。

リアは聖剣に光を集わせ、レオが魔剣に闇を集わせる。

リアとレオ、マキアが斬撃を放つと同時に、アルテイミアが【氷槍】を、ザガンが【フレア】を放つ。

それに続くようにロランが【メギド】を、ククルが【テンペスト】を、そしてナナが【アクアストーム】を放った。

全方位に放たれた攻撃が、膨大な魔力が弾け反発しし合う。その結果魔法が大爆発を引き起こし混沌の空間に亀裂を生み出す。

そんな時だった、ルシファーが虚空の揺らぎから漸く姿を見せたのは。

「……絶望的状况であつても抵抗するか」

「やつと姿を見せたわね！」

ルシファーに聖剣の剣先を向けると、彼は深い笑みを浮かべ手を挙げた。

すると、こちらの周囲を囲むように魔法陣が現れ、魔法陣から赤黒い矢が飛ぶ。

リアは飛来する赤黒い矢を弾き、周囲に目を向ける。

既にそれぞれ矢に対する防御へと移っている。ならばと、リアはレオに視線を送る。このまま矢を弾きながらルシファーに突っ込む。そう、目で合図すると彼は笑った。

矢を弾きながら、リアとレオは同時に駆ける。

ルシファーに向けて駆け出す中、矢が頬、足、腕を掠める。足を止めれば矢の集中放火によつて死ぬ。一度足りとも足を止めてはダメだ。

駆け出しながらリアは聖剣を振るう腕を止めず、確実にルシファーとの距離を詰めて行く。

絶え間なく飛来する矢が、徐々に速度を増していく。それに合わせてリアは、更に聖剣を振るう速度を速める。

隣に眼を向ければ、レオが片腕で魔剣を振るっている。それでもこちらの繰り出す剣速より上だ。それも同然かもしれない、彼は元々片腕で剣を振るうのだから。

混沌の矢を弾き続ける中、ルシファーが指を動かすのをリアとレオは見逃さなかった。

瞬間、二人は同時に左右に弾け、後方から飛来する矢を避ける。

「ほー、不意打ちを避けるか」

「当然だ、前方からの集中放火から不意打ちを加える方が実に効果的だからな」

リアはちらりと後方に目を向ける。矢の注意が全てこちらに向かっている。

ナナ達に魔法陣の脅威が無くなり、彼女達は既に魔法の準備へと移っている。

ならば、とリアは「縮地」を駆使し、魔法陣を抜けルシファーの背後を取る。

こちらに眼を向けるルシファーと視線が合い、リアは微笑んだ。

「いれならどう!?」

振り返るルシファーに「洗滅斬」を放つが、彼の双剣によって防がれてしまう。

火花が散る中、ルシファーは背後から魔剣を振るつたレオに対して、彼の腹部に混沌の炎を叩き込んでいた。

弾かれ三度混沌の空間を転がったレオは、すぐさま体勢を整えルシファーへ駆ける。リアは彼の動きに合わせ、聖剣を袈裟斬りに放つ。

だが、ルシファーの双剣によって聖剣の刃が弾かれ、鎧に魔力の衝撃が襲う。

「かはっ」

鎧が砕け内部に生じる圧力に血反吐が出る。

身体が弾かれながらもリアは体制を直し、反撃とばかりに斬撃を飛ばし、地を蹴り再度ルシファーに駆ける。

聖剣を右薙に振るい、レオが合わせるが如く左薙に魔剣を振るう。

それに対してルシファーは、二本の剣をそれぞれ交差させ受け止めた。

刃が軋む中、レオが左掌をルシファーの腹部に向け、

「仕返しだ……【ダーク・フレア】！」

禁断魔法——【フレア】に闇属性を加えた魔法がルシファーに爆発を与える。

「はっ」

ルシファーは爆発の威力と闇の侵蝕に血反吐を吐き、生じた隙に更にレオは畳み掛ける。

溢れ出る闇の魔力を魔剣の刃に乗せ、重く鋭い一撃を唐竹からルシファーに叩き込んだ。

衝撃に怯むルシファーにリアが動く。

「洗滅波斬」!!」

光の魔力を最大に解き放ち、光輝く洗刃——奥義「洗滅波斬」を聖剣ゼファールに宿す。

光輝く洗刃をルシファーに、右薙、左薙、唐竹から三度の斬撃を放ち、そのままの勢いから鋭い回転斬りを繰り出し、ルシファーの肉体を薙ぎ払った。

ルシファーの鮮血が舞い、ナナ達の方へ吹き飛ぶ彼に対し、彼女達は準備していた魔法を一斉に解き放つ。

炎、風、土、水、氷属性の魔法による集中放火を受けたルシファーは、地面へとその身体を叩き付けられた。

しかし、それでもルシファーは立ち上がり、消耗したザガン達が距離を取る。

リアとレオが同時に「縮地」でルシファーの背後から、聖剣と魔剣の刃を突き放つ。



鈍い感触が手に感じる中、二人の刃がルシファアの心臓を魔核ごと貫く。

聖剣と魔剣を引き抜くと、

「……なぜ我は負けた……何が足りない？」

血反吐を吐かながらこちらを振り返り語り出した彼に、レオが静かに答えた。

「お前に足りなかったものは他者を信じる心だ……お前がアザゼルを切り捨てず、サタナキアに魔王城の防衛を担当させていれば結果は、お前の勝ちだったろうな」

そうだ。ルシファア一人を相手に八人がかりで挑み、なんとか掴みとった勝利だ。

もしも、この場にルシファアの仲間が一人でも居れば、仲間の誰かが命を散らし、仲間の死に対する動揺から崩壊していただろう。

アガリアレプトが何故ルシファアの加勢に現れないのか不思議だが、もう彼は助からない。

「どうして一人で、全部やろうとしたのよ」

「……だ、れも……信じ切れなかった、我の弱さ故よ」

彼がそれだけ言うと、ルシファアの肉体が灰になり崩れていく。最後の彼の表情は寂しそうで、後悔と敗北を受け入れた複雑な感情が現れていた。

ルシファアが死亡すると同時に混沌の空間が晴れ、玉座の間が視界に広がる。

「……力の代償か」

ぼつりと呟くレオに、ナナ達が戦鬪の疲労から地面に座り込んだ。  
「あらあら、もう疲れたの?」

「最後に限界以上に魔力を込めたから、ボクはもう魔力切れだよ」

フィオナが見下ろすアルティミアに笑みを浮かべると、玉座の間に一人の魔族が駆け込んで来る。

まだ戦争は終わらない。そう示すかのように、魔族が緊張を宿した顔で、

「魔王様! フェルエナの騎士団が都市の目前まで迫っております!」

「……そうか」

「ですが、現在騎士団と天使の方々が彼らを止めている状況です!」

アンドレイ王子とミカエルが時間を稼いでいる。

レオとリアは互いに視線を向け、同時に距離を取る。

「良いな、殺すつもりで来い」

不敵な笑みを浮かべ、闇の魔力を解き放つレオにリアは微笑む。

「ええ、これが最後の決着よ」

彼の期待に応えるべく、リアは光の魔力を解き放った。

仲間達と四魔将軍が見守る中、二人は同時に駆け出した——延期された決着を付け、

明日を迎えるために。



レオはリアを見据え、矢を射抜く用量で魔剣を引き絞る。

「いくぞリアよー」

「来なさいー」

レオは一呼吸のもと地を踏み蹴り、矢の如く刺突を繰り出す。

鋭い刺突をリアは右薙で弾く。レオは弾かれた勢いを利用し、そのままの体勢から回転斬りを放った。

「甘いよー」

リアは後方に跳躍し、刃を避けると共に「洗斬」を二発放つ。

レオは地を走る二発の「洗斬」を左右に動きながら避け、リアの懐に一気に入り込む。刃を下段から斬り上げ、リアが聖剣で弾く。

互いに繰り出される剣戟が火花を散らし、次第に高まる魔力が魔王城を揺らす。

あの決戦の日の記憶が頭に浮かぶ。あの時も彼女と剣を交えた。戦場で再会し何度も交えた刃、その度にリアという少女は喰らい付こうと努力を重ね、会う度に彼女は強くなっていた。

今もこうして刃を交えているが、やはりあの決戦よりも彼女が繰り出す刃に重みと鋭さが増している。

二ヶ月の旅路がリアに何を齎したのか、彼女は何を感じ何を想い刃を振るうのか。

それは、平和を望む願いと叶えるための覚悟だろう。

レオは魔力を纏わせた魔剣で、リアの聖剣を上段に弾く。すると彼女はすぐさま左腕を引く。

アレが来る、そう理解した上でレオは左拳を引き絞った。

「っ！ 【破剛掌】」

内部破壊に特化したリアの渾身の一撃。その全てを左腕で受け止め、内部に衝撃が伝わる刹那の瞬間にレオは、左腕を形作る闇の魔力を離散させ衝撃を逃した。

すぐさま闇で左腕を作り出し、リアの左腕を掴み床に叩き付ける。

鈍い衝撃が床に伝わり、

「かはっ！」

リアが血反吐を吐く。それでもしつかりと聖剣を握り、意識を飛ばさない辺り流石は好敵手だ。

床に倒れているリアは、左手をバネに起き上がりながら聖剣で螺旋を描く。

聖剣の刃が頬を掠め血が滴る。

「はあ……重い一撃食らっちゃまわね。でも、ここからよ！」

衰えない闘志にレオは、全ての魔力を解放することで答えた。

彼女も自身の全ての魔力を解放し、聖剣に輝きが増す。

「あの時はとんだ邪魔が入ったが今回は違う。どちらかが倒れるかまでだ！」

レオは歩術魔法技——【縮地】を駆使し、リアの背後を取り、逆袈裟斬りを放つ。それに對して彼女は聖剣を背後に回し斬撃を防ぐ。

斬撃を防ぎながら身体をこちらに向け、洗刃を宿した聖剣を右薙に放った。

ルシファール戦の折に見せた彼女の奥義。生憎と自分には彼女の奥義に比べられる奥義など無いが、それでもレオは身体を強引に引き寄せ、洗刃を魔剣で受け止める。

鈍い音が響く中、剣戟が続く。

魔力の衝突によって魔王城が揺れ、衝撃が玉座の間に亀裂を作り出す。

それでもレオとリアは止まらない。譲れない最後の戦いだからだ。

好敵手を打ち破ってこそその勝利だ。

しかし、戦闘も長くは続かないだろう。自身の残り魔力と魔剣を徐々に侵蝕する錆びが、決着の終わりが近いことを意味している。

左腕の維持に魔力を絶えず維持し続け、魔剣に魔力を常に供給している。

残りの魔力に関してにはリアも同じ条件だ。

レオは聖剣を弾き、リアから距離を取る。そして左腕を解除し、全ての魔力を魔剣を集める。

闇を凝縮させた剣身に闇の炎が走る。

これが良くも悪くも最後の一撃となるだろう。

「この一撃で全てに決着を付ける」

「……分かった、私が受け止めてやるわ!」

膨れ上がる闇の魔力を前に、彼女は微笑んでいた。

愛おしい笑みを向けられたレオは、優しい笑みを浮かべる。

そして彼は地を踏み込み駆け、最後の一刀を弧を描く様に鋭く繰り出した。

斬撃と共に放たれる闇の炎を纏った衝撃波を、リアは洗刃で受け止め、闇を光が呑み込んでいく。

リアの刃が斬撃を弾き、レオの右腕が大きく弾かれる。

これはもう見事としか言いようが無かった。魔王の一撃を人間である彼女が真正面から打ち破ったのだから。

そしてレオは見た。目に涙を溜め聖剣を突き刺す彼女の姿を。

聖剣が腹部を貫く。前のめりになったリアは、聖剣から手を離し、こちらの胸元を握り締めていた。

「れ、お……私の勝ち、よ」

腹部から血が滲み血が口元から漏れる中、レオは彼女の涙を右手で拭う。

遠のく意識を辛うじて止め、

「……泣くな。お前は、勝者だ……皆を明るいい笑顔で、照らして……や、れ」

「……うんっ！」

溢れ出る涙にまみれながらも、彼女は満面の笑みを浮かべた。

正に彼女は太陽のように明るいい笑顔で人々を照らす。自分はそんな彼女に惹かれていたのだろう。

レオは朦朧とする意識の中、立ったままその意識を手放した。

リアは涙を拭い、ゆっくりとレオから聖剣を引き抜く。

傾く彼の身体を駆け寄ったアルティミアが愛おしく抱き締め、

「さあリア、最後の一仕事が残っているわ。貴女の勝利を皆に伝えてあげなさい」

「うん……彼の事はお願いなね」

「ええ」

アルティミアは短く頷き、リアは聖剣にこびり付いたレオの血を払い鞘に納めた。

「みんな、行くこう」



仲間達に声を掛け、彼女達は領き玉座の間から駆けていく。

そして、中央広場で魔族と騎士団と天使を相手に、刃を振り抜こうと剣を構えるフェルエナ公国の騎士団に対して、リアは声を張り上げる。

「そこまでよ！ ルシファーと魔王レオが倒れた以上、これ以上の戦争行為は無意味よっ！」

リアのその言葉にフェルエナ公国の騎士団は戸惑うと、やがて戦争終結に歓声の声を張り上げるのだった。

そんな彼らを他所にリアは、ナナ達に振り返る。

「後は私に任せて、ナナ達は魔族をお願い」

「はい、こちらの問題はザガン達と協力して対処しましょう。ですが、リアも絶対にこの地に戻って来てくださいね」

「うん、ここにも私のやるべき事がまだまだ有るからね。でもその時はただのリアとしてだけど」

リアは微笑み、アンドレイ王子の下へ歩み出す。

ギリガン王との約束を果たすために――

アンドレイ王子が率いる騎士団とミカエル率いる天使と共にリアは、浮き足立つ住民の歓迎を受けながら王都フェニスへ帰還を果たした。

長旅の疲れを癒す暇も無く、彼女はすぐさまアンドレイ王子、ミカエルとセルゲイ將軍を連れて入城。

ギリガン王がリアの姿を視界に入れるや、上機嫌に玉座から立ち上がった。

「おお！ 勇者リアよ、よくぞルシファーを討ち果たしてくれたな」

まだ報告を送っていない筈。なのに何故知っているのか、と誰しもが疑問の眼差しを向けると。

「妾達は全てを観ておったぞ」

からからと答えるウテナにリアはため息を吐く。

だから一部の住民がルシファーと魔王レオの討伐おめでとう、などと云ったのか。

つまり今回の戦乱を二人は最後まで目撃していた。これなら話もしやすい。

リアは一瞬だけ、アンドレイ王子とソフィア姫に視線を送りギリガン王に口を開いた。

「私は勇者としての責務を全うしました。だから、王には私の望みを、願いをどうか叶えて頂きたいのです」

「うむ。幾らでも聞き入れよう」

幾らでも。その言葉にリアは二言は無いな、と微笑むと。彼は笑みを浮かべ返す。

「そう……なら、これ以上の魔族への侵略行為及び、メンデル国内に住む魔族と混沌児の迫害行為の禁止。そして私をはじめとした勇者一行の魔族領への亡命を黙認してもらうよ!!」

声を張り上げ言い放ったリアにギリガン王は驚き、やがて笑み浮かべた。

「……強大な魔王を人の手で討ち果たせるとお主は証明した。ならば魔族の殲滅は無意味、か」

随分と聞き分けの良いギリガン王に、リアは不信感を向ける。

彼は極秘に同盟国フェルエナ公国を動かし、背後から魔族を討つ計画を進めていた。そんな彼の言葉を信用できるほどリアは、彼に対して不信感を募らせ過ぎていた。

「お父様……そのように言っても誰もフェルエナ公国を動かし、味方を騙し討ちしようとした件に付いては誤魔化されませんか?」

棘のある声ソフィア姫がギリガン王を睨む。

そんな娘に対して彼は、深いため息を吐いた。

「戦に絶対は無い。ルシファーを討ち果たすという保証は何処にも無かつたじやろう？ それに例え疲弊したとしても相手は魔族。隙を突かれたところで彼奴らをフェルエナが討ち取れるなどとはじめから思っておらんよ」

なら何故要請を出したのか。誰しもがギリガン王に疑問を宿す。

「余にも王としての立場が有る。……アンドレイよ、王とは綺麗事だけで務まる座では無いのだよ」

「……つまり、フェルエナ公国を動かしたのも同盟国の顔を立てるためだったと？ しかしながら我々は魔族を守るために彼らと剣を交え掛けたのですが」

「それで良い……奴等も人間と魔族が共存し合えると少なからず理解を示すじやろう」  
ギリガン王の声に覇気が無い。その事によろやく気が付いたリアは首を傾げた。

少なくとも戦場に向かう前までは、言葉一つに覇気を宿してはいたはず。なのに何故、今の彼は寂しそうなのか。

リアはなんとなく彼の心情を察して、言葉を飲み込む。この指摘は野暮だからだ。

「……フェルエナ公国の件は理解したけど、私の願いは聞き入れてくれるのかしら？」

「もちろんじゃとも。魔族とはこれから共存のために方々と議論を交えねば……余がまだ存命の内に争いの火種は取り除くでしょう——」

「付け加えてお主らの魔族領への亡命の件も承知した。知ってしまったのじやろう？」

真実を知ったからこそ、もうこの国は居られない。

「ええ、流石に一度ハーヴェストに立ち寄るけどね」

すんなりと纏まった話にリアは息を吐き、ギリガン王がそんな様子を見ては笑っていた。

その笑みはまるで憑き物が取れたような笑みだった。

「しかしルシファアの奴は、妾に警戒し過ぎて過剰な魔力を消費しておったのう」

「過剰な魔力……転移封じのこと？」

「混沌の空間のことじゃよ。お主らも実感したと思うが、アレは内部からも外部からも出入りが不可能になる空間じゃった」

それで空間に亀裂が生じたため、ルシファアは姿を見せたのか。

空間を破壊され、脱出されてしまえば女神ウテナがああ場に現れた可能性をルシファアは考慮していた。

結果的にウテナの存在が勝利に繋がったのかもしれない。

「……ところでアガリアレプトがまだ残っているけど、放置で良いよね？」

残党狩りをする気にはなれない。ルシファアという支柱を失った天使兵は、虚無感に苛まれ絶望している。

行き場の無い彼らをこれ以上刺激して何になるのか。

「捕虜として生き残った天使兵は、墮天の烙印と共に人間界での奉仕活動を命じる……責めて彼奴らも罪滅ぼしがしたいじやろうからな。アガリアレプトの件に付いてはこちらで監視を付ける」

「ならこう伝えて、『会ったことも無いけど報復に出るなら私の下に来なさい。いつでも相手になるわ』って」

「ふむ……その伝言聞き入れた」

ルシファーに刃を突き刺した一人として、アガリアレプトの憎しみを受け止める覚悟が有る。

もちろん漸く掴んだ平和だ。むぎむぎ殺されてやるつもりは無い。

全ての要件を済ませたリアは、ソフィア姫に微笑む。

「それじゃあソフィア姫、私はもう行きます。事後処理を全て任せる事になって心苦しいけど、後の事はお願いね」

「ええ、私と兄様が魔族と共存国家としてメンデル国を新たな国として発展させて行きますわ……その前に圧迫された財政回復が……有りますけど」

彼女の萎む声に苦笑が浮かぶ。

「あ、はは……手紙は送るから何か有ればいつでも相談に乗るわよ」

それだけソフィア姫に伝え、リアはそのままの足で城下街へと向かう。

そこでお土産品の菓子折りを買い、村の全員に宛てた手紙を添え故郷に送るのだ  
た。

そしてリアは、ハーヴェスト行きの馬車へと乗り込んだ――

夏の熱気が弱まり始めた頃。リアはハーヴェストに到着し、そのままの足で「魔法の治療薬邸」へ足を運んだ。

すると看板に、『閉店と引越しのお知らせ』と書かれた貼り紙にリアは目を見開く。

「えっ、引越すんだ。……場所はアルデバランって」

アンナの引越し先がアルデバラン。この件をフィオナは知っているのだろうか。

いや娘を大切に想う彼女の事だ、事前に一報入れているに違いない。

行動力が凄まじいアンナにリアは苦笑を浮かべ「魔法の治療薬邸」を後にし、魔核研究所へと足を運ぶ。

相変わらずの研究者達の歓迎を受け、所長室へと向かった。

そこには既にファウスト博士とセレス所長が、待つていたと言わんばかりに待ち構えていた。

「覚悟は良い？」

開口一番に掌に魔力を込め構える。



結局のところ彼らを処断しようとも、殺害の容疑で自身が捕まる。

ならば、ナナ達の分まで往復ビンタで済ませようとリアは考えていた。

すると二人は手を大きく広げ、

「僕達にとつてそれはご褒美だよ！」

「美少女のビンタなんて、嬉しいに決まっているじゃあないか！」

どうしよう。コイツらはもう色々とダメだ。

思わずリアは魔力を離散させ、頭を抱え込んだ。

「不老化の件で落し前を付けに来たのに……っ！」

「……その件なら既に僕達は処刑判決を受けているよ」

フアウスト博士のなにくれとなく紡がれた言葉に、リアは目を見開く。

「如何して？ 計画の主導者はギリガン王でしょ」

「ギリガン王に不老計画を吹き込んだのは前所長——私の父だよ。既に不老化の進んだ娘を研究成果としてね」

セレス所長が年齢のわりに成長しない理由が、既に彼女が不老だったから。告げられた真実にリアは足元が崩れるような錯覚に見舞われながらも叫んだ。

「……ちよつと待つてよ。それじゃあ私達に不老化を施す意味なんて有ったの!？」

既に完成体が存在している以上、改めて不老を作り出す理由がリアには理解できない

い。

「ギリガン王の要望は老いない強者。つまり君達の不老化はギリガン王の要望だよ……まあ、彼もこの件で事後処理を終えた後に処刑台に立つつもりらしいけどね」

「最初から不老計画を主導した者達は死ぬつもりだった。それで不老にされ残された者達はどうなると言うのか。」

「勝手に!! 人を勝手に不老にしておいて事が済めば死んで逃げるなんて!」

「……そうだよリア。研究者は勝手なんだ、人の道理や後先のことなんて考慮しないんだよ」

「ファウスト博士の言葉にリアは、握った拳を放つ。」

しかし、彼の顔に届く前にリアは押し止まった。

「ファウスト博士とセレス所長を殴り飛ばしても何も意味がない。一時的の怒りが晴れるだけで、根本的な解決になどなりはしない。」

「むしろ、こう思うべきだ。勇者一行という実験体を最後に不老計画は闇に葬られるべきだ、と。」

「歴史の闇に葬るのが……あなた達の決断なのね」

「既に父の研究資料もかつての同僚達も闇に葬った。あとは計画に付いて知る我々が消えれば歴史の彼方に消える」

「……それは、どうかしらね。魔法書が欠けた歴史を記し現れる事が有るでしょ?」

ミスト・レディを生み出す事件を書き記したのも、唐突に現れる魔法書だ。

幾ら闇に葬ろうともいずれば、誰かの手に不老計画が記された魔法書が現れる。

「……魔法書を読み解いた人物が、不老計画に手を出せると思えないけどね。不老化には魔族の犠牲が必要だ、もう法律で魔族を害せない時代が来る」

「そうだと良いけど」

いずれメンデル国ではそう言った法律が作り出される。

だからメンデル国内では一先ずは過ちを繰り返されることは無いのかもしれない。

そうで有って欲しい。そう願わずにはいられない。

「……そう、そろそろ私は行かないと。アルデバラン行きの馬車に遅れちゃうから」

「そうか……ナナ達をよろしく」

「やあ、これで最後と思うとやっぱり寂しいねえ」

リアはファウスト博士とセレス所長の最後の言葉を背に、魔核研究所を静かに立ち去った。

そしてアルデバラン行きの馬車に乗り込み、また長い馬車の旅に身体を預ける。

魔族領へ帰還する難民達や新たに移住を希望する者達と出会い、彼らと共にアリエス

砦を抜け魔都市アルデバランに到着した頃だった。

リアが魔族達の歓迎を受けたのは。

「おお！ リアが来たぞ！ 歓迎の準備だあ!!」

「今夜は祝酒だ！」

妙に浮き足立つ魔族達に何故こんなに歓迎を受けるのか、リアは首を傾げた。

一人の人狼族の少女が群勢の中から、リアの前に現れる。

「わふう………全く！ 穀物地帯の復興作業に住居増設工事がまだまだ残っているんですからね！ それと例の計画に必要な物資の運搬から………こら、耳を塞ぐんじやありません！」

彼女の鶴の一声に、魔族達は萎縮しすぐさま解散し出した。

一体彼女は何者かとリアが疑問を向けると、人狼族の少女が尻尾を振りながら笑った。

「わたしはレオ様の秘書を努めるテトラと言います。ささ、アルティミア様もお待ちですのでどうぞこちらへ………っ！」

レオの秘書を名乗るテトラにリアは促されるままに付いて歩く。

旅の最中ギリガン王が発令した人魔戦争終結が決まり、ユグドラシルで行われたアルティミアが調印式へと参加し平和へと歩み出している。

魔王城へ向かう途中、人と魔族が笑い合い談笑する姿や、力比べに興じる二種族とそんな彼らを暖か見守る天使。そんな光景にリアは漸く平和が訪れたのだと実感を得た。そして魔王城へ入城し、とある執務室の前でテトラが足を止めると、リアに緊張が走る。

扉の向こうに居る者達に、柄にも無く緊張している。緊張をほぐすために彼女は話題を振った。

「え、えつと……ナナ達の姿が見えなかつたけど、みんなは？」

「ああ、彼女達でしたら新居の様子を見に行ってますよ。尤もナナとマキアのお二人はザガン將軍とロラン將軍から婚約を申し込まれたので、城内に住む手筈になっておりますけど」

判断と決断が早過ぎる。平和になったとはいえ、まだやるべき事が多いというのに。それに自分も好きな人にこの想いを告げたい。

自身の想いよりもナナ達の朗報に心が幸せに満たされる。

「わあ！ ナナとマキアが結婚かあ……！ それじゃあ盛大にお祝いしないとっ！」

「ええ、まあ……もう一人ほど婚約してるお方がおりますが……それはご本人からお聞きした方が速いかと」

そう言ってリアが疑問を浮かべる中、テトラはゆっくりと執務室のドアノブに手をかけるのだった――

## 11—10

昼下がりの陽光が室内を照らす中、幾つもの山々の如く積み上げられた書類を処理する白髪の男が、今かと今かと扉に視線を向けていた。

白髪の男——レオは例え聖剣によつて腹部を貫かれようとも死ぬことは無い。

魔族の凄まじい生命力と魔力によつて、腹部を貫かれたとしても致命傷にはなり得ないからだ。

「リアが扉の前に到着したようね」

彼の様子を察し、鈴の様な声を弾ませるアルティミアにレオは片腕で書類を処理しながら頷く。

「……その様だな」

イタズラっぽく笑う彼女を尻目に、レオは作業の手を止め息を吐く。

「……むう、やはり集中しきれんな」

「気になって仕方ないのね」

心臓の鼓動が高鳴るのは、リアがすぐそこまで来ているからだ。

アルティミアに想いを告げ婚約を果たした。後は彼女にもこの想いを告げるのみ。

魔王としてでは無くレオとして、少女のリアへ宿した想いを。

そう決意を改めていると、ノック音も無く扉が開かれた。

「おい、ノックの一つぐらいはしろとアレほど」

苦言を申すと尻尾を振りながらテトラが笑みを浮かべ、

「さありア様……どうぞ中へ」

困惑を浮かべるリアを室内へ押入れ、テトラは疾風の如く退散。

一人で閉まる扉の音が響く中、静寂が室内を包み込む。

何から話せば良いのか、脳内で思考していた全てが消え去った。

これは非常に不味い。そう助けを乞うためにアルティミアに視線を向けると、彼女は満面の笑みを浮かべリアに視線を向けていた。

「久しぶりねリア。元気だった？」

「えっ、ああ……うん。変わりは無いけどさ……そ、その……れ、レオとアルティミアも元気だった……？」

挙動不審ながらもそんな事を言い出す彼女に、アルティミアは微笑む。

「ええ、元気よ。レオに至っては書類仕事ばかりで退屈そうだけど」

「大事な公務だ、退屈などと言うな」

書類仕事は退屈なのは事実だが、これも魔王として必要な公務だ。



「そう、なら良かったわ。ところで私を呼び付けた要件ってなに？」

レオは重々しく息を吐く。決断の時が来た。

そして彼は、机の引き出しから小さな箱を取り出した。そして、

「リアよ……俺の伴侶になる気はないか？」

思考していた告白とは裏腹に、拙い言葉にレオは失敗したと内心で焦りを浮かべる。

するとリアは顔を伏せ……彼女は歩き出した。

彼女の様子にレオは緊張から息を呑んだ。ピンタの一つでもされるのか、と肩が強張る。

やがてリアが顔を上げると。彼女の頬は赤く染まり、太陽の様な微笑みレオに向け、

「わ、私で良ければ……そ、その思い……う、受けるわ」

返された応えに、レオは小さく笑い箱から太陽をモデルに作成した指輪を取り出し彼女に手渡す。

「綺麗な指輪……太陽みたいね」

「お前は俺にとつての太陽だ。求めていた温かな光で照らす……あの太陽の様な笑顔が魅力だったからな」

「あつ……でもアルティミアは？　彼女だってレオの事を……んっ？」

そういうえば、レオの事を様と敬称を付で呼んでいたアルティミアがレオを呼び捨てに

していた、と彼女の眩きに二人は笑う。

「くっ……ふっ、鈍いのか鋭いのか……お前は、どっちなんだろうな」

「そこがリアの可愛いところよ。……ああ、あなたの疑問の答えだけね」

アルティミアは薬指に嵌めた、月をイメージして作成された婚約指輪をリアに見せる。

すると彼女は口元を抑え、

「お、おめでどうアルティミア！」

我が事ながら喜びを顔にする彼女に、レオは心の底から溢れる温かな想いに手を当てる。

ああ、彼女を伴侶の一人に選んで良かった、と。リアとアルティミアの二人ならば、きつと自身を支え欠けた物を埋め合わせてくれる。

その分だけ自身は不器用ながら愛するために努力しよう。

「……しかし、俺が三年前に出会った少女に愛おしいと想う日が来るとは、やはり人生とは不思議なものだな」

「それを言うなら私だつてそうよ。三年前にあの街で出会った魔族の男性を……愛する日が来るとは、ちよつとまだ実感が湧かないかも」

すぐに実感が湧く物でもない、こういうものは時間が解決する事柄だとレオは思う。

ただ、改めて決意が固まる。婚約を結んだ以上、魔界再生計画を生きて完遂させる決意を。

「時間がゆっくりと解決してくれるけど……私も夜の営みはまだなのよね……今度二人で寝込みを襲う?」

「ね、寝込みつて……でも私とアルティミアなら勝つわね?」

良からぬ事を公言するアルティミアとズレた事を言うリアに、レオは愛しむ様な笑みを浮かべながら、

「全くお前達は……大体アルティミアよ、俺達にはまだやるべき事が残っているだろう」「二人のやるべきことって?」

「魔界再生計画……魔界の空に太陽を取り戻し、魔狼スコルを討伐することで完遂する計画。それと並行しての移住計画」

アルティミアの言葉にリアは息を呑む。

魔族の戦いはまだ終わらない、いや始まったばかりなのだ。

「お前にも力を借りたいところだが……魔界の環境は——」

「魔界の生物以外を拒む……でしょ? レオとアルティミアが魔界のために動くなら、私はこっちであな達を支えるために戦うわ!」

リアの決意にレオとアルティミアは微笑んだ。

人間界はリアに任せ、自分達は魔界に集中できると。

本格的な計画実行の前に、彼女達と訪れた平和を謳歌するのも悪くはない——セオドラと交わした約束を漸く果すことができた。

レオは椅子から立ち上がり、

「……此処から俺達の共存を始めよう」

リアとアルティミアと共に歩み出すのだった。